



(財)米子市教育文化事業団
文化財発掘調査報告書 **24**

かやほら おくいんだ
萱原・奥陰田Ⅱ

一般国道180号道路改良工事に伴う
埋蔵文化財発掘調査報告書

(本文編)

1998

鳥取県道路課
財団法人米子市教育文化事業団

かやほら おくいんだ
萱原・奥陰田 II

一般国道180号道路改良工事に伴う
埋蔵文化財発掘調査報告書

(本文編)

1998

鳥取県道路課
財団法人米子市教育文化事業団



陰田隠れが谷遺跡から米子市街地を望む



陰田夜坂谷遺跡 3区SI01



陰田隠れが谷遺跡 2区2テラス炭溜2



陰田隠れが谷遺跡 土馬出土状況



陰田広畑遺跡 全景



陰田広畑遺跡 3テラス鍛冶炉 (SX03)



陰田第6遺跡 石敷道路（北から）



陰田第6遺跡 石敷道路（南から）

序

鳥取県西部に位置する米子市は、北に雄大な日本海、東に秀峰大山を臨む豊かな自然に恵まれた地域です。また、古代からの遺跡の宝庫で、初期水稻農耕文化を伝える日久美遺跡、西日本最大級の古代集落遺跡で国指定史跡の青木・福市遺跡、仏教壁画を有する上淀廃寺等、歴史的、文化的遺産にも恵まれています。

近年、環日本海交流の推進が行われる中、中海臨海地域が輸入促進地域に指定され、鳥取県西部の中核都市としてますます米子市の果たす役割が重要視されています。また、道路等、交通網の整備が急速に進められており、これに伴う埋蔵文化財の発掘調査が行われ、徐々にではありますが、この地域の歴史が明らかになってきました。

一般国道180号道路改良工事に伴う発掘調査は、米子市南西部の新山と陰田町地内において平成元（1989）年度から実施しているもので、当初は米子市教育委員会が担当し、平成4（1992）年度からは当事業団がこれを引き継いで行ってまいりました。

調査の結果、縄文時代から近世にかけて断続的に遺跡が形成されていることが確認され、特に、古代においては山陰地方有数の鉄器生産地帯であったことが解明され、また、古代祭祀を物語る土馬、ミニチュア土製品等が出土するなど、貴重な成果を得ることができました。

これらの資料が今後の調査研究および教育のために広く活用され、さらに、ひろく一般の方々に埋蔵文化財に対する理解、関心を高めていただくうえでお役にたてれば幸いに思います。

最後になりましたが、調査に際しましては多大なご理解とご協力をいただきました地元の皆様をはじめ、ご指導、ご支援を賜りました調査従事者並びに関係各位に対し、心から感謝申し上げます。

平成10年3月

財団法人 米子市教育文化事業団

理事長 森田隆朝

例 言

- 1 本書は鳥取県道路課の委託を受け、平成元（1989）年度から平成9（1997）年度にかけて米子市新山及び陰田町地内で実施した一般国道180号道路改良工事（米子バイパス）に伴う埋蔵文化財発掘調査の報告書である。
- 2 調査は、平成3（1991）年度までは米子市教育委員会が「国道180号バイパス埋蔵文化財発掘調査団」を組織して行い、平成4（1992）年度からは米子市の文化財体制の見直しにより財団法人米子市教育文化事業団が担当した。
- 3 調査報告書は2回に分けて刊行した。

第1冊は、平成4（1992）年3月までに終了した新山地内の調査成果を中心に取りまとめ、平成6（1994）年3月に刊行した。本書はその第2冊であり、陰田町地内を中心とするその後の調査内容と調査・整理を通じて明らかになった事象のいくつかについて取りまとめた。
- 4 本書に掲載した遺跡は米子市陰田町地内に所在する陰田夜坂谷遺跡、陰田ハタケ谷遺跡、陰田隠れが谷遺跡、陰田広畑遺跡、陰田宮の谷遺跡1～4区、陰田第6遺跡（久幸地区）である。

また、古式須恵器と木製品の一部は「萱原・奥陰田Ⅰ」に掲載しているが、本書では観察表を加えて報告する。
- 5 本書は『本文編』『資料・図版編』『図録編』の三部構成とした。それぞれの主な内容は次のとおりである。

『本文編』は遺跡の調査概要。
『資料・図版編』は自然科学的分析の成果・遺物一覧表・遺構一覧表と写真図版。
『図録編』は古式須恵器、土馬、移動式竈、石器、木製品など、まとまりのある遺物についてカードとした。古式須恵器は再録。木製品は一部重複する。
- 6 本書に用いた方位は国土座標北である。
- 7 本書の作成は財団法人米子市教育文化事業団埋蔵文化財調査室が行った。

遺構実測は基本的に調査員・調査補助員が行ったが、陰田広畑遺跡、陰田第6遺跡（久幸地区）の調査後の地形測量はワールド航測コンサルタント株式会社（現株式会社ワールド）に委託した。
遺構空中写真はラジコンヘリによる撮影である。陰田夜坂谷遺跡、陰田隠れが谷遺跡、陰田宮の谷遺跡1区・2区は大橋保夫氏、陰田広畑遺跡、陰田第6遺跡（久幸地区）はワールド航測コンサルタント株式会社（現株式会社ワールド）に委託した。
鉄関連の調査及び鉄類の整理分類に関しては穴澤義功氏に調査初期から指導いただき、これに基づき成分分析を（株）九州テクノリサーチTACセンターに委託し、大澤正己氏には玉稿をいただいた。
胎土分析は奈良教育大学三辻利一教授、石材の鑑定は放送大学赤木三郎先生、陰田第

6 遺跡の石敷道路の現地調査指導を滋賀県立大学高橋美久二助教授にお願いし、三辻利一先生には玉稿をいただいた。記して謝意を表します。

¹⁴C年代測定は(株)古環境研究所、木製品の樹種鑑定は(株)吉田生物研究所、炭化材の樹種同定は(株)古環境研究所、(株)吉田生物研究所、植物珪酸体分析・花粉分析は(株)古環境研究所に委託した。

8 出土遺物、図面、写真等の資料は米子市教育委員会が保管している。

9 現地調査及び本報告書の作成にあたって、下記の方々にご指導、ご助言をいただいた。記して謝意を表します。(敬称略、五十音順)

赤木三郎 穴澤義功 内田律雄 ト部吉博 大村雅夫 神谷正弘 亀田修一 北浦弘人
佐古和枝 佐藤豊 杉本良己 角田徳幸 園俊朗 高橋美久二 田中秀明 中原齊
錦田剛志 橋本久和 平川孝志 平野芳英 藤原彰子 船越元四郎 松井一明
三辻利一 南前孝明 村上勇 柳浦俊一 山川茂樹 湯村功 渡邊昭人 鳥取県道路課
鳥取県文化課 鳥取県埋蔵文化財センター

凡 例

1 調査では遺跡名称として次の略号を用い、遺物の注記にも使用した。

陰田夜坂谷遺跡…………… I D Y O	陰田宮の谷遺跡 1 区・2 区…………… I D M T
陰田ハタケ谷遺跡…………… I D H A	陰田宮の谷遺跡 3 区…………… I D M T 3
陰田隠れが谷遺跡…………… I D K A	陰田宮の谷遺跡 4 区…………… I D M T 4
陰田広畑遺跡…………… I D H B	陰田第 6 遺跡 (久幸地区) …… I D Q Y

2 本報告書において用いた遺構の略号は次のとおりである。

S I : 竪穴住居 S B : 掘立柱建物 S S : 段状遺構 J S K : 落とし穴
S D : 溝状遺構 S K : 土坑 P : 柱穴・ピット

3 遺物実測図のうち、須恵器は断面黒塗り、それ以外のものは断面白抜きで表した。また、木製品の断面の年輪は模式的な表示である。

4 遺物は挿図遺物番号のほかに取上番号を () 内に記した。

調査組織

国道180号バイパス関係埋蔵文化財発掘調査団 (1989・4～1992・3)

団 長 (米子市教育長) 板見甲子夫 ('89・4～'91・6) 山岡 宏 ('91・7～'92・3)
監 事 (社会教育課長) 亀山 良 ('89・4～'91・3) 松本 清治 ('91・4～'91・6)
田代 祐嗣 ('91・6～'92・3)
事務長 (文化係長) 田代 祐嗣 ('89・4～'91・7) 小原 貴樹 ('91・8～'92・3)
調査主任 (社会教育課主任) 杉谷愛象
調査員 (鳥取県教育委員会・鳥取県教育文化財団派遣)
太田 正康 ('89・4～'90・3) 西浦日出夫 ('89・4～'91・3)
加納 真人 ('89・4～'92・3) 灘脇 敏彦 ('91・4～'92・3)
事務員 細川 和郎
調査指導委員 船越元四郎 大村 雅夫 杉本 良巳 田中 秀明 南前 孝明 園 俊朗

財団法人 米子市教育文化事業団 (1992・4～1998・3)

理事長 (米子市長) 森田 隆朝 ('92・4～'98・3)
専務理事 (米子市教育長) 山岡 宏 ('92・4～'98・3)
事務局長 本池 貢 ('92・4～'93・3)
松本 清治 ('93・4～'97・3)
渡部 勝文 ('97・4～'98・3)
埋蔵文化財調査室長 山岡 宏 (教育長兼務 '92・4～'94・3)
谷口 嘉孝 (教育文化課長兼務 '94・4～'95・3)
戸田 文夫 (教育文化課長兼務 '95・4～'98・3)
事務員 (埋蔵文化財調査室次長)
細川 和郎 ('92・4～'94・3) 松本 喬 ('94・4～'97・3)
深田 政幸 ('97・4～'98・3)
調査員 中曾 千里 (事業団調査員) 高橋 浩樹 (同)
灘脇 敏彦 (鳥取県教育委員会・鳥取県教育文化財団派遣)
深田 洋史 (同) 山川 (旧姓小泉) 千絵 (同) 松林 隆裕 (同)
吉田 学 (同) 濱田 竜彦 (鳥取県埋蔵文化財センター派遣)
臨時職員 植 佐知子 篠田 明子 高橋真由美 福嶋 昌子 森井あづさ 森田 静香
調査指導委員 船越元四郎 大村 雅夫 杉本 良巳 田中 秀明 南前 孝明 園 俊朗

調査参加者

《調査補助員》

青戸 千秋 井上三千代 岡田 善治 遠部 慎 門脇 豊文 上島 玲子 川本美佐子 木村 聡子
佐伯 憲昭 佐藤 省三 羽生由喜子 福田 寛子 松本 哲

《現場作業員》

青木 誠英 青田さち子 青田 光生 青砥 花子 明里 亮 吾郷 琴江 足立 恵理 安達 稔
足立 裕輔 足立 幸弘 有馬 美保 生田 和宏 生田 忠徳 池本 貴文 石田 順一 石山 忠重
磯村 寿子 板 克己 井田 清信 稲田 愛子 井上 淳 岩佐 修一 岩佐 美子 岩指 澄
内田 忠雄 浦尾 要介 江原 孝光 遠崎 礼子 遠藤 国男 遠藤 富枝 大江 静代 大西 賢一
岡本 武志 小野 康之 柿田 文子 加治 柴保 加藤カホル 加藤智恵子 加藤 英樹 加藤美須津
門田 正美 門脇 顕 河村富士江 木村 達子 国坂 秀夫 倉敷みさ子 桑村 隆志 桑本 貴子
小笹 章史 児玉 和子 小林 賢一 小林美恵子 小林 靖教 近藤 智子 斎木 民治 斎木 胖志
斎木 健一 斎木 由和 酒井 努 佐藤 定子 佐藤 妙子 佐藤 太昭 佐藤 徳子 佐野 康雄
柴田 三枝 洪谷 優 白石 麻保 杉原 丑子 鷺見 勘二 鷺見 京子 鷺見シヅ子 角 優子
陶山 富子 精山 英明 高木 正文 高下 尚樹 高塚 敬子 高原 愛 多賀まゆみ 竹中 敏郎
竹中 光世 田中 恵子 田中セキ子 角田 和彦 出垣 将治 寺西 保 徳中 繁野 徳中 静枝
戸田美代子 友森 誠 虎尾 一明 仲田 茂 仲田 政子 永林 昭 西 淳夫 西山 和郎
丹羽 信之 野口 洋一 野口 葉子 野坂 秀和 野津 正連 野引 健司 乗本 重子 乗本 年子
乗本美代子 乗本八重子 羽柴ぬい子 橋本 維文 長谷川節子 長谷川雄志 八田 薫 林原 隆
原 満留 平野 昭子 平林 円 福一 誠二 福田 淳 福原 康次 福本 蓉子 細田 恵美
本庄 研 前田 潤 牧野千代子 松本 剛史 松本 幸延 三浦 裕亮 三上 興蔵 三好 睦
森田 覚 森安 諸田美智栄 八木奈緒美 矢倉 寛久 山川 晋也 山下 智紀 山中 伸介
山中 啓介 山根 礼吉 山本 省行 吉井 明人 吉井 秀昭 吉元 恵 脇坂 茂子

《整理作業員》

池田 美佳 石谷麻衣子 伊田 美紀 伊吹 和恵 入澤美智子 植 昌恵 後中万里子 大江由美子
小椋 邦江 音田 史江 川本 芳江 国橋 恒美 倉敷 寛美 小松原京子 島本美奈子 瀬尾恵利子
高野夕香子 高橋真由美 千代西尾桂子 塚田 広子 坪井真優美 長尾かおり 仲田いづみ 永田 公子
中谷 康子 西山八重子 乗本 房江 福留 まい 船越 綾子 堀田 圭子 前田 慶子 前田ひとみ
政木 桂子 松本美由紀 宮田 紀子 矢嶋 成美 渡部 栄子

目 次

『萱原・奥陰田Ⅱ』 本文編

巻頭図版 (カラー)

序

例言・凡例

調査組織

目 次

第1章 位置と環境	1
1 地理的環境	1
2 歴史的環境	1
3 陰田地区の遺跡	8
4 陰田地区の字名	12
5 中海南東岸の古代鉄生産	15
第2章 調査の経緯	18
1 調査に至る経緯	18
2 調査の経過	19
第3章 調査遺跡の概要	21
1 萱原の遺跡	21
2 奥陰田の遺跡	22
第4章 遺跡について	27
1 陰田夜坂谷遺跡	27
2 陰田ハタケ谷遺跡	45
3 陰田隠れが谷遺跡	64
4 陰田広畑遺跡	210
5 陰田宮の谷遺跡1・2区	329
6 陰田宮の谷遺跡3区	378
7 陰田宮の谷遺跡4区	405
8 陰田第6遺跡	419
第5章 遺物について	446
奥 付	

『萱原・奥陰田Ⅱ』 資料・図版編

1	新山研石山遺跡他における自然科学分析	453
2	新山研石山遺跡5区出土木製品の樹種鑑定	462
3	奥陰田遺跡群出土炭化材の樹種同定	478
4	陰田ハタケ谷遺跡・陰田隠れが谷遺跡出土炭化材の樹種同定	483
5	萱原・奥陰田遺跡群における自然科学分析	485
6	萱原・奥陰田遺跡群出土試料の放射性炭素年代測定	493
7	萱原・奥陰田遺跡群出土製鉄・鍛冶関連遺物の金属学的調査	496
8	奥陰田遺跡群出土須恵器の蛍光X線分析	597
	遺構一覧表	638
	遺物一覧表	643
	写真図版	
	報告書抄録	
	奥付	

『萱原・奥陰田Ⅱ』 図録編

遺物カード

第1章 位置と環境

1 地理的環境

米子市は鳥取県の最西端に位置し、面積99.46km²、人口約13万人の鳥取県西部の中核都市であり、古くから「山陰の商都」と称されてきた商業都市である。北西は境港市、北は日吉津村、東は淀江町、南東は大山町、南は岸本町、会見町、西伯町、南西は島根県伯太町、西は島根県安来市と接している。

地形的には市の東側を流れる日野川の沖積作用によって形成された米子平野を中心にして日本海に面する北部には砂浜海岸、北西部には弓浜半島、東側から南、西側の周縁部には大山（標高1,729m）、中国山地からつづくなだらかな山地や丘陵から構成されている。北西部に面している中海は周囲84km、面積98.1km²の汽水湖で、松江市の大橋川を通じて宍道湖とつながっている。

米子市陰田町は米子市の西端に位置し、島根県安来市に隣接する県境の町である。北側は中海に面し、残りの三方は標高70～160mの山稜に囲まれている。地質的には低地に沖積層が広がり、山稜は第3紀中新世代に形成されたものである。

集落は山麓の低地にあり、古くからある谷奥部の奥陰田、近世になって発展した中海寄りの口陰田に分かれる。これらの地区は現在、米子市陰田町として一つの行政区となっているが、奥陰田、口陰田と別々の自治会、公民館を持ち、産土神として奥陰田に犬田神社（山王大明神）、口陰田に日御碕神社が祀られているなど、両地区とも各々一つの集落として完結したまとまりがみられる。これらの地区は米子市、松江市を含む山陰最大の消費地、中海圏を抱えていることから換金性の高い作物を中心とした農業を行っているのが特徴で、口陰田では梨、柿、ぶどう等の果樹栽培と筍栽培が盛んで、奥陰田では花卉栽培が行われている。

この地域は出雲、伯耆国境に位置しているため古くからの雲伯往来の要地で、北には中海の水運、奥陰田の谷奥から南へ約1.5km行ったところには山陰道の存在が推定されている。また、近世には北西を出雲街道が通り、口陰田には境番所、宿駅がおかれた。

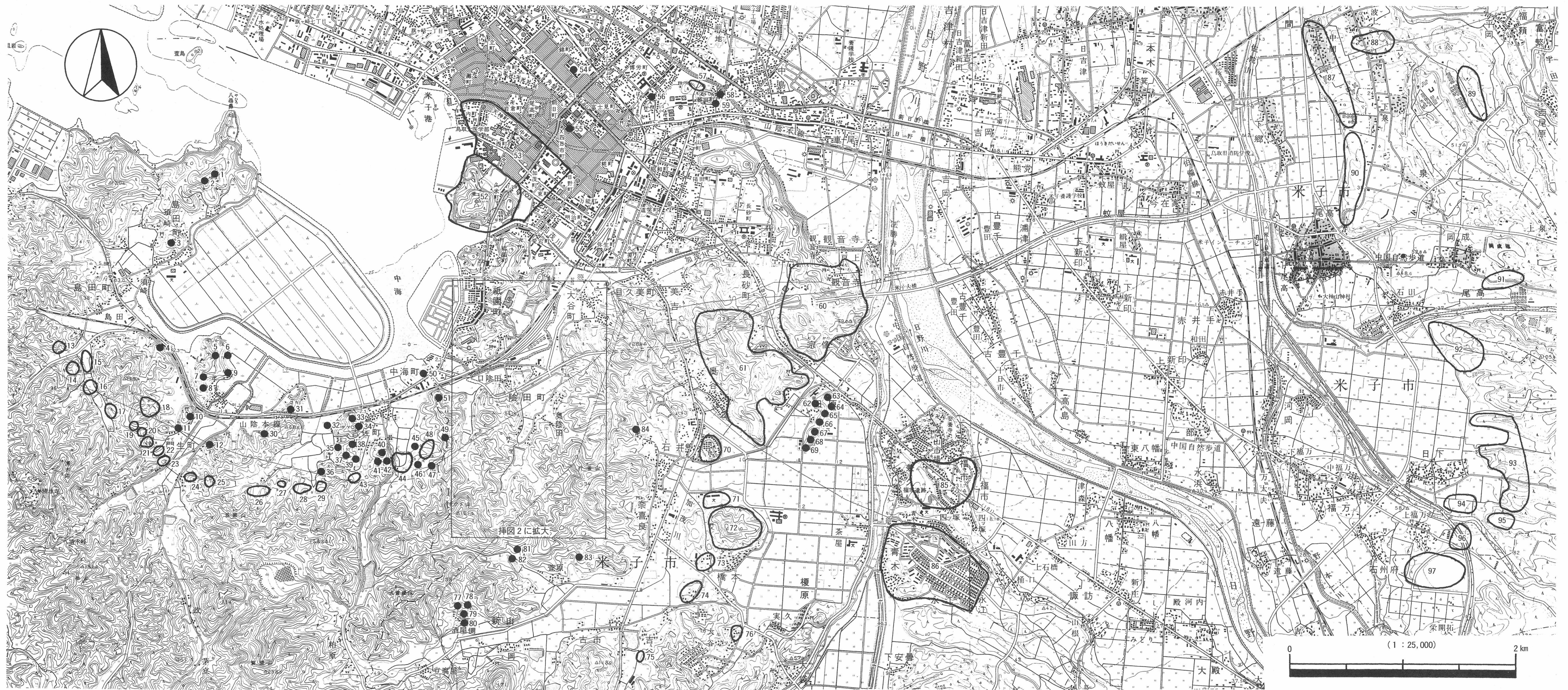
2 歴史的環境

奥陰田遺跡群が位置する鳥取、島根県境の中海沿岸は遺跡の分布密度が濃く、近年、交通網の整備等に伴って発掘調査が盛んに行われ、この地域の歴史を解明していくうえで貴重な資料を提示している。

この地域は現在は鳥取県、島根県、近世以前は伯耆国、出雲国と行政区分がなされているが、両地域には奈良～平安時代の製鉄・鍛冶関連の遺跡が広く分布するなど行政区域を越えた文化的、経済的交流がうかがえることから、ここでは行政区域にとらわれず島根県安来市東部をも視野に入れて歴史的環境を概観したい。

1	岩崎宅横穴	34	八幡山遺跡	67	日原 6 号墳
2	赤崎山横穴	35	嵩横穴	68	日原 7 号墳
3	ちょう塚古墳	36	松本古墳	69	日原 8 号墳
4	東谷古墳群	37	塚根山古墳群	70	石井要害
5	和田古墳群	38	小枝宅遺跡	71	奈喜良遺跡
6	小崎遺跡	39	塚根山横穴群	72	橋本宝石城
7	常福寺山土壙墓	40	四方神古墳	73	橋本遺跡
8	山根古墳	41	平横穴群	74	吉谷遺跡
9	下口古墳群	42	油田・平古墳群	75	吉谷トコ遺跡
10	大歳神社古墳	43	平ラ I 遺跡	76	榎原第 1 遺跡
11	門生・山根遺跡	44	石田遺跡	77	新山18号墳
12	陽徳経塚	45	神代塚古墳	78	新山17号墳
13	島田南遺跡	46	吉佐貝姫塚古墳	79	新山16号墳
14	普請場遺跡	47	神宝古墳群	80	新山15号墳
15	島田黒谷 I 遺跡	48	カンボウ遺跡	81	新山10号墳
16	明子谷遺跡	49	国吉遺跡	82	新山11号墳
17	島田黒谷 II 遺跡	50	八幡山遺跡	83	新山12号墳
18	門生古窯跡群高畑地区	51	国吉山古墳群	84	石井 1 号墳
19	島田黒谷 III 遺跡	52	米子城跡内郭	85	福市遺跡
20	門生古窯跡群山根地区	53	米子城跡外郭	86	青木遺跡
21	門生黒谷 I 遺跡	54	錦町第 1 遺跡	87	中間古墳群
22	門生黒谷 II 遺跡	55	四日市町遺跡	88	小波古墳群
23	門生黒谷 III 遺跡	56	勝田山横穴	89	百塚古墳群
24	陽徳寺遺跡	57	勝田遺跡	90	尾高古墳群
25	陽徳遺跡	58	人斬り場遺跡	91	岡成古墳群
26	五反田遺跡	59	勝田土手遺跡	92	尾高浅山遺跡
27	目廻遺跡	60	東宗像古墳群	93	日下古墳群
28	徳見津遺跡	61	宗像古墳群	94	日下遺跡
29	山ノ神遺跡	62	日原 2 号墳	95	日下寺山遺跡
30	八坂経塚	63	日原 1 号墳	96	上福万遺跡
31	八坂古墳	64	日原 3 号墳	97	石州府古墳群
32	茶屋畑廃寺	65	日原 4 号墳		
33	河原崎古墳群	66	日原 5 号墳		

表 1 周辺遺跡一覧表 (番号は挿図 1 と一致する)



挿図1 周辺遺跡分布図

縄文時代

草創期には大山北、西麓を中心に尖頭器が採集されており、奈喜良遺跡、陰田第6遺跡でも有舌尖頭器が出土している。

早期には大山西麓の台地上の小河川流域に遺跡の分布が見られる。上福万遺跡では押型文土器、撚糸文土器が出土し、土坑や配石墓と考えられる集石遺構が検出されている。

前期には大山西麓では早期から継続する遺跡が多いが、その一方で中海沿岸にも遺跡が見られるようになり、大山西麓から海浜部の低湿地への進出がうかがえる。これらは中海沿岸の拠点的な集落となるものもあり、崎ヶ鼻遺跡、タテチョウ遺跡、目久美遺跡のように晩期まで継続するものもある。この時期の周辺の遺跡には目久美遺跡、陰田第1遺跡、陰田第9遺跡がある。目久美遺跡は縄文時代早期末～弥生時代中期の遺跡で、当該期には貝殻条痕文土器、爪形文土器、多量の石錘、動植物遺体が出土している。陰田第9遺跡では前期初頭の遺物が出土しており、轟式の影響を受けた土器も出土している。また、シカ、イノシシなどの獣骨も多く出土している。

中期の遺跡は今のところあまり確認されていないが目久美遺跡では貯蔵穴48基が検出されている。陰田第7遺跡では前期末～中期を主体とし、237点の石錘が出土している。

後期には大山西麓に加えて米子平野南部の丘陵上にも遺跡が見られるようになる。この時期の周辺の遺跡には目久美遺跡、陰田第7遺跡がある。

晩期には後期と同様の分布を見せ、この時期の周辺の遺跡には目久美遺跡、池ノ内遺跡がある。

弥生時代

弥生時代になると沖積が進み、海岸線が後退し低湿地にて農耕が開始される。

前期には縄文時代晩期から継続あるいはこれに隣接するものが多く。海浜部の低湿地や扇状地端に拠点的な遺跡が形成され、河川を溯上した小平野をひかえる丘陵上にも遺跡が形成されるようになる。目久美遺跡では前期～中期中葉の水田が検出され、長砂第1遺跡でも前期後葉～中期初頭の遺構群とともに一部水田が確認されている。また、前期末～中期前葉にかけて会見町諸木遺跡、宮尾遺跡、西伯町清水谷遺跡では環濠集落が形成されている。

中期には前期の拠点的な集落が継続して営まれ、農耕技術、人口増加等を背景に遺跡の数が増加し、その立地範囲も拡大し、丘陵や台地上、低湿地の微高地上、高原地域にも見られるようになる。目久美遺跡、長砂第2遺跡、口陰田遺跡は低湿地に立地する遺跡で、目久美遺跡では中期中葉～中期後葉と中期後葉～中期末の2面の水田が検出され、長砂第2遺跡でも前期末～中期前葉、中期後葉～後期の2面の水田が検出されている。低湿地の微高地上に立地する遺跡としては米子城跡7遺跡、錦町第1遺跡、四日市町遺跡がある。しかし、中期後葉になるとこれらの低湿地や低湿地の微高地上に立地する遺跡の多くは消滅し、これにかわって周辺の丘陵や台地上に遺跡が形成されるようになる。青木遺跡、福市

遺跡では中期後葉に集落の形成がはじまり、これ以降、集落は拡大し、青木遺跡は奈良時代まで、福市遺跡は古墳時代後期まで継続して集落が形成される。この他に集落としては奈喜良遺跡、山の神遺跡、高広遺跡がある。

後期には前期～中期の拠点集落は継続するものは少なく、青木遺跡、福市遺跡のように新たに拠点集落が形成される。この時期には遺跡は低地から高台へ移動する傾向にあり、陽徳遺跡では標高80m、陰田第1遺跡、陰田第6遺跡では標高20～40m、門生黒谷Ⅲ遺跡、普請場遺跡では標高30mの丘陵上で住居跡が確認されている。また、尾高浅山遺跡では標高70mの丘陵上に形成された集落を囲う三重の環濠と四隅突出型墳丘墓が検出されている。この他に集落としては奈喜良遺跡、猫ノ谷遺跡、才ノ神遺跡、カンボウ遺跡、石田遺跡、平ラⅠ遺跡、門生黒谷Ⅱ遺跡、島田黒谷Ⅲ遺跡があり、石田遺跡では吉備系の鉢が、カンボウ遺跡では北部九州系の壺が出土している。また、池ノ内遺跡では水田が検出され、陰田第6遺跡では土壇・木棺墓群、島田黒谷Ⅲ遺跡では木棺墓が検出されている。

古墳時代

前期の古墳には日原6号墳、八幡山古墳、吉佐山根1号墳などがある。日原6号墳は一辺21mの方墳で、箱形木棺3基、割竹形木棺1基、土壇墓2基が検出されている。八幡山古墳(円墳)では箱式石棺と土器棺が検出され、鉄剣が2本出土している。吉佐山根1号墳(方墳)では箱式石棺3基が計画的に配置されている。また、青木遺跡では方形周溝墓、円形周溝墓が確認されている。集落には島田黒谷Ⅰ遺跡、石田遺跡、五反田遺跡、米子城跡2遺跡、米子城跡6遺跡、青木遺跡、福市遺跡、奈喜良遺跡があり、米子城跡2遺跡、米子城跡6遺跡からは畿内系の土器が出土している。また、池ノ内遺跡では水田が検出されている。

中期の古墳には全長32mの前方後円墳で、岩盤をくりぬいた特異な埋葬施設をもつ宗像41号墳、径30mの円墳で、若年女性を埋葬した箱式石棺をもつ陰田41号墳、五反田古墳群などがある。五反田古墳群は6基以上の古墳からなり、1号墳の石室内からは小型鏡、勾玉、管玉、鉄剣などが出土している。また、青木遺跡では方墳10基、円墳21基が確認されている。生産遺跡としては山陰地方で最も古い須恵器窯跡の一つとされる門生窯跡群がある。この古窯跡群は高畑地区と山根地区からなっており、高畑地区では複数の物原が確認され、須恵器工房も確認されている。一方、山根地区では高畑地区よりももう一段階古いと考えられる須恵器が物原から採集され、また、当地区に属すると考えられる門生黒谷Ⅰ遺跡では須恵器窯跡が確認されている。平ラⅡ遺跡からは玉作り関連の遺物が出土している。集落には青木遺跡、福市遺跡、奈喜良遺跡、島田黒谷Ⅰ遺跡、門生山根遺跡、カンボウ遺跡がある。

後期には群集墳がつくられるようになり、土坑・木棺直葬を主体とする陰田古墳群、横穴式石室を主体とする宗像古墳群、箱式石棺を主体として竪穴系横口式石室も見られる東宗像古墳群などがある。また、青木遺跡では方形周溝を巡らし、横穴式石室をもつ古墳が

確認されている。安来市では横穴式石室は飯梨川以西に主に分布し、飯梨川以東では神代塚古墳、吉佐貝姫塚古墳の2例しか見られない。また、横穴墓もつくられるようになり、50基にも及ぶ鳥取県最大の陰田横穴墓群、彩色装飾壁画と丹塗りの横口式家形石棺をもつ穴神1号横穴墓、この他には大塚山横穴墓群などがあり、これらは後背部に墳丘を有する特色をもつ。集落には青木遺跡、福市遺跡、カンボウ遺跡、石田遺跡、山の神遺跡、平ラII遺跡、徳見津遺跡、高広遺跡、五反田遺跡があり、徳見津遺跡では鍛冶が営まれていたことが明らかとなっている。また、池ノ内遺跡では水田が検出されている。

奈良～平安時代

奈良～平安時代にかけては陰田隠れが谷遺跡、陰田広畑遺跡、陰田宮の谷遺跡、陰田第6遺跡、陰田マノカンヤマ遺跡、陰田ヒチリザコ遺跡、陰田荒神谷遺跡、五反田遺跡、普請場遺跡、島田南遺跡で集落が確認されている。これらはいずれも丘陵斜面を加工して平坦面をつくり、そこに掘立柱建物などを構築したもので、陰田夜坂谷遺跡、陰田ハタケ谷遺跡、陰田隠れが谷遺跡、陰田広畑遺跡、陰田宮の谷遺跡、陰田第6遺跡、陰田マノカンヤマ遺跡、陰田荒神谷遺跡、五反田遺跡、島田南遺跡からは製鉄・鍛冶関連の遺構、遺物が検出されている。なかでも陰田広畑遺跡からは墨書土器、円面硯、陰田小犬田遺跡からは墨書土器、木簡、円面硯、陰田マノカンヤマ遺跡、陰田荒神谷遺跡からは円面硯、陰田ヒチリザコ遺跡からは刻書土器、島田南遺跡からは墨書土器、刻書土器が出土しており、古代の役所との関連がうかがえる。この他、青木遺跡では掘立柱建物が検出されている。また、陰田第6遺跡では石敷道路が確認されている。

平安時代の遺跡としては陽徳遺跡の山岳寺院跡、門生黒谷I遺跡の窯跡、門生黒谷II遺跡の土壇墓、普請場遺跡の掘立柱建物がある。陽徳寺遺跡、平ラI遺跡、平ラII遺跡では布目瓦が出土している。

中世

天文2(1533)年2月5日の尼子経久寄進状(日御碕神社文書)には「出雲国神門郡日御碕大明神江奉寄附、伯州相見郡福田保犬田村之内、米五十俵地利、十合枳、三斗六升入」とあり、これが犬田村の初見である。犬田村は尼子氏にかわって毛利氏、吉川氏が伯耆を支配した後も日御碕神社領として安堵された。周辺には戦国期の動乱を背景として石井要害、橋本宝石城、新山城、尾高城などが築かれる。この他、青木遺跡では鎌倉時代末～室町時代初頭の中世墓が検出され、米子市長砂町では鎌倉時代前期頃と推定される経筒が発見されている。

近世・近代

日御碕神社領として安堵されていた犬田村(陰田村)は江戸時代以降、米子城主の所領となる。天正19(1591)年に東出雲・西伯耆・隠岐12万石の領主の吉川広家によって米子

城の築城が開始されるが、慶長5（1600）年には岩国に転封される。かわって中村一忠が同年に伯耆18万石の領主として入城したが、慶長14（1609）年に中村家は断絶し、その後、慶長15（1610）年に加藤貞泰が伯耆国汗入・会見郡6万石を領有し、米子城主となる。やがて元和3（1617）年池田光政が因伯2国の領主となり、池田由之が米子城主となる。寛永9（1632）年の国替えによって池田光仲が鳥取藩主となると光仲の首席家老の荒尾成利が米子城を預かることとなり、その後、明治2（1869）年まで荒尾氏による自分手政治が行われた。

「犬田」の表記が「陰田」にかわったのは17世紀中頃～後半で、「正保国絵図」では犬田村、「元禄郷帳」には陰田村と記されている。陰田村は出雲国境に近い街道沿いにあることから制札場に指定され、明暦3（1657）年以前に口陰田に境番所が置かれた。また、享保7（1722）年までに出雲街道の馬継場にも指定された。

陰田村は明治22年からは成実村大字陰田となり、大正15年からは会見郡米子町大字陰田、昭和2年からは米子市大字陰田、昭和10年からは米子市陰田町となった。

3 陰田地区の遺跡

陰田地区では近年、国道9号米子バイパス、国道180号バイパス工事等に伴って数回の発掘調査が行われ、徐々ではあるが陰田地区の歴史的環境等が明らかとなってきた。

ここでは今回報告する奥陰田遺跡群が形成された歴史的環境及び背景、周辺遺跡との関係等を理解するために陰田地区に所在する遺跡の概要を述べてみたい。

なお、今回報告する奥陰田遺跡群については本報告にて詳述しているのここでは省略する。また、当遺跡群と関係の深い米子市新山所在の遺跡の概要については第3章を参照されたい。

1～27 陰田1～27号墳（数字は古墳番号に対応する）		
41～65 陰田41～65号墳（数字は古墳番号に対応する）		
A 陰田サキノタニ遺跡	J 陰田28～40号墳	R 陰田広畑遺跡
B 陰田第8遺跡	陰田横穴群	S 陰田隠れが谷遺跡
C 口陰田遺跡	K 陰田第4遺跡	T 陰田ハタケ谷遺跡
D 陰田第7遺跡	L 陰田第9遺跡	U 陰田夜坂谷遺跡
E 陰田マノカンヤマ遺跡	M 陰田第3遺跡	V 大谷1号墳
F 陰田ヒチリザコ遺跡	N 陰田第1遺跡	W 大谷2号墳
G 陰田小犬田遺跡	O 陰田第2遺跡	X 大谷3号墳
H 陰田荒神谷遺跡	P 陰田宮の谷遺跡	
I 陰田第6遺跡	Q 陰田第5遺跡	

表2 陰田地区遺跡一覧表（番号は挿図2と一致する）

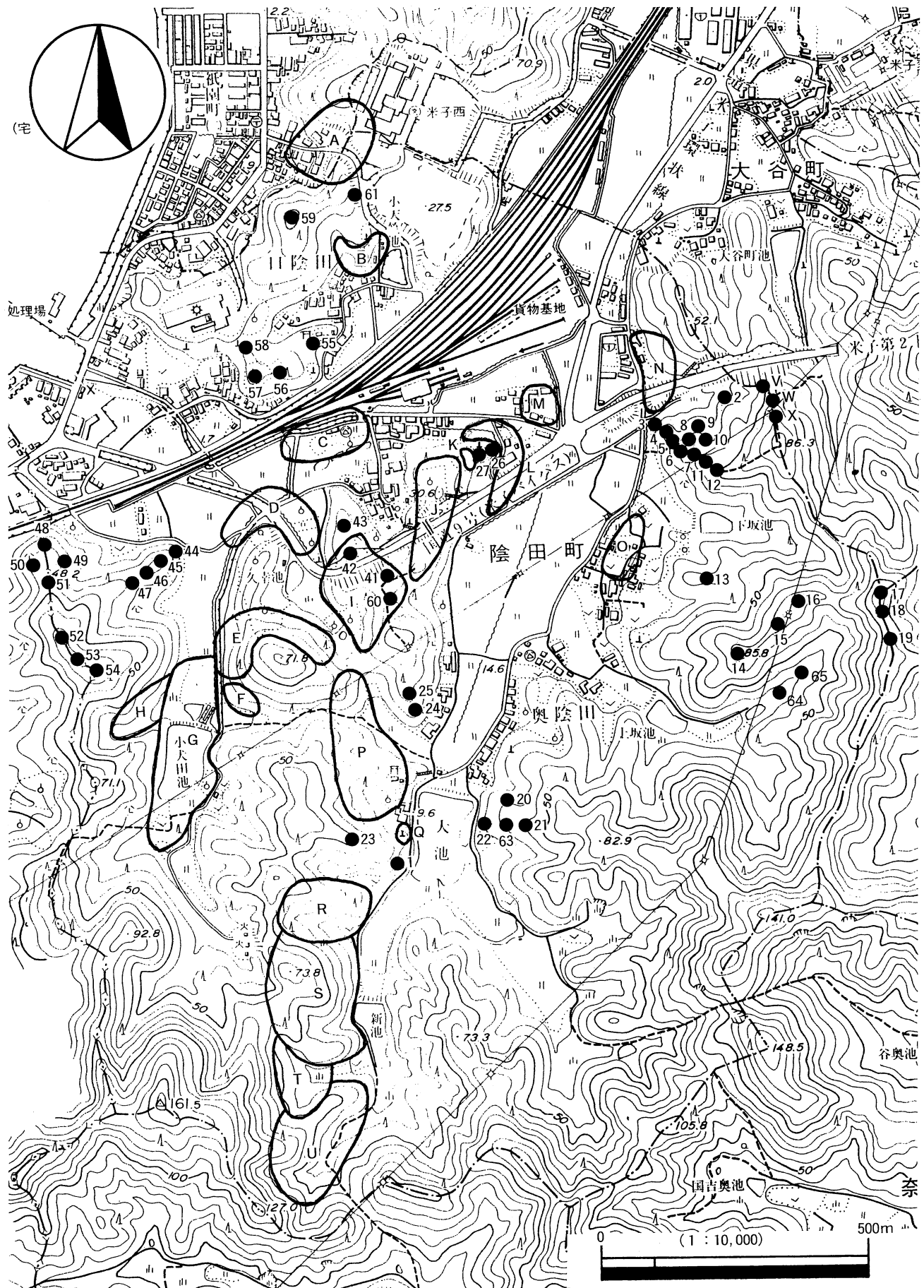


插图2 陰田地区遺跡分布图

陰田第1遺跡

奥陰田と米子市大谷町との境にある丘陵南側斜面から山裾にかけて位置し、谷部からは縄文時代前期～後期の土器、石鏃、石匙、石錘、石斧、石槍、石錐、敲石が出土し、貯蔵穴5基が検出された。また、丘陵斜面では段状に加工したテラスで弥生時代後期後葉の集落が検出された。

陰田第7遺跡

北に開口する谷に位置し、縄文時代早期末～後期の土器（前期末～中期が主体）、石鏃、石匙、石錘、石皿、石槍が出土し、石器の中では石錘、石皿の比率が高い。

陰田第9遺跡

北へのびる尾根の東側の山裾の低湿地に位置し、縄文時代前期初頭の土器が出土した。土器は条痕文を地文としながら押し沈線、連続刺突文、微隆起線、貼付突帯を組み合わせた九州の轟式に類似するものである。その他には石鏃、石錘、石斧などの石器、シカ、イノシシ等の獣骨、タイ、フグ、バイガイ、サルボウガイなどの魚貝類の遺体、クルミ、ドングリなどの植物遺体が多数発見された。

口陰田遺跡

低湿地の微高地に位置し、弥生時代前期末～中期の土器、土錘、石鏃、石匙、石斧、石錐、石槍等が採集されている。

陰田マノカンヤマ遺跡

標高72mのマノカン山の北・北西麓の斜面に位置し、北麓を久幸池地区、北西麓を堤ノ下地区として調査が行われている。

久幸池地区は北へのびる丘陵の東側斜面裾部から谷奥北側斜面裾部に位置し、段状遺構1基、竪穴住居1棟、土坑2基、集石遺構2基、溝状遺構1条、ピット群3か所が検出されており、竪穴住居からは類例は少ないが大和政権と関係が深いと思われる古墳から出土している圈線によって文様帯を区切る装飾を施した須恵器蓋、椀が出土している。この他に須恵器、土師器、石鏃、台石、鉄鎌、石塔などが出土している。

堤ノ下地区は丘陵の西側斜面裾部に位置し、段状遺構3基、掘立柱建物2棟、土壙墓1基、土坑3基、溝状遺構1条が検出され、須恵器、土師器、円面硯、移動式竈、石鏃、石斧、鉄滓、フイゴ羽口、炉壁などが出土している。

陰田荒神谷遺跡

県境の標高83mの荒神谷山の南東の谷部とそれを中心とした荒神谷山から北東へのびる丘陵の東側から南側斜面裾部及び荒神谷山の南東に位置する北東へのびる丘陵に位置し、

段状遺構9基、土坑7基、土器溜1基、井戸2基、ピット群が検出され、須恵器、土師器、丹塗り土師器、底部を穿孔した須恵器坏身、円面硯、甗、土製支脚、移動式竈、土錘、手づくね土器、製塩土器、鉄滓、フイゴ羽口、陶磁器などが出土している。

陰田ヒチリザコ遺跡

マノカン山の南から西側斜面裾部に位置し、西側の斜面で段状遺構5基、掘立柱建物4棟、土坑1基を検出し、須恵器、土師器、丹塗り土師器、甗、土製支脚、鉄滓などが出土した。

陰田小犬田遺跡

小犬田池の北側の谷部に位置し、畦畔、水田跡、河川跡7条、土坑3基を検出した。縄文時代前期中葉、後期前葉の土器、弥生時代中期前葉～中葉の土器、須恵器、土師器、土馬、墨書土器、円面硯、漆の付着した土器、製塩土器、木簡、フイゴ羽口、土錘、手づくね土器、甗、移動式竈、鉄滓などが出土している。特に墨書土器は「館」「田知」と墨書されており、郡司の官舎や公使官人の旅舎等としての「館」の存在が推定されている。

陰田第6遺跡

陰田第6遺跡は米子市教育委員会、(財)鳥取県教育文化財団、(財)米子市教育文化事業団によって調査が行われている。(財)米子市教育文化事業団の調査については本報告にて詳述しているのでここでは省略する。

米子市教育委員会調査地は天神山(標高31m)と久幸山(標高37m)が馬蹄形に連なる尾根上に位置し、弥生後期後葉の竪穴住居15棟、土壙・木棺墓20基、古墳16基(大谷1～3号墳、陰田3、31～42号墳)、横穴墓50基、中近世墓63基を検出した。

古墳は前方後円墳1基、方墳1基、円墳14基で、造営時期は古墳時代中期～6世紀後半である。内部施設は土壙・木棺直葬を主体とし、横穴式石室1基、組合式箱式石棺1基、石蓋土壙1基、石槨木棺2基、円筒埴輪棺6基、須恵器を利用した箱式棺1基で、土壙・木棺直葬→横穴式石室→横穴墓という変遷がうかがえる。

古墓は中世後期～江戸時代に造営され、土壙葬→火葬地埋葬→土壙葬→土葬(棺桶葬)という変遷がうかがえる。

(財)鳥取県教育文化財団調査地は米子市教育委員会調査地の南側に隣接し、丘陵の南～東側斜面に位置する。段状遺構24基、竪穴住居13棟、掘立柱建物3棟、古墳2基(陰田60、66号墳)、横穴墓6基(陰田29、51～55号横穴墓)、土壙墓20基、土坑5基、溝状遺構4条、道状遺構8条などを検出した。

集落は弥生時代後期に形成が始まり、古墳時代前期まで継続し、中期を隔てて後期に再び集落が形成され奈良時代まで継続しており、米子市教育委員会調査地の集落が弥生時代後期後葉の短期間に廃絶するのとは対称的である。

陰田横穴墓群

陰田第6遺跡が位置する尾根上に造営された鳥取県下最大規模の横穴墓群で、小横穴20基、未完成横穴3基を含む50基が確認されている。字林ノ前に所在する42基（A群）と字久幸に所在する8基（B群）の2支群があり、さらに、2、3基を単位とする11小支群が想定されている。6世紀後半～7世紀に造営されたもので、後背の頂部には小墳丘、溝状遺構が存在し、埴輪の樹立もみられた。形態的には丸天井形から断面三角形妻入形、同平入形への移行が認められ、玄室内に石棺1基、ベッド状屍床1基、2個体分の須恵器甕を砕いて敷きつめた屍床をもつものもある。副葬品には須恵器、土師器の他、馬具、鉄刀、刀子、鉄鏃などの鉄器、勾玉、管玉、切子玉、小玉、耳環などがあり、6号・12号横穴からは篋描文字を刻む土器が出土している。

4 陰田地区の字名

陰田という地名は天文2（1533）年の尼子経久寄進状（日御碕文書）に記された犬田村が初見で、17世紀中頃～後半を境に犬田村から陰田村へと表記方法が変わっている。

挿図3は陰田町における小字別の地図で98の小字が見られる。小字の中には宗教に関するものが多く見られ、全小字のうち約2割を占めている。これらは大きくみると4か所に集中しており、いずれも集落に隣接し、神社または墓地が存在しているのが特徴であり、生活と信仰が密接に関係していたものと考えられる。

ここではこれらの集中箇所を便宜的にA～D群とする。A群は口陰田の北側にあり、「観音山」、「天竺山」、「天竺塔田」、「天竺屋敷」、「天竺西塔」、「小天竺」という字名がある。「天竺屋敷」、「江淵屋敷」の集落に隣接し、口陰田の産土神である日御碕神社が鎮座する。

B群は口陰田の南側にあり「墓ノ前」、「天神ノ前」という字名があり、「林ノ前家之上山」、「林ノ前山」には天神山、天坂という地名がある。「会見屋敷」の集落に隣接し、神社は鎮座していないが久幸山、天神山の丘陵上には明治初期まで日御碕神社の神主を務めた櫃田家の墓地があった。

C群は奥陰田の西側にあり、「下宮ノ谷山」、「上宮ノ谷山」、「下宮ノ谷」、「上宮ノ谷」、「岩屋前」という字名がある。「横屋谷屋敷」の集落に隣接し、奥陰田の産土神である犬田神社が鎮座する。

D群は奥陰田の東側にあり、「東天神谷」、「天神谷」、「天神谷山」、「地獄谷山」という字名がある。「土井屋敷」、「南谷屋敷」の集落に隣接し、現在は犬田神社に合祀された北野神社が鎮座していた。

この他、「汐入」、「砂口」は海岸線を表すもので、「奈良尾」には海に突き出た奈良尾鼻があったと伝えられていることから「汐入」、「砂口」から「奈良尾」を結んだラインが海岸線であったものと思われる。なお、図外北側の陰田町と大谷町との境には「汐境」という字名がある。



挿図3 陰田地区地籍図

5 中海南東岸の古代鉄生産

今回報告する奥陰田遺跡群を含めた鳥取、島根県境の中海南東岸には古墳時代後期～奈良時代の鉄生産に関連する遺跡が広く分布している。

これらはいずれも山陵に囲まれた谷底小平野を見下ろす丘陵斜面に位置し、さらに斜面を加工した平坦面に掘立柱建物等を構築していることと、鉄の生産がほぼ同時期に行われていることから一連の生産体制下にあったものと考えられる。しかし、ミクロ的にみても地形的なまとまりや出土遺物の様相などが異なることから基本的には山陵に囲まれた谷底小平野を単位とした鉄の生産が考えられる。

ここでは中海南東岸に所在する古墳時代後期～奈良時代の鉄生産関連遺跡について前述した単位（群）ごとに概観したい。

新山群

米子市新山に所在し、新山山田古墳群、新山山田遺跡、新山研石山遺跡、新山下山遺跡で鉄滓が出土し、新山山田遺跡からは炉壁とフイゴ羽口が、新山研石山遺跡からはフイゴ羽口が出土している。

新山山田遺跡3区では1間×2間の掘立柱建物の中央に長方形の鍛冶炉をもつ精錬鍛冶工房が検出されており、工房の形態から専門の鍛冶ではないかと考えられている。

奥陰田群

米子市陰田町奥陰田地区に所在し、陰田夜坂谷遺跡、陰田隠れが谷遺跡、陰田広畑遺跡、陰田宮の谷遺跡、陰田第6遺跡（久幸地区）で鉄滓が出土している。陰田広畑遺跡では鍛冶炉が検出され、炉壁、フイゴ羽口が出土している。また、陰田ハタケ谷遺跡では鉄生産に関連したものと思われる炭焼窯状遺構が確認されている。

この群は陰田広畑遺跡から円面硯、墨書土器（里宅？）、丹塗り土師器が出土していることから公的な性格がうかがえ、また、陰田隠れが谷遺跡、陰田広畑遺跡、陰田宮の谷遺跡3区からはミニチュア土器が、陰田隠れが谷遺跡、陰田広畑遺跡、陰田宮の谷遺跡1区、陰田第6遺跡からは土馬が出土しており、祭祀も行われていたものと考えられる。

口陰田群

米子市陰田町口陰田地区に所在し、陰田第6遺跡、陰田マノカンヤマ遺跡、陰田ヒチリザコ遺跡、陰田荒神谷遺跡、陰田小犬田遺跡で鉄滓が出土し、陰田第6遺跡と陰田マノカンヤマ遺跡からは炉壁が、陰田マノカンヤマ遺跡、陰田荒神谷遺跡、陰田小犬田遺跡からはフイゴ羽口が出土している。

この群は木簡、円面硯、丹塗り土師器、漆付着土器、官衙的施設の存在をうかがわせる「館」を表現した墨書土器が出土していることから公的な性格がうかがえる。

吉佐群

安来市吉佐町に所在し、徳見津遺跡では鍛冶炉2基、鍛冶炉基底部と考えられる焼土面、金床石とそれに接する鍛造剥片と砂鉄を包含する土坑が確認されており、鉄滓、フイゴ羽口が出土している。特にⅢ区の鍛冶遺構は山陰地方では最古の段階（6世紀後半）に属するもので、覆屋に掘立柱建物を用いないことや大型の金床石などを備え付けている点など7世紀以降の鍛冶遺跡とは様相が異なる。

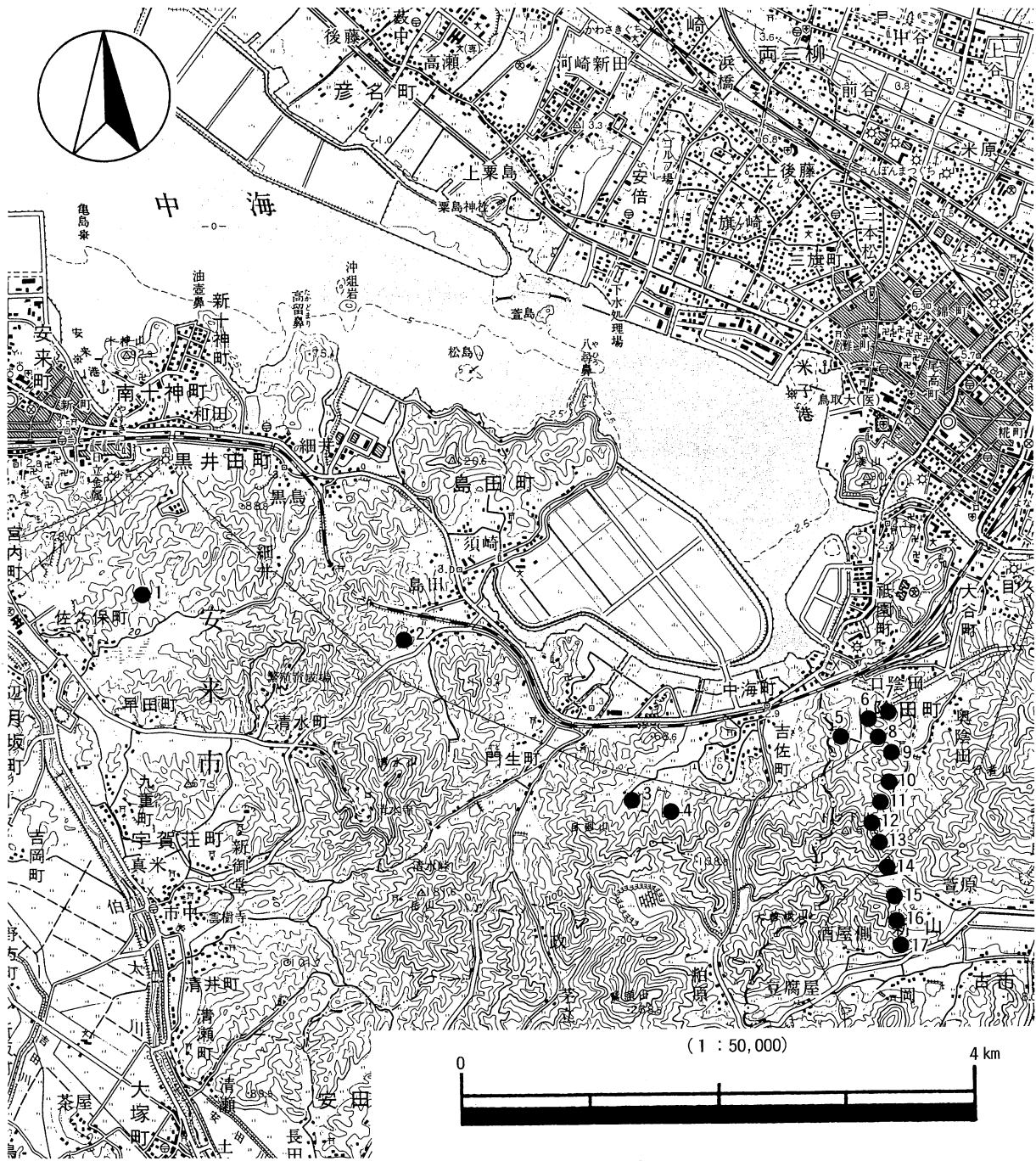
五反田遺跡では10数基の鍛冶炉が確認されており、これらの大半は竪穴住居と掘立柱建物の床面で検出されている。また、炭窯も確認されており、鉄滓、金床石、フイゴ羽口が出土している。

島田群

安来市島田町に所在し、島田南遺跡の1遺跡しか確認されていない。島田南遺跡では鉄滓と炉壁が出土し、墨書土器、ヘラ描土器など公的性格の濃い遺物も出土している。

佐久保群

安来市佐久保町に所在し、岩屋口南遺跡の1遺跡しか確認されていない。岩屋口南遺跡では掘立柱建物から大量の炭化物とともに製錬滓、鍛冶滓、鍛造剥片が検出され、7世紀前半の横穴墓からも鉄滓が出土している。



- | | |
|--------------|-------------|
| 1 岩屋口南遺跡 | 10 陰田広畑遺跡 |
| 2 島田南遺跡 | 11 陰田隠れが谷遺跡 |
| 3 五反田遺跡 | 12 陰田ハタケ谷遺跡 |
| 4 徳見津遺跡 | 13 陰田夜坂谷遺跡 |
| 5 陰田荒神谷遺跡 | 14 新山下山遺跡 |
| 6 陰田マノカンヤマ遺跡 | 15 新山研石山遺跡 |
| 7 陰田第6遺跡 | 16 新山山田遺跡 |
| 8 陰田ヒチリザコ遺跡 | 17 新山山田古墳群 |
| 9 陰田宮の谷遺跡 | |

挿図4 鉄生産関係遺跡分布図

第2章 調査の経緯

1 調査に至る経緯

調査は一般国道180号道路改良工事（米子バイパス）に伴うものである。

一般国道180号は中国山地を南北に横断し、鳥取県米子市と岡山市を結ぶ県西部の生活文化を支える幹線道路である。バイパスは米子市陰田町の国道9号米子バイパス・陰田ランプを起点として、トンネルで山越えし、同市新山を経て南進し西伯町へと結ぶ四車線道路である。交通渋滞の緩和とより活発な交流促進を期して計画され、1981年、地元「国道180号バイパス建設促進期成同盟会」が発足し、1986年に県の事業として建設費が予算化された。当面、新山地内の県道（主要地方道母里・伯太・新山線）までの延長約2kmを第1期工事として事業実施することとなった。

昭和59（1984）年12月14日、米子土木事務所から米子市教育委員会に対してルートを選定に先立つ埋蔵文化財の有無と取扱いについての照会協議があった。その後、鳥取県道路課、米子土木事務所、鳥取県文化課、米子市教育委員会による協議調整を行い、現地踏査、試掘調査等を経て、米子市教育委員会が発掘調査を行うこととなった。なお、工事が県事業であることや調査規模が大きいことに鑑み、鳥取県文化課の協力支援を受け、財団法人鳥取県教育文化財団から調査員の派遣協力を得た。

当初計画では、第1年次に新山地内、第2年次に陰田町地内、第3年次に陰田町の残りの調査と調査全体の整理報告として終了する予定であったが、その後工事内容の変更等により平成9（1997）年度まで行うこととなった。この間、遺跡そのものも分布範囲、内容、密度など当初の見通しをはるかに越える内容となり、調査計画の見直しも行った。

調査報告書は2分冊とすることとし、第1冊は平成4（1992）年度までに調査した新山地内分を中心に、第2冊は陰田町地内分を中心にその後の発掘、整理作業の成果を含め、全体的に取りまとめて平成10（1998）年3月に刊行した。

1984. 12. 14 ルート選定に先立つ埋蔵文化財の有無、取扱いについての照会協議
（米子土木事務所→米子市教育委員会）

1985. 1. 29 現地踏査（米子土木事務所、鳥取県文化課、米子市教育委員会）

1988. 1. 19 ルート決定に基づく再協議（関係四者）
調査手法、調査主体等の検討

1988. 4～9 新山地内試掘調査（米子市教育委員会）
新山山田古墳群、新山山田遺跡、新山研石山遺跡で遺構確認
（『一般国道180号道路改良工事に伴う試掘調査報告書 米子市教育委員会 1989』）

1989. 4～ 委託契約、発掘調査

2 調査の経過

平成元（1989）年4月から地形測量、杭打ち等の準備作業に入り、同年6月26日から本格的に調査を開始した。以後、範囲再確認、試掘調査を行いつつ年度毎に調査を行った。

調査にあたり「国道180号バイパス関係埋蔵文化財発掘調査団」（団長 米子市教育長）を組織して実施したが、その後、米子市の文化財体制の見直しに伴い、平成4（1992）年から調査主体が米子市教育委員会から財団法人米子市教育文化事業団（理事長 森田隆朝）に移行した。

第1次調査 平成元（1989）年4月1日～平成2（1990）年3月31日

新山地内の新山山田古墳群、新山山田遺跡、新山研石山遺跡を調査した。新山研石山遺跡の発掘調査は1区～4区のみで、丘陵北側の5区は伐開と範囲詳細確認（トレンチ調査）を行った。対象面積は約24,000m²である。

第2次調査 平成2（1990）年4月1日～平成3（1991）年3月31日

陰田町地内の陰田夜坂谷遺跡、陰田隠れが谷遺跡1区・2区、陰田宮の谷遺跡、陰田広畑遺跡、新山地内の新山研石山遺跡5区、新山下山遺跡を対象とした。発掘調査は陰田夜坂谷遺跡、陰田隠れが谷遺跡のみであり、新山研石山遺跡は微地形測量、陰田宮の谷遺跡、陰田広畑遺跡、新山下山遺跡は範囲詳細確認を行った。対象面積は約16,000m²である。

調査概報『新山 山田古墳群・山田遺跡・研石山遺跡』を刊行した。

第3次調査 平成3（1991）年4月1日～平成4（1992）年3月31日

新山地内の新山研石山遺跡5区と新山下山遺跡の林道下部分、陰田町地内の陰田宮の谷遺跡1区を調査した。対象面積は約16,000m²である。

調査概報『陰田 夜坂谷遺跡・陰田隠れが谷遺跡』を刊行した。

第4次調査 平成4（1992）年4月1日～平成5（1993）年3月31日

新山地内の新山下山遺跡の林道上部分と陰田町地内の陰田夜坂谷遺跡、陰田隠れが谷遺跡3区、陰田ハタケ谷遺跡、陰田広畑遺跡、陰田宮の谷遺跡2区を対象とした。対象面積は約17,100m²である。

調査概報『新山遺跡群・奥陰田遺跡群』を刊行した。

第5次調査 平成5（1993）年4月1日～平成6（1994）年3月31日

陰田町地内の陰田夜坂谷遺跡、陰田ハタケ谷遺跡を対象とした。当初は陰田広畑遺跡も予定していたが工事との調整により変更した。対象面積は約4,500m²である。

調査概報『奥陰田遺跡群』と調査報告書『萱原・奥陰田Ⅰ』を刊行した。

第6次調査 平成6（1994）年4月1日～平成7（1995）年3月31日
陰田町地内の陰田夜坂谷遺跡、陰田隠れが谷遺跡、陰田広畑遺跡、新山地内の新山山田遺跡を対象とした。対象面積は約13,500m²である。
調査概報『新山山田遺跡 陰田広畑遺跡』を刊行した。

第7次調査 平成7（1995）年4月1日～平成8（1996）年3月31日
陰田町地内の陰田広畑遺跡、陰田宮の谷遺跡3区・4区、陰田第6遺跡、新山地内の新山山田遺跡を対象とした。対象面積は約8,940m²である。
調査概報『新山山田遺跡（6区）』、『陰田広畑遺跡』を刊行した。

第8次調査 平成8（1996）年4月1日～平成9（1997）年3月31日
陰田町地内の陰田宮の谷遺跡3区・4区、陰田第6遺跡を対象とした。対象面積は約6,300m²である。
調査概報『陰田第6遺跡 陰田宮の谷遺跡3区・4区』を刊行した。

第9次調査 平成9（1997）年4月1日～平成10（1998）年3月31日
陰田町地内の陰田宮の谷遺跡3区を対象とした。対象面積は約300m²である。
調査報告書『萱原・奥陰田Ⅱ』を刊行した。

第3章 調査遺跡の概要

1 萱原の遺跡（『萱原・奥陰田Ⅰ』報告書で掲載）

新山山田古墳群

新山字山田にあり、平野に向かって東に伸びる標高30～50mの丘陵尾根に位置する。10基の古墳と横穴墓からなり、この内9基の古墳と横穴墓1基を調査した。古墳時代中期～後期初頭にかけて営まれた古墳群である。

新山山田遺跡

新山字山田にあり、平野に向かって東に伸びる丘陵と谷に位置する。谷部の1区では、古代流路、土坑、ピット群、土器溜り、敷石の遺構を検出した。縄文時代～古墳時代、中世の遺物を検出し、鏡片、ミニチュア土器などの祭祀遺物がみられ、斎場として利用されていたと思われる。丘陵部の2区は、標高25～50mの緩やかな丘陵で、掘立柱建物跡、竪穴住居跡、溝状遺構、土坑、段状遺構、ピット群、焼土跡、石積遺構などが検出された。遺物は、弥生時代～古墳時代、近世のものが出土した。集落跡を主体とした遺跡である。北側の谷ノ上地内で谷ノ上1号墳が検出された。南側の新山山田古墳群のある丘陵の3区では、掘立柱建物跡、竪穴住居跡、土坑、段状遺構、焼土跡、炭溜りなどの遺構を検出した。縄文時代～奈良時代、中世の遺物が出土したが、単発的である。おもに、鍛冶工房跡が目される遺構で、生産関係の遺跡である。

新山研石山遺跡

新山字研石山にあり、南東に伸びる丘陵に位置する。調査区は1区～5区まであり、1区は南東に面する山裾斜面がテラス状に加工され、掘立柱建物跡、竪穴住居跡、段状遺構、溝状遺構、土坑が検出され、古墳時代後期を中心とした集落跡で鉄滓が出土し鍛冶関係遺跡と推定される。2区は東に面した標高43～55mの尾根部で、竪穴住居跡、段状遺構、土坑が検出され弥生時代後期と奈良時代の遺跡である。3区は東に伸びる標高68～73mの尾根部で、2基の古墳を検出した。古墳時代前期と考えられる遺跡である。4区は東に面する谷部で、炭溜りを検出した。奈良時代～平安時代と推定される遺跡である。5区は北東に伸びる山裾の小丘陵に位置する。掘立柱建物跡、竪穴住居跡、段状遺構、溝状遺構、土坑、ピット群と谷部に土器や木製品の包含層を検出した。古墳時代～奈良時代を中心とした集落跡である。

新山下山遺跡

谷奥の南東に面した標高30～50mの山裾と斜面に立地する。掘立柱建物跡、溝状遺構、土坑、炭溜りが検出された。遺物に鉄滓や鉄製品、赤色塗彩土器が多く、奈良時代を中心とする鍛冶生産関係の集落遺跡である。

2 奥陰田の遺跡

陰田夜坂谷遺跡

陰田町字夜坂谷にあり、奥陰田の一番谷奥の標高45mの尾根上と、南斜面に位置する。弥生時代末の竪穴住居跡のほか、8世紀後半の炉跡状焼土面と鉄滓、炭溜り等を検出した。

陰田ハタケ谷遺跡

陰田町字ハタケ谷の標高45～55mの北と南の尾根にはさまれた谷部東斜面と、谷に派生した小支尾根上に位置する。斜面や谷の表土下に、炭や炭混入土、焼土が散在し、奈良時代を中心とした段状遺構、炭溜土坑、炭溜、炭窯状遺構、ピット群などが発見された。周辺の鍛冶関係遺跡に炭を供給していた遺跡と考えられる。

陰田隠れが谷遺跡

陰田町字隠れが谷にあり、標高76mの尾根の南斜面と南西に伸びる尾根部に位置する。斜面に14のテラスが確認され、掘立柱建物跡、竪穴住居跡、焼土坑、炭溜り等が検出された。遺物は、須恵器、土師器、土馬、ミニチュア土器、鉄滓などが出土した。7世紀中葉～9世紀まで続く中心的集落跡である。

陰田広畑遺跡

陰田町字広畑の標高45mの東へ伸びる尾根の南斜面に位置する。標高15～45mの南斜面と谷奥に10以上のテラスが確認され、掘立柱建物跡、竪穴住居跡、鍛冶遺構が検出された。遺物は、鉄滓、フイゴ羽口等の鉄関係のものや、須恵器、土師器など多数発見されており、主に古墳時代後期～平安時代にかけて営まれた。奥陰田遺跡群の中心的位置を占め鍛冶・鉄生産を主体とする工房集落跡である。

陰田宮の谷遺跡 1区・2区

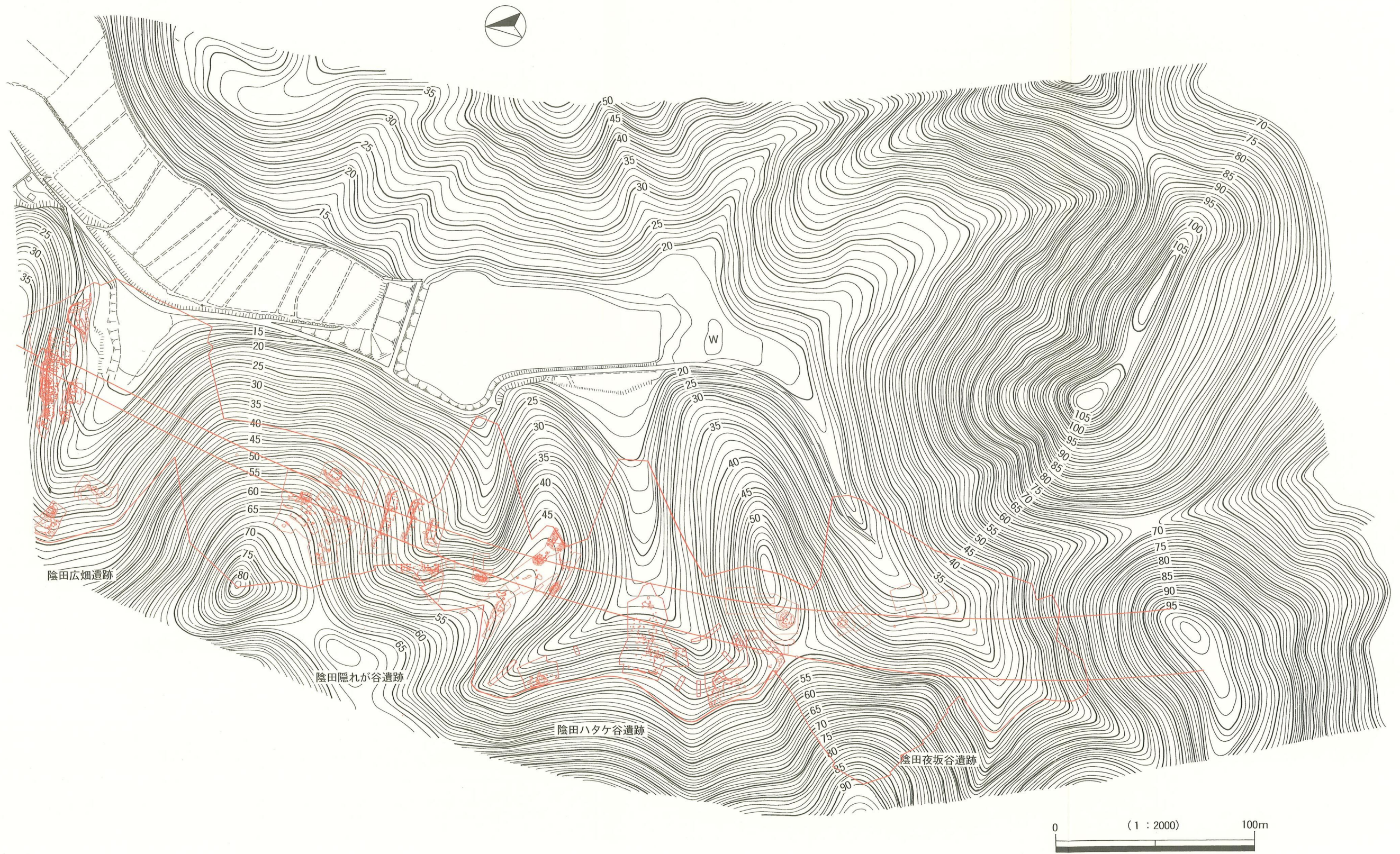
陰田町字宮の谷の犬田神社裏の谷内に突出する標高30mの小尾根突端部と東に伸びる標高40mの南斜面に位置する。小尾根突端部（1区）は標高20～23mの東と北斜面に4つのテラスがあり、掘立柱建物跡、溝状遺構が検出された。東に伸びる丘陵の南斜面（2区）は標高29～30mに細長いテラスがあり、掘立柱建物跡、溝状遺構、焼土坑が検出された。須恵器、土師器、土馬、鉄滓などが出土し、飛鳥、奈良時代を主体とする集落遺跡である。

陰田宮の谷遺跡 3区・4区

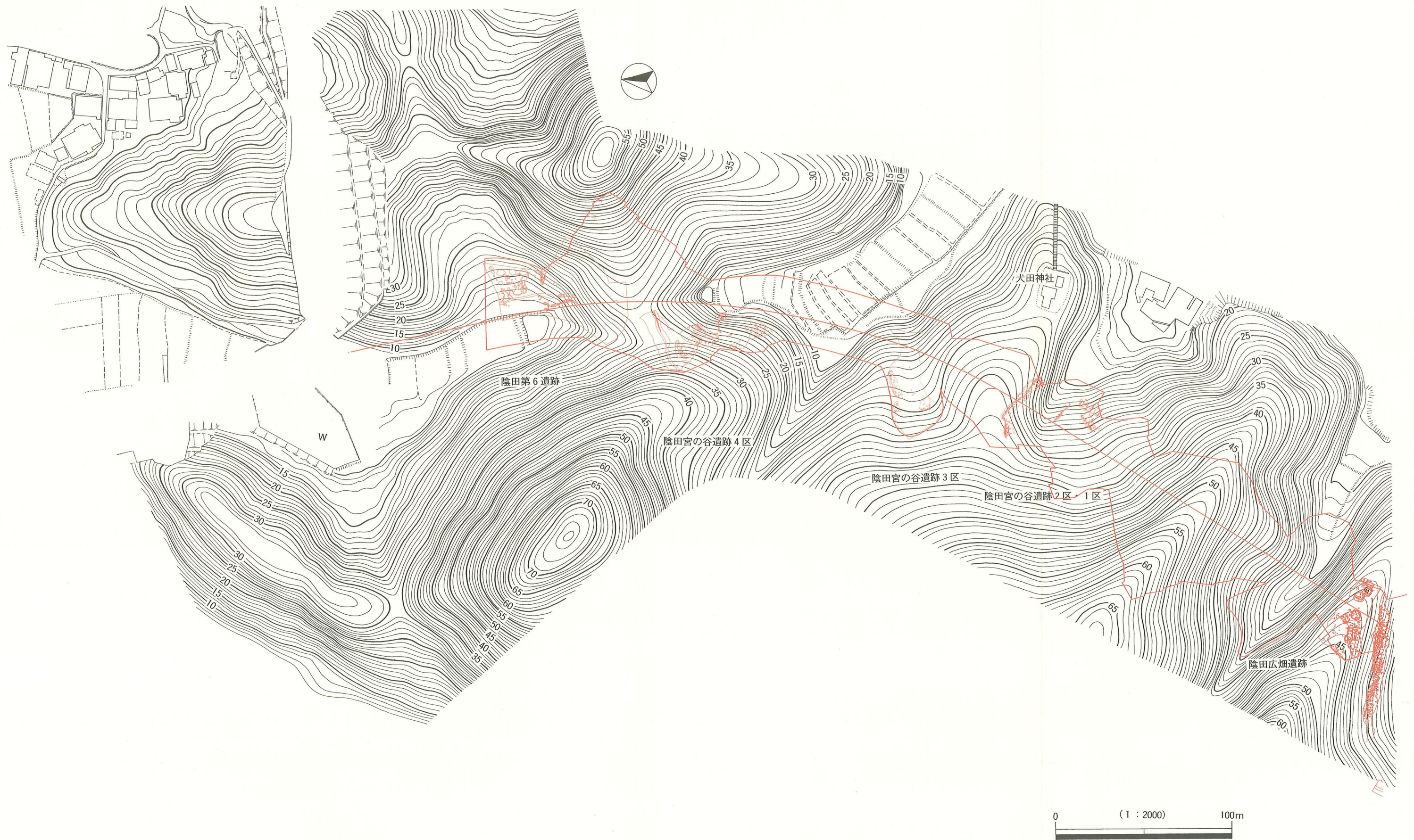
陰田町字宮の谷にあり、3区は東に伸びる尾根に挟まれた谷部と斜面に位置する。古墳時代後期の掘立柱建物跡、土坑、段状遺構、集石遺構、土器溜りを検出した。ミニチュア土器、土製支脚が数多く出土し、祭祀遺物を特色とする。4区は標高14～30mの東斜面で、奈良時代の掘立柱建物跡、土坑、溝状遺構、道路状遺構、段状遺構を検出した。

陰田第6遺跡

陰田町字久幸山の北へ伸びる尾根と西斜面一帯に広がる。尾根部と斜面は、過去に調査されており弥生～奈良時代の集落跡が検出されている。今回の調査地は西斜面から谷奥の標高10～30m付近に位置し、古墳～奈良時代の土壇、溝状遺構、道路遺構、包含層、流路跡を検出した。古墳後期～奈良時代の古代道路跡は交通遺跡として注目される。



挿図5 調査遺跡範囲図(1)



挿図6 調査遺跡範囲図(2)

第4章 遺跡について

1 陰田夜坂谷遺跡

(1) 調査の概要

陰田夜坂谷遺跡は奥陰田の南に入り込む谷筋の最奥部に位置し、ドウド山から東へ派生する標高約50mの小支脈丘陵と谷奥低地で形成される。

小字『夜坂谷』は、広義には大池から南の谷奥全体を示す呼称であり、明治24年の地籍図（旧々図）にもそのような記載がみられ、現在も地元では、漠然とではあるが、この谷奥を示すものとして使用されている。しかしながら、一方では、この範囲にある支谷、支脈にもそれぞれの呼称が存在する。そのため、今回の発掘調査にあたっては、『夜坂谷』の呼称は、谷奥の支脈丘陵と谷奥低地の狭義の範囲に限定して使用した。

当地は、米子市新山に抜ける峠の道筋の登り口にあたり、近年までは、陰田と新山をつなぐ道として頻繁な往来があった。また、地元には、米子城の築城に伴うものか補修の際のものかは限定できないがこの谷奥から石材を切り出したとの伝承があり、南側の丘陵斜面には石の露頭が散見される。

調査では、谷底部を1区、丘陵南斜面を2区、丘陵尾根部を3区、丘陵北斜面を4区、丘陵尾根基部を5区として調査を行った。なお、ドウド山の東斜面及び尾根上にもトレンチを入れたが、若干の炭の堆積があったものの明確な遺構、遺物の確認には至らず、調査範囲からは除外した。

今回の調査では、竪穴住居跡1棟、炭溜り（炭焼窯）3基、炭溜土坑2基、段状遺構1基を検出し、弥生土器、古式土師器、須恵器、鉄製品、石鏃などが出土した。遺構のうち、竪穴住居跡は、弥生時代後期末～古墳時代前期初頭のもので、その他は奈良時代後期を中心とするものと考えられる。

(2) 縄文時代～弥生時代

当該期の遺構は確認できなかったが、石鏃5点、剥片（黒曜石、サヌカイト）等が出土している。ほとんどが後世の遺物と混合して出土しており、2区の炭溜り遺構下層に集中するが、3区、4区にも見られ、基本的には3区の尾根部から転落したものと解釈される。

石鏃は、凹基4点（1、3～5）、平基1点（2）で、1が黒曜石製、2～5がサヌカイト製である。2は弥生時代のものと思われる。

(3) 弥生時代後期～古墳時代前期

陰田地内最大規模の竪穴住居跡1棟を検出すると共に、弥生土器、古式土師器、石鏃等の遺物が出土した。土器には青木Ⅲ期新～青木Ⅴ・Ⅵ期のものがあり、そのなかでも青木Ⅳ、Ⅴ・Ⅵ期のものが多い。竪穴住居跡は、単独、あるいはそれに近い形で存在する。調

査区外の尾根先端部にも存在する可能性があるが、当遺跡の調査範囲ではこれのみであり、後背の尾根部では全く確認できなかった。

竪穴住居跡

S 101 (挿図9 図版1)

尾根南肩部に位置し、谷奥～峠に面する。

平面形はやや角張った不整形で、壁肩径7.65×7.24m (床面径6.9×6.6m)、床面積38.4㎡の大型住居である。壁際には幅20～25cm、深さ約7cmの断面U字形の側溝が巡り、最大残存壁高は0.75mをはかる。北側後背部には幅0.3～0.5mの三日月状の加工段が2段設けられ、下段には浅い溝が掘られる。床面標高は51.00mをはかる。

床面では大小20基のピットを検出しており、柱穴は、P1-P2-P10-P4-P11とP5-P6-P10-P4-P3-P7のP10・P4を共用した5本柱と6本柱の2組の組合せが考えられる。土層断面より拡張・建替をしたものと思われる。柱穴の規模は径42cm×42cm～55cm×70cm、深さ27～45cmをはかる。また、床面ほぼ中央にはP17 (径55×75cm、深さ36cm) とP18 (径70×100cm、深さ39cm) が重複して存在する。なお柱穴、中央ピット以外のピットP8、P9、P15、P16、P19などについては、掘込みが浅く、位置関係も考慮し、後世の掘立柱建物として扱った (SB01、02)。また、後世 (奈良時代) にこの住居跡の凹地形を利用して炭溜遺構が築かれる。

遺物はほとんどが破片であるが、住居跡床面及びやや浮いた位置から出土した。壺甕類 (1～7)、注口土器 (8、9)、高坏 (10、11)、底部 (4) 等がある。

1は甕で、口縁は外傾して開き、端面に櫛描き平行線を施す。端部は丸く厚い。2、3は直線的に外傾して開き、稜はやや下方に突出し、端部はつまみ出して終わる。シャープなつくりである。5は直立気味の口縁で、器壁は厚く、軟質である。口縁内面につまみ痕が良く残る。6は口縁がやや内傾して立上がり、薄手でシャープなつくりである。7は口縁が外傾して開き、接合部の屈曲が余りなく、稜の断面は三角形を呈する。器壁は厚く、軟質である。8、9は注口土器で、先端部を欠く。硬くシャープな作りである。10は高坏で、端部がやや外反する浅皿状の坏部を持つ。薄手でシャープな作りである。青木Ⅲ期新～V・Ⅵ期のものである。

(4) 奈良時代以降

掘立柱建物2棟、炭溜り3基 (炭焼窯1基を含む)、炭溜土坑2基、段状遺構1基を検出した。遺物は須恵器壺・甕・坏、土師器坏・甕、鉄片、鉄滓等があるが、ほとんどが細片で、数量も少ない。奈良時代後半代を主体とする鍛冶と炭焼きに関係する遺跡である。

掘立柱建物跡

S B 01・02 (挿図10)

丘陵尾根南側肩部(3区)に位置し、S I 01(弥生時代後期～古墳時代初頭)に重複する。明確ではないが、S I 01床面ピットの内、浅目のものを結び、2棟分の建物を想定した。柱穴は径40～50cm、深さ20cmをはかる。S B 01は、P 8-P 19-P 16-P 9が東西方向に約1.3m間隔で並び、桁行3間(桁行長3.8m)の建物であると想定される。S B 02は、P 11'-P 8(S B 01と重複)-P 19'-P 15-P 9が1.2～1.3m間隔で直角に並び、2×(2)間の建物が想定される。炭溜2との関連が考慮されるものである。

炭溜遺構

炭溜1(挿図12、13 図版1)

2区の南側斜面中腹に緩やかな下降傾斜を成して上下長約9m、幅5～7mの範囲に炭・焼土が堆積する。上方(炭溜り1a)と下方(炭溜り1b)の2つの重複が見られるが、上方では炭焼窯の下部構造の残骸と思われる長方形の被熱溶解部を検出した。切合い関係から炭溜り1b→1aの順である。遺物は、数量が少ないが、須恵器壺・坏、土師器片、鉄片等が出土した。壺(37)は全形をほぼ復元でき、奈良時代後半期のものと思われる。その他は小破片である。(なお、¹⁴C年代測定では6世紀末～8世紀前半代の値が出ている)。

炭焼窯遺構(炭溜り1a)は、縦(南北)5.1m×横(東西)3.5mの範囲で、隅がやや丸みを帯びた菱形をなし、中心に長辺1.1m×短辺0.5mの長方形の被熱溶解部を持つ。被熱溶解部は地傾斜に対してやや斜めに位置し、周囲を幅10～30cmの変質層に囲まれる。主軸方位はN-45°-Wである。右突出部と上方奥部には熱変性を受けた橙褐色箇所が外に向かって延び、この付近が煙道側であったと考えられる。また下方左右には幅0.4m、長さ1mと幅0.2～0.6m、長さ1.5mの下向突出がある。左は硬く締まる黄褐色土、右は炭を多量に含む茶褐色土が埋まる。立地標高は上方が39.2m、下方が37.3mと下降傾斜しており、溶解部は38.7mである。

窯の構造ははっきりしないが、炭化物の残存状況から長さ5m、幅2mの楕円形の範囲が想定できる。なお、時期については、出土遺物から奈良時代を越えない範囲であると思われるが、左右に多少の張出を持つ菱形の形状はむしろ中世の炭焼窯に多くみられる形態であり、検討の余地がある。

下方部の炭溜り1bは、立地標高37mで、東西断面がU字状に窪む幅5m、厚さ0.9mの厚い堆積である。炭・焼土混りの黄褐色～赤褐色土が硬軟交互に堆積する。底中央は更に窪み幅0.9m、深さ0.2mで焼き締まった焼土の堆積が著しい。上方部(炭溜り1a)からの排出物の再堆積とも思われるが、伏せ焼きなどの炭焼跡の可能性もある。伏せ焼きと思われる遺構は陰田ハタケ谷遺跡B区でも検出した。

炭溜 2 (挿図14)

丘陵尾根南側肩部(3区)に位置し、弥生時代後期の竪穴住居跡S I 01の跡地に埋土を掘り込んで形成される。濃淡があり輪郭は明瞭ではないが、土層断面や検出状況から、径7~8m、深さ約0.6mのすり鉢状の落込みが想定される。また、上方部に径約2m、深さ0.5mの落込みもあり数次の重複がみられる。やはり遺物は少ないが、炭混土内より須恵器、土師器の坏・甕、鉄片等が出土した。形態的に奈良時代後半~平安時代初期のものと思われる。(なお、¹⁴C年代測定では、5世紀中葉~6世紀中葉の値が出ている)。

炭溜 3 (挿図11)

丘陵北側斜面(4区)に位置する。径約2×3m、深さ0.5mの楕円形の落込みである。上層から弥生土器の細片が出土したが、混入品であり直接のものではない。炭溜2と同時期のものと思われる。

炭溜土坑 (挿図11 図版2)

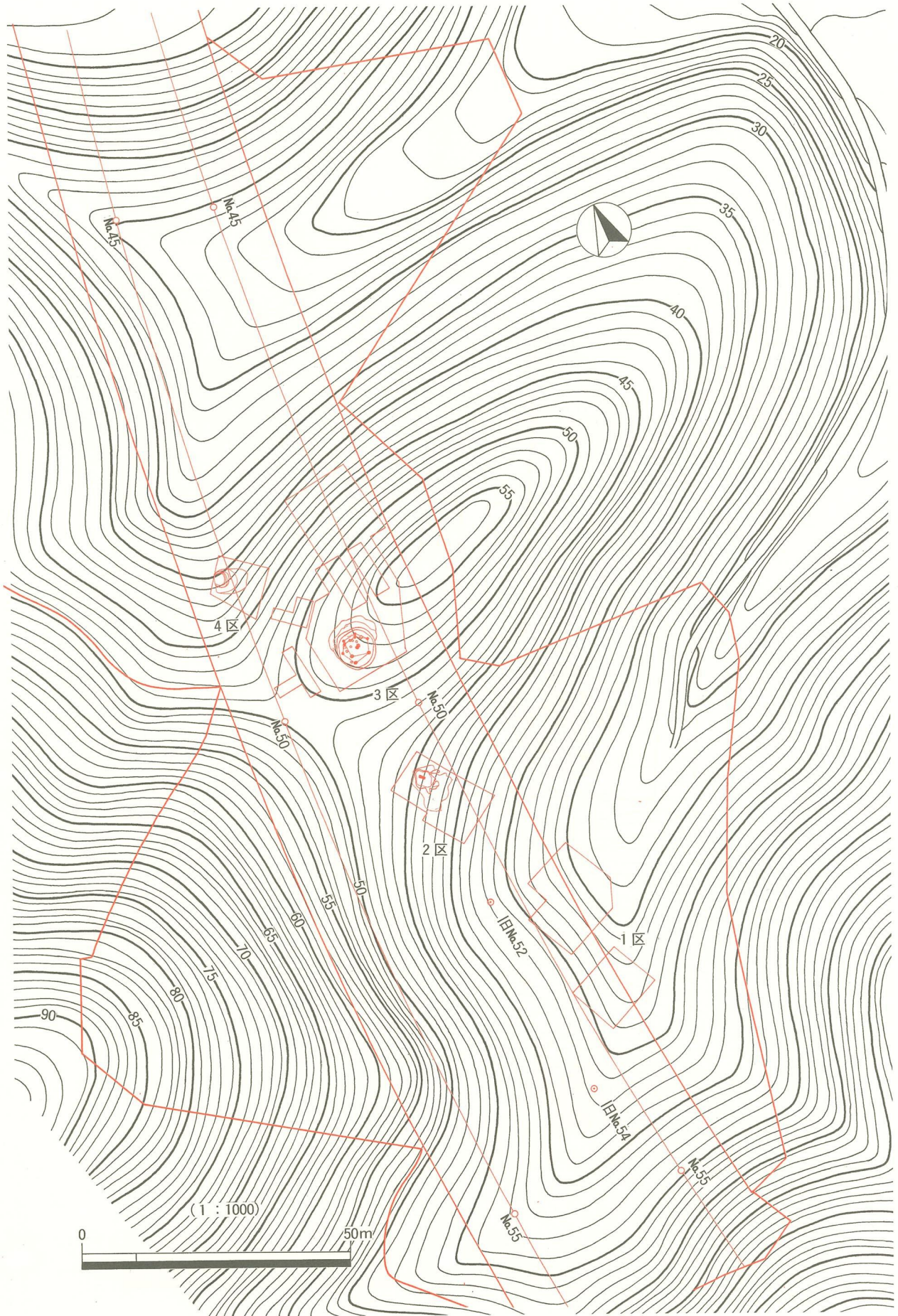
炭溜2の西横に隣接して2カ所検出した(S K 01、02)。径0.8×1m、深さ0.2~0.3mの円~楕円形の小土坑である。底部に小ピット状の窪みがある。炭溜2に関連するものと思われる。

段状遺構

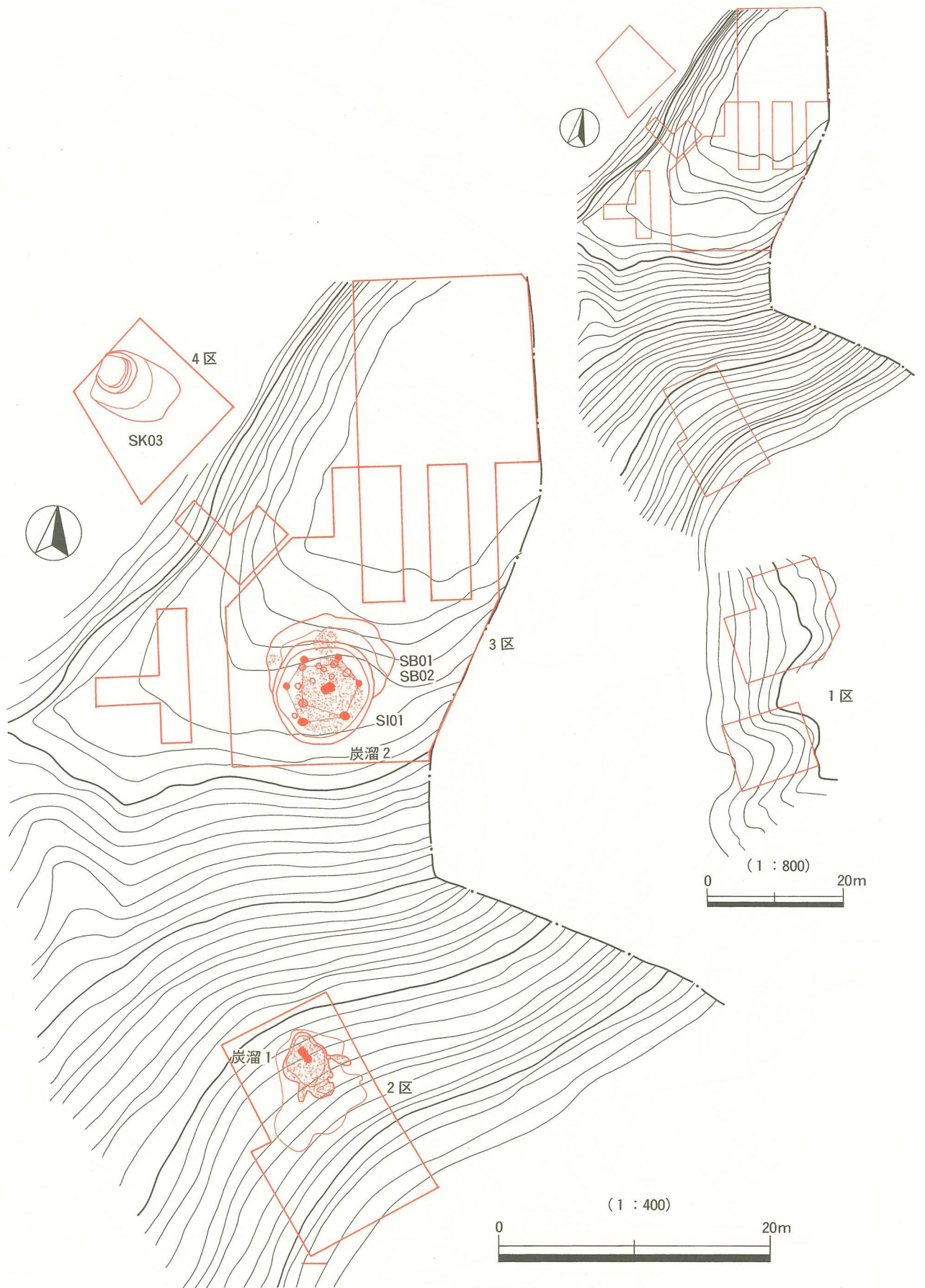
尾根北側(5区)に位置する。むしろ陰田ハタケ谷遺跡の最奥部ともいうべき位置にあたる。東西幅5.8m、奥行き2.8mの小テラスであり、西側は調査区域の外に延びる。床面標高は49.7mである。斜面をL字状に加工し、奥壁から東壁に沿って幅30~50cm、深さ5~10cmのU字溝が巡り、東半部を中心に焼土や炭混土が堆積する。南東側床面には人頭大の角礫6個を配した炉跡状の遺構がある。床面を一旦掘り窪めて埋めた上に壁側に石を2個立て並べ、手前側にやや大きめの石4個を丸く囲むように置く。配石範囲は径約1.5m、周囲の掘り窪みは径約2mである。遺物は少ないが須恵器坏・甕類の破片と鉄滓1点が出土した。

その他(小墳丘状地形)

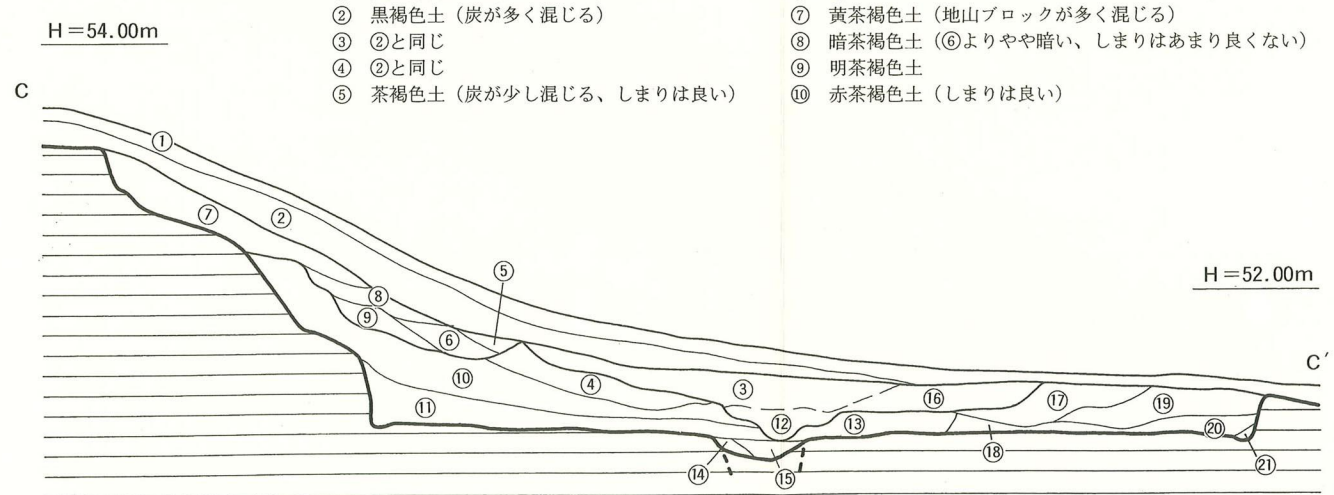
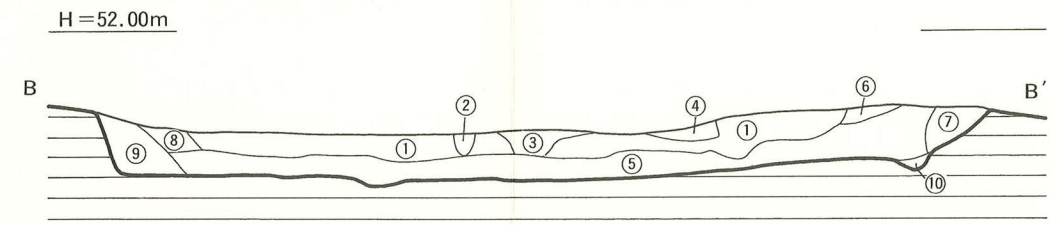
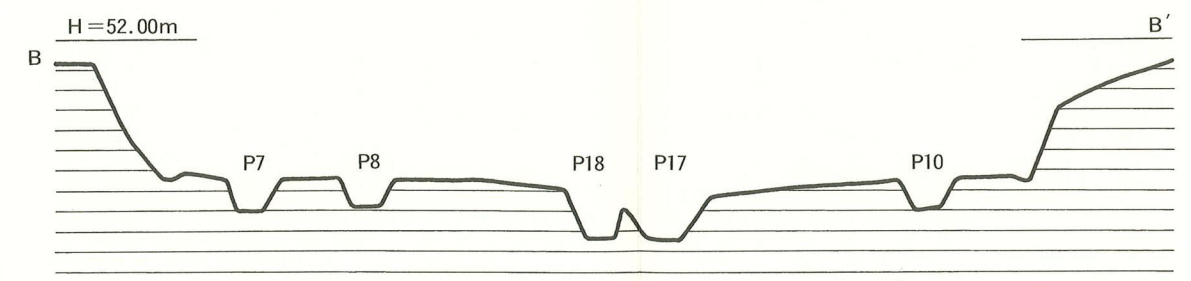
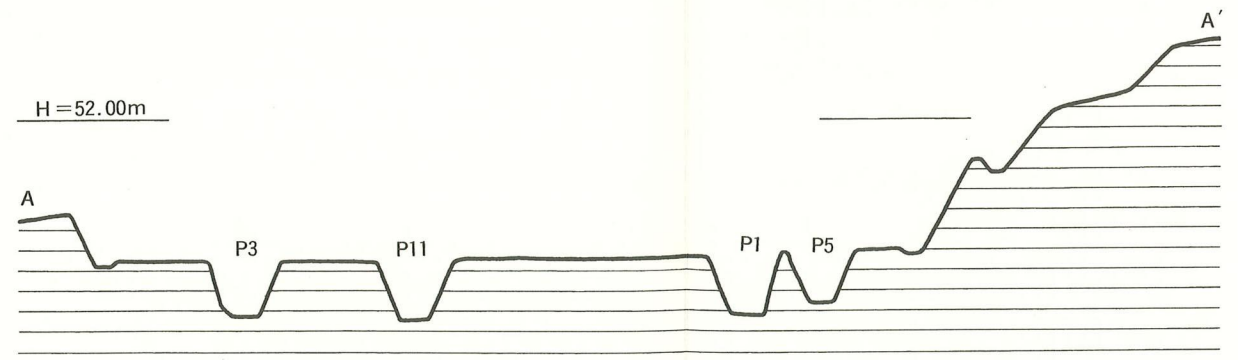
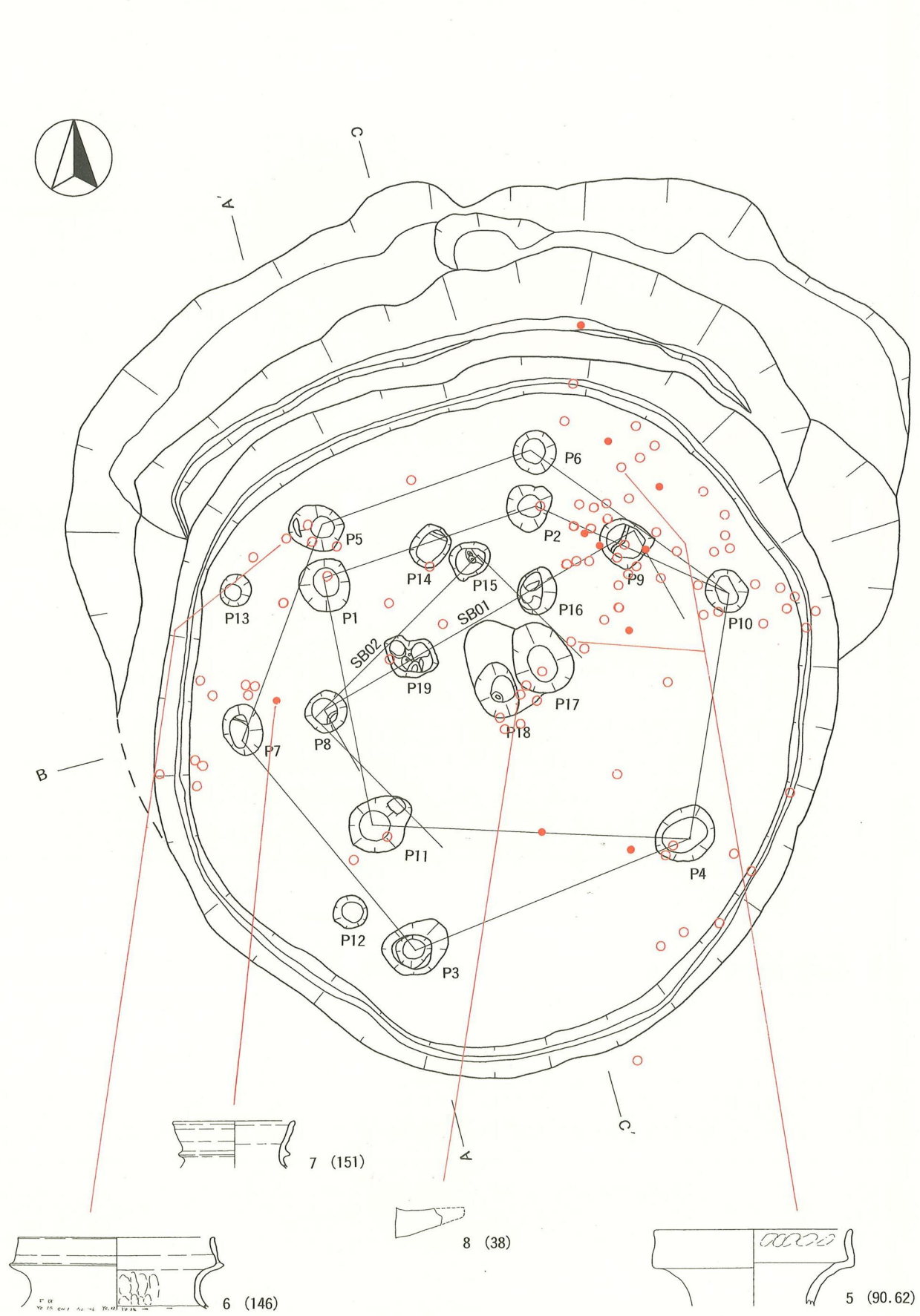
1区の谷底に径約10m、高さ1mの小墳丘状の起伏が2箇所見られたため、伐開倒木処理を行い、微地形測量の後ベルトを設定し、小トレンチも含めながら発掘調査を行った。調査の結果、起伏には特別の加工の痕跡は認められず、自然地形であると判断されたが、須恵器甕、土師器小片や、鉄滓、近世陶磁器片が出土した。須恵器、土師器、鉄滓は、周辺斜面から転落したものと思われる。近世遺物の存在は、米子城の石切りの伝承に関連するものかとも考えられる。



挿図7 陰田夜坂谷遺跡 調査地全体図

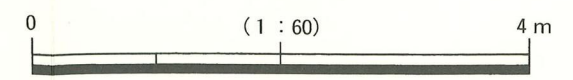


挿図8 陰田夜坂谷遺跡 遺構分布図

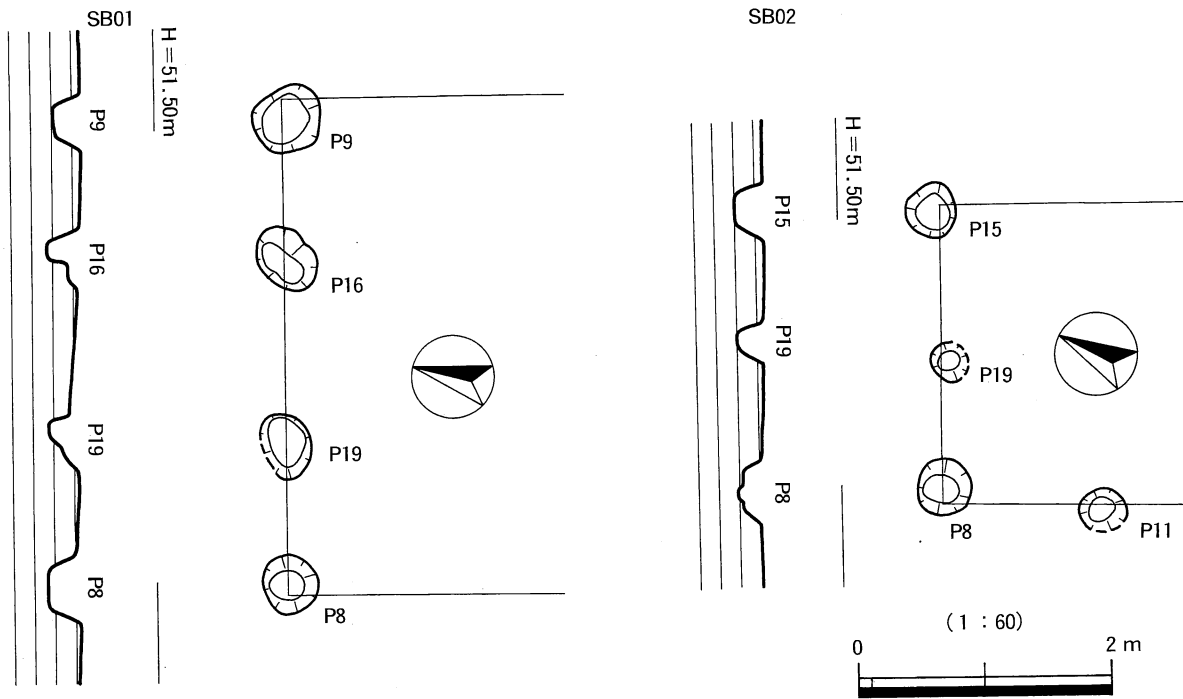


- | | |
|-------------------------|-------------------------------|
| ① 淡黒茶褐色土 (炭が混じる) | ⑥ 暗茶褐色土 (炭が少し混じる) |
| ② 黒褐色土 (炭が多く混じる) | ⑦ 黄茶褐色土 (地山ブロックが多く混じる) |
| ③ ②と同じ | ⑧ 暗茶褐色土 (⑥よりやや暗い、しまりはあまり良くない) |
| ④ ②と同じ | ⑨ 明茶褐色土 |
| ⑤ 茶褐色土 (炭が少し混じる、しまりは良い) | ⑩ 赤茶褐色土 (しまりは良い) |

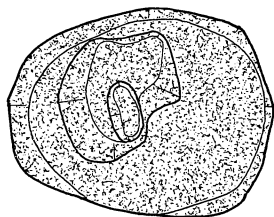
- | | | |
|---------------------|-----------------------------|---------------------|
| ① 表土 | ⑧ 暗茶褐色土 (砂質、⑨よりやや明るい) | ⑮ 茶褐色土 (砂質、⑩よりやや暗い) |
| ② 黄茶褐色土 (砂質) | ⑨ 暗茶褐色土 (砂質) | ⑯ 黒褐色土 (炭が多く混じる) |
| ③ 黒褐色土 (炭・焼土が多く混じる) | ⑩ 茶褐色土 (砂質、⑪よりやや暗い、炭が少し混じる) | ⑰ 淡黒褐色土 (少し炭が混じる) |
| ④ 暗茶褐色土 (炭が少し混じる) | ⑪ 茶褐色土 (砂質) | ⑱ 赤茶褐色土 (やや粘質) |
| ⑤ 暗茶褐色土 | ⑫ 淡黒褐色土 (炭が多く混じる) | ⑲ 明茶褐色土 (少し炭が混じる) |
| ⑥ 淡黒褐色土 | ⑬ 茶褐色土 (⑩とほぼ同じ、炭が少し混じる) | ⑳ 淡茶褐色土 (少し白がかかる) |
| ⑦ 明黄茶褐色土 | ⑭ 明茶褐色土 (砂質) | ㉑ 白茶褐色土 (粘質) |



挿図9 陰田夜坂谷遺跡 3区SI01遺構図

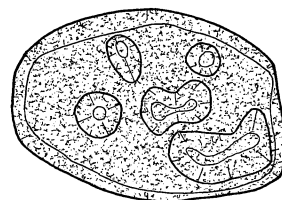


挿図10 陰田夜坂谷遺跡 3区SB01・02遺構図



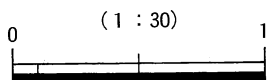
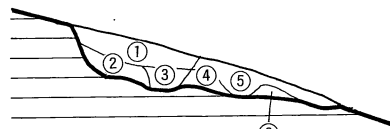
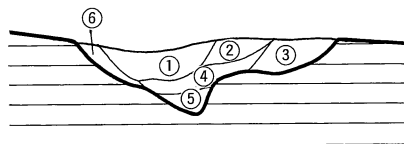
SK01

H = 52.00m



SK02

H = 52.00m

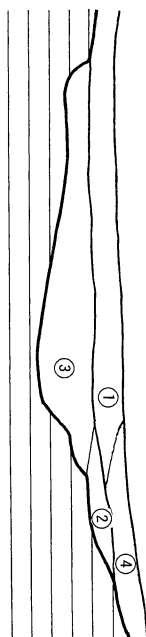


SK01

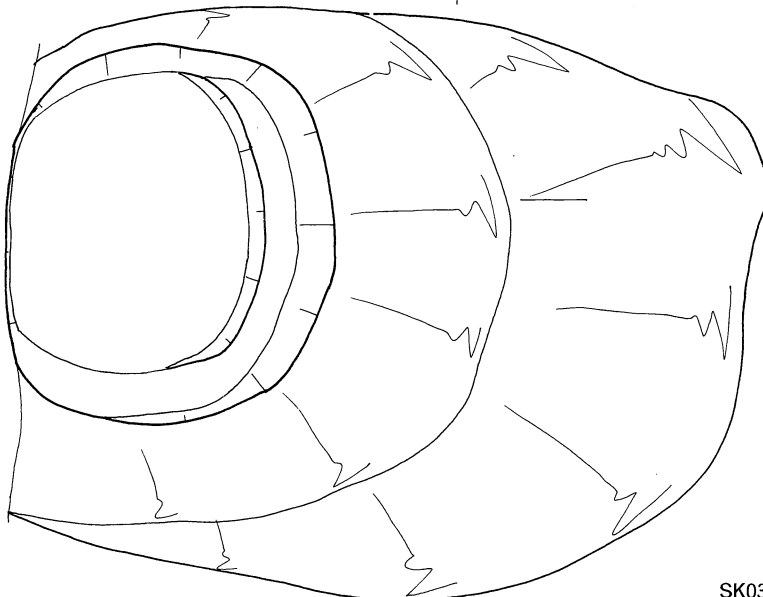
SK02

- ① 黄褐色土と暗黄褐色土の混じり (炭が多く混じる)
- ② 暗黄褐色土 (炭が少し混じる)
- ③ 明黒褐色土と暗黄褐色土の混じり
- ④ 黒褐色土 (炭が多く混じる)
- ⑤ 暗黄褐色土
- ⑥ 黄褐色土 (炭が少し混じる)

- ① 黒褐色土 (炭・焼土が多く混じる、しまりは悪い)
- ② 暗黄褐色土 (少し炭が混じる、しまりは悪い)
- ③ 暗茶褐色土 (砂質、しまりは悪い)
- ④ 黄褐色土 (砂質、しまりは悪い)
- ⑤ 明黒褐色土 (炭、焼土が多く混じる、しまりは悪い)
- ⑥ 黄褐色土 (砂質、しまりは悪い)



H = 45.00m

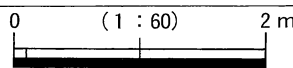
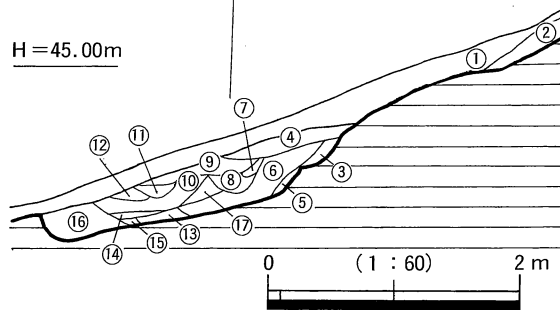


SK03

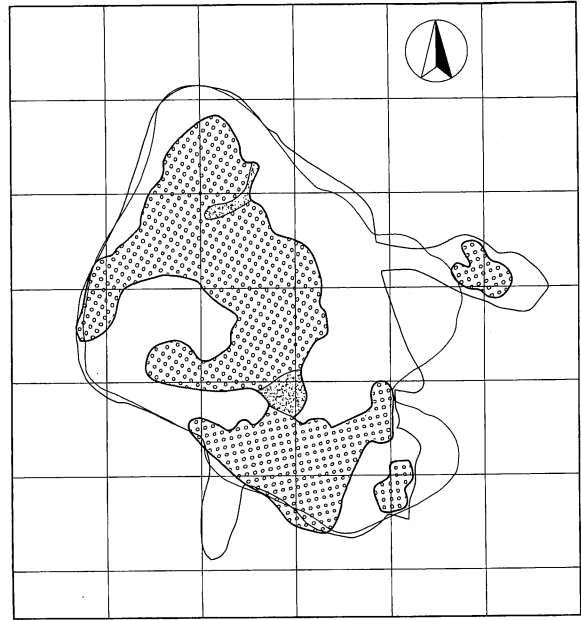
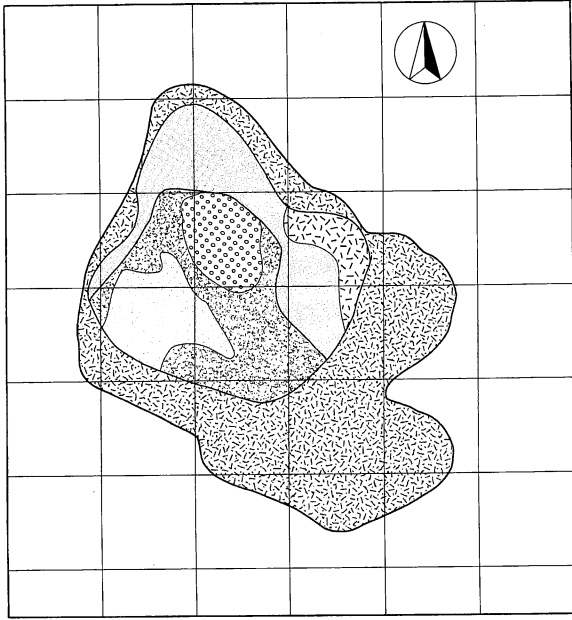
SK03

- ① 黄褐色土
- ② 黄褐色土 (10cm大のレキを多く含む)
- ③ 暗黄褐色土
- ④ 明黒褐色土
- ① 表土
- ② 暗茶褐色土
- ③ 暗黄褐色土
- ④ 茶褐色土 (5mm大のレキを含む)
- ⑤ 暗茶褐色土 (③よりやや明るい)
- ⑥ 茶褐色土 (④よりやや暗い、土器・地山ブロックを含む)
- ⑦ 暗茶褐色土 (⑨よりやや明るい)
- ⑧ 黒色土
- ⑨ 暗茶褐色土
- ⑩ 暗黄褐色土と暗茶褐色土の混じり
- ⑪ 暗茶褐色土 (地山ブロックを含む)
- ⑫ 暗茶褐色土
- ⑬ 黒褐色土 (⑧よりやや明るい)
- ⑭ 茶褐色土
- ⑮ 黄褐色土
- ⑯ 茶褐色土
- ⑰ 暗茶褐色土 (小ブロックを含む)

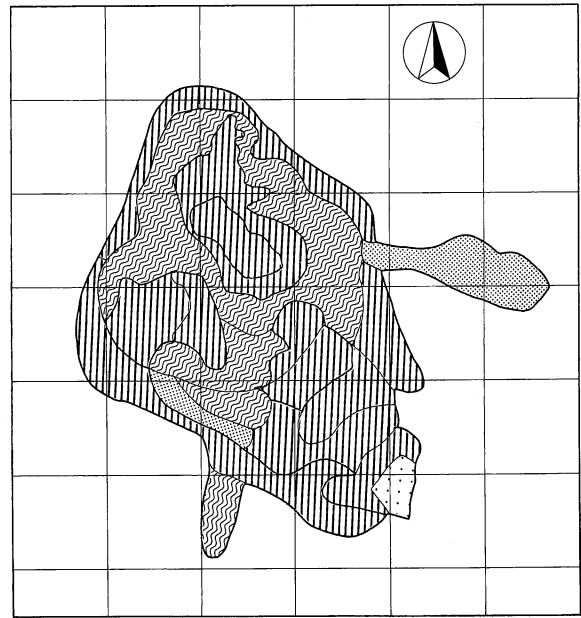
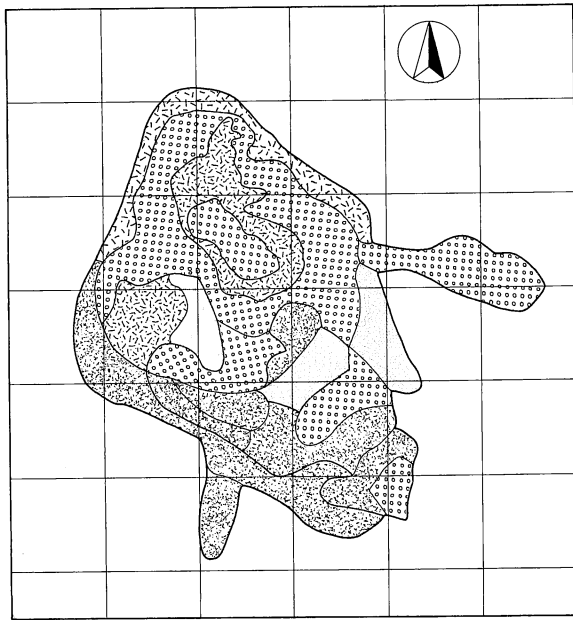
H = 45.00m



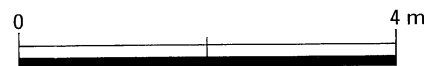
挿図11 陰田夜坂谷遺跡 3区SK01・02、4区SK03遺構図



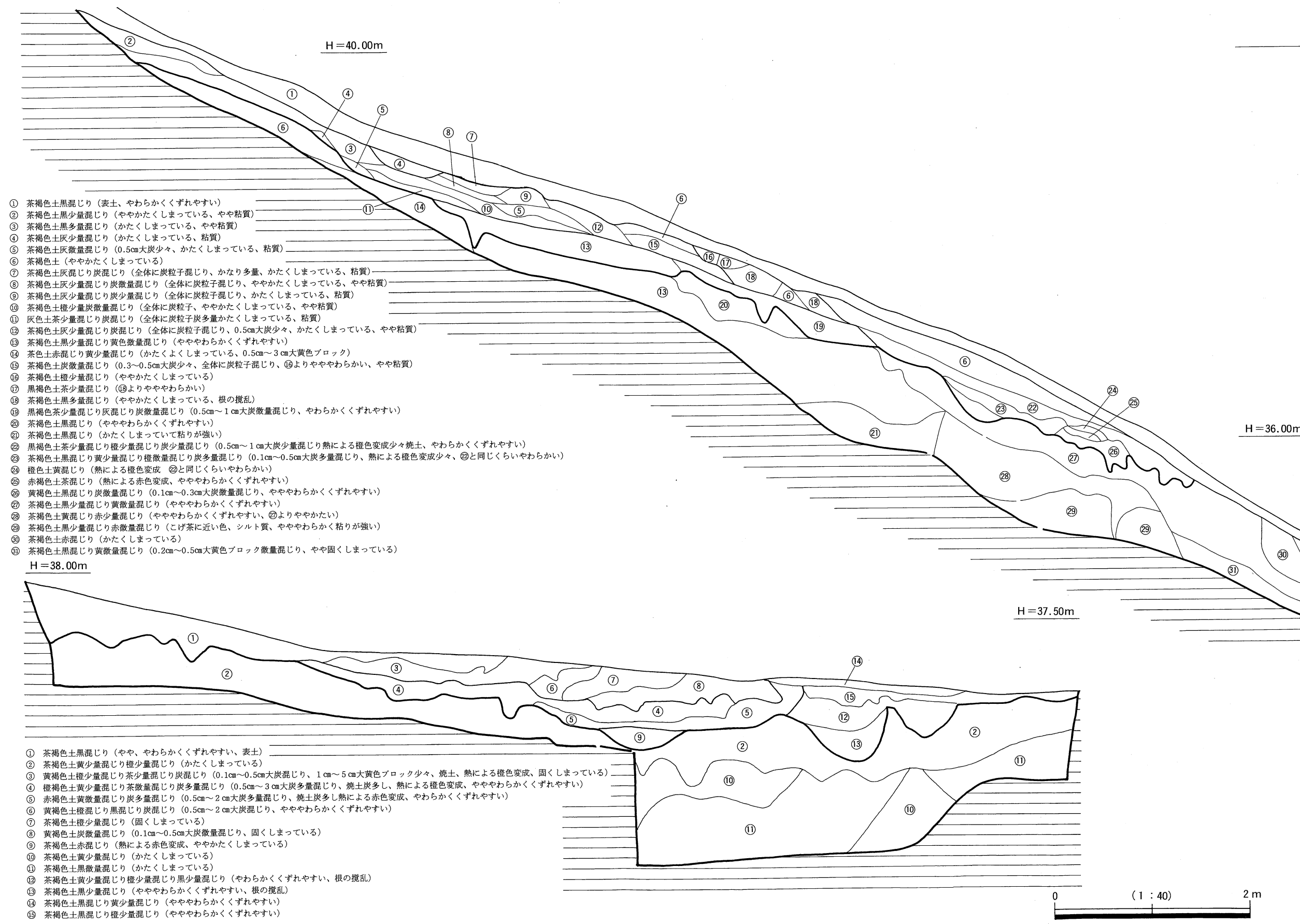
硬土
 やや硬土
 やや軟土
 軟土



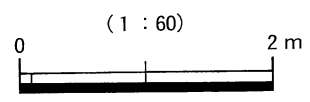
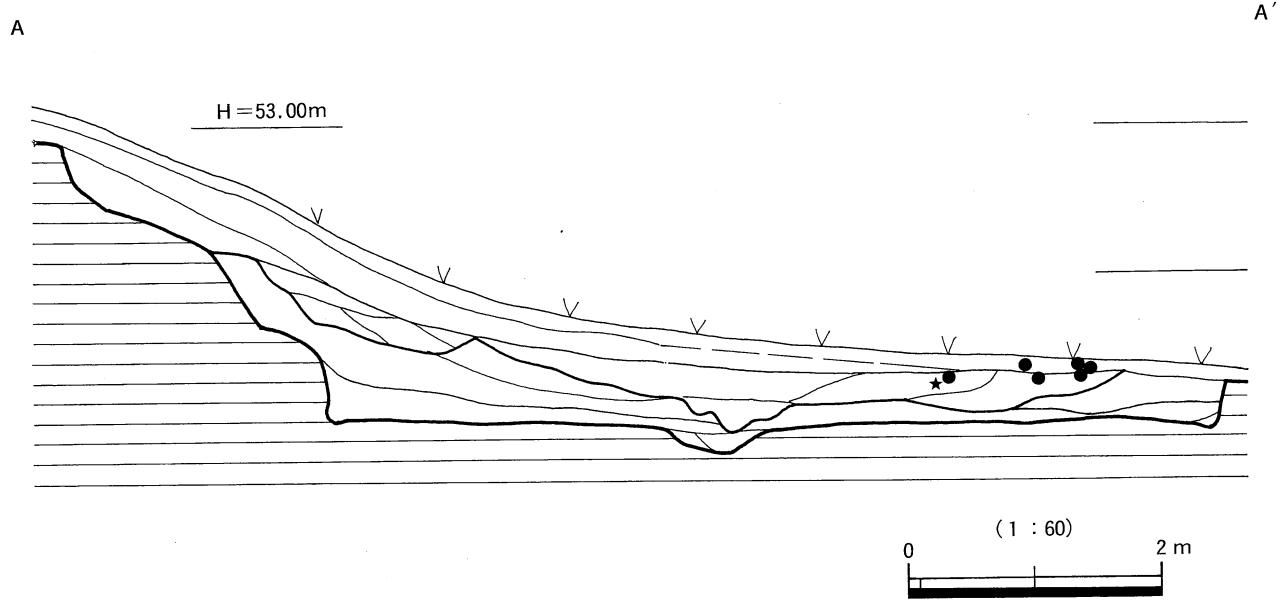
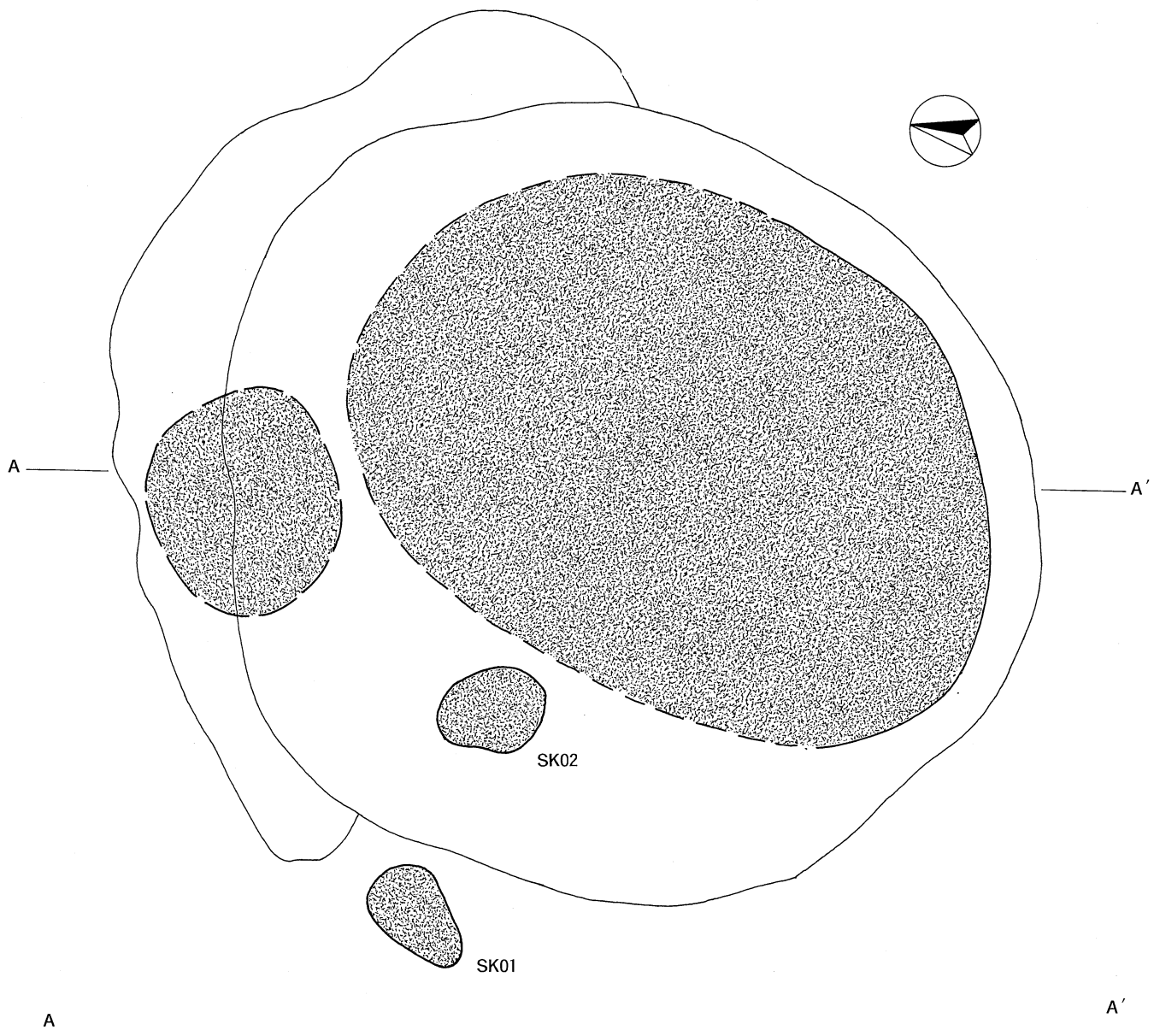
(1 : 80)



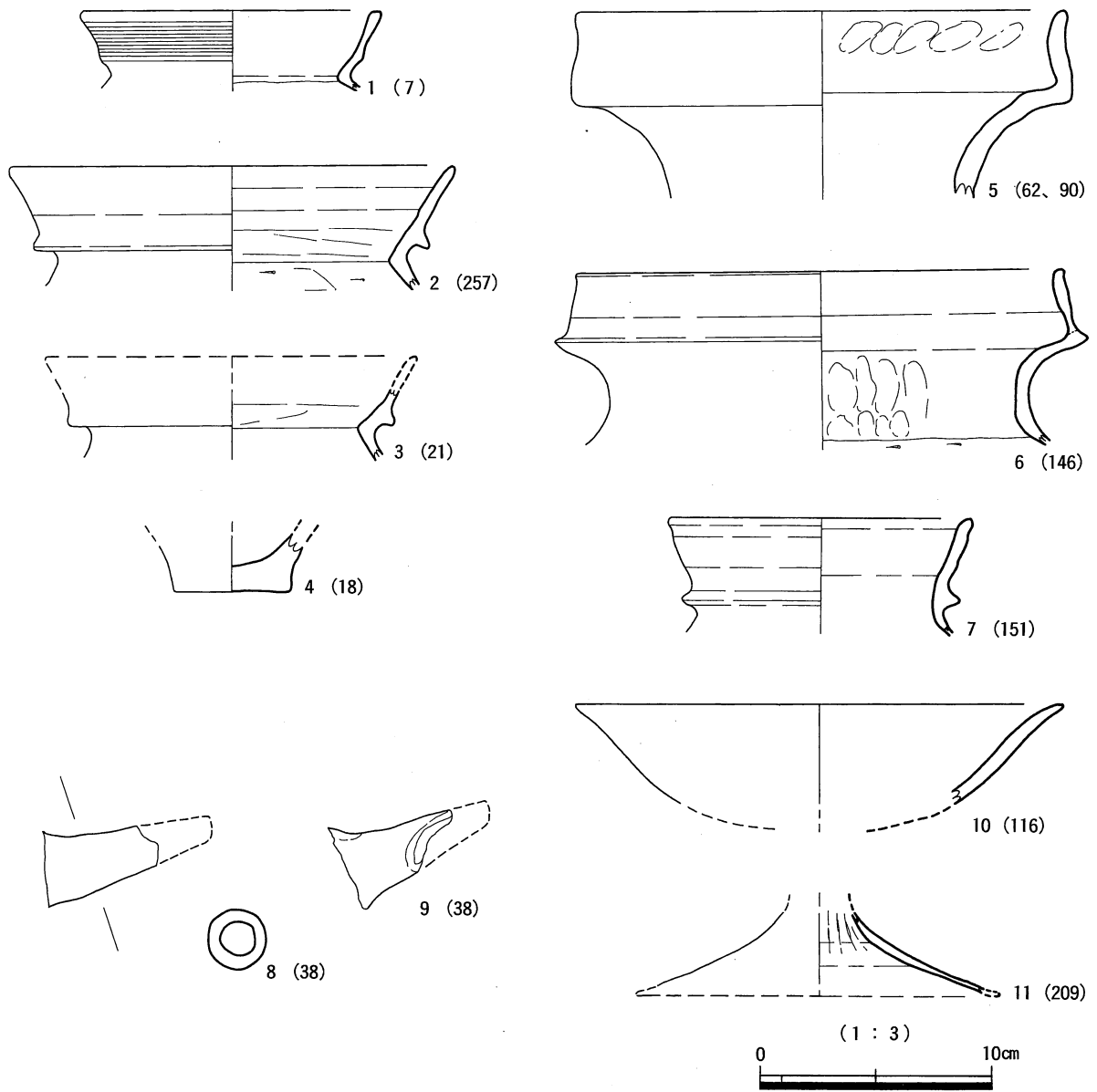
挿図12 陰田夜坂谷遺跡 2区炭溜1炭・焼土分布図状況図



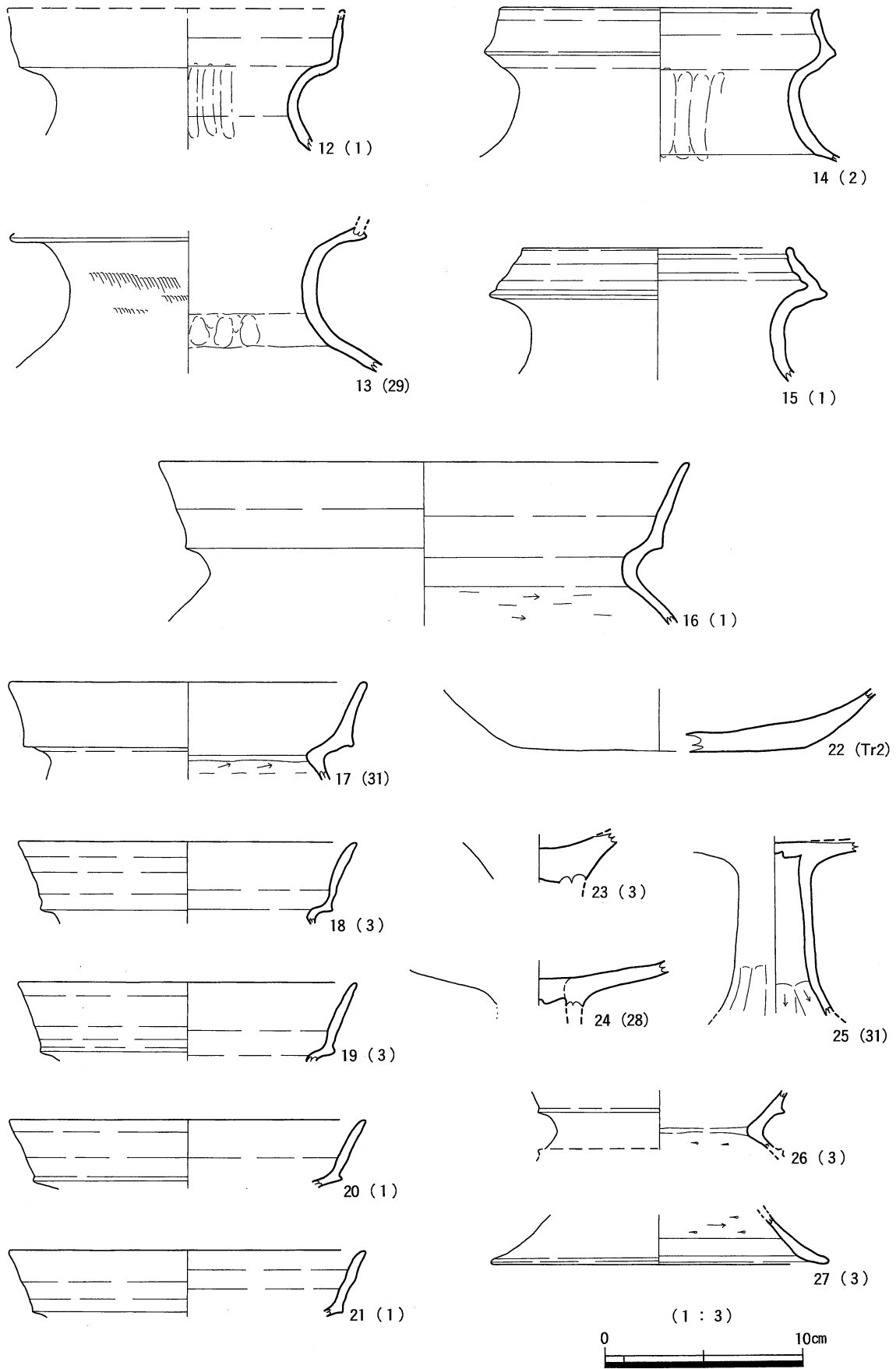
挿図13 陰田夜坂谷遺跡 2区炭溜1土層図



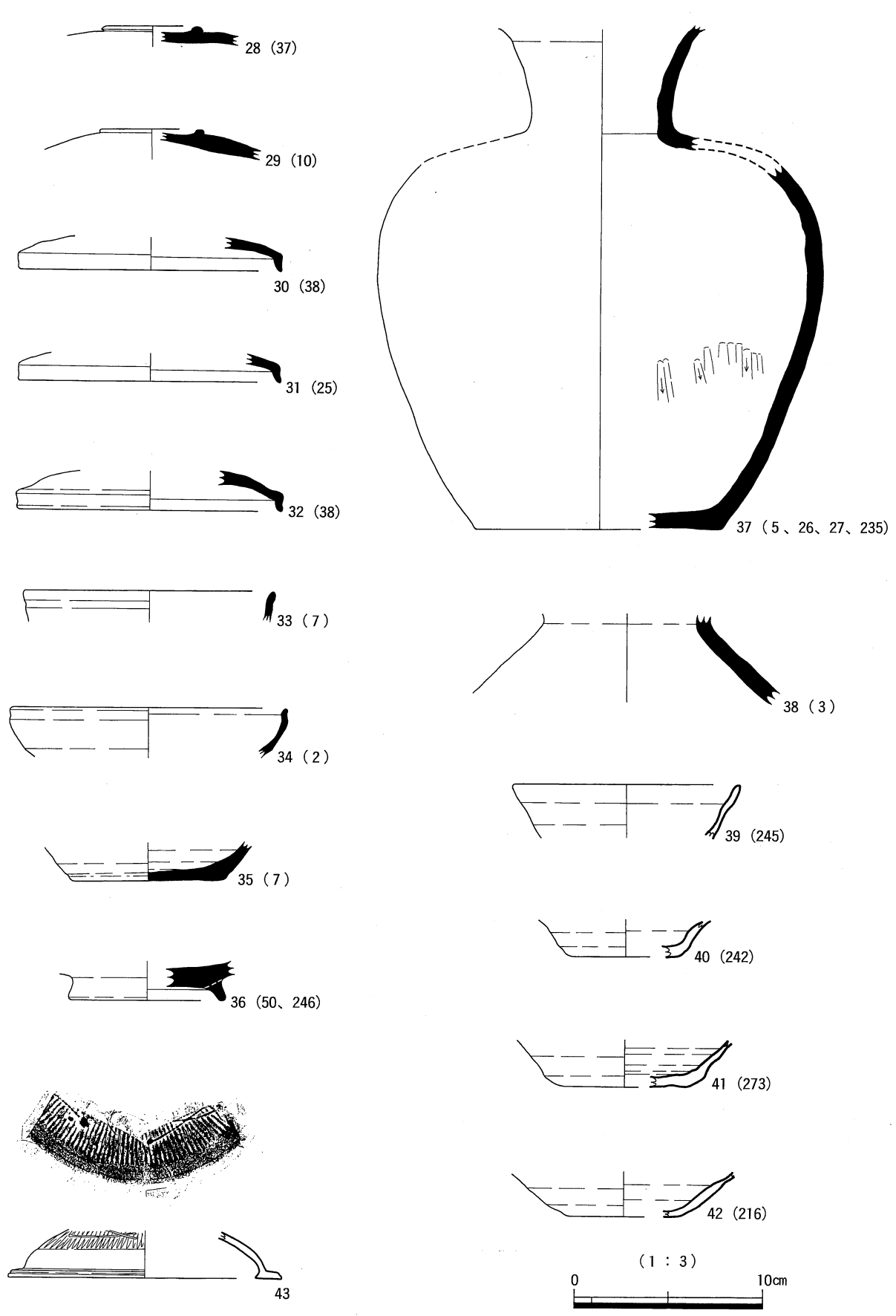
挿図14 陰田夜坂谷遺跡 3区炭溜2遺構図



挿図15 陰田夜坂谷遺跡 出土遺物 (1)



挿図16 陰田夜坂谷遺跡 出土遺物 (2)



挿図17 陰田夜坂谷遺跡 出土遺物 (3)

2 陰田ハタケ谷遺跡

陰田ハタケ谷遺跡は標高45～55mの北と南の尾根にはさまれた谷部東斜面と、谷に派生した小支尾根上にあり、標高30～45mのあたりに遺構が分布する。トレンチによって遺跡が確認された部分を拡張し、北から南へC区、B区、A区、D区、E区として調査した。C区は、平成2年に調査した陰田隠れが谷遺跡に含まれるものと判断し、陰田隠れが谷遺跡として取り扱うため、ここでは除外した。

陰田ハタケ谷遺跡では段状遺構、炭溜土坑、炭溜、炭窯状遺構、ピット群を検出した。

(1) A区 (挿図20～23 図版3～6)

調査区は標高27～47mの範囲で、ほとんどが急斜面で遺構を確認できたのは、頂部と小尾根裾部のみであった。頂部では段状遺構、炭溜、ピット群を検出した。表土～3層には、炭、焼土片がみられ、3層下部で遺構を確認した。

段状遺構 (挿図22)

A区西側の標高46mの小尾根斜面に段状にやや傾斜の緩い面があり、南北に3本の段状溝が検出され、南北15mの小テラス状をなしており段状遺構と判断された。溝は北からSD01・02・03と南北に位置する。流土により柱穴、遺物はほとんど検出されなかった。

SD01 南北3m、幅70cm、深さ15cm内外のL字状の溝で、推定南北7mを測る。

SD02 北側をSD01に切られており、南北6m、幅60cm、深さ10cm内外のL字状の溝で、山側は50cm高の段状となる。

SD03 南北5.5m、東西2m、幅60cm、深さ10cm内外のL字状の溝で山側は50cm高の段状となる。

炭溜 (挿図23 図版4～6)

焼土、炭が集中する箇所が3カ所検出され、段状遺構の下部斜面裾部を炭溜1、上部斜面北を炭溜2、上部斜面南を炭溜3とした。

遺物は斜面部からはあまり出土せず、裾部の炭溜りに流れ落ちたようである。時期は、出土の須恵器坏から古墳時代末～奈良時代にかけてと考えられる。

炭溜1 (図版4) 7m×6mの不整形の範囲に焼土、炭が広がり、下部は深さ10～20cmの浅い皿状の数個の土坑状となる。床面は焼けておらず、ここでの火の使用は考えにくい。数個の柱穴が確認されており、簡易な施設があった可能性も考えられる。

炭溜2 (図版5) 7m×4mの不整形の範囲に焼土、炭の広がりが検出された。

炭溜3 (挿図23 図版6) 7m×6mの不整形の範囲に焼土、炭の広がりが検出された。

ピット群

斜面中央部に70個余のピットが確認されており、建物遺構等のような規則的な配列が確認されないため、ピット群とした。時期、性格は不明である。

(2) B区 (挿図24～26 図版7)

A区北の標高40～46mの北西斜面に炭窯状遺構1基とピット群が検出された。表土下層の炭片を多く混入する黒褐色土の下部で確認された。上部に黄色粘土が覆い、下部に炭混入土があることと形態から炭窯状遺構と判断した。

炭窯状遺構 (挿図24 図版7)

何回かの炭焼きに使用され掘りなおされたものと考えられ、床面が二段で凹凸が激しい。規模は、幅9.3m、奥行き6.4mの平面袋状を呈する。北西側の床面の低い部分は山側で壁高20cm、北東の高い部分で壁高30cmを測る。北東部の床面では、棒状の木炭が残存していたが、他は、埋土に大小の炭片が多数混入していた。北東部床面の一部には、堅く焼け締まった焼土面も確認された。遺構の北側には、灰層も確認された。以上のことからこの遺構は、伏せ焼きした炭窯と考えられ、遺構状況から3回程度操業したものと考えられる。遺物は少なく、内部と周辺から数点検出された。

操業時期は、古墳時代末～奈良時代にかけてと考えられる。

ピット群 (挿図24)

炭窯状遺構の周辺に19個のピットが検出されたが、時期、性格は不明である。

(3) D区 (挿図27 図版3、8、9)

A区南の東斜面で、標高41～47mのあたりに2カ所の炭溜りと49個のピットを検出した。北側を炭溜4、南側を炭溜5とした。

炭溜4 (図版8)

10m×6mの不整形の範囲に焼土、炭がしみのように広がり、斜面に沿って流れたように溜まっていた。遺物はわずかで須恵器坏、壺片が検出された。

炭溜5 (図版9)

10m×7mの不整形の範囲に灰、炭が広がり、灰原のようなものと考えられる。

ピット群

ピット1の周辺に19個のピットが検出されたが、時期、性格は不明である。

(4) E区 (挿図27 図版3、9)

A区南の東斜面で、標高39~41mのあたりでD区炭溜5の下部にあり、炭溜り1基を検出した。

炭溜6 (挿図23 図版9)

平面楕円形で、長軸5m、短軸3m、深さは山側の壁高55cm、谷側の壁高7cmを測る。炭、焼土がかたまって出土したが、土坑内での火の使用痕跡は認められなかった。

(5) 出土遺物

弥生土器 (挿図28)

弥生時代後期後葉~後期末の土器が検出されており、A区(1、2)、B区(3)、E区(4~15)からの出土である。後期後葉のものは、1、3の甕片と11の器台である。他は後期末で甕(4~9)、壺(10)、器台(12~15)がみられる。

須恵器 (挿図29~32)

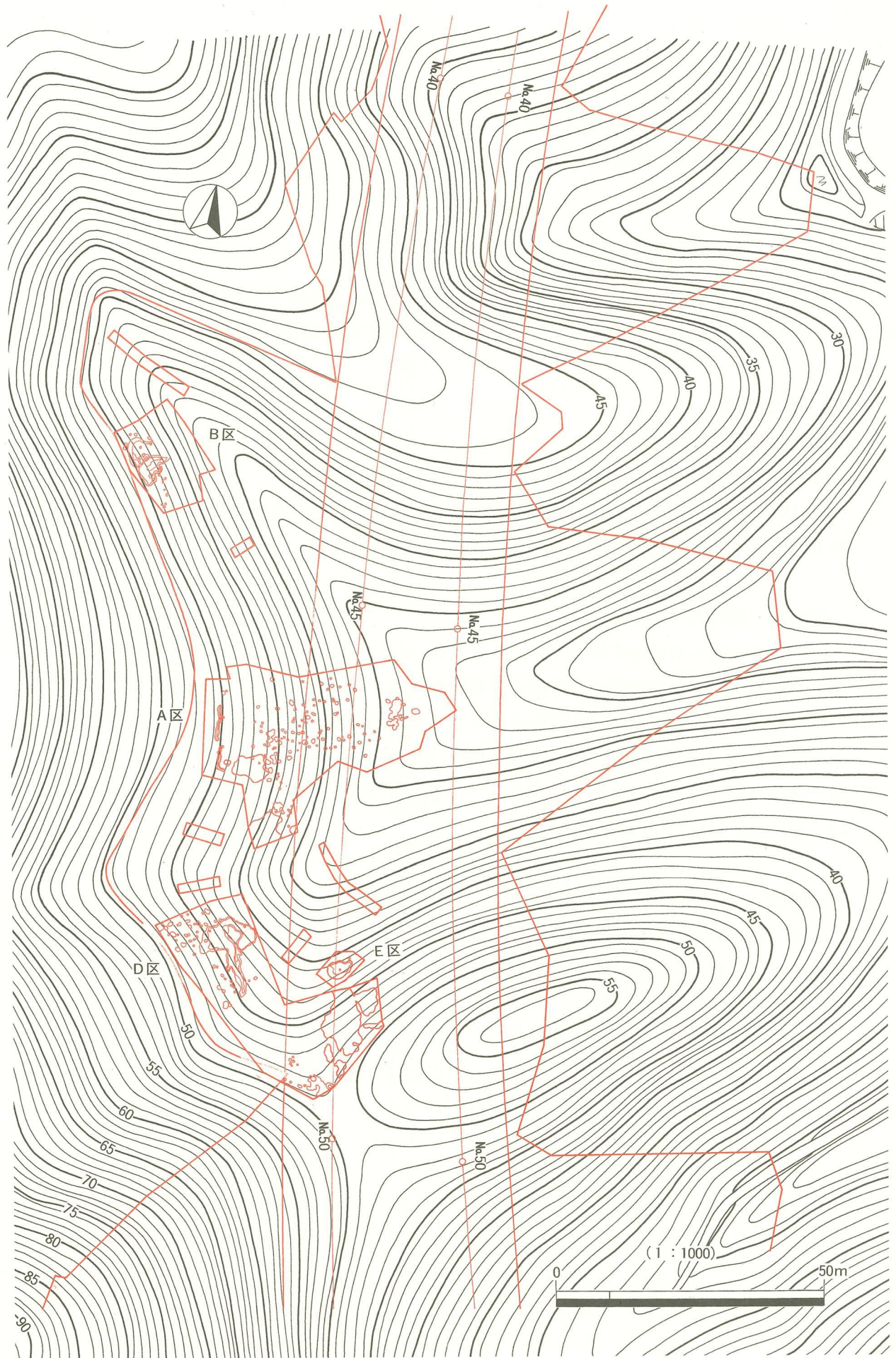
古墳時代後期~奈良時代のもので、A区(16~41)、B区(42~47)、D区(48~50)の出土である。坏蓋16は体部と天井部が不明瞭なもの。17、18は環状つまみで反りのないもの。坏には高台がなく、底部を回転糸切りするもの(22~25)と、高台付きのもので外にふんばるもの(26~29)、直立するもの(30~32)がある。壺、長頸壺(33~39)のうち、35、38は高台付きのものでナデ調整されている。その他に横瓶(40、41、46、47)、甕(42、43、45)、鉢(44)などがみられる。

土師器 (挿図32)

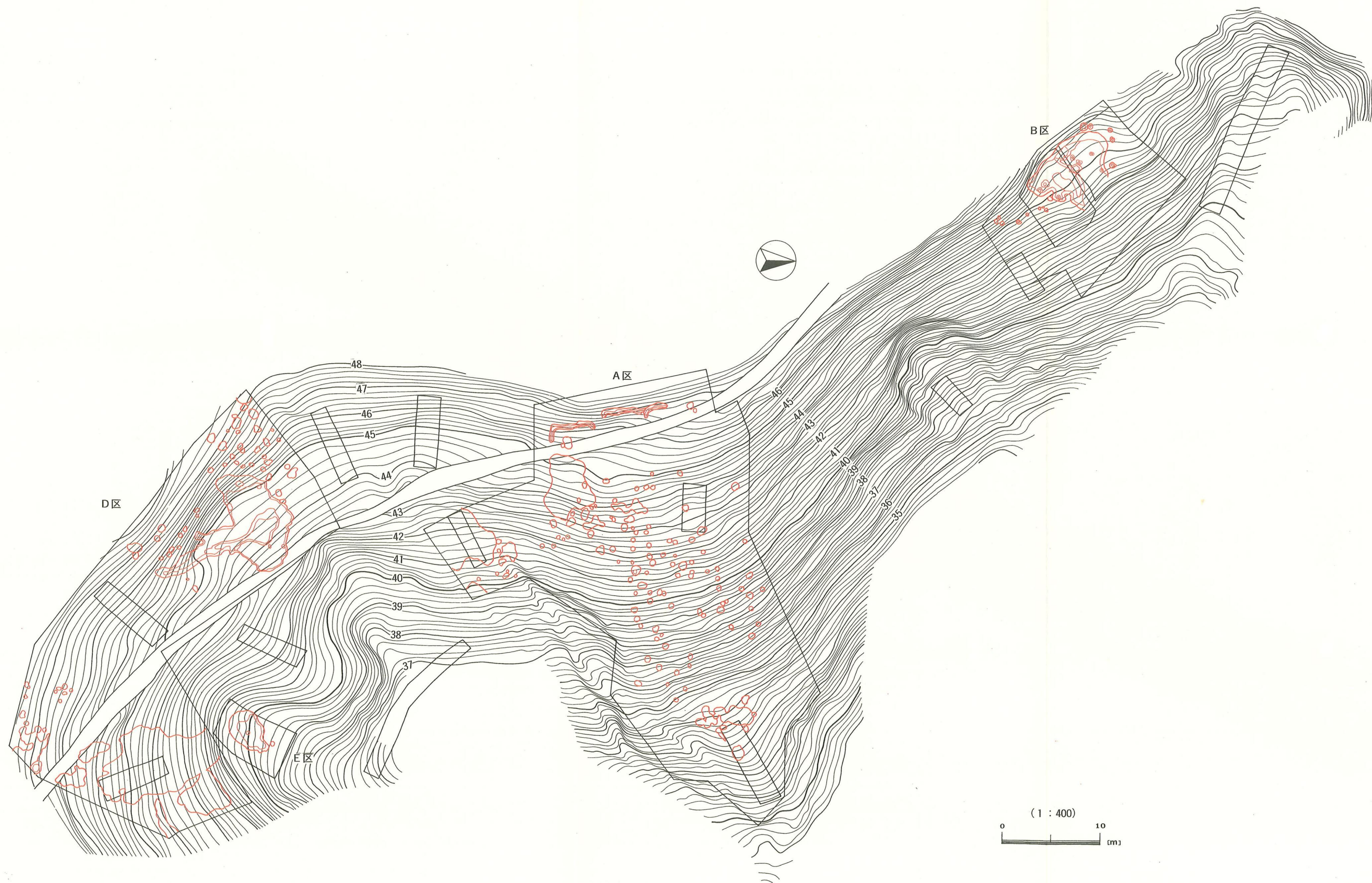
A区(51~54)出土の坏で高台付き皿状で浅いものと思われ、赤塗りである。B区(55)出土の甕は、粗いハケ調整を施し赤塗りである。

鉄器 (挿図32)

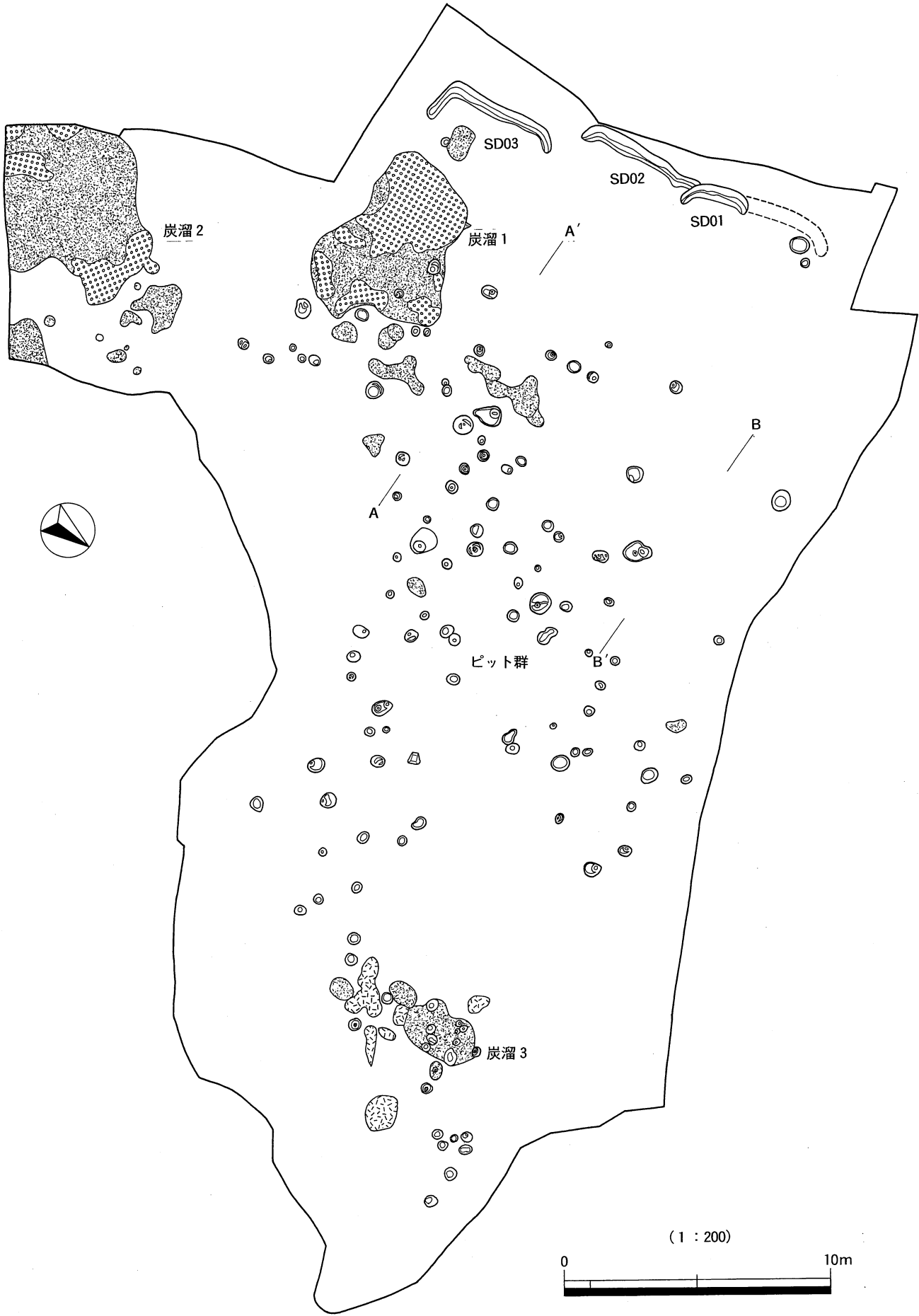
A区から出土の鉄鎚(56)で、円筒形で中央に柄穴があり重さ1.8kgを量る。



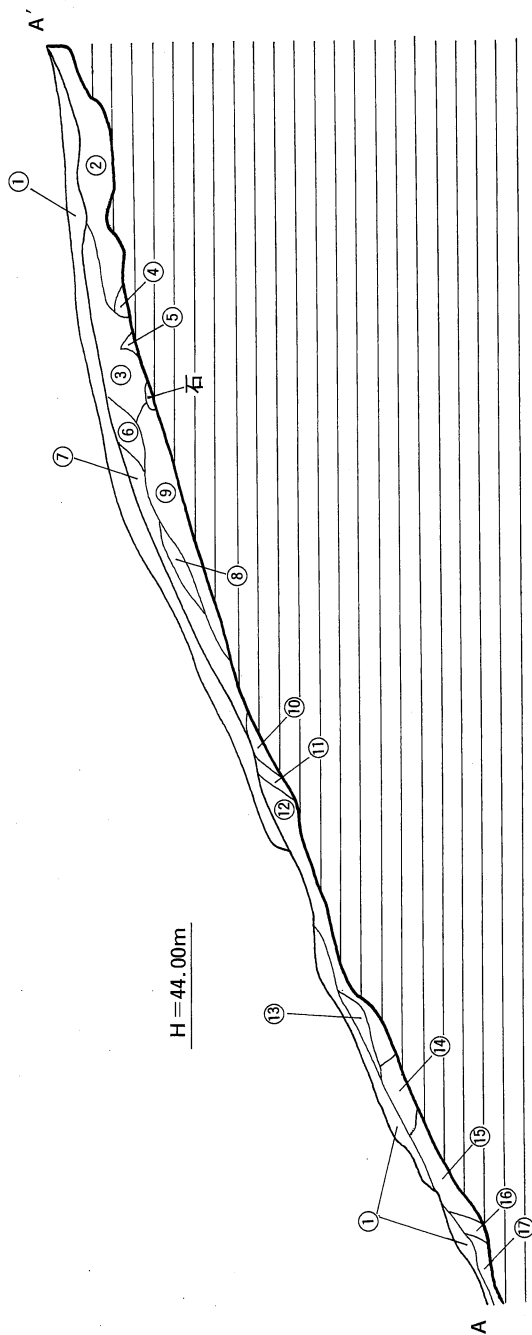
挿図18 陰田ハタケ谷遺跡 調査地全体図



挿図19 陰田ハタケ谷遺跡 調査地配置図



挿図20 陰田ハタケ谷遺跡 A区遺構分布図

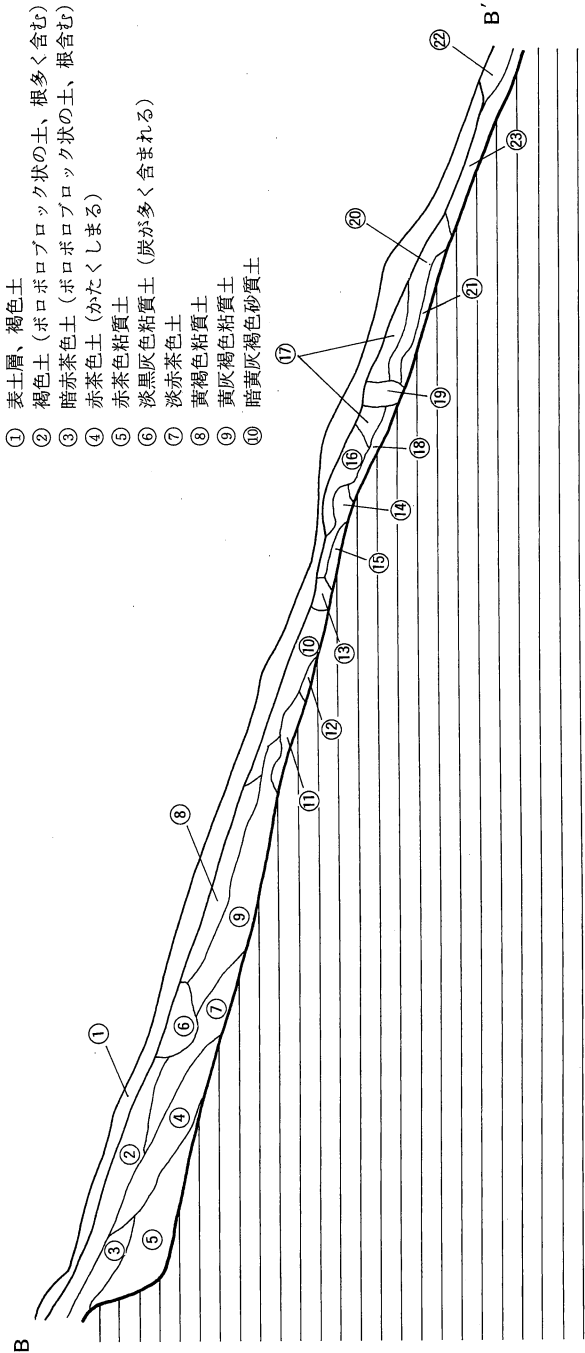


- ① 表土
- ② 暗褐色砂質土 (炭を多く含む)
- ③ 黒褐色砂質土 (炭を多量に含む)
- ④ 赤褐色粘質土
- ⑤ 暗黄褐色粘質土
- ⑥ 褐色砂質土
- ⑦ 黒褐色粘質土 (炭を多量に含む)
- ⑧ 灰褐色粘質土 (炭を多く含む)
- ⑨ 褐色粘質土
- ⑩ 黄灰褐色粘質土
- ⑪ 暗黒褐色砂質土 (炭を多く含む)
- ⑫ 暗褐色粘質土 (炭を多量に含む)
- ⑬ 暗褐色粘質土 (⑫よりも明るい)
- ⑭ 褐色砂質土 (炭を含む)
- ⑮ 明褐色粘質土
- ⑯ 黄色砂質土
- ⑰ 暗黄褐色粘質土 (炭を少し含む)

H=45.00m

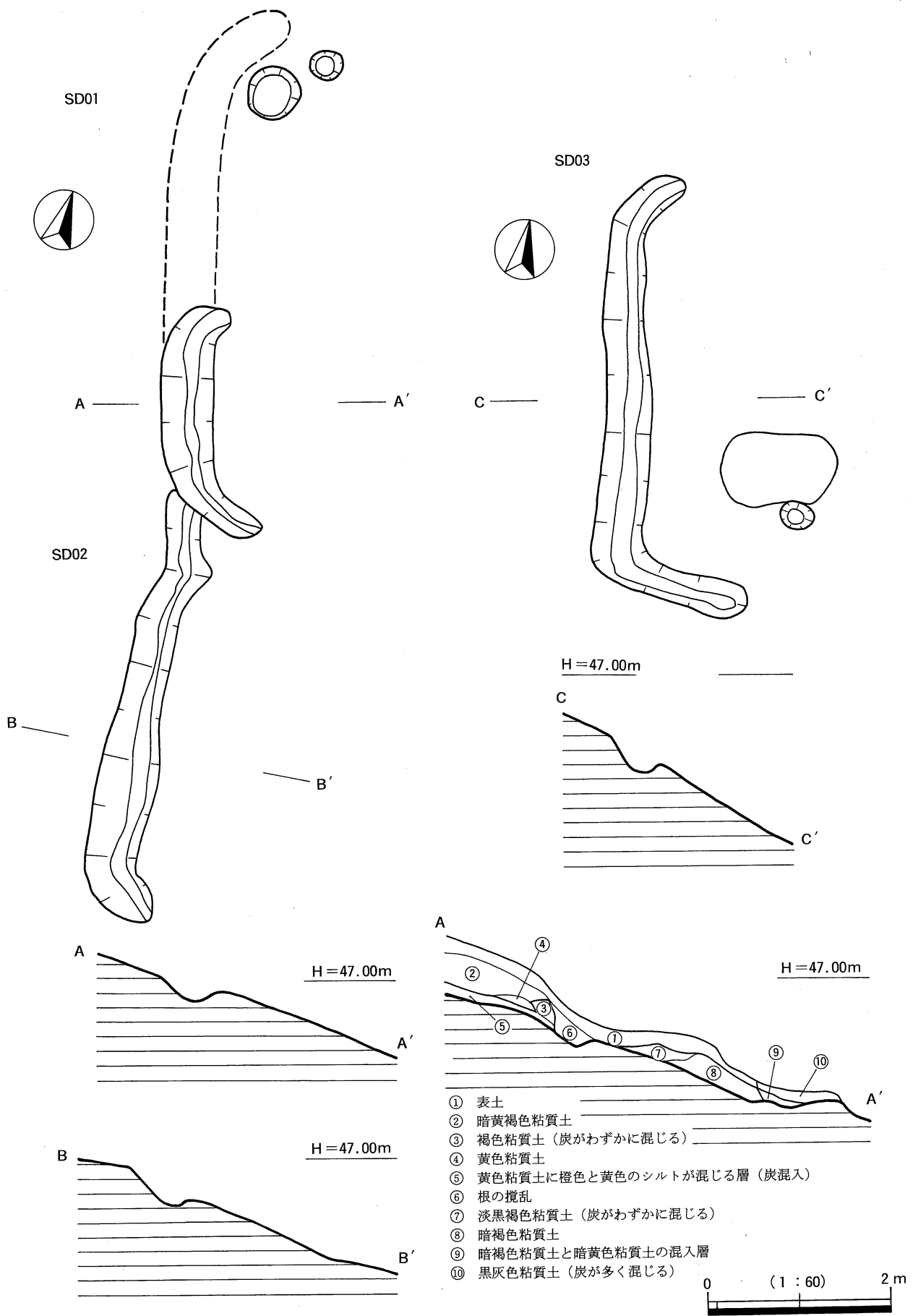
- ① 赤茶色粘質土
- ② 淡茶色粘質土 (炭を含む)
- ③ 淡黒灰色粘質土 (炭を含む)
- ④ 灰褐色粘質土
- ⑤ 赤茶色粘質土
- ⑥ 暗灰褐色粘質土 (炭を多く含む)
- ⑦ 暗黄灰色砂質土
- ⑧ 黄褐色粘質土
- ⑨ 根による攪乱
- ⑩ 暗褐色粘質土
- ⑪ 暗褐色砂質土
- ⑫ 黒灰色粘質土 (炭を多く含む)
- ⑬ 淡赤褐色粘質土

- ① 表土層、褐色土
- ② 褐色土 (ポロポロブロック状の土、根多く含む)
- ③ 暗赤茶色土 (ポロポロブロック状の土、根含む)
- ④ 赤茶色土 (かたしくまる)
- ⑤ 赤茶色粘質土
- ⑥ 淡黒灰色粘質土 (炭が多く含まれる)
- ⑦ 淡赤茶色土
- ⑧ 黄褐色粘質土
- ⑨ 黄灰褐色粘質土
- ⑩ 暗黄灰褐色砂質土



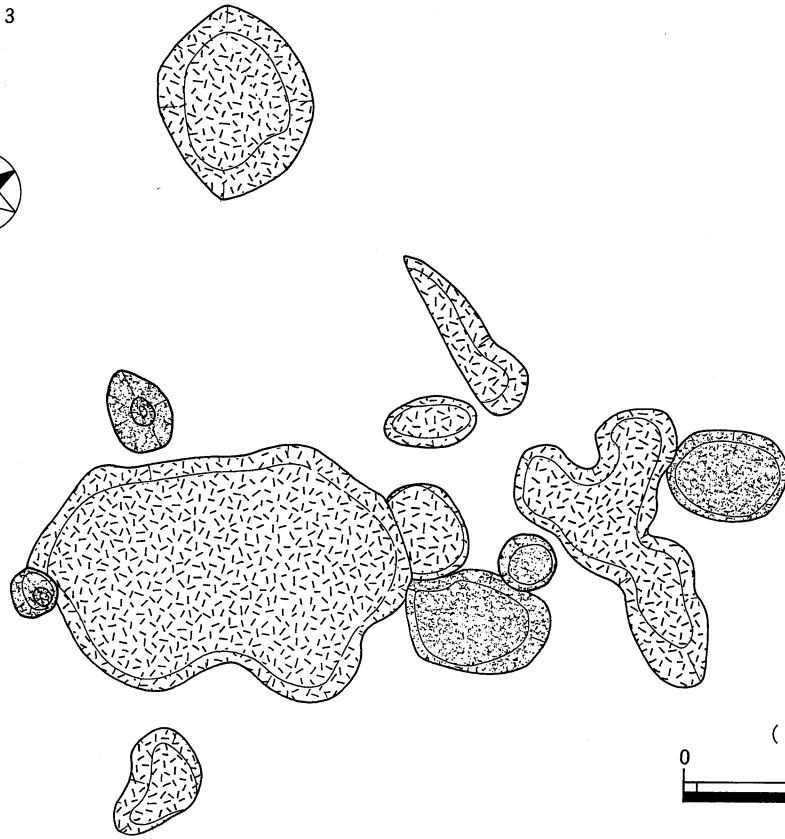
0 (1:60) 2m

挿図21 陰田ハタケ谷遺跡 A区土層図

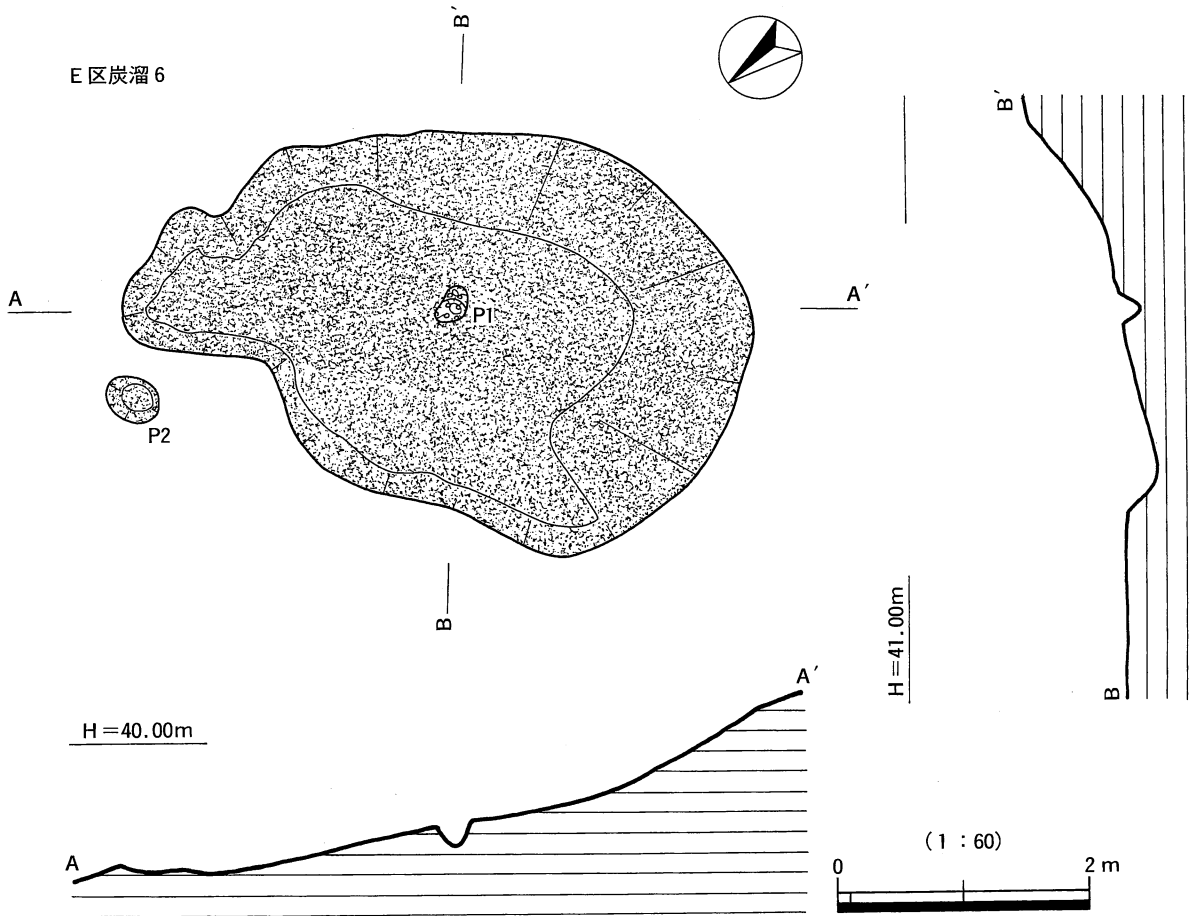


挿図22 陰田ハタケ谷遺跡 A区溝状遺構遺構図

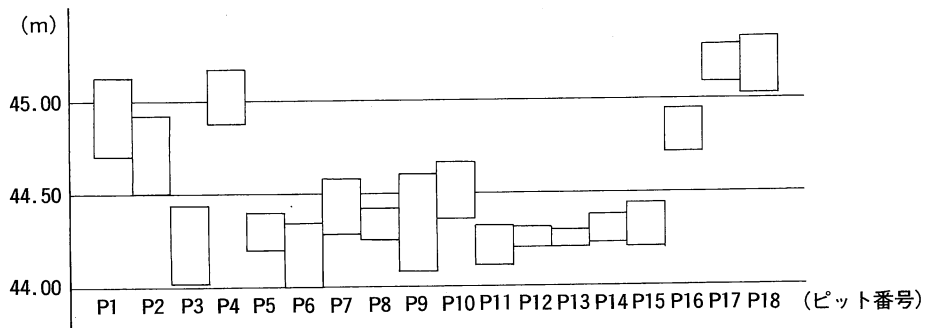
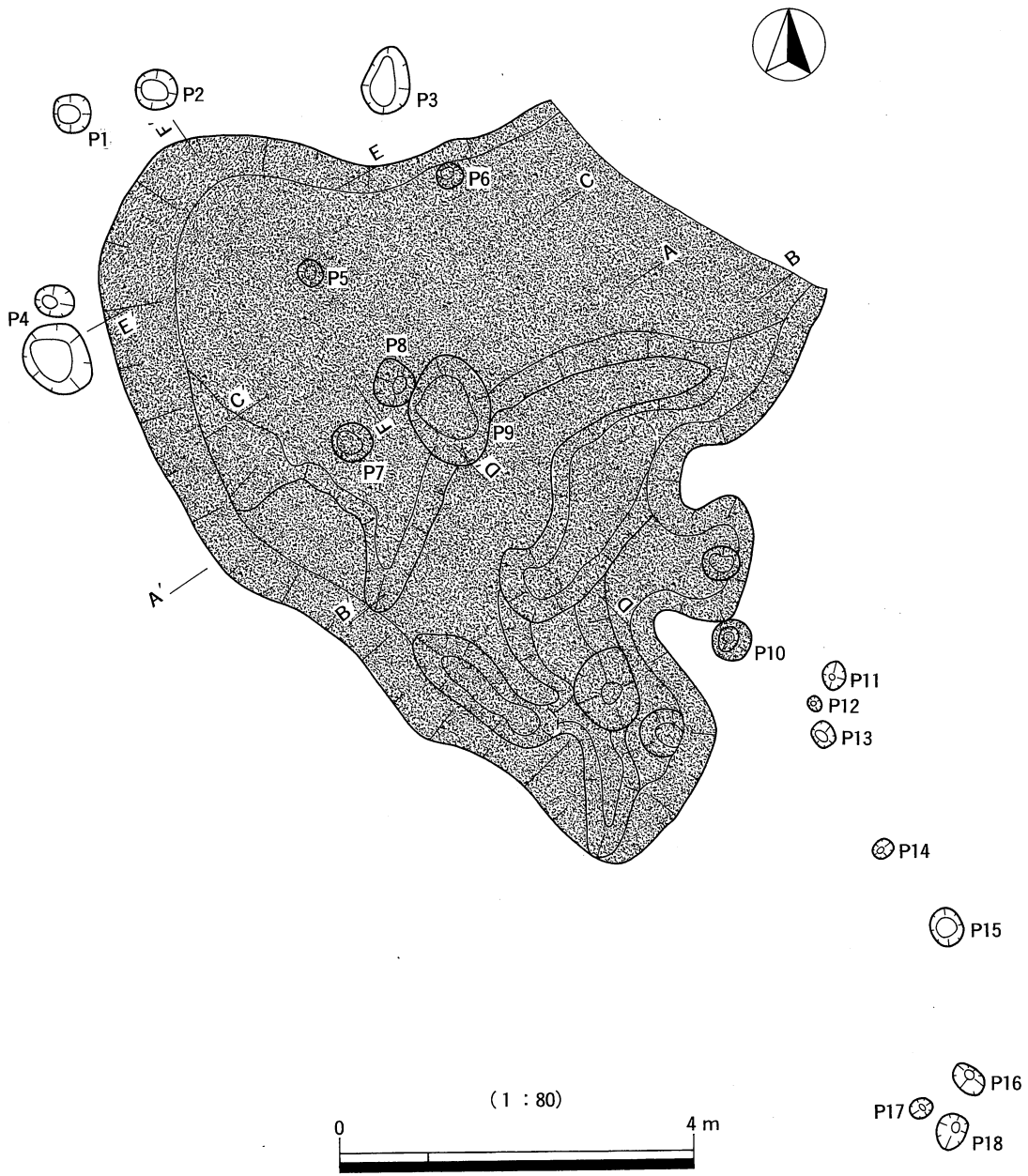
A区炭溜3



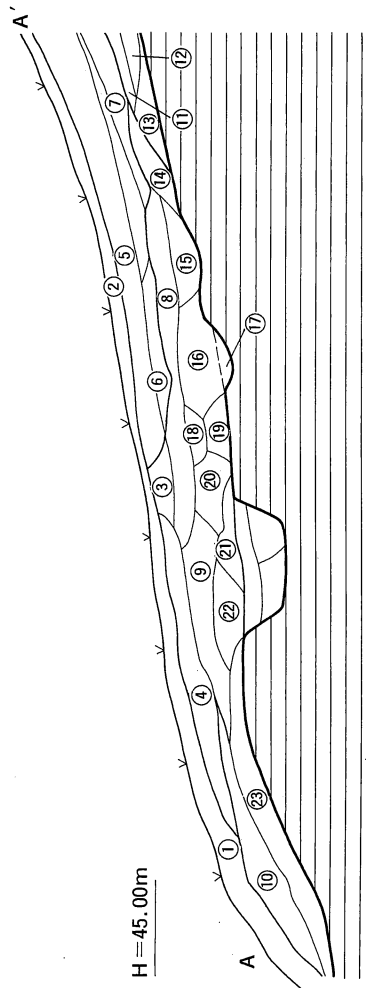
E区炭溜6



挿図23 陰田ハタケ谷遺跡 A区炭溜3・E区炭溜6遺構図

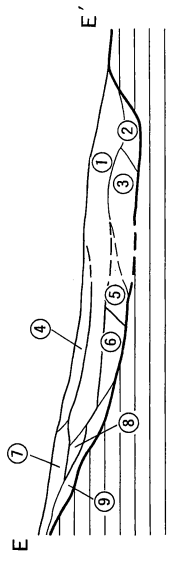


挿図24 陰田ハタケ谷遺跡 B区炭焼窯状遺構遺構図、ピット深度図

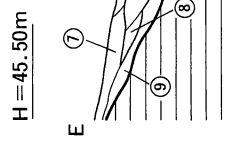


- ① 褐色土 (表土)
- ② 黄褐色土 (黄色、灰色の粘土と細かい礫を含む)
- ③ 暗褐色土及び黒色土 (ややしまる)
- ④ 黒色土 (全体的に炭を含む、根の攪乱多し)
- ⑤ 暗黄褐色土 (かなり粘性に富み粒子が細かい、黄色粘土粒をまだらに含む、石を多く含む)
- ⑥ 灰色及び黒色土混じり (炭、黄色粘土粒を含み粘性に富む、石を多く含む)
- ⑦ 暗灰色土 (黄色粘土粒をまだらに含む、黒色土がまだらに混じる)
- ⑧ 灰黒色土 (⑦より黒い、大きな石や黄色粘土塊や粘土粒を含む、炭の粒を多く含む)
- ⑨ 黒色土 (砂質を含む、炭の粒を多く含む)
- ⑩ 暗黄褐色土 (砂質を多く含む)
- ⑪ 暗褐色土 (黄色粘土粒を多く含む)
- ⑫ 暗灰色土 (炭を含む)
- ⑬ 黄灰色土 (炭を含む、ガラ石を含む)
- ⑭ 黒灰色土 (炭を含む)
- ⑮ 黒淡灰色土 (炭を含む)
- ⑯ 黒淡灰色土 (炭、⑮よりややしまる)
- ⑰ 暗灰色土
- ⑱ 暗灰色土 (炭を含む)
- ⑲ 暗灰色土 (黄灰色を含む、砂質、炭、礫を含む)
- ⑳ 黒淡灰色土 (ガラ礫を含む (炭))
- ㉑ 暗黄褐色土 (炭、くずれやすい)
- ㉒ 黒色土 (⑨より粒子大きく礫少々含む)
- ㉓ 黄灰色土 (礫を含む)

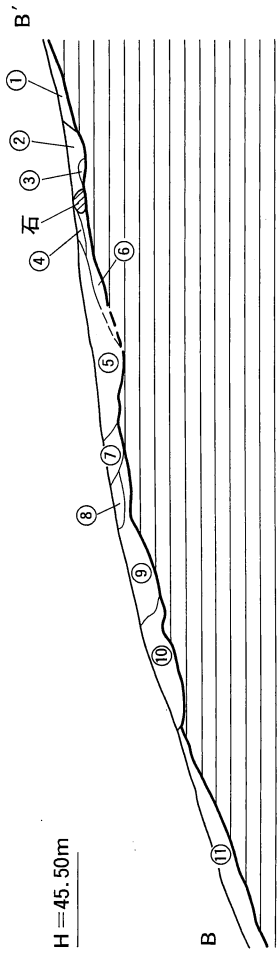
補図25 跡田ハタケ谷遺跡 B区炭焼葉状遺構土層図



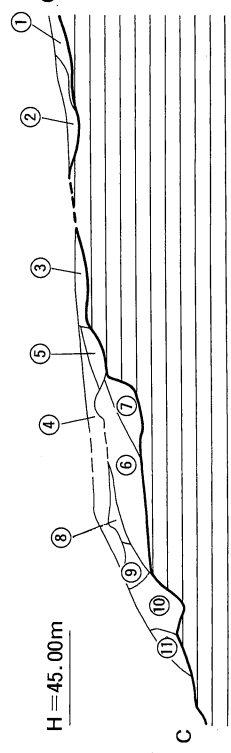
- ① 暗灰黄色土 (炭混)
- ② 灰黄色土
- ③ 黒色土 (④と同じ、やや薄い)
- ④ 黒色土 (炭混、真黒)
- ⑤ 赤褐色のかかった黒色土
- ⑥ 暗灰黄色土 (炭片多い)
- ⑦ 暗灰黄色土
- ⑧ 黒灰黄色土 (炭混)
- ⑨ 暗黄色土 (少量の炭あり)
- ⑩ 黄灰褐色土



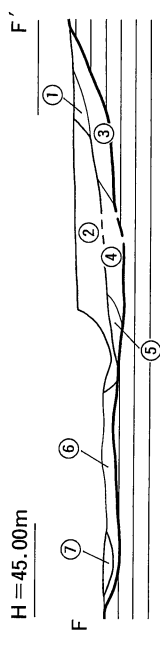
- ① 黒色土 (炭と赤い礫を含む)
- ② 暗灰黄色土 (炭少量含む)
- ③ 焼土 (炭、赤い土を含む、粘性強)
- ④ 灰褐色土 (黄褐色の礫を含む)
- ⑤ 暗灰黄色土 (炭混、黄色と赤の礫混)
- ⑥ 暗灰褐色土
- ⑦ 黄灰褐色土 (黄褐色の礫を含む)
- ⑧ 暗灰黄色土 (炭混)
- ⑨ 灰褐色土 (粘性弱)



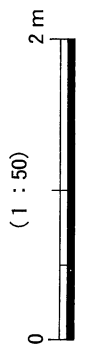
- ① 黄色土
- ② 灰黄色土
- ③ 暗灰黄色土
- ④ 黒色土 (炭混、色がやや薄い)
- ⑤ 黒色土 (炭混、黄色の礫少し混入)
- ⑥ 黒色土 (炭混、やや色が薄い、黄色の石混じり)
- ⑦ 黒色土 (炭混)
- ⑧ 黒色土 (炭混)
- ⑨ 黒色土 (炭混)
- ⑩ 灰黄褐色土 (炭多し)
- ⑪ 灰黄色土



- ① 黄灰褐色土
- ② 黄灰褐色土 (炭混)
- ③ 黄灰褐色土
- ④ 黒色土 (炭混、やや軟かい)
- ⑤ 灰褐色土 (炭混、やや軟かい)
- ⑥ 黄灰褐色土 (黄色の岩がある)
- ⑦ 灰黄色土 (炭混、やや軟かい)
- ⑧ 黒色土 (炭混、やや軟かい)
- ⑨ 灰褐色土
- ⑩ 黒色土 (炭を多量に含む)
- ⑪ 暗灰褐色土

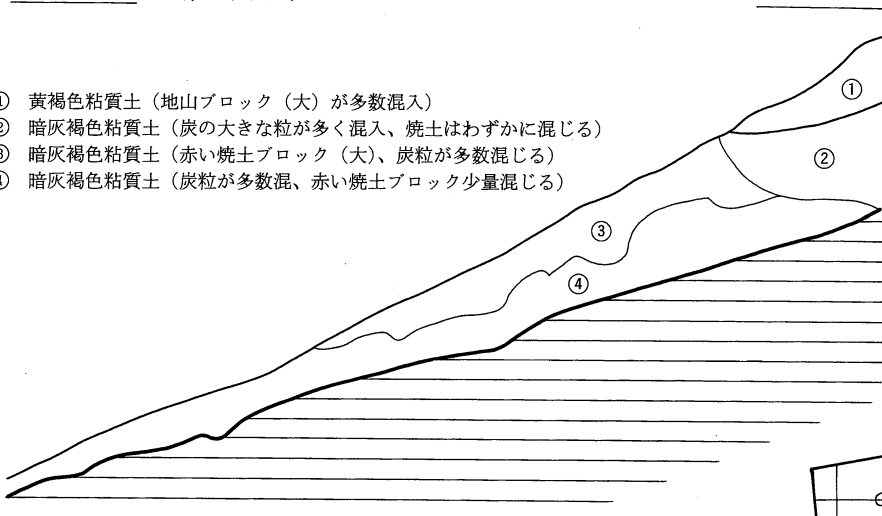


- ① 暗灰黄色土 (石を含む)
- ② 黒色土 (炭を多量に含む、礫あり)
- ③ 灰黄色土 (石を含む)
- ④ 灰黄色土
- ⑤ 暗灰黄色土 (小さい黄、赤の礫含む、やや粘)
- ⑥ 灰黄色土 (やや粒子が細かい)
- ⑦ 黒色土 (炭混、やや色が薄い)



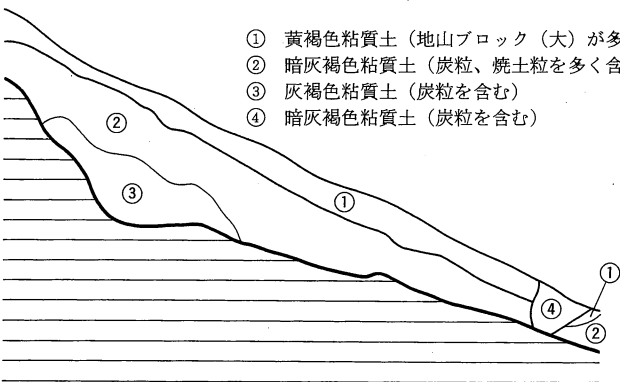
H=44.00m 第2トレンチ

- ① 黄褐色粘質土 (地山ブロック (大) が多数混入)
- ② 暗灰褐色粘質土 (炭の大きな粒が多く混入、焼土はわずかに混じる)
- ③ 暗灰褐色粘質土 (赤い焼土ブロック (大)、炭粒が多数混じる)
- ④ 暗灰褐色粘質土 (炭粒が多数混、赤い焼土ブロック少量混じる)



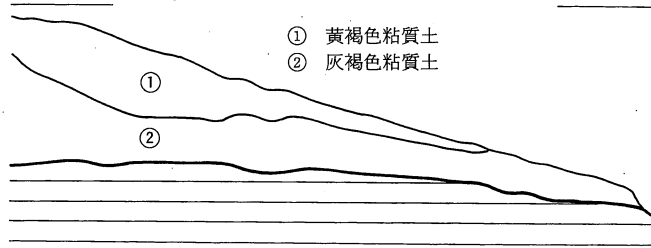
H=44.00m 第4トレンチ

- ① 黄褐色粘質土 (地山ブロック (大) が多く混入)
- ② 暗灰褐色粘質土 (炭粒、焼土粒を多く含む)
- ③ 灰褐色粘質土 (炭粒を含む)
- ④ 暗灰褐色粘質土 (炭粒を含む)

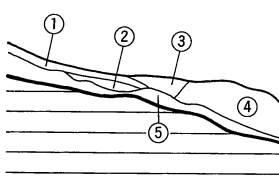


H=44.50m 第3トレンチ

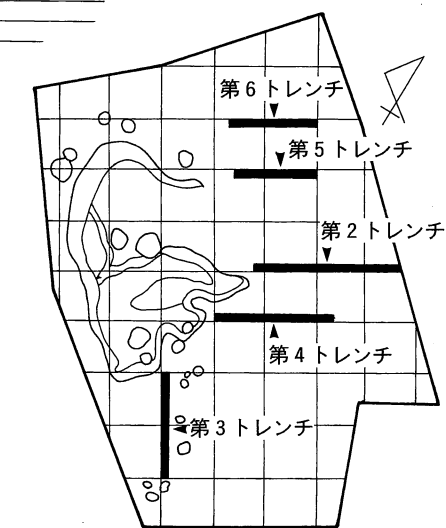
- ① 黄褐色粘質土
- ② 灰褐色粘質土



H=44.00m

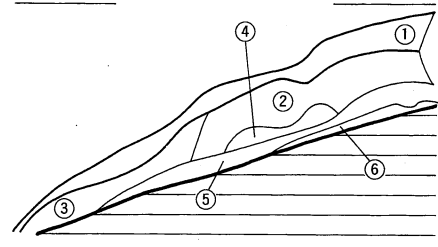


- ① 黒色粘土 (焼土、強く熱を受けてかたくかたまる)
- ② 赤灰色粘質土 (焼土、熱を受け赤変する)
- ③ 黒灰色粘質土 (炭、焼土粒を多く含む)
- ④ 黒褐色粘質土 (炭、焼土粒を多く含む)
- ⑤ 灰色粘質土



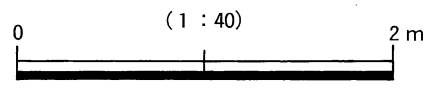
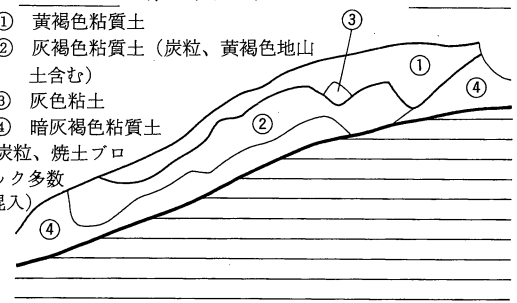
H=44.00m 第5トレンチ

- ① 黄褐色粘質土
- ② 暗黄褐色粘質土 (炭粒を含む)
- ③ 灰褐色粘質土 (炭粒を含む、地山土ブロック)
- ④ 暗黄灰褐色粘質土 (炭混入層、黄色の地山土 (ブロック) が入る)
- ⑤ 暗灰褐色粘質土 (炭混入層)
- ⑥ 黒色粘質土 (炭窯床面)

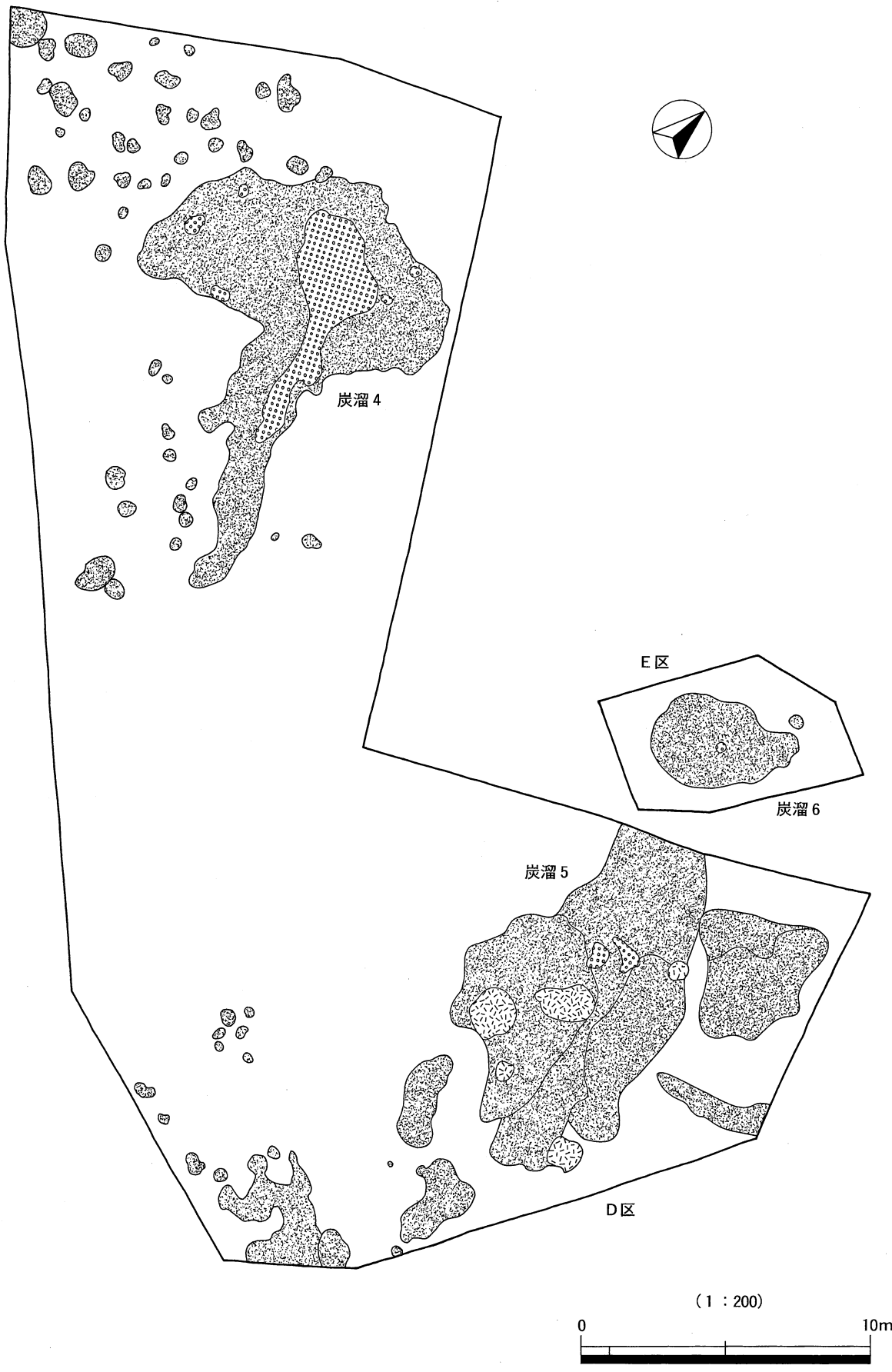


H=44.00m 第6トレンチ

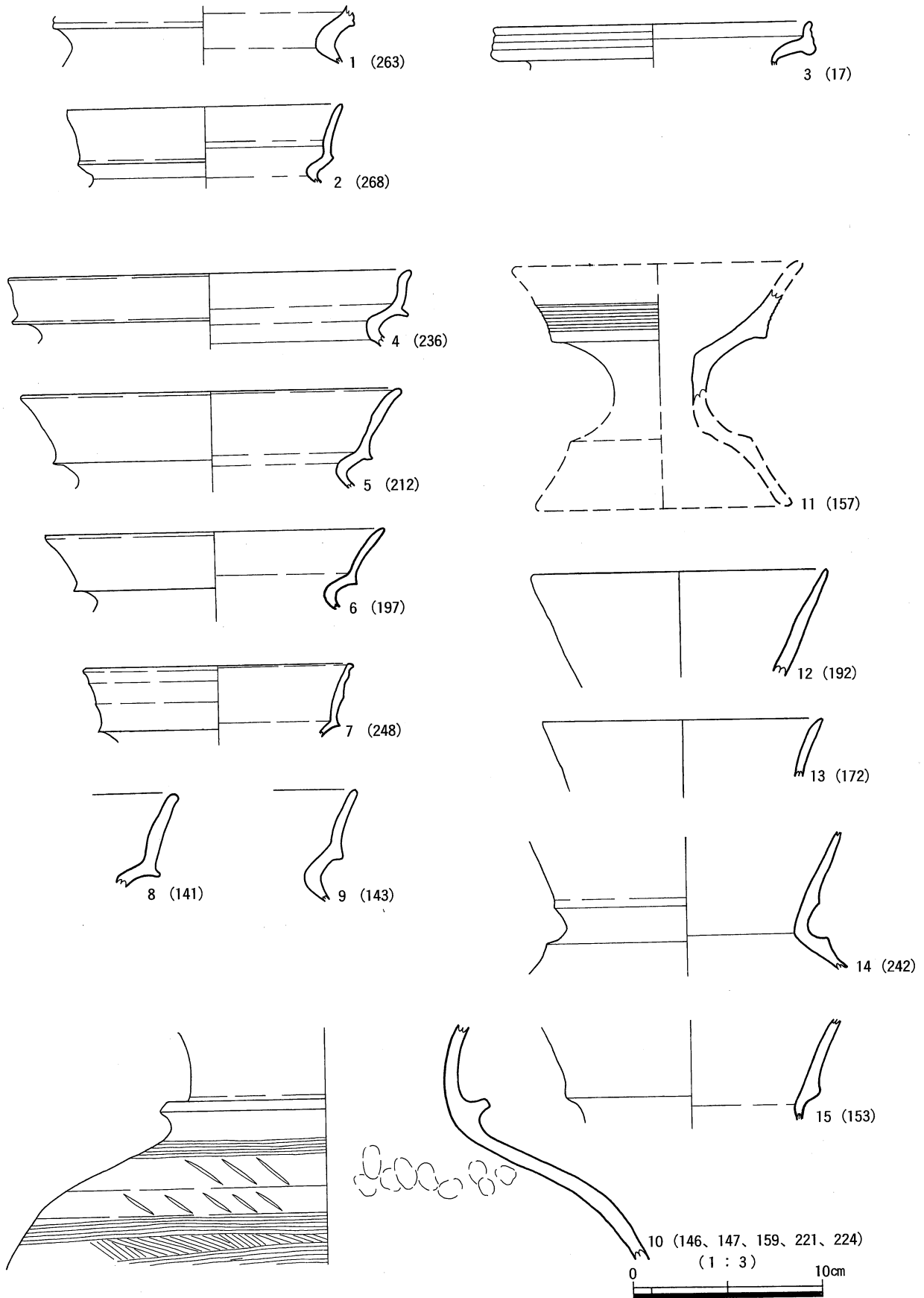
- ① 黄褐色粘質土
- ② 灰褐色粘質土 (炭粒、黄褐色地山土含む)
- ③ 灰色粘土
- ④ 暗灰褐色粘質土 (炭粒、焼土ブロック多数混入)



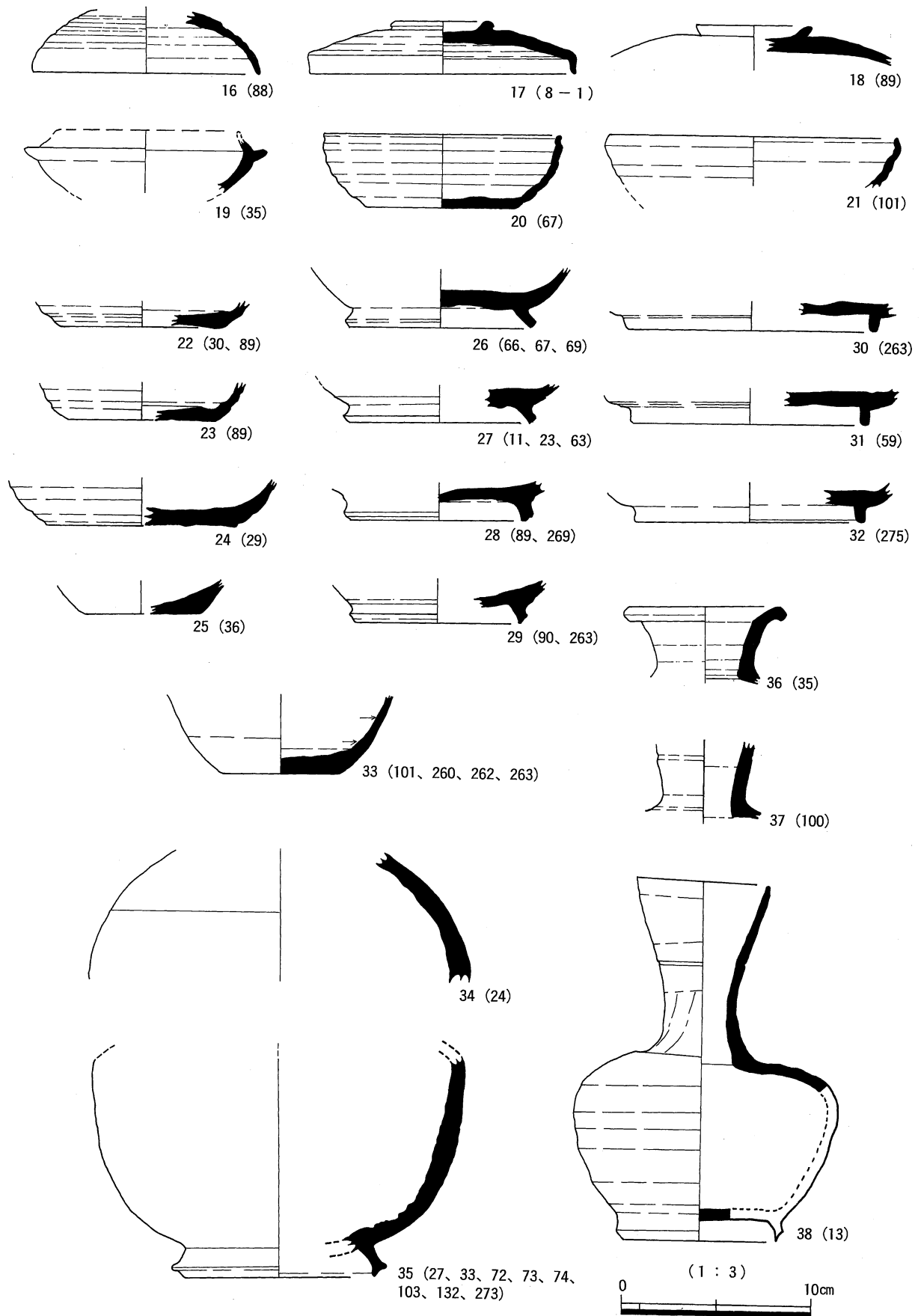
挿図26 陰田ハタケ谷遺跡 B区炭焼窯状遺構下方土層図



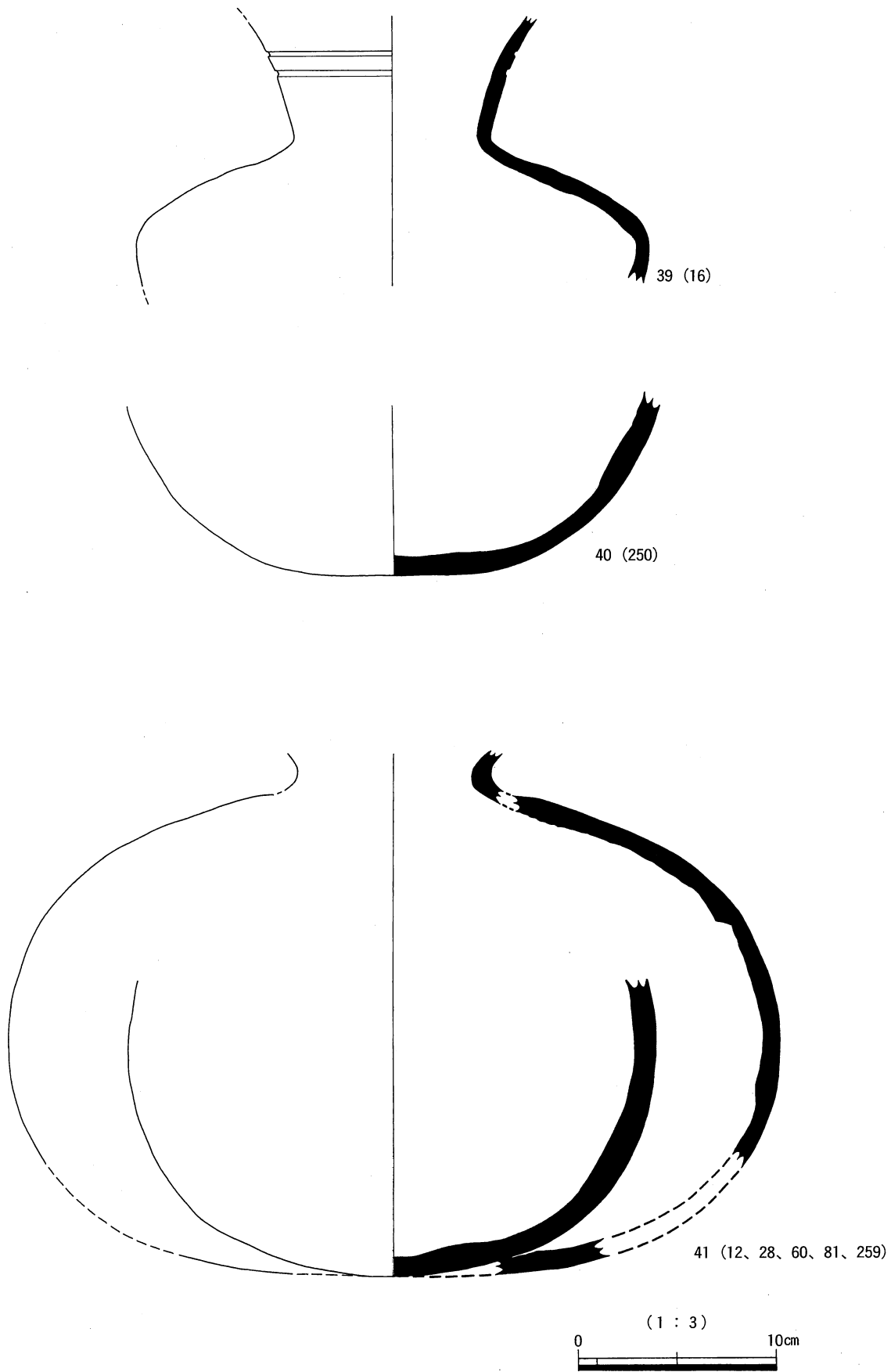
挿図27 陰田ハタケ谷遺跡 D・E区遺構分布図



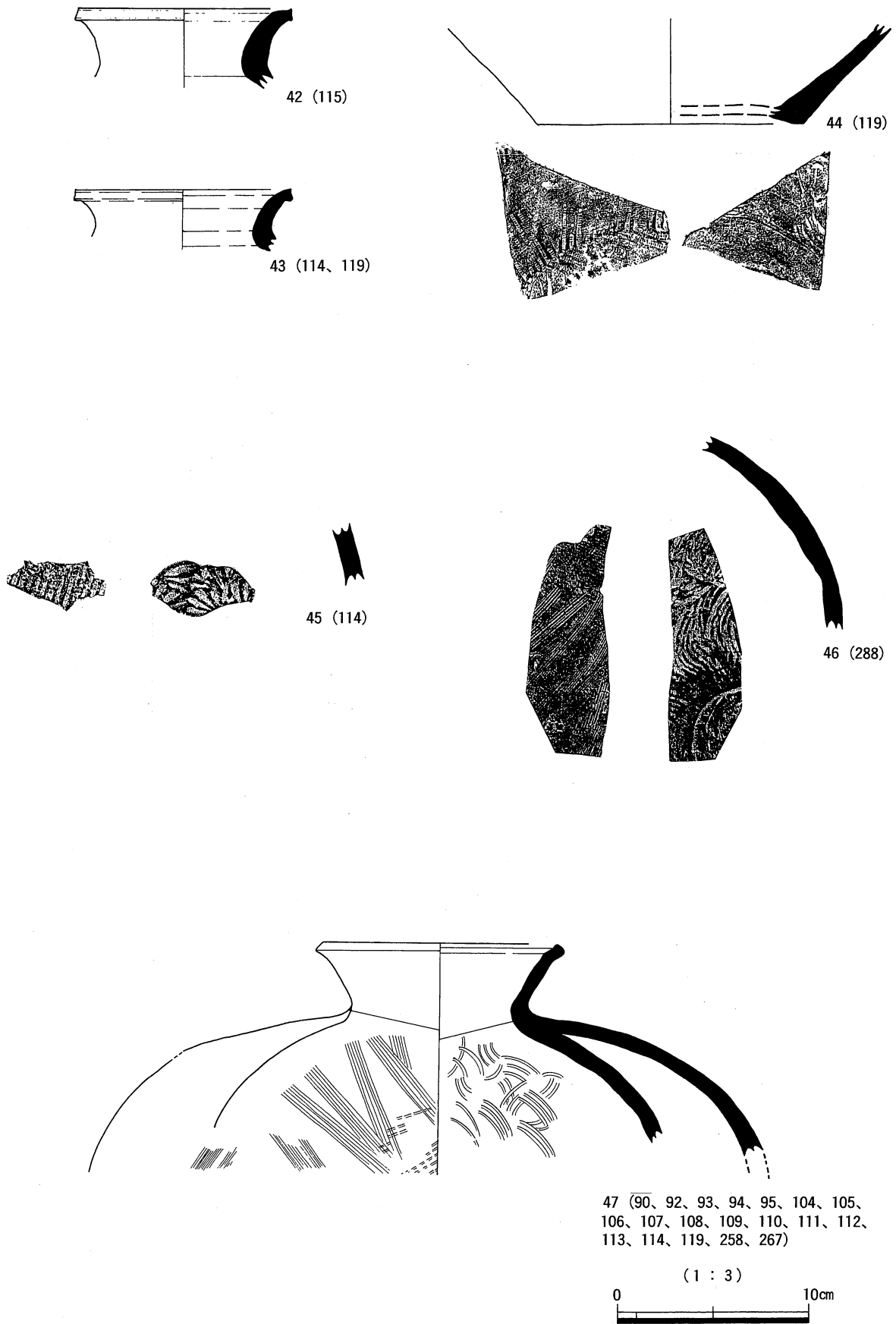
挿図28 陰田ハタケ谷遺跡出土弥生土器・土師器



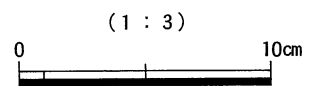
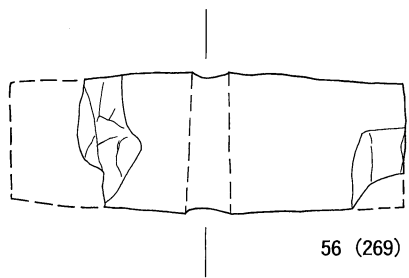
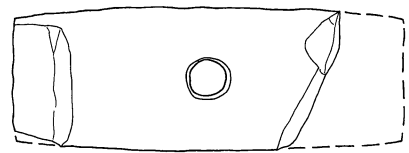
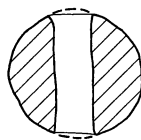
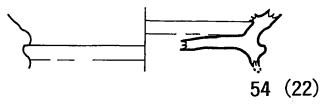
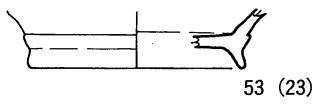
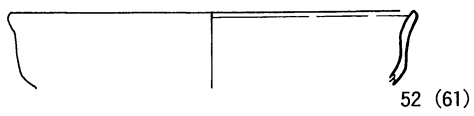
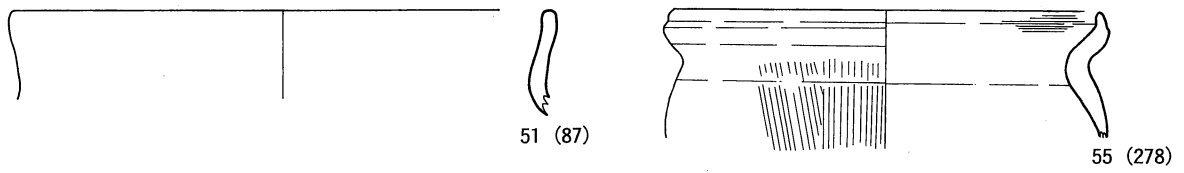
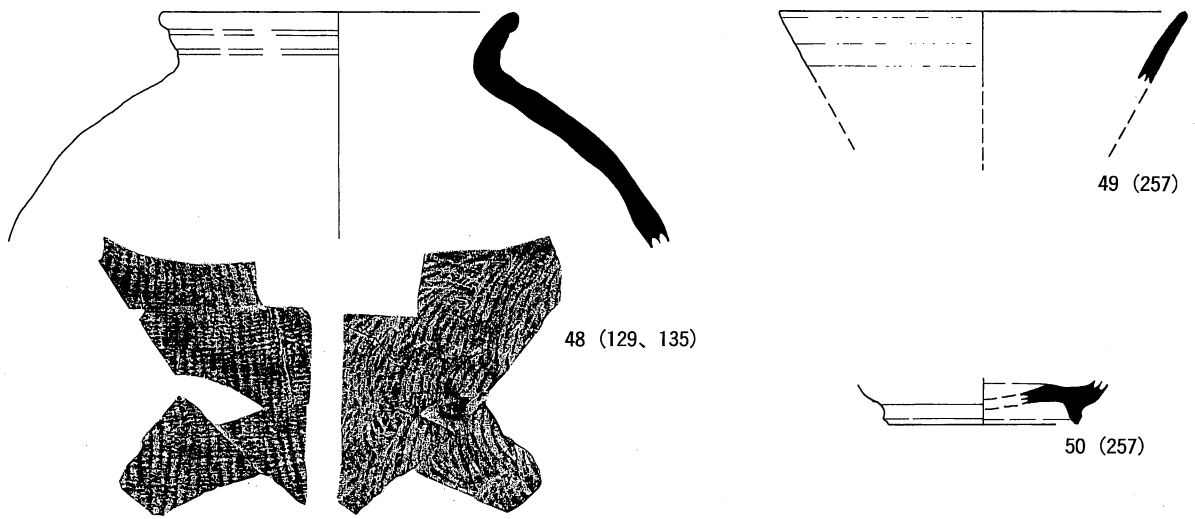
挿図29 陰田ハタケ谷遺跡 A区出土須恵器 (1)



挿図30 陰田ハタケ谷遺跡 A区出土須恵器 (2)



挿図31 陰田ハタケ谷遺跡 B区出土須恵器



挿図32 陰田ハタケ谷遺跡 A・D区出土遺物

3 陰田隠れが谷遺跡

陰田隠れが谷遺跡では竪穴住居跡、掘立柱建物跡、土坑（炭溜土坑、焼土坑）、炭溜り、段状遺構、溝状遺構などを検出した。

遺跡の立地は標高45～65mの北と南の尾根部と、これには含まれた谷部斜面にテラスをつくり分布する。主要な遺構のほとんどは、比較的なだらかな北尾根部（2区）と、これに続く尾根部南斜面（2区）から谷奥東斜面（3区）に集中する。遺構の立地は、A：南・北尾根上（1～3テラス、11～14テラス）、B：尾根部南斜面（4～6テラス）、C：谷奥東斜面（7～10テラス）に分かれるが、遺跡全体としての使い分けが行なわれていたものと考えられる。南尾根部（1区）は、幅約20m程のやせ尾根であり、地形的制約もあってか遺構も少なく、時期的にも限られる。谷奥東斜面は、南斜面からの延長としての位置を占めるとともに、ミニチュア土器や焼土坑などが検出され祭祀の空間としても利用されていた。遺構の占地には一定の偏りがあり、掘立柱建物跡は、斜面部に集中し、尾根部には土坑（炭溜土坑、焼土坑）、炭溜り、祭祀関係遺構、谷奥部には焼土坑、掘立柱建物跡（総柱建物跡を含む）がみられた。また、尾根部の掘立柱建物跡は総柱の建物跡である。

遺物は、古墳時代後期後葉～平安時代初期にかけてのものがあり、特に7世紀後半～奈良時代を中心とするものが多い。

掘立柱建物跡は、総柱建物跡3棟を含む26棟の建物跡を確認した。表7のとおりである。掘立柱建物跡の立地は2区の南斜面にあたる4～6テラスに集中してつくられ、尾根部には北尾根の2テラスと、南尾根部（1区）の11テラスに総柱建物がつくられ、同じく南尾根部の13、14テラスに掘立柱建物がつくられるが、単発的である。一方、谷奥東斜面（3区）の7テラスには、総柱建物、掘立柱建物がつくられているが、これも単発的である。

炭溜り遺構は、調査地区全体にわたって炭の散布がみられた。多くは、谷斜面上部からの流れ込みによる自然堆積であるが、まとまりがあり、その位置で造作が認められるものを遺構として扱った。

(1) 1区（挿図34～43 図版12～14）

南尾根部（11～13テラス）（挿図35～41 図版12、13）

南尾根の先端を取り巻くように標高40m～50mの範囲に、11、12、13、14のテラスがあり、掘立柱建物跡、焼土坑、炭溜りなどが造られていた。また尾根部には、溝状遺構、落とし穴などが確認されている。時期的には弥生時代後期末と、7世紀後半～平安時代初期にかけて営まれたものと推定される。

11テラス（挿図35～38 図版12、13）

南尾根先端の南東側傾斜変換点に造られ、北西～南東方向20m、奥行6mを測る。北東に総柱建物跡S B01が、南東に掘立柱建物跡S B02が配されていた。

掘立柱建物跡 (挿図35、36 図版12、13)

S B 01 (挿図35 図版12)

主軸をN-60°-Wにとる総柱建物で、梁行2間×桁行2間(2.74×3.40m)の規模を測る。西、南側に幅50cm、深さ20cmの布掘りの溝をもつ。柱穴は径60~70cm、深さ60cm程度のしっかりしたものである。上部に炭溜10が複合する。

S B 02 (挿図36 図版13)

主軸をN-83°-Wにとる掘立柱建物で、梁行1間×桁行3間(3.00×6.00m)の規模が推定されるが、南辺の3間しか確定されない。柱穴は径50~60cm、深さ60cm程度のしっかりしたものである。上部に炭溜11が複合する。

土 坑 (挿図37、38)

S K 01 (挿図37)

不整形な土坑で長軸1.50m、短軸0.8m、深さ31cmの浅い皿状のものである。

S K 02 (挿図37)

円形の土坑で長軸0.96m、短軸0.82m、深さ22cmの浅い皿状のものである。

S K 03 (挿図37)

円形の土坑で長軸1.06m、短軸0.86m、深さ15cmの浅い皿状のものである。

12テラス (挿図39 図版13)

南尾根先端の南側傾斜変換点に造られ、東西9m、奥行5mを測る。西に掘立柱建物跡S B 18が配されていた。

J S K 03 (挿図39)

楕円形の土坑で長軸1.68m、短軸0.58m、深さ99cmをはかる。形状から縄文時代の落とし穴であると推定される。

S B 18 (図版13)

梁行1間×桁行2間と推定される掘立柱建物跡であると考えられる。

13テラス (挿図40、41)

南尾根先端の西側傾斜変換点に造られ、北西~南東方向8m、奥行4mを測り、掘立柱建物跡S B 19が配されていた。

S B 19 (挿図41)

主軸をN-55°-Wにとる掘立柱建物で、梁行1間×桁行3間(一×5.40m)の規模が推定されるが、北東辺の3間しか確定されない。柱穴は径50~70cm、深さ40~70cm程度のしっかりしたものである。上部に炭溜12が複合する。

尾根部 (挿図42、43 図版13、14)

南尾根の稜線の平坦地には、掘立柱建物跡はみられず、S D 01、落し穴が確認された。

J S K 01 (挿図42 図版14)

溝の南4mにある底部にピットをもつ長楕円形の土坑で、幅の狭い特色的なものである。遺物は検出されなかったが形状から縄文時代の落し穴であると推定される。

J S K 02 (挿図42 図版14)

溝の北2mにある楕円形の土坑で、底部にピットをもつ。遺物は検出されなかったが形状から縄文時代の落し穴であると推定される。

S D 01 (挿図43 図版13)

尾根中央に幅70cm、長さ4.6m、深さ25cmの溝が認められた。性格は不明である。

(2) **2区** (挿図44~105 図版15~44)

北尾根部 (1~3テラス) (挿図45~76 図版18~31)

標高53~65mの南東にのびる緩やかな斜面に、3段のテラスが認められ、竪穴住居跡、掘立柱建物跡、土坑(炭溜土坑、焼土坑)、炭溜り、段状遺構などが検出された。

時期的には弥生時代後期と、7世紀後半~平安時代初期に営まれたものと考えられる。土坑が多く、祭祀空間として利用された傾向が強い地区である。

1テラス (挿図48~60 図版18~20)

標高60~65mの斜面に幅10m、長さ約40mのテラスがあり、段状遺構S S 01、02、04~07、12の7基と土坑(炭溜土坑、焼土坑)S K 11~14、16~18、20~23、31、37の13基が検出された。

段状遺構 (挿図48~51 図版18、19)

S S 01 (挿図48 図版18)

テラス北側に位置し、長さ8.9m、幅2.3m、壁高0.7mの方形のプランを残す。床面に2個のピットが認められるが、柱穴的にはしっかりしていない。遺物は、弥生時代後期末の土器と須恵器が検出されているが、時期は弥生時代後期であると推定される。

S S 02 (挿図49)

テラス中央、S S 01の南に位置し、長さ6.75m、幅3.10m、壁高0.35mの方形のプランを残す。遺物は、弥生時代後期末の土器が検出されており、時期は弥生時代後期であると考えられる。

S S 04 (挿図50 図版18)

テラス南側、S S 02の南に位置し、長さ8.82m、幅2.10m、壁高0.50mの不整形の半月状プランを残す。壁際にしっかりしたピットが1個ある。

S S 05 (挿図51)

テラス南側、S S 04の南に位置し、長さ4.20m、幅1.05m、壁高0.80mの不整形の半月状プランを残すが、床面がはっきりしない傾斜面状である。

S S 06 (挿図48 図版19)

テラス西側、S S 02の西に位置し、長さ8.00m、幅1.50m、壁高0.55mの不整形の半月状プランを残す。中央を焼土坑で攪乱されている。遺物は弥生時代後期末の土器が検出されており、時期は弥生時代後期であると考えられる。

S S 07 (挿図48 図版19)

テラス西側で、S S 06に複合して位置し、長さ2.50m、幅2.00m、壁高0.30mの不整形のL字プランを残す。壁際に浅い溝が認められ、竪穴住居跡とも考えられる遺構である。

S S 12 (挿図51)

テラス北側に位置し、長さ5.20m、幅1.30m、壁高0.86mの不整形の半月状プランを残す。壁際に浅い溝と、しっかりしたピットが1個確認される。

土 坑 (炭溜土坑、焼土坑) (挿図52～59 図版18～20)

S K 11 (挿図53 図版19、20)

S S 06に複合する位置にあり、長軸2.25m、短軸2.05m、深さ0.75mの不整形な楕円形を呈す。内部に炭と焼土が互層になっており、何回か焚き火された炭溜土坑である。遺物は須恵器、礫が検出されており、時期は7世紀中葉であると推定される。

S K 12 (挿図54 図版18、19)

S S 06に複合する位置にあり、長軸2.06m、短軸1.72m、深さ0.80mの不整形な楕円形を呈す。内部に炭、焼土がつまった炭溜土坑である。遺物はないが、時期は位置と性格からS K 11と同様であると推定される。

S K 13 (挿図55 図版18、19)

S S 06に複合する位置にあり、長軸2.40m、短軸1.95m、深さ0.86mの不整形な楕円形を呈する。内部に炭、焼土がつまった炭溜土坑である。時期はS K 11と同様と推定される。

S K 14 (挿図56)

S S 02の東に位置し、長軸1.55m、短軸1.25m、深さ0.85mの不整形な楕円形を呈する。

S K 16 (挿図56)

S S 01の東に位置し、長軸1.25m、短軸1.20m、深さ0.53mの不整形な円形を呈する。穴の中段に肩を持つ二段掘りの土坑である。

S K 17 (挿図57 図版19、20)

S S 06に複合する位置にあり、長軸1.84m、短軸1.10m、深さ0.35mの不整形な長楕円形を呈す。内部に礫、炭混じり土がつまった炭溜土坑である。時期は位置と性格からS K 11と同様であると推定される。

S K 18 (挿図57 図版19)

S S 06の南に位置し、長軸2.28m、短軸1.70m、深さ0.35mの皿状で不整形な円形を呈す。内部に炭がつまった炭溜土坑である。時期は位置と性格からS K 11と同様であると推定される。

S K 20 (挿図58)

S S 01の東に位置し、長軸1.35m、短軸0.92m、深さ0.24mの不整形な楕円形を呈する。内部は、3段に掘られている。時期、性格は不明である。

S K 21 (挿図58)

S S 01の東に位置し、長軸1.50m、短軸0.92m、深さ0.62mの不整形な長楕円形を呈する。内部にピット状の穴がある。時期、性格は不明である。

S K 22 (挿図59)

S S 01の東に位置し、長軸1.10m、短軸1.00m、深さ0.37mの皿状の不整形な円形を呈する。時期、性格は不明である。

S K 23 (挿図59)

S S 01の東に位置し、長軸1.04m、短軸0.95m、深さ0.40mの皿状の不整形な円形を呈する。時期、性格は不明である。

S K 31 (挿図52)

S S 04の東に位置し、長軸1.50m、短軸0.88m、深さ0.30mの皿状の不整形な楕円形を呈する。時期、性格は不明である。

S K 37 (挿図56)

S S 01の北西に位置し、長軸2.60m、短軸0.86m、深さ0.35mの皿状の長楕円形を呈する。壁寄りに溝状の窪みが走り、浅いピットを1個もち、段状遺構に似た形状をもつ。時期、性格は不明である。

炭溜り

炭溜 1 (挿図 60 図版19、20)

1 テラスの南西側にあり、S S 06の範囲に炭が広がっていた。下部に炭溜り土坑S K 11～13、17、18を伴う。遺物は須恵器甕、高坏、土師器坏が出土し、古墳時代後期後葉であると推定される時期である。

2 テラス (挿図61～72 図版21～27)

標高56～60mの斜面に幅10m、長さ約35mのテラスがあり、竪穴住居跡S I 02、掘立柱建物跡S B 17、段状遺構S S 03、08、11の3基と炭溜 2、土坑(炭溜土坑、焼土坑) S K 07～10、15、19、24、25、27～30、32～36の17基、落とし穴J S K 04が検出された。

竪穴住居跡

S I 02 (挿図62 図版21、23)

2 テラス中央部にあり、隅丸方形のプランを持ち、長軸6.15m、短軸5.82m、壁高0.50mの規模をはかる。柱穴は東隅の1穴が確認できなかったが、3穴あり北～西間が3.70m、西～南間が4.30mを測る。遺物は弥生時代後期の甕片が検出されており、時期もこの時期であると推定される。

掘立柱建物跡

S B 17 (挿図 63 図版23)

主軸をN-79°-Wにとる総柱建物で、梁行2間×桁行3間(3.20×4.26m)の規模を測る。西側に高さ1.4mほどの段を持つ。柱穴は径60～70cm、深さ50～60cm程度のしっかりしたものである。遺物は、弥生土器、須恵器が検出されているが、60、63の土器から古墳時代後期後葉であると推定される。上部に炭溜 2 が複合する。

炭溜り

炭溜 2 (挿図71、72 図版22)

2 テラスの北側にあり、S B 17の覆土として上部にある。炭溜りは、中央に楕円形状(1.6×1.1m)に集中し、その周囲を取り巻くように円形(3.5×3.0m)の焼土・炭溜りが分布していた。分布範囲がS B 17上にそっくり重なるためS B 17の建物の最終処理に係するものと考えられる。時期はS B 17と同様、古墳時代後期後葉と推定される。

土 坑 (炭溜土坑、焼土坑、落とし穴) (挿図52、58、59、61、65～70 図版21、23～25)

S K 07 (挿図65 図版24)

2 テラスの南に位置し、長軸4.47m、短軸3.93m、深さ1.18mの不整形な楕円形を呈する。埋土に炭、焼土を多量に含む炭溜土坑である。時期は不明であるが、他の炭溜土坑と同時期であると推定される。

S K 08 (挿図52)

S K 07の北に位置し、長軸1.79m、短軸1.15m、深さ0.37mの皿状の楕円形を呈する。時期、性格は不明である。

S K 09 (挿図66 図版25)

2 テラスの中央に位置し、長軸3.50m、短軸0.95m、深さ1.03mの不整形な瓢箪形を呈する。埋土に炭、焼土を多量に含む炭溜土坑である。J S K 04と複合し、埋没後つくられている。時期は不明であるが、他の炭溜土坑と同時期であると推定される。

S K 10 (挿図67 図版25)

S K 07の北に位置し、長軸3.50m、短軸2.50m、深さ0.58mの皿状の不整形な楕円形を呈する。内部に幅70cmの溝状の段がある。埋土に炭、焼土を微量に含む炭溜土坑である。時期は不明であるが、他の炭溜土坑と同時期であると推定される。

S K 15 (図版21)

S I 02の埋没後、複合して造られた炭溜土坑であるが、住居跡として調査したため形状は不明である。須恵器、土馬3、4が検出されており、祭祀的性格と推定され、古墳時代後期後葉の時期である。

S K 19 (挿図58)

S I 02の北西に位置し、長軸1.58m、短軸0.98m、深さ0.64mの不整形な瓢箪形を呈する。時期、性格は不明である。

S K 24 (挿図68)

S B 17の北に位置し、長軸2.05m、短軸1.45m、深さ0.42mの皿状の不整形な楕円形を呈する。時期、性格は不明である。

S K 25 (挿図68)

S B 17の北に隣接して位置し、長軸1.70m、短軸1.50m、深さ0.44mの皿状の不整形な円形を呈する。埋土に炭、焼土を含む炭溜土坑である。炭溜2に伴うものと考えられ、古墳時代後期後葉の時期であると推定される。

S K 27 (挿図59 図版23)

S B 17の西に位置し、長軸2.61m、短軸2.18m、深さ0.73mの皿状の不整形な楕円形を呈する。時期、性格は不明である。

S K 28 (挿図69)

S B 17の南に隣接して位置し、長軸1.31m、短軸1.10m、深さ0.45mの皿状の不整形な楕円形を呈する。埋土に炭、焼土を含む炭溜土坑である。炭溜2に伴うものと考えられ、古墳時代後期後葉の時期であると推定される。

S K 29 (挿図70)

S S 08の北に隣接して位置し、長軸1.54m、短軸0.96m、深さ0.35mの皿状の不整形な楕円形を呈する。上部に角礫組みがあり須恵器短頸壺が置かれており、土坑に伴う供献と考えられる。古墳時代後期後葉の時期であると推定される。

S K 30 (挿図69)

S S 08の北に隣接して位置し、長軸0.80m、短軸0.68m、深さ0.46mの皿状の不整形な楕円形を呈する。時期、性格は不明である。

S K 32 (挿図69)

S K 07の北に位置し、長軸1.05m、短軸0.77m、深さ0.17mの皿状の不整形な楕円形を呈する。時期、性格は不明である。

S K 33 (挿図52)

S K 07の北に位置し、長軸2.85m、短軸2.10m、深さ0.50mの皿状の不整形な楕円形を呈する。時期、性格は不明である。

S K 34 (挿図69)

S K 07の北に位置し、長軸0.90m、短軸0.62m、深さ0.54mの不整形な楕円形を呈する。時期、性格は不明である。

S K 35 (挿図69)

S K 07の北に位置し、長軸0.80m、短軸0.60m、深さ0.40mの皿状の不整形な楕円形を呈する。時期、性格は不明である。

S K 36 (挿図69)

S K 09の南に位置し、長軸0.90m、短軸0.78m、深さ0.23mの皿状の不整形な円形を呈する。時期、性格は不明である。

J S K 04 (挿図61)

2 テラスの中央に位置し、S K 09の下部から検出された。長軸3.57m、短軸2.26m、深さ1.25mをはかる不整形な楕円形を呈する。S K 09との複合で大きめの規模となっている。底部に皿状の窪みをもつがピットはない。縄文時代の落とし穴と考えられるものである。

3 テラス (挿図73～76 図版28～31)

3 テラスは標高53～55mの斜面につくられた幅8 m、長さ約25mのテラスで、竪穴住居跡S I 01、段状遺構S S 09、10、炭溜4が検出された。

竪穴住居跡

S I 01 (挿図73～75 図版28)

3 テラス北側にあり、隅丸方形のプランを持ち、長軸5.50m、短軸4.10m、壁高0.90mの規模をはかるしっかりした竪穴である。西側の斜面に扇状の2段の外縁テラスをもつ。柱穴は径50cm、深さ60cm程度のしっかりしたもので、各隅に4穴あり、柱間は北から左回りで3.00m、2.70m、2.75m、2.75mを測る。壁下に幅10cm、深さ8 cm程度の壁溝を巡らす。床面中央には一辺50cm、深さ40cmの方形の特殊ピットを配していた。遺物は弥生時代後期末の甕、器台片が検出されており、時期は弥生時代後期末であると推定される。埋没後、炭溜4が複合している。

段状遺構

S S 09 (挿図76)

3 テラス南側に位置し、長さ6.40m、幅1.20m、壁高0.30mの方形L字プランを残す。床面コーナーに1個のピットが認められるが、柱穴的にはしっかりしていない。時期は不明である。

SS10 (挿図76)

3テラス南側に位置し、SS09と複合している。長さ5.15m、幅0.90m、壁高0.45mの半月形プランを残し、壁下に浅い溝が認められる。時期は不明である。

炭溜り

炭溜り4 (挿図75 図版28~30)

3テラス北側にあり、SI01の覆土として上部にあり、窪地を利用して営まれたものと推定される。焼土・炭片とともに、礫、須恵器85、86、土師器80、土馬1、2が検出されており、何らかの祭祀の跡であると考えられる。時期は、遺物から古墳時代後期後葉であると考えられる。

谷部南斜面部 (挿図77~105)

南斜面を段状に加工し、上から標高48mに4テラス、標高43mに5テラス、標高38mに6テラスが段々に築かれている。急斜面であるため土砂流失や、炭溜りによる掘削等を受けて建物全体の構造を残すものは少ない。

4テラス (挿図77~90 図版33~37)

4テラスは東西65m、奥行15mを測り、3群8棟の掘立柱建物跡を確認した。

1群は、SB03、SB07、SB15で構成される。SB07はテラス端部に位置し、造成初期段階と思われ、立地や切り合い関係から、「SB07→SB15→SB03」の築造順が窺える。

2群は、SB04、SB05、SB16、SB24で構成され、一部の重複はあるがSB04とSB16(2-1群)、SB05とSB24(2-1群)の東西2つのまとまりがある。柱穴の切り合い関係や遺物の出土状況から「SB04→SB05→SB16」の順が、また、埋没段階での炭混土の堆積状況から「SB05→SB24」の順序が窺える。

遺物は奥壁寄り出土したが、特にSB16の東側コーナー部に側溝に沿うような形で集中して出土した。また、中程やや西寄りの範囲で、ほとんどが床面より10~15cm浮いた位置ではあるが、鉄滓が目立った。最終のSB16に関連するものと考えられる。

底部回転糸切りの須恵器などがあり陰田10期の特徴を持つ。98はSB04に伴うものであり、東側コーナー部の遺物群の下層出土でピット23上に密着して出土した。また、上層からの流れ込みと思われるが、西側上層でも須恵器坏、壺などの遺物が出土し、陰田7期、8期の時期のものであった。

3群はSB06、1棟であり、西奥のやや上がった位置にあり、初期段階の築造と考えられる。時期は、帰属を今一つ明確にしがたいが、陰田7期の遺物が認められた。

掘立柱建物跡 1 群 (挿図79～83 図版34)

S B 03 (挿図81 図版34)

主軸をN-80°-Wにとる掘立柱建物で、梁行1間×桁行3間(2.70×5.00m)の規模が推定されるが、北辺の3間と東辺の1間しか確定されない。北辺の柱穴をつないで、浅い溝が走る。柱穴は径60～70cm、深さ40～50cm程度のしっかりしたものである。

S B 07 (挿図82)

主軸をN-83°-Eにとる掘立柱建物で、梁行1間×桁行3間(-×4.20m)の規模が推定されるが、北辺の3間しか確定されない。柱穴は径40～60cm、深さ30～40cm程度のしっかりしたものである。

S B 15 (挿図83 図版34)

主軸をN-81°-Eにとる掘立柱建物で、梁行2間×桁行3間(2.20×5.80m)の規模が推定されるが、北辺の3間と西辺の1間しか確定されない。柱穴は径30～40cm、深さ35～50cm程度の小さめである。

掘立柱建物跡 2 群 (挿図84～87、89、90 図版35、36)

S B 04 (挿図86 図版36)

主軸をN-80°-Wにとる掘立柱建物で、梁行2間×桁行3間(3.80×4.90m)の規模が推定されるが、北辺の3間と西辺の2間しか確定されない。柱穴は径40～70cm、深さ40～60cm程度のしっかりしたものである。

S B 05 (挿図87 図版35)

主軸をN-65°-Wにとる掘立柱建物で、梁行2間×桁行4間(3.00×6.90m)の規模が推定されるが、南辺は確定されない。柱穴は径50～70cm、深さ50～80cm程度のしっかりしたものである。北辺を囲うように幅40cmの溝がはしる。

S B 16 (挿図89)

主軸をN-93°-Eにとる掘立柱建物で、梁行2間×桁行3間(2.20×5.50m)の規模が推定されるが、北辺の3間と東、西辺の2間しか確定されない。柱穴は径40～60cm、深さ30～50cm程度のしっかりしたものである。

S B 24 (挿図90 図版35)

主軸をN-84°-Wにとる掘立柱建物で、梁行2間×桁行3間(3.30×4.20m)の規模をはかる。柱穴は径25～65cm、深さ20～60cm程度のしっかりしたものである。北辺を囲うように幅40cmの溝がはしる。

掘立柱建物跡 3 群 (挿図84、85、88 図版33)

S B 06 (挿図88 図版33)

主軸をN-75°-Wにとる掘立柱建物で、梁行2間×桁行3間(2.20×4.90m)の規模が推定されるが、南辺は確定されない。柱穴は径50~70cm、深さ50~80cm程度のしっかりしたものである。

5 テラス (挿図91~98 図版38~42)

5 テラスは東西55m、最高奥行15mを測り、2群6棟の掘立柱建物跡を確認した。テラスは調査区外の東側にも平坦面が見られるため、4 テラスとほぼ同規模のものと推定され、群構成も3群存在するものと考えられる。テラス東側に炭溜5が確認されている。

1 群は、S B 08、S B 09、S B 26の重複する3棟で構成され、立地や切り合い関係から、「S B 26→S B 08→S B 09」の築造順が窺える。

2 群は、S B 10、S B 11で構成され、2棟とも北側の桁がほぼそろうように東西に並んで配されている。

遺物は奥壁寄り須恵器、土師器を中心に多く出土したが、特にS B 10、11のコーナーに集中して出土した。またS B 26の範囲でも目立った。陰田8、9、10期の特徴を持つ。S B 10、11のコーナーでは鉄滓も出土している。

掘立柱建物跡 1 群 (挿図91~95、98 図版38)

S B 08 (挿図94 図版38)

主軸をN-75°-Wにとる掘立柱建物で、梁行2間×桁行3間(2.00×7.90m)の規模が推定されるが、南辺は確定されない。柱穴は径40~70cm、深さ30~60cm程度のばらつきのあるものである。壁下に溝をめぐらす。

S B 09 (挿図95 図版38)

主軸をN-70°-Wにとる掘立柱建物で、梁行1間×桁行3間(1×5.40m)の規模が推定されるが、南辺、東、西辺は確定されない。柱穴は径50~70cm、深さ50~70cm程度のしっかりしたものである。壁下に溝をめぐらす。

S B 26 (挿図98 図版38)

主軸をN-85°-Wにとる掘立柱建物で、S B 08に切られている。梁行2間×桁行2間(2.75×7.10m)の規模が推定されるが、南辺、東、西辺は確定されない。柱穴は径50~90cm、深さ40~50cm程度のしっかりしたものである。壁下に溝をめぐらす。

掘立柱建物跡 2 群 (挿図91～93、96、97 図版39)

S B 10 (挿図96 図版39)

主軸をN-83°-Wにとる掘立柱建物で、梁行2間×桁行3間(1.80×4.30m)の規模が推定されるが、南辺、西辺は確定されない。柱穴は径40～60cm、深さ50～60cm程度のしっかりしたものである。壁下に溝をめぐらす。

S B 11 (挿図97 図版39)

主軸をN-85°-Wにとる掘立柱建物で、梁行1間×桁行2間(1×3.60m)の規模が推定されるが、南辺、東、西辺は確定されない。柱穴は径40～60cm、深さ30～50cm程度のしっかりしたものである。壁下に溝をめぐらす。

炭溜り

炭溜り 5 (挿図91 図版40)

5テラスの東側、S B 10～09の上部に炭、焼土の分布が長さ10m、幅3mの範囲で確認され、炭溜り遺構として認識される。

6 テラス (挿図99～105 図版43、44)

6テラスは東西13m、奥行6mを測り、S B 12、S B 13、S B 14、S B 25の4棟を確認した。1間×2間か2間×2間のいずれも小規模建物である。遺物の出土状況と立地や切り合い関係から「S B 14→S B 12」、「S B 25→S B 13」の築造順が窺える。

遺物は奥壁寄りですべて須恵器、土師器、鉄滓を出土したが、特にS B 13、25に集中して出土した。陰田8、9、10期の特徴を持つ。

掘立柱建物跡 (挿図102～105)

S B 12 (挿図102)

主軸をN-90°-Eにとる掘立柱建物で、梁行1間×桁行2間(2.62×3.15m)の規模を測る。柱穴は径30～70cm、深さ20～60cm程度のしっかりしたものである。

S B 13 (挿図103)

主軸をN-73°-Eにとる掘立柱建物で、梁行2間×桁行2間(3.80×3.90m)を測る。柱穴は径60～80cm、深さ60～100cm程度のしっかりしたものである。壁下に溝をめぐらす。

S B 14 (挿図104)

主軸をN-85°-Eにとる掘立柱建物で、梁行1間×桁行2間(1×4.20m)の規模が推定されるが、S B 13により切られており南、北辺、東辺は確定されない。柱穴は径40～60cm、深さ30～50cm程度のしっかりしたものである。

S B 25 (挿図105)

S B 10と複合し、主軸をN-80°-Eにとる掘立柱建物で、梁行1間×桁行2間(3.30×3.45m)の規模が推定されるが、南辺、西辺は確定されない。柱穴は径30~50cm、深さ20~50cm程度の浅めのものである。

(3) 3区 (挿図34、106~121 図版45、46)

谷奥東斜面

谷奥の東斜面の標高42~50mの範囲に、北から7、10、8、9のテラスがあり、掘立柱建物跡、焼土坑、炭溜りなどが造られていた。

7テラス (挿図106~112)

7テラスは東に面した谷奥斜面の標高43m付近に造られ、南北25m、奥行7mを測る。掘立柱建物2群3棟を確認した。北側(1群)の総柱建物S B 23と、南側(2群)S B 21、S B 22の2棟で構成され、北側がやや高いレベルにある。調査区外にもテラスが続き、掘立柱遺構が推定され、S B 23は2次的建物であると推定される。S B 21、S B 22は重複しており、S B 21が廃絶した後に奥側を拡張し、S B 22が造られたものと考えられる。後背の段の中央に穿穴があり、S B 21に伴って造られたものと考えられる。5テラスを谷奥側に巡った位置にあり、一連の流れの中で理解できるものである。

遺物は須恵器蓋坏、高坏、甕、土師器類、ミニチュア土器が出土した。陰田8期を中心に陰田7期古段階~平安時代初期までがある。S B 21とS B 23下層遺構が陰田7期古段階、S B 22、S B 23は陰田8期~10期であると思われる。

掘立柱建物跡 (挿図110~112)

S B 21 (挿図110)

S B 22と複合し、主軸をN-80°-Eにとる掘立柱建物で梁行2間×桁行3間(1.50×4.00m)の規模が推定されるが、東辺は確定されない。柱穴は径50~70cm、深さ60~70cm程度のしっかりしたものである。壁下に溝を巡らす。

埋土は礫混りであり、一気に埋立てられた様相を示す。S B 22を築くにあたって後背の斜面を削り込み、さらにその土で埋立整地したものである。地山は岩盤混りの硬い地質である。

後背の奥壁中央部に一段高く穿穴遺構が存在する。天井部が崩落しているため全容は不明であるが、底面幅2.5m、奥行1mの平坦面で入口はややすぼまる形であったと思われる。陰田広畑遺跡8テラスの祠状石敷遺構と方形穿穴の在り方に類似しており、元来S B 21に伴って築かれ、S B 22にも利用されたものと思われる。

S B 22 (挿図111)

S B 21と複合し、主軸をN-85°-Eにとる掘立柱建物で梁行3間×桁行4間(2.60×7.10m)の規模が推定されるが、東辺は確定されない。柱穴は径40~70cm、深さ30~70cm程度のしっかりしたものである。

S B 23 (挿図112)

主軸をN-12°-Wにとる総柱掘立柱建物で、梁行2間×桁行3間(3.00×4.20m)の規模を測る。柱穴は径30~60cm、深さ30~70cm程度のしっかりしたものである。

炭溜り (挿図111、112)

炭溜 6 (挿図112)

S B 23の上部を覆うように確認された炭、焼土層の広がりである。

炭溜 7 (挿図111)

S B 22の上部を覆うように確認された炭、焼土層の広がりである。

8 テラス (挿図113~116)

8 テラスは東に面した谷奥斜面の標高43m付近に造られ、長さ約10m、奥行約4mを測る。土坑(炭溜土坑、焼土土坑)、炭溜りが検出された。8 テラスは、竈、臼、高坏、甑などの炊飯具のミニチュア土器を伴う祭祀遺構であると考えられる。

土 坑 (炭溜土坑、焼土坑) (挿図115)

S K 38 (挿図115)

テラスの南側にあり長軸3.20m、短軸2.50m、深さ0.60mを測り、円形を呈する炭溜土坑である。

S K 39 (挿図115)

S K 38に接する位置にあり、長軸2.30m、短軸1.30m、深さ0.50mを測り、楕円形を呈する土坑であり、S K 38を切って造られている。

炭溜り

炭溜 9 (挿図116)

テラスの北側にあり、南北7m、東西3mの範囲に炭、焼土層の広がり、須恵器、土師器、炊飯具のミニチュア土器等が検出された。陰田8期と考えられる祭祀遺構である。

9テラス (挿図114)

8テラスの下部にある緩やかな斜面を9テラスとして調査した。遺構は検出されなかった。

10テラス (挿図117、118)

10テラスは7テラスの西側の標高47～50m付近の緩やかな斜面に位置し、東西7m、南北8mの範囲に炭、焼土が広がり、炭溜遺構が確認された。

炭溜り

炭溜8 (挿図117、118)

南北7m、東西3mの範囲に炭、焼土層が広がり、2カ所で土坑状の落ち込みがみられた。須恵器が検出されており、時期は炭溜9と同様の陰田8期であると推定される。

14テラス (挿図119～121 図版45、46)

14テラスは旧陰田ハタケ谷遺跡C区で、南尾根基部の標高49m付近の西側傾斜変換点に造られ、北西～南東方向18m、奥行5mを測り、掘立柱建物跡S B 20が配されていた。尾根部では、竪穴住居跡、段状遺構、土坑が検出された。

掘立柱建物跡

S B 20 (挿図121 図版45)

主軸をN-75°-Wにとる掘立柱建物で、梁行1間×桁行3間(一×7.25m)の規模が推定されるが、北辺のみが確定されるものである。柱穴は径50～60cm、深さ30～50cm程度のしっかりしたものである。壁下に溝をめぐる。

建物廃棄後に炭溜12による掘削を受け、中央の床面と奥壁の一部に窪みがみられる。建替の痕跡はない。西端P 1付近で須恵器甕492がつぶれた状態で出土したほか、坏、高台付壺が出土した。奈良時代後半期である。立地的にも狭く、13テラスのS B 19同様、この時期のみの単発的な活用であったと思われる。

竪穴住居跡

S I 03 (挿図120)

尾根部にあり、隅丸方形のプランを持ち、長軸4.20m、短軸2.00m、壁高0.24mの規模を測る段状の竪穴である。柱穴は確認されない。隅に1穴小ピットがあり、壁下に幅20cm、深さ8cm程度の側溝を巡らす。

段状遺構

S S 13 (挿図120)

尾根部にあり、長さ5.0m、幅1.30m、壁高0.80mのL字形のプランを残す。壁下に幅20cm程の溝を巡らす。時期は不明である。

土 坑 (挿図41 図版46)

S K 05 (挿図41)

尾根部S I 03に接してあり、長軸1.12m、短軸0.93m、深さ0.30mを測り、楕円形を呈する土坑である。

S K 06 (挿図41 図版46)

尾根部S B 20の東に接してあり、長軸1.17m、短軸1.17m、深さ0.36mを測り、隅丸方形を呈する土坑である。

炭溜り

炭溜10

14テラスの奈良時代後半期のS B 20の埋土上方から掘り込み、床面の一部にも達する炭、焼土の分布が見られた。

(4) 出土遺物

陰田隠れが谷遺跡からは、縄文土器、弥生土器、須恵器、土師器等の遺物が出土したが、大半は古墳時代後期後葉～奈良時代のものであった。時期的には、縄文時代晩期、弥生時代後期後葉～末期、7世紀後半を中心とした古墳時代後期後葉～平安時代初期のものである。出土状況は、遺構がテラスに造られた段状遺構、掘立柱建物跡ということから、転落遺物と見られるものがあり、帰属を明確にできないものが多いが、下記にテラス毎に若干の概要を述べる。

古墳時代以前の土器 (挿図122～124)

縄文土器 (挿図124)

50の突帯文土器1点であるが、6テラスから出土したもので、口縁下に突帯を貼付け、刻み目をもつ縄文時代晩期後半の土器である。

弥生土器 (挿図122～124)

1～6は2区1テラスから出土したもので、1、3、5はS S 01、4はS S 02、6はS S 07から出土した。いずれも複合口縁の甕口縁片で、平行沈線を施さない弥生時代後期末の土器である。

7～17は2区2テラスから出土したもので、7、10～12はS S 08から出土した甕、器台で平行沈線を残している。8はS B 17から出土した甕口縁片、17はS K 09から出土した甕形土器の取っ手である。いずれも弥生時代後期末であると考えられる。

18～37は2区3テラスS I 01から出土したもので、甕口縁、底部、器台、甕形土器である。甕口縁は平行沈線を施さないもので、弥生時代後期末の土器である。

38～49は2区6テラスから出土したものである。ほとんどは弥生時代後期末と考えられるが、39は壺で頸部に平行沈線を施すやや古いタイプである。49の高坏は皿状の坏部に筒状の脚をもち、土師器であると考えられる。

古墳時代以降の土器 (挿図125～151)

2区1テラス (挿図125)

51～53、55、56は2区1テラスから出土したもので、51～53はS S 01から出土した須恵器坏蓋である。55は土師器甕、56は高台付坏の土師器で時期がくだる。

2区2テラス (挿図125～127)

54、57～75は2区2テラスから出土したもので、須恵器坏身、坏蓋、壺、高坏、甕、鉢と土師器である。59は炭溜土坑S K 15から出土した短頸壺、60、63はS B 17から出土した。これらは、陰田7、8期のものであると考えられる。

2区3テラス (挿図128)

76～86は2区3テラスから出土したもので、須恵器坏身、坏蓋、壺と土師器である。77、78は底部に回転糸切り痕を残す。80、85、86は土馬と共に炭溜4から出土しており、長頸壺は陰田7期の特徴を持つ。

2区4テラス (挿図129、130)

87～93はS B 03・15の掘立柱建物1群付近から出土したもので、87～89の底部には回転糸切り痕が残り、陰田10期の時期であると考えられる。94～106はS B 04・16、108～118はS B 05・24の掘立柱建物2群付近から出土したもので、立上がりの矮小化した坏身や宝珠つまみ、環状つまみをもつ坏蓋、97、98の底部に回転糸切り痕をもつ坏身などがあり、陰田7～10期のものが混じっている。112の底部には「X」のヘラ記号がある。119～121はS B 06の掘立柱建物3群から出土したものである。

2区5テラス (挿図131～134)

123～147はS B 08・09・26の掘立柱建物1群付近から出土したものである。環状つまみで、返りをもつものと、消失したものの両者が見られる。坏身126は静止糸切り痕、127は回転糸切り痕をもち、陰田8～10期のものが混じる。土師器には、甕、甕、坏が見られる。

148～173はS B10付近から出土したもので、底部、天井部は未調整で、立上がりの矮小化した坏身、坏蓋、環状つまみをもつ坏蓋と高台付きの坏身がある。165は、底部に回転糸切り痕をもつ。陰田8～10期のものが混じる。174～211はS B11付近から出土したもので、立上がりの矮小化した坏身、環状つまみの坏蓋で、返りをもつもの、消失したものがある。186には竹管によるスタンプ状のヘラ記号がある。189は高台付坏で底部に静止糸切り痕を残す。土師器には甕、坏がある。陰田8～10期のものである。212～239は、5テラスと6テラス間の斜面から出土したもので、5テラスからの転落遺物である。

2区6テラス (挿図135～146)

240～268はS B12付近から出土したものである。立上がりの矮小化した坏身、環状つまみの坏蓋で、返りをもつものである。269～323はS B13・14付近から出土したもので、矮小化した坏類と環状つまみをもつ坏蓋、高台付坏である。この他に、6テラスからは、甕、壺、甕、横瓶、土師器の甕、坏、甗が出土している。いずれも陰田8期を主体とするものと考えられる。

3区7テラス (挿図147～149)

411～463は坏類と高坏である。坏類は立上がりの低いもの、矮小化したもの、高台付きのもの、皿状のもの、蓋は天井部未調整のもの、宝珠つまみをもつもの、環状つまみをもつもので、返りのあるものと無いもの等がみられる。陰田7～10期の範疇のものである。440、442、444、452は底部に静止糸切り痕、450、452、459～463は底部に回転糸切り痕をもつ。このほかに、長頸壺、短頸壺、甕、横瓶などがある。土師器には、甕、甗、坏身、支脚が見られる。

3区8テラス (挿図150)

481～486、488、489は8テラスから出土したものである。坏身は立上がりの低いものと、485のように高台付で静止糸切りのものがあり、陰田8～10期の範疇のものである。

3区9テラス (挿図150)

487の須恵器壺肩部片のみである。

3区10テラス (挿図150)

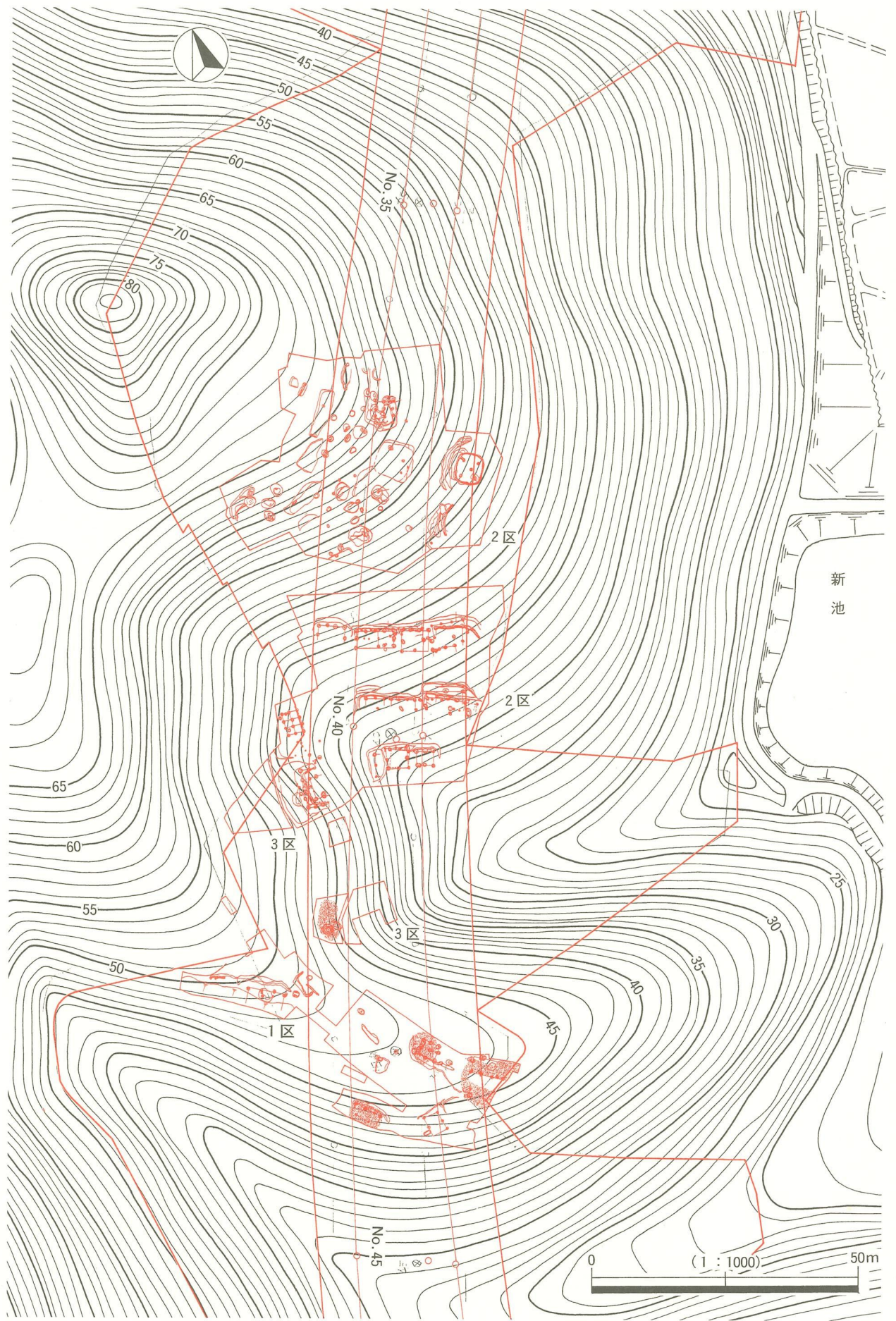
490の須恵器坏蓋と491の須恵器高坏片のみである。

3区14テラス (挿図151)

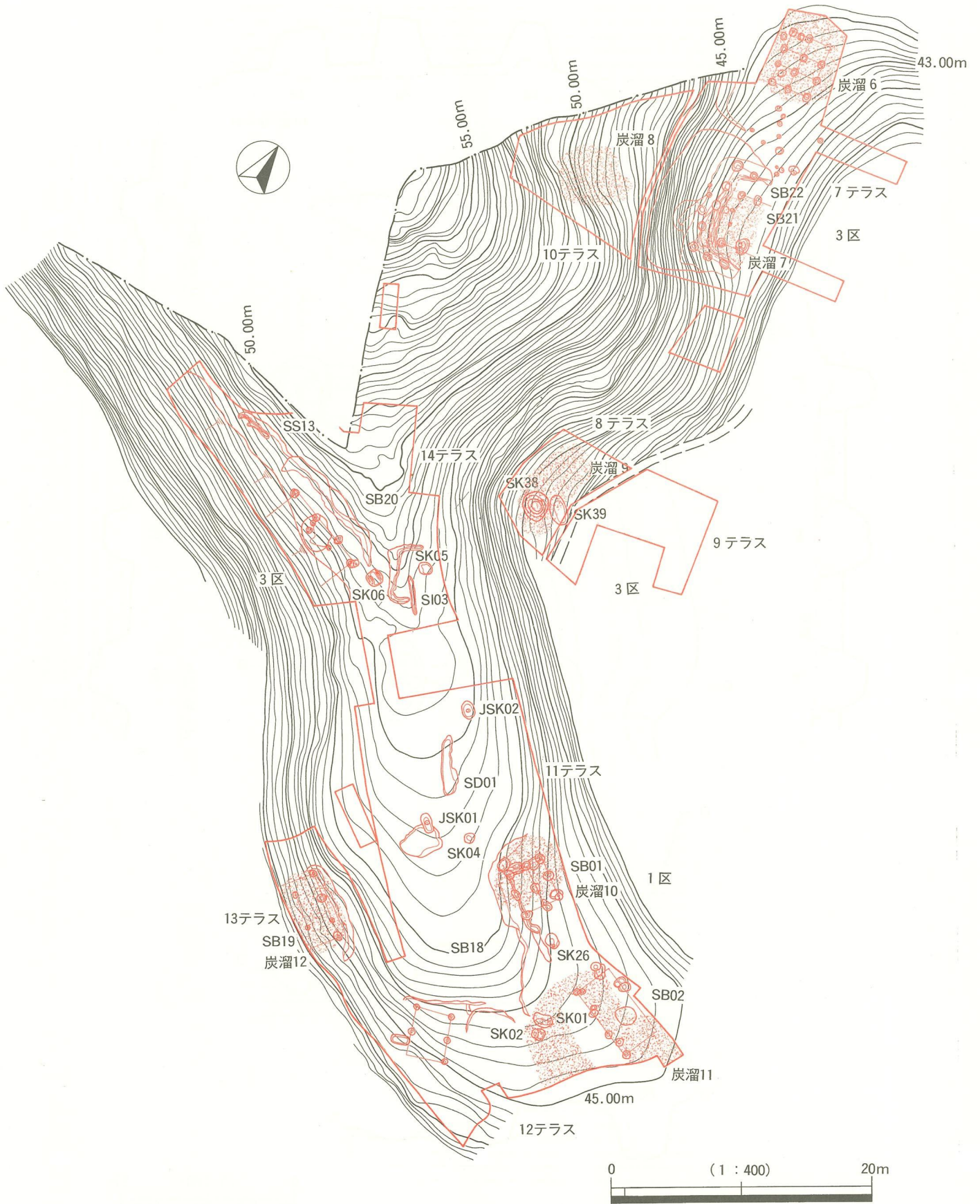
510はつぶれた状態で出土した完形の須恵器甕で、口縁の段はなく、稜がわずかに立ち上がる。坏類は底部に糸切り痕を残す。陰田10期のものと推定される。

1区11～13テラス（挿図151）

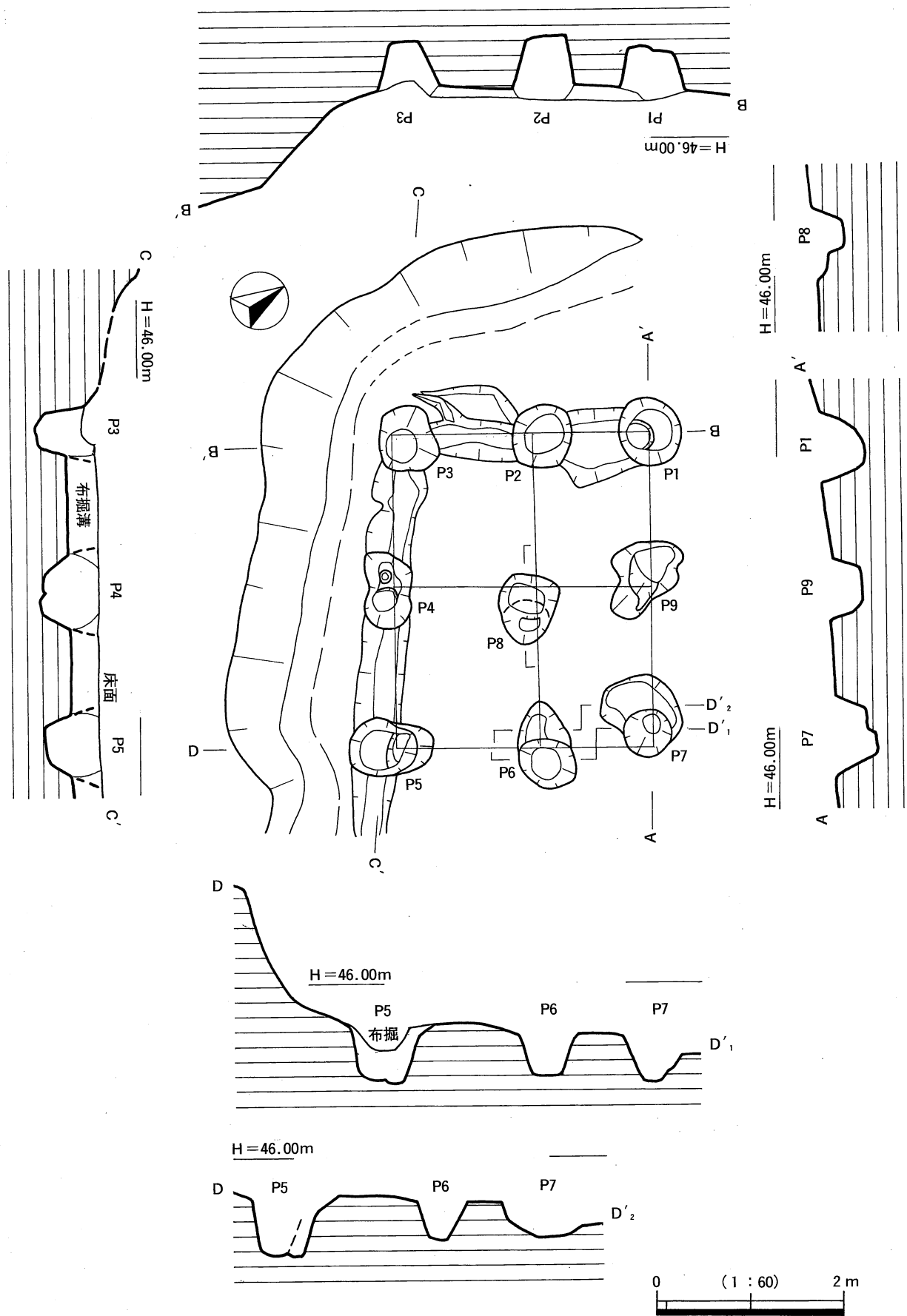
495～509は1区から出土したものである。坏身は底部に回転糸切り痕をもち、498、499のように口縁の開くものもある。陰田8期～平安時代初期の範囲のものと考えられる。



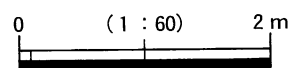
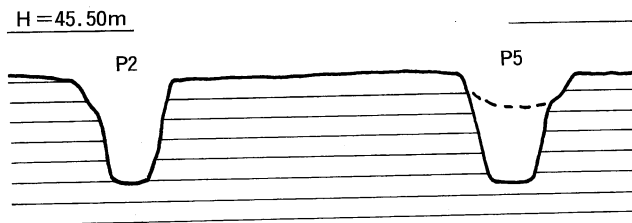
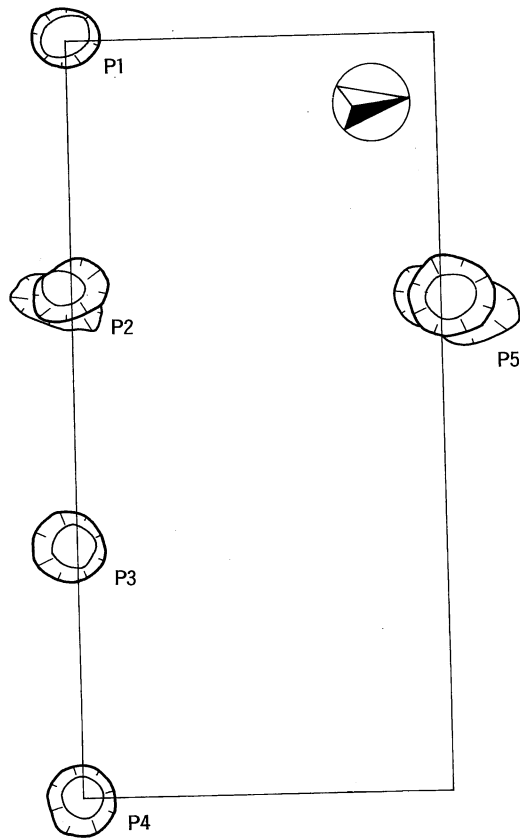
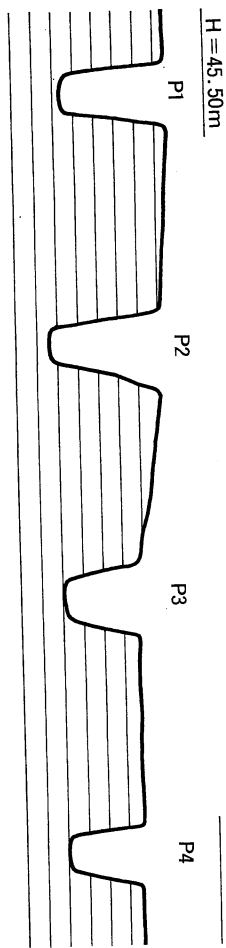
挿図33 陰田隠れが谷遺跡 調査地全体図



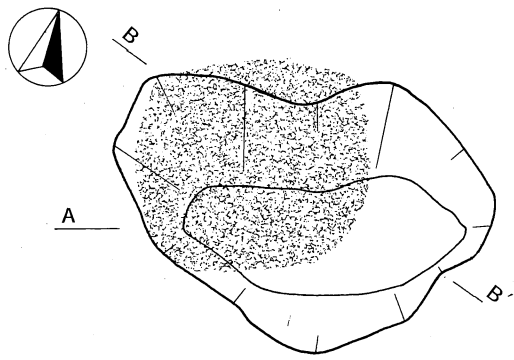
挿図34 陰田隠れが谷遺跡 1区・3区遺構分布図



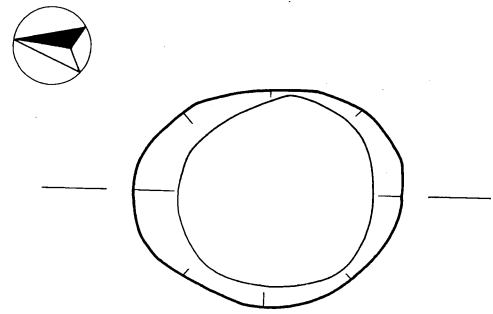
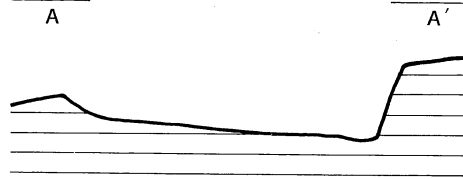
挿図35 陰田隠れが谷遺跡 1区11テラスSB01遺構図



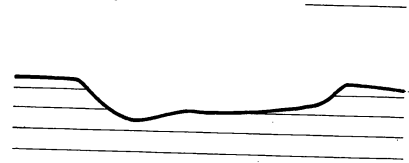
挿図36 陰田隠れが谷遺跡 1区11テラスSB02遺構図



H = 47.00m

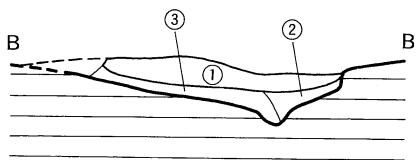


H = 46.00m



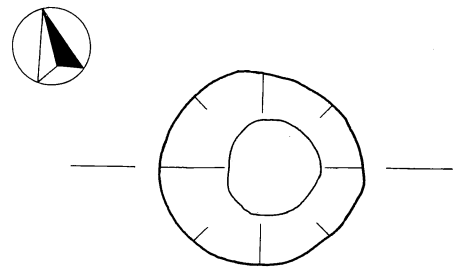
SK03

H = 45.5m

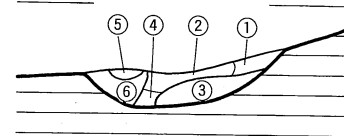


SK01

- ① 暗茶褐色土 (炭が多く混じる、ブロック混)
- ② 赤褐色土 (もろい)
- ③ 茶褐色土 (炭が少し混じる)

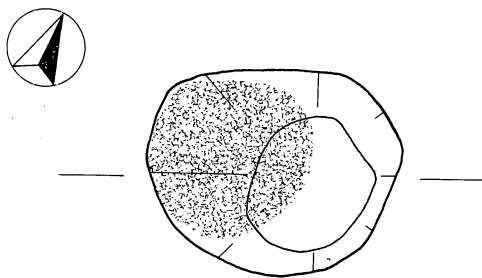


H = 47.50m

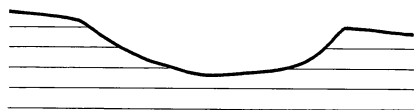


SK04

- ① 黄褐色土 (やや粘)
- ② 暗茶褐色土 (炭、ブロックが少し混じる)
- ③ 濃黒色土 (炭が多量に混じる)
- ④ 暗黄褐色土 (やや粘)
- ⑤ 暗茶褐色土 (②とほぼ同じ、炭、ブロックが少し混じる)
- ⑥ 黒色土 (炭が多く混じる)



H = 45.50m

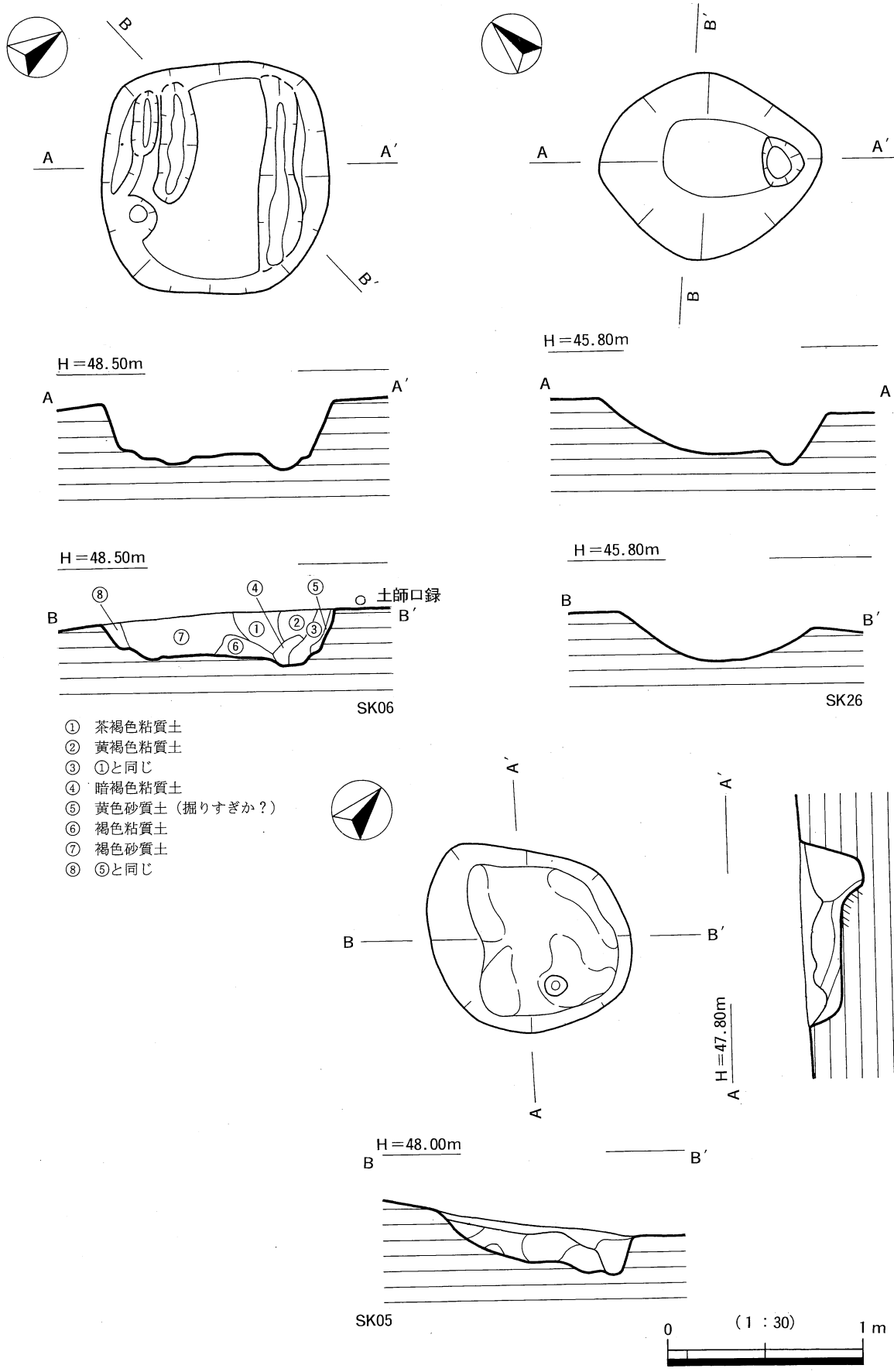


SK02

(1 : 30)

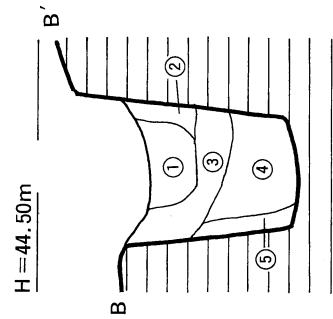
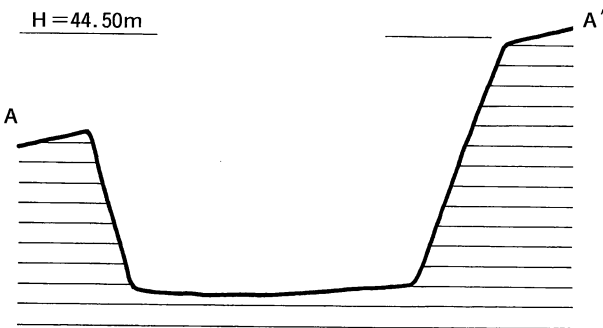
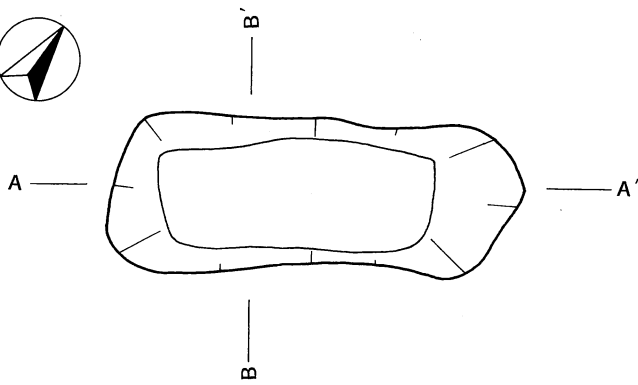


挿図37 陰田隠れが谷遺跡 1区11テラスSK01~04遺構図

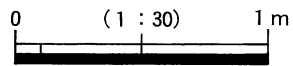


挿図38 陰田隠れが谷遺跡 1区11テラスSK26、3区14テラスSK05・06遺構図

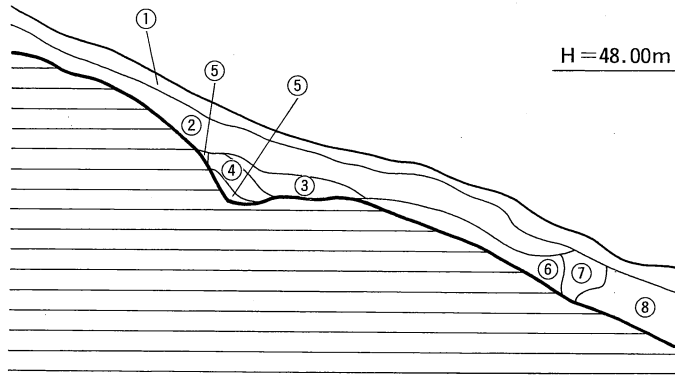
JSK03



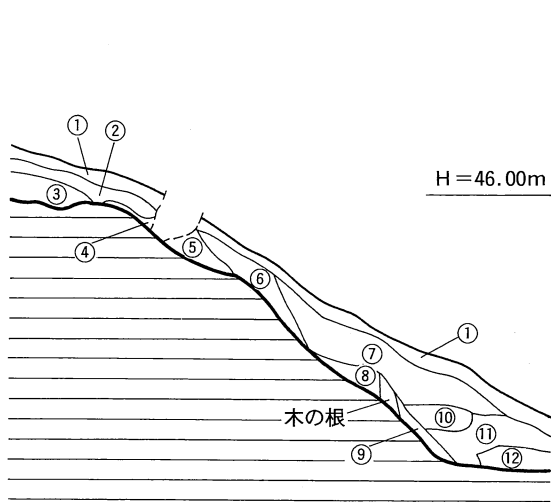
- ① 赤褐色土混り黄褐色土 (ややかたい)
- ② 黄褐色土 (粘質、やわらかい)
- ③ 赤褐色土混り黄褐色土 (②よりやや黒味を帯びている)
- ④ 黄褐色土 (粘質、やや硬くしまっている)
- ⑤ 黄褐色土 (粘質、やわらかい)



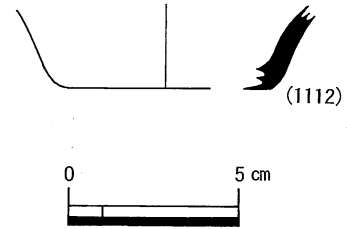
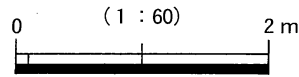
挿図39 陰田隠れが谷遺跡 JSK03遺構図



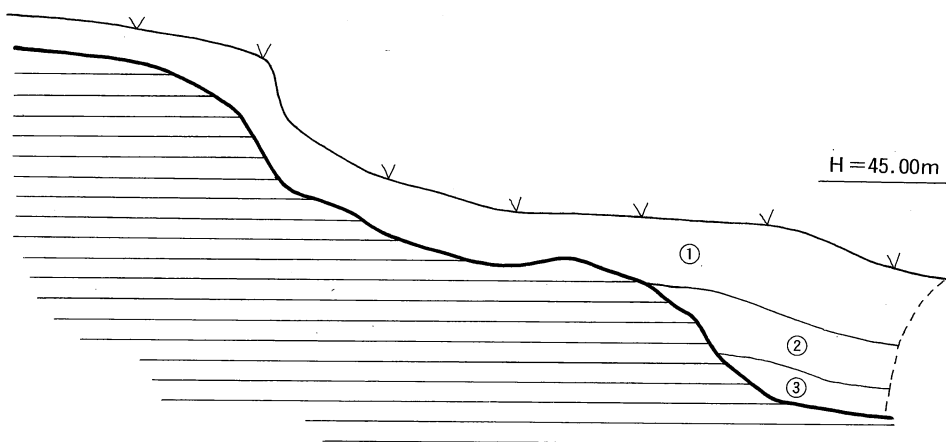
- ① 表土層
- ② 褐色土 (かたい)
- ③ 黄褐色土 (④よりかたくしまる)
- ④ 茶褐色土
- ⑤ 赤色土
- ⑥ 赤茶褐色土 (かたくしまっている)
- ⑦ 赤茶色土
- ⑧ 茶褐色土



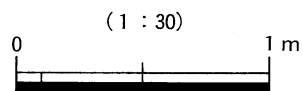
- ① 表土層
- ② 褐色土
- ③ 赤茶褐色土 (粘質)
- ④ 白灰色土 (礫土)
- ⑤ 赤色土混白灰色土 (礫土)
- ⑥ 淡褐色土 (ボロボロ、ブロック状になってくずれやすい)
- ⑦ 褐色土 (赤色のブロックを含む、しまっている)
- ⑧ 赤茶褐色土 (粘質)
- ⑨ 赤茶色土 (くずれやすい、粘質)
- ⑩ 暗褐色土 (しまっている)
- ⑪ 褐色土 (⑦より暗い、⑦より粒子は細かい炭を少々含む)
- ⑫ 赤茶色土 (⑨と同質)



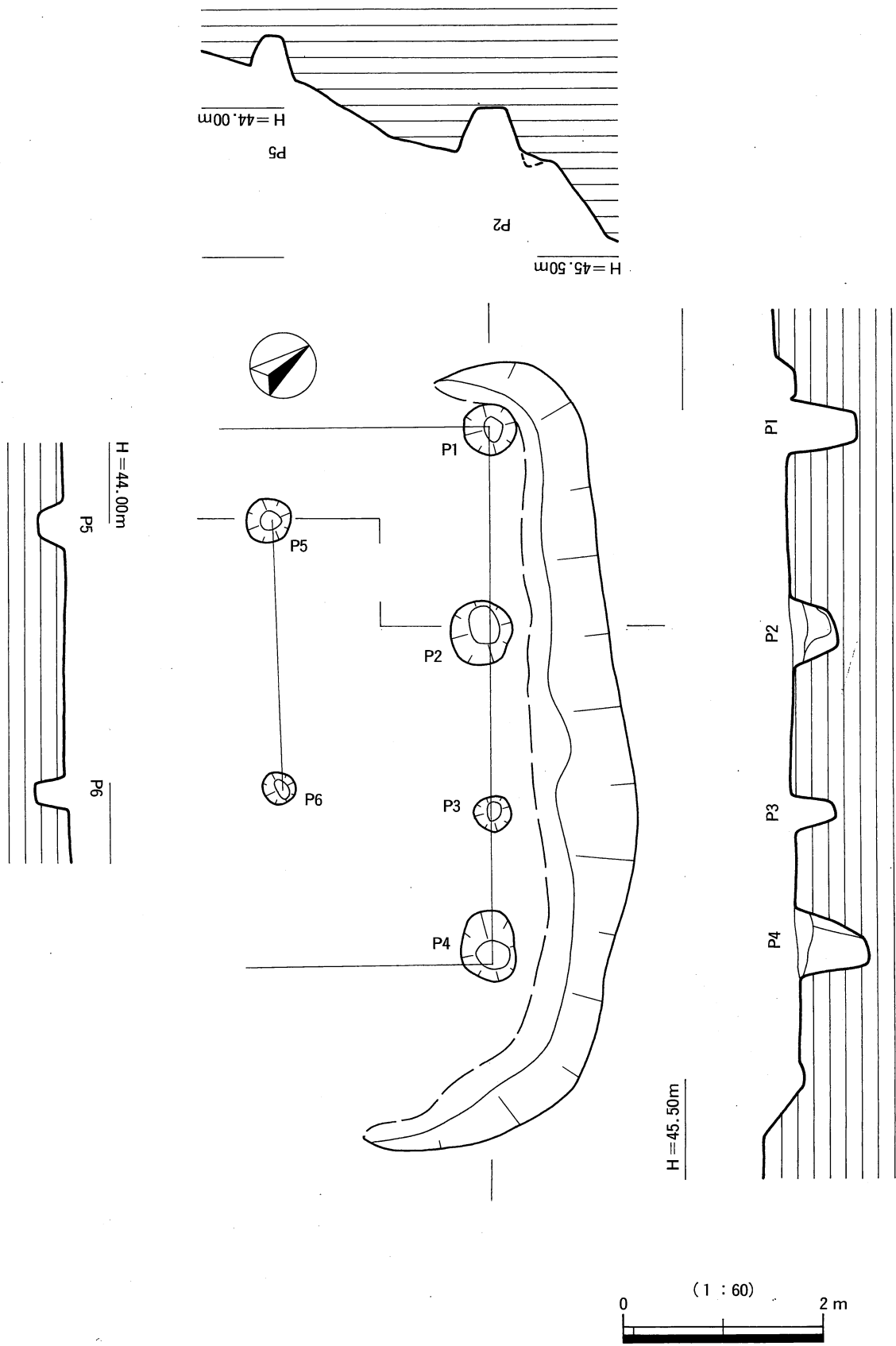
H=46.00m



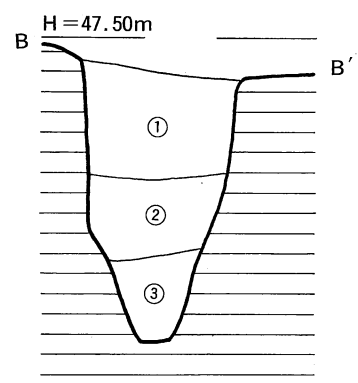
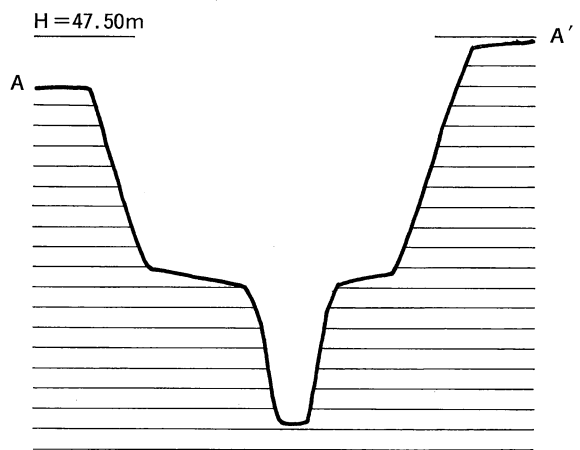
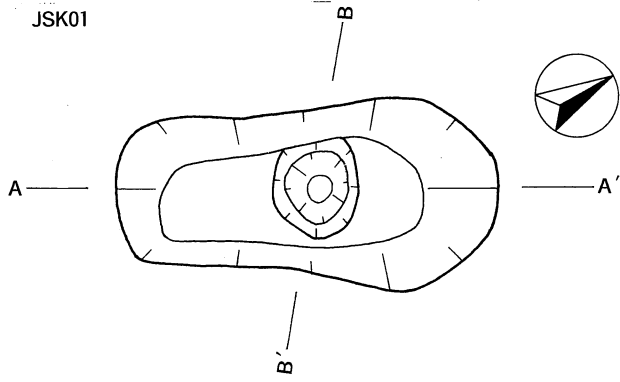
- ① 表土
- ② 黄褐色土 (粘質、やわらかい)
- ③ 明黄褐色土 (粘質)



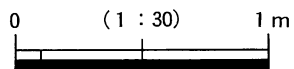
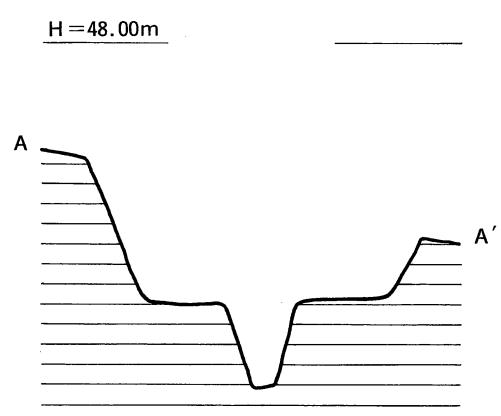
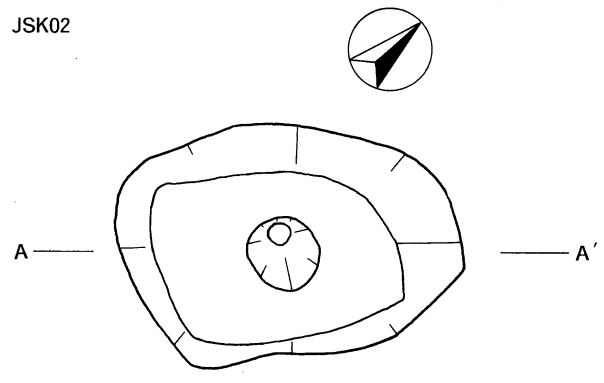
挿図40 陰田隠れが谷遺跡 1区13テラス土層図



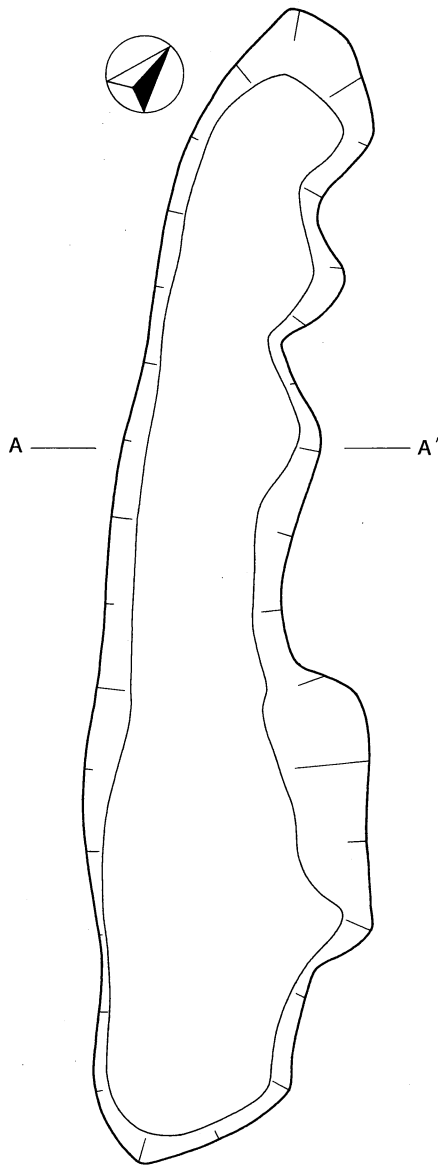
挿図41 陰田隠れが谷遺跡 1区13テラスSB19遺構図



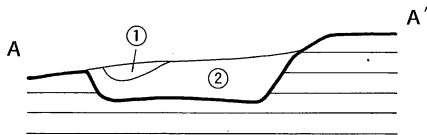
- ① 茶褐色土 (少し黄色がかっている、しまりはあまり良くない)
- ② 灰色と茶色の混り (しまりよし)
- ③ 淡赤茶褐色土 (粘質、しまりよし)



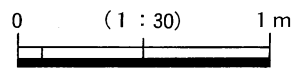
挿図42 陰田隠れが谷遺跡 1区11テラスJSK01・02遺構図



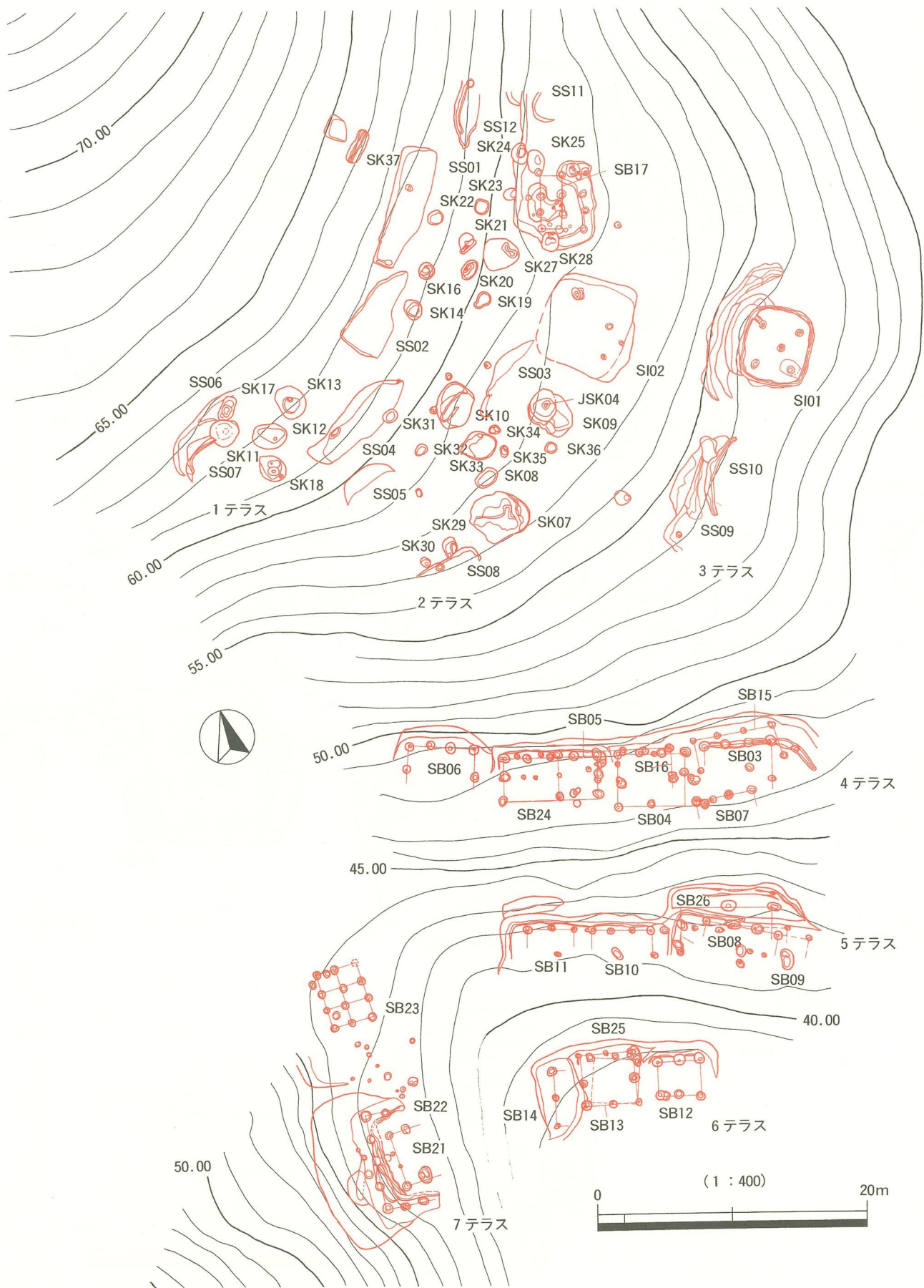
H=48.00m



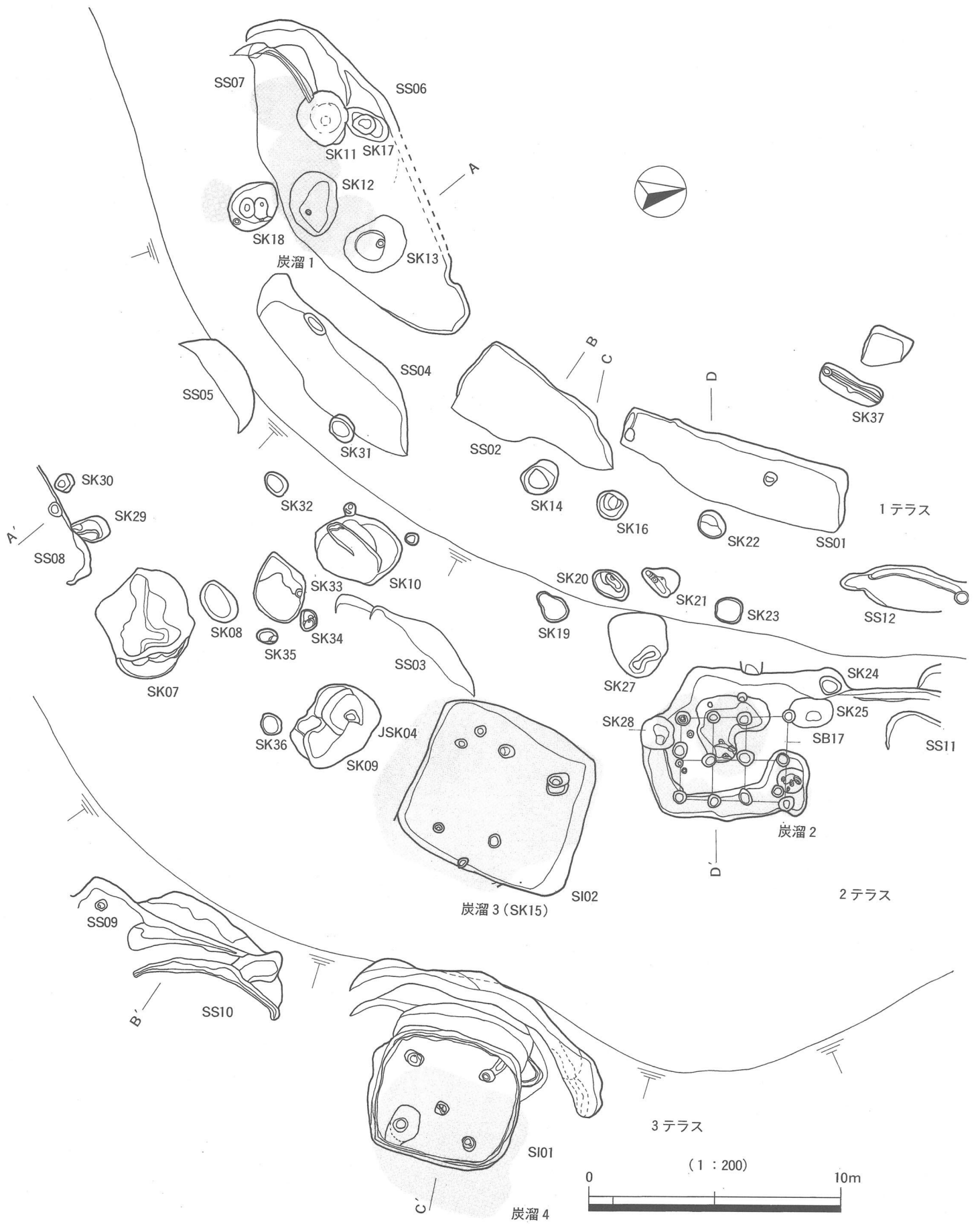
- ① 赤褐色土 (地山ブロックか?)
- ② 茶褐色土 (やや粘、ブロック粒を含む)



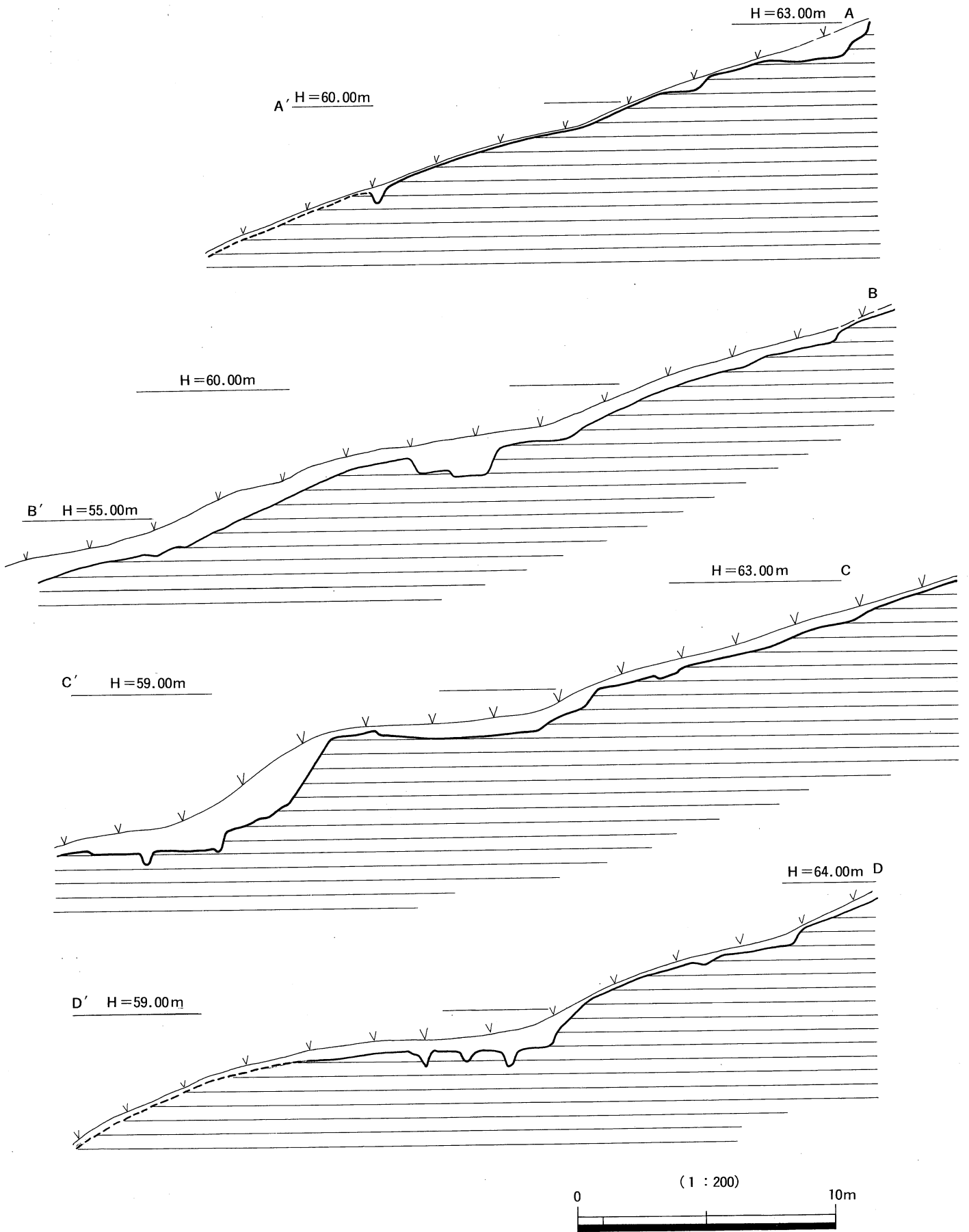
挿図43 陰田隠れが谷遺跡 1区11テラスSD01遺構図



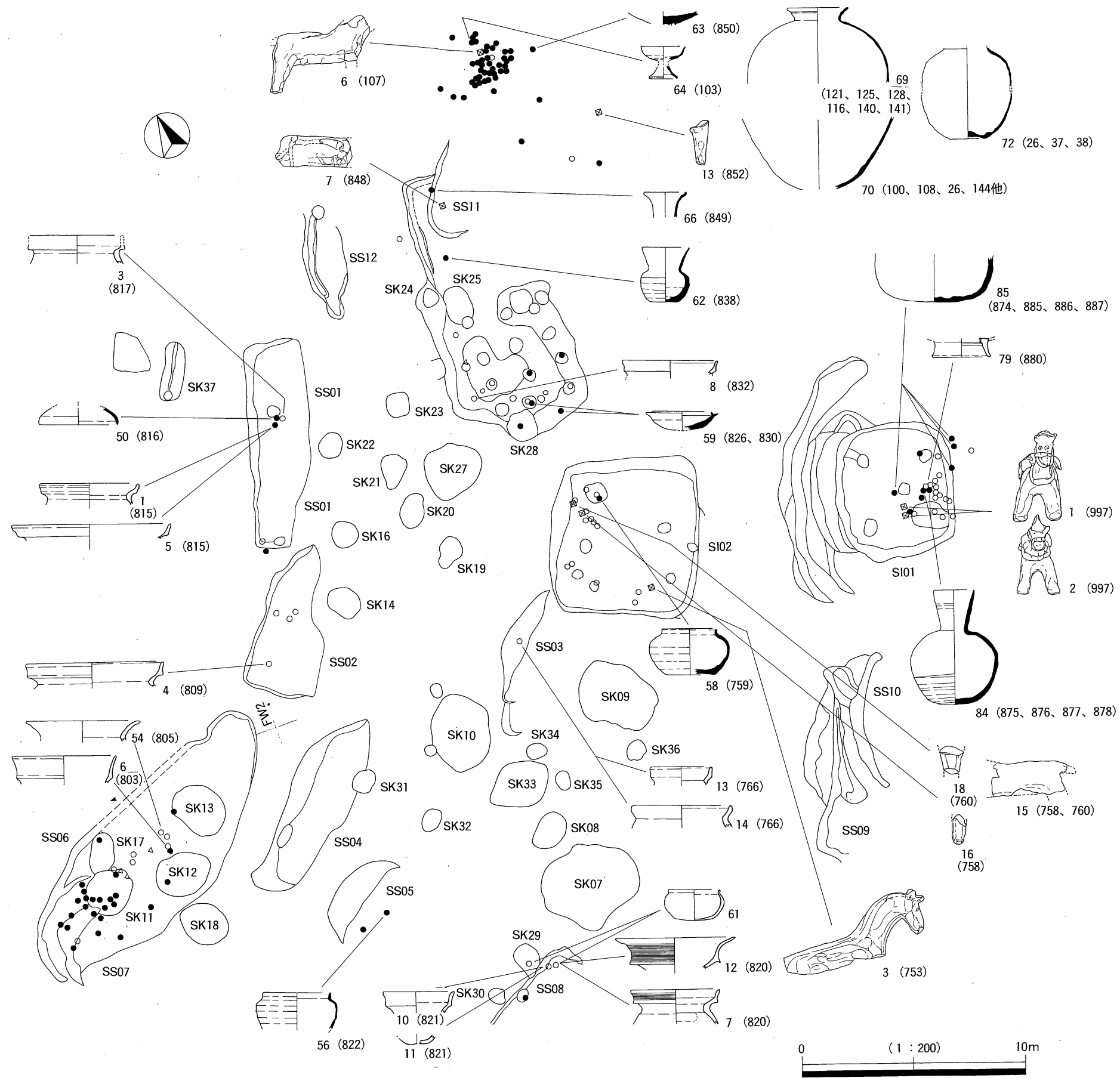
挿図44 陰田隠れが谷遺跡 2区遺構分布図



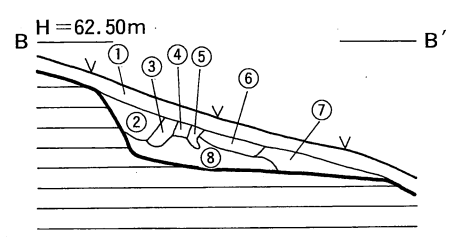
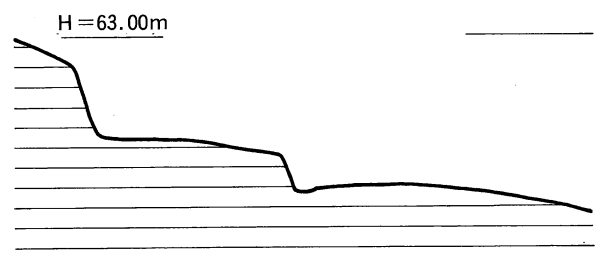
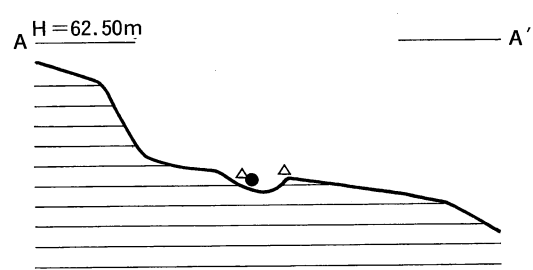
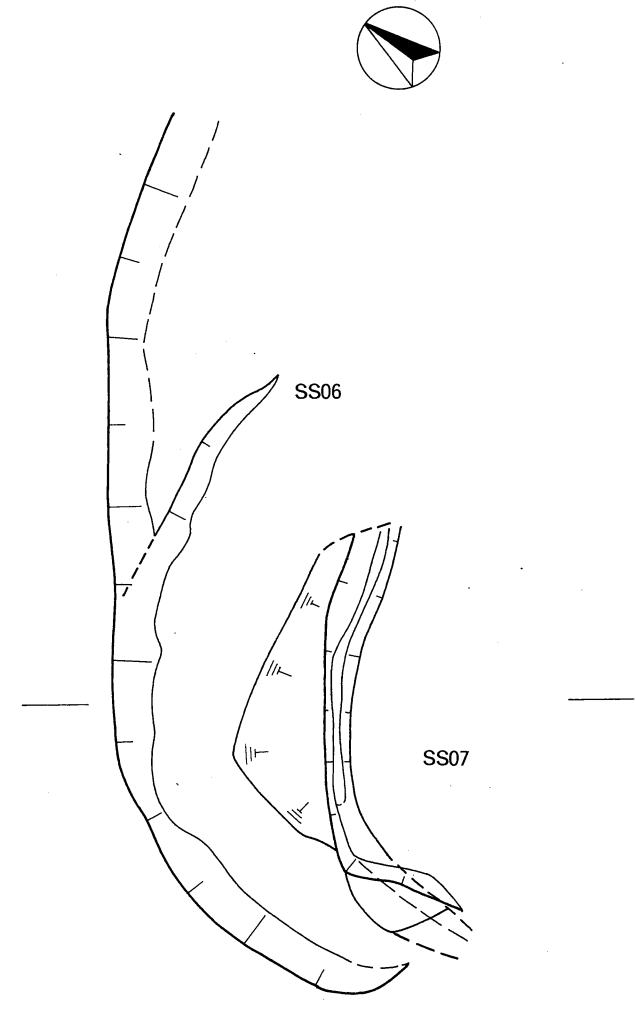
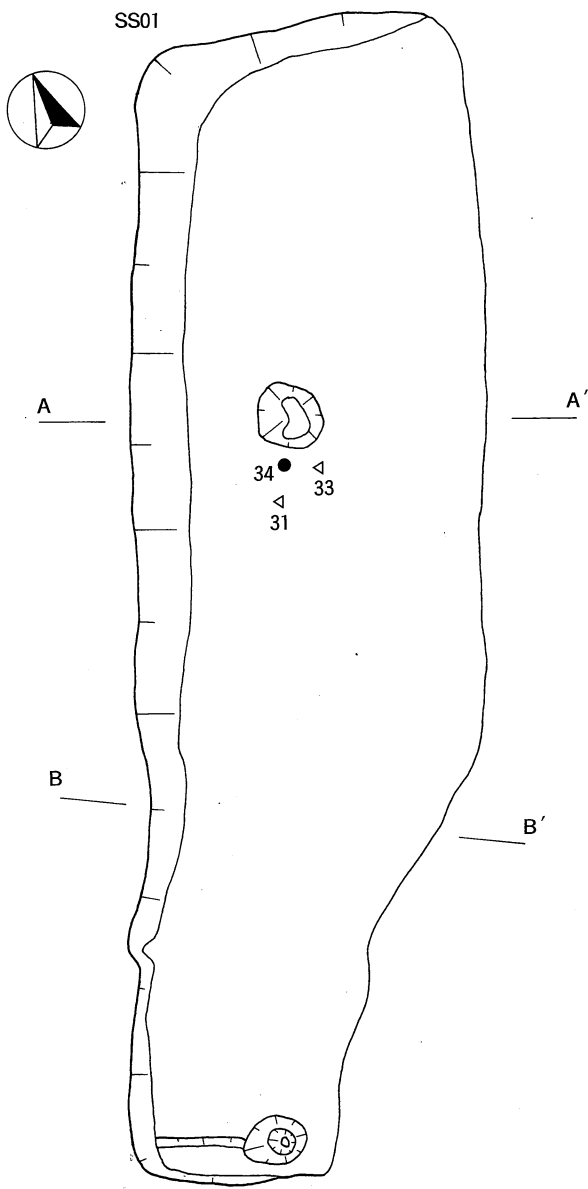
挿図45 陰田隠れが谷遺跡 2区1・2・3テラス遺構分布図



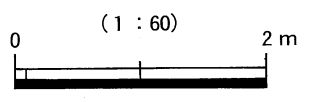
挿図46 陰田隠れが谷遺跡 2区1・2・3テラス立地断面図



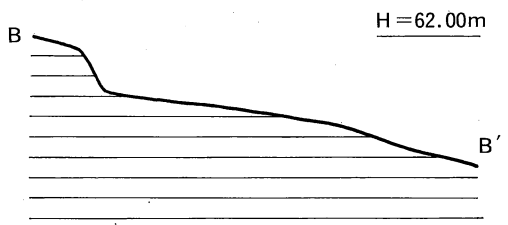
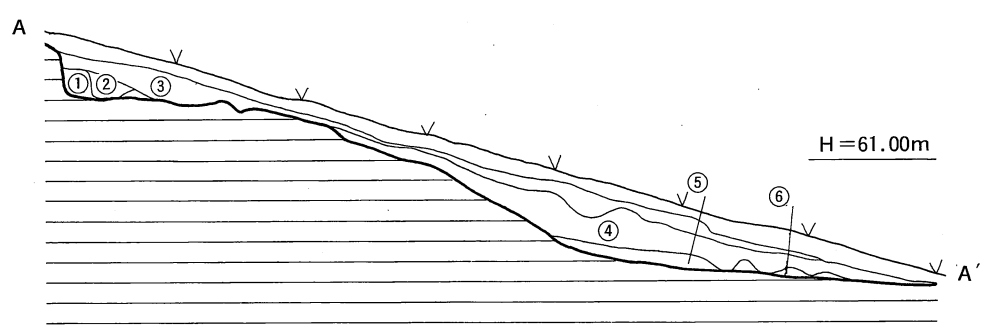
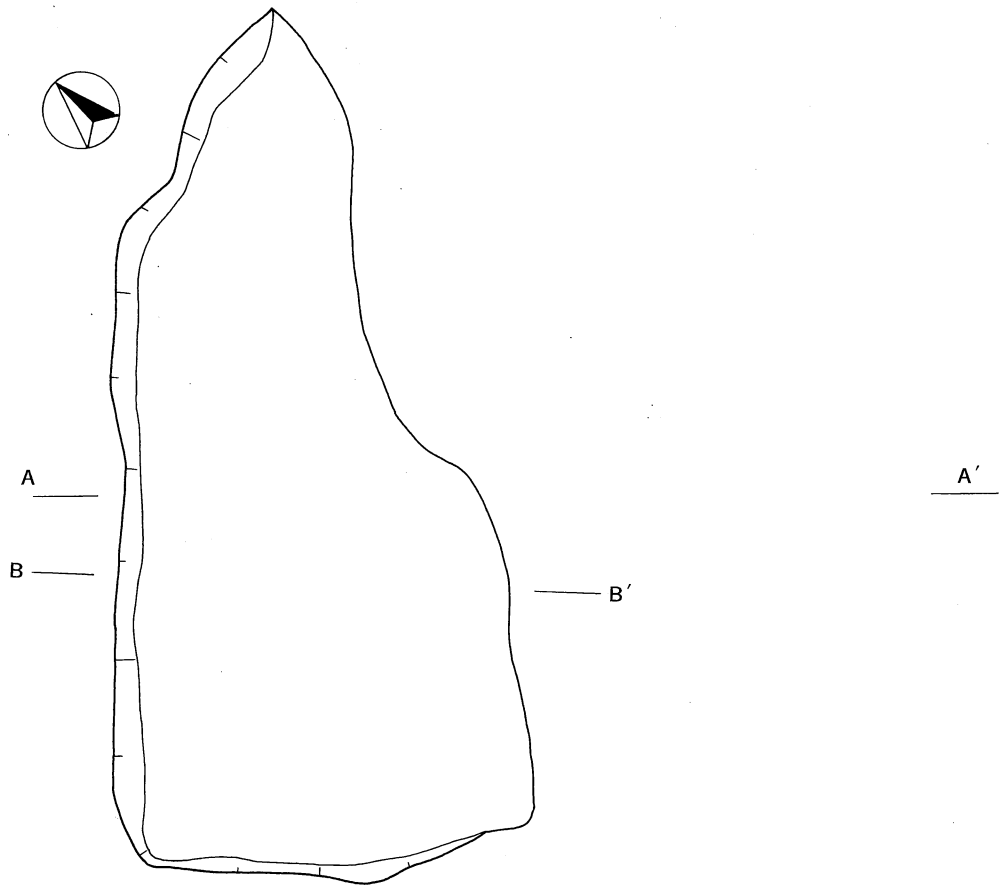
挿図47 陰田隠れが谷遺跡 2区1・2・3テラス遺物分布図



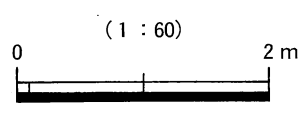
- ① 表土
- ② 茶褐色土
- ③ 灰褐色土 (砂質もろい)
- ④ 淡茶褐色土
- ⑤ 灰褐色土
- ⑥ 淡茶褐色土
- ⑦ 赤茶褐色土
- ⑧ 暗赤褐色土



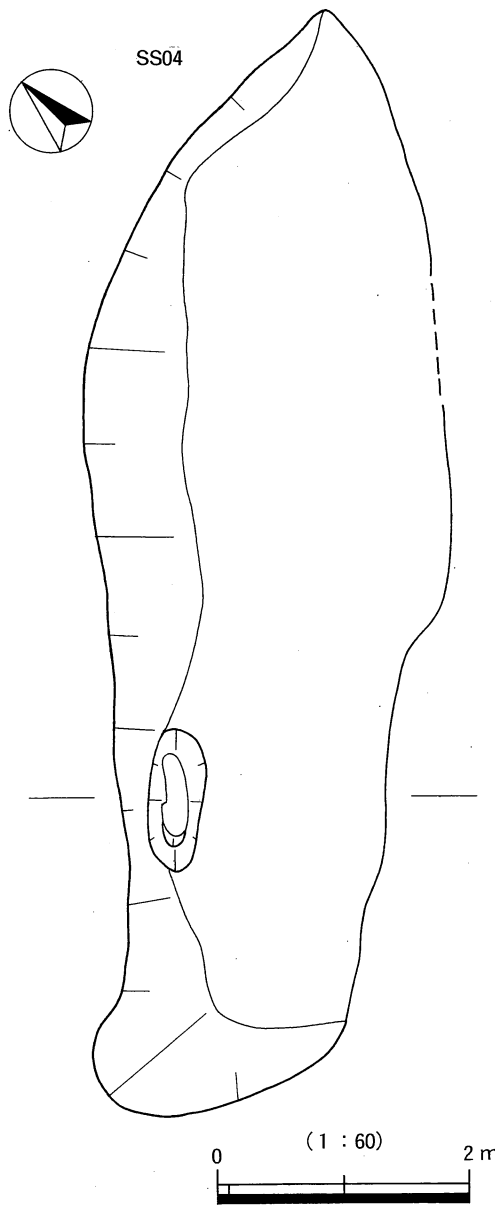
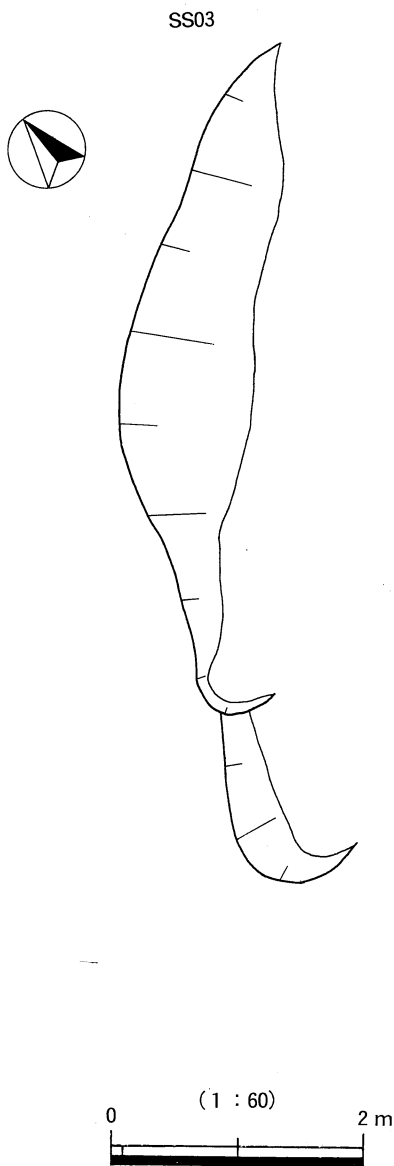
挿図48 陰田隠れが谷遺跡 2区1テラスSS01・06・07遺構図



- ① 暗褐色土
- ② 褐色土
- ③ 淡灰褐色土 (炭多量含む)
- ④ 灰褐色土
- ⑤ 赤灰褐色土
- ⑥ 赤褐色と灰褐色の混り

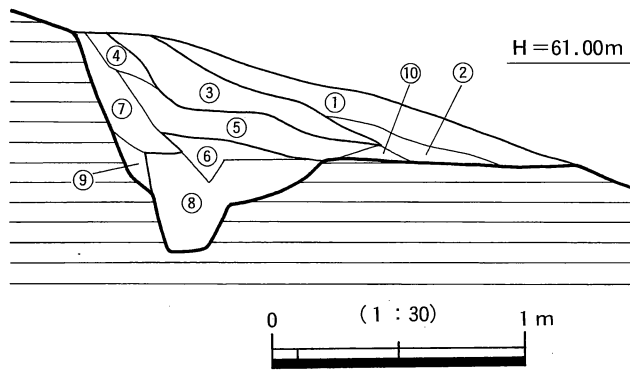
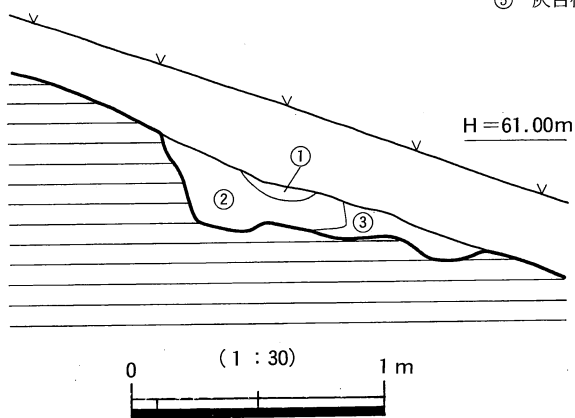


挿図49 陰田隠れが谷遺跡 2区1テラスSS02遺構図



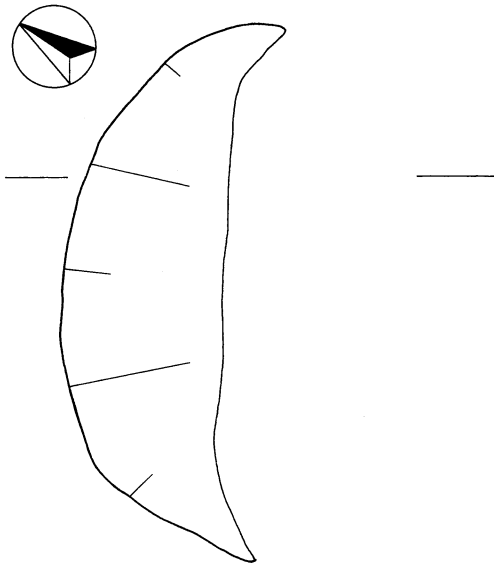
- ① 灰色土 (茶褐色土少々混)
- ② 茶褐色土 (粘性)
- ③ 灰色土 (茶微量混る)

- ④ 淡灰褐色シルト (木の根、炭少々混)
- ⑤ 淡灰褐色粘質シルト (①よりやや赤み)
- ⑥ 淡褐色粘質シルト (⑤より粘質強、炭混)
- ⑦ 淡褐色粘質シルト (炭なし)
- ⑧ 灰白褐色粘質シルト (炭混)
- ⑨ 赤褐色粘質土 (緻密)
- ⑩ 赤褐色粘質土 (⑨よりやや粗)

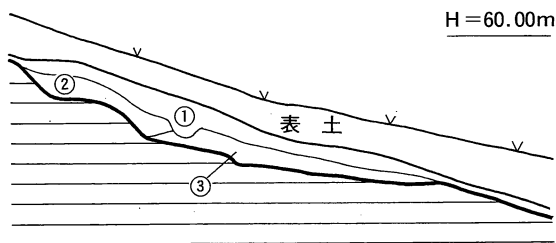
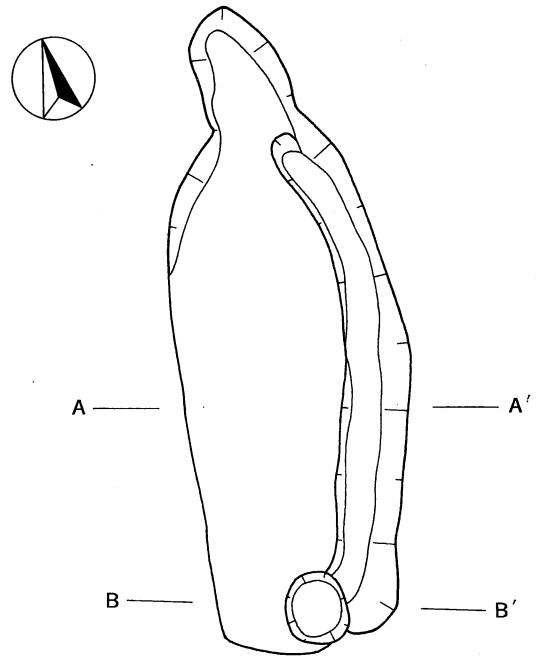


挿図50 陰田隠れが谷遺跡 2区2テラスSS03、1テラスSS04遺構図

SS05

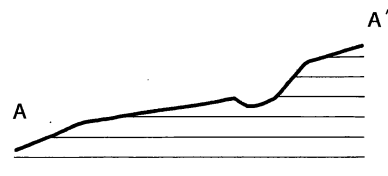


SS12

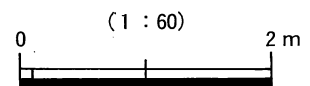
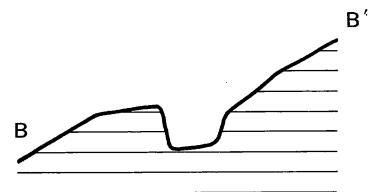


- ① 灰茶褐色土
- ② 赤褐色土と茶褐色土混合
- ③ 赤黄褐色土

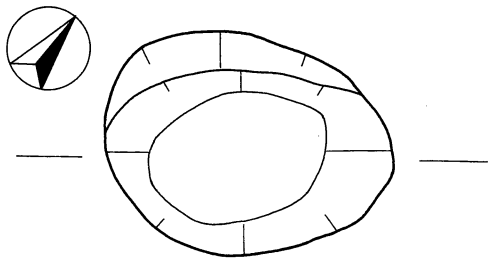
H=61.50m



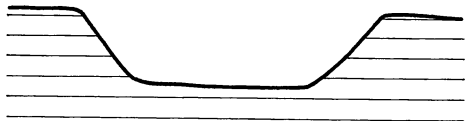
H=61.50m



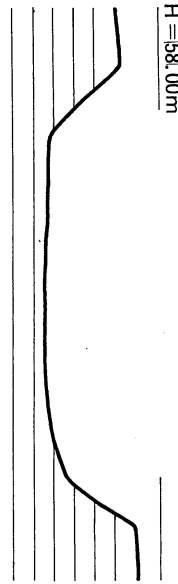
挿図51 陰田隠れが谷遺跡 2区1テラスSS05・12遺構図



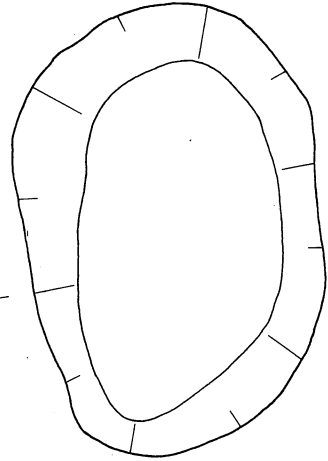
H = 60.30m



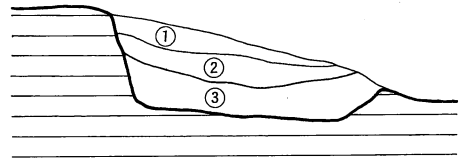
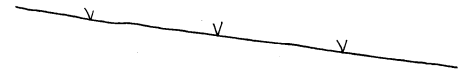
SK31



H = 58.00m



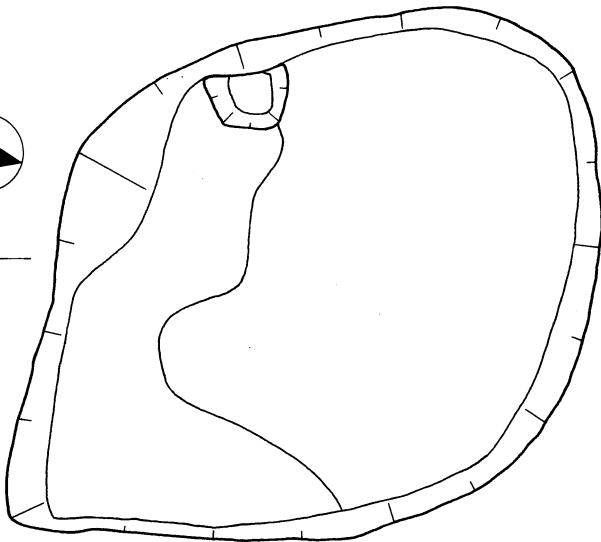
H = 58.50m



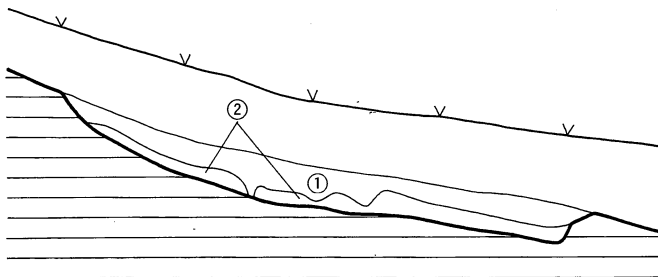
SK08

- ① 灰色土茶褐色少量混り炭少々混り
(0.2cm ~ 3cm 大炭少量混り)
(非常に硬くしまっている)
- ② 灰色土茶褐色混り炭混り
(0.5cm ~ 2cm 大炭混り)
(硬くしまっている。やや粘性あり)
- ③ 茶色土灰微量混り
(②よりやわらかく粘性が強い)

SK33

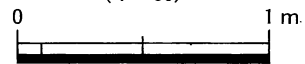


H = 59.00m

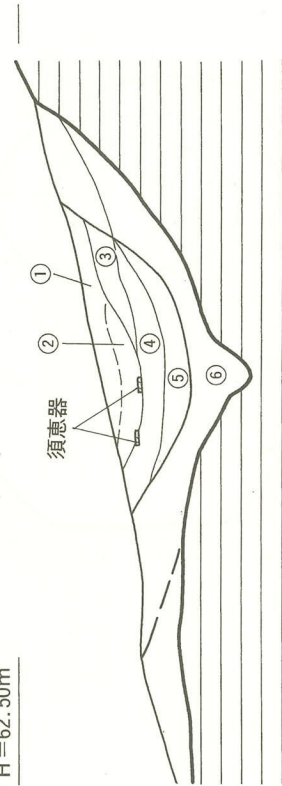
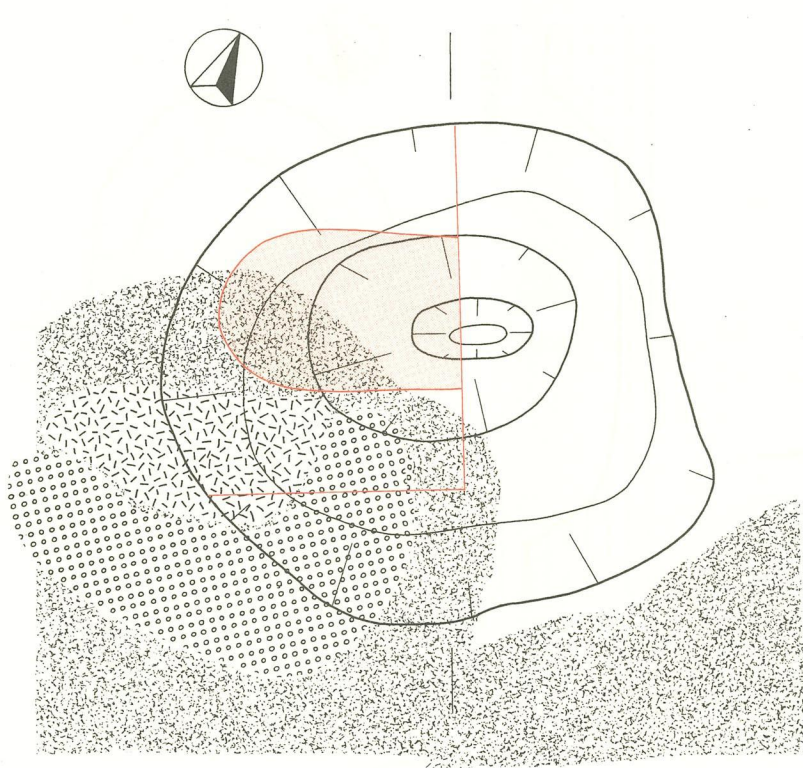


- ① 灰色土茶微量混り
(灰多量混り・硬くしまっている)
- ② 茶色土灰微量混り
(灰微量混り・①よりやややわらかく粘性が強い)

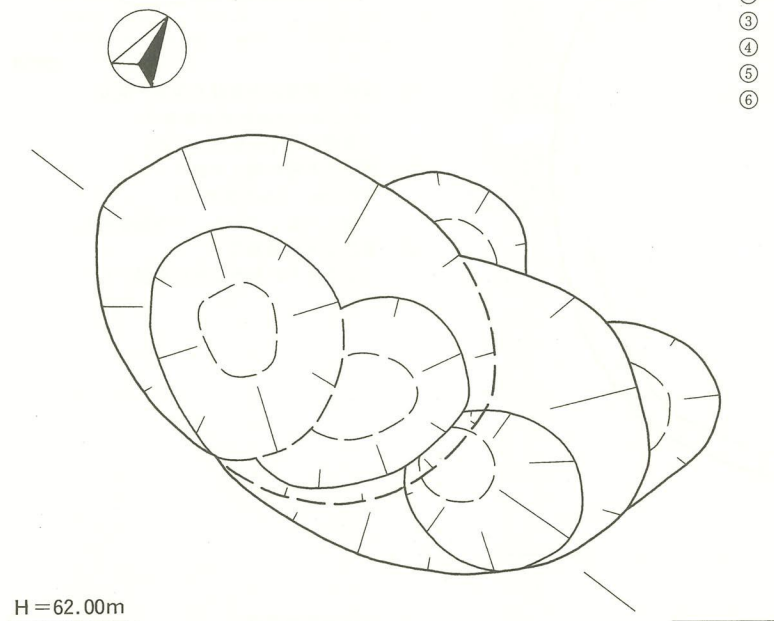
(1 : 30)



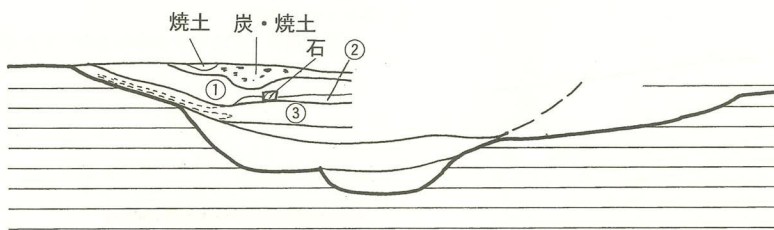
挿図52 陰田隠れが谷遺跡 2区1テラスSK31、2テラスSK08・33遺構図



- ① 黄灰色土
- ② 黄褐色粘質土 (白色の小粒含む、下部に炭多し)
- ③ 赤色～暗赤褐色土 (焼土)
- ④ 暗灰色土 (灰、小さな炭粒子)
- ⑤ 黒色土 (炭、灰)
- ⑥ 暗灰色土 (炭は少ない、緻密、よくしまる)

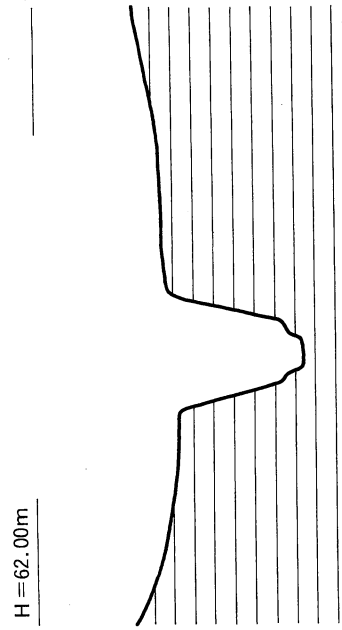
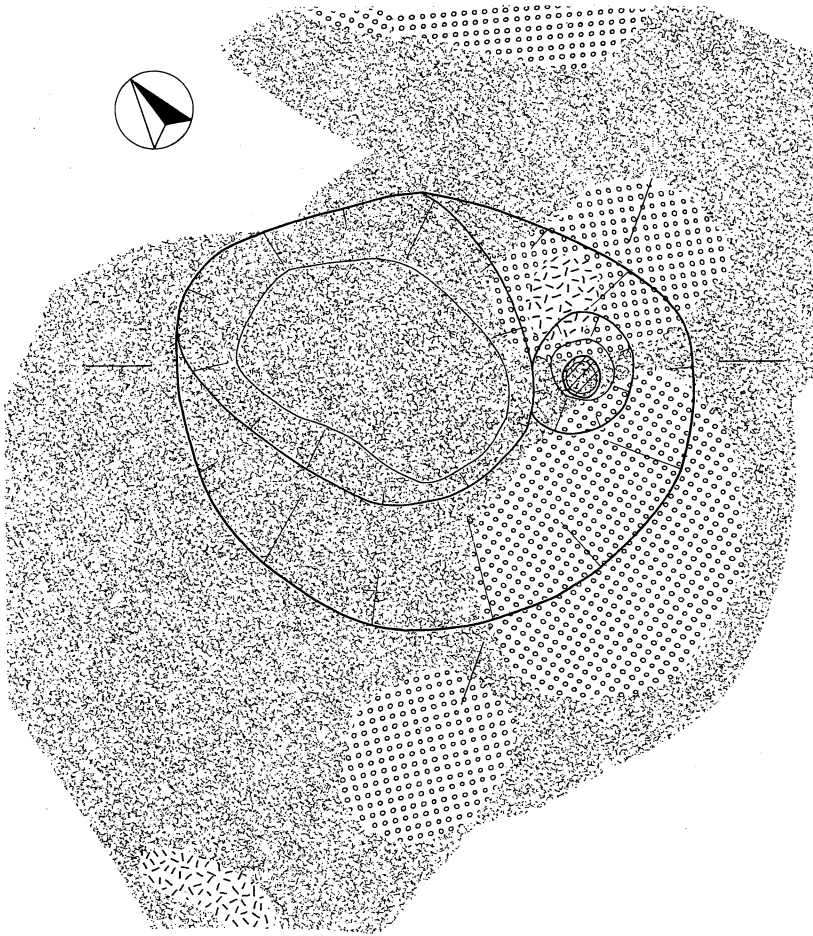


H = 62.00m

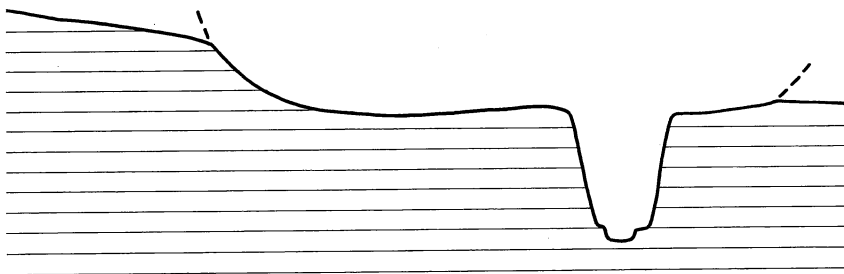


- ① 灰白色砂質シルト
- ② 黒灰色砂質シルト
- ③ 炭層

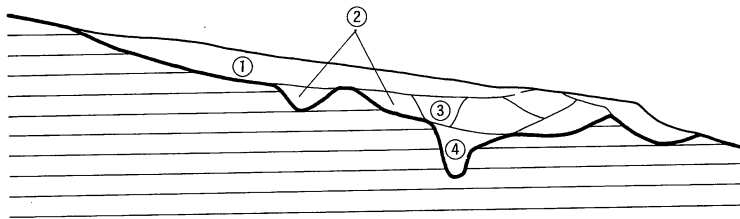
挿図53 陰田隠れが谷遺跡 2区1テラスSK11遺構図



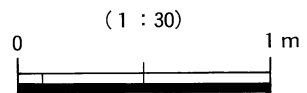
H = 62.00m



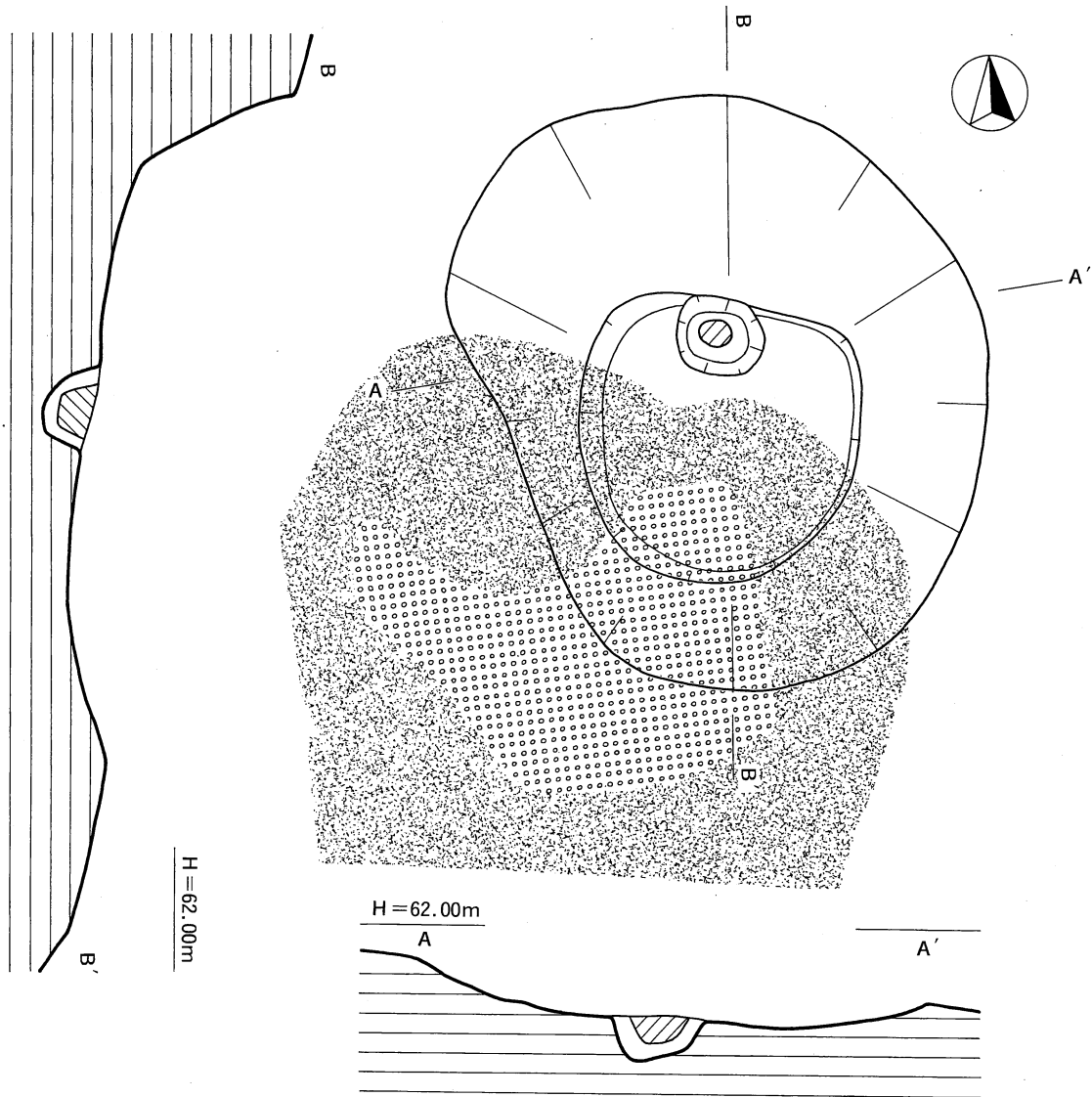
H = 62.50m



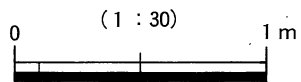
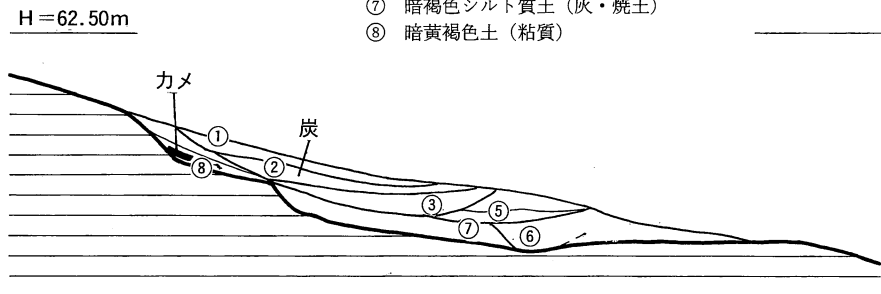
- ① 灰色土 (炭、焼土粒)
- ② 暗赤褐色土 (白色小粒含、軟)
- ③ 暗褐色土 (白色小粒含、軟)
- ④ 暗灰褐色土 (軟)



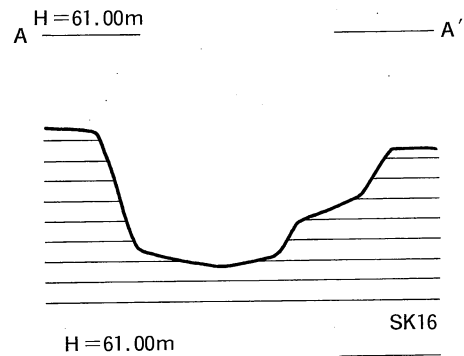
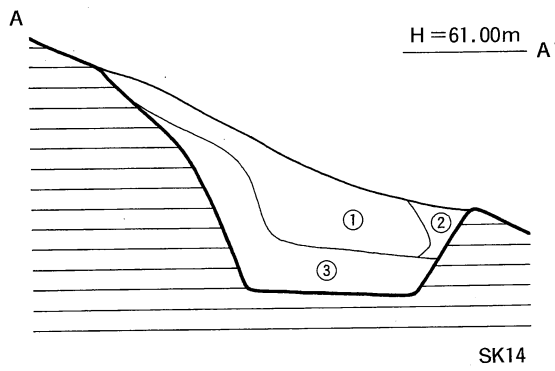
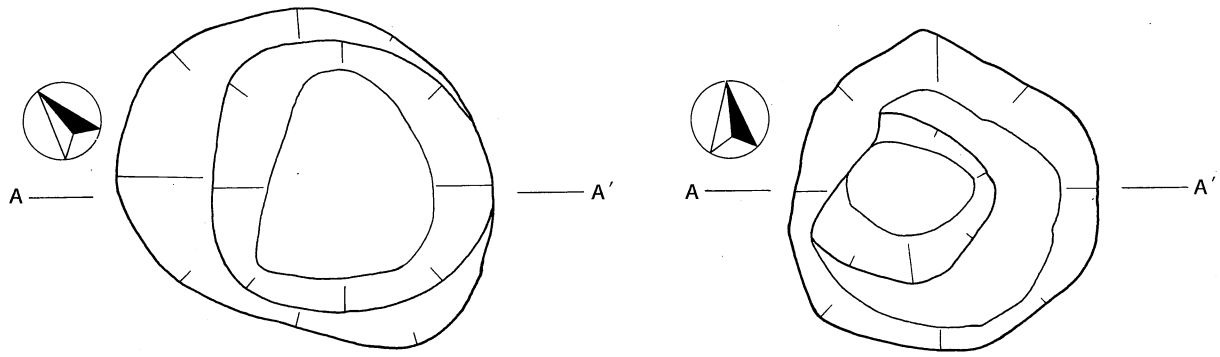
挿図54 陰田隠れが谷遺跡 2区1テラスSK12遺構図



- ① 暗灰色土
- ② 黒灰色土（炭粉）
- ③ 黒色土（炭粒）
- ④ 黒灰色土（炭粉・炭粒）
- ⑤ 炭小粒＋黄褐色土
- ⑥ 暗灰色土（灰）
- ⑦ 暗褐色シルト質土（灰・焼土）
- ⑧ 暗黄褐色土（粘質）

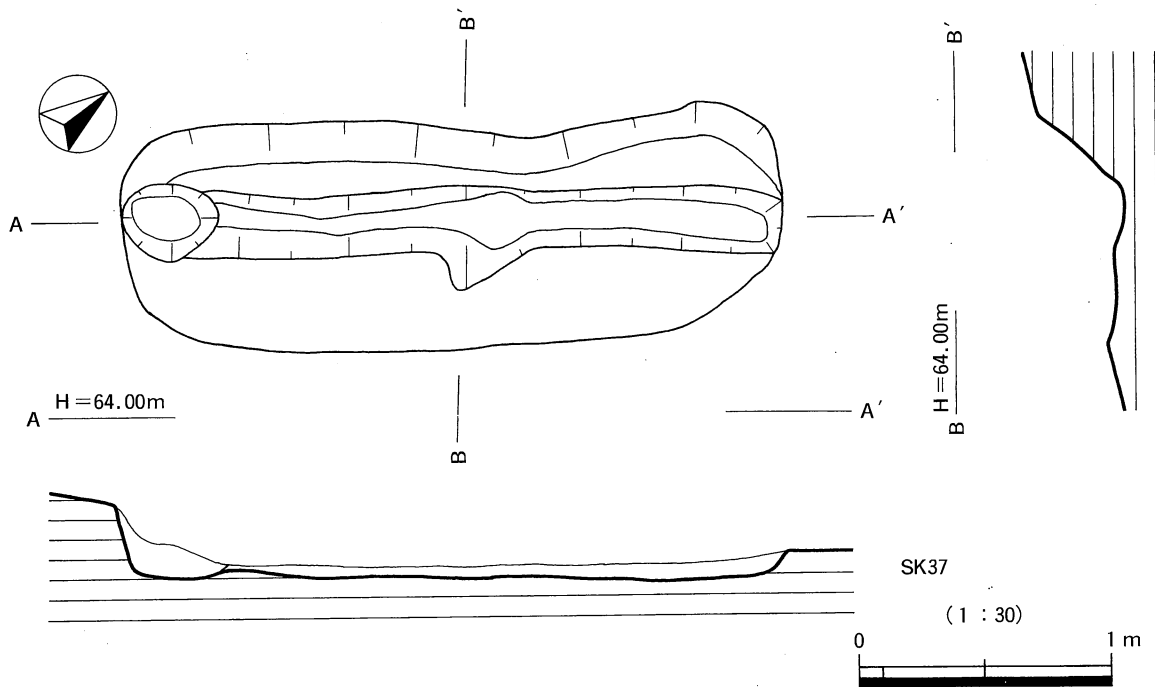
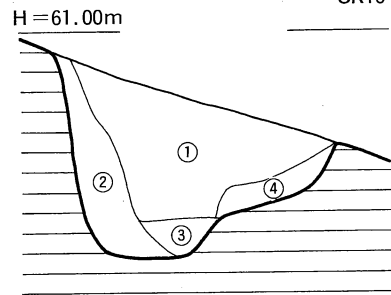


挿図55 陰田隠れが谷遺跡 2区1テラスSK13遺構図

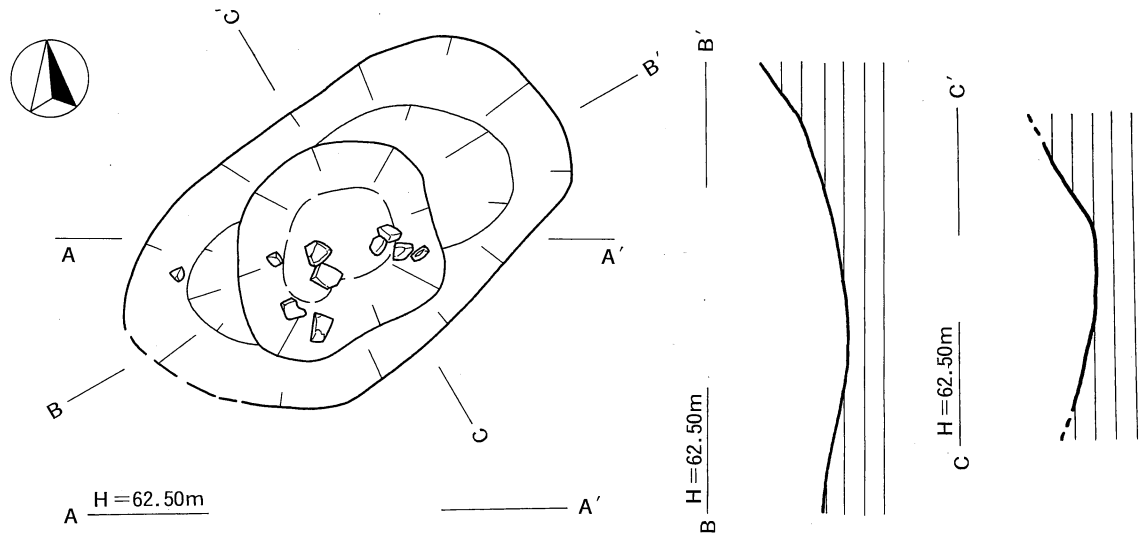


- ① 灰褐色土（小礫が混じる）
- ② 赤色土（しまる）
- ③ 赤灰褐色土（やや粘）

- ① 灰褐色土（小礫が混じる）
- ② 赤褐色土
- ③ 暗灰褐色土
- ④ 赤褐色と灰褐色土の混じり



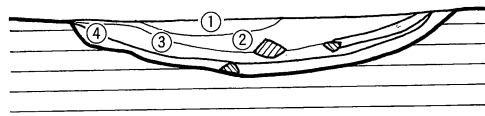
挿図56 陰田隠れが谷遺跡 2区1テラスSK14・16・37遺構図



A H=62.50m

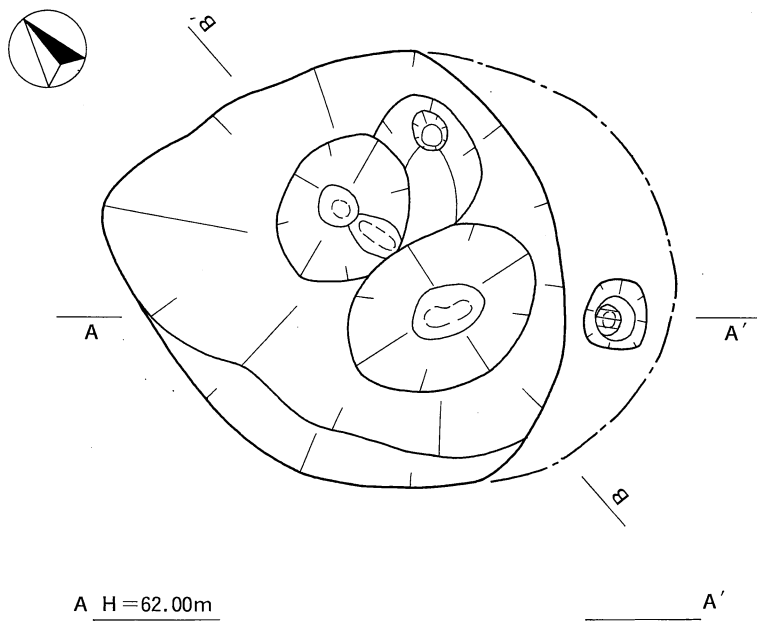
B H=62.50m

C H=62.50m



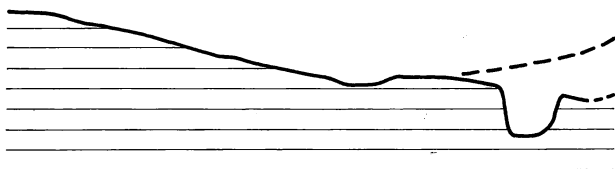
SK17

- ① 褐色粘質土
- ② 褐色粘質土+砂質シルト
- ③ 茶~褐色砂
- ④ 炭少々白砂 (鉄分含む)

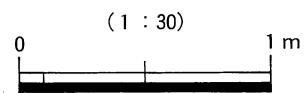


A H=62.00m

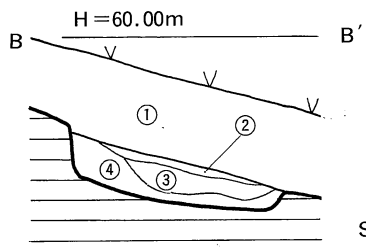
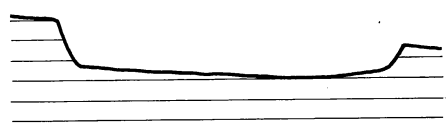
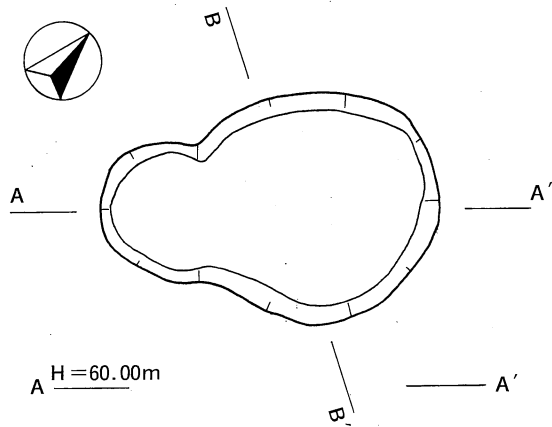
B H=62.00m



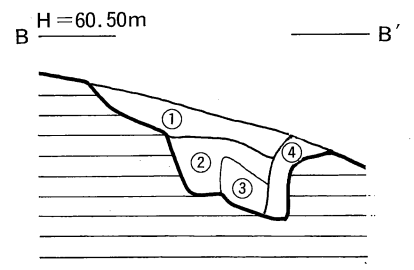
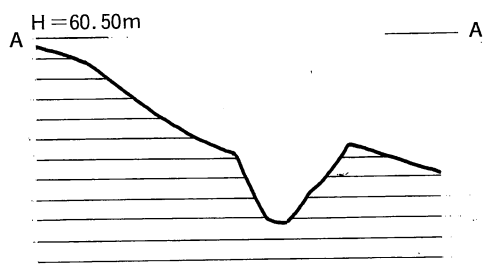
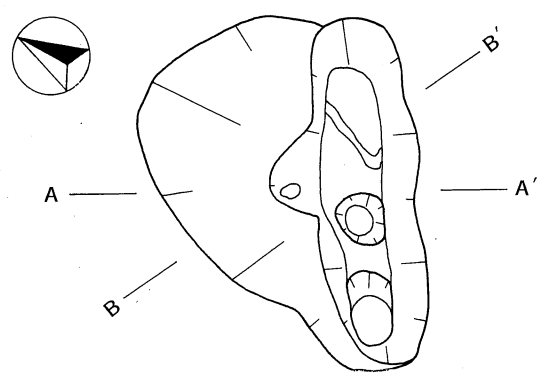
SK18



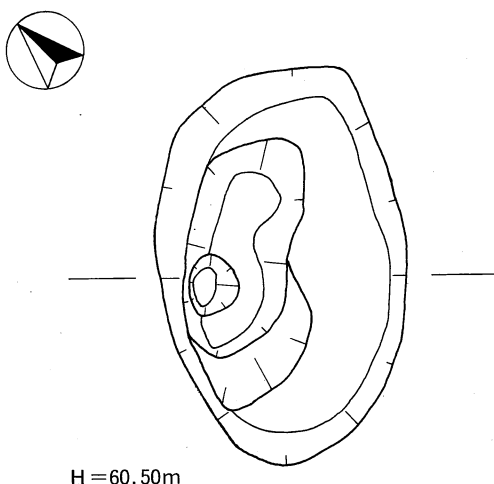
挿図57 陰田隠れが谷遺跡 2区1テラスSK17・18遺構図



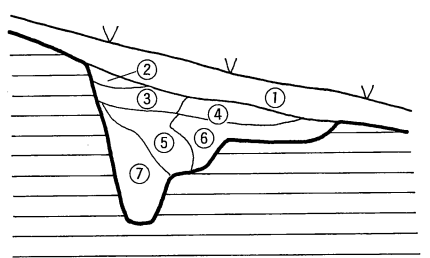
SK19



SK21



H=60.50m



SK20

SK19

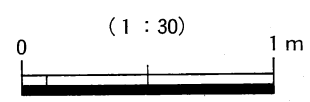
- ① 表土
- ② 灰色土 (茶色微量混、かたくしまっている、粘性なし)
- ③ 茶色土 (灰少量混、かたくしまっている、粘性なし)
- ④ 濃茶色土 (灰多量混、③よりやわらかい、粘性強い)

SK21

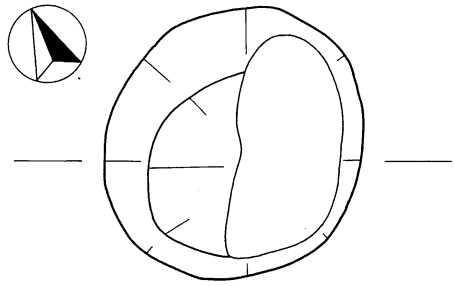
- ① 灰色土 (茶褐色少量混、炭 (1cm大) 微量混、かたくしまっている、粘性弱)
- ② 黒灰色土 (橙微量混、炭 (1cm大) 微量混、かたくしまっている、粘性弱)
- ③ 茶褐色土 (灰多量混、①よりやわらかい、粘性強い)
- ④ 明灰色土 (茶褐色微量混)

SK20

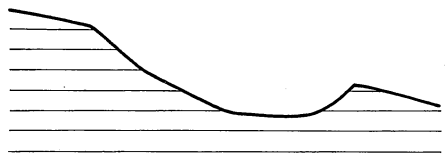
- ① 表土
- ② 茶褐色土 (灰多量混、かたくしまっている、粘性弱)
- ③ 灰色土 (かたくしまっている、粘性弱)
- ④ 明灰色土 (かたくしまっている、粘性弱)
- ⑤ 明灰色土 (茶褐色少量混、かたくしまっている、粘性弱)
- ⑥ 灰色土 (茶褐色多量混、かたくしまっている、粘性弱)
- ⑦ 黒灰色土 (①よりやわらかい、粘性強い)



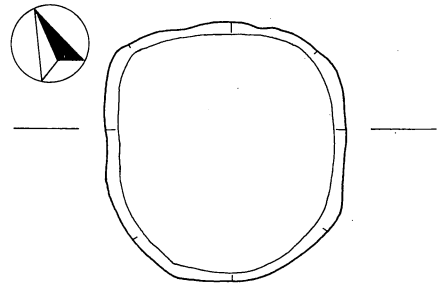
挿図58 陰田隠れが谷遺跡 2区1テラスSK20・21、2テラスSK19遺構図



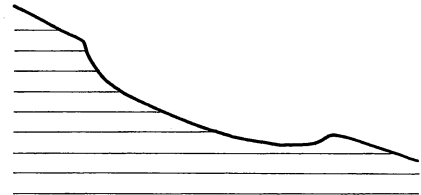
H = 61.50m



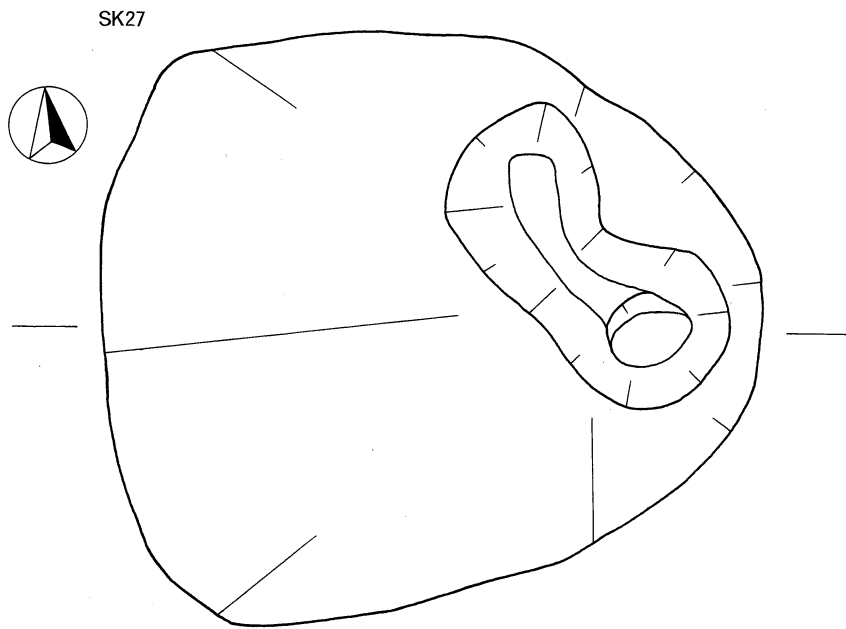
SK22



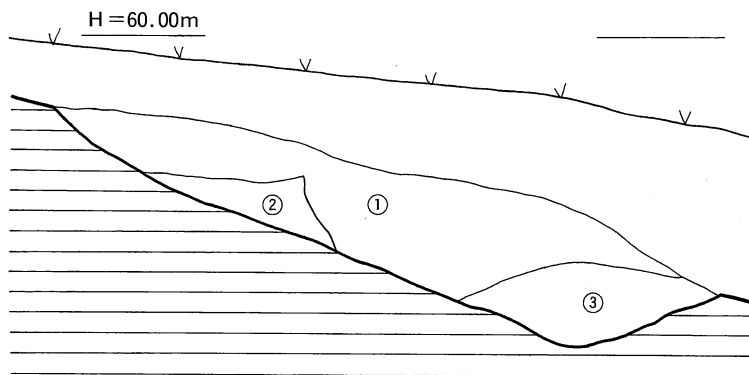
H = 60.50m



SK23

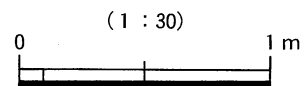


SK27

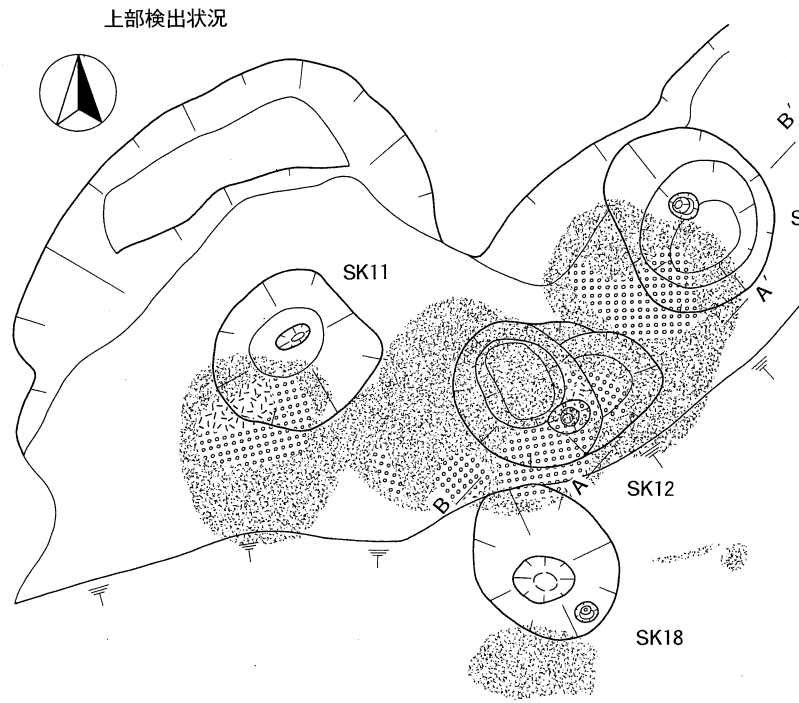


H = 60.00m

- ① 明灰色土 (やや軟)
- ② 茶褐色土 (硬くなる)
- ③ 黒灰色土 (硬くなる、やや粘質)

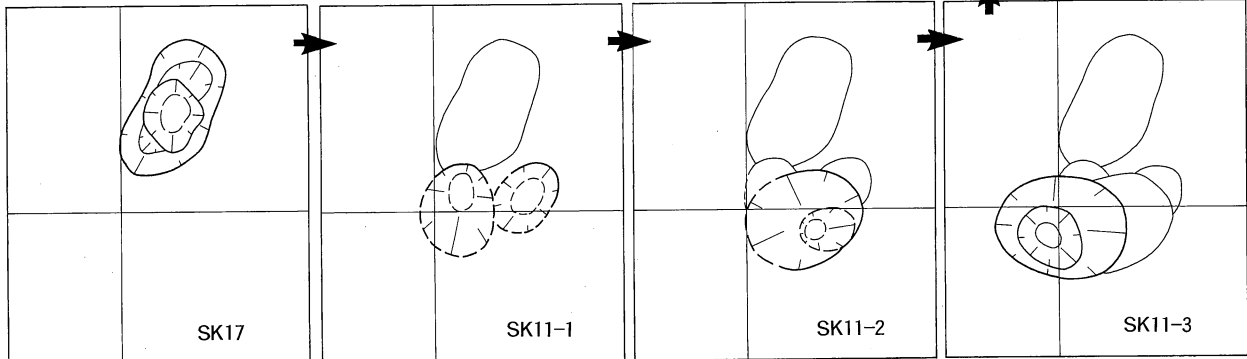
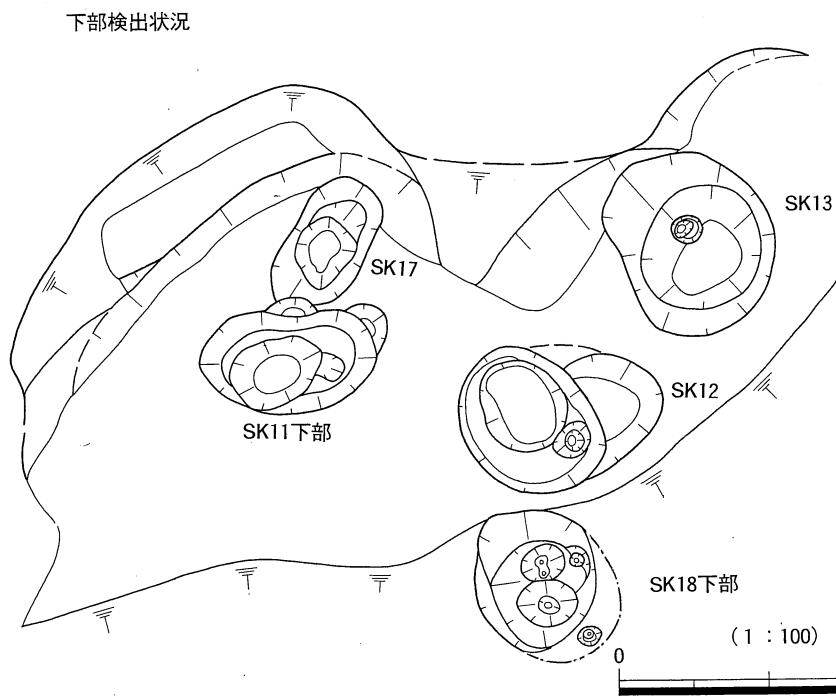
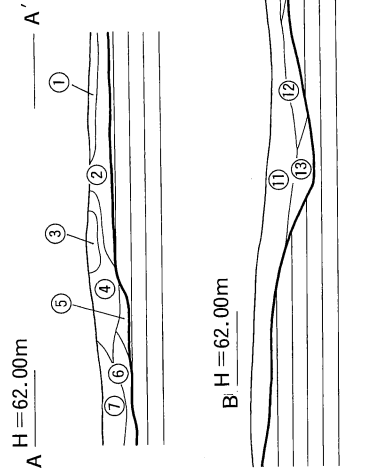


挿図59 陰田隠れが谷遺跡 2区1テラスSK22・23、2テラスSK27遺構図

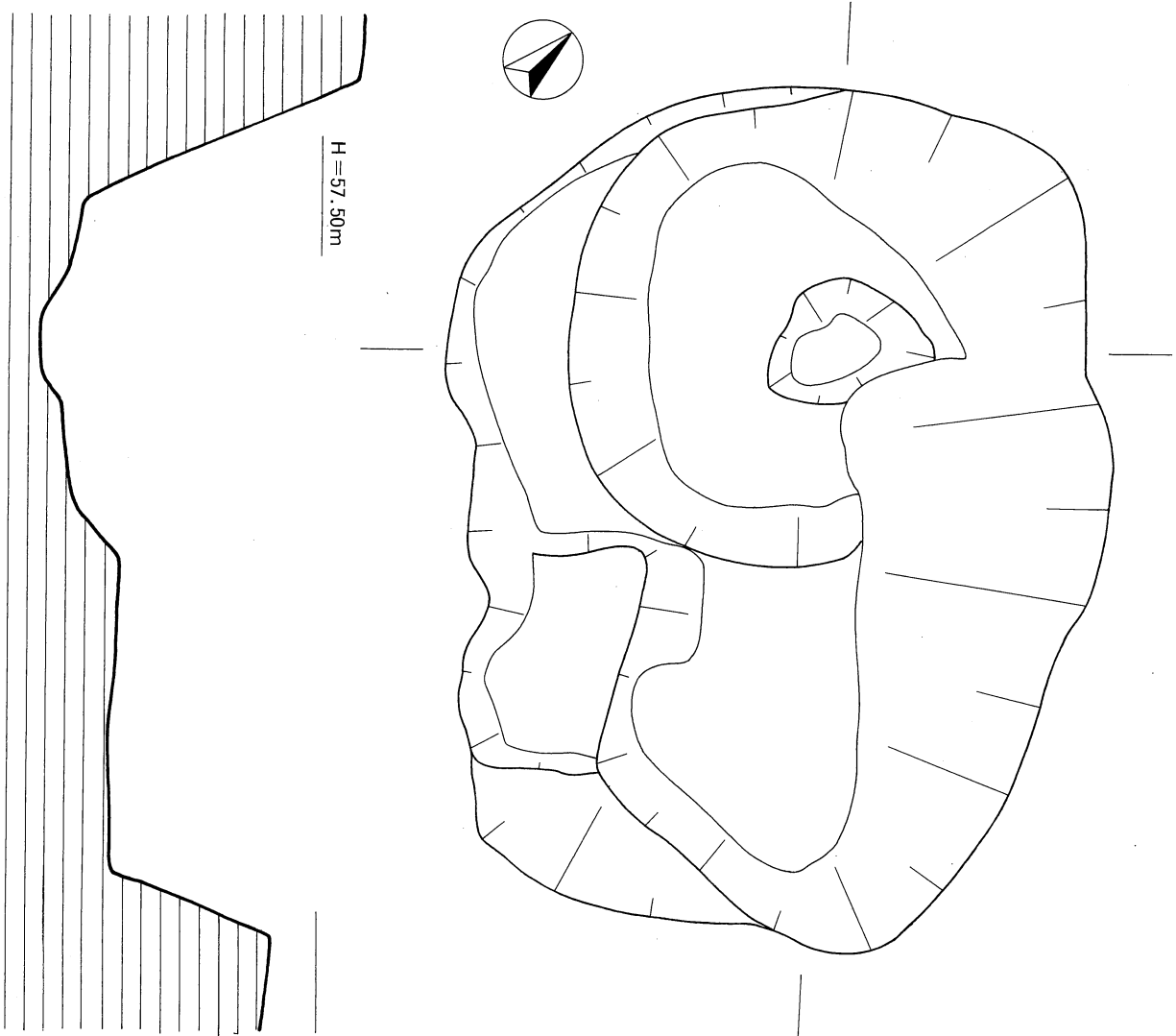


- ① 黄色土 (砂質)
- ② 黄褐色土 (炭が少し混じる)
- ③ 赤褐色土 (炭が少し混じる)
- ④ 暗褐色土 (炭が少し混じる)
- ⑤ 暗黄褐色土
- ⑥ 黒色土 (炭が多い)
- ⑦ 淡黒色土 (炭、フロックが多い)
- ⑧ 褐色土 (炭が少し混じる)
- ⑨ 淡褐色土 (砂質)
- ⑩ 濃褐色土 (炭が多い)
- ⑪ 茶褐色土
- ⑫ 黄褐色土
- ⑬ 黄色土 (よくしまる)

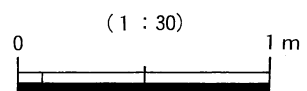
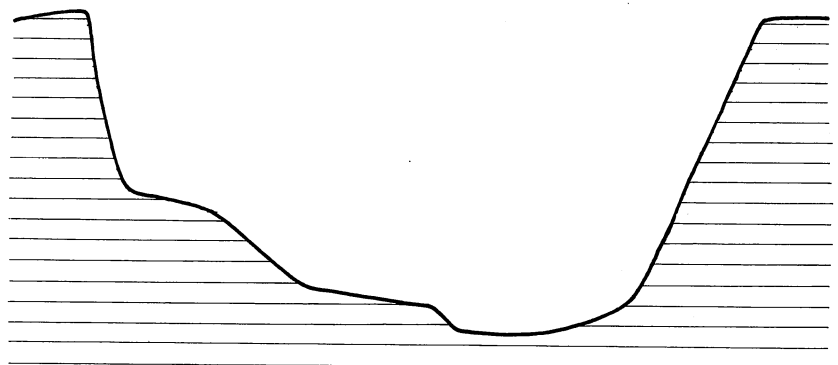
- ① 褐色土 (炭混)
- ② 黄褐色土 (砂質)
- ③ 濃褐色土 (炭、焼土が多い)
- ④ 褐色土 (炭混)
- ⑤ 黄褐色土 (少し汚れている)
- ⑥ 濃褐色土 (砂質)
- ⑦ 淡黒褐色土 (炭が多い)



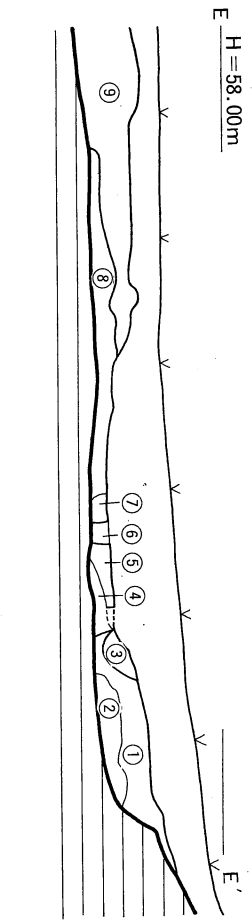
挿図60 陰田隠れが谷遺跡 2区1テラス炭溜1遺構図



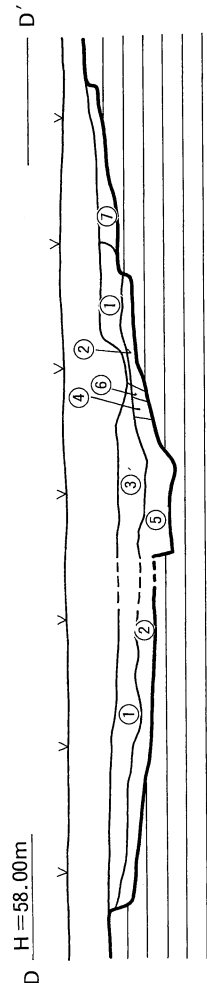
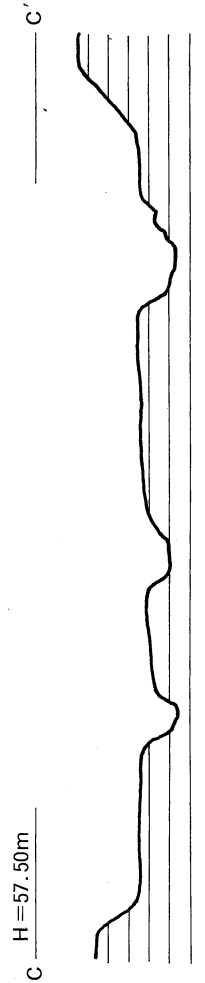
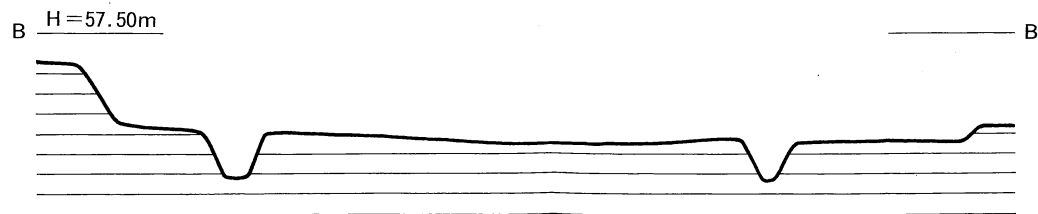
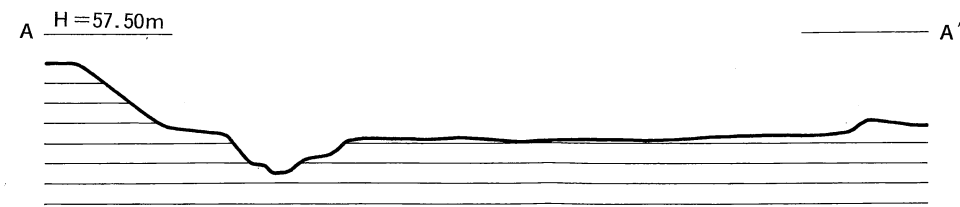
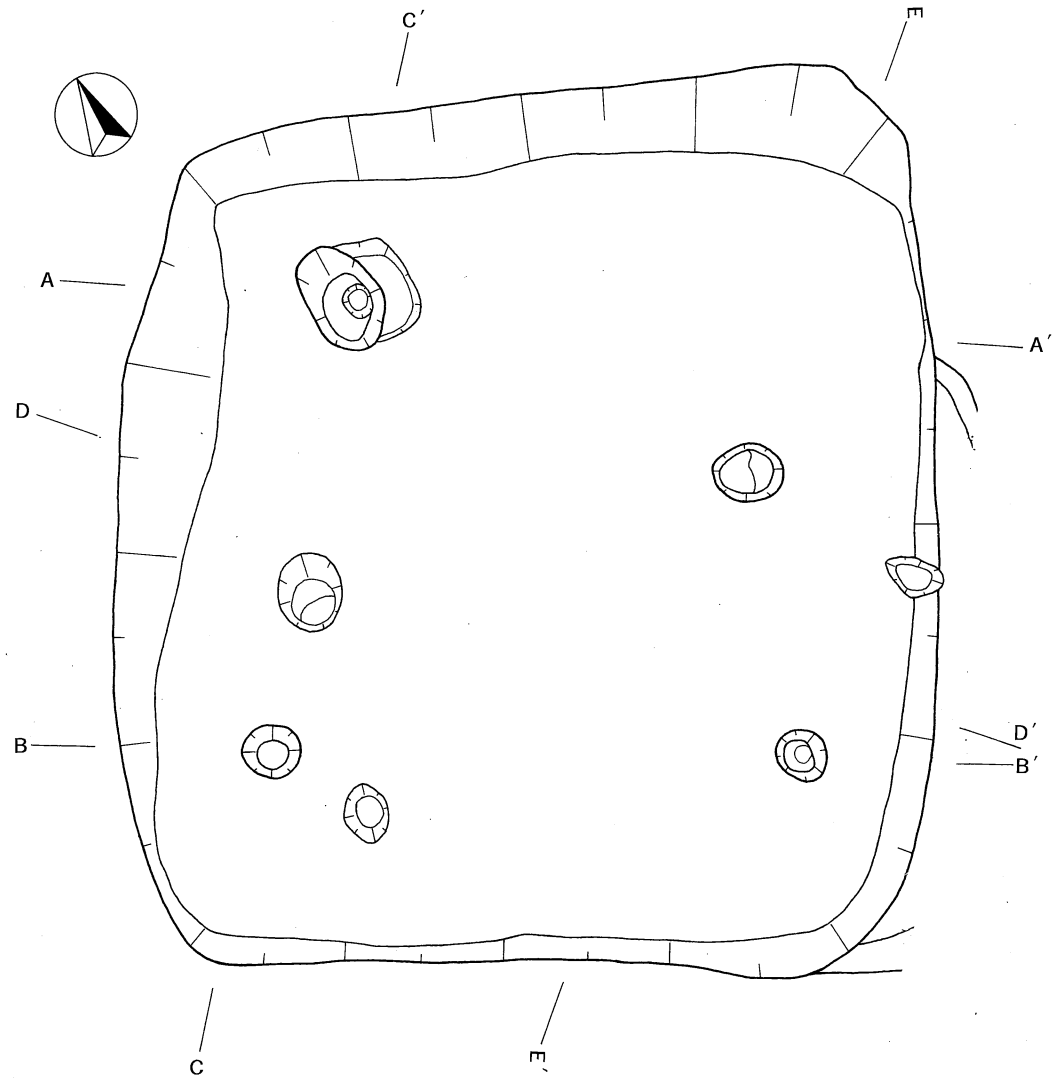
H = 58.00m



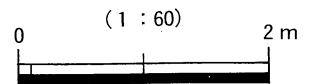
挿図61 陰田隠れが谷遺跡 2区2テラスJSK04遺構図



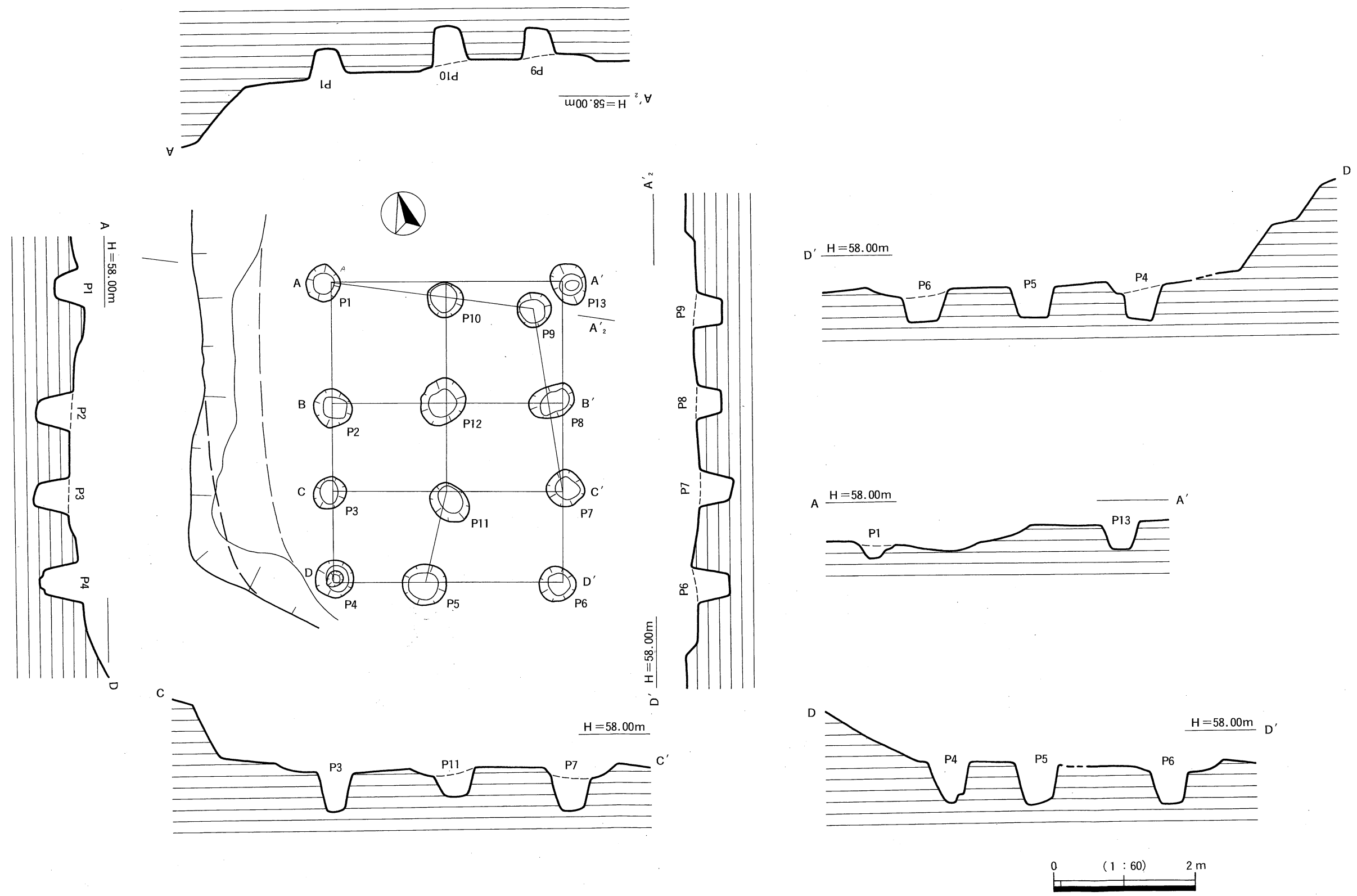
- ① 灰色土 (茶混、硬い)
- ② 黒灰色土 (茶混、やや軟らかい)
- ③ 灰色土 (茶少量混、炭微量混、硬い)
- ④ 黒灰色土 (茶少量混、炭微量混、やや軟らかい)
- ⑤ 灰色土 (茶少量混、炭微量混、硬い)
- ⑥ 茶色土 (炭微量混、硬くやや粘性あり)
- ⑦ 灰色土 (炭微量混、やや軟らかく粘性あり)
- ⑧ 茶灰色土 (炭少量混、軟らかく粘性あり)
- ⑨ 灰色土 (茶少量混、軟らかく粘性あり)



- ① 灰色土 (茶褐色混、炭微量、オレンジ微量、硬く粘性なし、炭0.3~0.5cm大)
- ② 茶色土 (茶少量混、硬い)
- ③ 灰色土 (茶少量混、やや軟らかい)
- ④ 茶色土 (軟らかい)
- ⑤ 濃灰色土 (石微量、茶色微量、軟らかく粘性あり)
- ⑥ 灰色土 (軟らかく粘性あり)
- ⑦ 茶色土 (やや硬い)

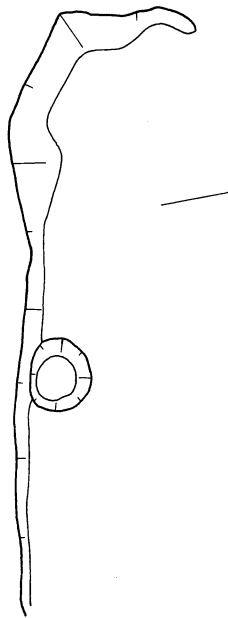


挿図62 陰田隠れが谷遺跡 2区2テラスSI02遺構図



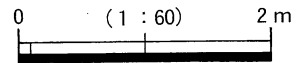
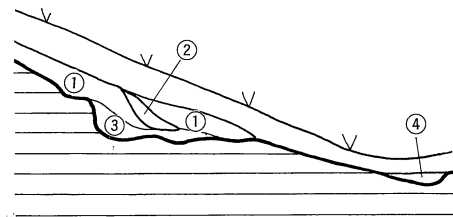
挿図63 陰田隠れが谷遺跡 2区2テラスSB17遺構図

SS08

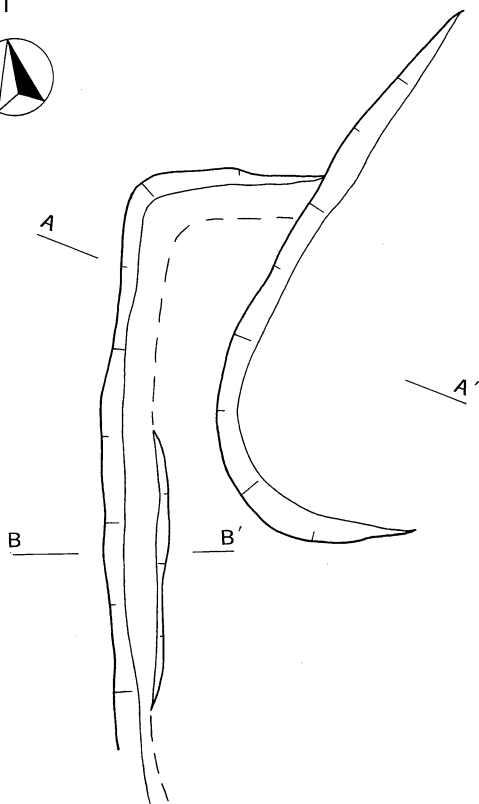


- ① 茶褐色土（灰多量、黄少量混り、硬くくずれやすい粘質弱い）
- ② 茶褐色土（灰少量炭微量混り、③と同じ位やわらかく、粘質がやや弱い）
- ③ 黄褐色土茶混り（粘質が弱い）
- ④ 黒茶褐色黄混り

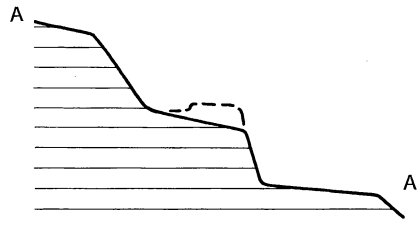
H=58.50m



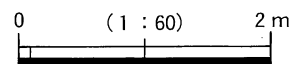
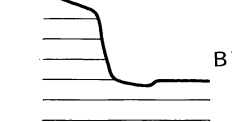
SS11



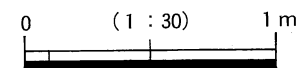
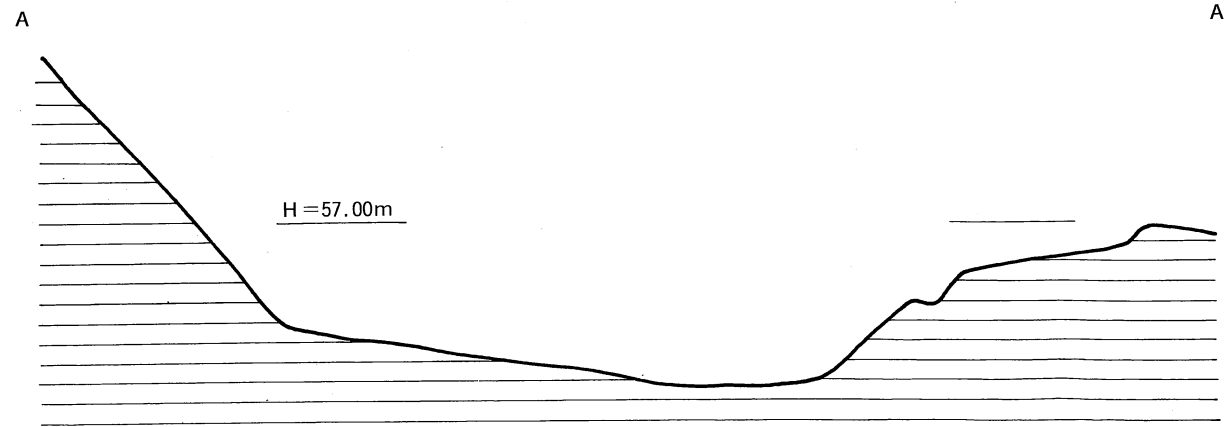
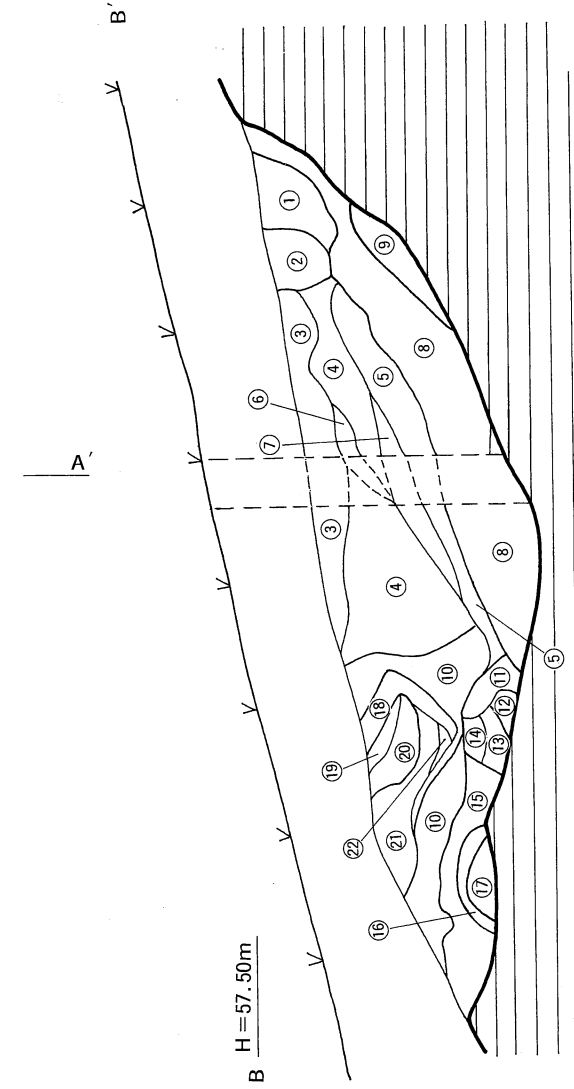
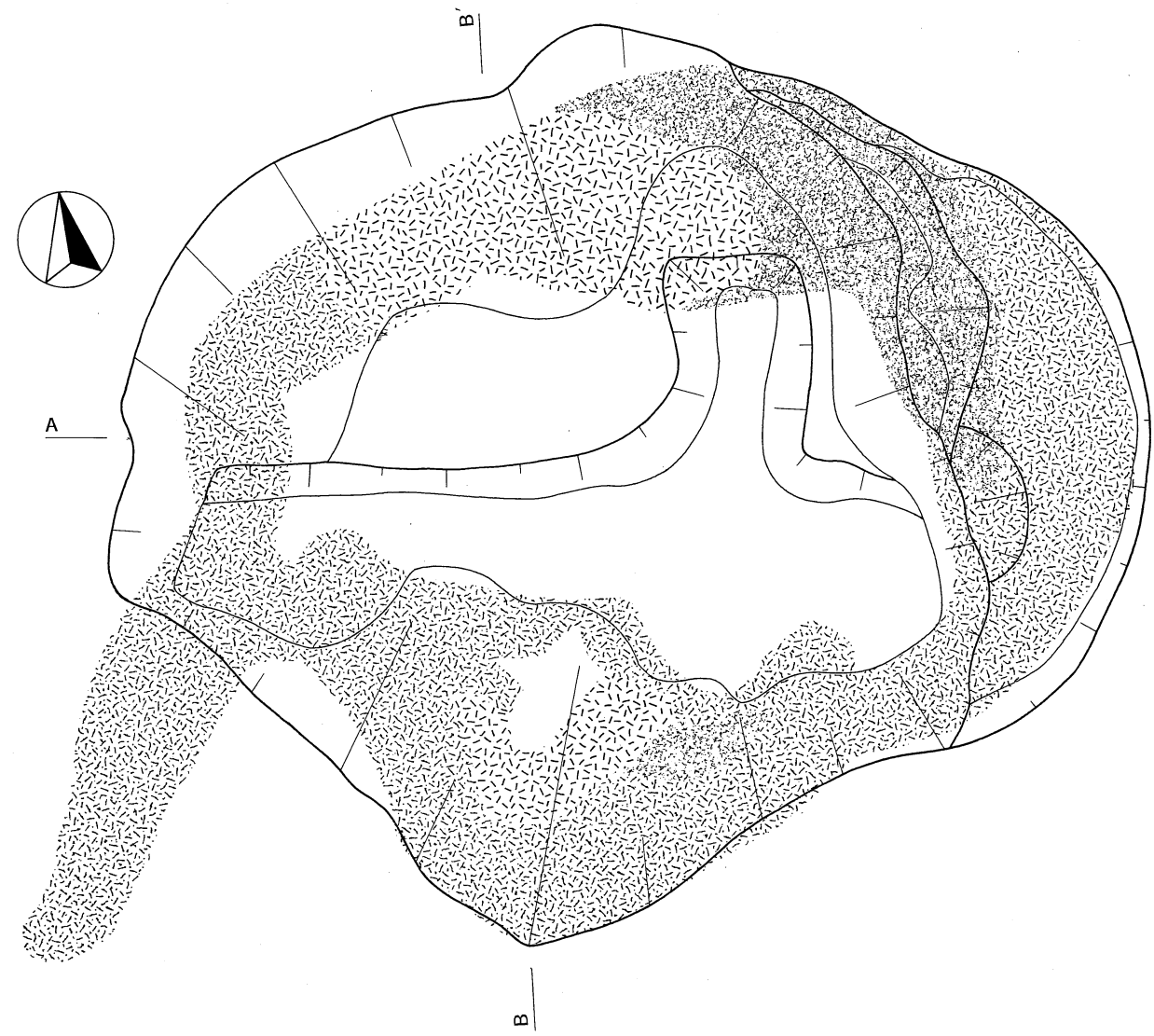
H=58.50m



H=58.50m

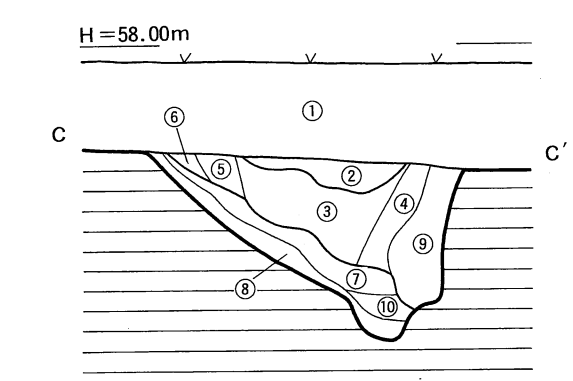
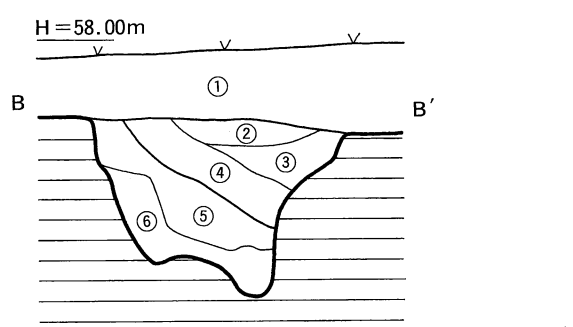
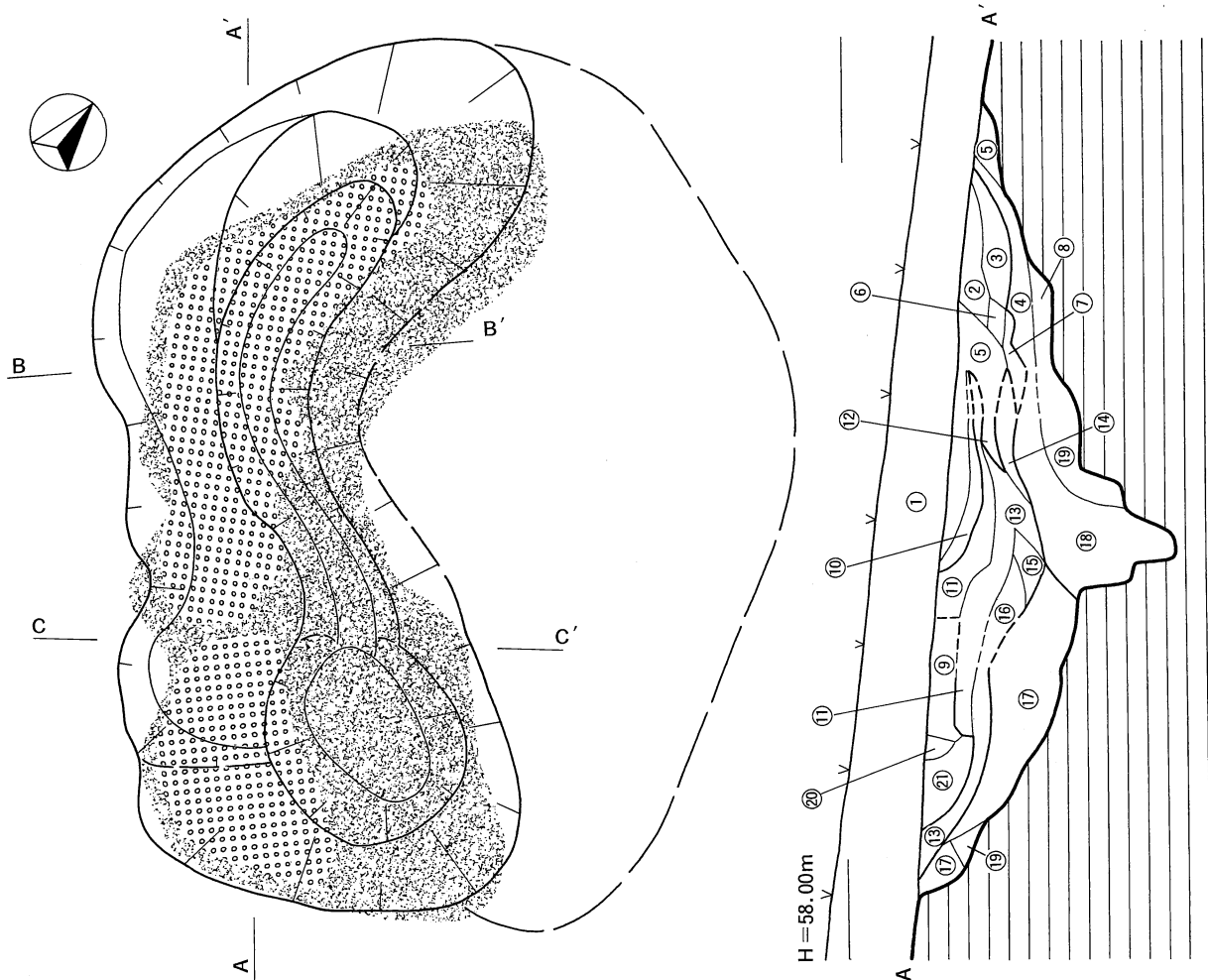


挿図64 陰田隠れが谷遺跡 2区3テラスSS08・11遺構図



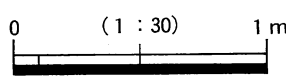
挿図65 陰田隠れが谷遺跡 SK07遺構図

- ① 灰色土茶少量混 (0.1cm~0.2cm大の炭少量混、熱による変成少々、灰+炭少々)
- ② 黒灰褐色土 (0.1cm~0.3cm大の炭少量混、①より硬くしまつていて、熱による変成、灰+炭少々)
- ③ 茶色土黒微量混 (黄土色に近い、①よりややわらかくくずれやすい)
- ④ 茶色土灰少量混 (黄土色に近い、③より少しやわらかくくずれやすい、熱による変成少々)
- ⑤ 茶色土灰少量混 (黄土色に近い、④より少しやわらかくくずれやすい、④より少し灰が少ない)
- ⑥ 茶褐色土灰微量混 (②よりさらに硬くしまつている)
- ⑦ 茶色土 (黄土色に近い、⑥よりさらに硬くしまつている)
- ⑧ 灰色土茶混黒微量混 (0.3cm~0.5cm大炭微量混、①より少しやわらかくくずれやすい)
- ⑨ 灰色土茶多量混黒微量混 (⑧より少しやわらかく、くずれやすい)
- ⑩ 灰色土茶少量混 (やややわらかいがしまつている、①と同じくらい)
- ⑪ 茶褐色土灰混赤微量混 (⑤よりさらにやわらかくくずれやすい)
- ⑫ 茶色土 (⑦より暗く濃い茶色、⑩より少しやわらかくくずれやすい)
- ⑬ 灰色土茶褐色少量混 (⑫と同じ位やわらかくくずれやすい)
- ⑭ 灰色土茶微量混 (⑫と同じ位やわらかくくずれやすい)
- ⑮ 茶褐色土灰多量混 (⑩より少しやわらかいがしまつている)
- ⑯ 灰色土茶少量混黒少量混 (⑩と同じ位やわらかくくずれやすい)
- ⑰ 茶褐色土灰微量混 (⑨と同じ位やわらかくくずれやすい)
- ⑱ 赤褐色土灰微量混 (熱による赤色変成、⑩よりさらに硬くしまつている)
- ⑳ 赤茶褐色土灰微量混 (熱による赤色変成、⑯より少し硬いがくずれやすい、3cm~4cm大赤褐色ブロック少々)
- ㉑ 茶褐色土 (灰少量混、0.1cm大炭微量混、㉒と同じ位やわらかくくずれやすい、2cm~6cm大茶褐色土ブロック少々)
- ㉒ 赤茶褐色土 (0.1cm~0.3cm大炭微量混、熱による赤色変成、㉑と同じ位やわらかくくずれやすい、3cm~5cm大赤茶褐色土ブロック少々)

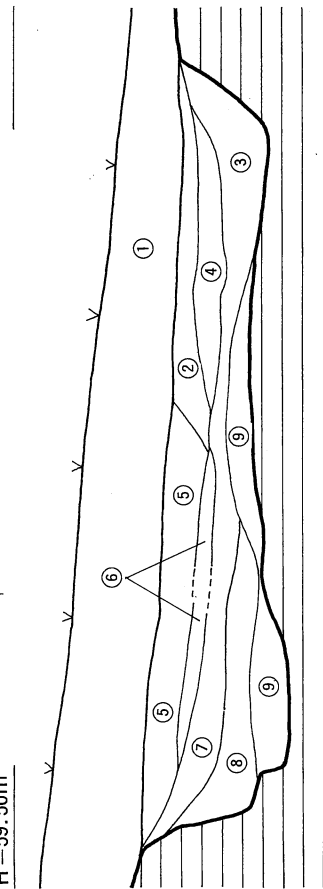
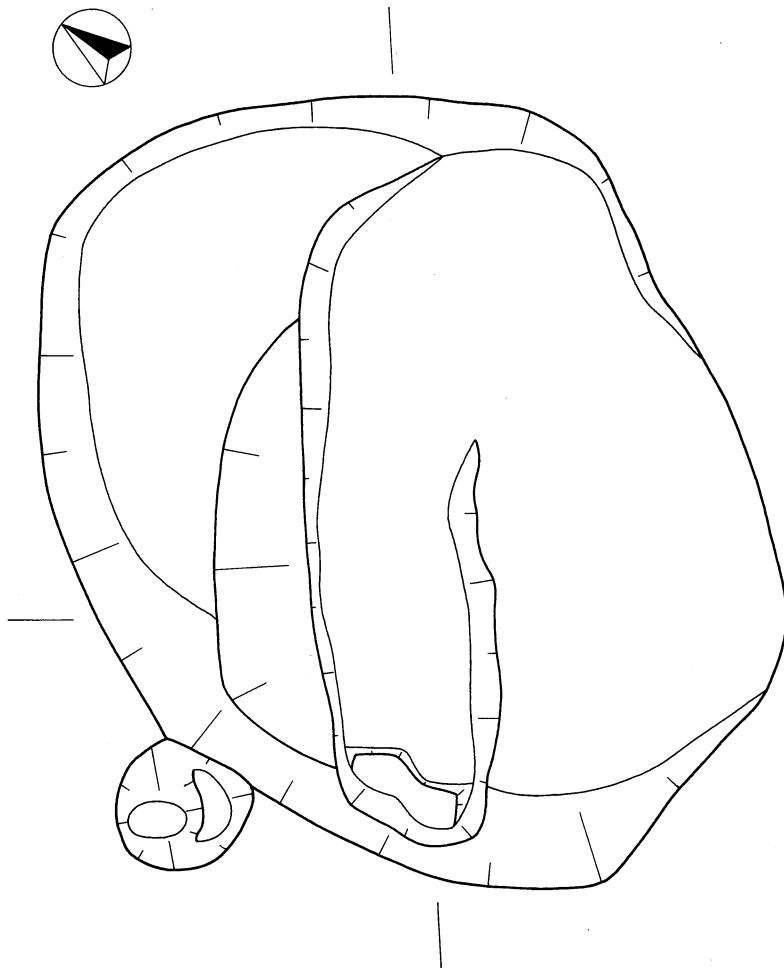


- ① 表土
- ② 暗灰色土 (橙微量混、灰多量混、硬くしまっている)
- ③ 灰色土 (茶多量混、灰多量混、②よりやわらかく粘性が多い)
- ④ 茶色土 (灰多量混、②と同じくらい硬くしまっている)
- ⑤ 明灰色土 (②よりも非常に硬くしまっている)
- ⑥ 黒灰色土 (⑤と同じ位やわらかく粘性が強い)
- ⑦ 灰色土 (茶褐色多量混、③よりもやわらかく③と同じ位粘性が強い)
- ⑧ 茶色土 (灰微量混、②と同じ位硬くしまっている)
- ⑨ 灰色土 (茶少量混、⑤と同じ位硬くしまっている)
- ⑩ 茶色土 (灰少量混、⑤と同じ位硬くしまっている)
- ⑪ 黒灰色土 (橙、黄微量混、炭 (1cm大) 微量混、②と同じ位硬くしまっている)
- ⑫ 黄灰色土 (黒灰色土少量混、①よりやややわらかく粘性が強い)
- ⑬ 灰色土 (茶混、橙微量混、炭 (1cm大) 少量混、⑨よりかなりやわらかく粘性が強い)
- ⑭ 黒灰色土 (橙多量混、炭 (0.5cm大) 微量混、③よりもやわらかくや粘性が弱い)
- ⑮ 橙色土 (灰少量混、⑤と同じ位やわらかく粘性が強い)
- ⑯ 灰色土 (橙微量混、炭 (0.3cm~0.5cm大) 微量混、③より少し硬く粘性が強い)
- ⑰ 茶色土 (灰微量混、非常にやわらかく粘性が強い)
- ⑱ 茶色土 (灰混、⑨と同じ位やわらかく粘性が強い)
- ⑲ 茶色土 (⑨と同じ位やわらかく粘性が強い)
- ⑳ 黒灰色土 (茶少量混、⑨より少し硬くしまる)
- ㉑ 黒茶褐色土 (灰混、⑨より少し硬くしまる)

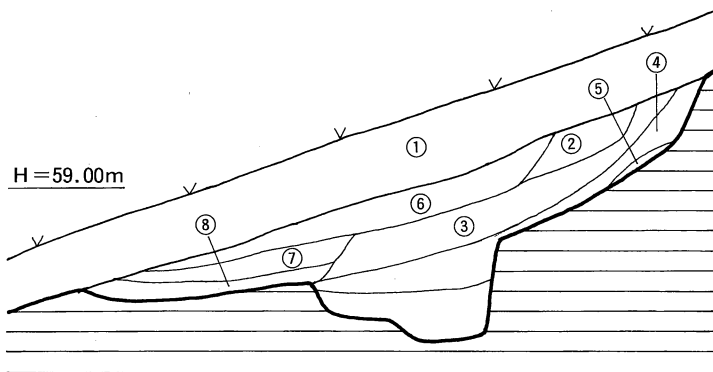
- ① 表土
- ② 明灰茶色土 (炭 (3mm) 微量混、オレンジ少量混硬い)
- ③ 灰色土 (茶混、オレンジ微量混、やややわらかい)
- ④ 黒灰色土 (炭 (1cm) 少量混、焼土、オレンジ多量混、やわらかい)
- ⑤ 灰色土 (茶色少量混、やわらかく粘性あり)
- ⑥ 灰色土 (茶色多量混、やわらかい)
- ⑦ 表土
- ⑧ 黒茶褐色土 (灰少量混、非常に硬くしまる)
- ⑨ 茶色土 (灰微量混、硬くしまる)
- ⑩ 茶色土 (黒微量混、⑧より少しやわらかいが、硬くしまる)
- ⑪ 黒灰色土 (茶少量混、⑧より少し硬くしまる)
- ⑫ 灰色土 (茶少量混、②と同じ位硬くしまる)
- ⑬ 茶褐色土 (黒少量混、灰少量混)
- ⑭ 茶褐色土 (灰微量混、⑦より少しやわらかく少し粘性が弱い)
- ⑮ 茶色土 (④と同じ位硬くしまる)
- ⑯ 黒茶褐色土 (⑦よりやわらかくくずれやすい)



挿図66 陰田隠れが谷遺跡 2区2テラスSK09遺構図

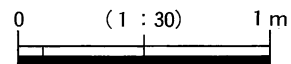


H = 60.00m

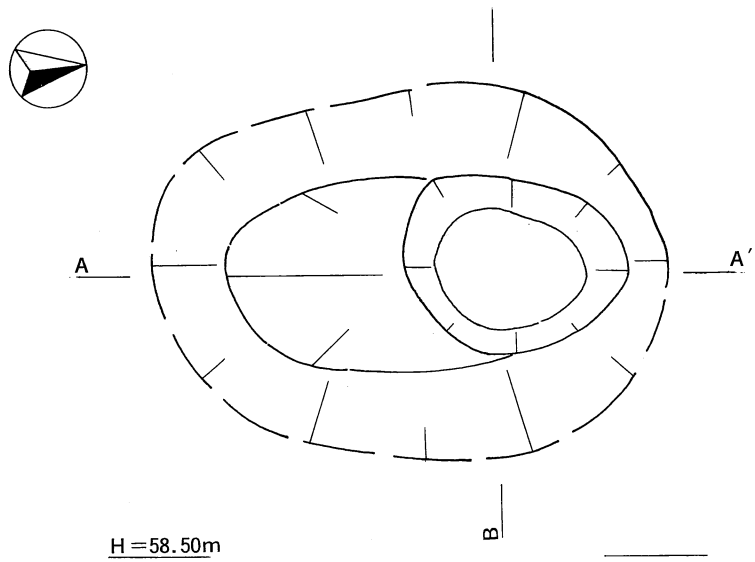


- ① 表土
- ② 灰色土 (黄微量混、灰多量混、硬くしまっている)
- ③ 茶灰色土 (灰少量混、やわらかく粘性が強い)
- ④ 茶色土 (灰混、②よりやわらかく、くずれやすい)
- ⑤ 灰色土 (橙微量混、炭微量混 (0.2cm~0.3cm大)、灰多量混、②と同じ位硬くしまっている)
- ⑥ 茶色土 (灰多量混、やわらかく粘性が強い)
- ⑦ 茶色土 (灰少量混、やわらかく粘性が強い)
- ⑧ 茶色土 (灰色少量混)
- ⑨ 茶色土 (灰色多量混)

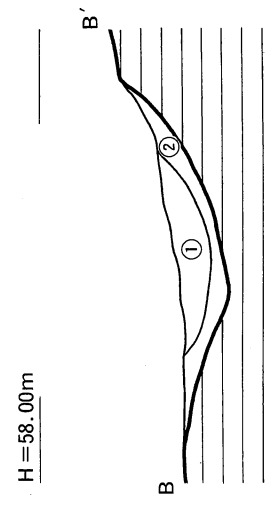
- ① 表土
- ② 茶褐色土 (硬くしまっている)
- ③ 茶色土 (②よりやややわらかく粘性が強い)
- ④ 黒茶褐色土 (③よりやややわらかく粘性が強い)
- ⑤ 茶色土黄少量混 (黄土色に近い、④と同じ位やわらかく粘性が強い)
- ⑥ 灰茶褐色土 (炭微量混 (0.2~0.3cm大)、灰少量混、②より少し硬くしまっている)
- ⑦ 茶色土黒少量混 (②と同じ位硬くしまっているがくずれやすい)
- ⑧ 茶色土黒微量混 (③よりやややわらかく粘性が強い)



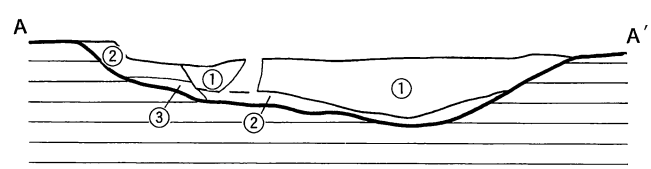
挿図67 陰田隠れが谷遺跡 2区2テラスSK10遺構図



H=58.50m



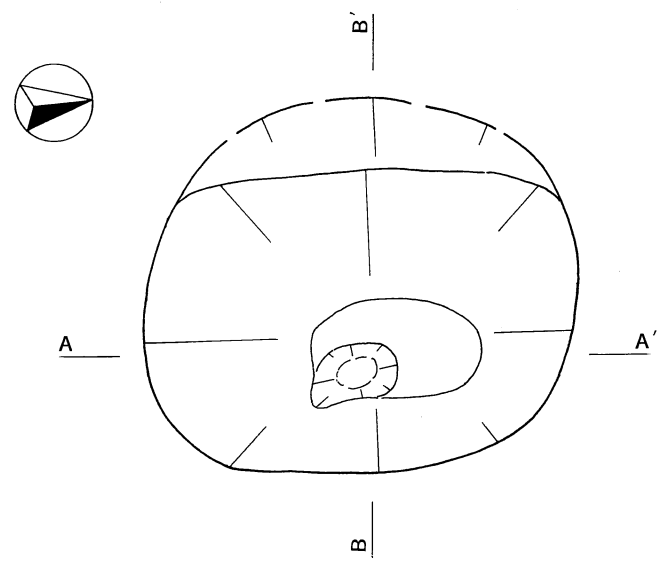
H=58.00m



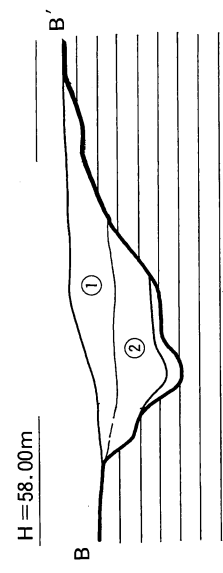
SK24

SK24

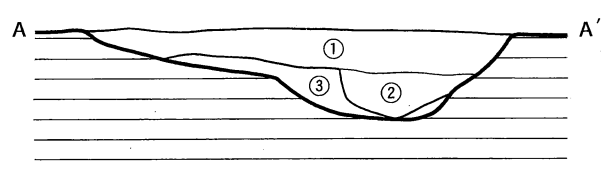
- ① 黒褐色土 (炭・焼土)
- ② 淡褐色土
- ③ 黄色土



H=58.50m



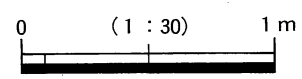
H=58.00m



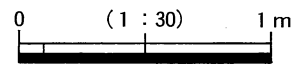
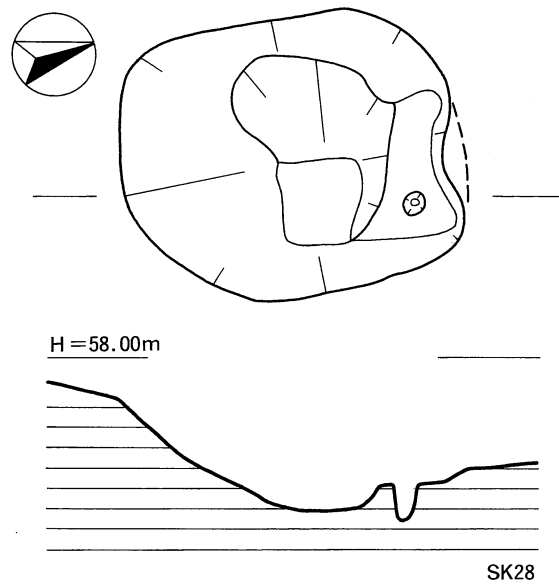
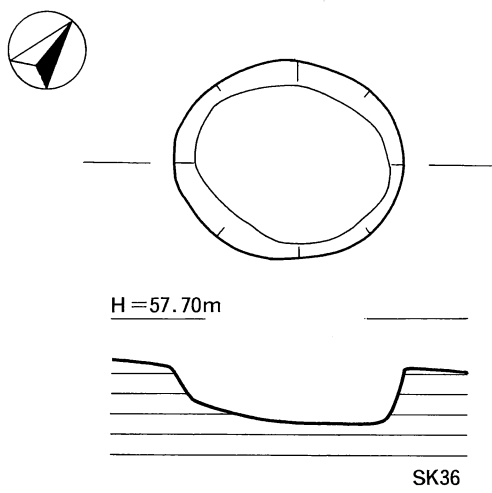
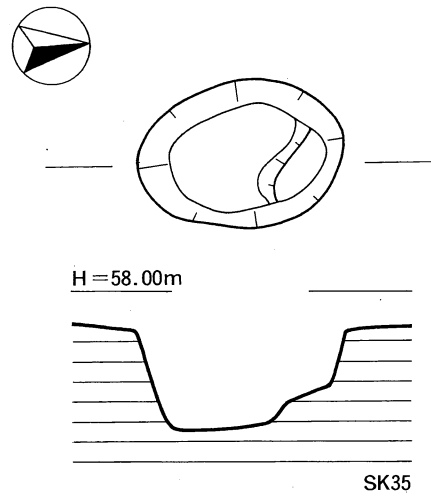
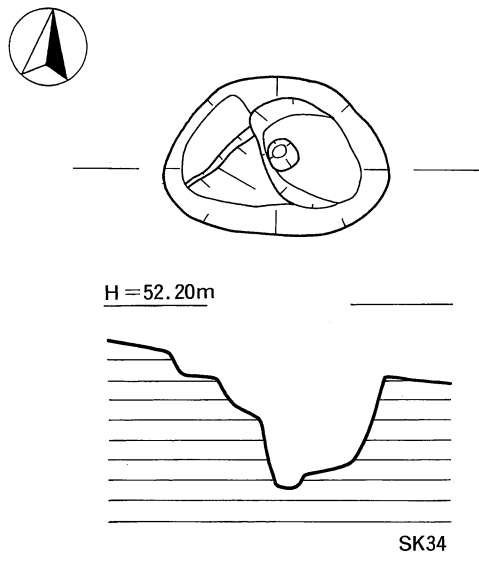
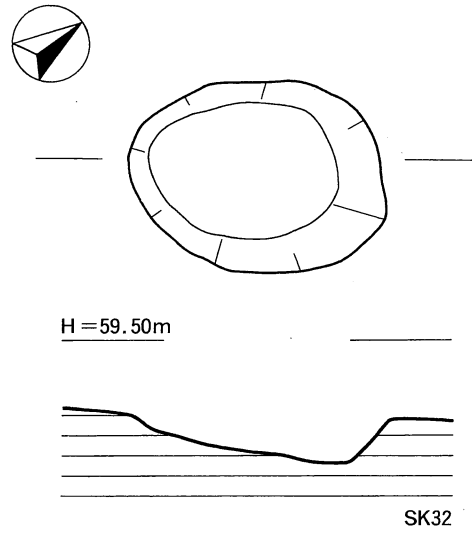
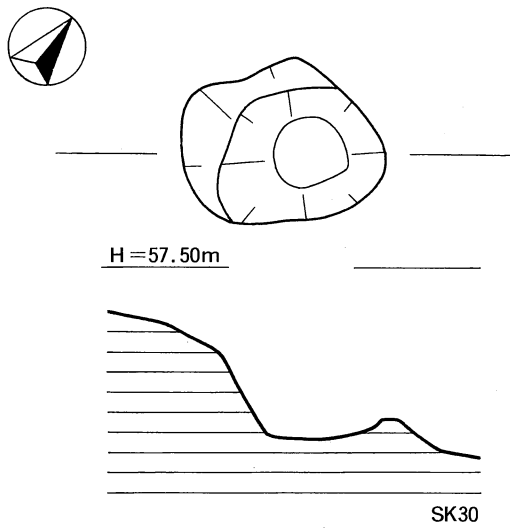
SK25

SK25

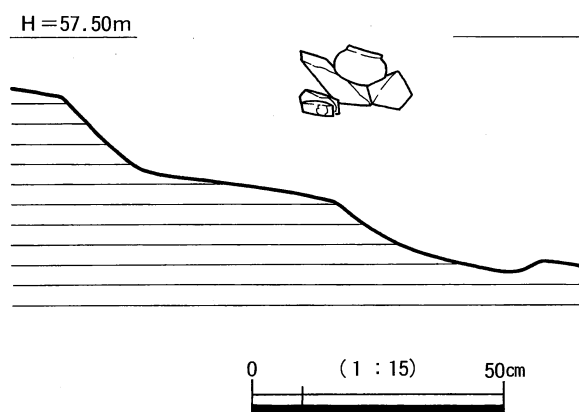
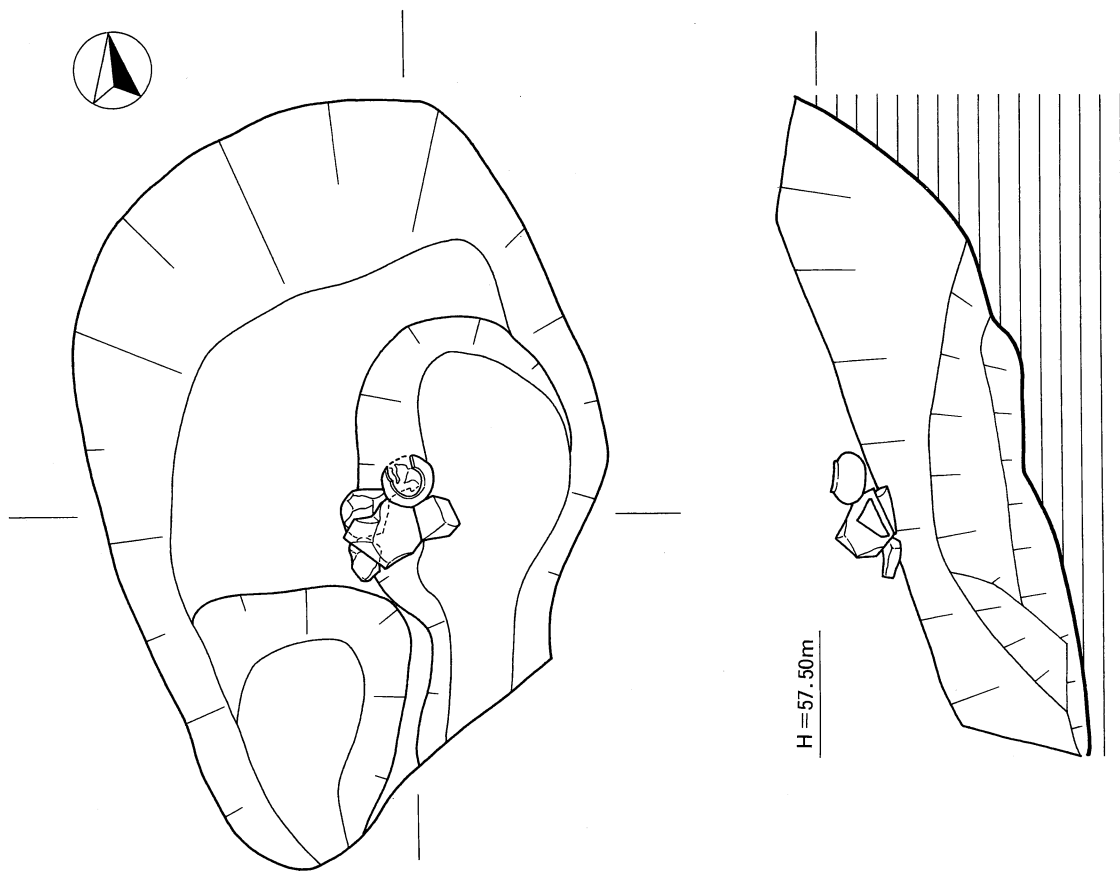
- ① 暗褐色土 (炭含む)
- ② 淡黒褐色土 (炭・土器片含む)
- ③ 淡褐色土 (砂質)



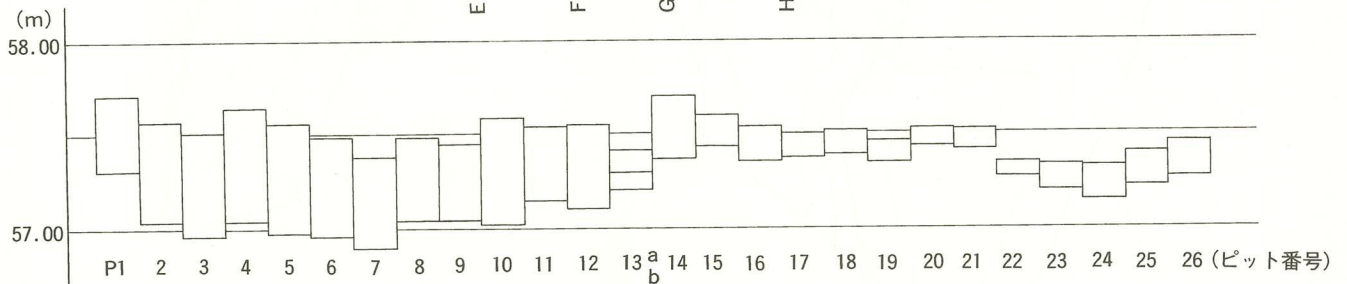
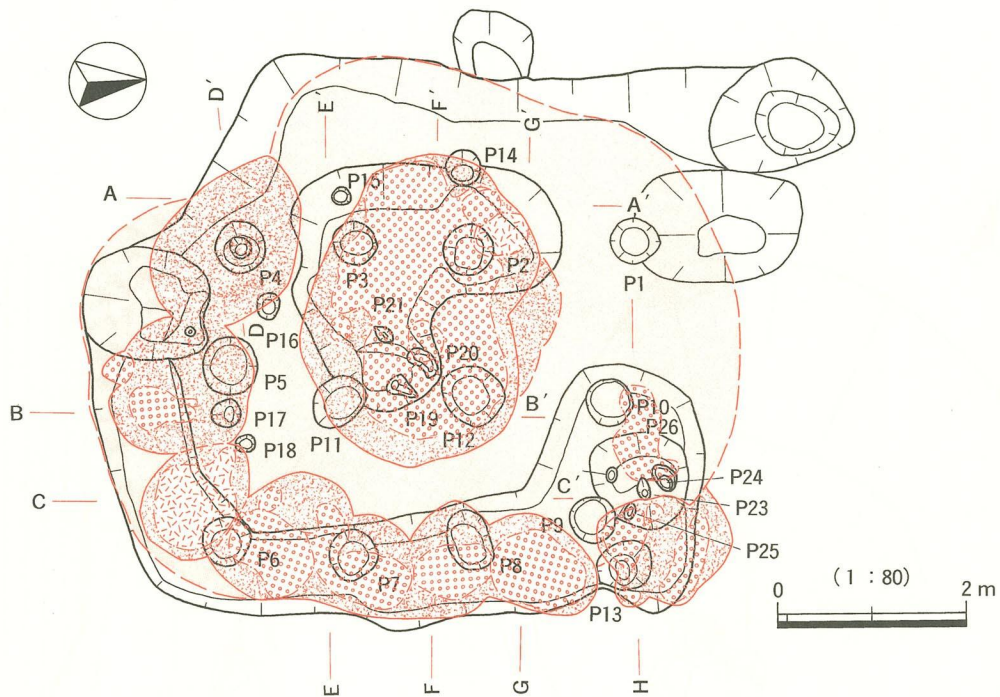
挿図68 陰田隠れが谷遺跡 2区2テラスSK24・25遺構図



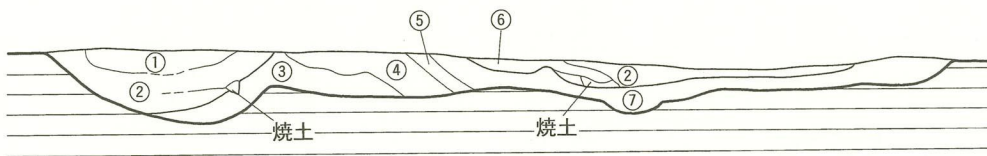
挿図69 陰田隠れが谷遺跡 2区2テラスSK28・30・32・34・35・36遺構図



挿図70 陰田隠れが谷遺跡 2区2テラスSK29遺構図

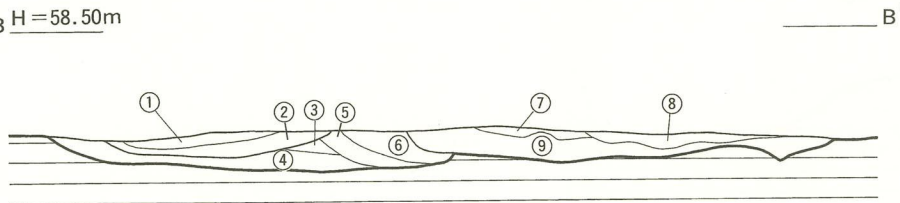


A H = 58.50m



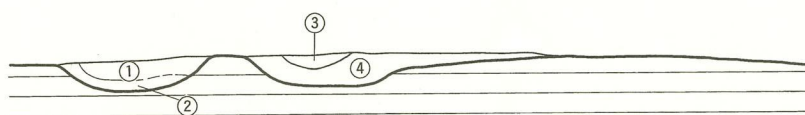
- ① 暗褐色土 (炭、焼土少々混じる)
- ② 炭化物層
- ③ 黄褐色土
- ④ 灰色土 (一部赤味を帯びている)
- ⑤ やや暗灰色土
- ⑥ 黒灰褐色土 (赤褐色土混じる)
- ⑦ 暗黄色土

B H = 58.50m



- ① 炭
- ② 炭混じり
- ③ 暗灰褐色土
- ④ 暗黄褐色土
- ⑤ 暗灰色土
- ⑥ 灰褐色土 (ややしまり、緻密)
- ⑦ 赤褐色土 (焼土)
- ⑧ 赤褐色土
- ⑨ 暗灰黄色土

C H = 58.50m

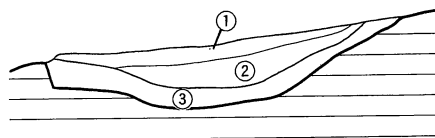


- ① 黒褐色土 (炭)
- ② 黒褐色土 (炭層、焼土粒混じる)
- ③ 黒灰色土 (炭混じり)
- ④ 暗灰色土 (よくしまる)

(1 : 40)
0 1 m

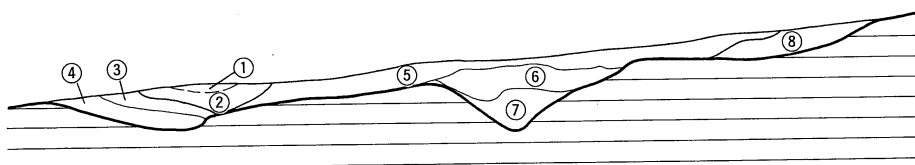
挿図71 陰田隠れが谷遺跡 2区2テラス炭溜2土層図 (1)

D H=58.50m D'



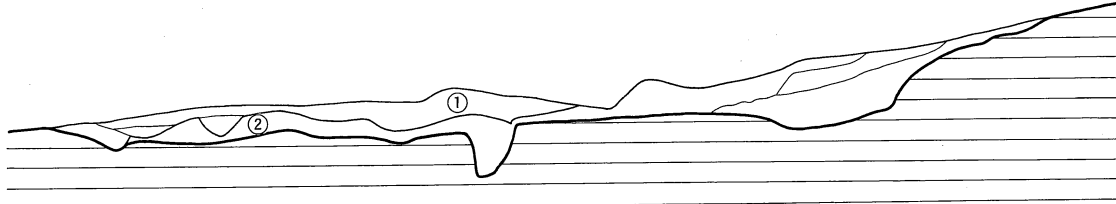
- ① 暗褐色土
- ② 黒褐色土 (炭層、焼土粒含)
- ③ 灰色土 (やや赤み)

E H=58.50m E'



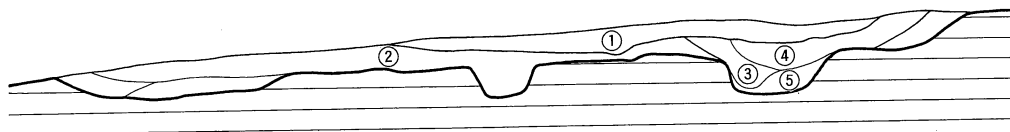
- ① 暗褐色土
- ② 黒褐色土 (炭層、焼土粒含)
- ③ 暗灰色土
- ④ 灰色土
- ⑤ 暗灰色土 (灰、炭混じり土)
- ⑥ やや砂っぽい
- ⑦ 炭小粒
- ⑧ 暗灰褐色土 (火の影響で変化か)

F H=58.50m F'



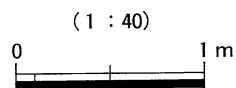
- ① 淡灰褐色土 (炭まじり)
- ② 暗灰色～暗灰褐色土 (やや砂っぽい)

G H=58.50m G'

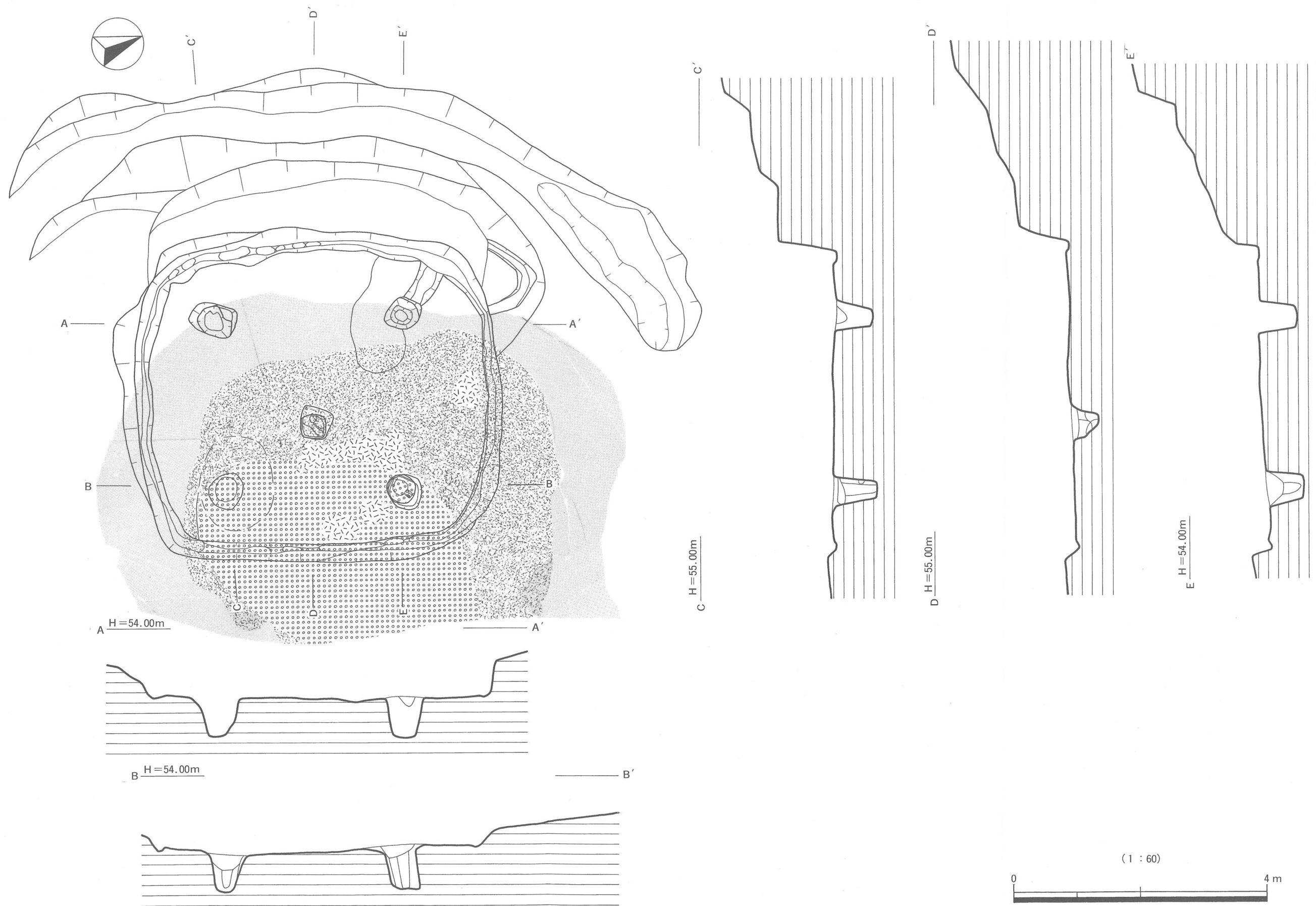


- ① 炭、焼土粒
- ② 暗灰色土、淡灰褐色土
- ③ ④よりやや暗い
- ④ 暗灰色土 (シルト質、炭を含む)
- ⑤ ④よりやや明るい (粘質が強い)

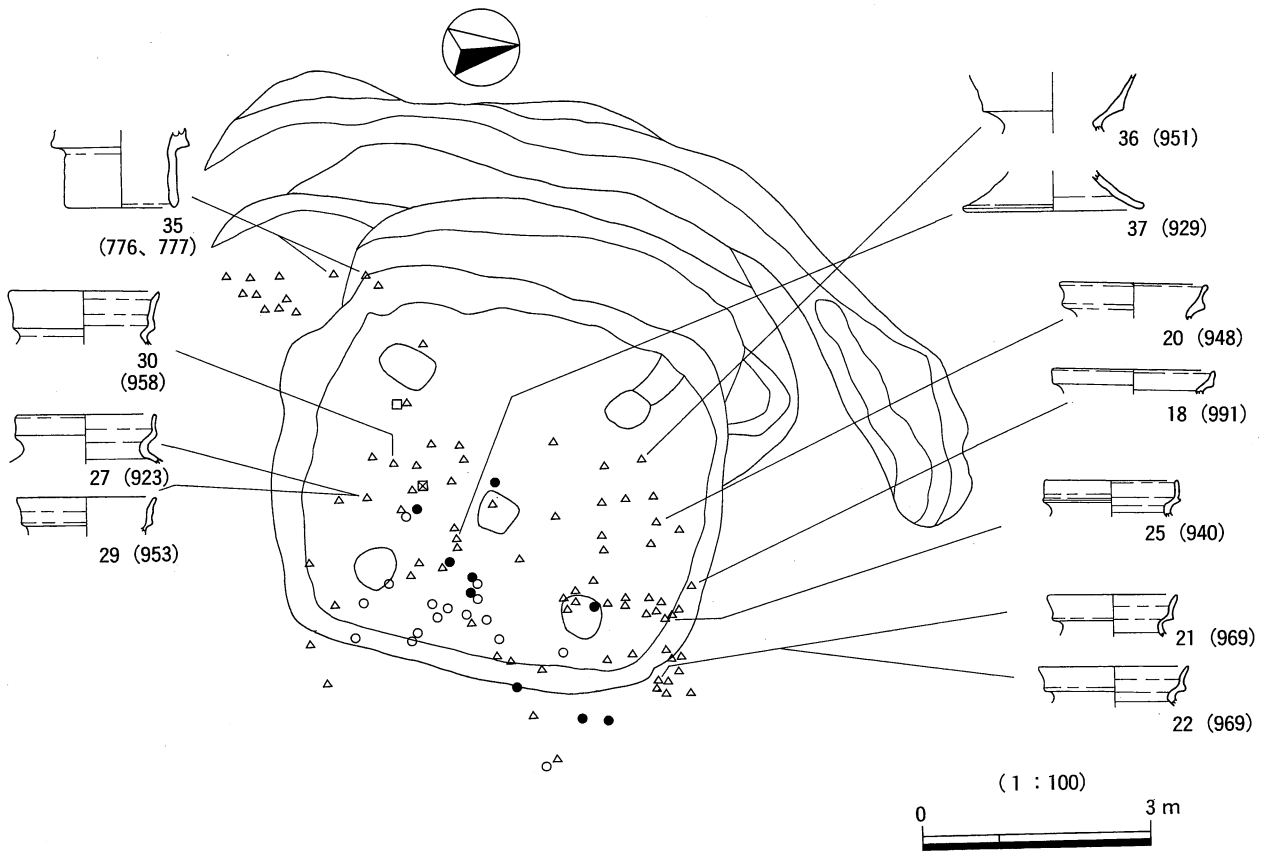
H H=58.50m H'



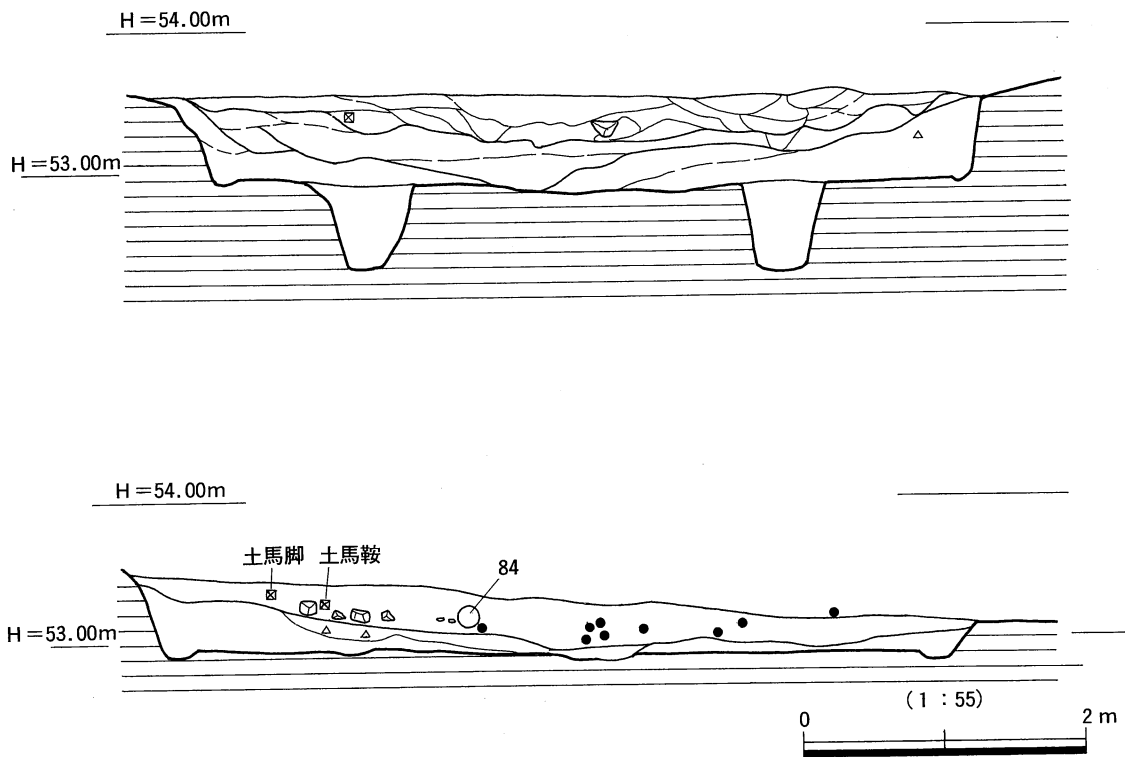
挿図72 陰田隠れが谷遺跡 2区2テラス炭溜2土層図 (2)



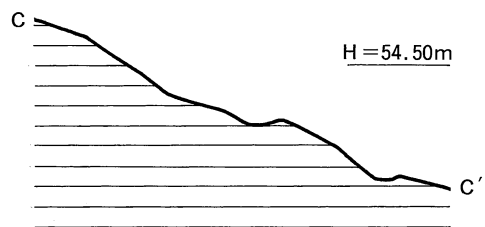
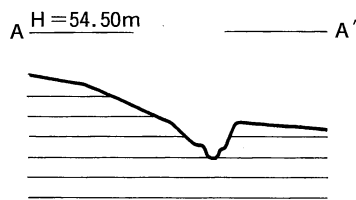
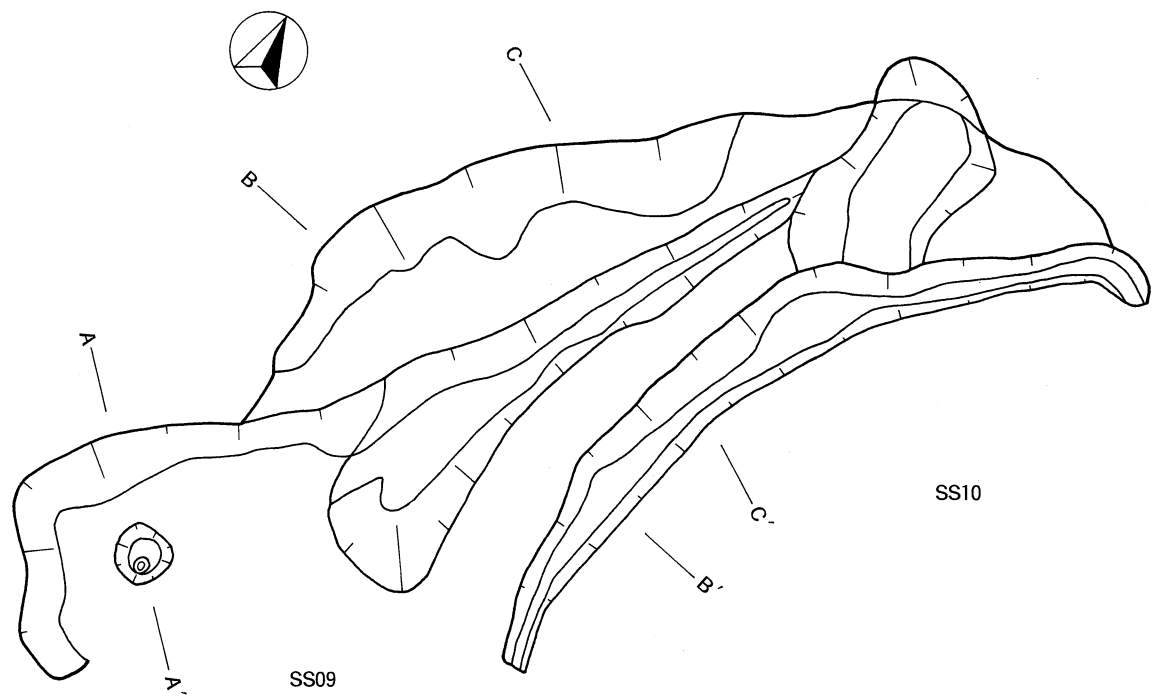
挿図73 陰田隠れが谷遺跡 2区3テラスSI01・炭溜4遺構図



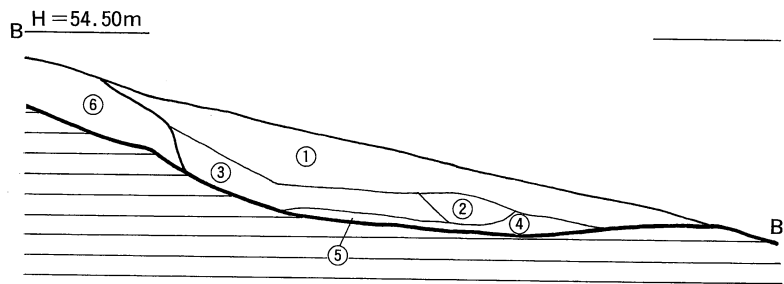
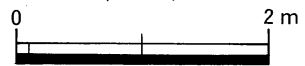
挿図74 陰田隠れが谷遺跡 2区3テラスSI01遺物分布図



挿図75 陰田隠れが谷遺跡 2区3テラスSI01・炭溜4土層図



(1 : 60)

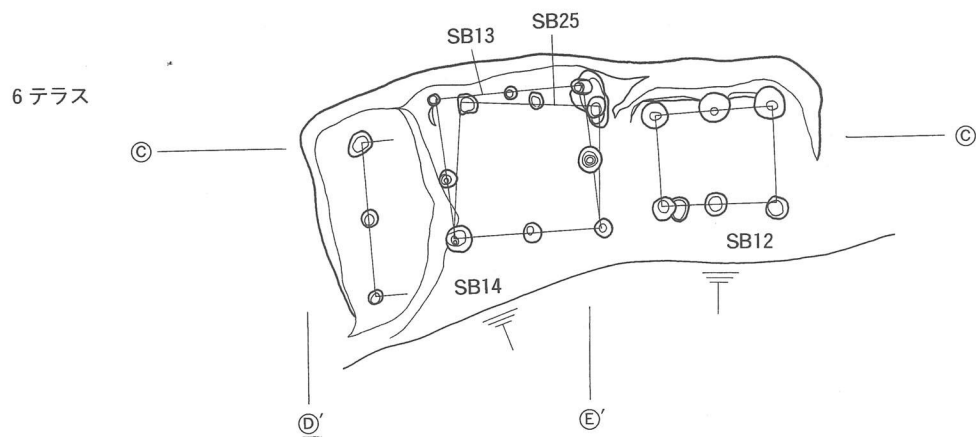
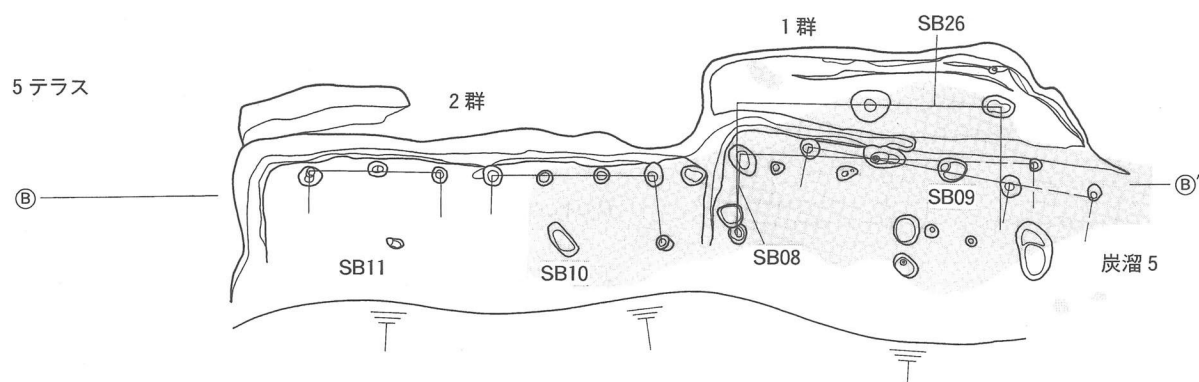
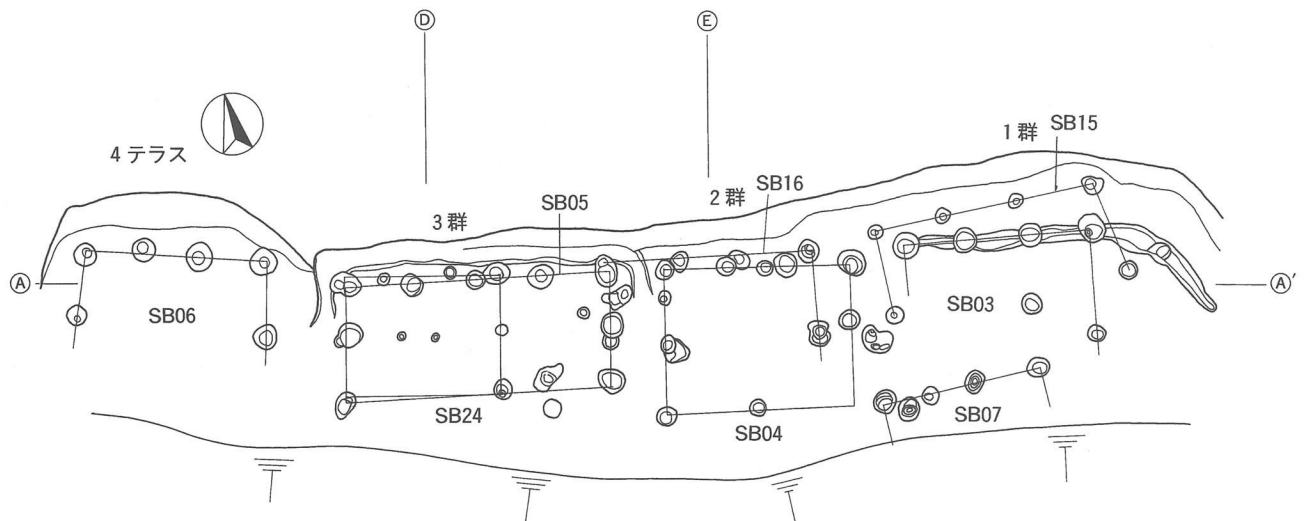


- ① 褐色シルト～淡灰黄色シルト
(軟岩ブロック含み炭少量混じり)
- ② 軟岩ブロック
- ③ 淡灰黄色～淡灰褐色シルト (炭少量含む)
- ④ 淡褐色半石質シルト (軟岩含む)
- ⑤ 赤褐色半石質シルト
- ⑥ 黒褐色半石質シルト

(1 : 30)



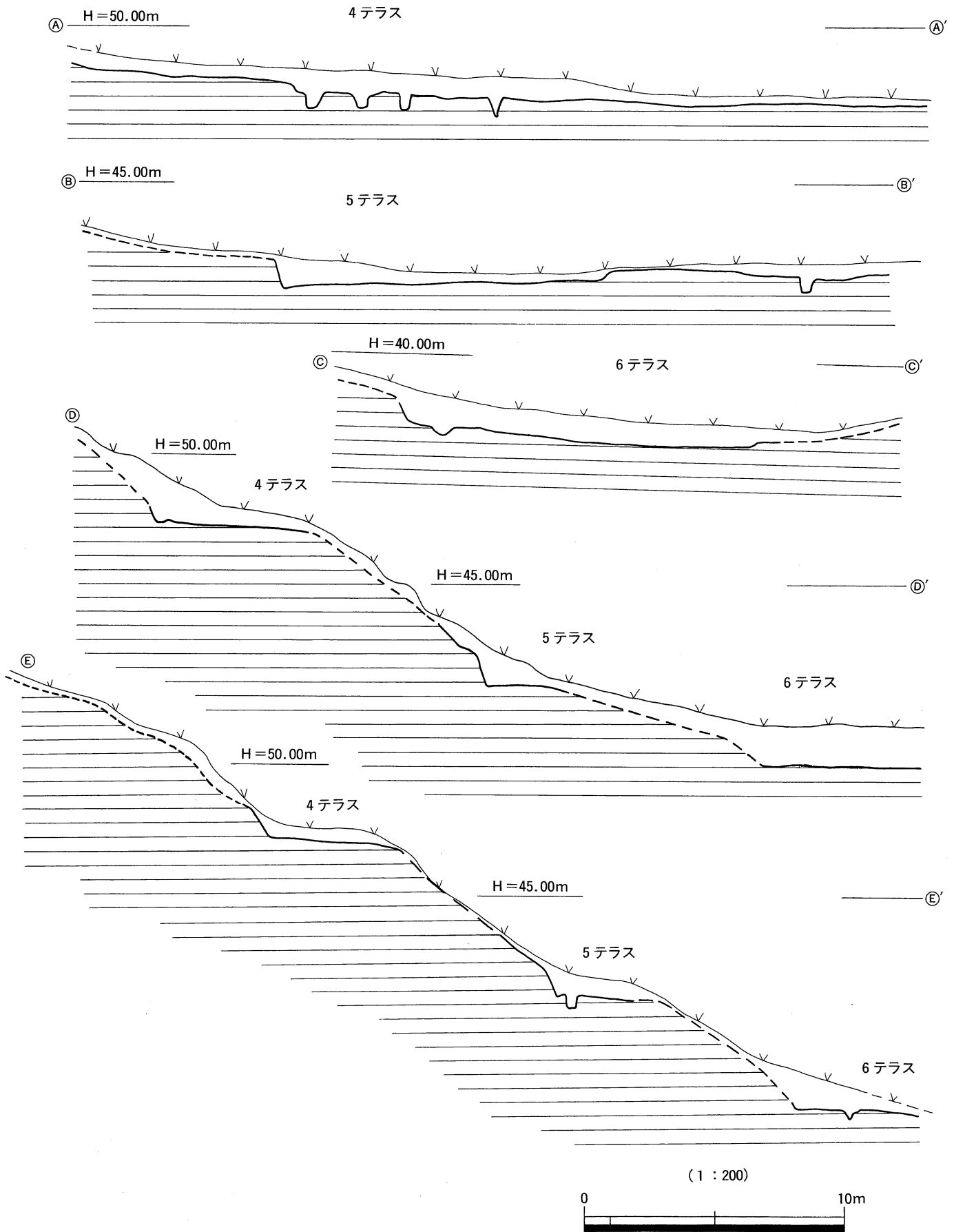
挿図76 陰田隠れが谷遺跡 2区3テラスSS09・10遺構図



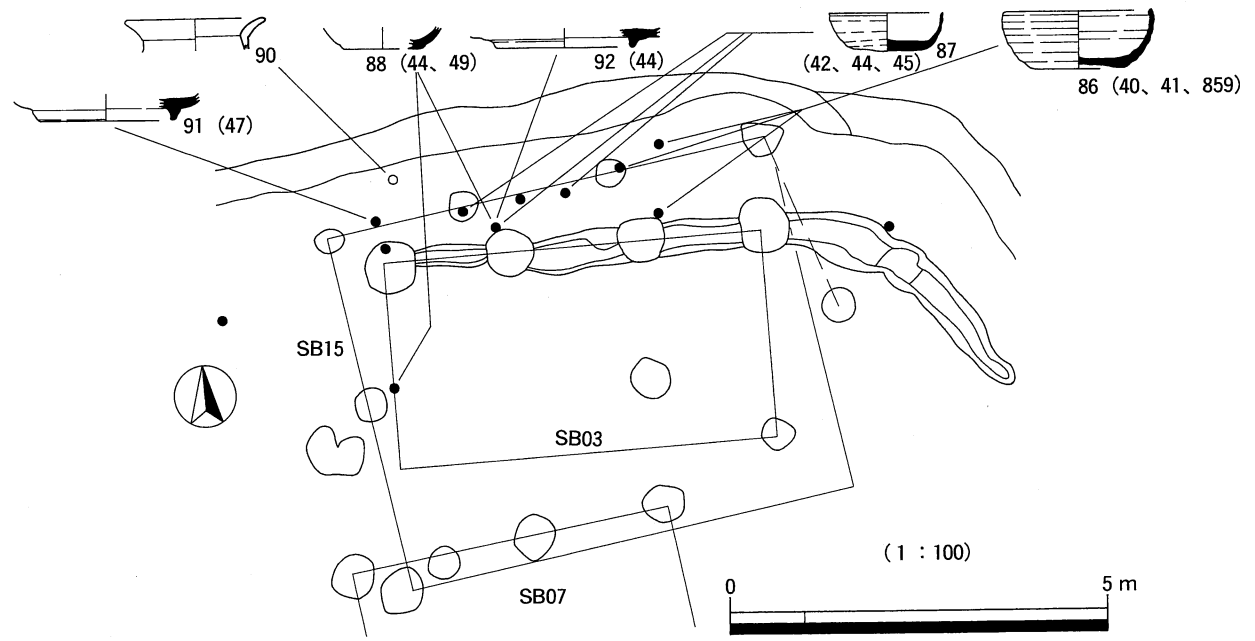
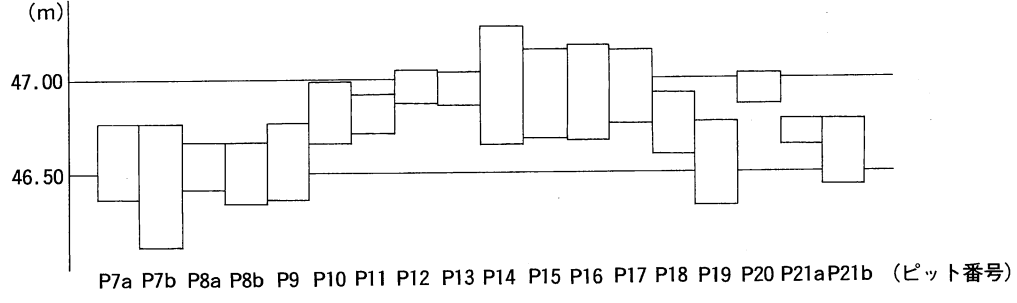
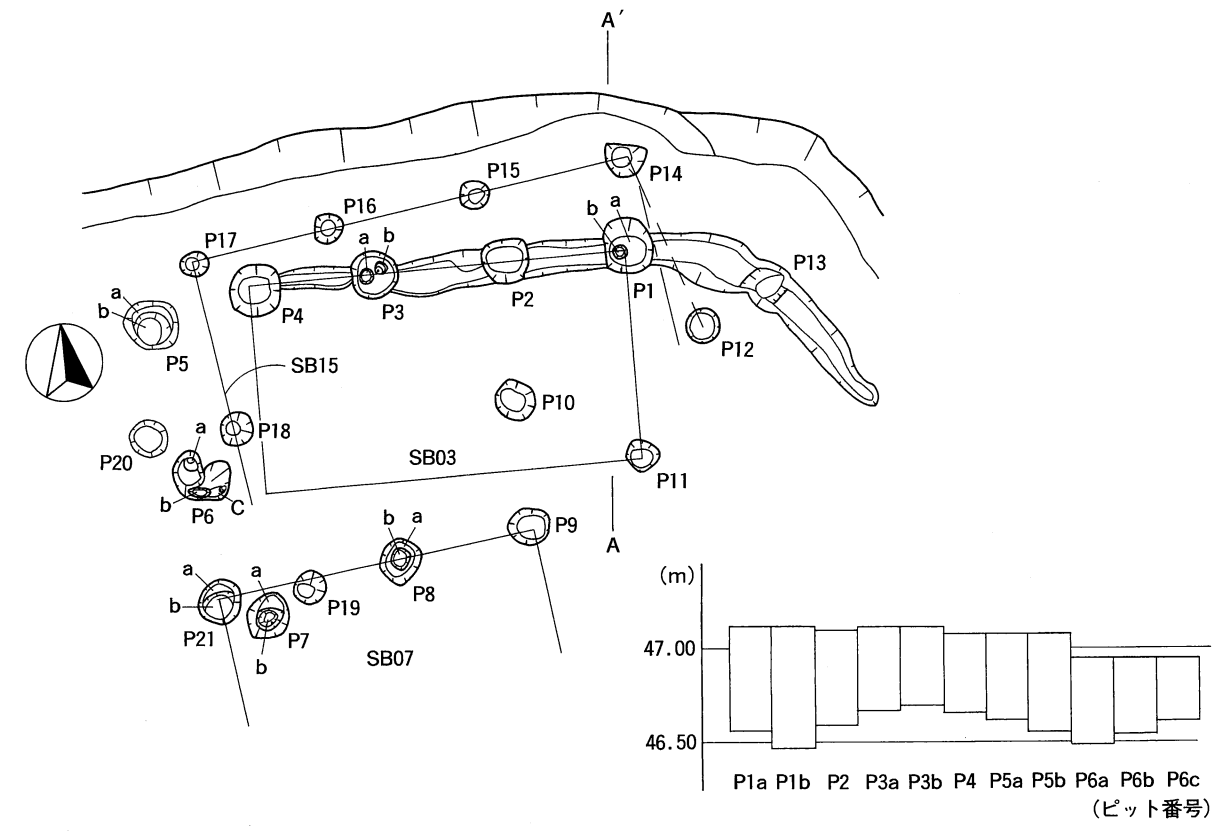
(1 : 200)



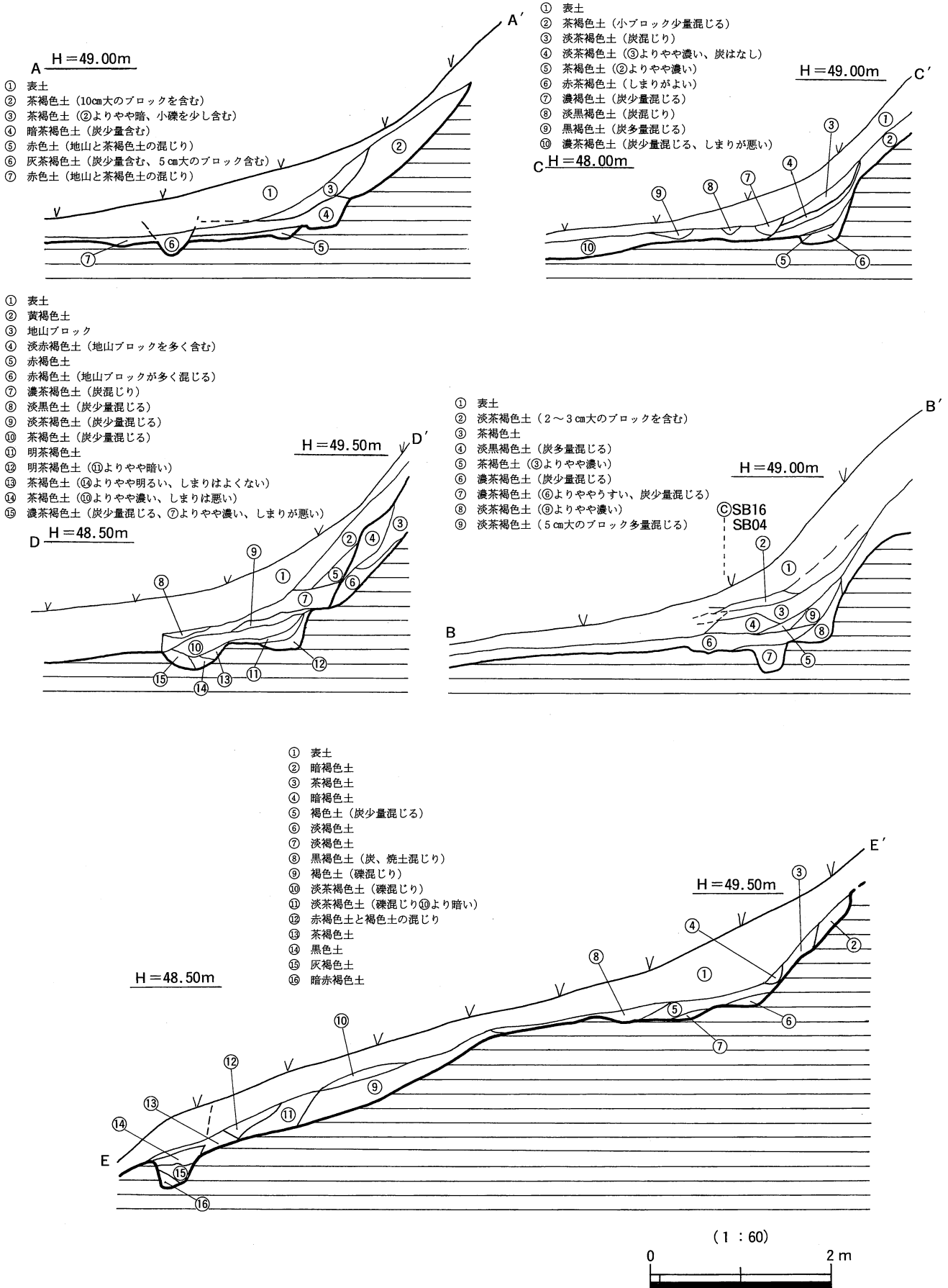
挿図77 陰田隠れが谷遺跡 2区4・5・6テラス遺構分布図



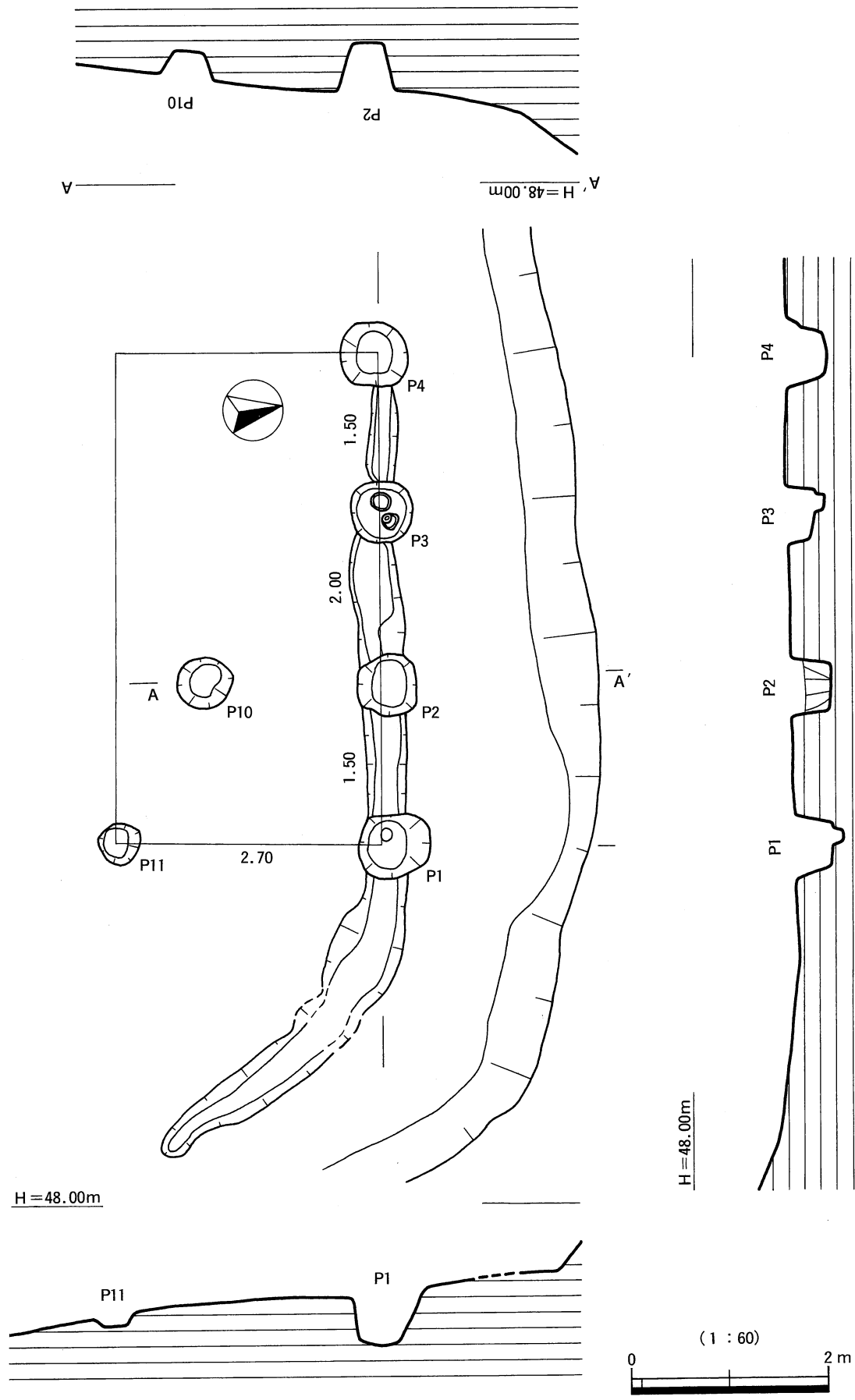
挿図78 陰田隠れが谷遺跡 2区4・5・6テラス立地断面図



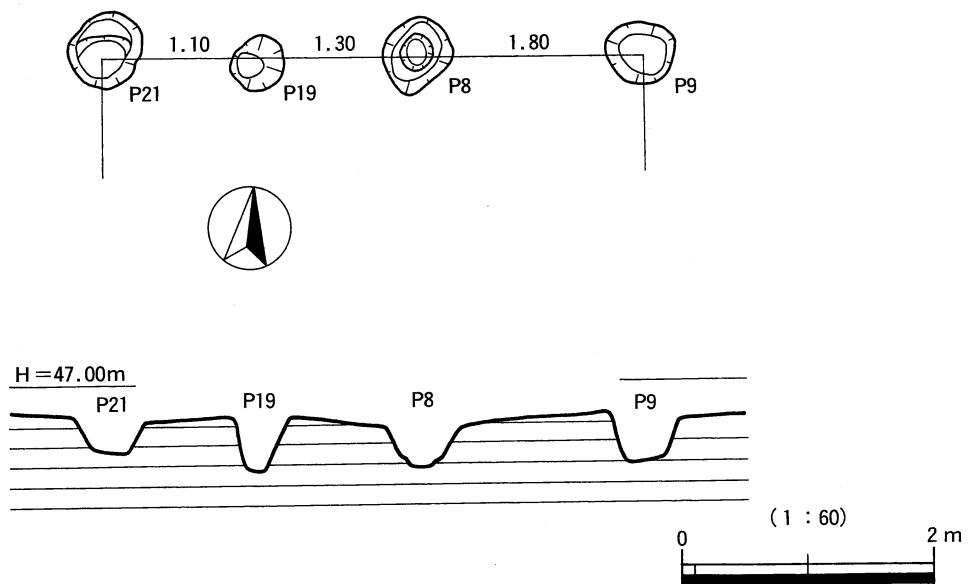
挿図79 陰田隠れが谷遺跡 2区4テラス1群遺物分布図、ピット深度図



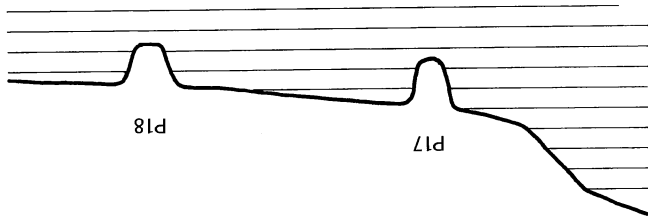
挿図80 陰田隠れが谷遺跡 2区4テラス土層図



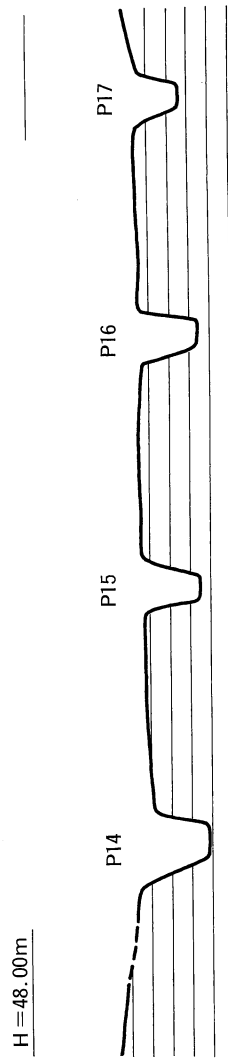
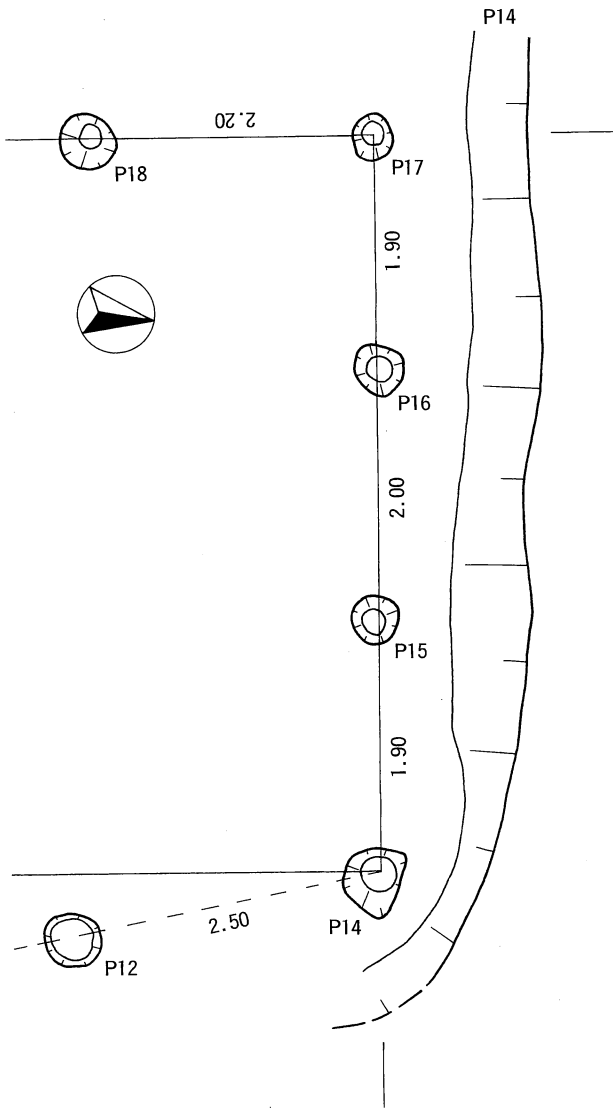
挿図81 陰田隠れが谷遺跡 2区4テラスSB03遺構図



挿図82 陰田隠れが谷遺跡 2区4テラスSB07遺構図



H = 49.00m

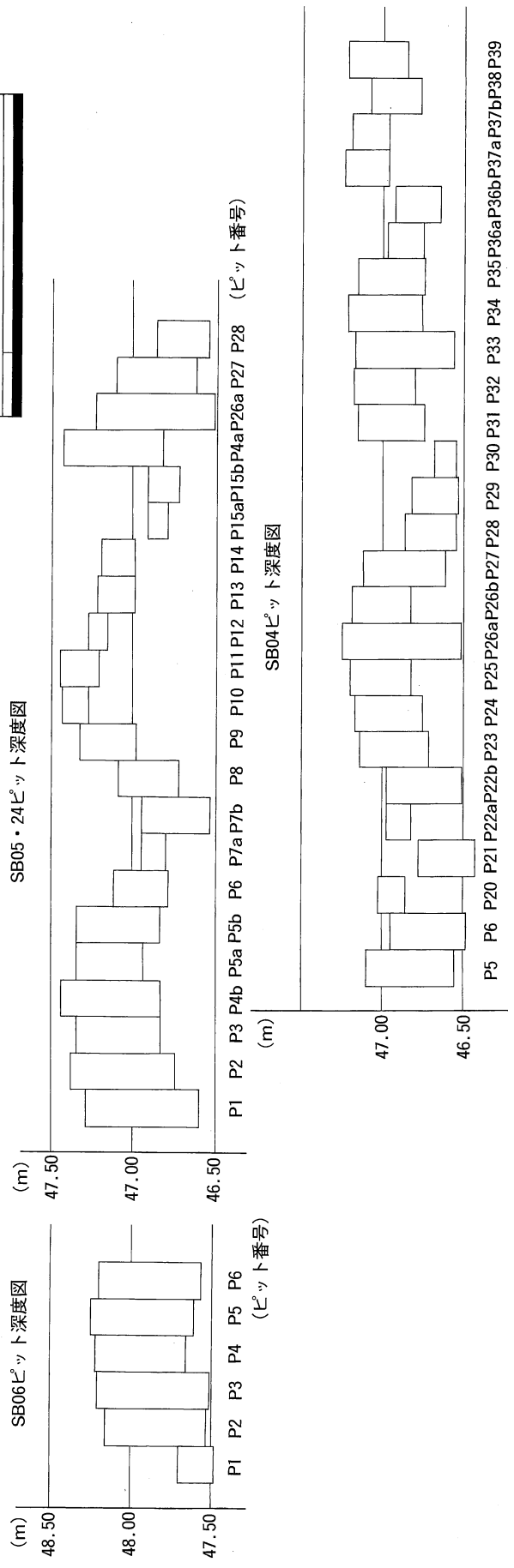
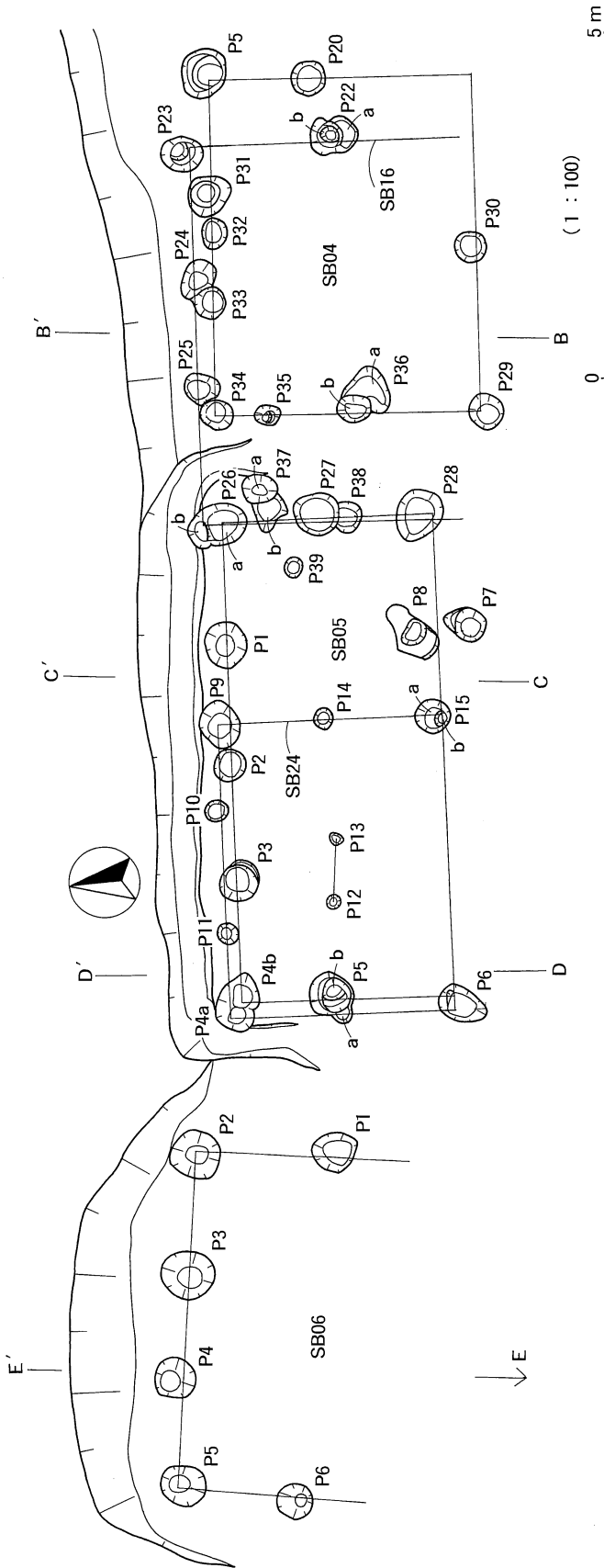


H = 48.00m

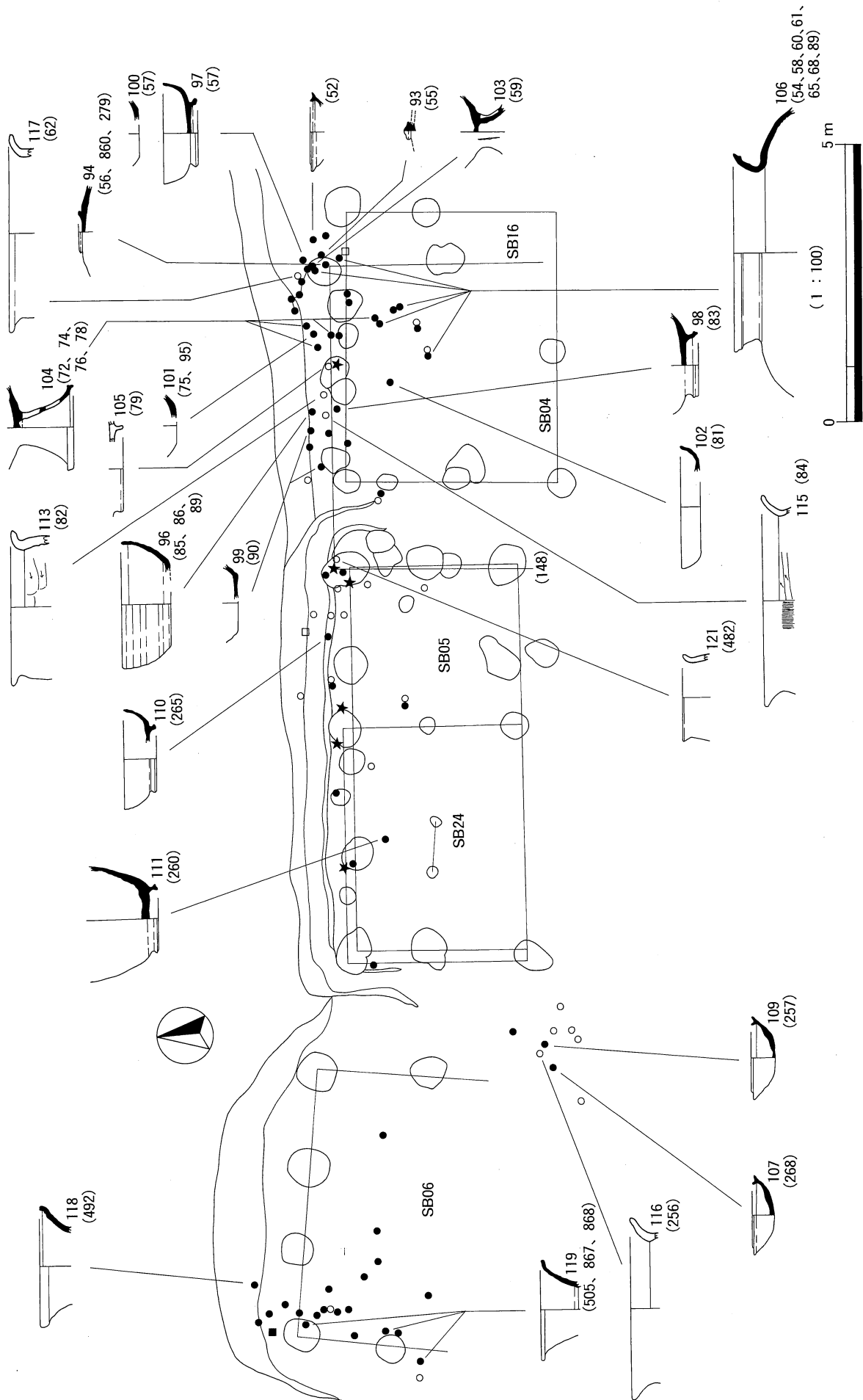
(1 : 60)



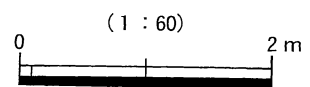
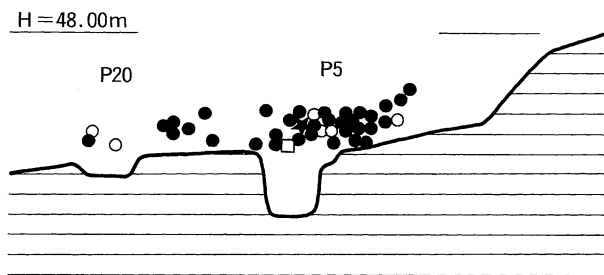
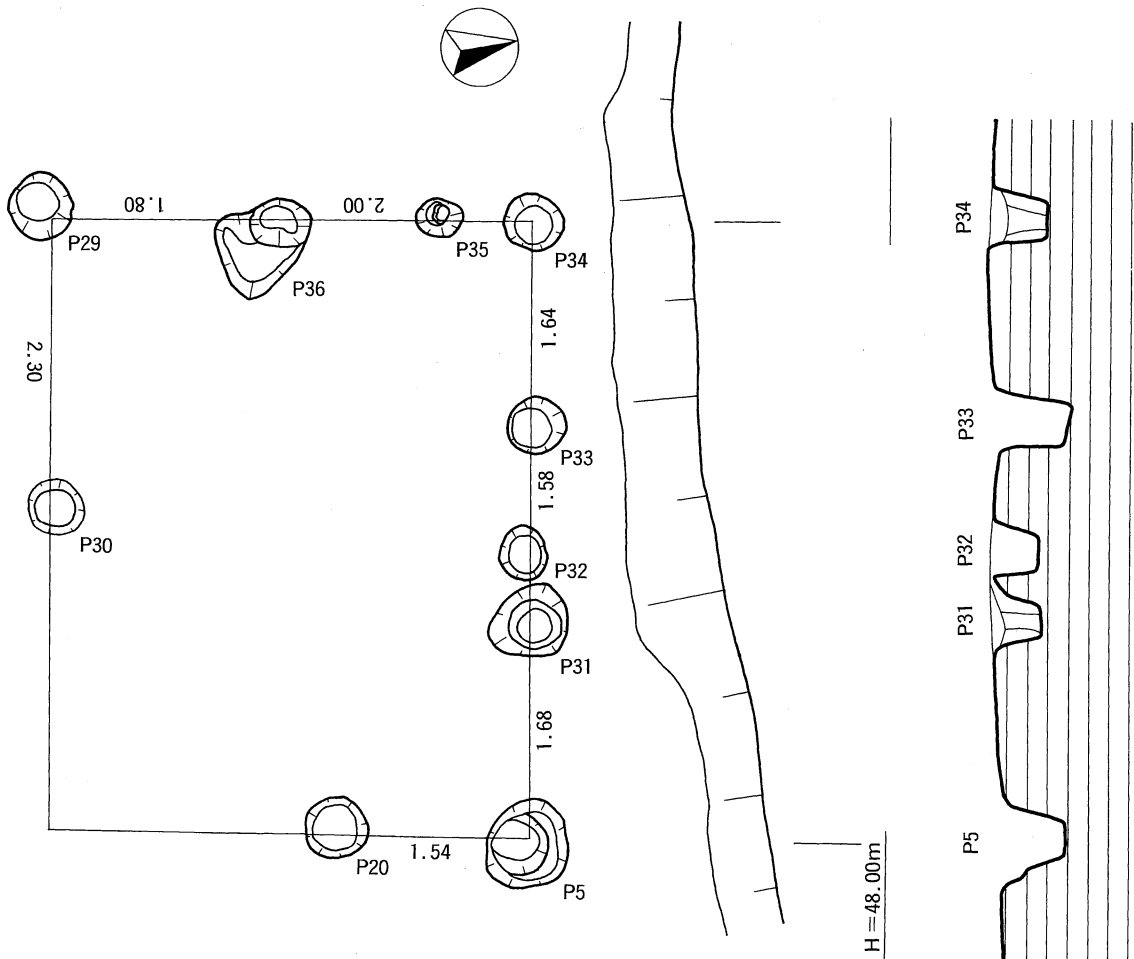
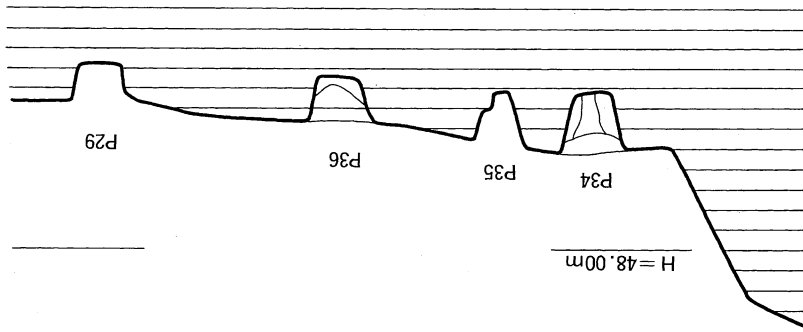
挿図83 陰田隠れが谷遺跡 2区4テラスSB15遺構図



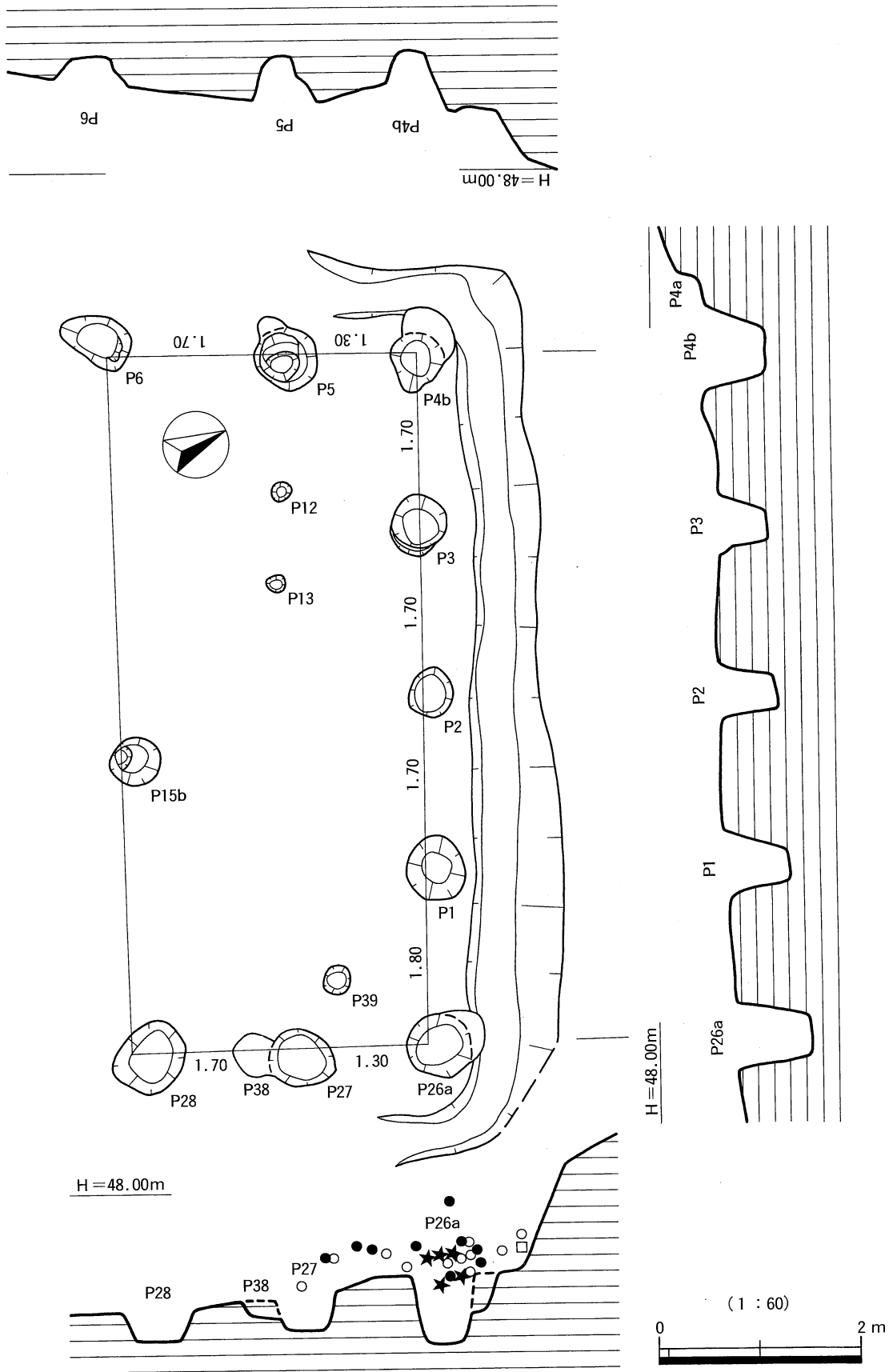
挿図84 陰田隠れが谷遺跡 2区4テラス2群・3群ピット深度図



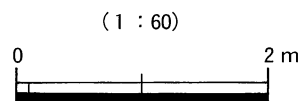
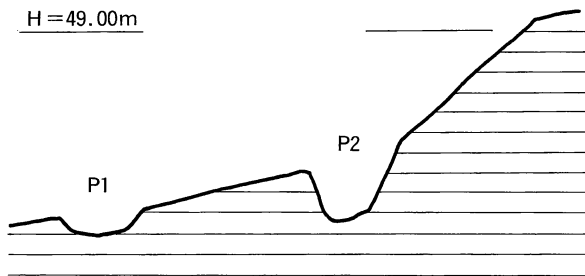
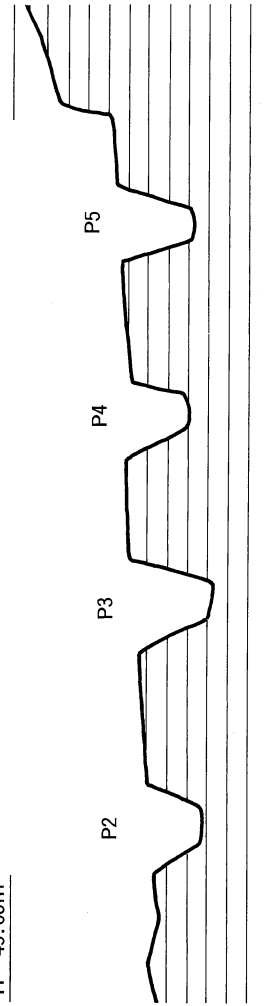
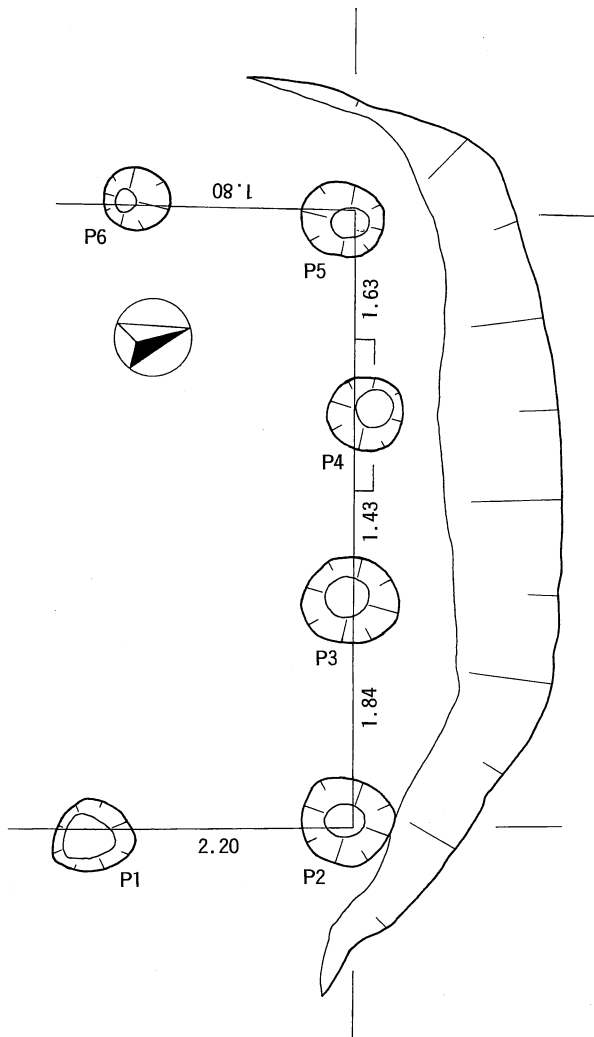
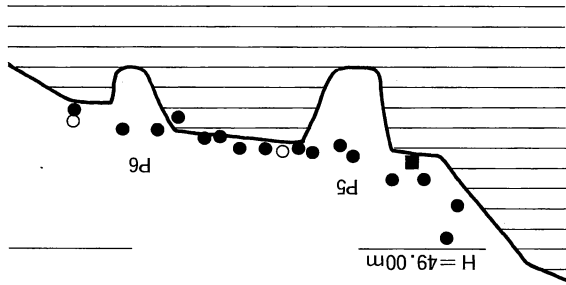
挿図85 陰田隠れが谷遺跡 2区4テラス2群・3群遺物分布図



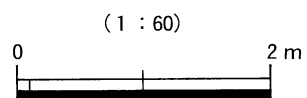
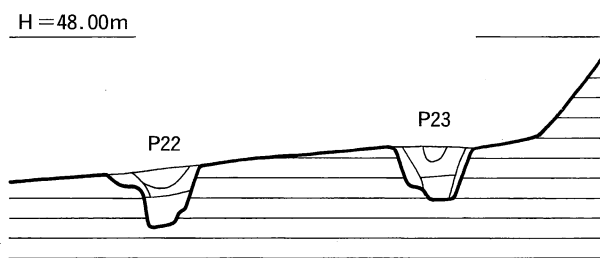
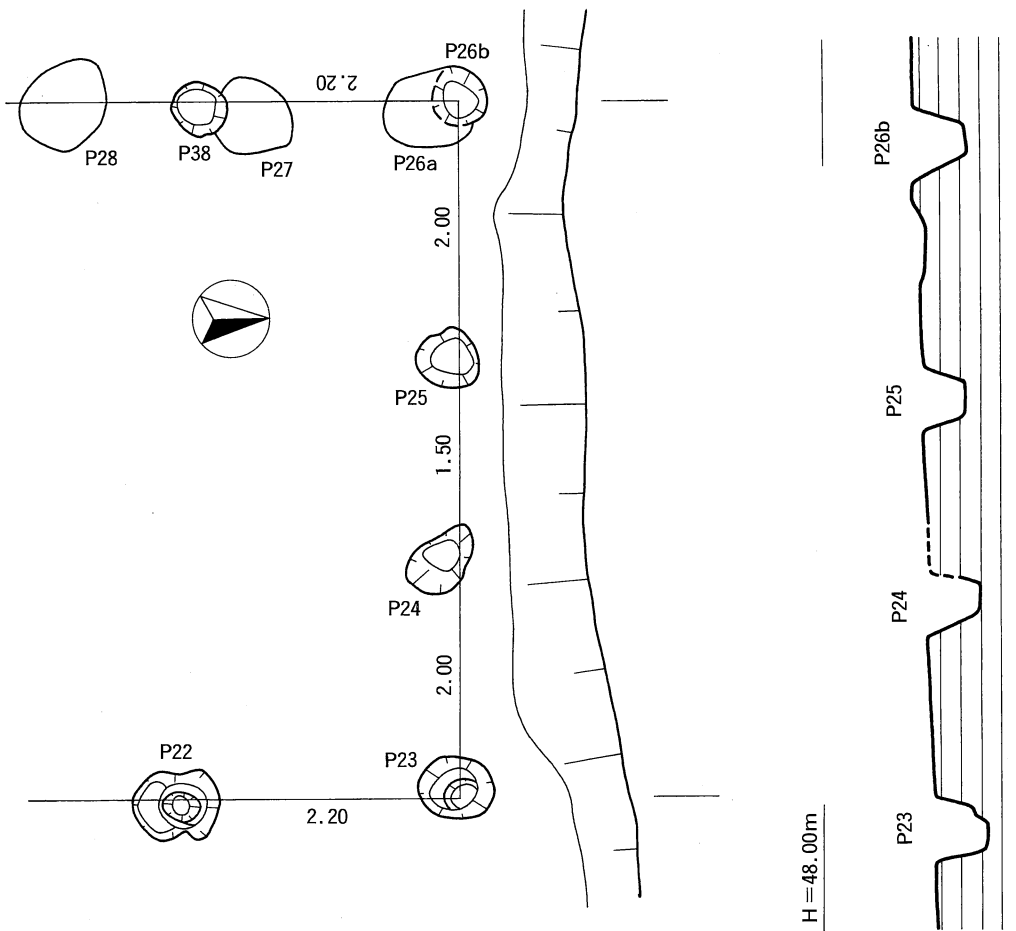
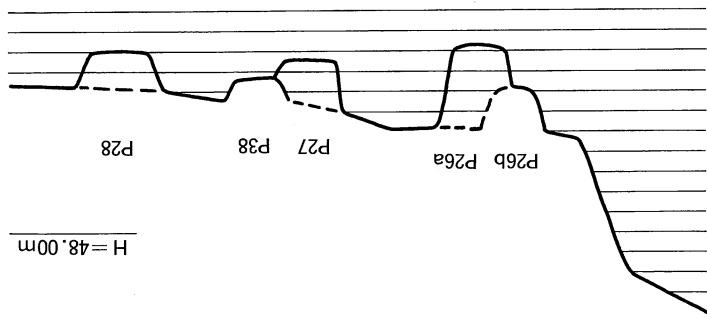
挿図86 陰田隠れが谷遺跡 2区4テラスSB04遺構図



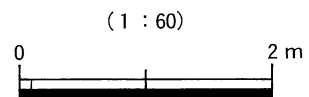
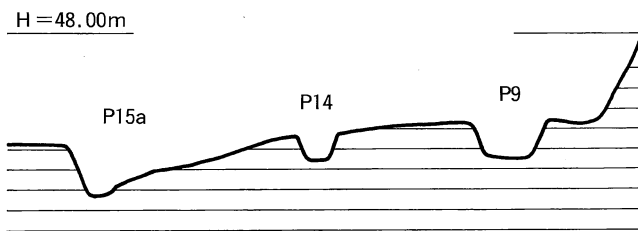
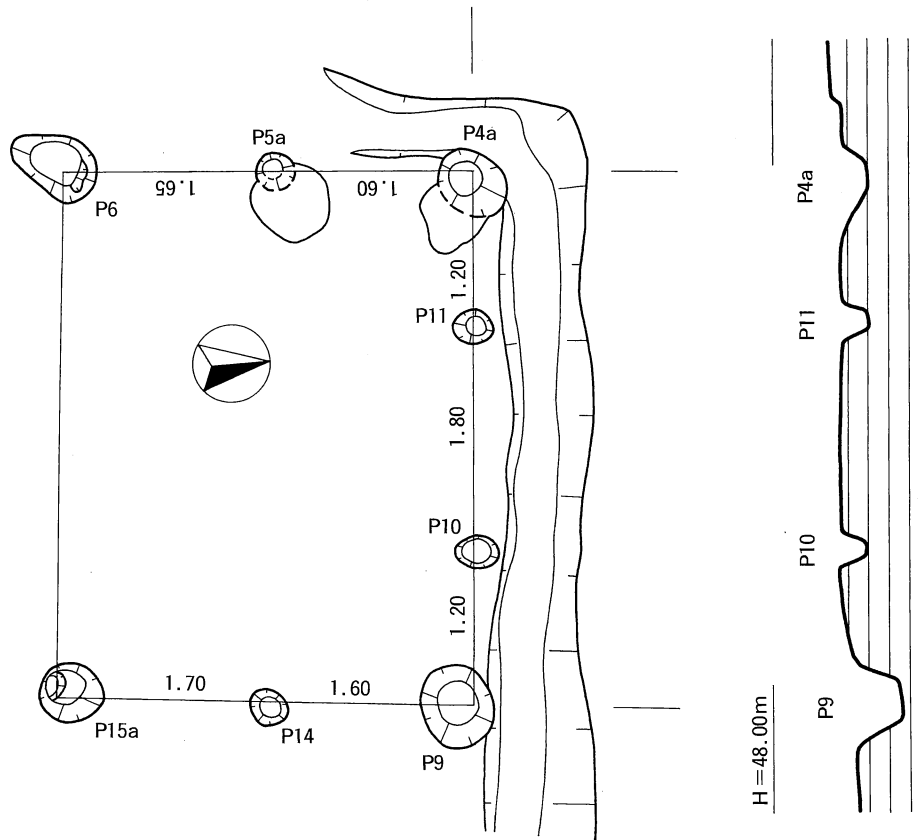
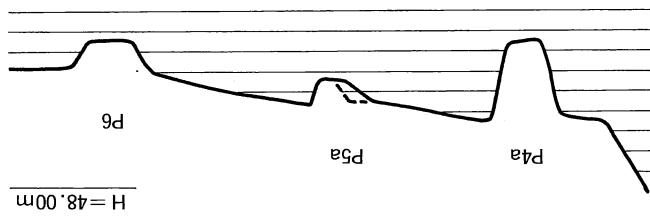
挿図87 陰田隠れが谷遺跡 2区4テラスSB05遺構図



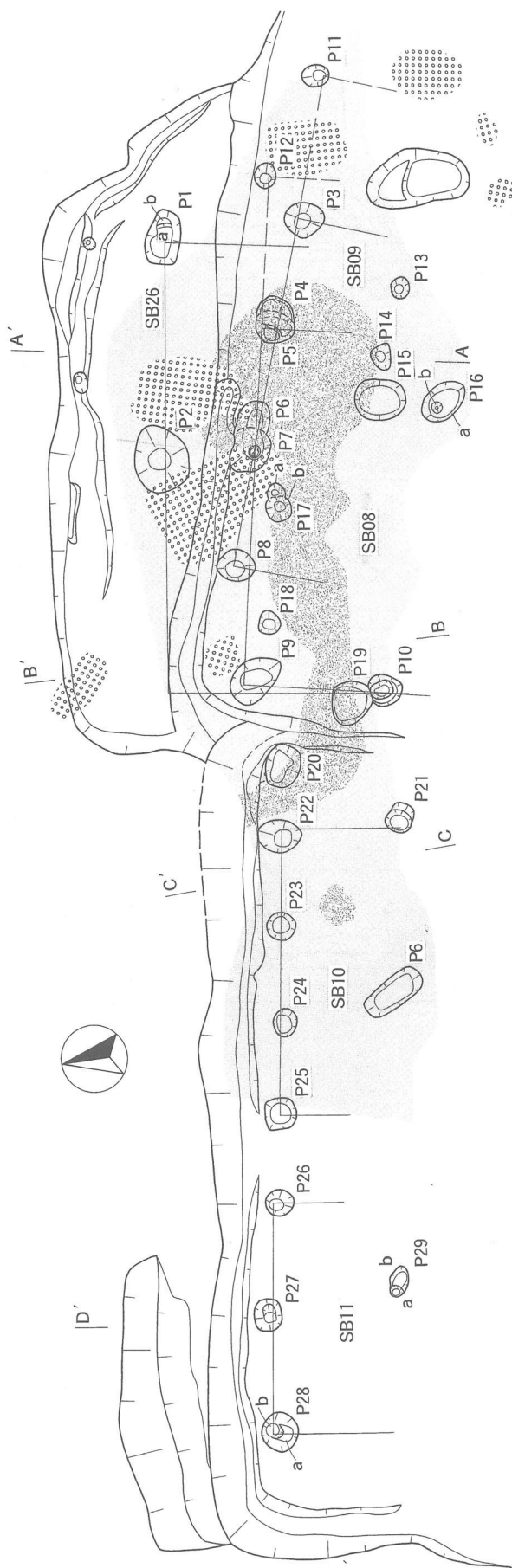
挿図88 陰田隠れが谷遺跡 2区4テラスSB06遺構図



挿図89 陰田隠れが谷遺跡 2区4テラスSB16遺構図

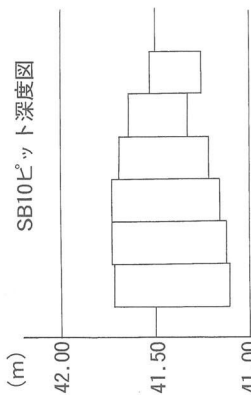


挿図90 陰田隠れが谷遺跡 2区4テラスSB24遺構図



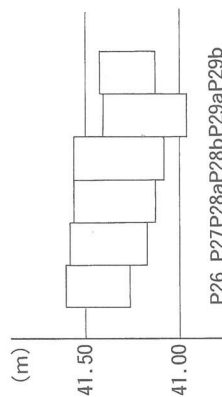
(1 : 100)
0 5 m

SB10ピット深度図



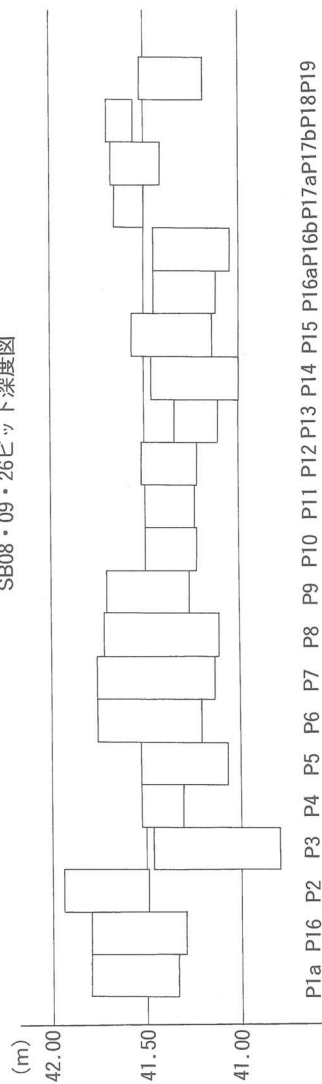
P22 P23 P24 P25 P21 P20 (ピット番号)

SB11ピット深度図 | D



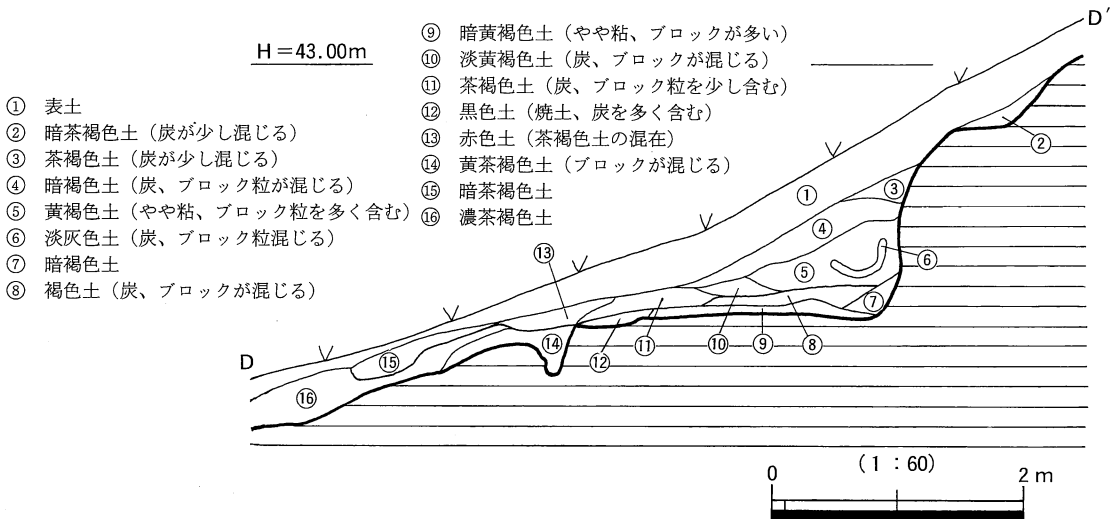
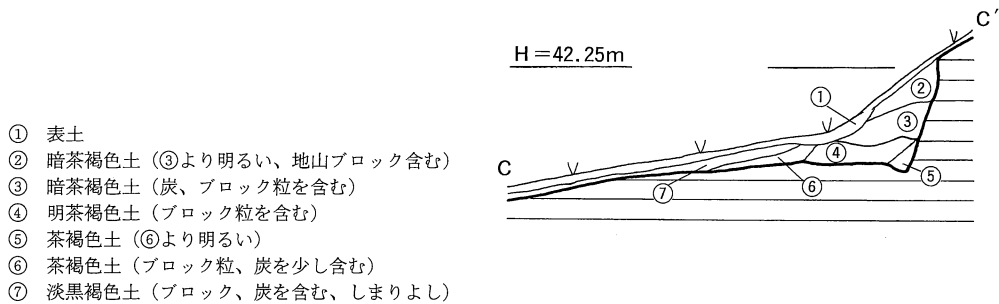
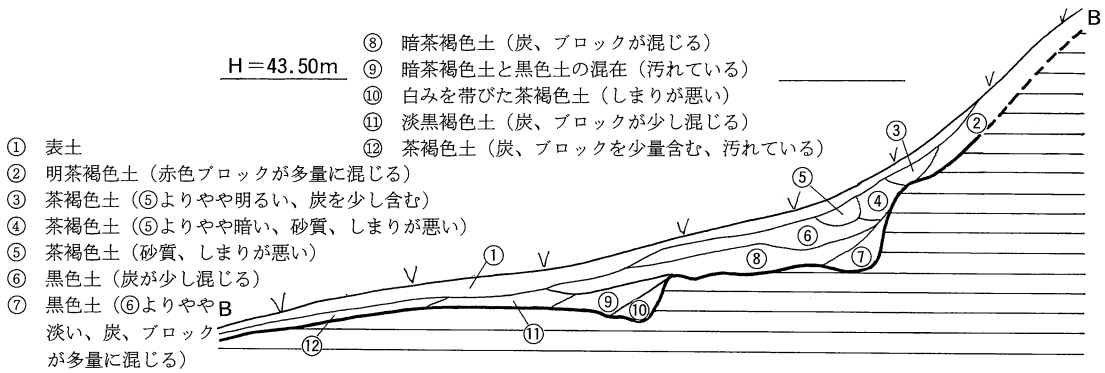
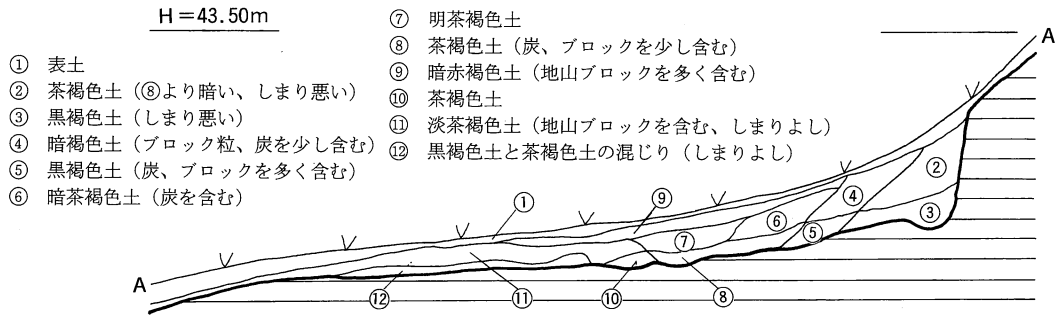
P26 P27 P28a P28b P29a P29b (ピット番号)

SB08・09・26ピット深度図

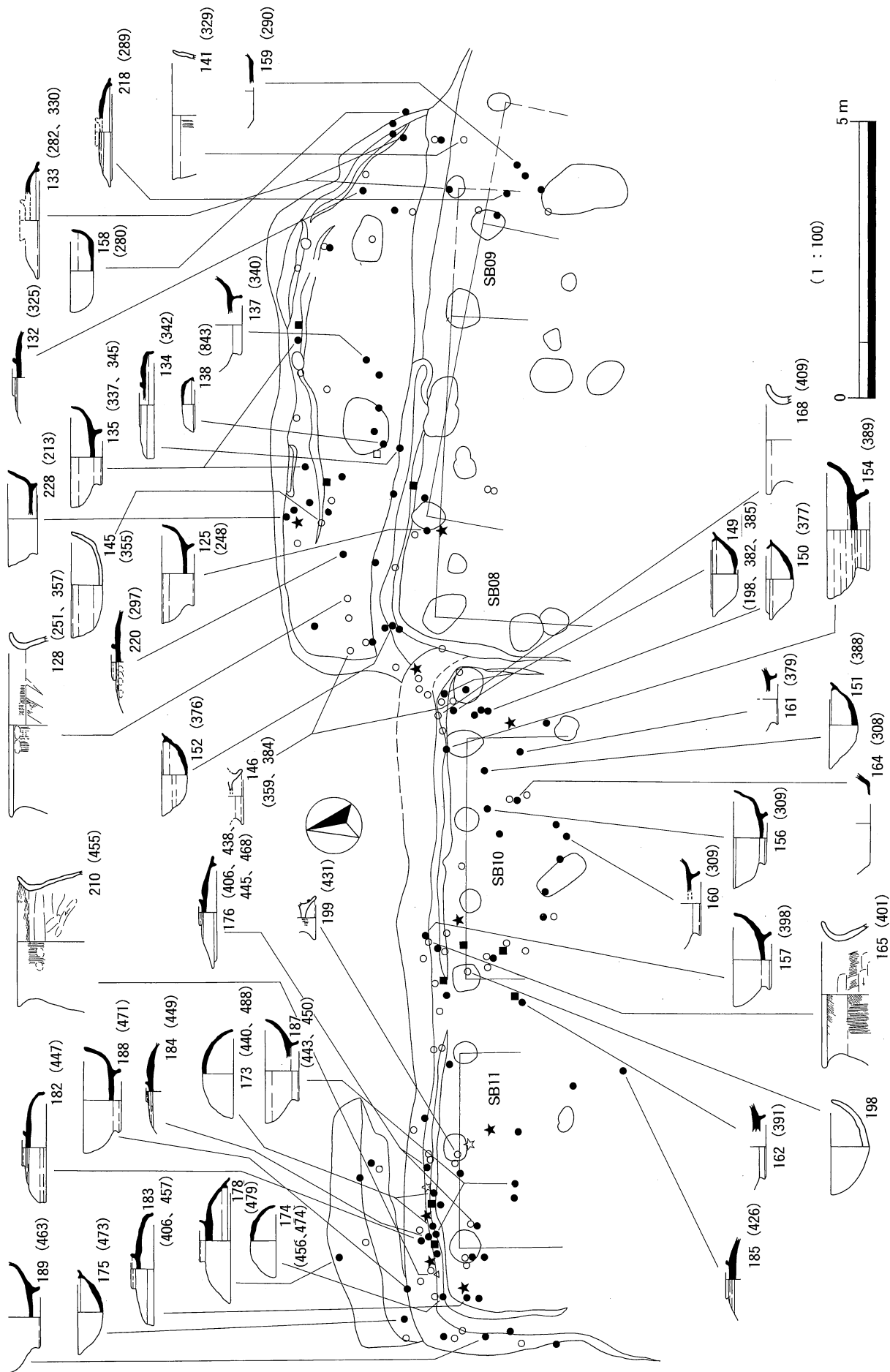


P1a P16 P2 P3 P4 P5 P6 P7 P8 P9 P10 P11 P12 P13 P14 P15 P16a P16b P17a P17b P18 P19 (ピット番号)

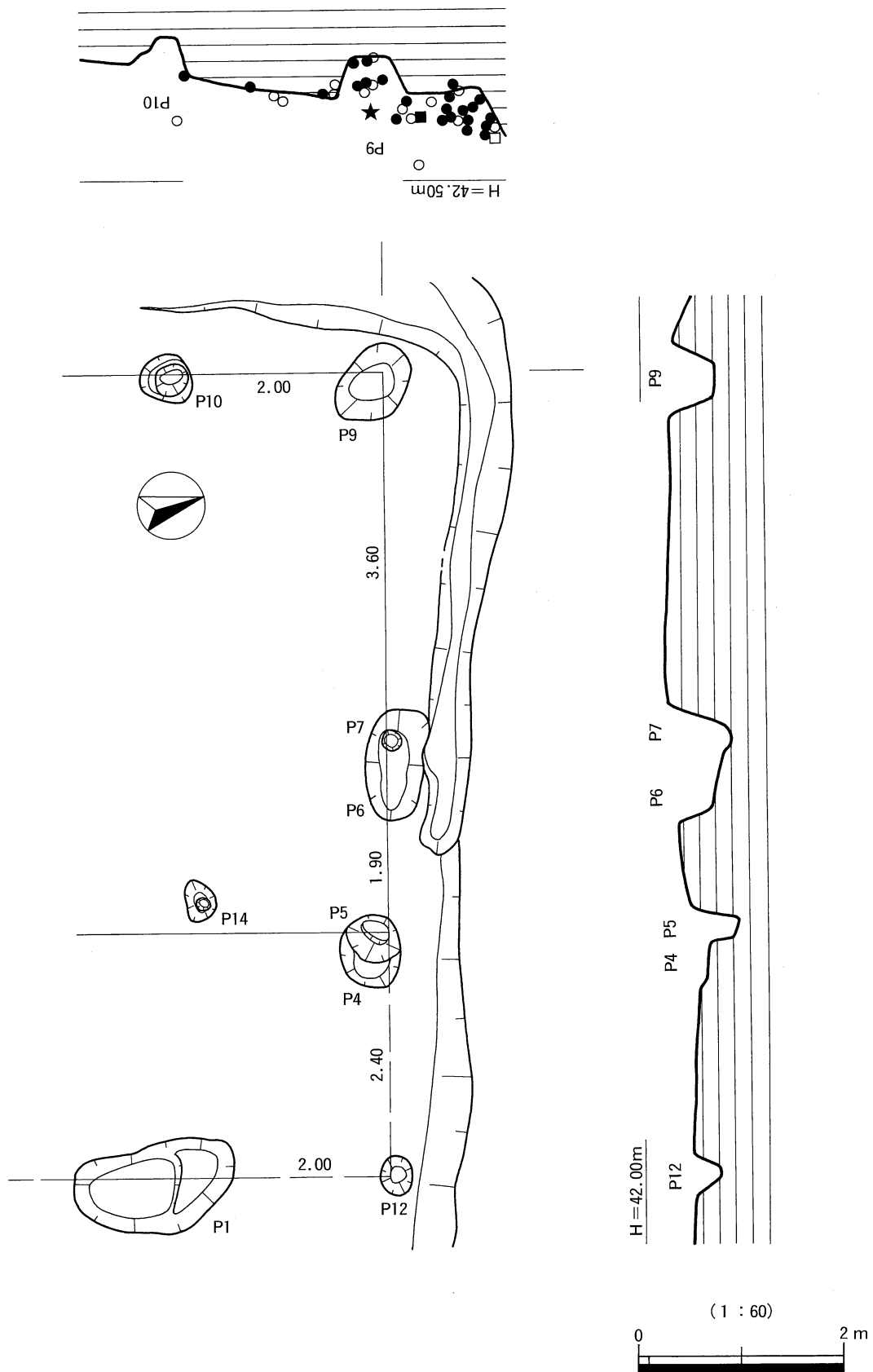
挿図91 險田隠れが谷遺跡 2区5テラス ピット深度図、炭溜5遺構図



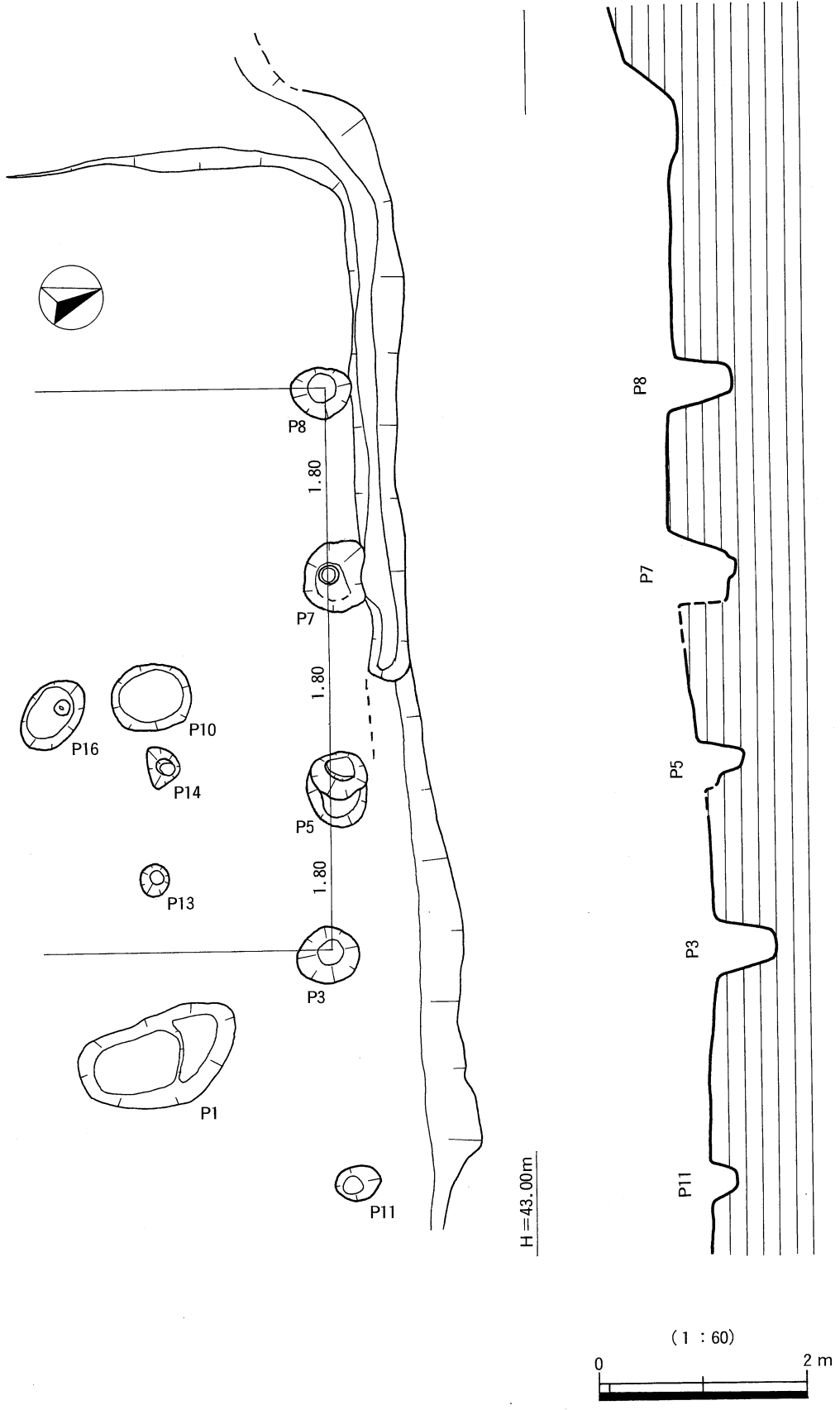
挿図92 陰田隠れが谷遺跡 2区5テラス土層



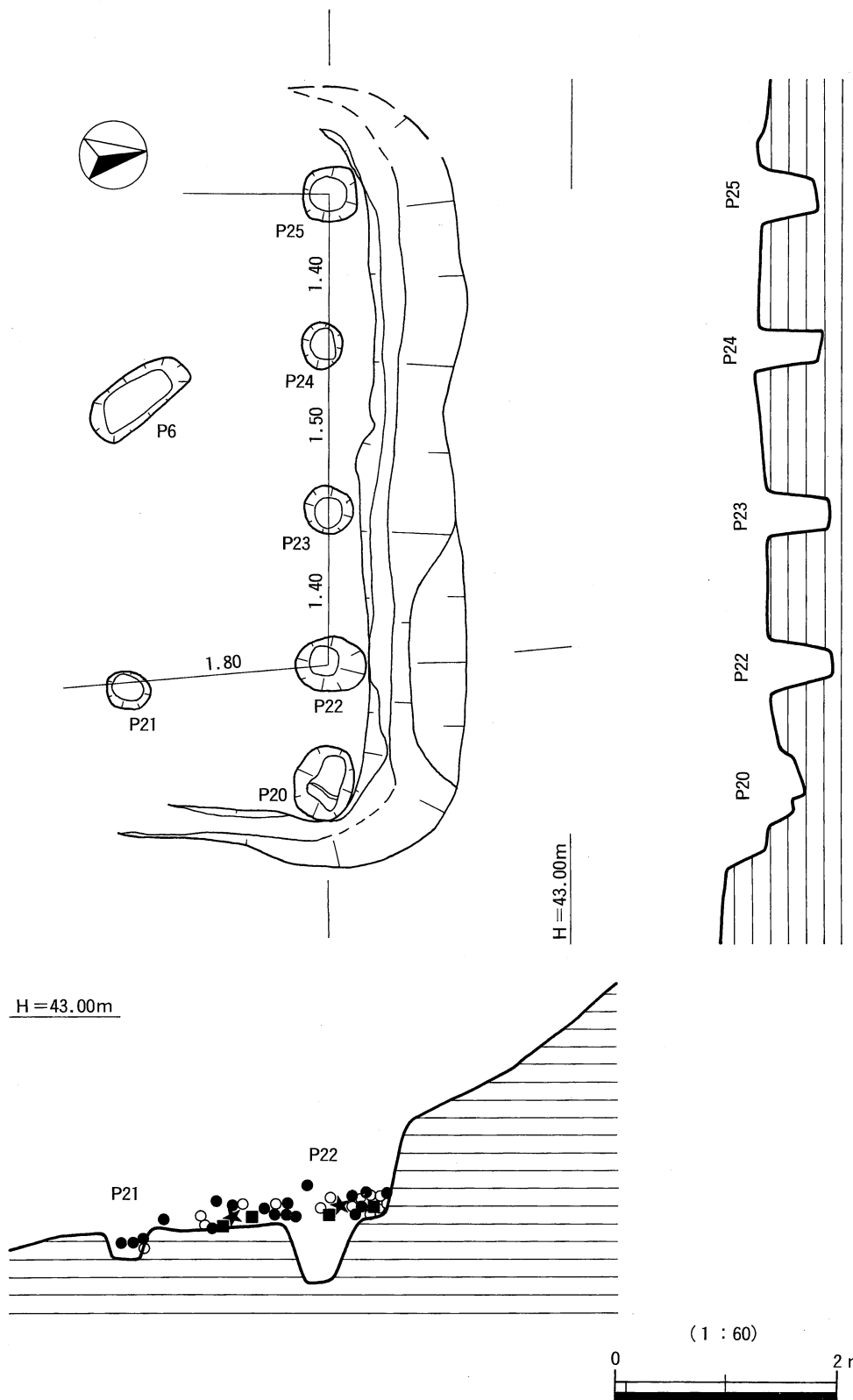
挿図93 陰田隠れが谷遺跡 2区5テラス遺物分布図



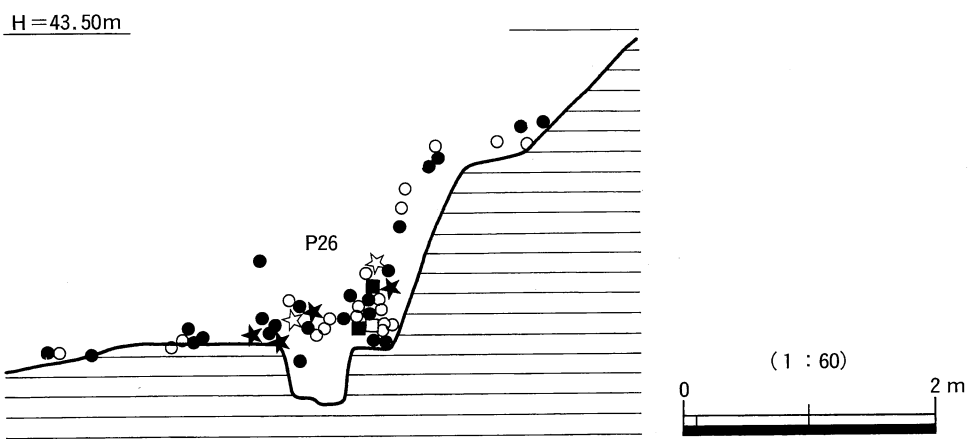
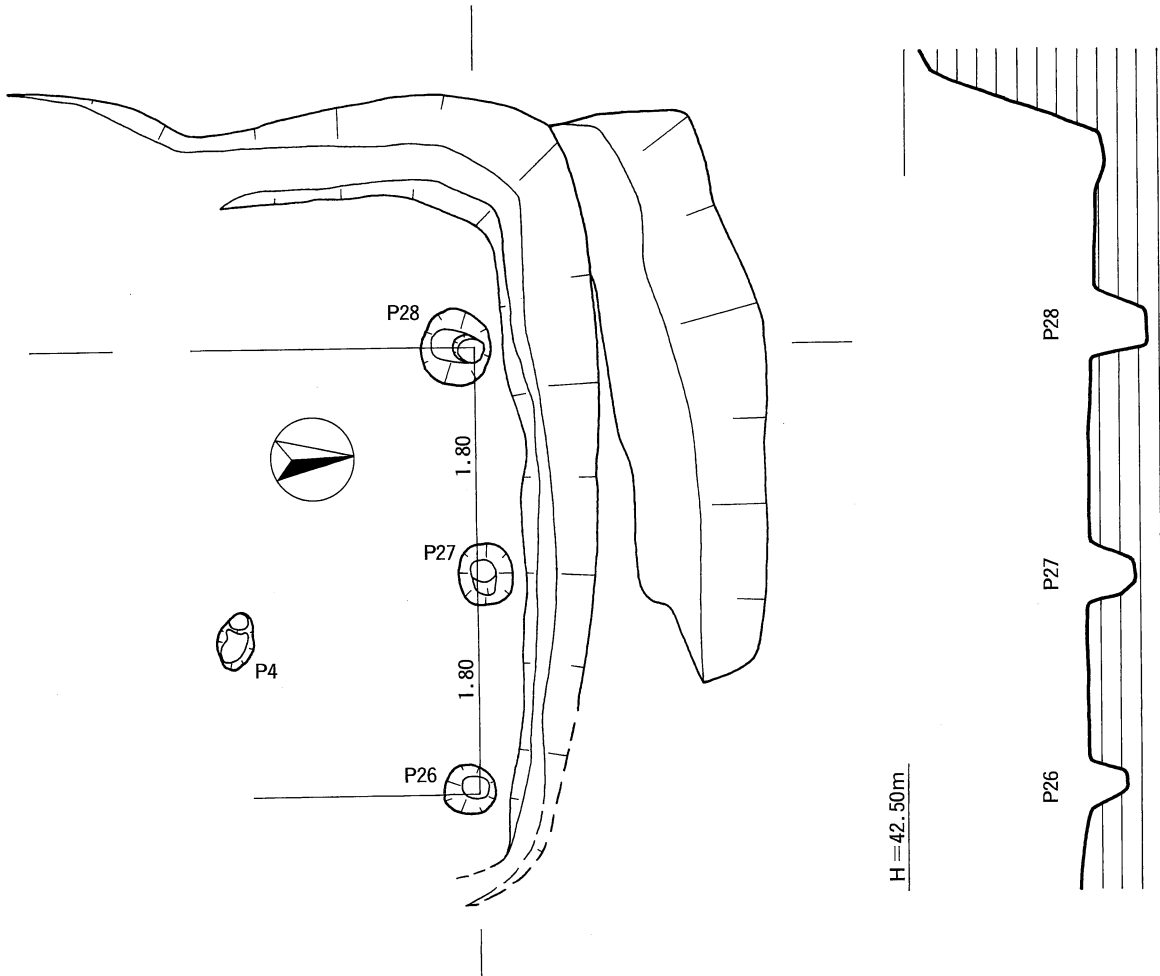
挿図94 陰田隠れが谷遺跡 2区5テラスSB08遺構図



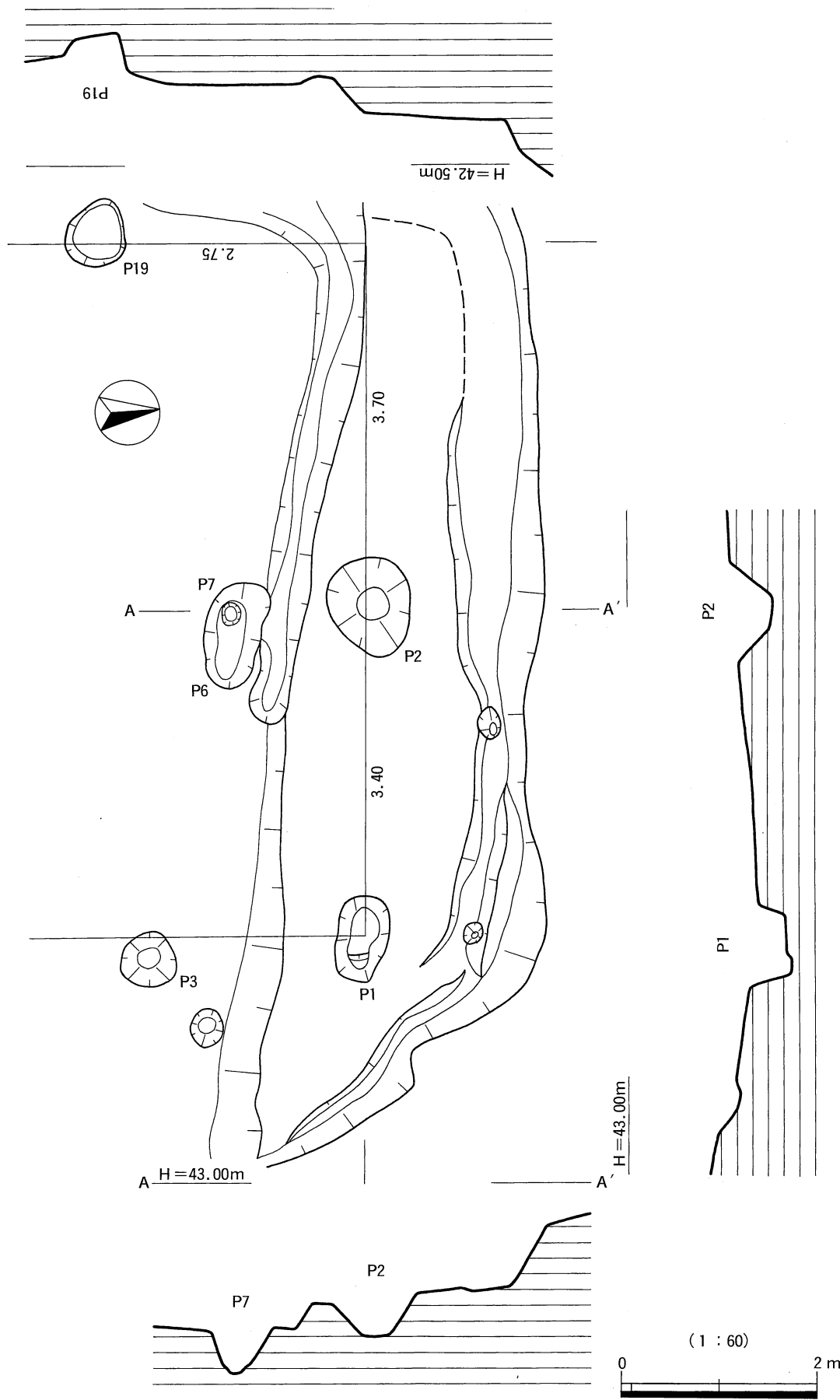
挿図95 陰田隠れが谷遺跡 2区5テラスSB09遺構図



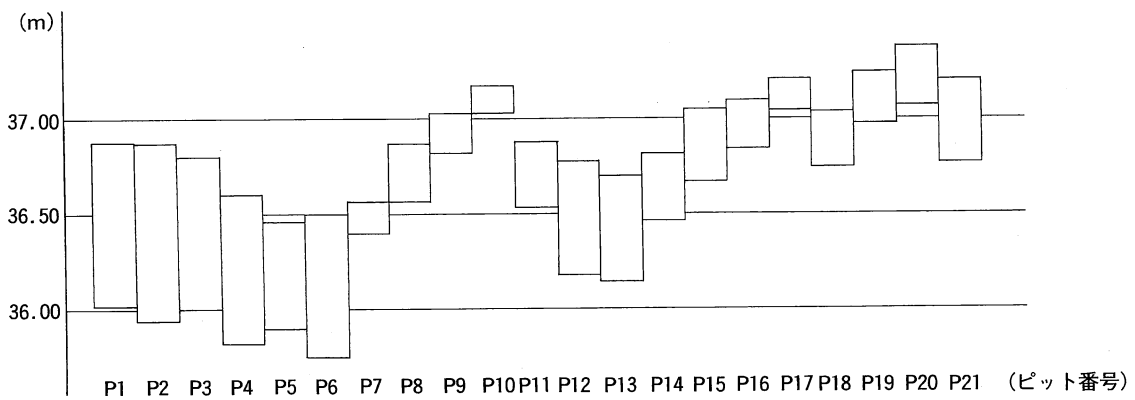
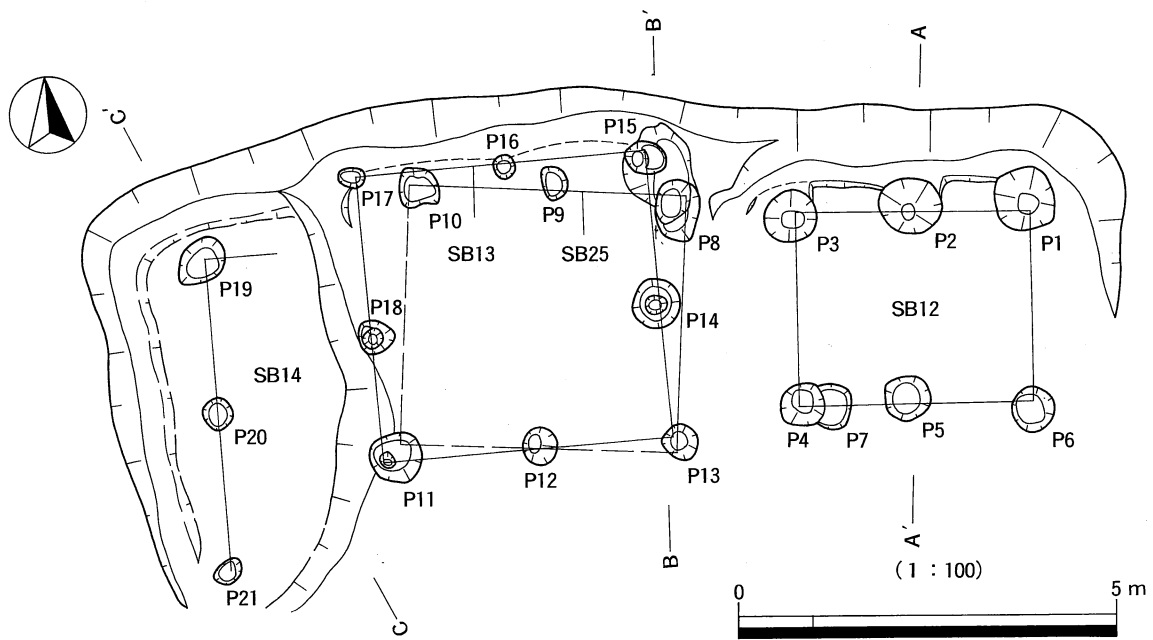
挿図96 陰田隠れが谷遺跡 2区5テラスSB10遺構図



挿図97 陰田隠れが谷遺跡 2区5テラスSB11遺構図

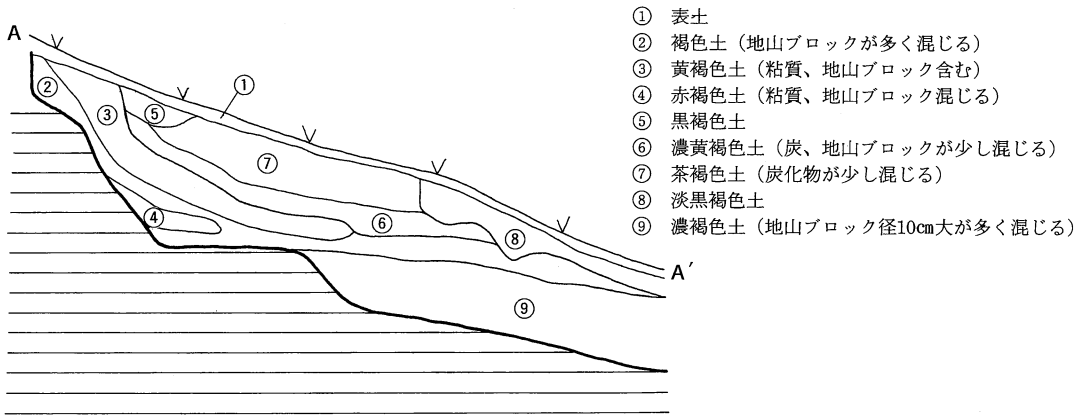


挿図98 陰田隠れが谷遺跡 2区5テラスSB26遺構図



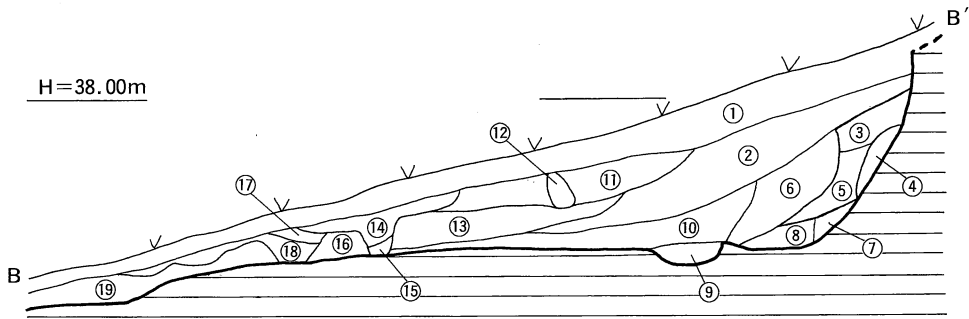
挿図99 陰田隠れが谷遺跡 2区6テラス ピット深度図

H=39.00m



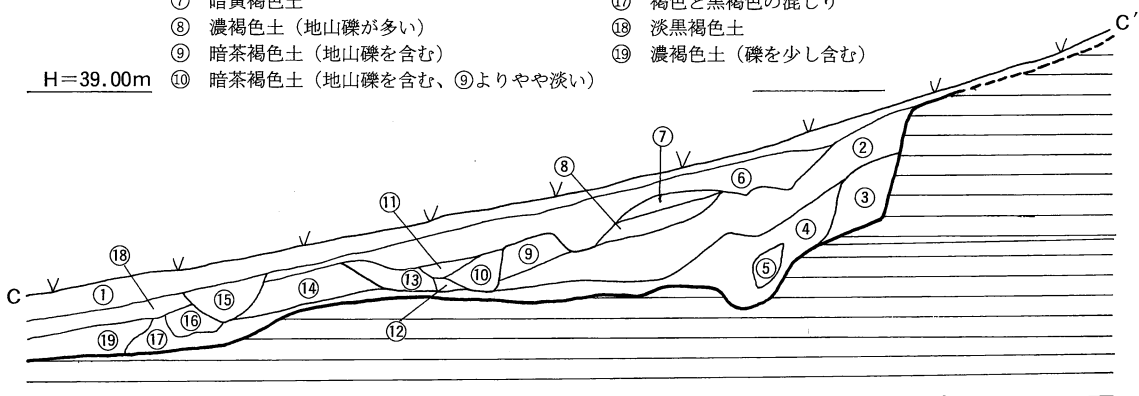
- ① 表土
- ② 褐色土 (地山ブロックが多く混じる)
- ③ 黄褐色土 (粘質、地山ブロック含む)
- ④ 赤褐色土 (粘質、地山ブロック混じる)
- ⑤ 黒褐色土
- ⑥ 濃黄褐色土 (炭、地山ブロックが少し混じる)
- ⑦ 茶褐色土 (炭化物が少し混じる)
- ⑧ 淡黒褐色土
- ⑨ 濃褐色土 (地山ブロック径10cm大が多く混じる)

H=38.00m



- ① 表土
- ② 赤茶褐色土 (地山ブロックを含む)
- ③ 濃褐色土 (ブロック、炭を多く含む)
- ④ 黄褐色土 (地山粒を含む)
- ⑤ 褐色土 (ブロックを多く含む、炭も少しあり)
- ⑥ 茶褐色土 (地山礫を多く含む)
- ⑦ 暗黄褐色土
- ⑧ 濃褐色土 (地山礫が多い)
- ⑨ 暗茶褐色土 (地山礫を含む)
- ⑩ 暗茶褐色土 (地山礫を含む、⑨よりやや淡い)
- ⑪ 淡茶褐色土 (地山粒を少し含むが他と比べ少ない)
- ⑫ 黒褐色土
- ⑬ 淡茶褐色土 (地山礫を多量に含む)
- ⑭ 黒褐色土 (ブロックを含む)
- ⑮ 黒褐色土 (⑭よりやや淡い)
- ⑯ 褐色土 (礫を少し含む)
- ⑰ 褐色と黒褐色の混じり
- ⑱ 淡黒褐色土
- ⑲ 濃褐色土 (礫を少し含む)

H=39.00m

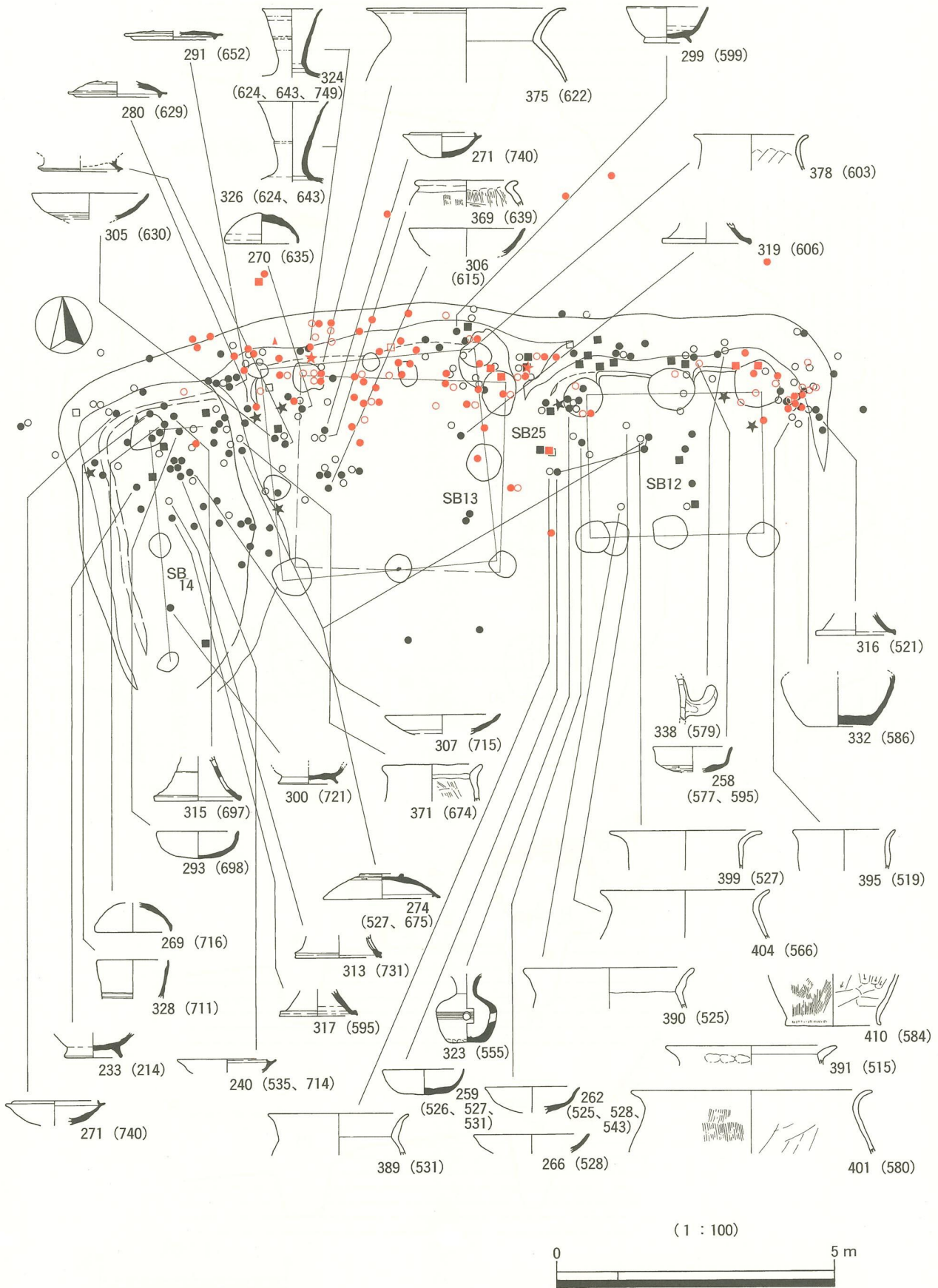


- ① 表土
- ② 暗茶褐色土 (炭が混じる、ブロック礫が多く混じる)
- ③ 淡黒茶褐色土 (ブロックが混じる)
- ④ 暗茶褐色土 (炭、ブロックが混じる、②よりやや濃い)
- ⑤ 黄色土 (地山ブロック)
- ⑥ 黒色土 (地山ブロックを少し含む)
- ⑦ 茶褐色土
- ⑧ 赤黄褐色土 (粘質)
- ⑨ 茶褐色土
- ⑩ 淡黒色土 (炭が混じる)
- ⑪ 灰褐色土
- ⑫ 黒色と茶褐色の混じり
- ⑬ 淡灰茶褐色土 (炭が少し混じる)
- ⑭ 明茶褐色土
- ⑮ 黒色土 (炭、ブロック粒が混じる)
- ⑯ 灰黄色土 (やや粘)
- ⑰ 黄色土 (粘質)
- ⑱ 灰色土 (炭が混じる)
- ⑲ 灰色と黄色の混じり

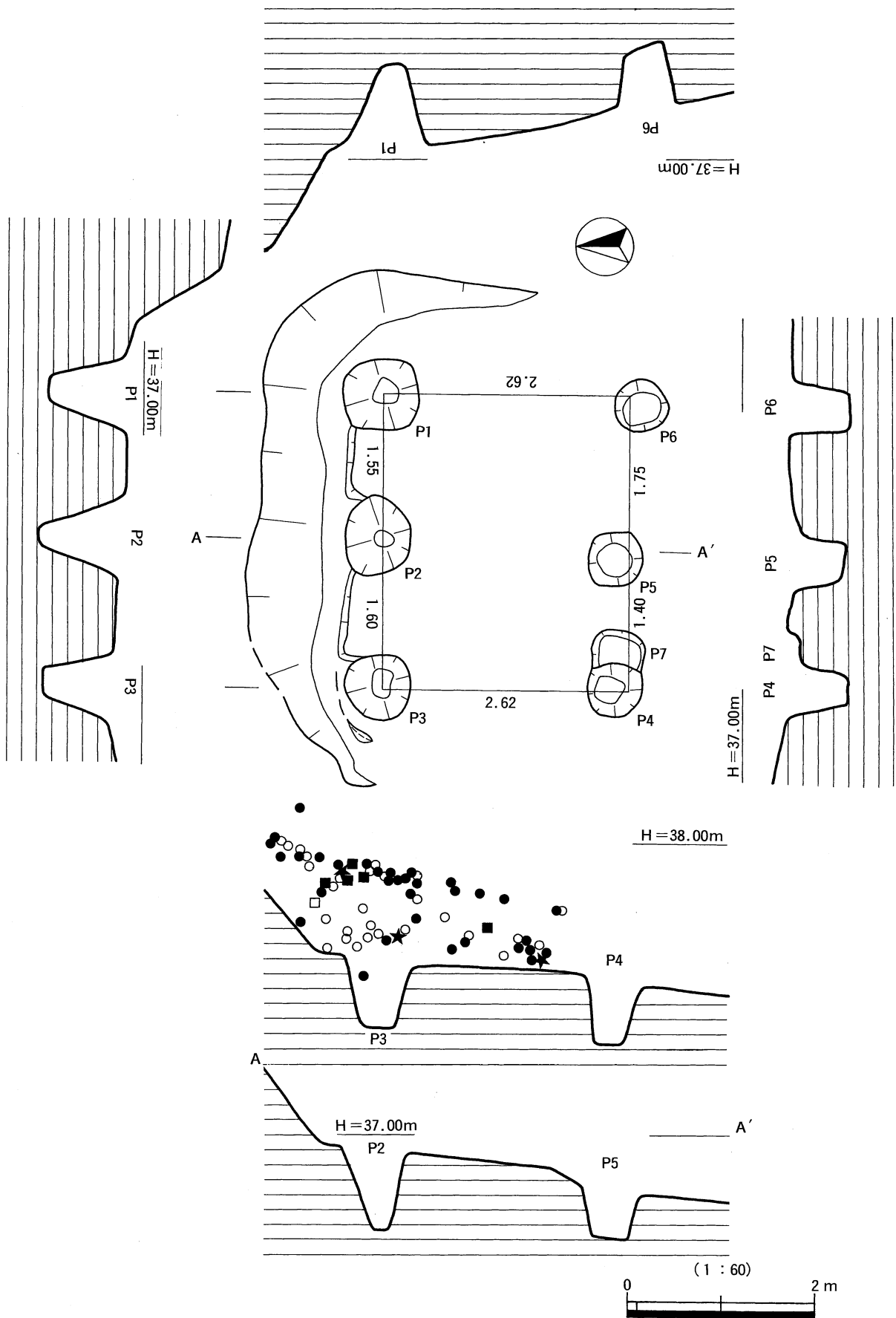
(1 : 60)



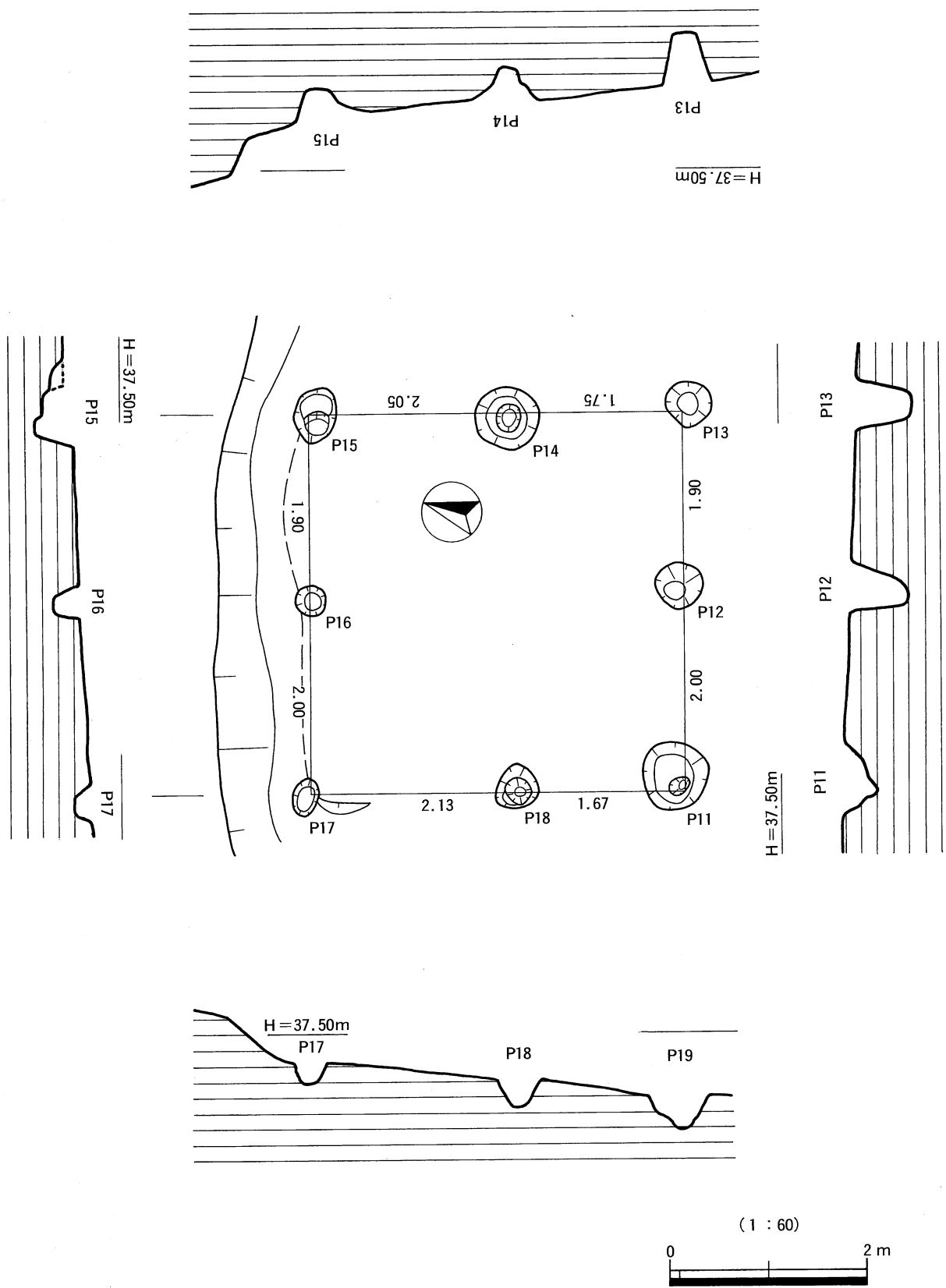
挿図100 陰田隠れが谷遺跡 2区6テラス土層図



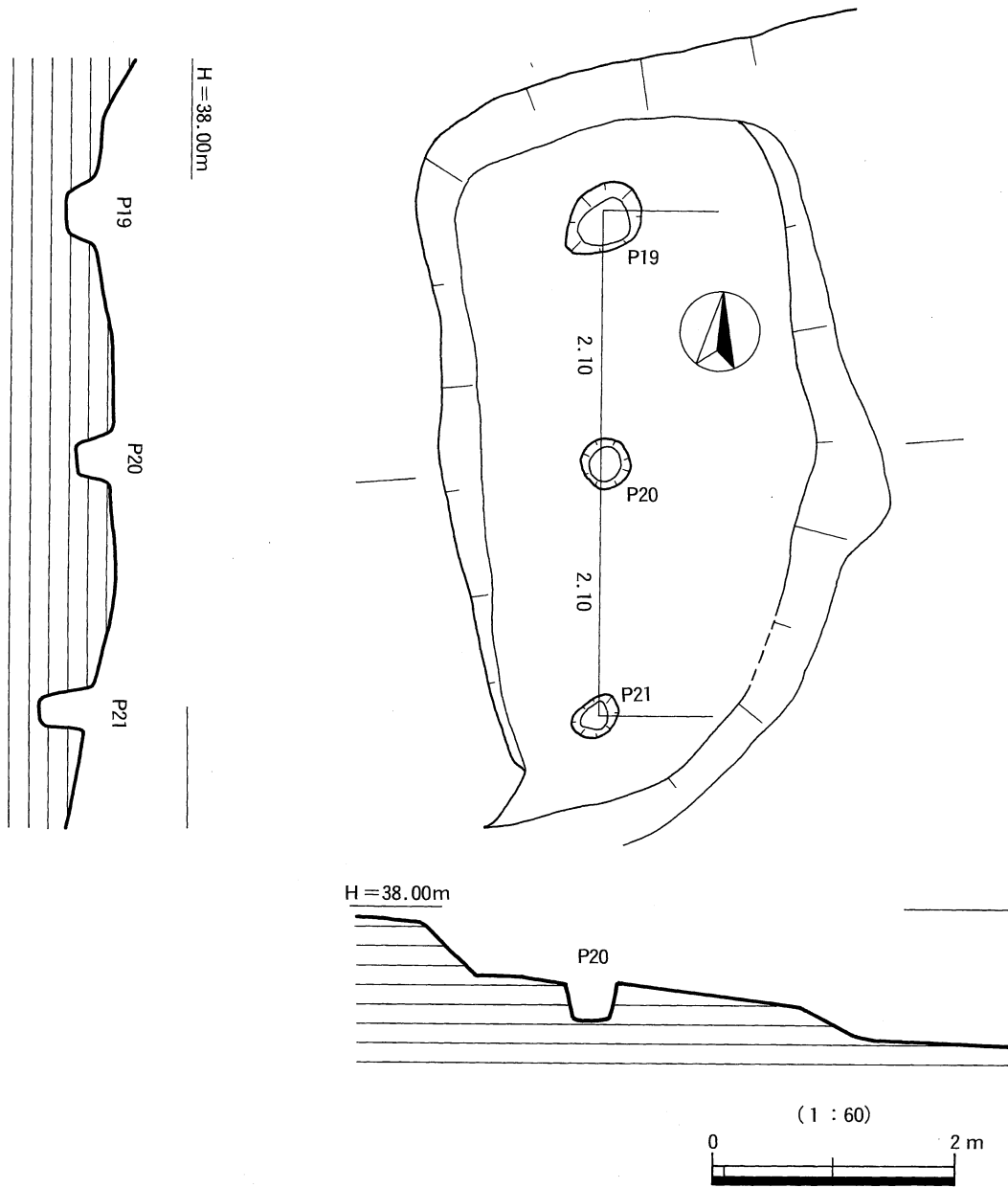
挿図101 陰田隠れが谷遺跡 2区6テラス遺物分布図



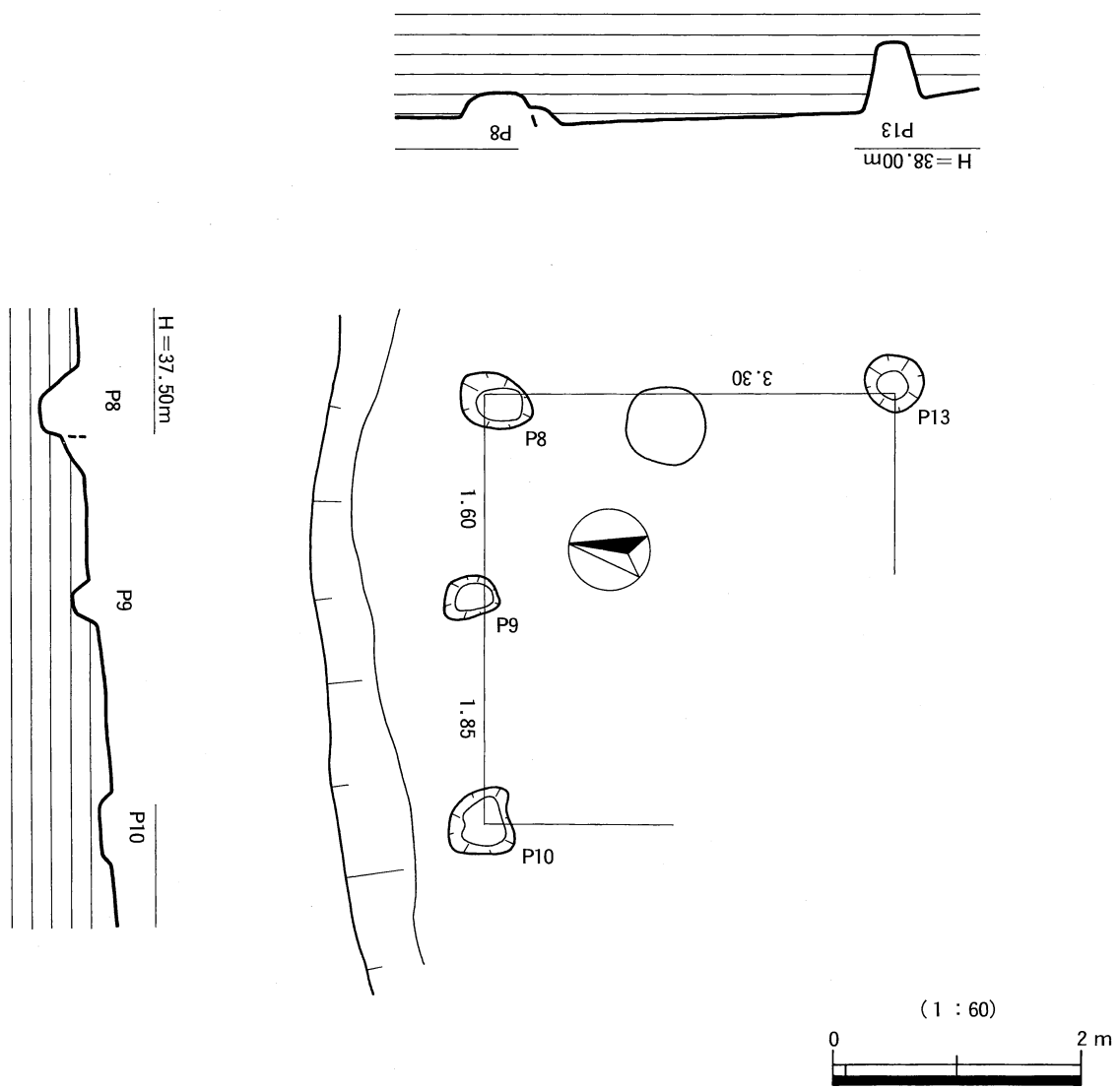
挿図102 陰田隠れが谷遺跡 2区6テラスSB12遺構図



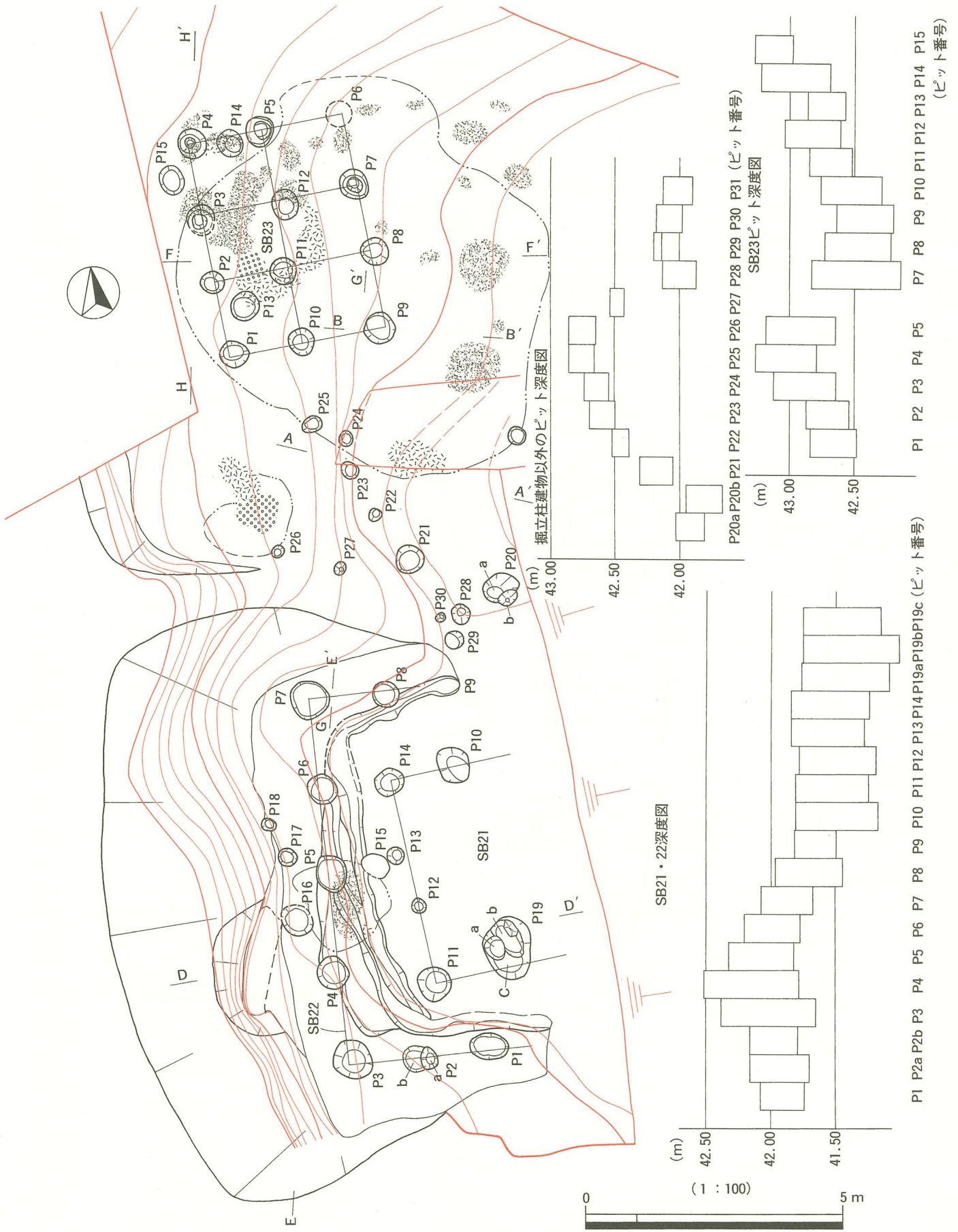
挿図103 陰田隠れが谷遺跡 2区6テラスSB13遺構図



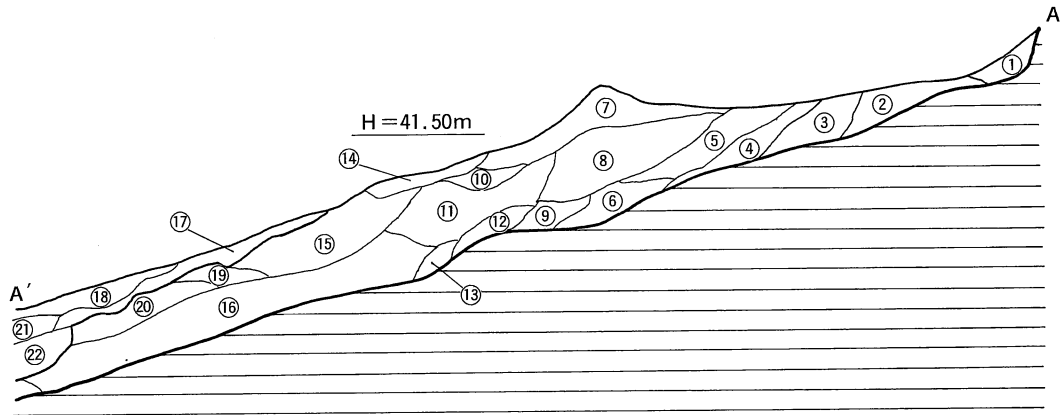
挿図104 陰田隠れが谷遺跡 2区6テラスSB14遺構図



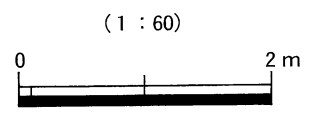
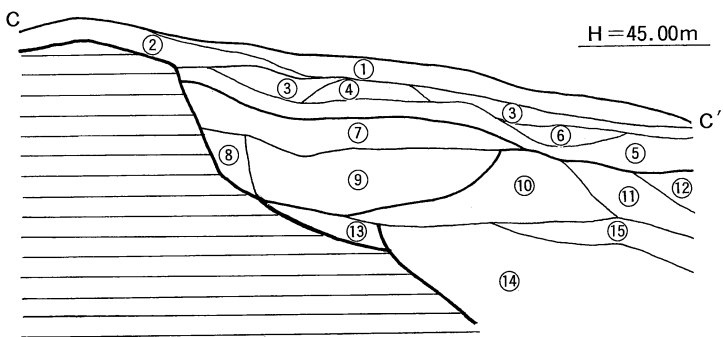
挿図105 陰田隠れが谷遺跡 2区6テラスSB25遺構図



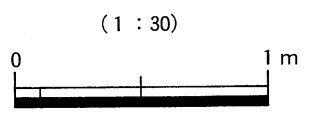
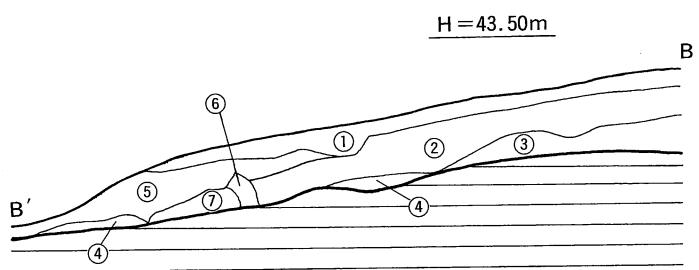
挿図106 陰田隠れが谷遺跡 3区7テラス ピット深度図、炭溜6遺構図



- ① 淡黄褐色土 (ややしまっている)
- ② 明黄褐色土 (岩が多く混じる)
- ③ 灰黄色土 (焼土塊が混じる)
- ④ 暗灰黄色土 (ややしまっている)
- ⑤ 淡黄褐色土 (岩がやや混じる)
- ⑥ 暗灰黄褐色土 (岩が多く含まれる)
- ⑦ 灰黄褐色土 (やややわらかい)
- ⑧ 暗灰黄色土 (ややしまっている)
- ⑨ 灰黄褐色土 (ややしまっている)
- ⑩ 淡黄褐色土 (ややしまっている)
- ⑪ 灰褐色土 (ややぼろぼろしている)
- ⑫ 明灰褐色土 (岩が混じる)
- ⑬ 灰褐色土 (ぼろぼろしている)
- ⑭ 淡灰褐色土 (粘質、やわらかい)
- ⑮ 淡黄茶褐色土 (しまっている)
- ⑯ 暗淡黄茶褐色土 (岩が混じる)
- ⑰ 黒色土 (炭、焼土が混じる)
- ⑱ 茶褐色土 (粘質、やわらかい)
- ⑲ 暗黄褐色土 (しまっている)
- ⑳ 灰黄褐色土 (ややしまっている)
- ㉑ 黒色土 (⑰より黒い、炭、焼土が混じる)
- ㉒ 灰色土 (炭がわずかに混じる)
- ㉓ 淡灰色土 (ぼろぼろしている)

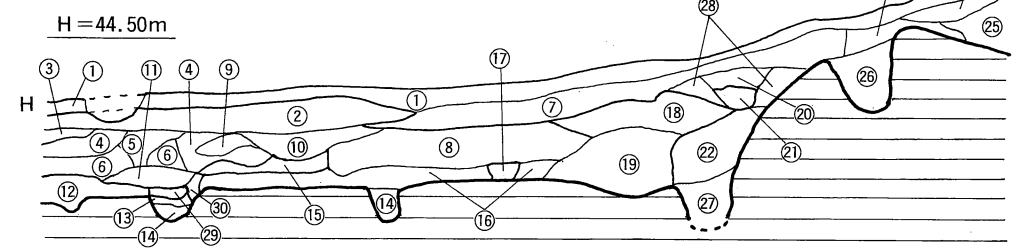
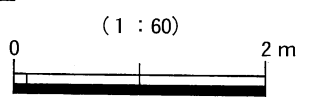
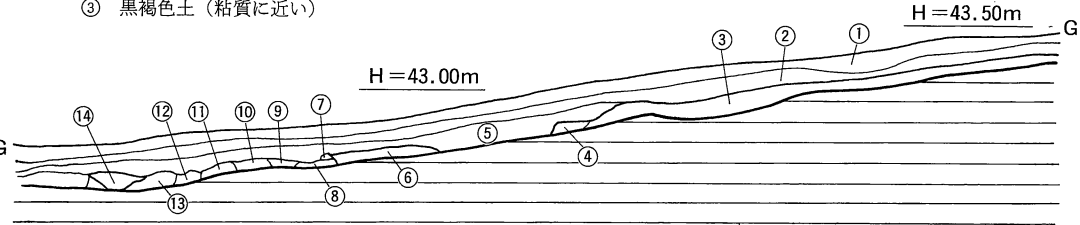
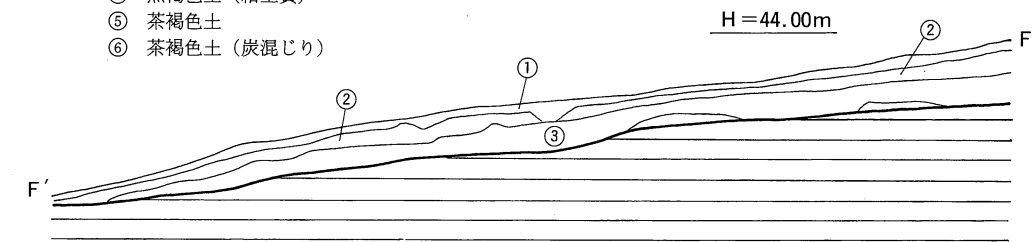
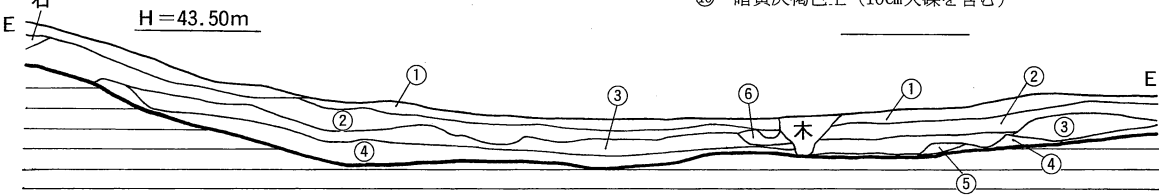
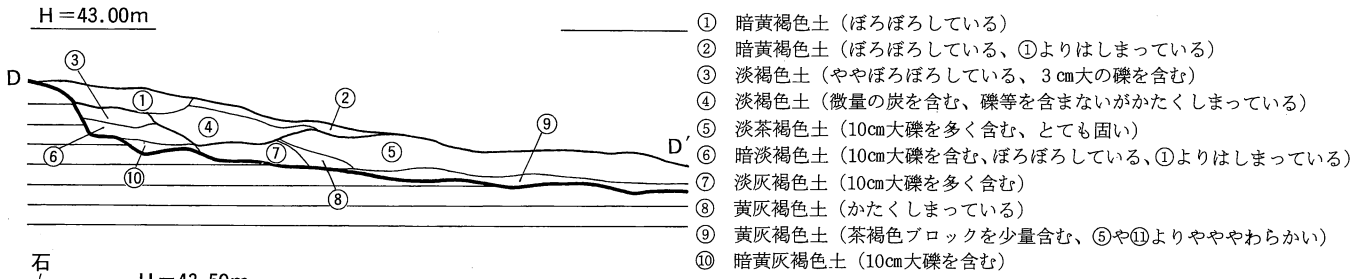


- ① 暗褐色土 (表土、やわらかい)
- ② 淡褐色土
- ③ 褐色土 (炭、焼土がやや混じる)
- ④ 焼土層 (褐色土に淡橙色焼土混入)
- ⑤ 灰褐色土 (木炭、焼土が混じる)
- ⑥ 黒褐色土 (炭、焼土層、粘質)
- ⑦ 淡灰黄褐色土 (かたくしまっている)
- ⑧ 暗灰黄褐色土 (かたくしまっている)
- ⑨ 灰黄褐色土 (岩が多く混じる)
- ⑩ 灰黄褐色土 (しまっているが⑦⑧より弱い)
- ⑪ 暗灰黄褐色土 (ややしまっている)
- ⑫ 明灰褐色土 (ややぼろぼろしている)
- ⑬ 明灰黄褐色土 (岩が混じらない)
- ⑭ 明黄褐色土 (岩をやや含む、かたくしまっている)
- ⑮ 淡灰褐色土 (ややかたくしまっている)

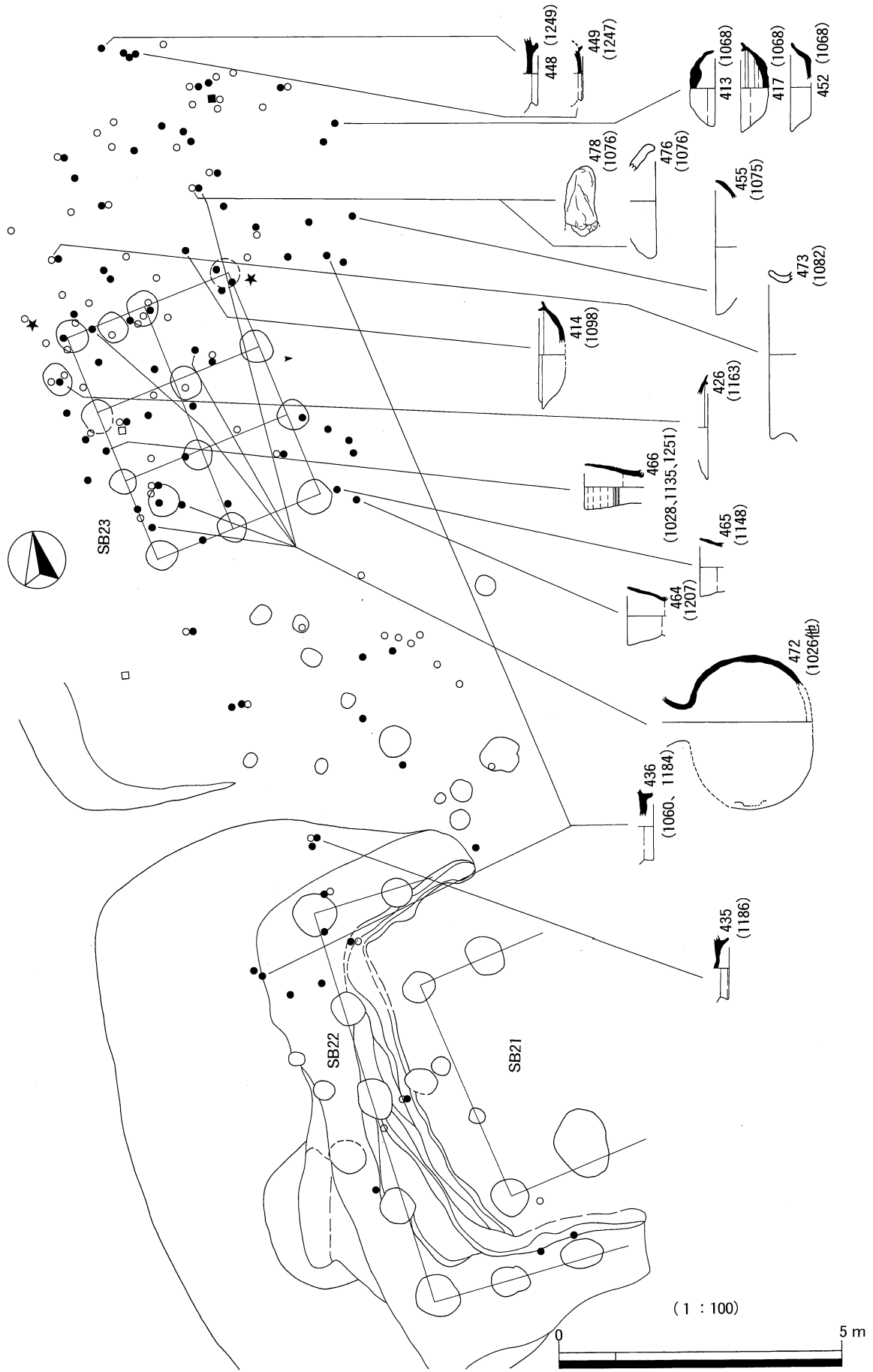


- ① 茶褐色黒色土 (炭は少々、粒子微細、しまっている)
- ② 褐色黒色土 (炭多し、炭層)
- ③ 黄褐色土 (かたくしまっている、炭少々)
- ④ 白淡黄色土 (かたくしまる)
- ⑤ 褐色黒色土 (ややくずれやすい、黒っぽい)
- ⑥ 赤褐色白色土混 (かたくしまる)
- ⑦ 黒褐色土 (白灰色赤銅色土混、赤石 (焼石) を含む、炭多し)

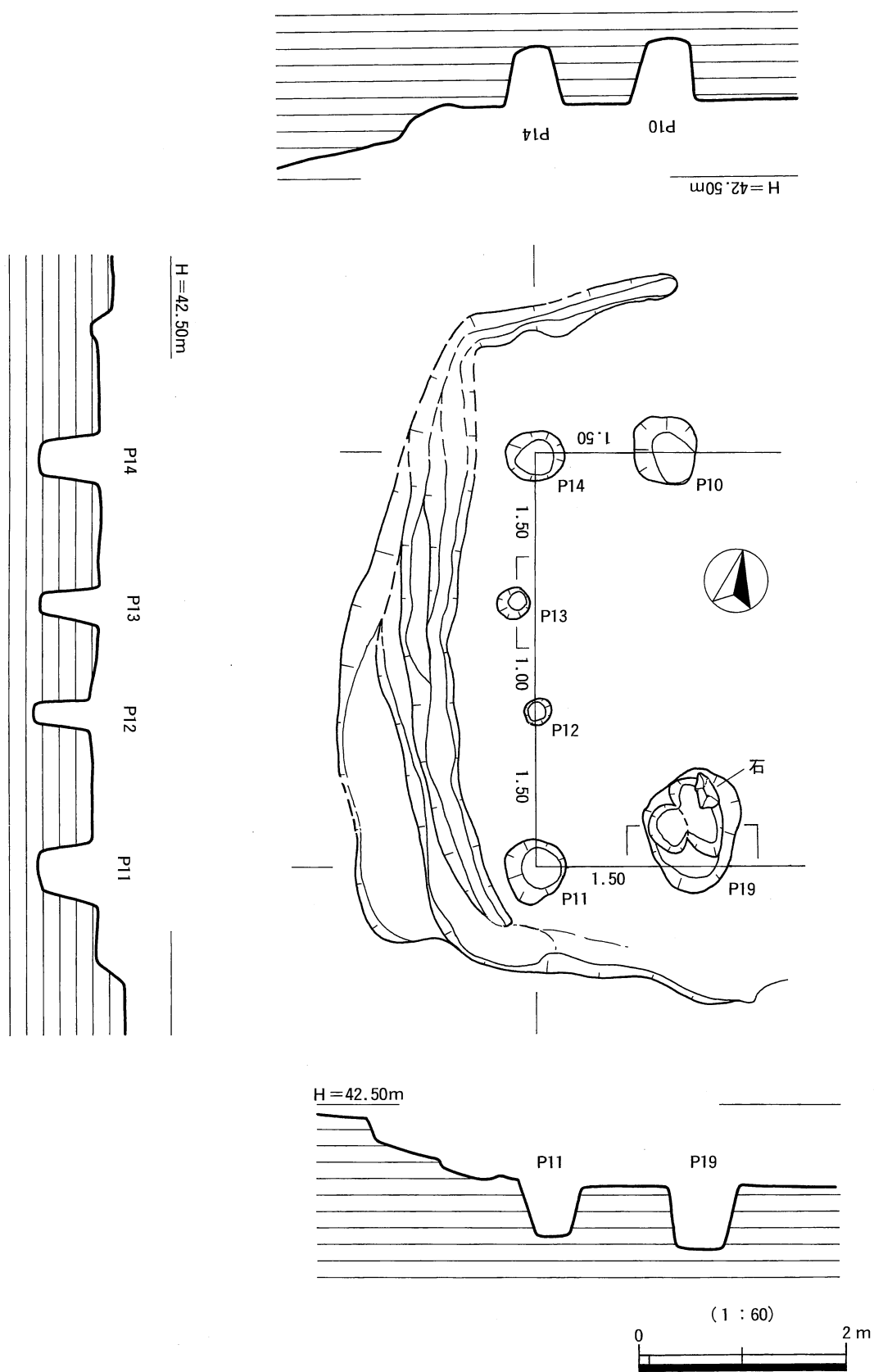
挿図107 陰田隠れが谷遺跡 3区7テラス土層図 (1)



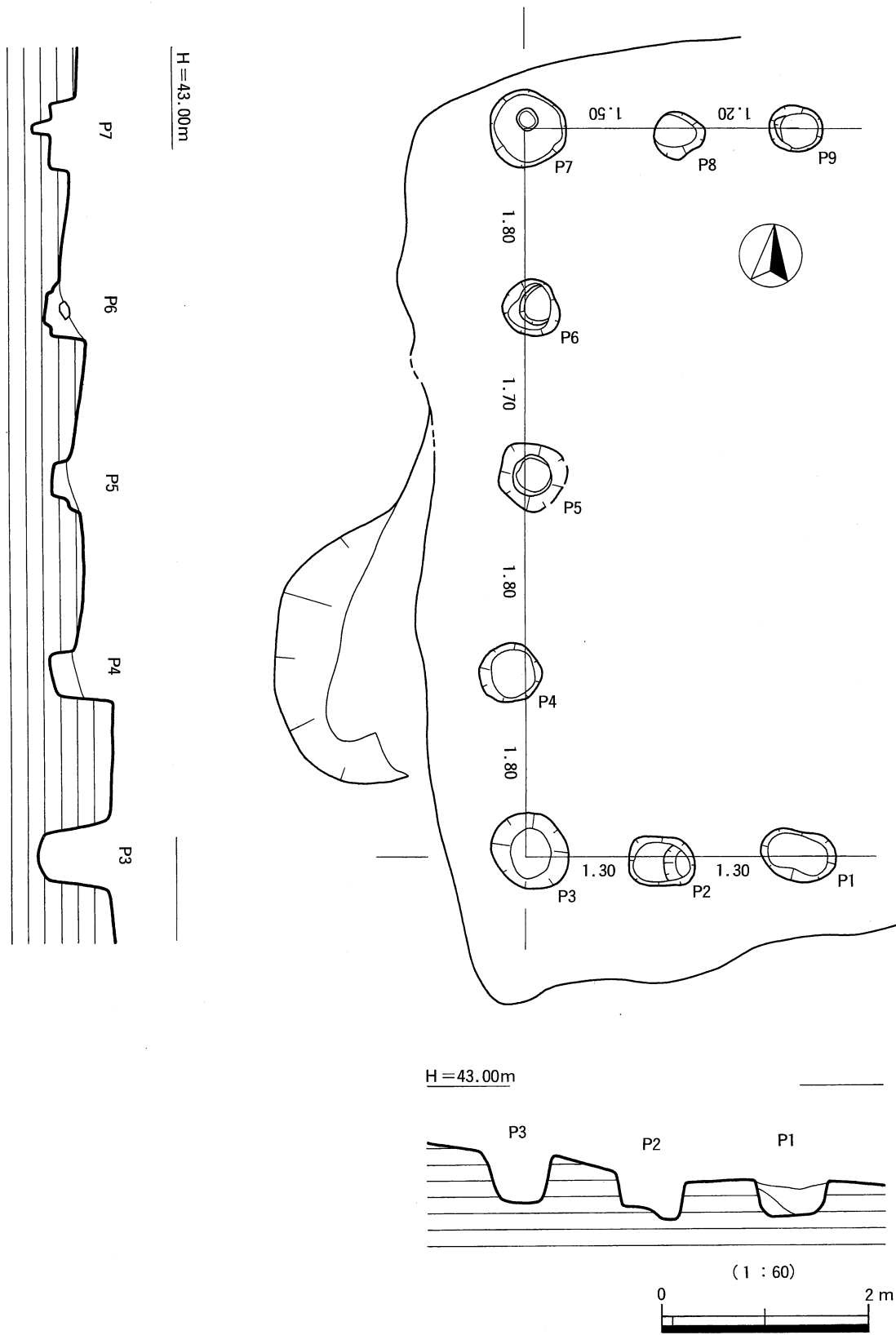
挿図108 陰田隠れが谷遺跡 7テラス土層図 (2)



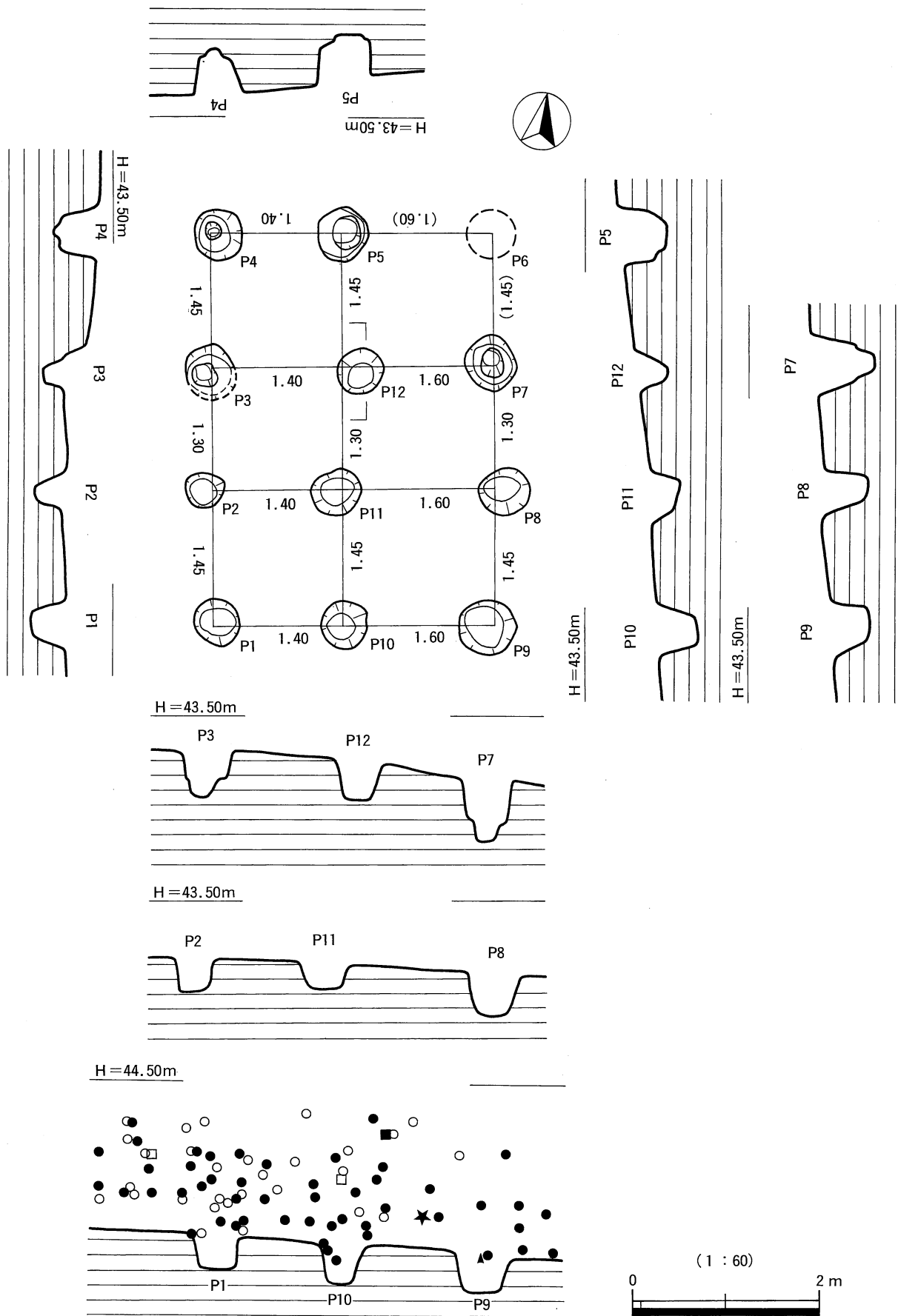
挿図109 陰田隠れが谷遺跡 3区7テラス土層図(2)



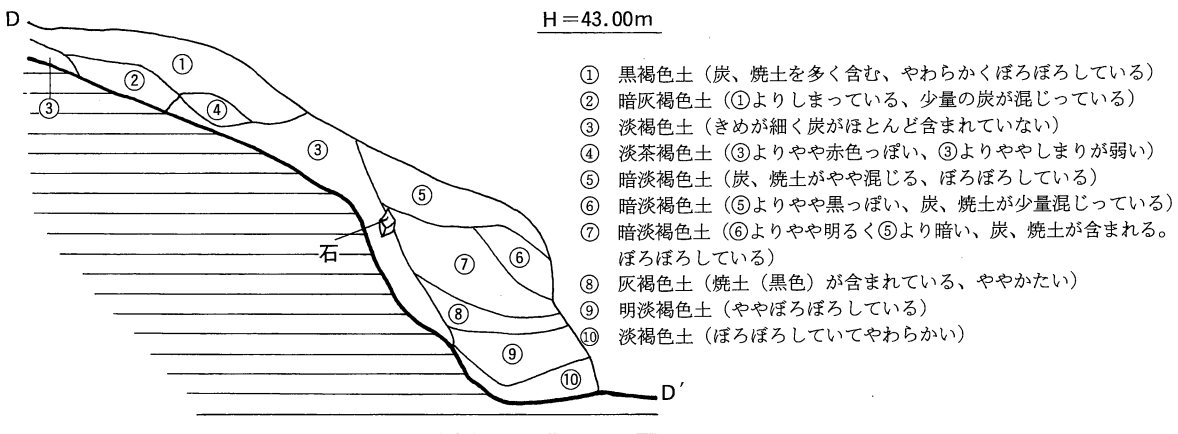
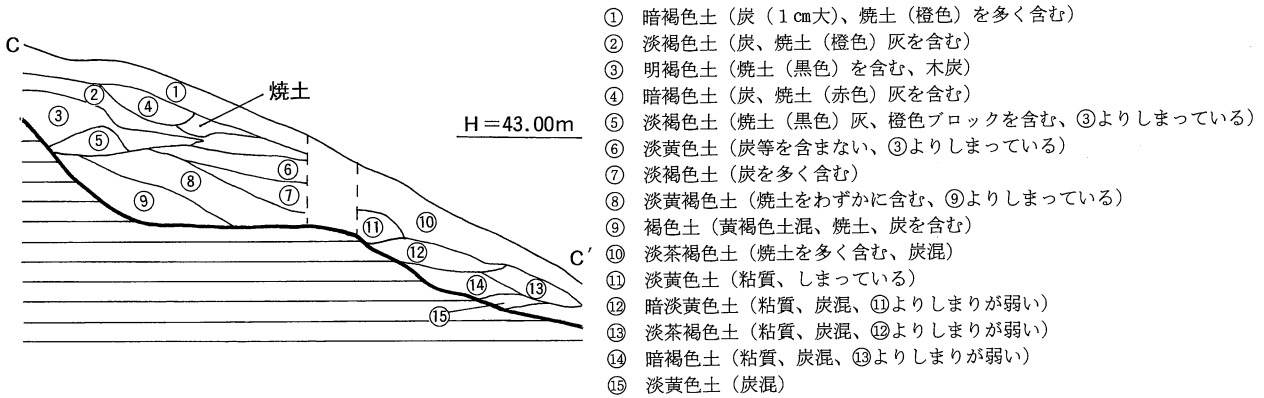
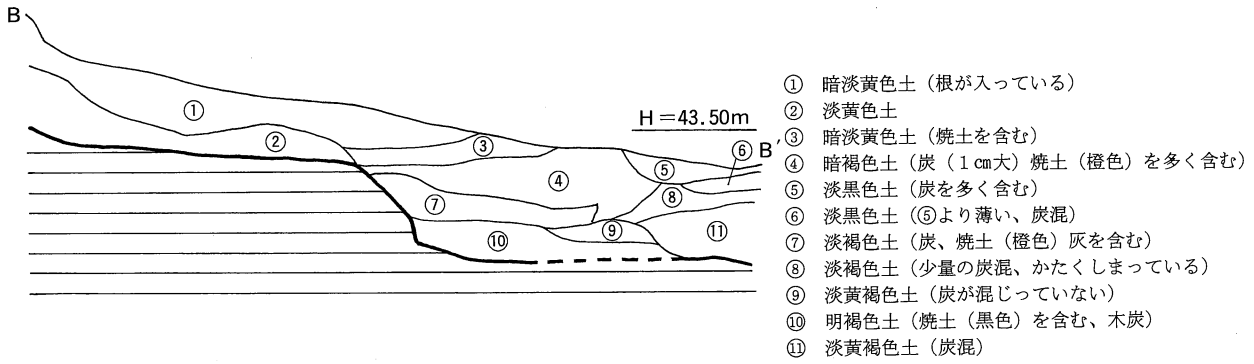
挿図110 陰田隠れが谷遺跡 3区7テラスSB21遺構図



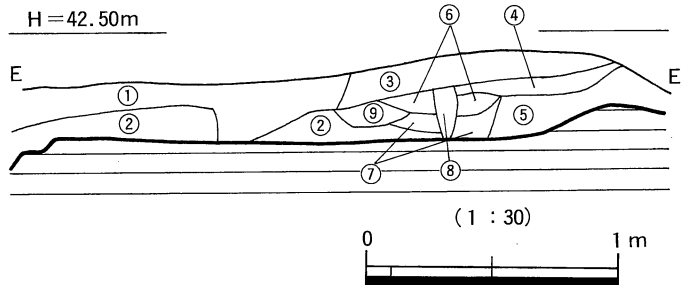
挿図111 陰田隠れが谷遺跡 3区7テラスSB22遺構図



挿図112 陰田隠れが谷遺跡 3区7テラスSB23遺構図

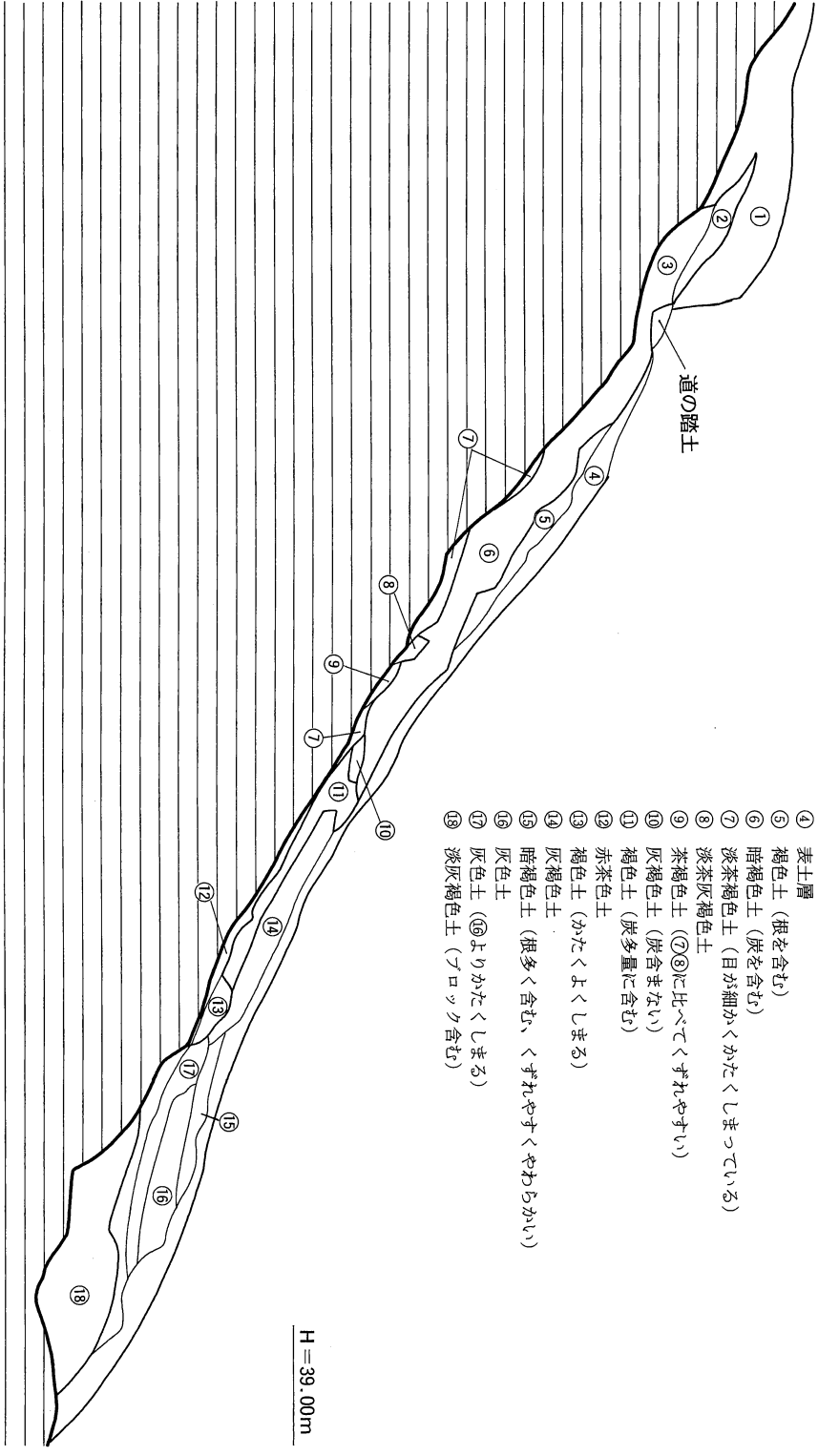


- ① 黒色土 (炭層、やわらかい)
- ② 灰色土 (炭混、やわらかい)
- ③ 淡灰色土 (炭混、やわらかくしまりが弱い)
- ④ 淡黄灰褐色土 (③よりややしまっている)
- ⑤ 灰褐色土 (ややぼろぼろしている)
- ⑥ 淡灰褐色土 (炭、焼土少量混)
- ⑦ 暗灰褐色土 (炭、焼土混)
- ⑧ 黒灰色土 (炭、焼土混)
- ⑨ 黒灰色土 (炭、焼土が⑧よりやや多く混じる)

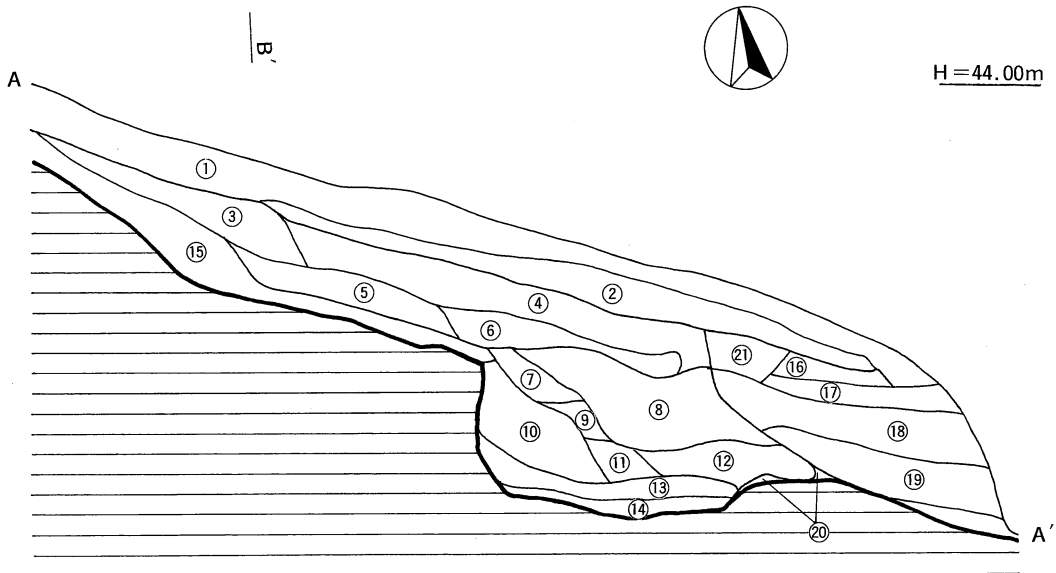
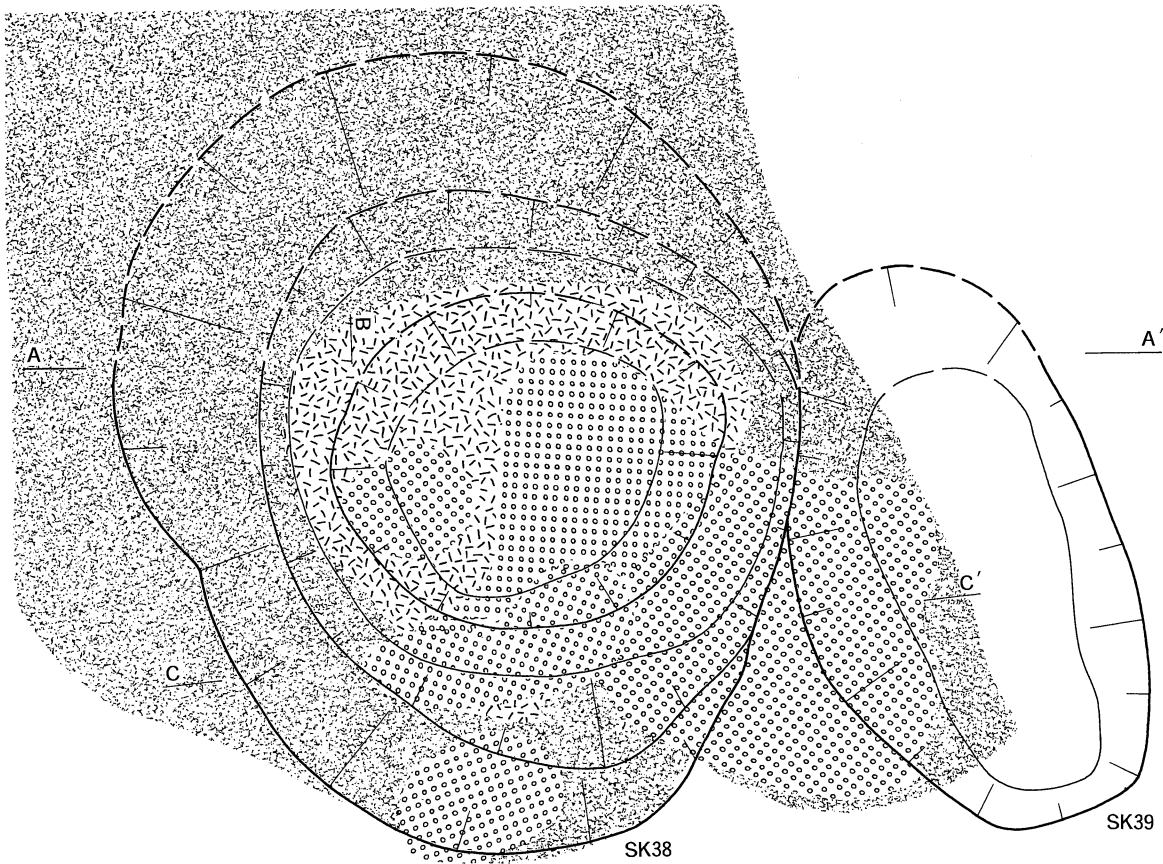


挿図113 陰田隠れが谷遺跡 3区8テラス土層図

H=44.00m

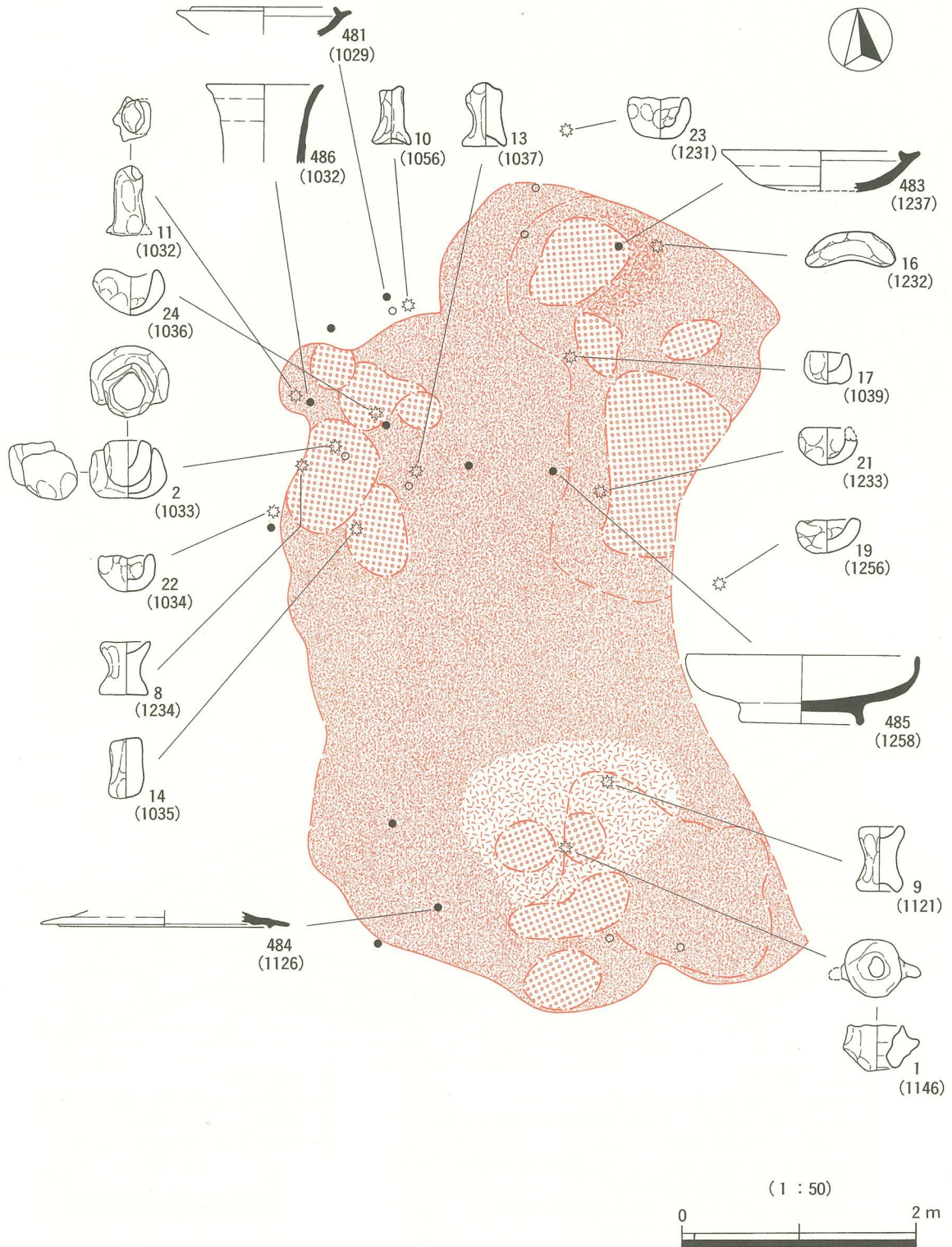


挿図114 陰田隠れが谷遺跡 3区8・9テラス土層図

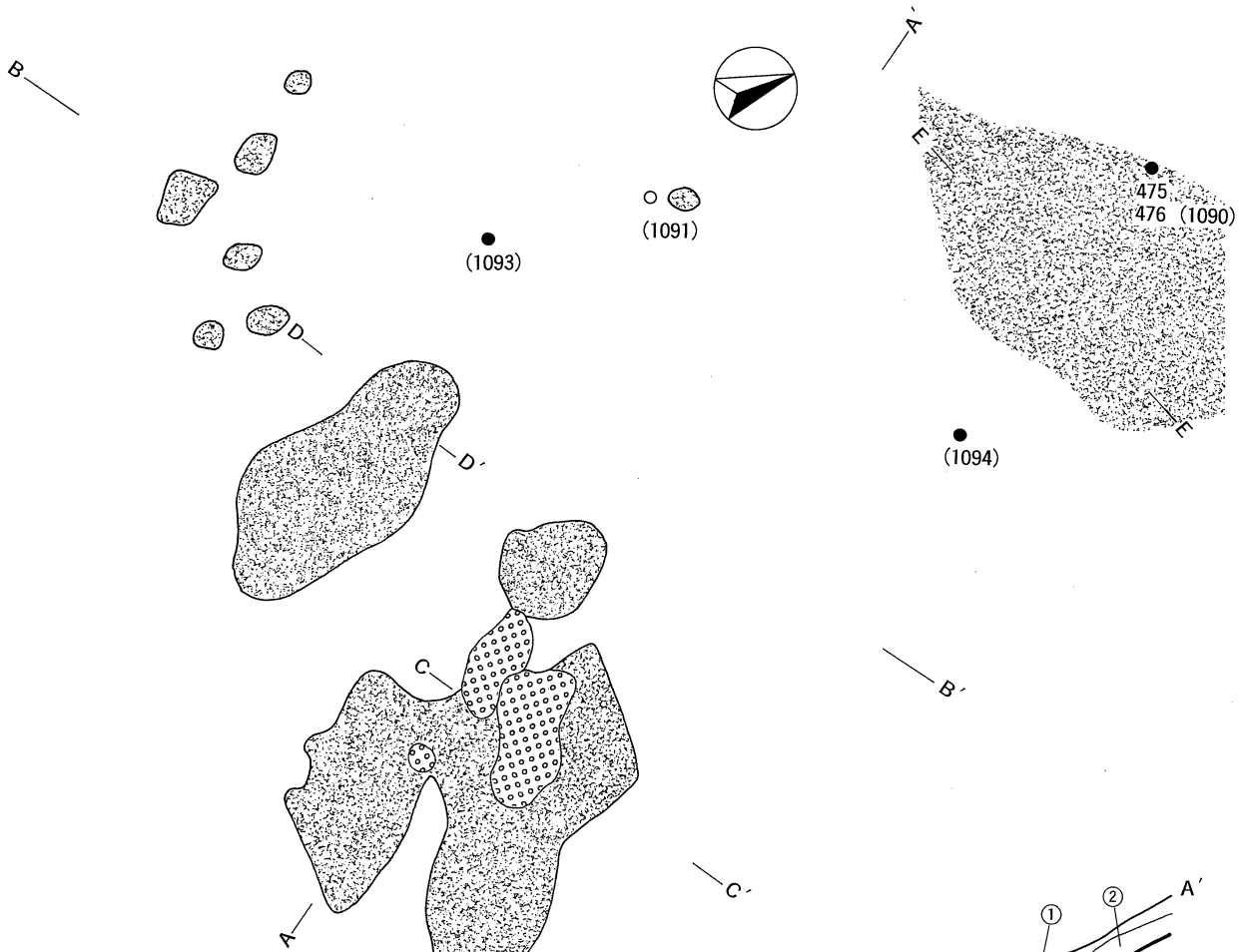


- | | |
|--------------------------------------|----------------------------|
| ① 表土 (褐色土) | ⑭ 炭層 (黒色) |
| ② 黒褐色土 (炭が多く混じっている) | ⑮ 明褐色土 (炭がわずかに混じっている) |
| ③ 褐色土 (炭が少量混じっている、ややかたくしまっている) | ⑯ 茶褐色土 (しまりが弱い) |
| ④ 淡褐色土 (炭・焼土が混じっている) | ⑰ 黒褐色土 (炭が多く混じっている) |
| ⑤ 暗褐色土 (炭・焼土が混じっている、ややしまっている) | (1 : 30) |
| ⑥ 黒褐色土 (炭・焼土を多量に含む) | 0 |
| ⑦ 黒褐色土 (⑥よりも黒い、炭・焼土を多量に含む) | 1 m |
| ⑧ 淡黄褐色土 (かたくしまっている) | |
| ⑨ 淡黄褐色土 (⑧より黒っぽい) | ⑱ 褐色土 (⑧よりしまりが弱い) |
| ⑩ 暗褐色土 (炭が少し混じっている、しまりが弱くややぼろぼろしている) | ⑲ 暗褐色土 (炭・焼土が混じる) |
| ⑪ 淡褐色土 (炭が混じっている) | ⑳ 淡黄褐色土 (しまっている) |
| ⑫ 明褐色土 (焼土の塊を多く含む、⑧よりしまり弱い) | ㉑ 暗褐色土 (④よりしまりが弱く、やややわらかい) |
| ⑬ 灰黄褐色土 (炭・焼土が混じっている、やわらかい) | |

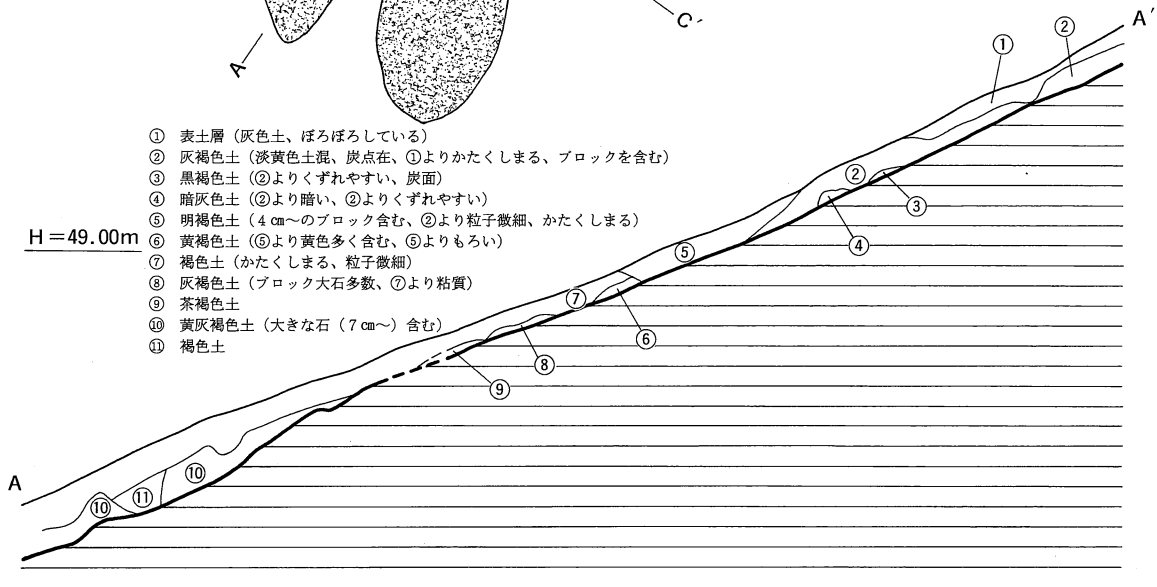
挿図115 陰田隠れが谷遺跡 3区8テラスSK38・39遺構図



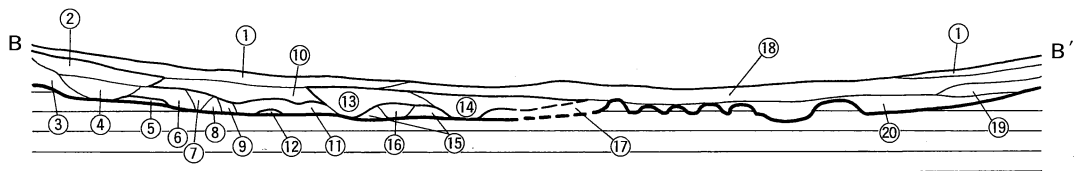
挿図116 陰田隠れが谷遺跡 3区8テラス炭溜9遺構図、遺物分布図



- H = 49.00m
- ① 表土層 (灰色土、ぼろぼろしている)
 - ② 灰褐色土 (淡黄色土混、炭点在、①よりかたくしまる、ブロックを含む)
 - ③ 黒褐色土 (②よりくずれやすい、炭面)
 - ④ 暗灰色土 (②より暗い、②よりくずれやすい)
 - ⑤ 明褐色土 (4 cm~のブロック含む、②より粒子微細、かたくしまる)
 - ⑥ 黄褐色土 (⑤より黄色多く含む、⑤よりもろい)
 - ⑦ 褐色土 (かたくしまる、粒子微細)
 - ⑧ 灰褐色土 (ブロック大石多数、⑦より粘質)
 - ⑨ 茶褐色土
 - ⑩ 黄灰褐色土 (大きな石 (7 cm~) 含む)
 - ⑪ 褐色土



H = 49.00m

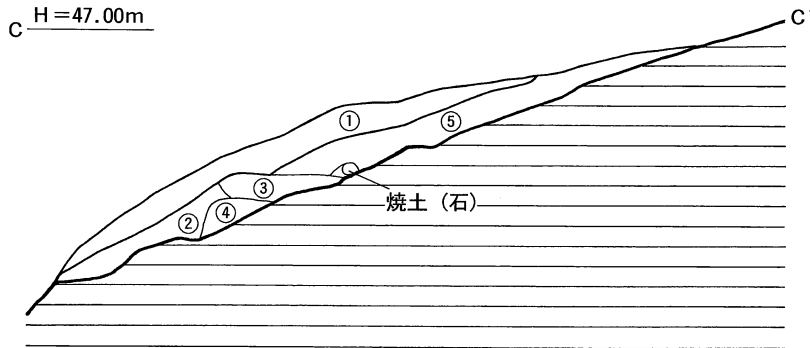


- ① 褐色土 (表土層、根を多く含む)
- ② 褐色土 (炭を含む、かたくしまる、小石まじり)
- ③ 茶褐色土 (ブロック (4 cm~) 含む、かたくしまる)
- ④ 暗褐色土 (ブロック (2 cm~) 含む、炭あり)
- ⑤ 灰褐色土 (かたくしまる)
- ⑥ 灰褐色土 (灰色土混、焼土混、炭混)
- ⑦ 褐色土 (⑥よりもろい)
- ⑧ 灰赤色土 (褐色土混、炭混、焼土のようでかたくサクサクしている)
- ⑨ 黒褐色土 (炭多量、⑧よりもろい)
- ⑩ 暗褐色土 (ブロック (2 cm~) 含む)
- ⑪ 黒褐色土 (炭多量)
- ⑫ 灰黄色土
- ⑬ 褐色土 (黒色、炭混、ブロック (4 cm~) 含む、かたくしまる)
- ⑭ 灰褐色土 (焼土混、炭混、⑬より粘質、ブロック (2 cm~) 含む)
- ⑮ 灰黄色土 (ブロック含む)
- ⑯ 褐色土 (⑬と同質、焼石 (黒くなったもの) 含む、⑬より少々かたくしまる)
- ⑰ 灰赤褐色土 (ブロック、小石含む、粘質、炭少量)
- ⑱ 明 (黄) 褐色土 (ブロック含む、かたくしまる、粒子微細)
- ⑲ 暗褐色土 (炭混、⑱よりくずれやすい)
- ⑳ 黄褐色土 (大石が多数、かたくしまる)

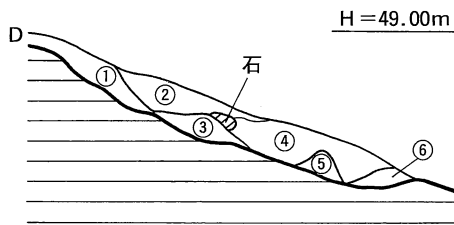
(1 : 60)



挿図117 陰田隠れが谷遺跡 3区10テラス炭溜8遺構図

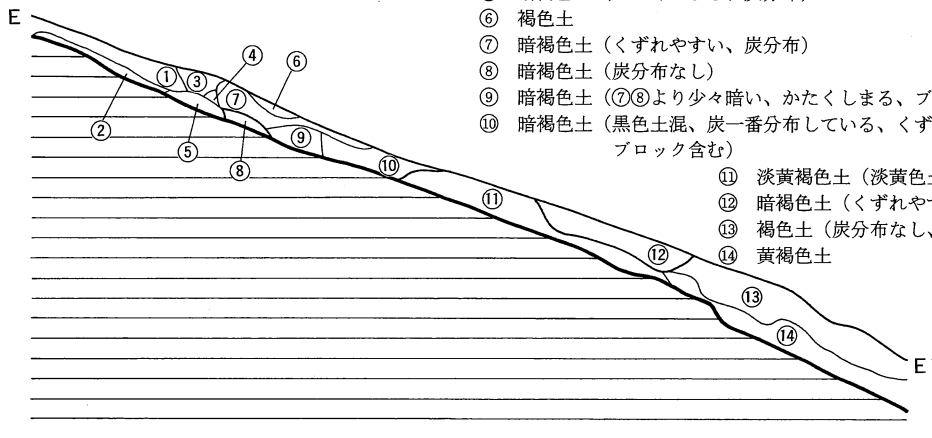


- ① 褐色土 (表土層、根多く含む)
- ② 暗褐色土 (炭少し混じりやわらかくくずれやすい)
- ③ 黒色土 (大きな炭も含む、炭多量分布)
- ④ 焼土、赤茶 (オレンジ色) (くずれやすい)
- ⑤ 暗褐色土 (黒色土点在、炭混、根少々含む)



- ① 淡(白)黄色土 (2cm~4cmブロック含む、かたくしまる)
- ② 褐色土 (炭分布、①③よりはもろい)
- ③ 褐色土 (かたくしまる、炭分布なし)
- ④ 灰褐色土 (炭多量分布、かたくしまる)
- ⑤ 褐色土 (かたくしまる、炭分布なし)
- ⑥ 白黄色土 (かたくしまる)

E H=48.00m



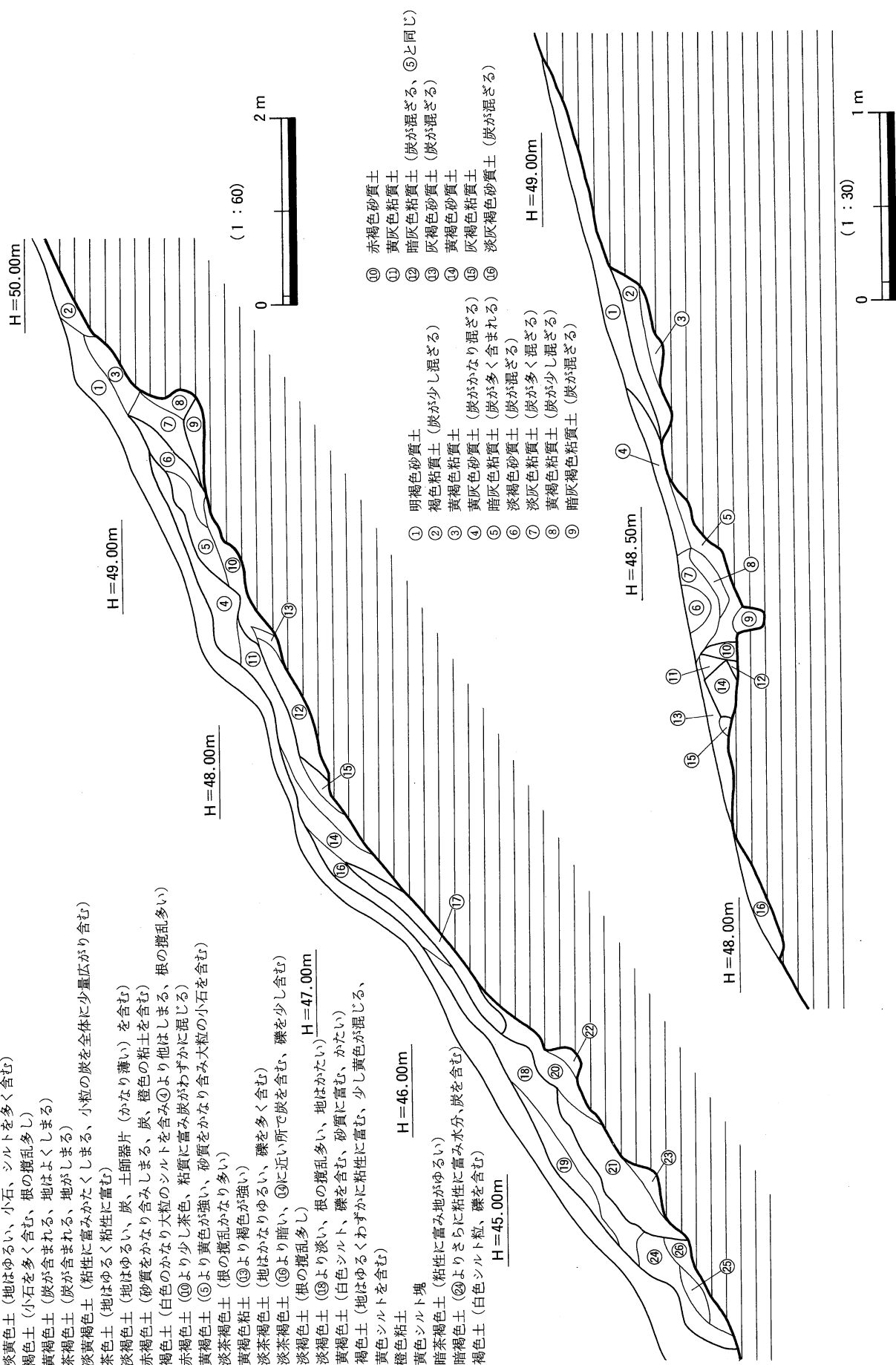
- ① 暗褐色土 (炭分布、くずれやすい)
- ② 黄褐色土 (かたくしまる、ブロック含む)
- ③ 褐色土
- ④ 淡黄褐色土
- ⑤ 暗褐色土 (かたくしまる、炭分布)
- ⑥ 褐色土
- ⑦ 暗褐色土 (くずれやすい、炭分布)
- ⑧ 暗褐色土 (炭分布なし)
- ⑨ 暗褐色土 (⑦⑧より少々暗い、かたくしまる、ブロック含む)
- ⑩ 暗褐色土 (黒色土混、炭一番分布している、くずれやすい、ブロック含む)
- ⑪ 淡黄褐色土 (淡黄色土、かたくしまる)
- ⑫ 暗褐色土 (くずれやすい、炭分布)
- ⑬ 褐色土 (炭分布なし、くずれやすい)
- ⑭ 黄褐色土

(1:30)

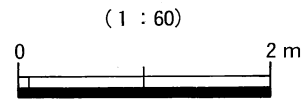
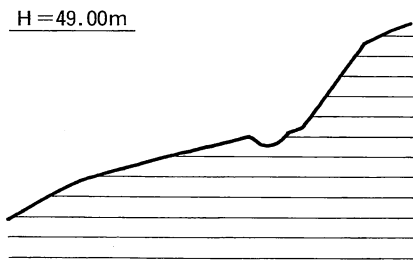
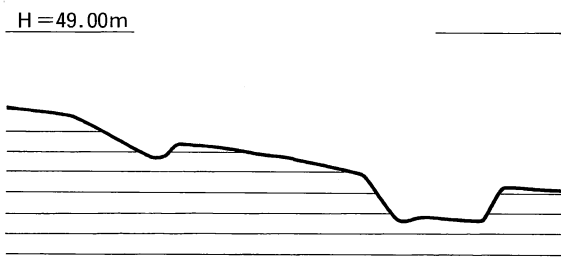
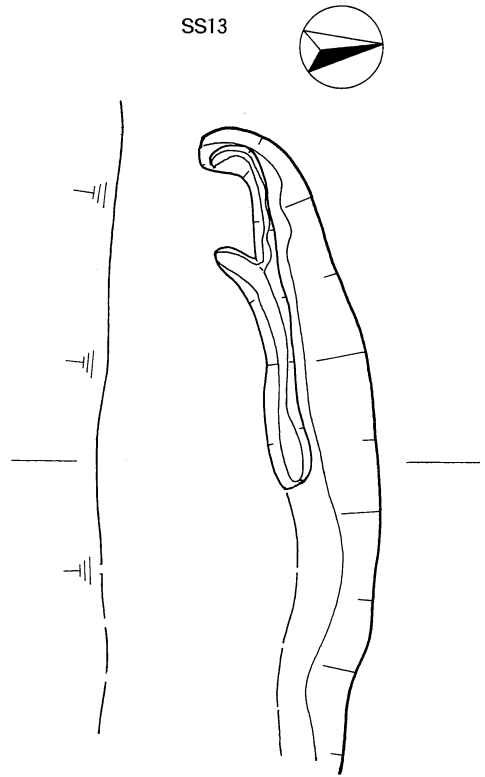
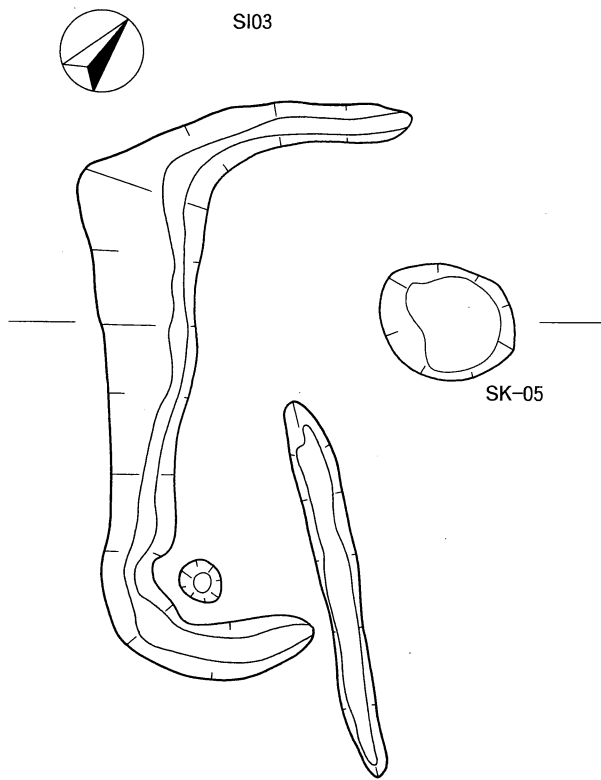


挿図118 陰田隠れが谷遺跡 3区10テラス炭溜土層図

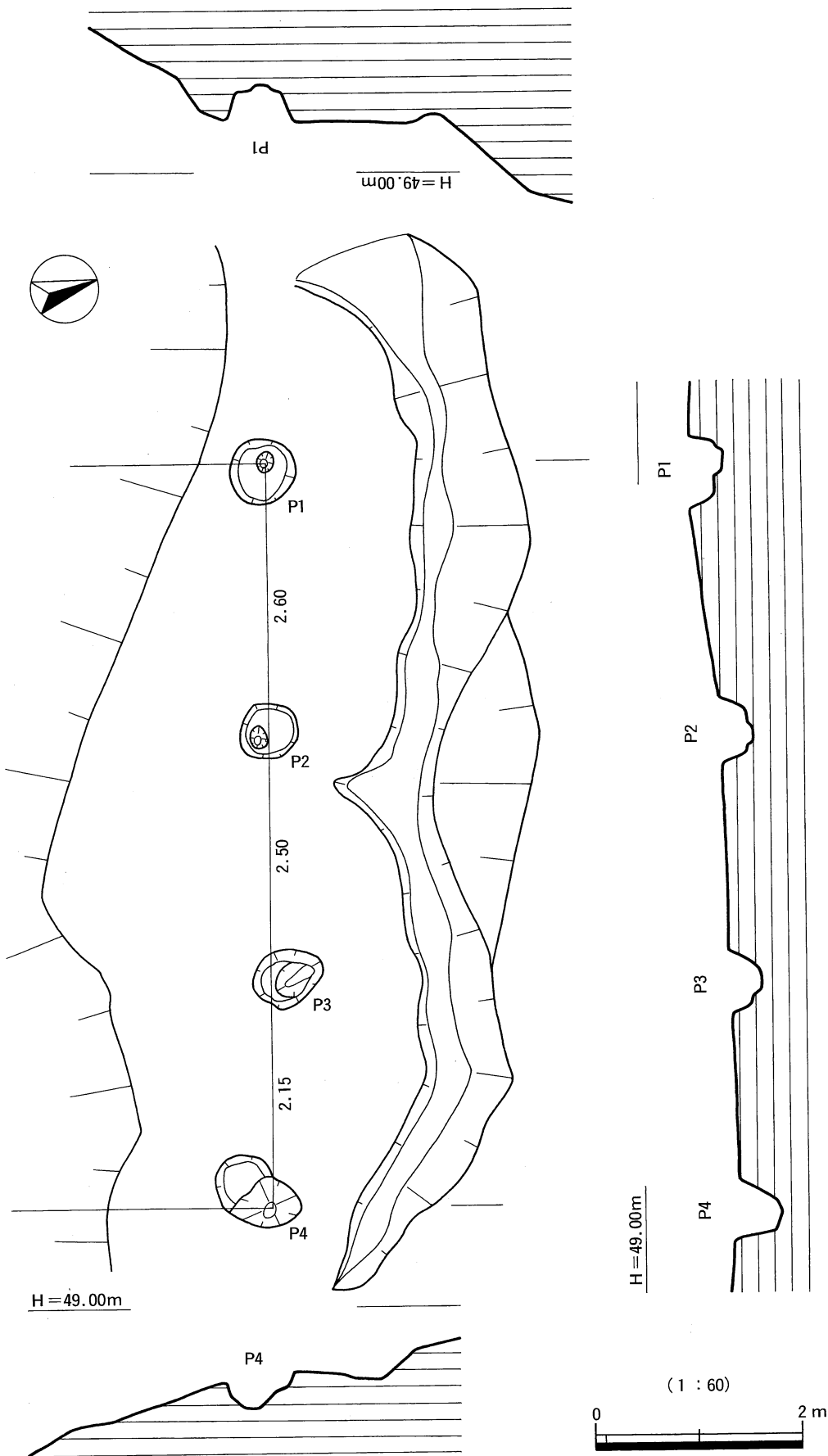
- 表土
- ① 淡赤褐色土 (かなりの粘性に富む、小石白色シルトを多く含む、地はゆるい)
 - ② 淡黄色土 (地はゆるい、小石、シルトを多く含む)
 - ③ 褐色土 (小石を多く含む、根の攪乱多し)
 - ④ 黄褐色土 (炭が含まれる、地はよくしまる)
 - ⑤ 赤褐色土 (炭が含まれる、地がしまる)
 - ⑥ 淡黄褐色土 (粘性に富みかたくしまる、小粒の炭を全体に少量広がり含む)
 - ⑦ 茶色土 (地はゆるく粘性に富む)
 - ⑧ 淡褐色土 (地はゆるい、炭、土師器片 (かなり薄い) を含む)
 - ⑨ 赤褐色土 (砂質をかなり含みしまる、炭、橙色の粘土を含む)
 - ⑩ 褐色土 (白色のかなり大粒のシルトを含み④より他はしまる、根の攪乱多い)
 - ⑪ 赤褐色土 (⑩より少し茶色、粘質に富み炭がわずかに混じる)
 - ⑫ 黄褐色土 (⑫より黄色が強い、砂質をかなり含み大粒の小石を含む)
 - ⑬ 淡茶褐色土 (根の攪乱かなり多い)
 - ⑭ 黄褐色粘土 (⑬より褐色が強い)
 - ⑮ 淡茶褐色土 (地はかなりゆるい、礫を多く含む)
 - ⑯ 淡茶褐色土 (⑮より暗い、⑮に近い所で炭を含む、礫を少し含む)
 - ⑰ 淡褐色土 (根の攪乱多し)
 - ⑱ 淡褐色土 (⑱より淡い、根の攪乱多い、地はかたい)
 - ⑲ 黄褐色土 (白色シルト、礫を含む、砂質に富む、かたい)
 - ⑳ 褐色土 (地はゆるくわずかに粘性に富む、少し黄色が混じる、黄色シルトを含む)
 - ㉑ 黄色粘土
 - ㉒ 黄色シルト塊
 - ㉓ 暗茶褐色土 (粘性に富み地がゆるい)
 - ㉔ 暗褐色土 (㉓よりさらに粘性に富み水分、炭を含む)
 - ㉕ 褐色土 (白色シルト粒、礫を含む)



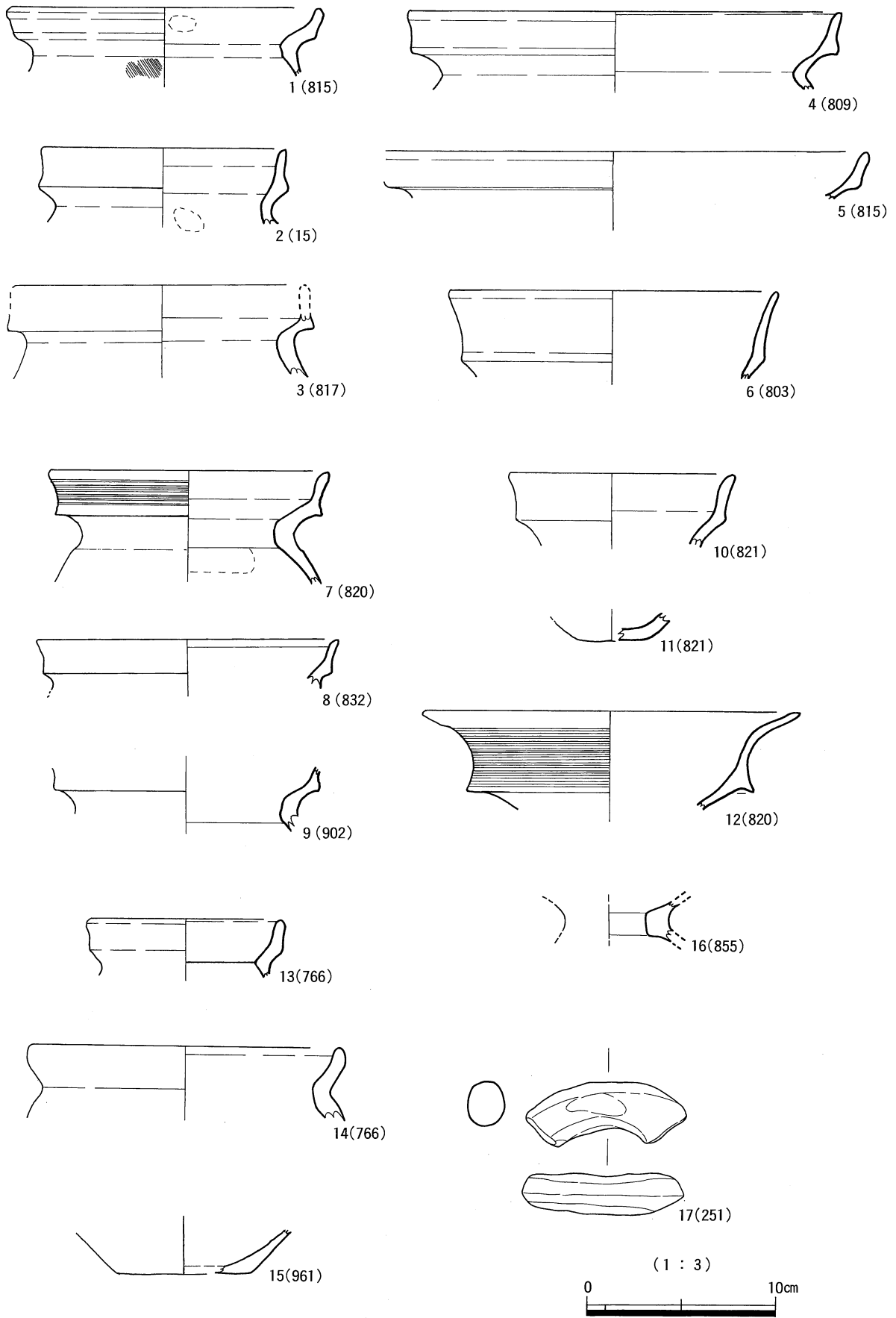
挿図119 野田廻れが谷遺跡 3区14テラス土層図



挿図120 陰田隠れが谷遺跡 3区14テラスSI03・SS13遺構図

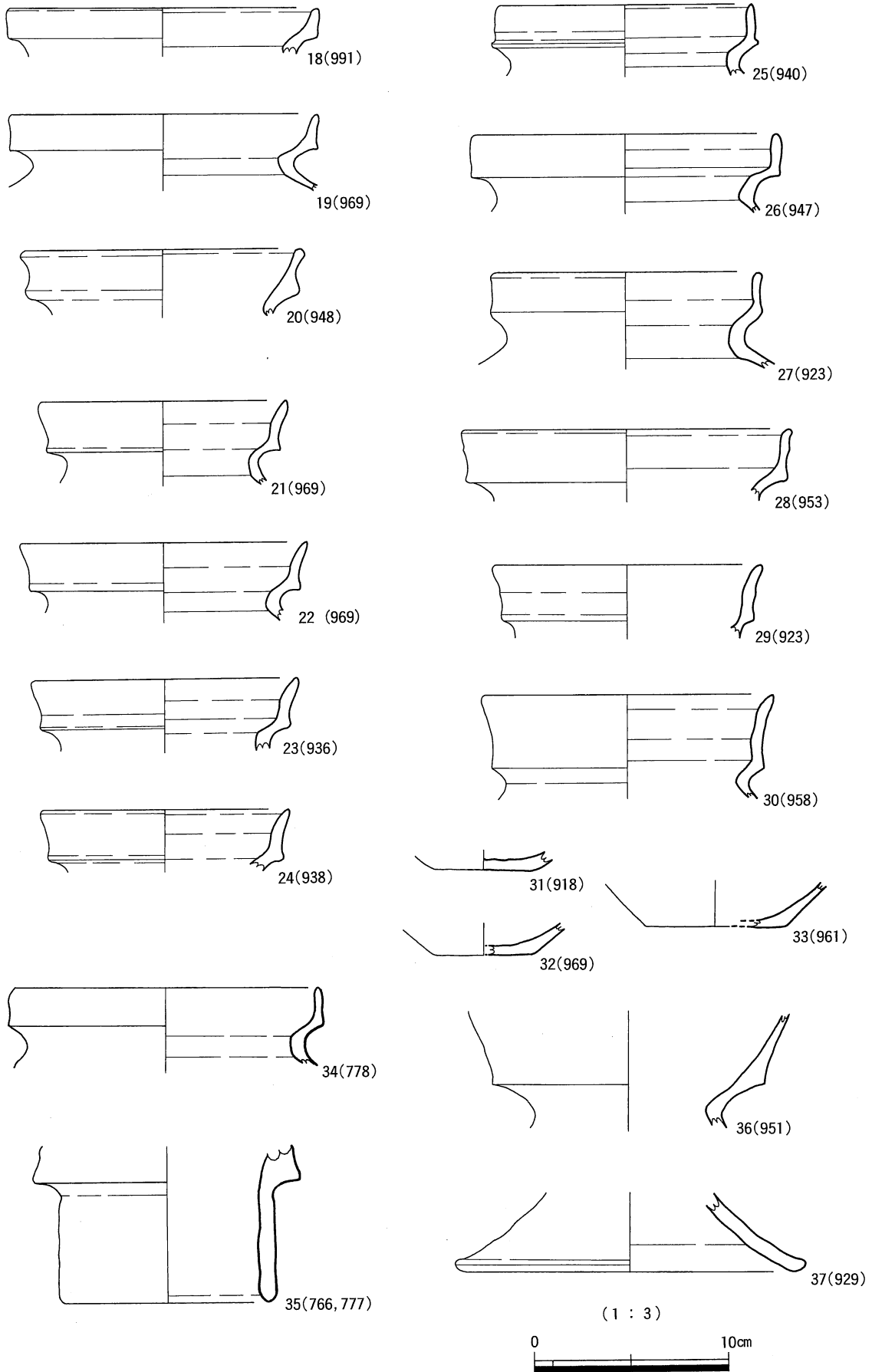


挿図121 陰田隠れが谷遺跡 3区14テラスSB20遺構図

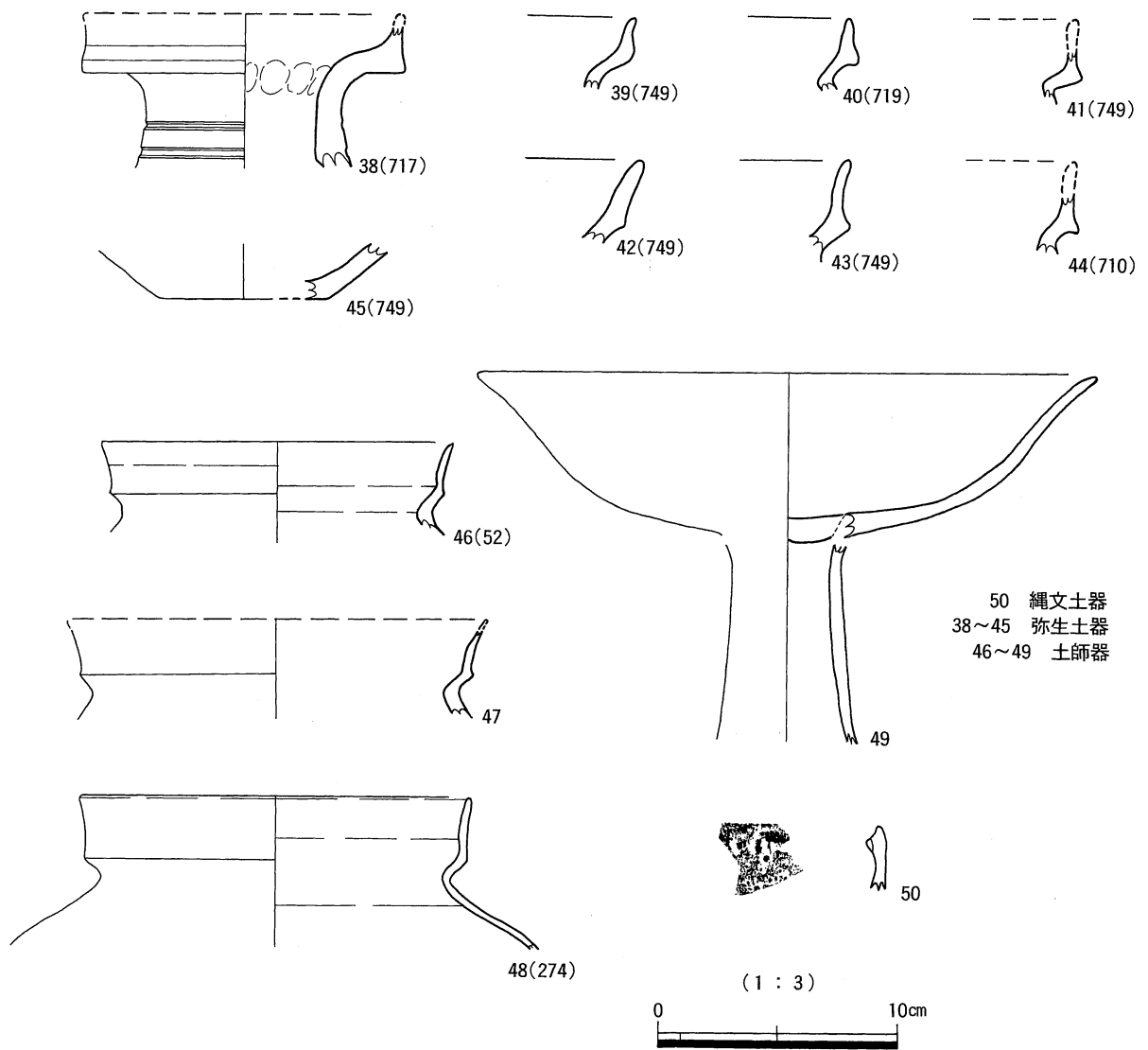


1~6 1テラス
7~17 2テラス

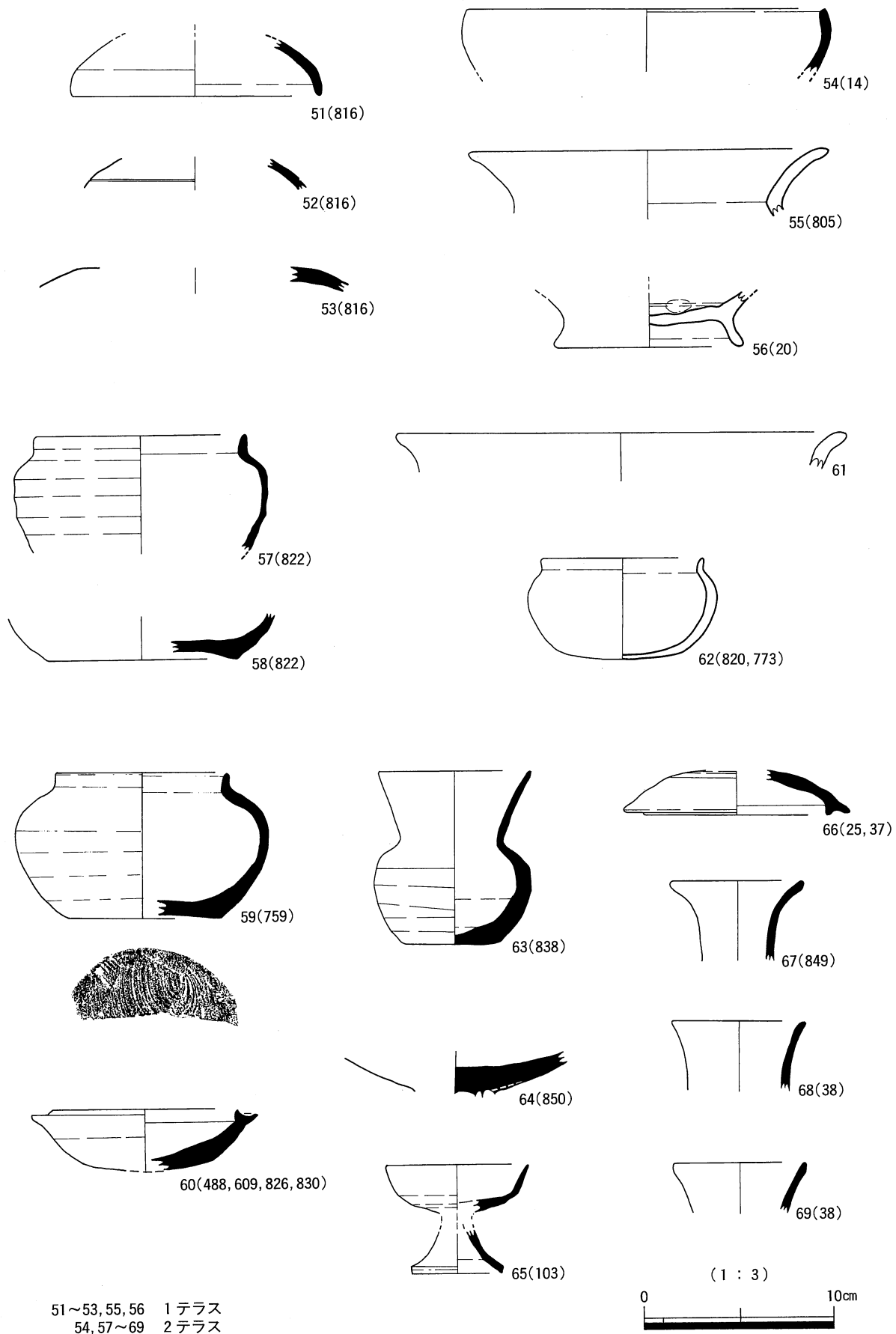
挿図122 陰田隠れが谷遺跡 2区1・2テラス出土弥生土器



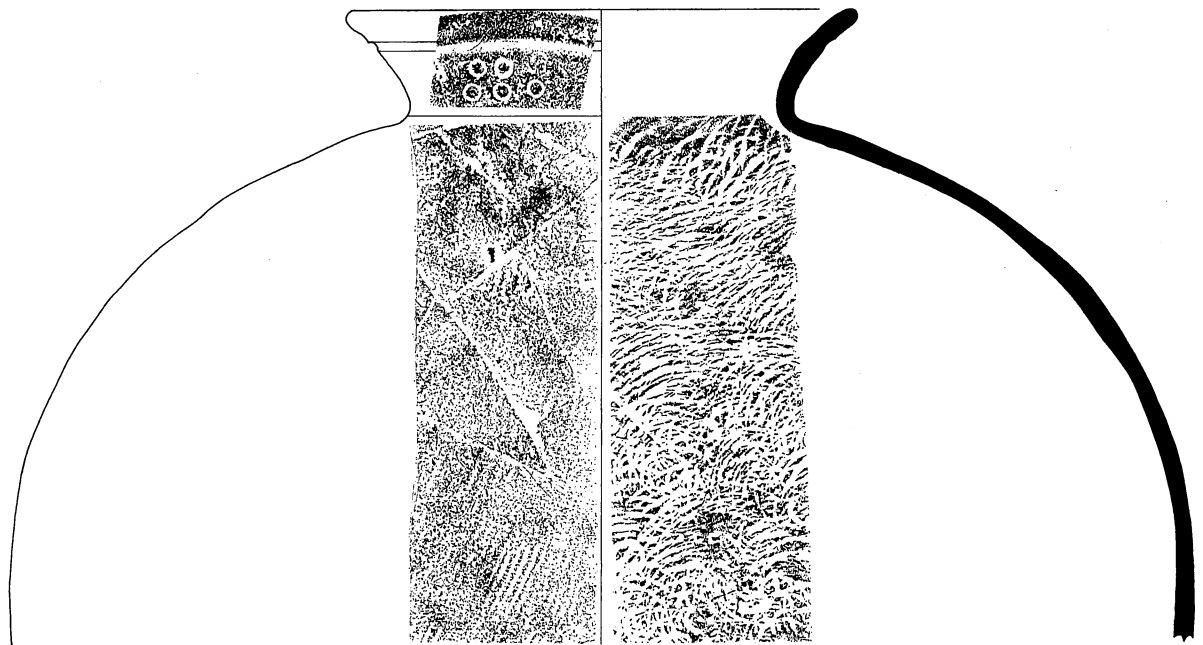
挿図123 陰田隠れが谷遺跡 2区3テラス出土弥生土器



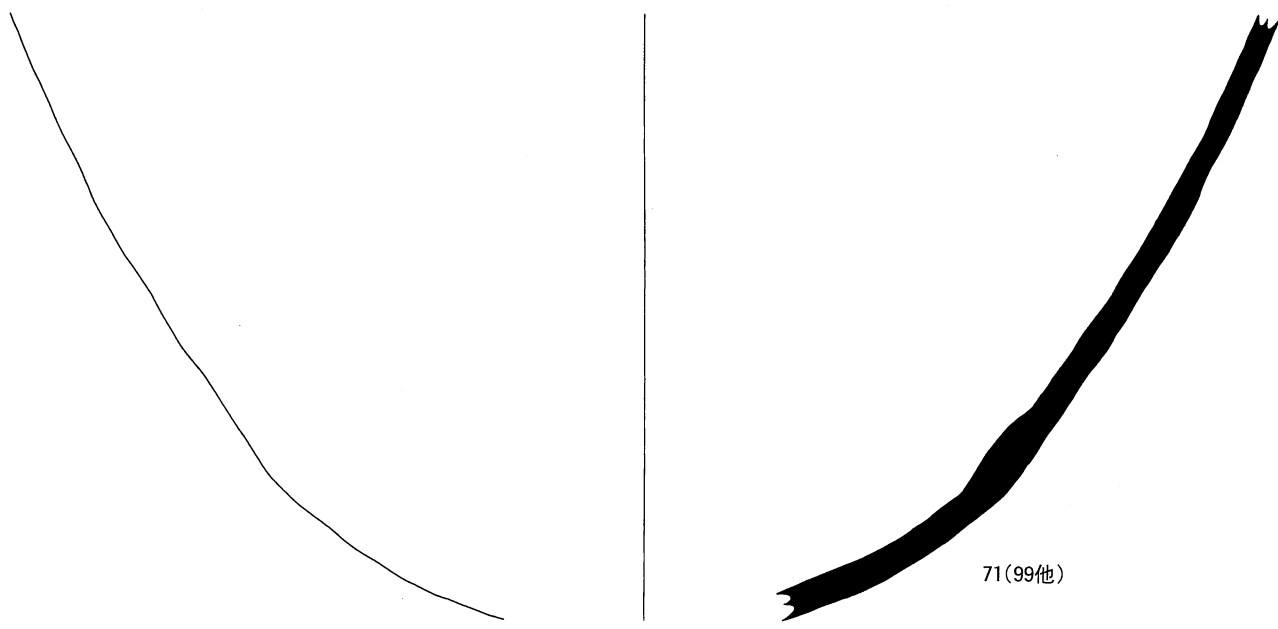
挿図124 陰田隠れが谷遺跡 2区6テラス出土縄文土器・弥生土器・土師器



挿図125 陰田隠れが谷遺跡 2区1・2テラス出土遺物

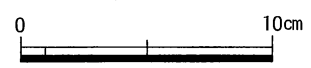


70
 (38, 37, 91, 105, 115
 116, 121, 125, 128, 135他)

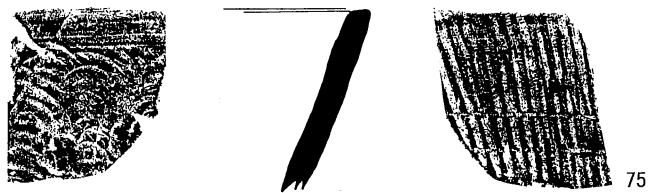
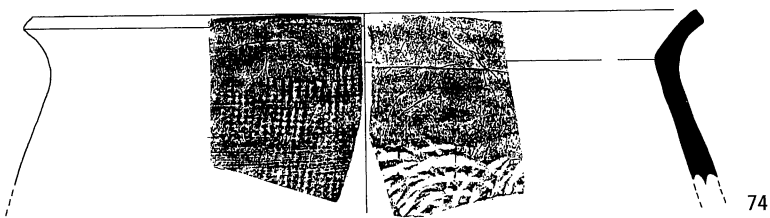
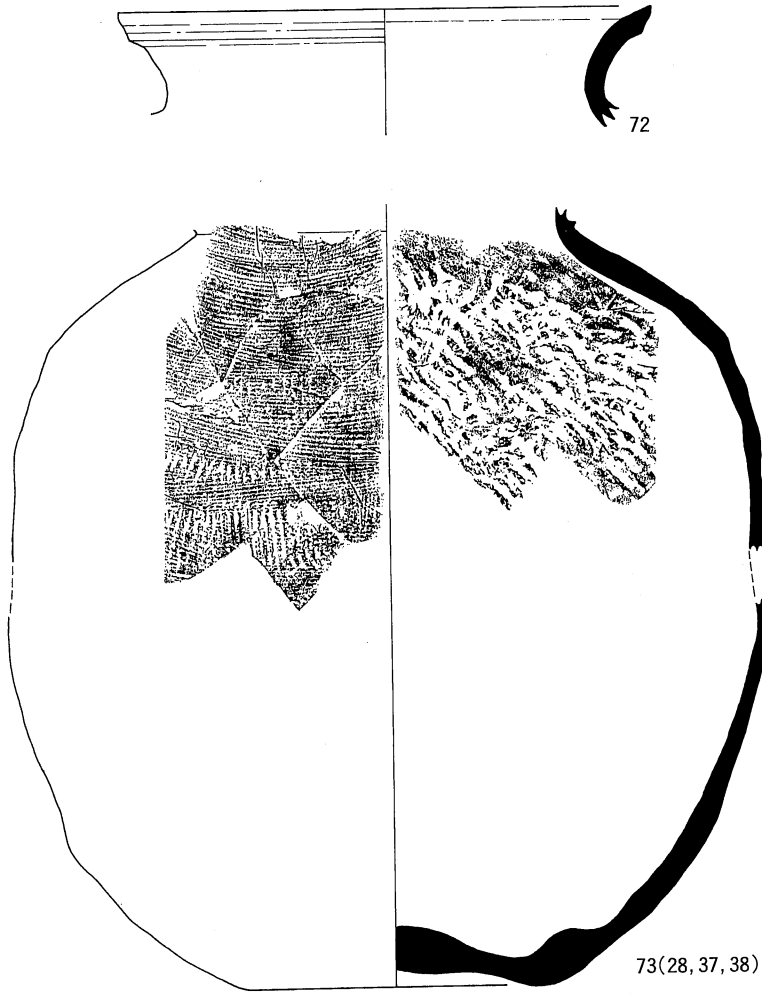


71(99他)

(1 : 3)



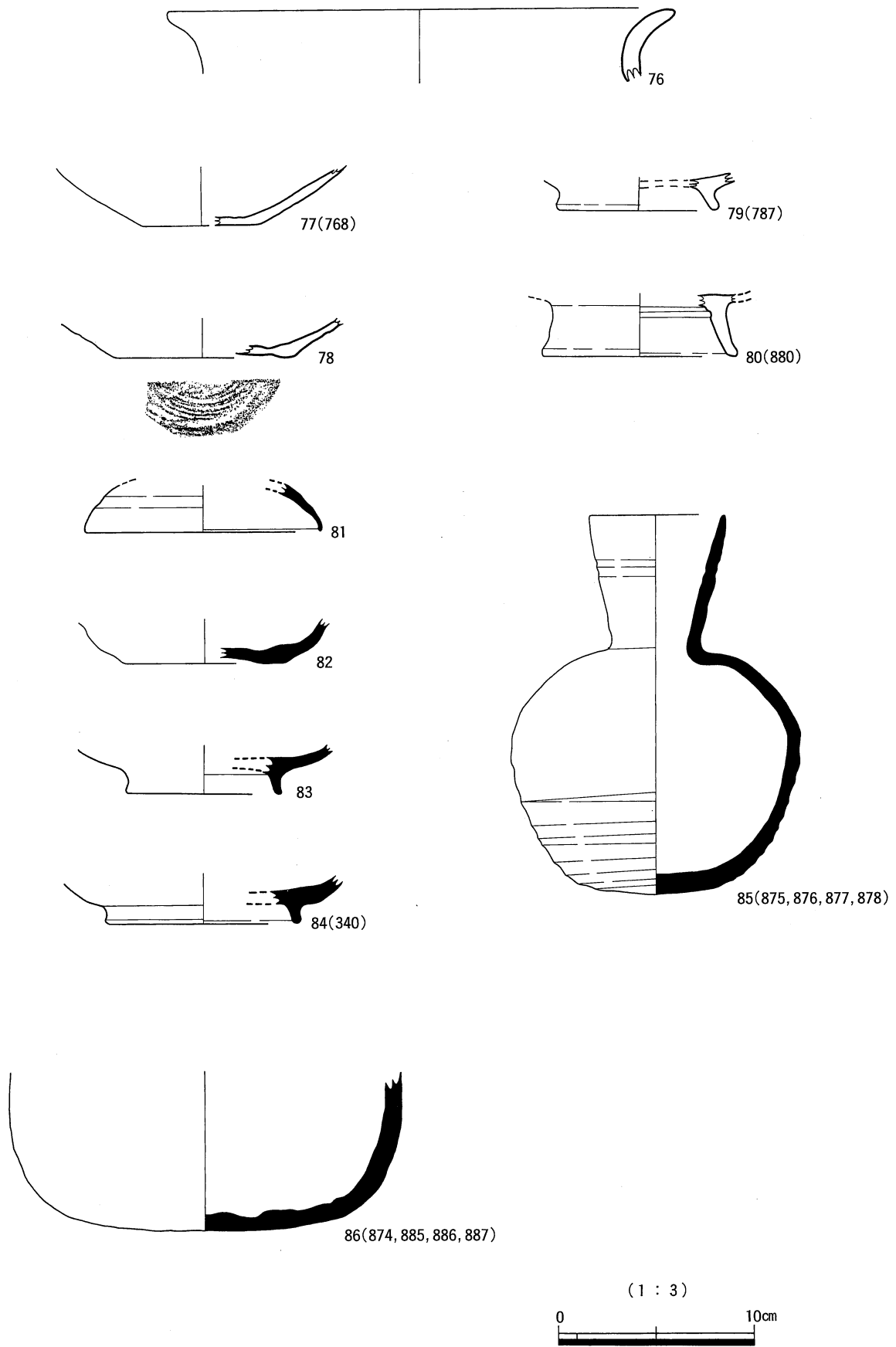
挿図126 陰田隠れが谷遺跡 2区2テラス出土遺物 (1)



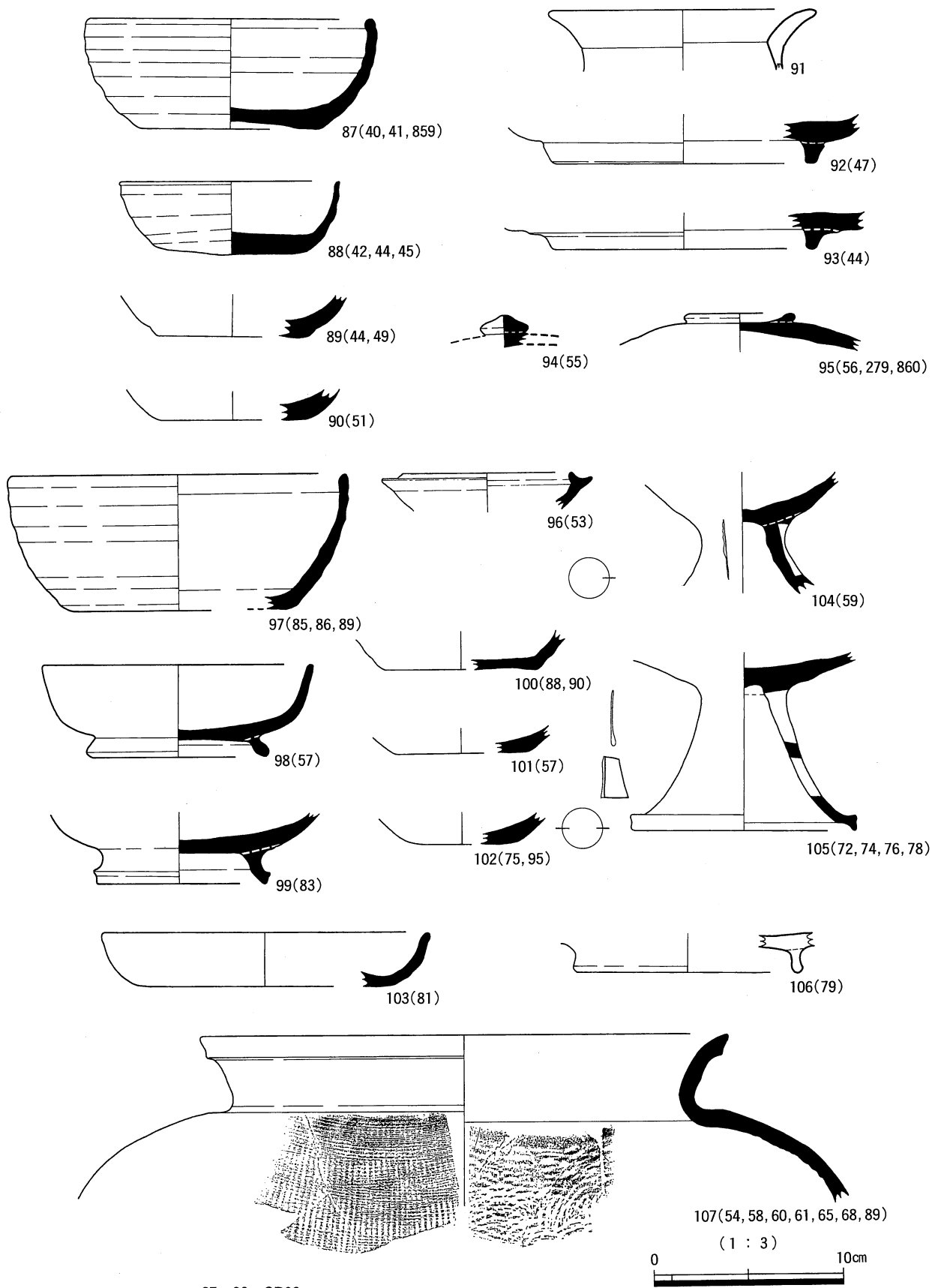
(1 : 3)



挿図127 陰田隠れが谷遺跡 2区2テラス出土遺物 (2)

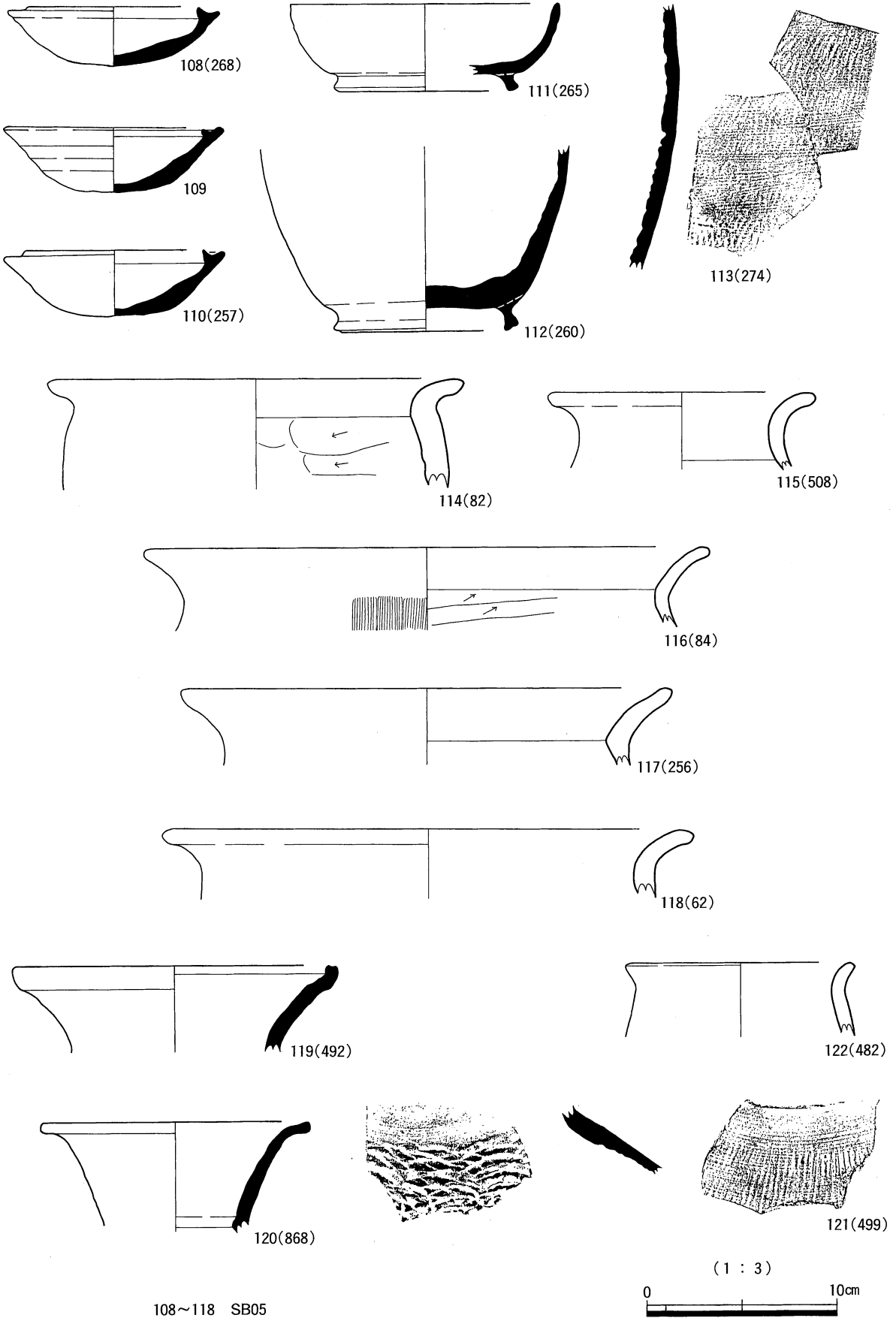


挿図128 陰田隠れが谷遺跡 2区3テラス出土遺物



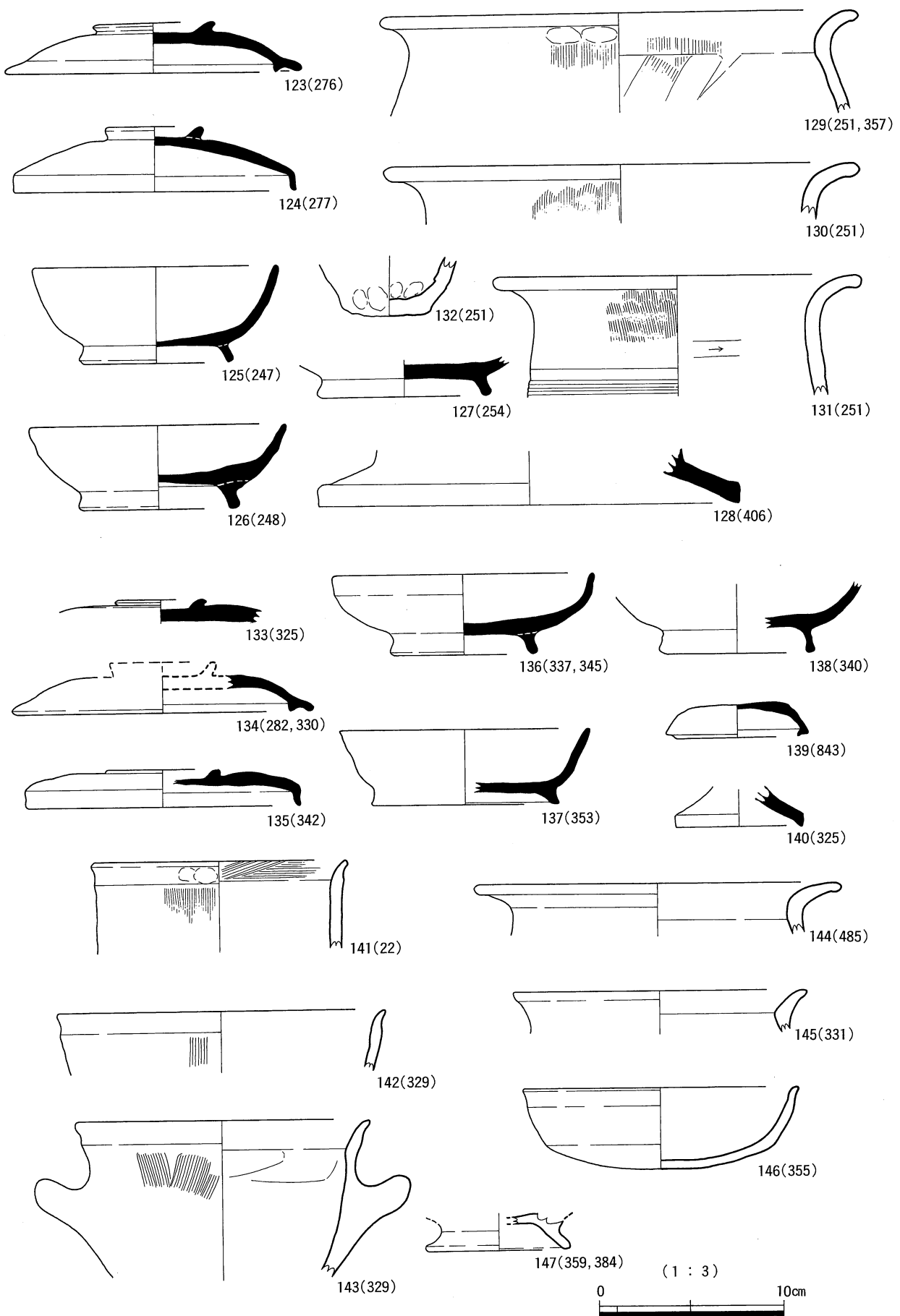
87~93 SB03
94~107 SB04

挿図129 陰田隠れが谷遺跡 2区4テラスSB03・04出土遺物

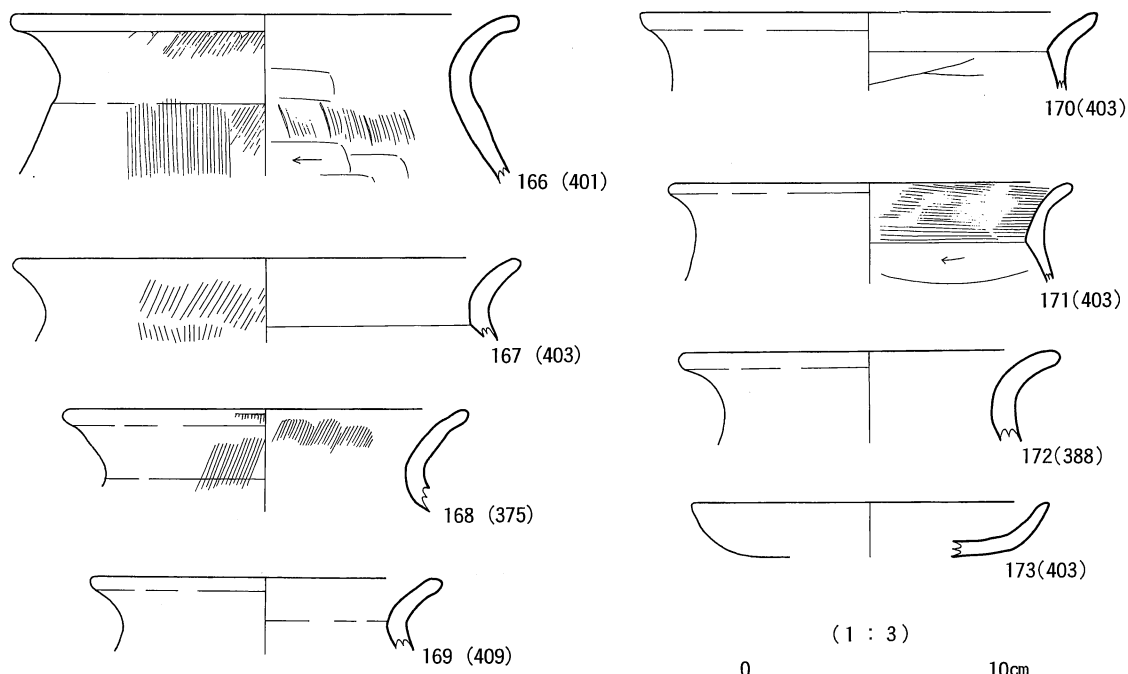
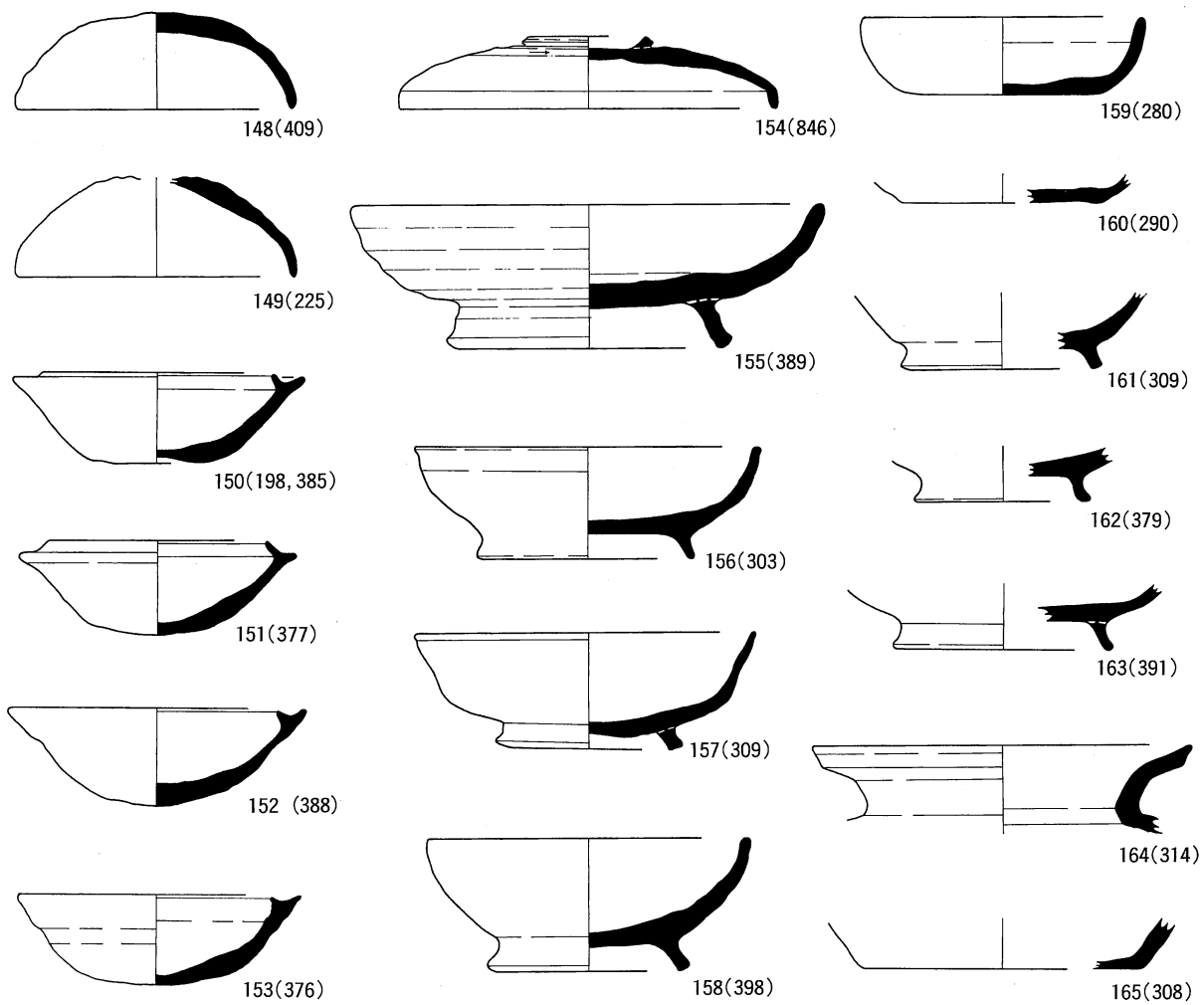


108~118 SB05
119~122 SB06

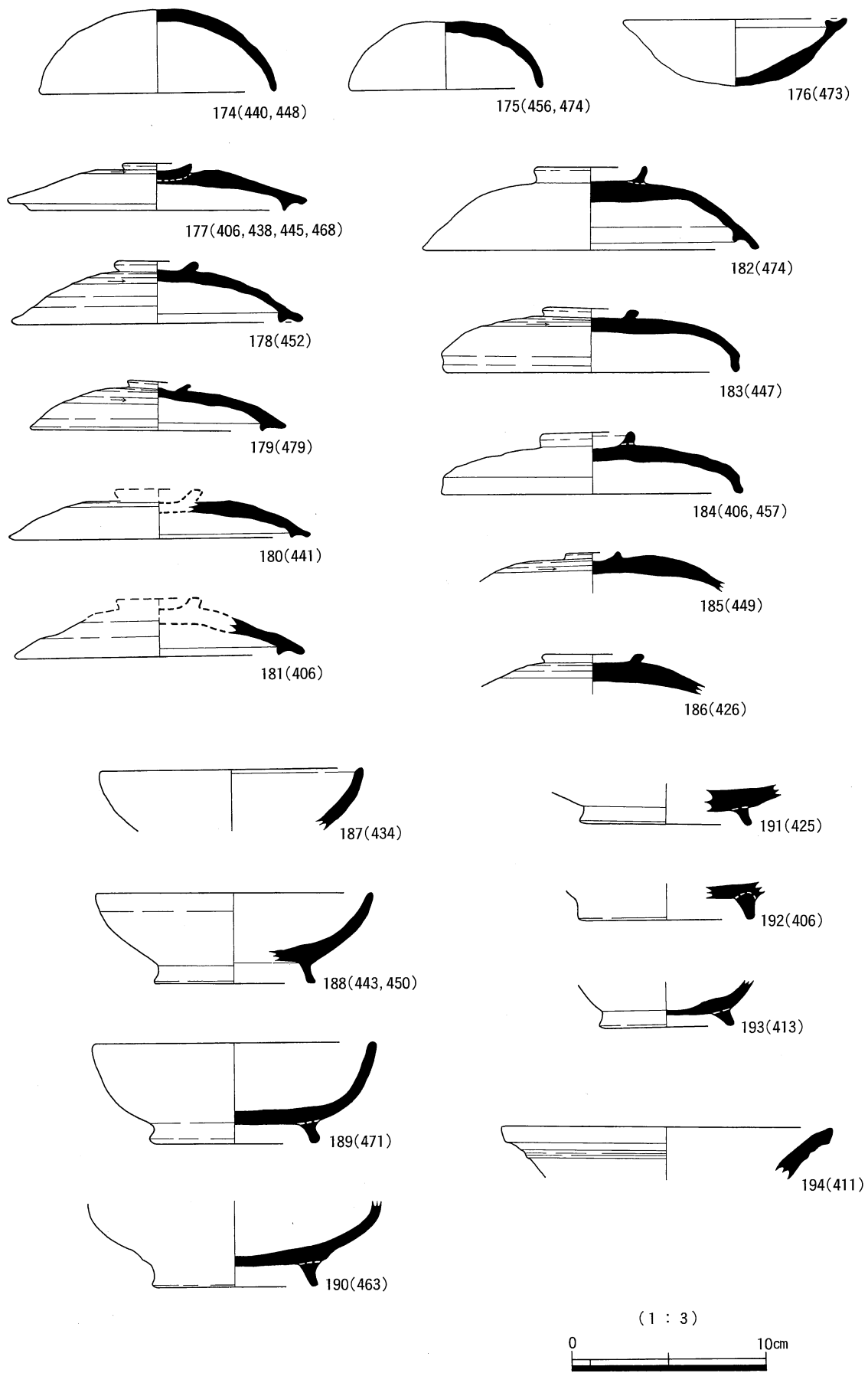
挿図130 陰田隠れが谷遺跡 2区4テラスSB05・06出土遺物



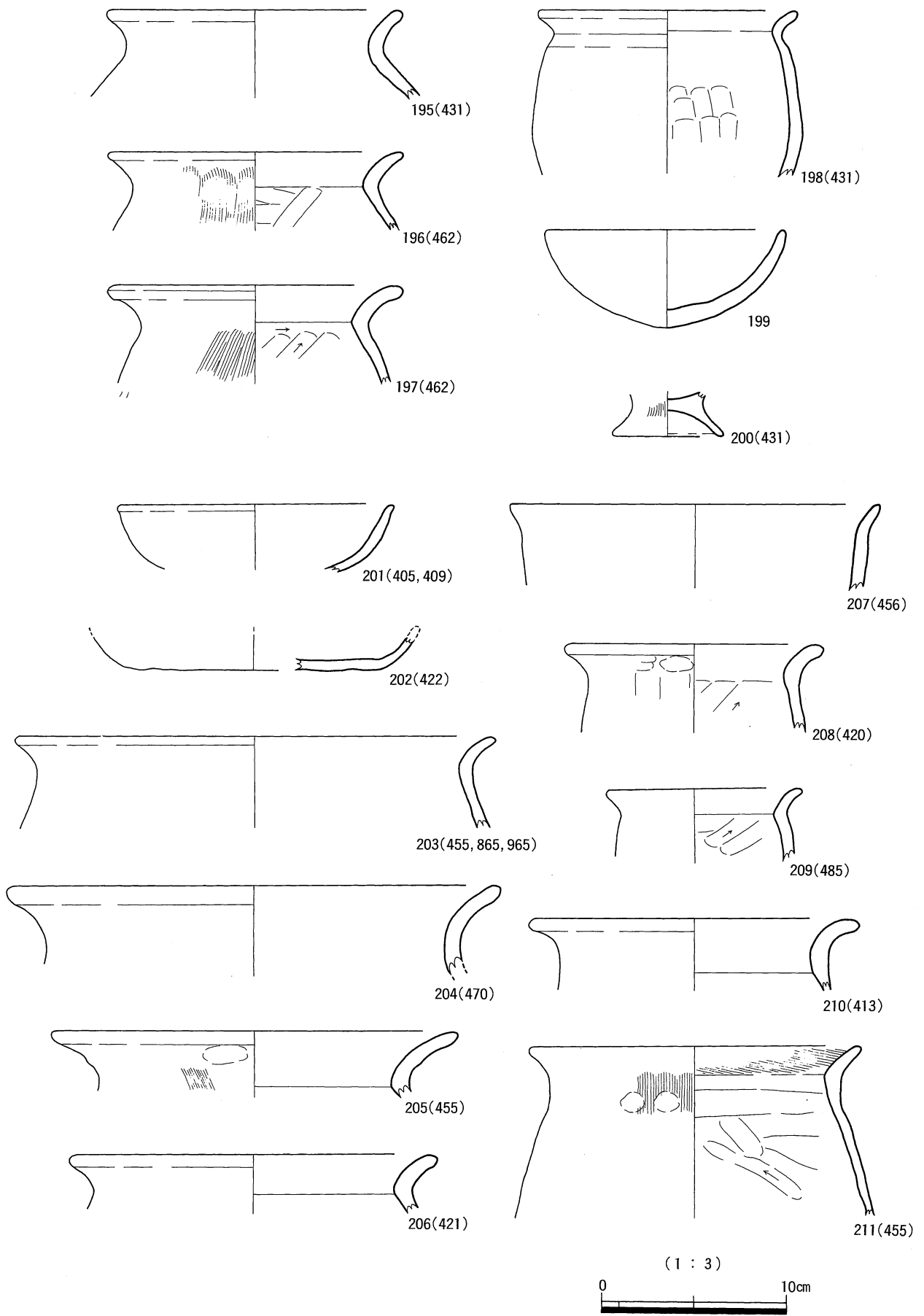
挿図131 陰田隠れが谷遺跡 2区5テラスSB08・09出土遺物



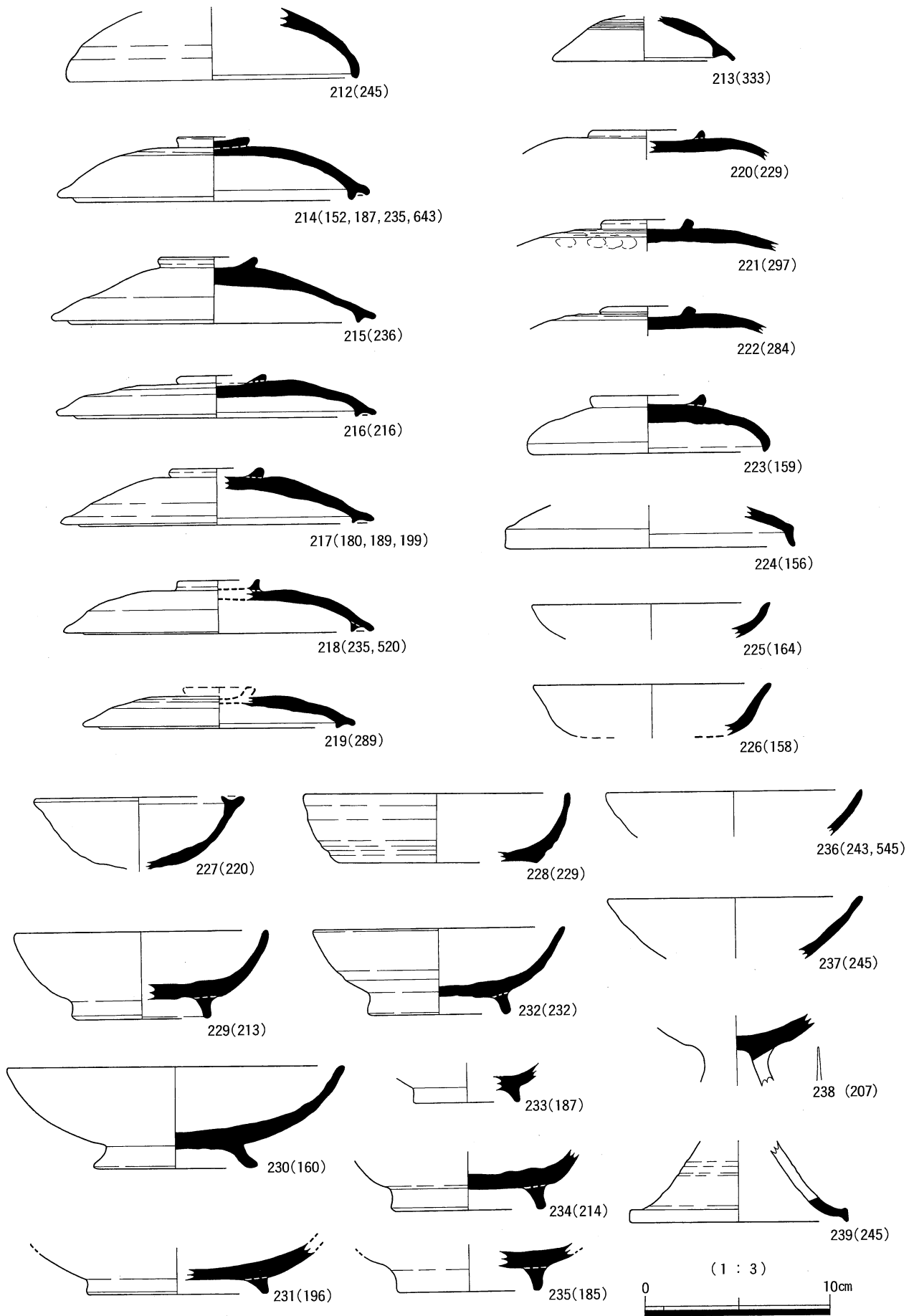
挿図132 陰田隠れが谷遺跡 2区5テラスSB10出土遺物



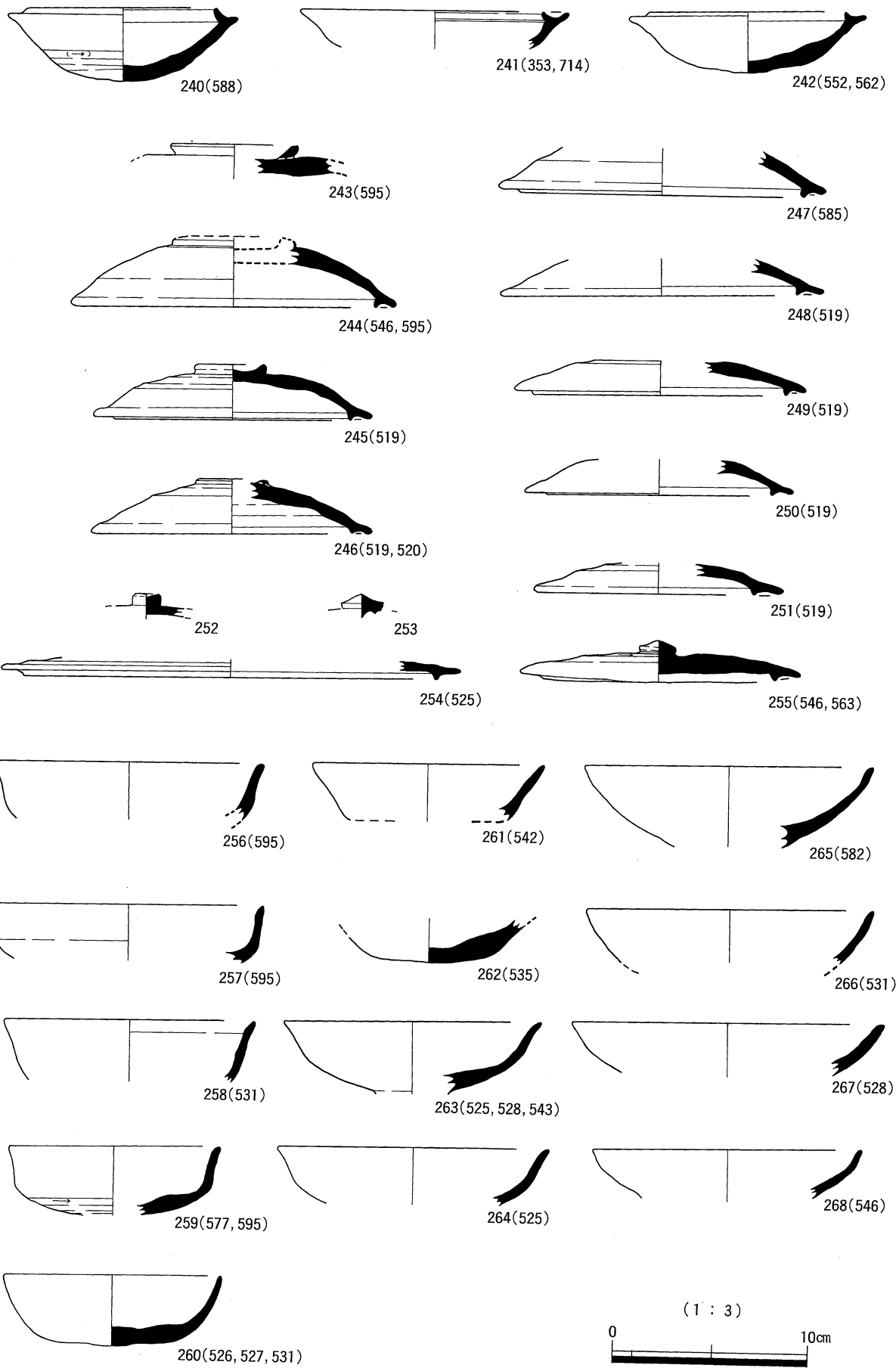
挿図133 陰田隠れが谷遺跡 2区5テラスSB11出土遺物 (1)



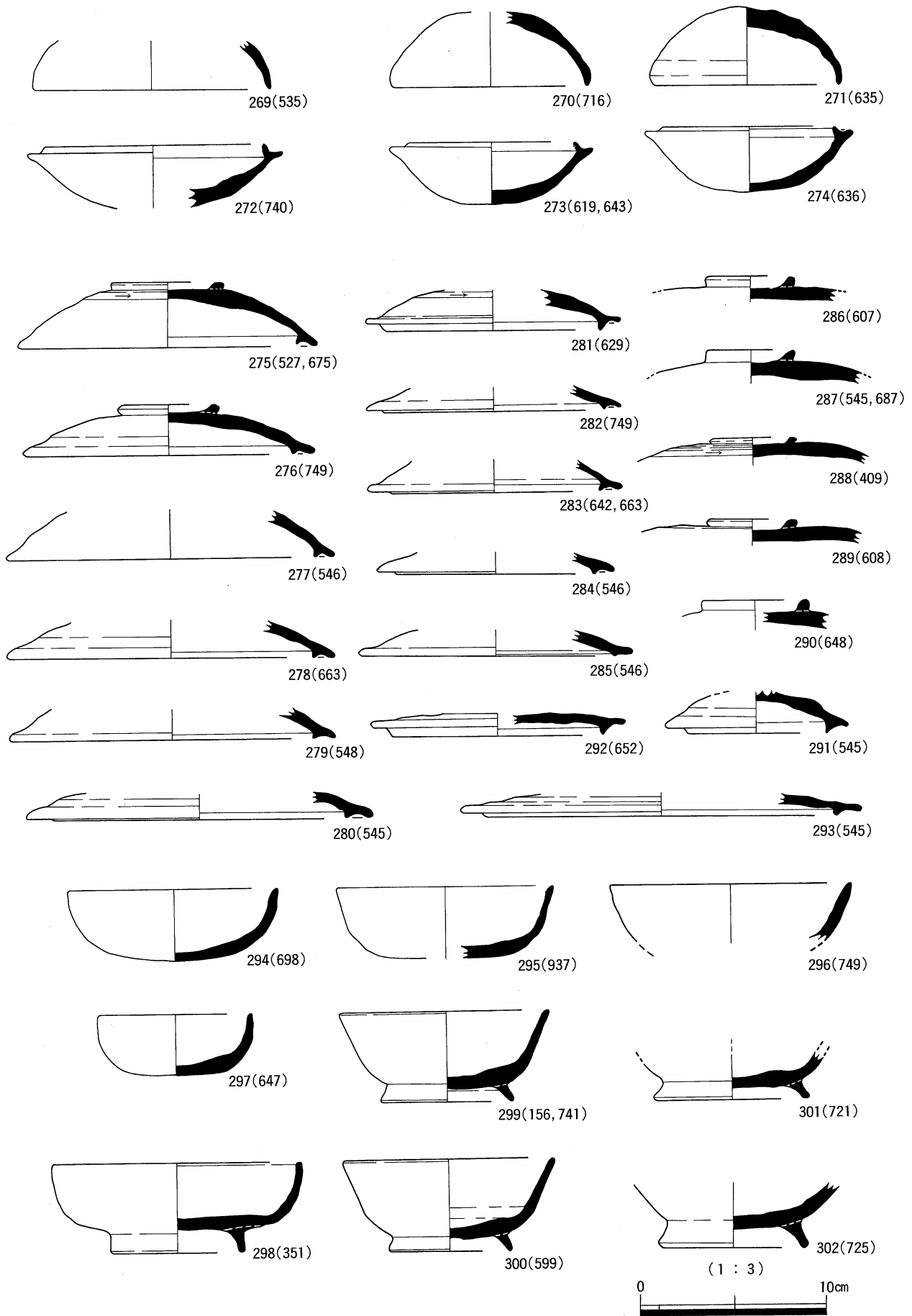
挿図134 陰田隠れが谷遺跡 2区5テラスSB11出土遺物(2)



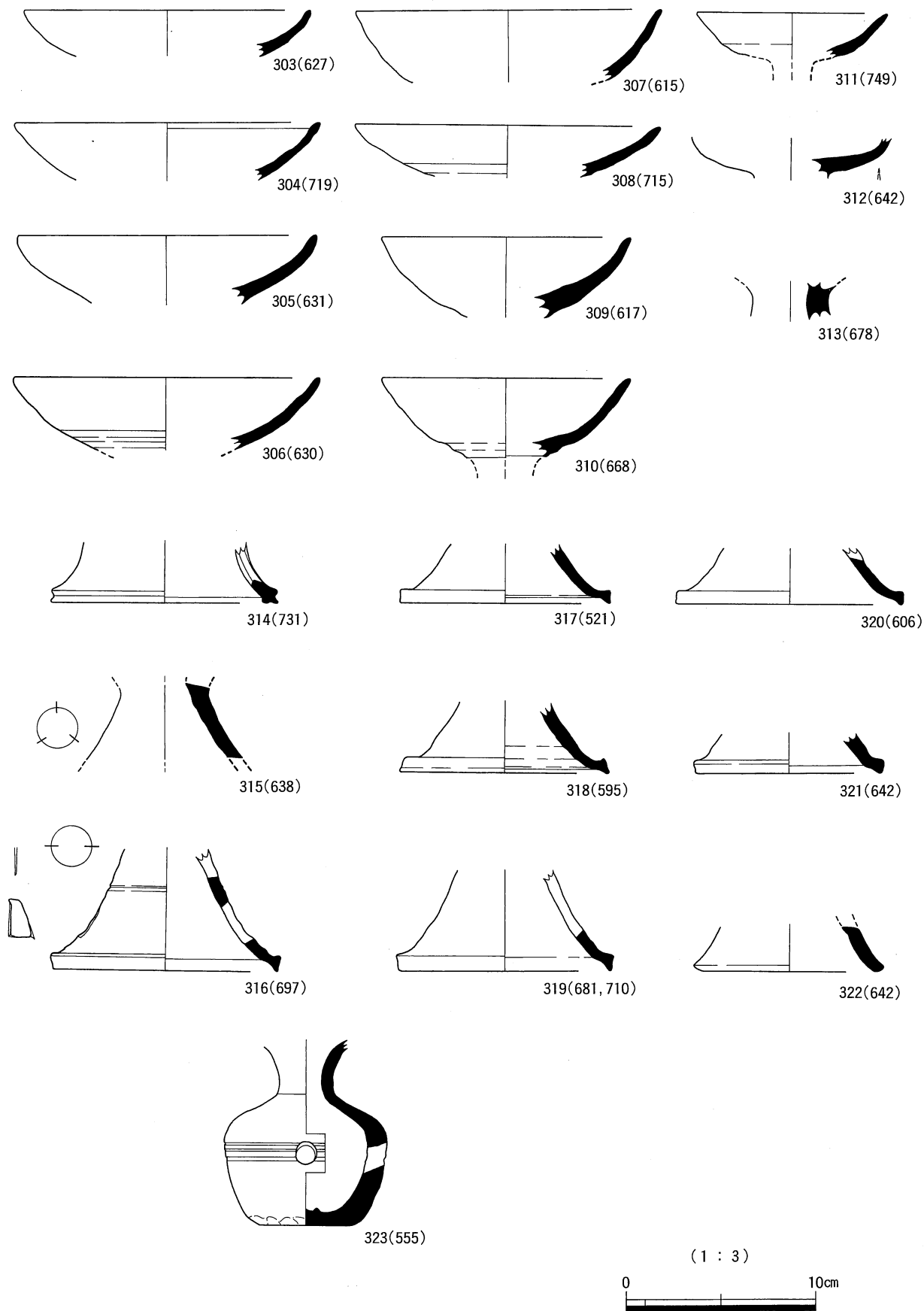
挿図135 陰田隠れが谷遺跡 2区6テラス出土遺物(1)



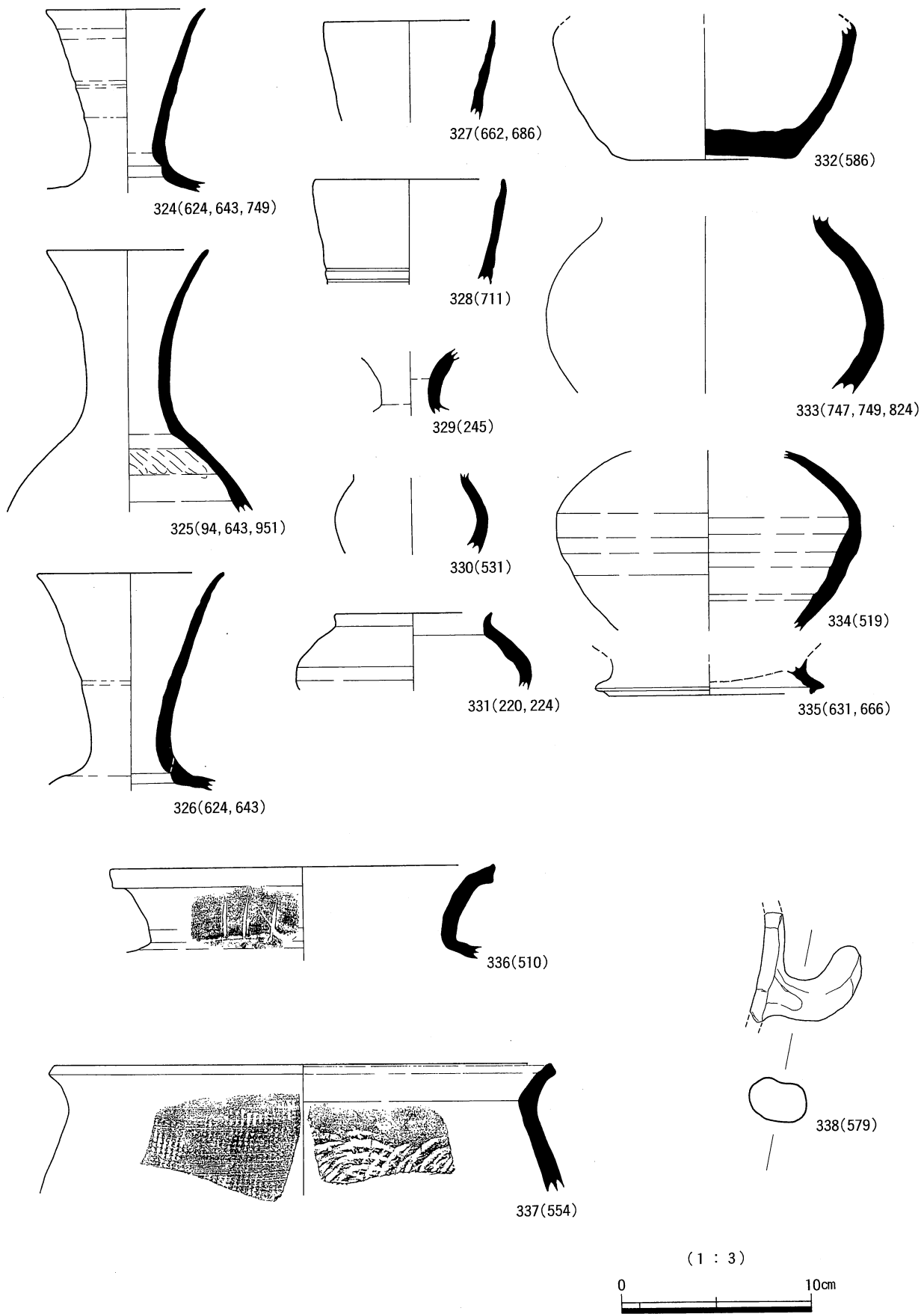
挿図136 陰田隠れが谷遺跡 2区6テラスSB12出土遺物



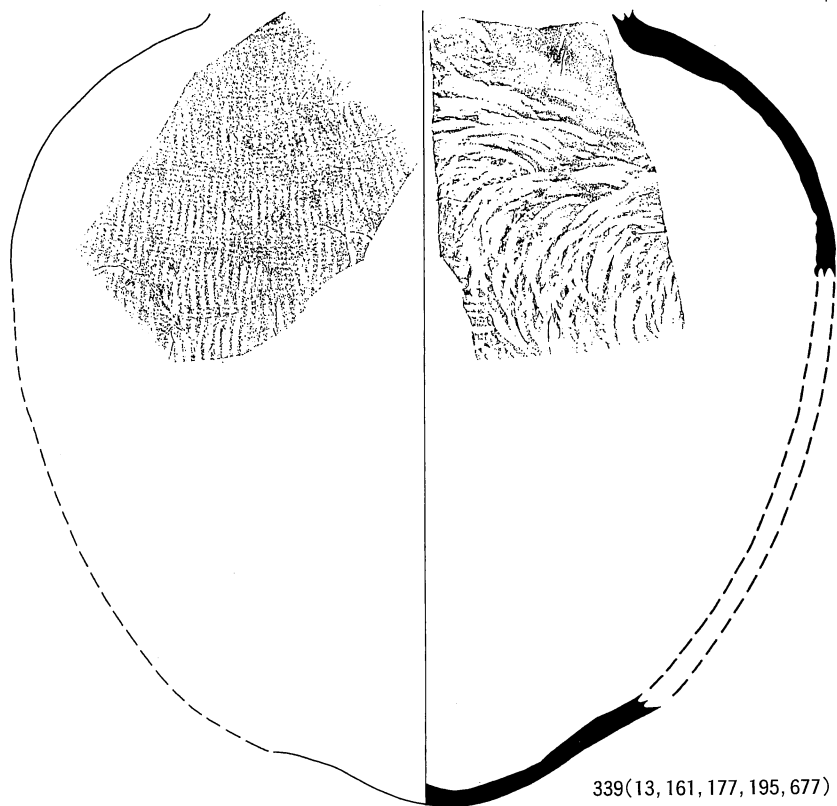
挿図137 陰田隠れが谷遺跡 2区6テラスSB13・14出土遺物(1)



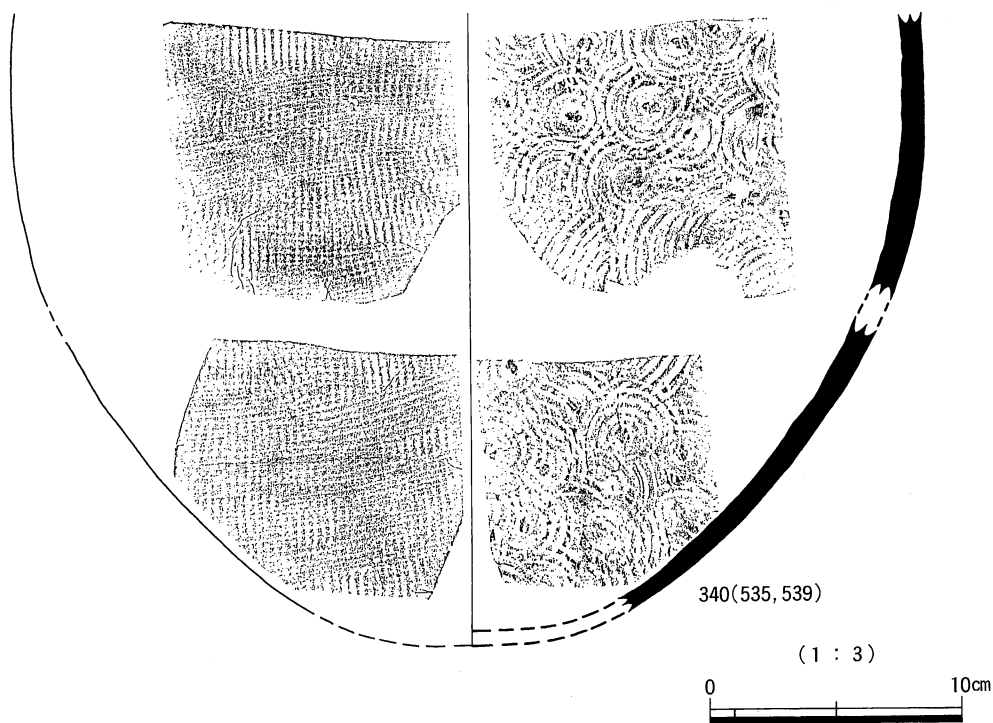
挿図138 陰田隠れが谷遺跡 2区6テラスSB13・14出土遺物(2)



挿図139 陰田隠れが谷遺跡 2区6テラス出土遺物(2)



339(13, 161, 177, 195, 677)

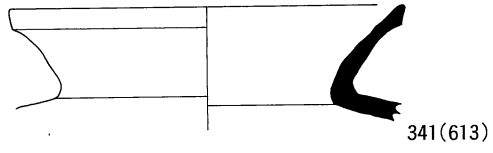


340(535, 539)

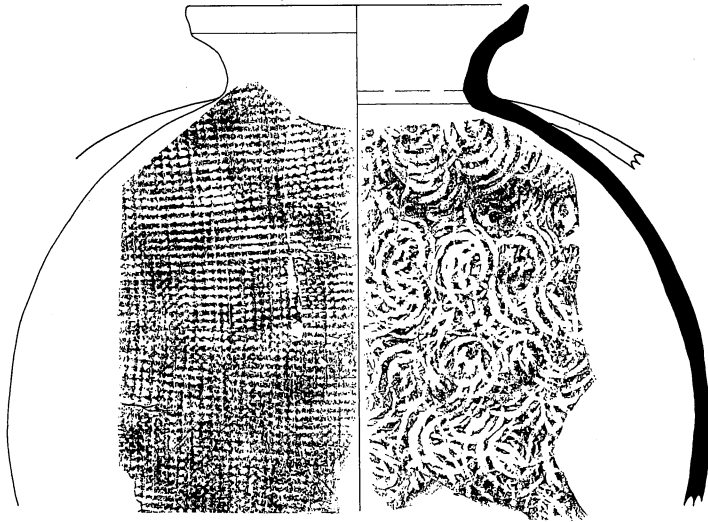
(1 : 3)



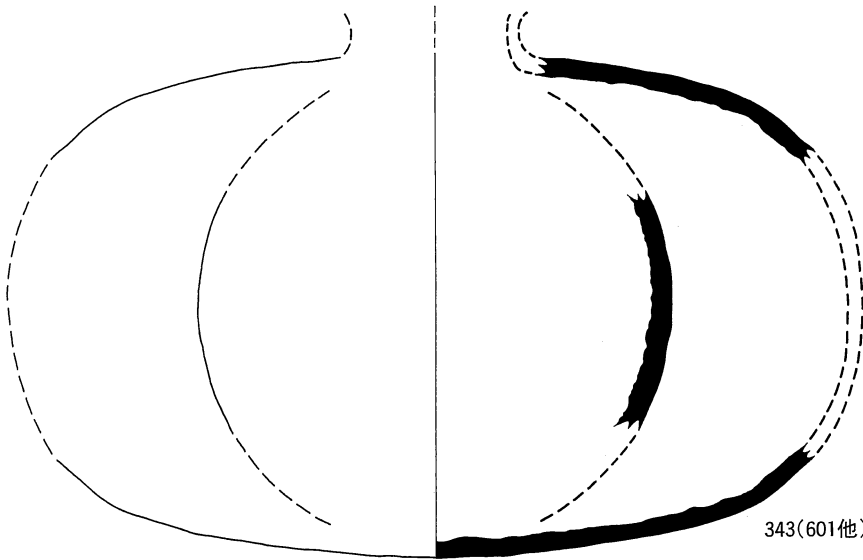
挿図140 陰田隠れが谷遺跡 2区5・6テラス出土遺物



341(613)

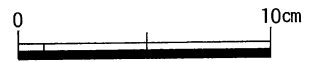


342(528, 542, 556)

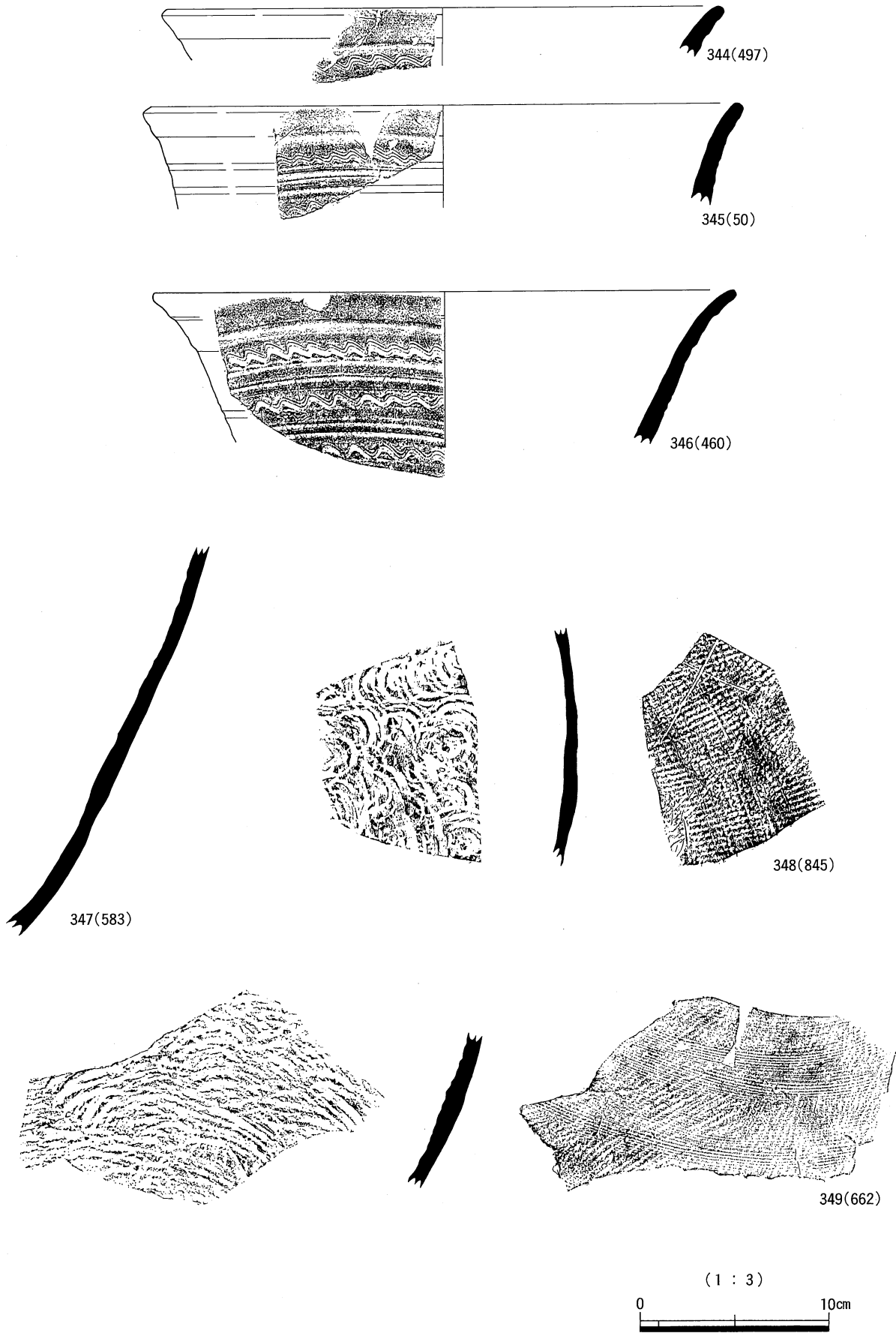


343(601他)

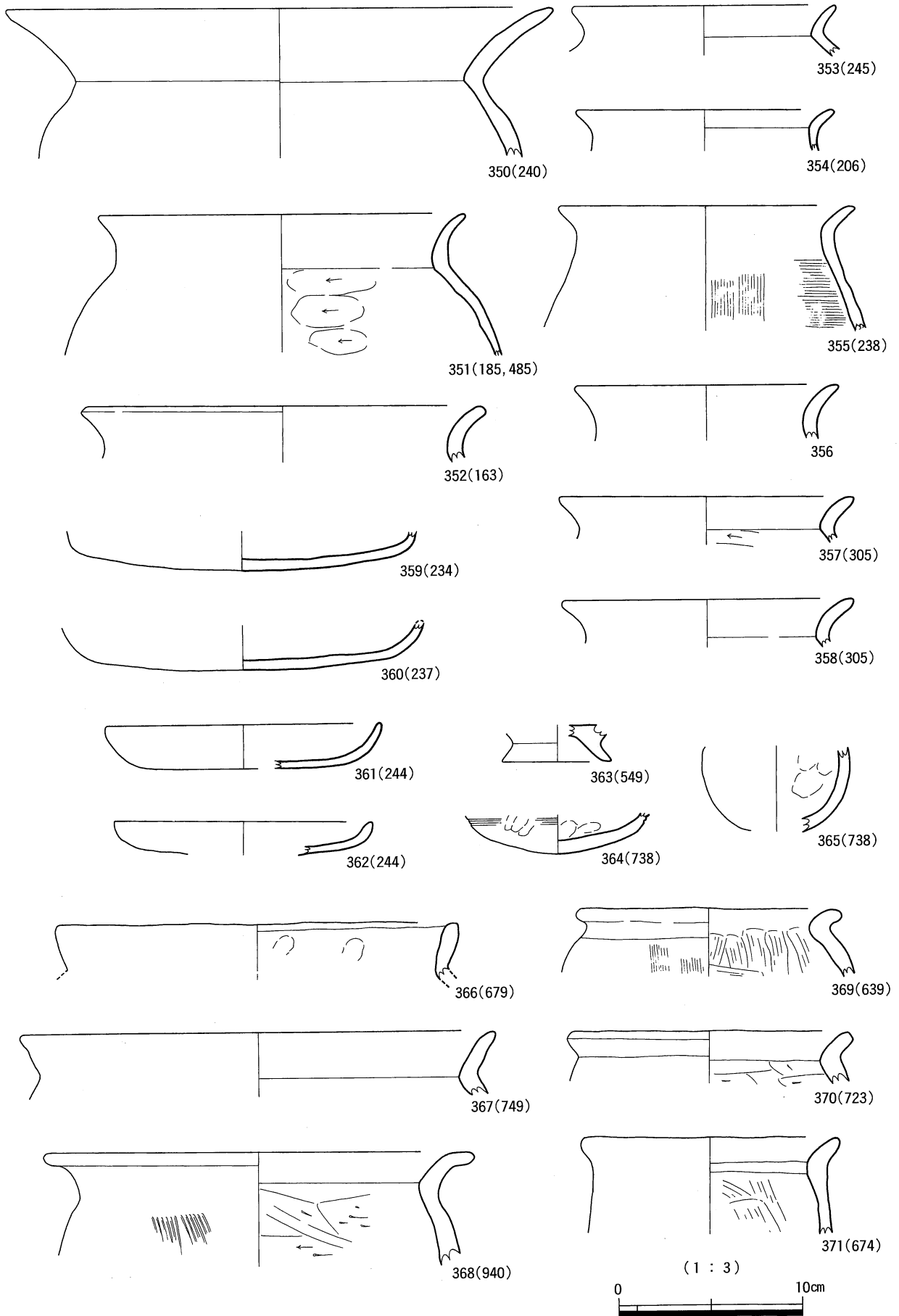
(1 : 3)



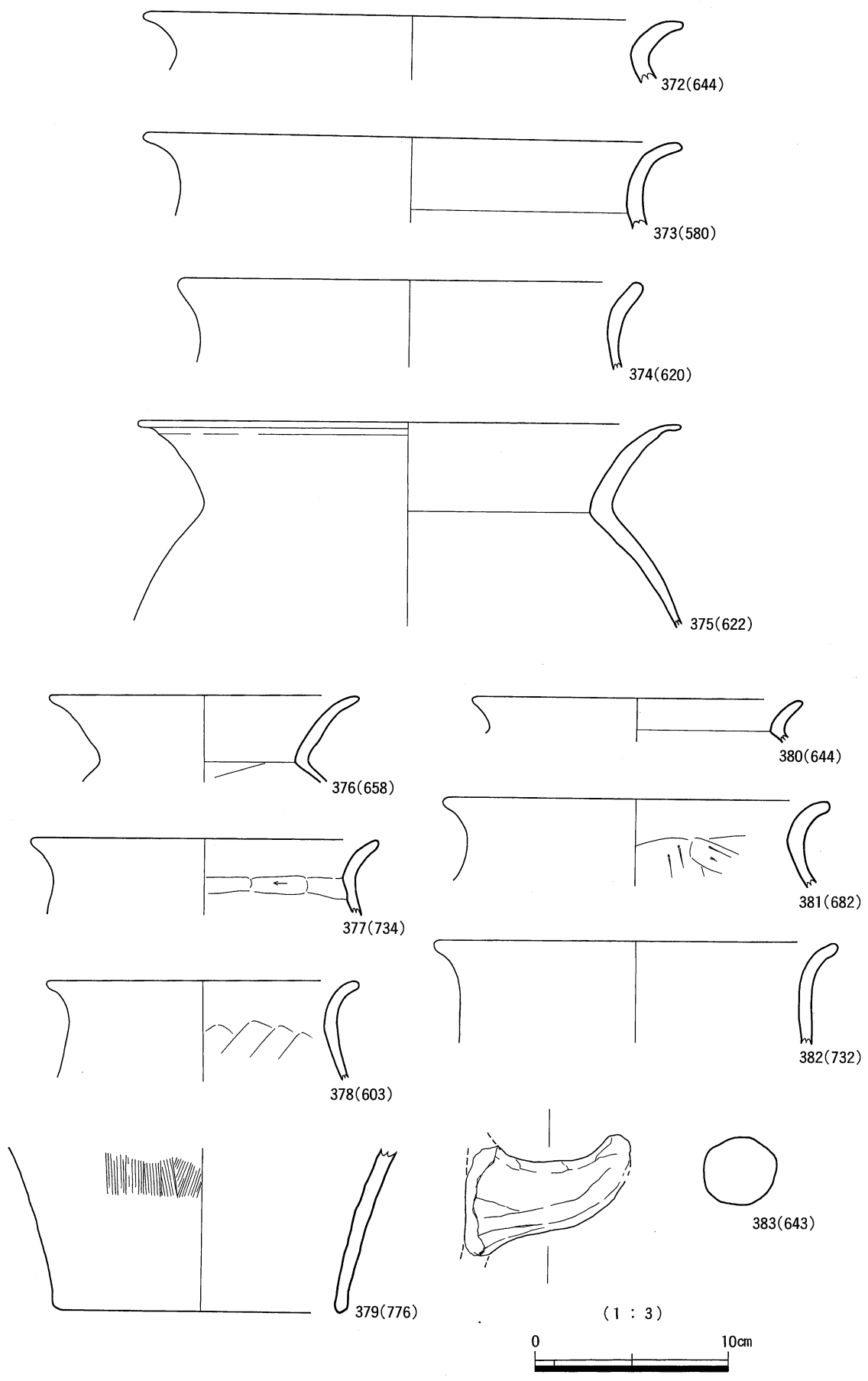
挿図141 陰田隠れが谷遺跡 2区6テラス出土遺物 (3)



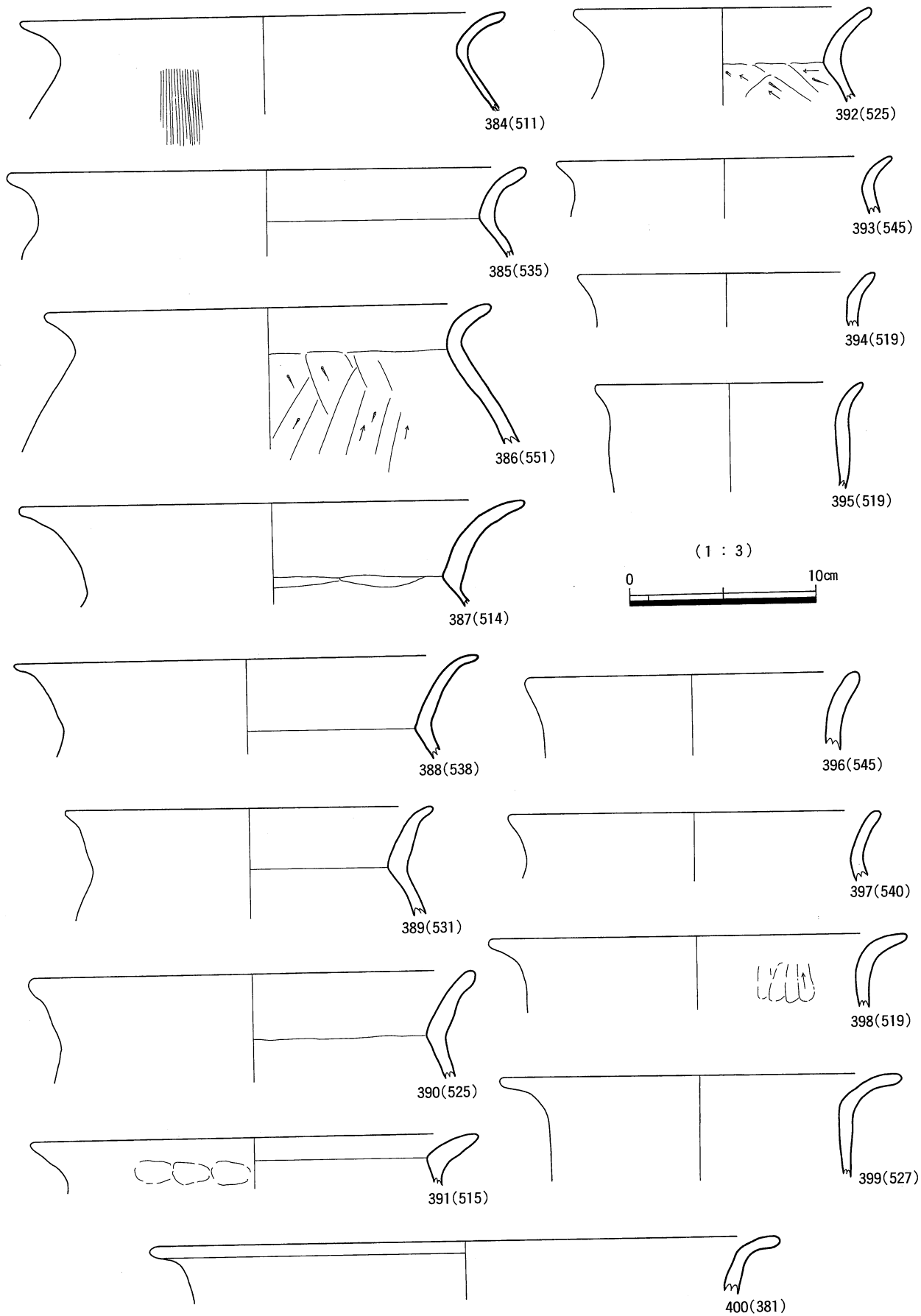
挿図142 陰田隠れが谷遺跡 2区4～6テラス出土遺物



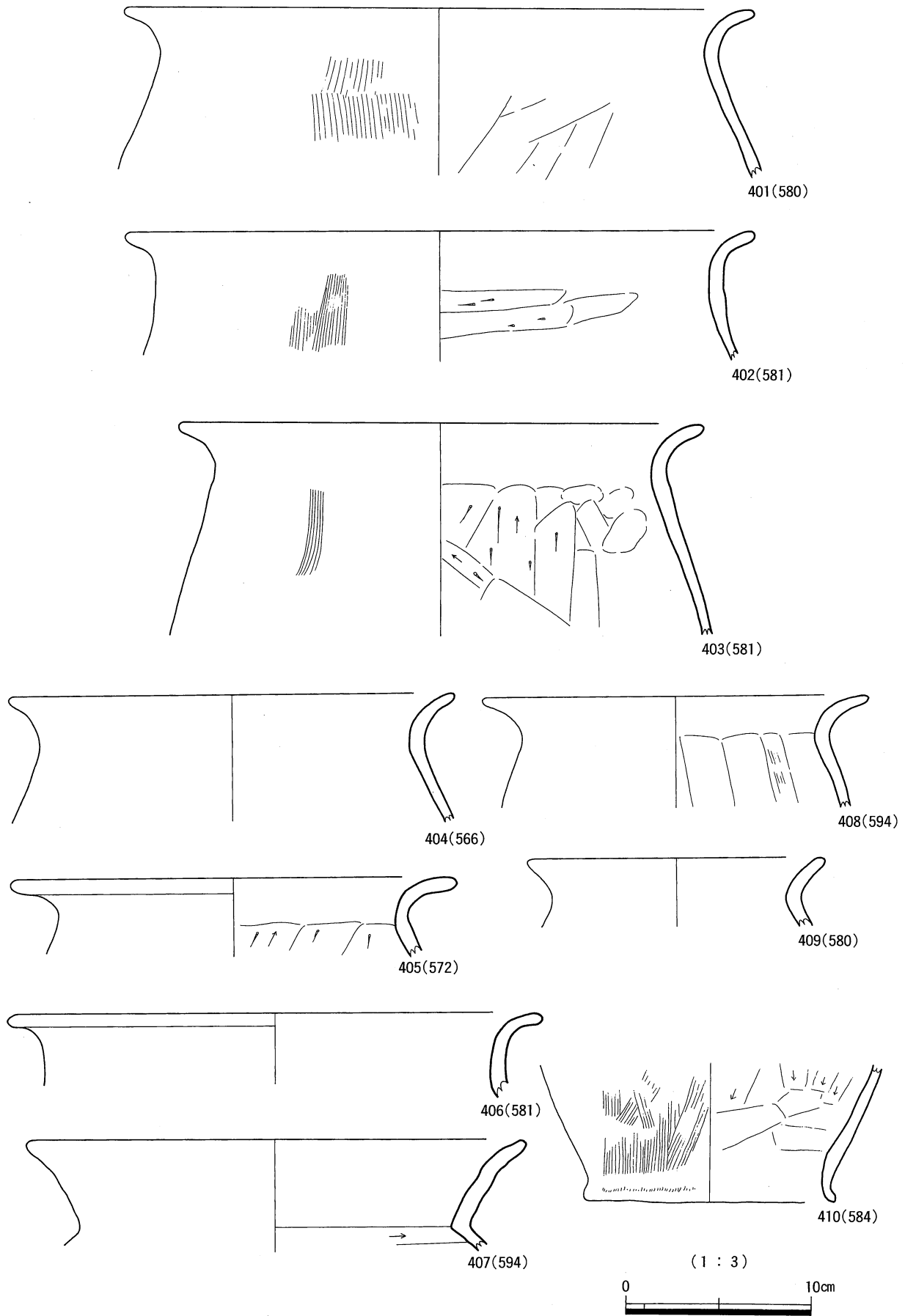
挿図143 陰田隠れが谷遺跡 2区6テラス上層出土遺物



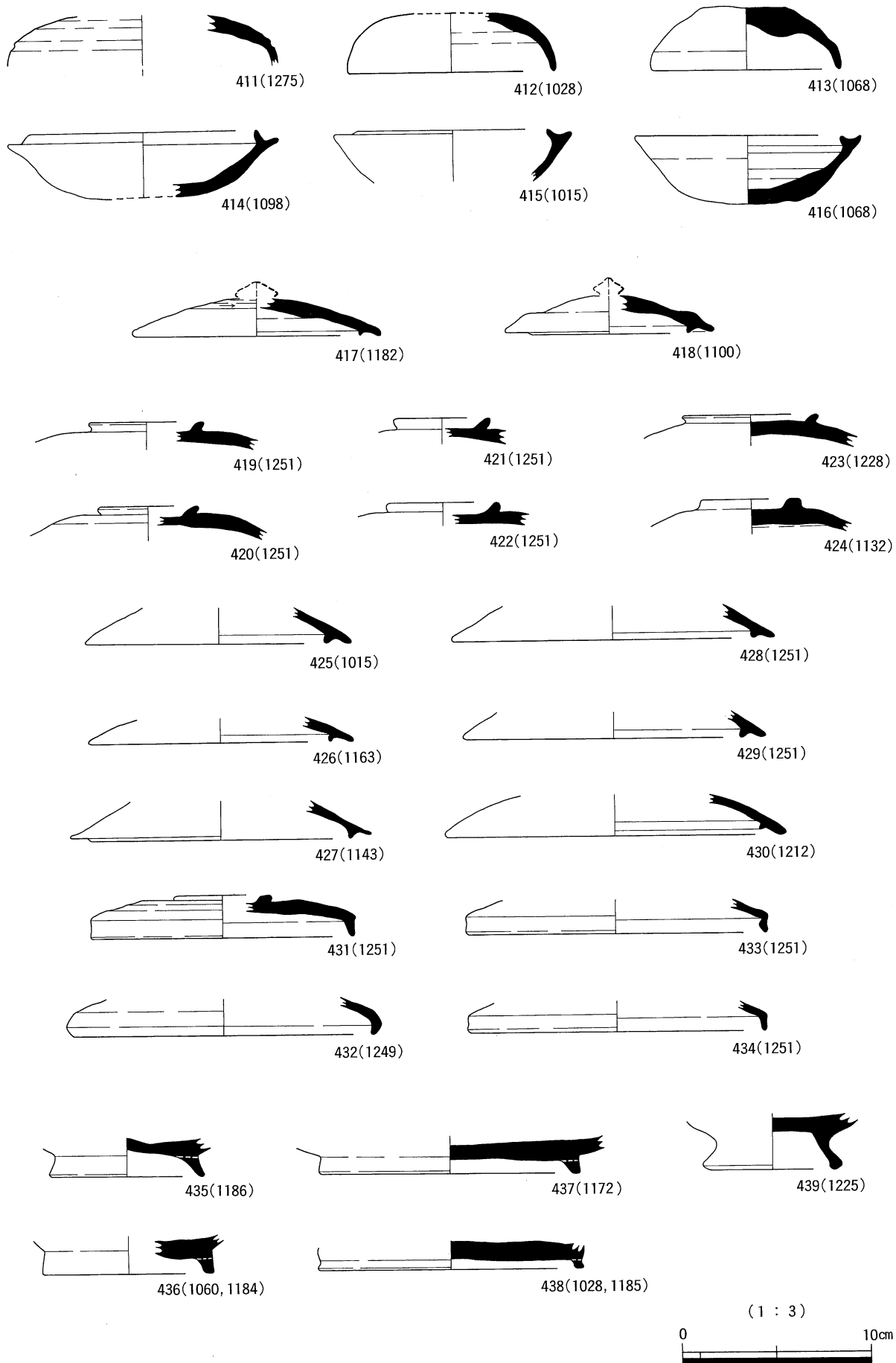
挿図144 陰田隠れが谷遺跡 2区6テラス下層出土遺物



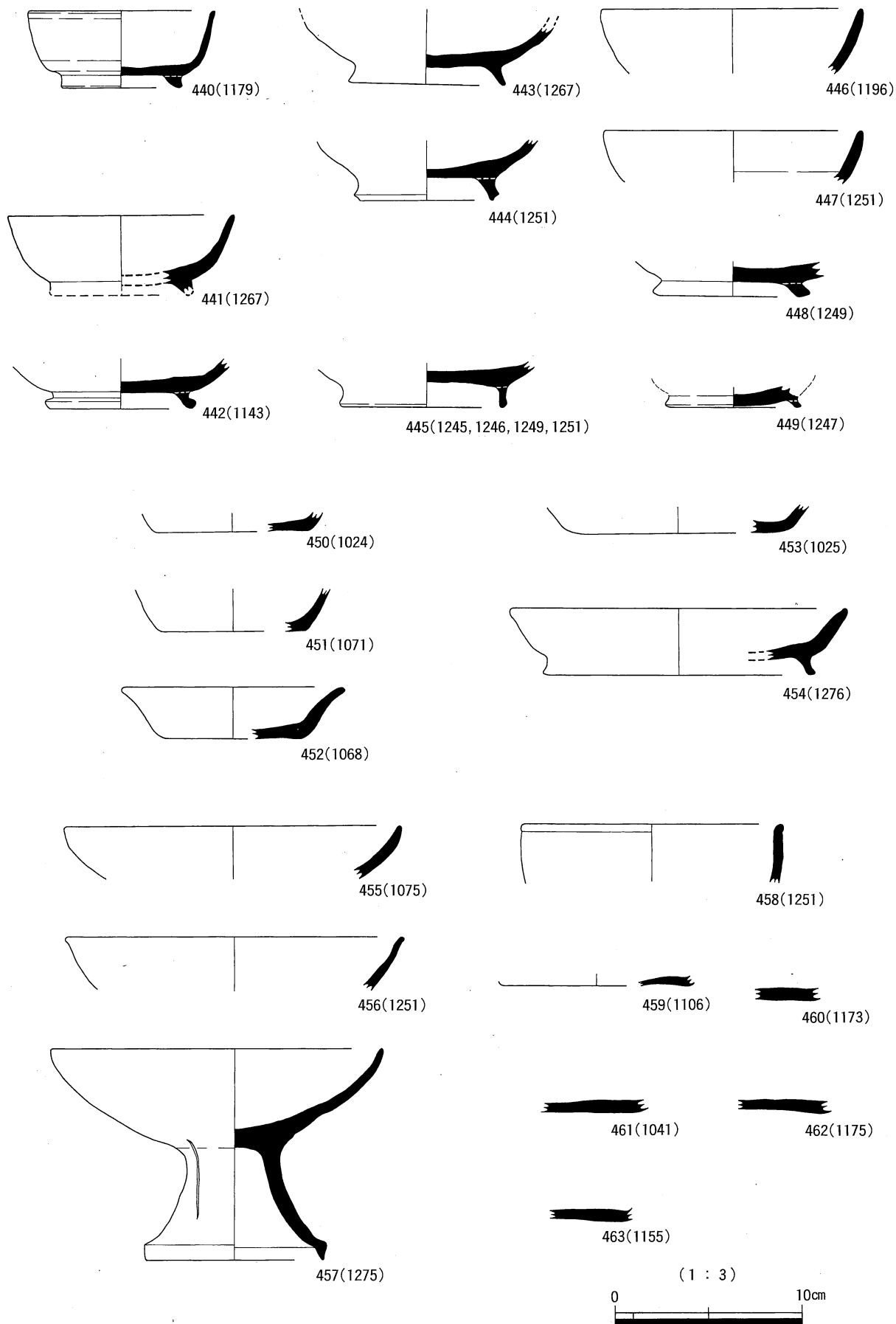
挿図145 陰田隠れが谷遺跡 2区6テラスSB12上層出土遺物



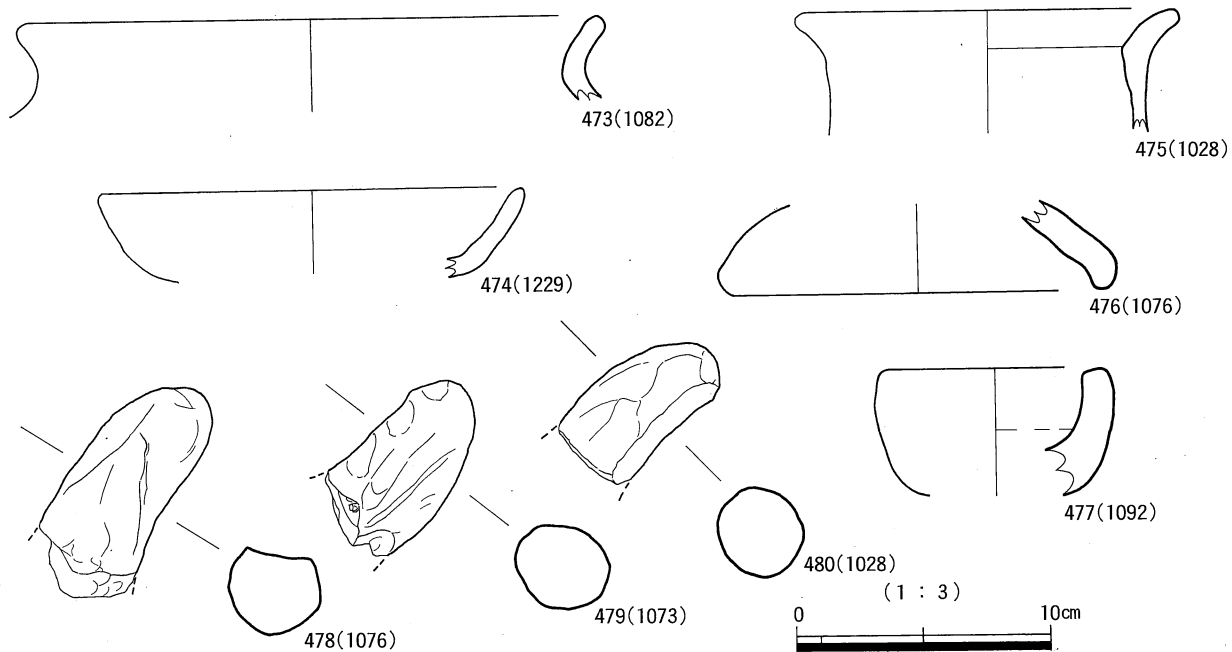
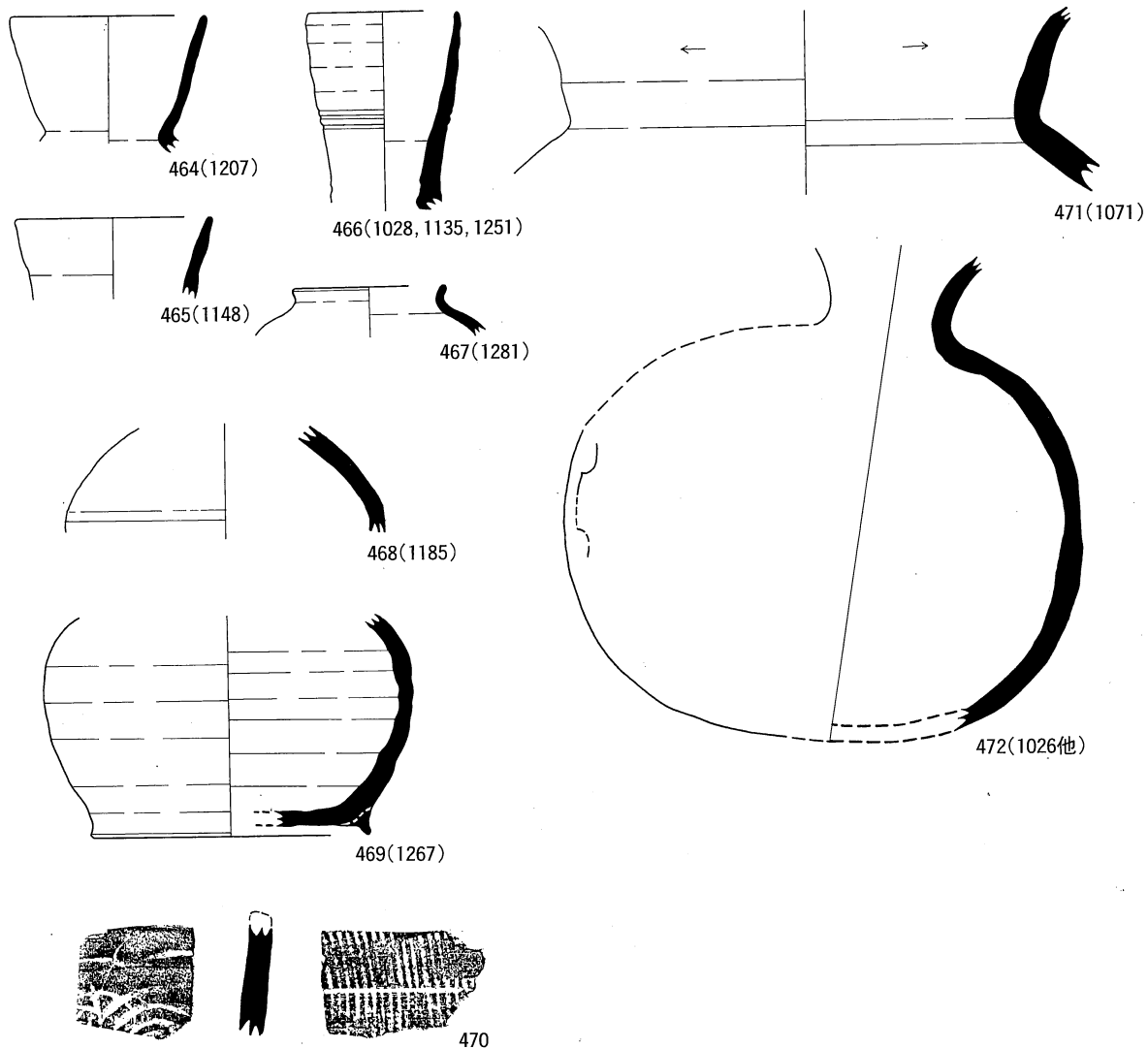
挿図146 陰田隠れが谷遺跡 2区6テラスSB12床面直上出土遺物



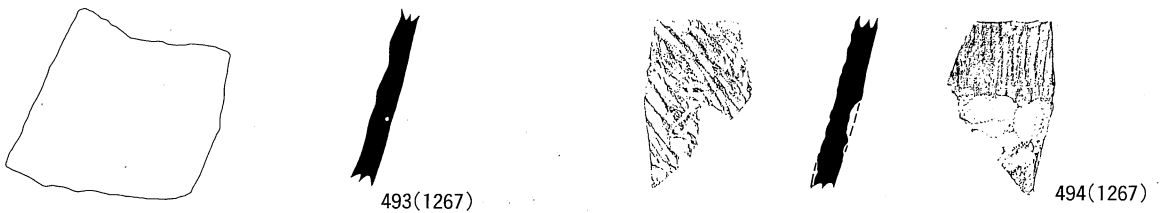
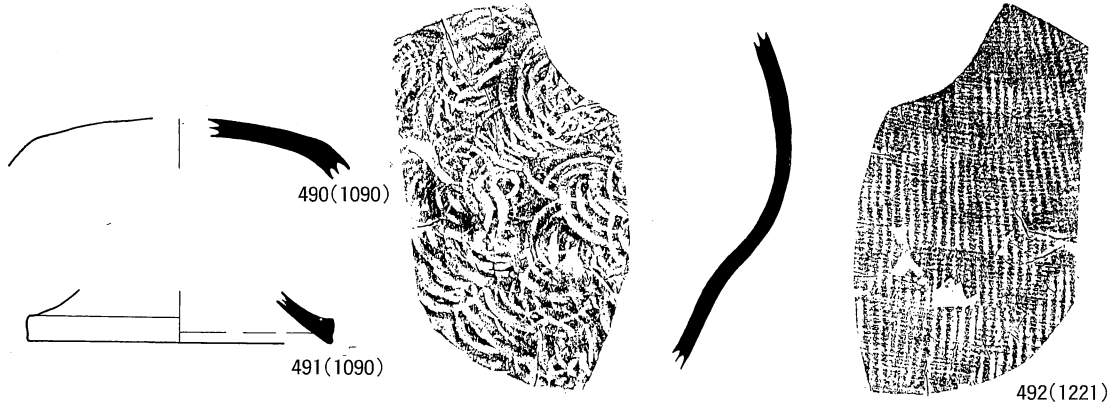
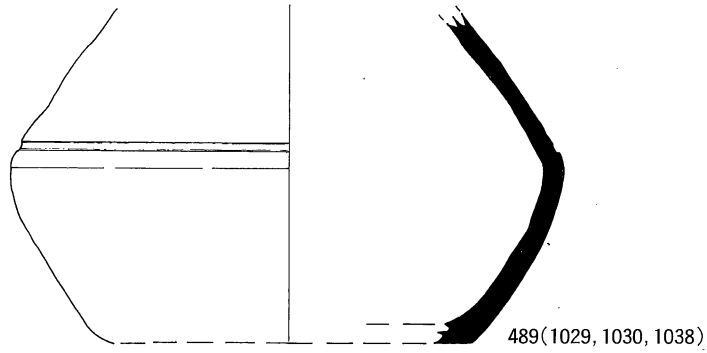
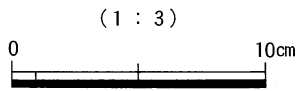
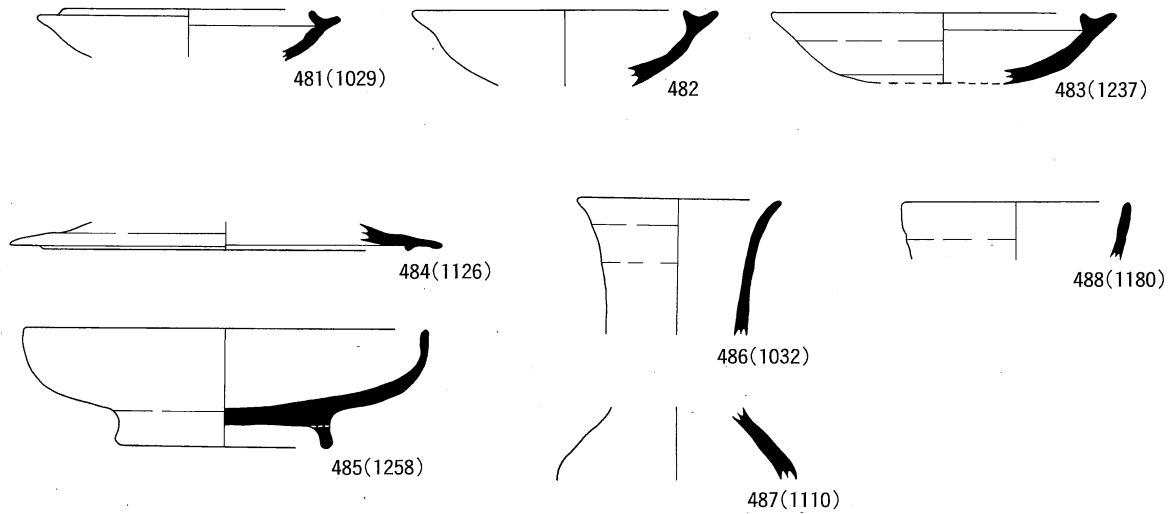
挿図147 陰田隠れが谷遺跡 3区7テラス出土遺物 (1)



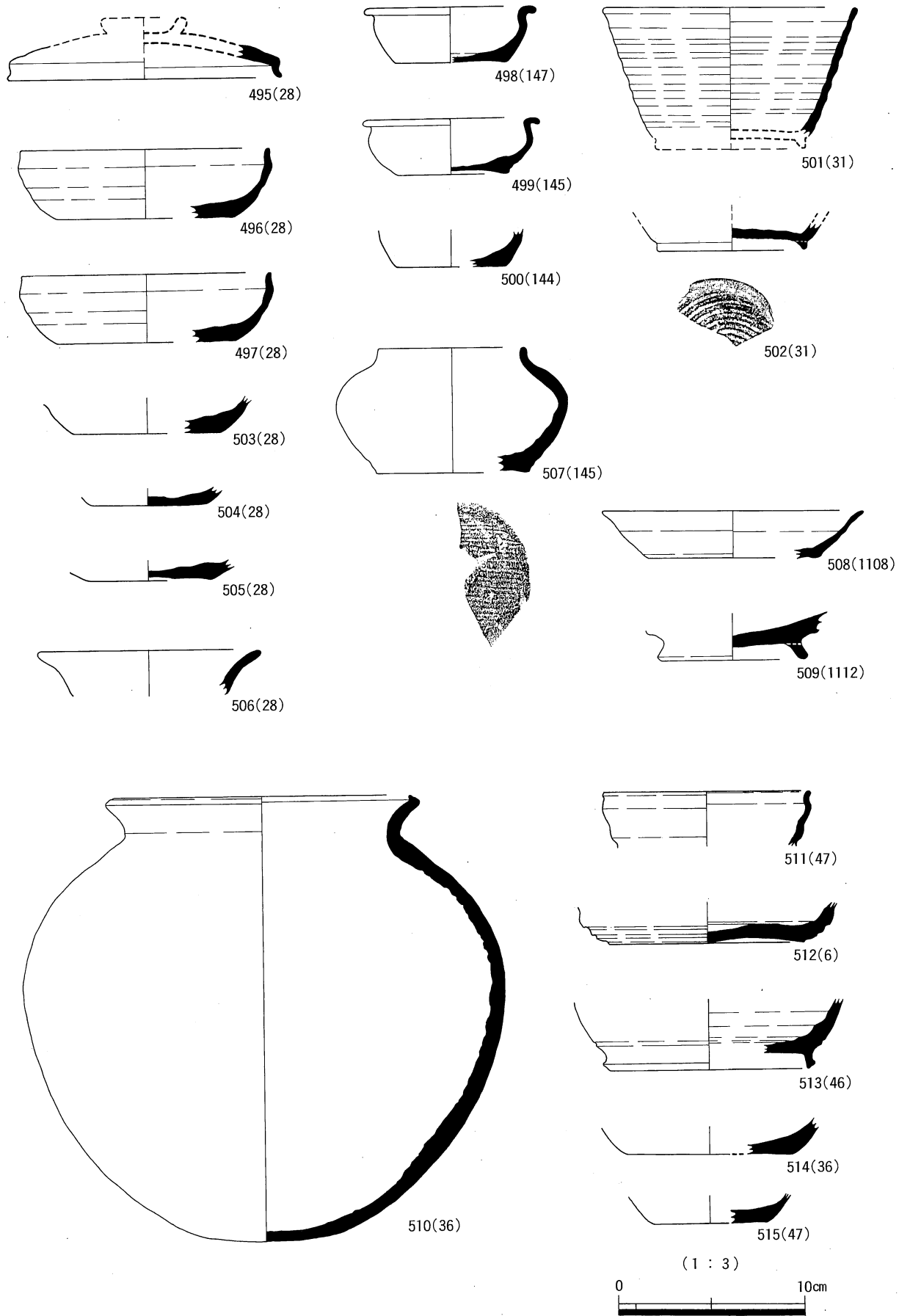
挿図148 陰田隠れが谷遺跡 3区7テラス出土遺物 (2)



挿図149 陰田隠れが谷遺跡 3区7テラス出土遺物 (3)



挿図150 陰田隠れが谷遺跡 2・7～10テラス出土遺物



挿図151 陰田隠れが谷遺跡 1区出土遺物

4 陰田広畑遺跡

陰田広畑遺跡は標高45mの東へのびる尾根の頂部及び南側斜面とその南西側の谷奥斜面に位置する。遺構は段状遺構2基、竪穴住居5棟、掘立柱建物50棟、溝状遺構30条、土坑30基等を検出した。

遺跡の形成は縄文時代の落とし穴1基と弥生時代後期の土器が検出されているが単発的で、本格的には古墳時代後期に形成が始まり平安時代初期までつづく。

縄文時代の落とし穴は尾根頂部の8テラスで検出され、弥生時代後期の土器は尾根南側裾部の1～3テラスから出土している。

当遺跡において主要な位置を占めるのは古墳時代後期～奈良時代のテラスと掘立柱建物である。テラスは尾根の頂部及び南側斜面に多くあり、調査区内で11基確認したが、調査区外にもいくつかテラス状の平坦地が見られる。

1 テラス (挿図156 図版52)

1 テラスは尾根の南側裾部に位置し、現状で長さ7.8m、幅3.6mをはかる。1 テラスでは遺構は確認できなかった。

1 テラスからは6世紀末～8世紀後葉の遺物が出土しているが、その中でも6世紀末～7世紀前葉の遺物が1 テラス出土遺物の約7割を占め、8世紀中葉～後葉の遺物はほとんど見られない。

2 テラス (挿図156～159 図版52～59)

2 テラスは尾根の南側裾部の標高18～21mに位置し、南側約2/3は大きく削平されているが、現状で長さ23m、幅13m、B-B'ラインの壁面で残存壁高3mをはかる。2 テラスでは掘立柱建物2棟、溝状遺構5条を検出した。

2 テラスからは6世紀末～8世紀後葉の遺物が出土しているが、その中でも6世紀末～7世紀前葉の遺物が2 テラス出土遺物の約7割を占め、8世紀中葉～後葉の遺物はほとんど見られない。

S B 01 (挿図158)

S B 01は南、東辺は確認できなかったが、3×3間の総柱の建物になるものと思われる。桁行長4.1m、梁行長3.1m、柱間0.9～1.6mで、主軸はN-84°-Wである。

S B 02 (挿図159)

S B 02は桁行のみの検出で、桁行3間、桁行長4.8mをはかる。主軸はN-88°-Eである。北側に長さ4.6m、幅0.6mの溝が走る。

3 テラス (挿図160～181 図版60～70)

3 テラスは尾根の南側斜面の標高22～26mに位置し、現状で長さ53m、幅3～14mをはかる。3 テラスでは掘立柱建物18棟、溝状遺構9条、土坑1基、鍛冶炉1基、焼土溜り3基を検出した。

3 テラスからは6世紀末～8世紀後葉の遺物が出土しているが、7世紀中葉～8世紀後葉が主体で、比較的安定した継続がみられる。

掘立柱建物 (挿図163～176)

掘立柱建物は柱穴内から時期決定のできる遺物が出土していないため各建物の時期は不明であるが、3 テラスからは古墳時代後期～奈良時代の遺物が出土していることから、この時期幅におさまるものと思われる。また、建物の切合関係と主軸から4時期を想定した。1期はS B05・06・07の3棟がある。これらは併存していたのではなく、建替えによるものと思われる。

2期はS B11・13の2棟があり、北側の桁行がそろうように配置されている。S B11は桁行3間、S B13は桁行4間の建物で、「コ」字状に巡る溝によって区画されている。

3期はS B08・09・12の3棟があり、このうちS B08・09が併存し、北側の桁行がそろうように配置されている。2棟とも桁行4間、梁行2間の建物で、「コ」字状に巡る溝によって区画されている。S B09はその後、桁行3間のS B12に建替えられたものと思われる。

4期はS B03・04・10・20の4棟があり、このうちS B03・10が併存し、北側の桁行がそろうように配置されている。2棟とも桁行3間の建物で、S B03はS B04に、S B10はS B20に建替えられたものと思われる。

鍛冶炉 (挿図179、180 図版64、65)

鍛冶炉 (S X03) は上部が削平されており、炉の形態は不明であるが、長軸0.6m、短軸0.5m、深さ15cmの平面楕円形状を呈する。炉の周辺は赤褐色に焼土化しており、炉内も北側は白褐色に、その南側は黒褐色に焼けている。

鍛冶炉周辺を50cmメッシュを組んで鍛造剥片と粒状滓の分布 (挿図180) をみてみると、炉の東側で分布が密になっており、この部分で作業を行っていたものと思われる。

焼土溜り (挿図178、181 図版62、63)

焼土溜り (S X01・02・04) は平面不整形を呈し、S X03と同様に焼土化しているが、鍛冶炉であるとは確定できなかった。

4 テラス (挿図182、183)

4 テラスは尾根の南側斜面の標高17~19mに位置し、現状で長さ19.8m、幅7.8m、A-A'ラインの壁面で残存壁高1.5mをはかる。壁裾部に幅1.2mの1条の溝があり、上方から流れ込む自然流路と直交する。この他、4 テラスでは2基のピットを検出した。

4 テラスからは6世紀末~8世紀後葉の遺物が出土しているが、7世紀中葉~8世紀後葉が主体で、比較的安定した継続がみられる。

5 テラス (挿図182、183)

5 テラスは尾根の南側斜面の標高19~20mに位置し、現状で長さ17.4m、幅3.6m、A-A'ラインの壁面で残存壁高1.4mをはかる。壁裾部には円形に巡る幅0.6mの溝1条があり、上方から走る自然流路もある。

5 テラスからは6世紀末~8世紀後葉の遺物が出土しているが、7世紀中葉~8世紀後葉が主体で、比較的安定した継続がみられる。

6 テラス (挿図184~209 図版71~78)

6 テラスは尾根の南側斜面の標高29~32mに位置し、現状で長さ78.5m、幅2.5~11m、D-D'ラインの壁面で残存壁高4.3mをはかる。6 テラスでは掘立柱建物24棟、溝状遺構9条を検出した。

6 テラスからは6世紀末~8世紀後葉の遺物が出土しているが、8世紀中葉~後葉が主体である。

掘立柱建物 (挿図186~208)

掘立柱建物は柱穴内から時期決定のできる遺物が出土していないため各建物の時期は不明であるが、6 テラスからは古墳時代後期~奈良時代の遺物が出土していることから、この時期幅におさまるものと思われる。また、建物の切合関係と主軸から3時期を想定した。1期はS B 28・36・40・43の4棟がある。S B 28・36・40は3×2間、S B 43は2×2間の建物で、4棟とも北側の桁行がそろうように2.5~3m間隔で配置されている。また、S B 28とS B 36との間が空いており、ここにも建物があった可能性がある。S B 40はS B 39・41・42の3回の建替えが認められるが、これらのすべてが1期内におさまるのか2期以降にも継続するのかは不明である。

2期はS B 23・30・37の3棟がある。S B 23・30は4×2間、S B 37は3×2間の建物で、3棟とも北側の桁行がそろうように配置されている。S B 37はS B 36を建替えたものと思われ、その後、S B 38に建替えられたものと思われる。

3期は基本的には4棟の建物があり、S B 22・25・29・33は北側の桁行がそろうように1~2m間隔で配置されている。各建物とも1~2回の建替えが認められ、S B 22はS B 21・24、S B 25はS B 26・27、S B 29はS B 31、S B 33はS B 34・35に建替えられている。

7テラス (挿図210～214 図版79、80)

7テラスは尾根の頂部の標高32～35mに位置し、現状で長さ12m、幅12mをはかる。7テラスでは竪穴住居1棟、掘立柱建物1棟、段状遺構2基を検出した。

7テラスからは6世紀末～8世紀後葉の遺物が出土しているが、7世紀中葉～8世紀前葉が主体で、8世紀中葉以降は次第に縮小していく。

S I 01 (挿図212 図版79)

S I 01は削平されており、壁溝のみが残る。平面形態は方形で、南北長6.8m、現状の東西長3.9mをはかる。

S B 45 (挿図213 図版79、80)

S B 45は桁行3間、梁行2間の建物で、桁行長4.1m、梁行長2.9m、柱間1.0～1.8mをはかり、主軸はN-74°-Wである。

S S 01 (挿図214 図版79、80)

S S 01は長軸4.6m、短軸3.6m、深さ0.4mの平面長方形の段状遺構で、東側の際に1基のピットがある。

S S 02 (挿図214)

S S 02は北、東側が削平されているが、現状で長軸5.4m、短軸4.2m、深さ0.7mの平面隅丸長方形の段状遺構で、中央に西から東へ3基のピットが並ぶ。

8テラス (挿図210、215～222 図版81～86)

8テラスは尾根の頂部から南側斜面にかけての標高36～40mに位置し、現状で長さ29.5m、幅6.5～10m、C-C'ラインの壁面で残存壁高1.8mをはかる。8テラスでは竪穴住居4棟、掘立柱建物1棟、石敷遺構1基、溝状遺構1条、縄文時代の落とし穴1基を検出した。

8テラスからは6世紀末～8世紀後葉の遺物が出土しているが、7世紀中葉～8世紀前葉が主体で、8世紀中葉以降は次第に縮小していく。

J S K 01 (挿図215)

J S K 01は平面隅丸長方形を呈し、長軸1.2m、短軸1.1m、深さ0.9mをはかり、底面に長径50cm、短径40cm、深さ10cmのピットがある。形状から縄文時代の落とし穴であると思われる。

S I 02 (挿図216、217 図版81、82)

S I 02は長軸5.3m、短軸5.2m、深さ0.3mをはかる。平面隅丸方形を呈し、中央には長軸1m、短軸0.6m、深さ0.4mの平面楕円形の特殊ピットがある。S I 02は支柱穴の重複から建替が認められるが、住居の拡張までは行っていない。

S I 03 (挿図218 図版82)

S I 03は南西隅が残るのみで、平面隅丸方形になるものと思われる。深さは0.7mをはかる。

S I 04 (挿図219 図版83)

S I 04は東側の壁溝がわずかに残るのみで、規模、平面形態は不明である。

S I 05 (挿図220 図版83)

S I 05は南側が削平されているが、東西長7.5m、南北長5.5m、深さ0.5mをはかる。平面形態は方形である。

S B 46 (挿図221 図版81)

S B 46は桁行3間、梁行2間の建物で、桁行長5.0m、梁行長3.6mをはかる。柱穴は平面隅丸方形を呈し、柱間は1.6～1.8mをはかる。主軸はN-85°-Wである。また、S B 46の北西側にはL字状に溝が巡る。

石敷遺構 (挿図222 図版84～86)

テラスの壁を掘込んで造られており、幅4.0m、奥行き1.7mをはかる。床面に10～30cm大の石を敷き、手前に2つ2m間隔で50～60cm大の上面が平坦な石が置かれ、奥にもこれよりも小さいが同様に上面が平坦な石が約50cm間隔で並べてあり、これらを礎石とした祠状の建物が建っていたものと思われる。また、南面して径70cmの炭の混じる土坑がある。

9 テラス (挿図210、223、224 図版83)

9 テラスは尾根の頂部の標高40～41mに位置し、現状で長さ17m、幅7mをはかる。9 テラスでは掘立柱建物2棟、溝状遺構1条を検出した。

9 テラスからは6世紀末～8世紀後葉の遺物が出土しているが、7世紀中葉～8世紀前葉が主体で、8世紀中葉以降は次第に縮小していく。

S B 47 (挿図223 図版83)

S B 47は桁行2間、梁行2間の総柱建物で、桁行長3.74m、梁行長3.60m、柱間1.8～2.1mをはかる。主軸はN-48°-Eである。

S B 48 (挿図224 図版83)

S B 48は北西側しか残っていないが、桁行2間、梁行2間以上の建物になるものと思われる。柱間は1.6～1.7mでほぼ等間である。主軸はN-50°-Eである。

10テラス (挿図225～230 図版87～89)

10テラスは谷奥斜面の標高27～35mに位置し、現状で長さ13m、幅15mをはかる。10テラスでは掘立柱建物2棟、溝状遺構1条、土坑2基を検出した。

S B 49 (挿図227、228)

S B 49は建替が認められ、いずれも桁行2間、梁行2間以上の建物になるものと思われる。主軸はN-68°-Wで、南側にL字状に溝が巡る。S B 49BがS B 49Aに建て替えられる。

S B 50 (挿図229)

S B 50も建替が認められ、まず、2×2間の総柱の建物があり、これが桁行2間、梁行2間以上の建物に建て替えられる。主軸はN-72°-Wである。

S K 04 (挿図230)

S K 04は一辺0.8m、深さ0.2mをはかり、平面隅丸方形状を呈する。

S K 05 (挿図230 図版89)

S K 05は長軸0.8m、短軸0.7m、深さ0.2mをはかり、平面隅丸方形状を呈し、北側に張出しがみられる。

11テラス (挿図225～230 図版89)

11テラスは谷奥斜面の標高22～29mに位置し、現状で長さ17m、幅11mをはかる。11テラスでは溝状遺構2条、土坑2基を検出した。

S K 02 (挿図230 図版89)

S K 02は径0.7m、深さ0.1mをはかり、平面円形を呈する。

S K 03 (挿図230 図版89)

S K 03は長軸1.2m、短軸1.1m、深さ0.3mをはかり平面隅丸の五角形状を呈する。

出土遺物 (挿図231~260)

須恵器 (挿図231~259)

1~26は坏身、坏蓋が逆転する以前のもので、1、2テラスから多く出土している。

27~48は坏蓋で、宝珠つまみをもつもの(27~38)と環状つまみをもつもの(39~48)があり、各々、口縁に返りをもつもの(27~32、39~44)と返りをもたないもの(33~38、45~48)がある。

49~99は坏身で、底部外面をヘラ切り後ナデ調整するもの(67~81)、回転糸切りするもの(82~97)、静止糸切りするもの(98、99)があり、各々、高台をもたないもの(67~72、82~90、98)と高台をもつもの(73~81、91~97、99)がある。

100~130は高坏で、透しをもつもの(100~118)と透しをもたないもの(119~130)がある。透しをもつもののうち台形または三角形の透しをもつもの(100~111)と切り込みのみのもの(112~118)があり、切り込みのみのものはすべて1段であるが、台形または三角形の透しをもつものには1段透しのもの(105、108、110、111)と2段透しのもの(104)がある。なお、102、103、118は2方に、108、116は3方に透しがある。

131~176は壺で、長頸壺(131~145、147)、広口壺(146)、短頸壺(148~155)がある。156~163は肩部から胴部の破片であるが、肩部が丸いもの(156~159)と屈曲するもの(160~163)がある。164~176は胴部から底部であるが、高台をもたないもの(164~170)と高台をもつもの(171~176)がある。

221~273は甕で、法量によって大、中、小に分けることができる。221~232は小甕とした。口縁の形態にはバラエティーがある。233~259は中甕とした。口縁下端を突線状につまみ出すもの(233~235)、口縁下端をさらに強くつまみ出したもの(236)、口縁下端をつまみ出し、端部が面状になるもの(237~244)、口縁端部が丸くおさまるもの(247~252)、口縁端部は丸くおさまるが、外面に沈線が巡るもの(253~259)がある。260~273は大甕とした。口縁は長く、外傾して立ち上がった後、端部付近で外反する。口縁下端がつまみ出され、端部が丸くおさまるもの(265、266)と端部が面をなすもの(267~269)がある。

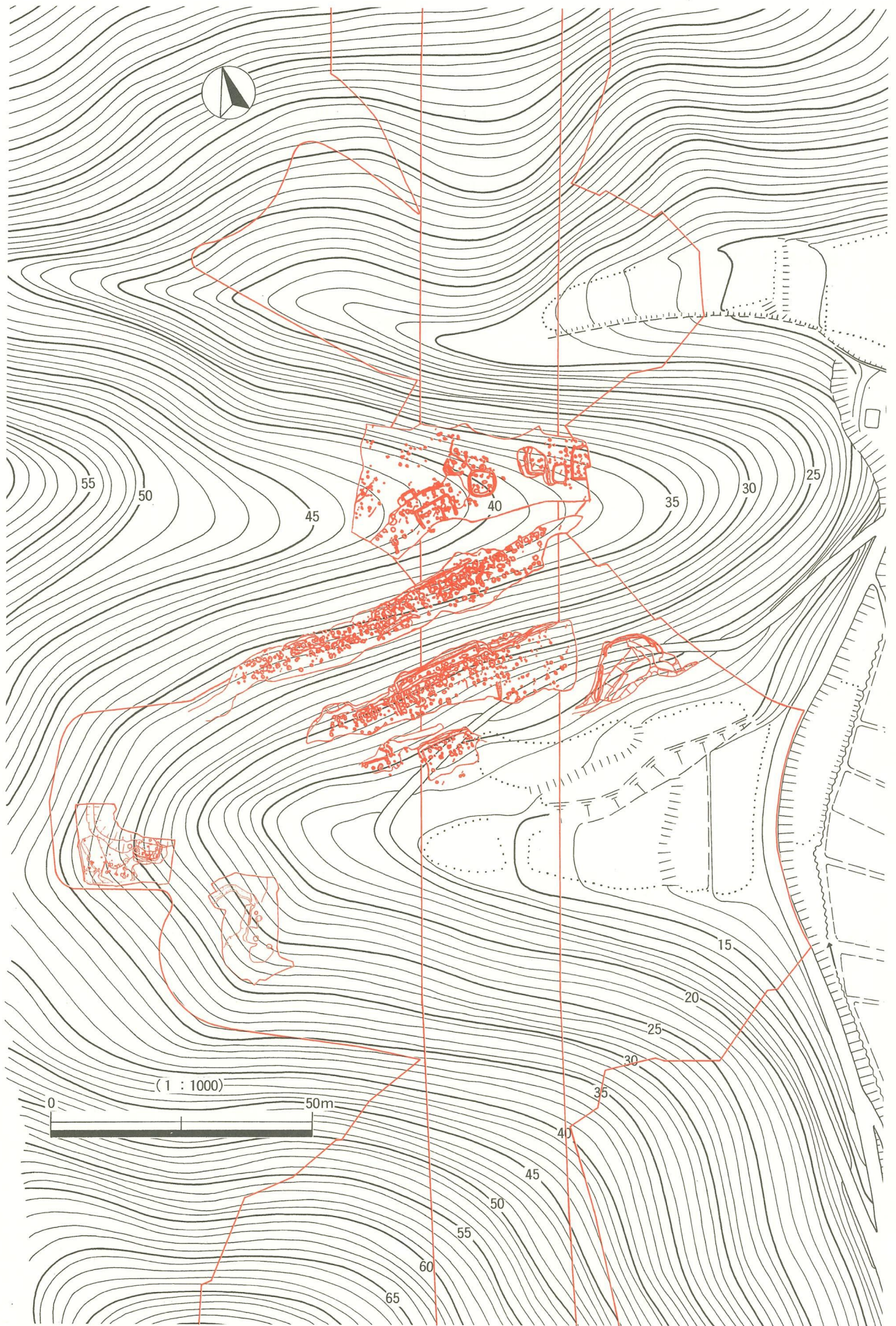
須恵器はこの他に甗(177~187)、鉢(188~196)、横瓶(197~215)、提瓶(216~220)がある。

弥生土器 (挿図260)

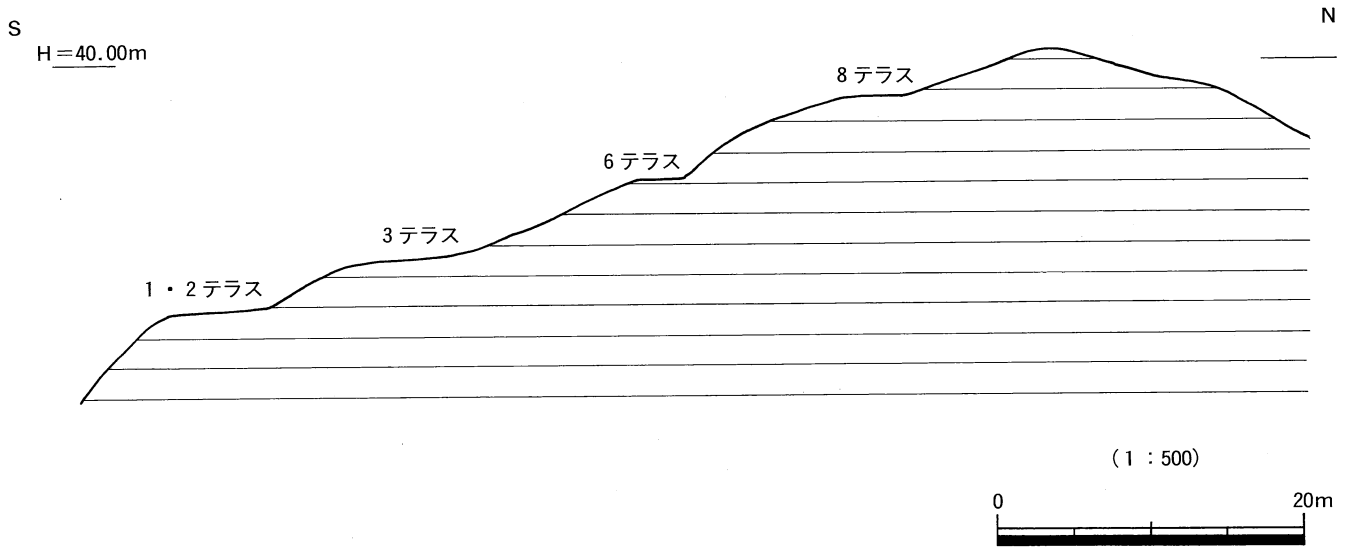
弥生時代後期の土器で、276は1テラス、274は2テラス、275、277、278は3テラスから出土した。

土師器 (挿図260)

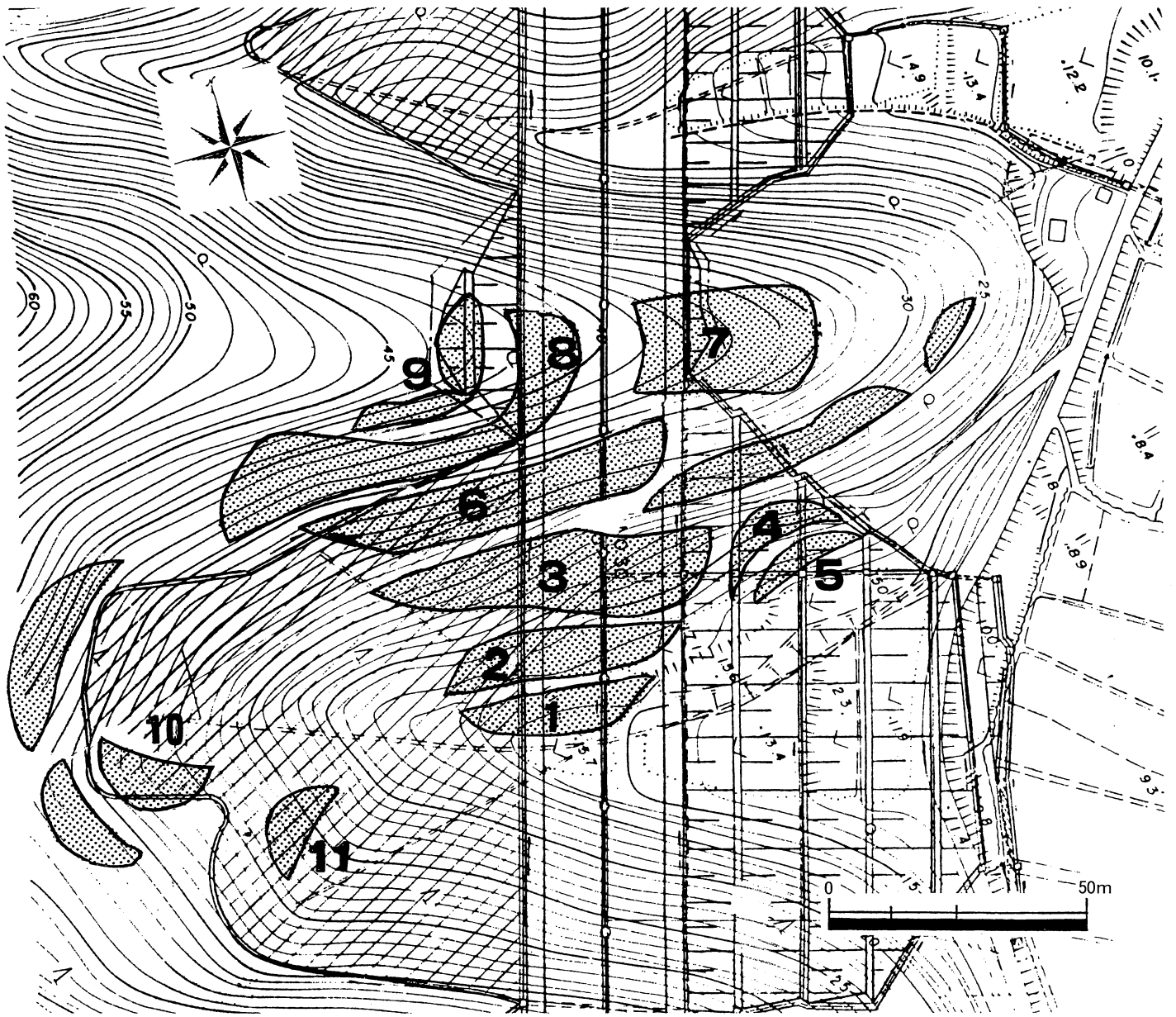
土師器は各テラスから出土しており、坏皿類、甕が多く出土している。坏皿類の中には赤色顔料を塗布したものが見られる (図録11、12)。甕には口縁が「く」字状に外反するもの (279~281)、ゆるやかに外反するもの (282)、内傾した後、外反し、口縁端部が肥厚するもの (283、284)、短頸のもの (285、286) がある。287は胴部が球形を呈し、広口の口縁をもつ。288は長胴甕である。



挿図152 陰田広畑遺跡 調査地全体図



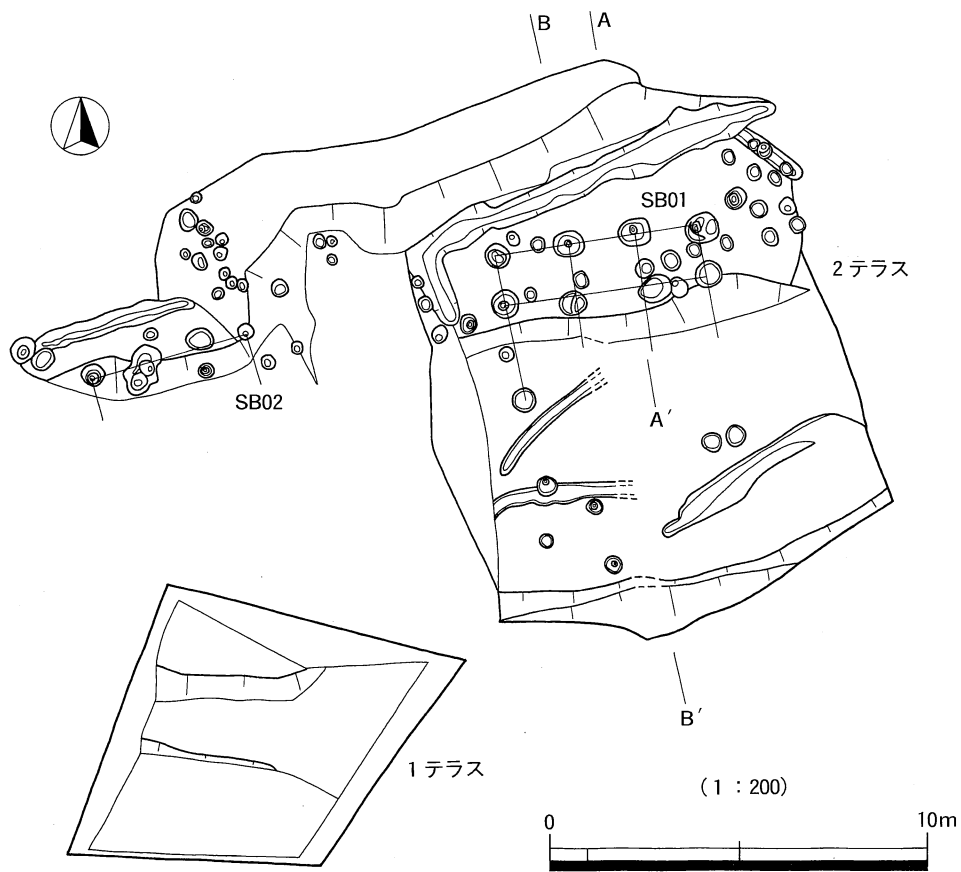
挿図153 陰田広畑遺跡 立地断面図



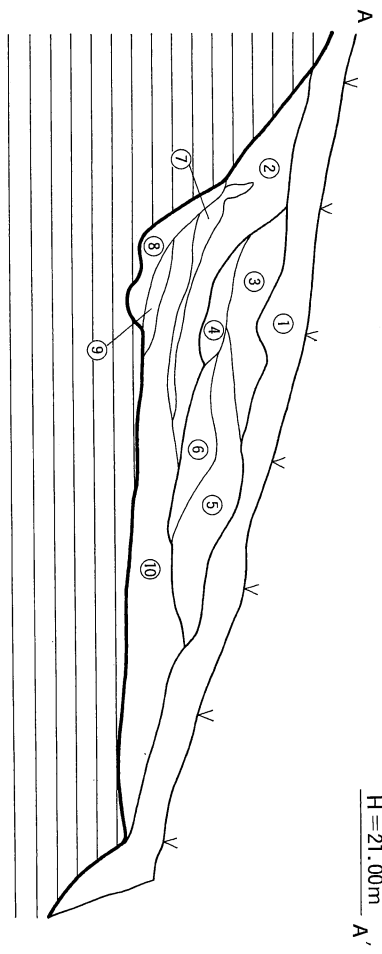
挿図154 陰田広畑遺跡 テラス配置図



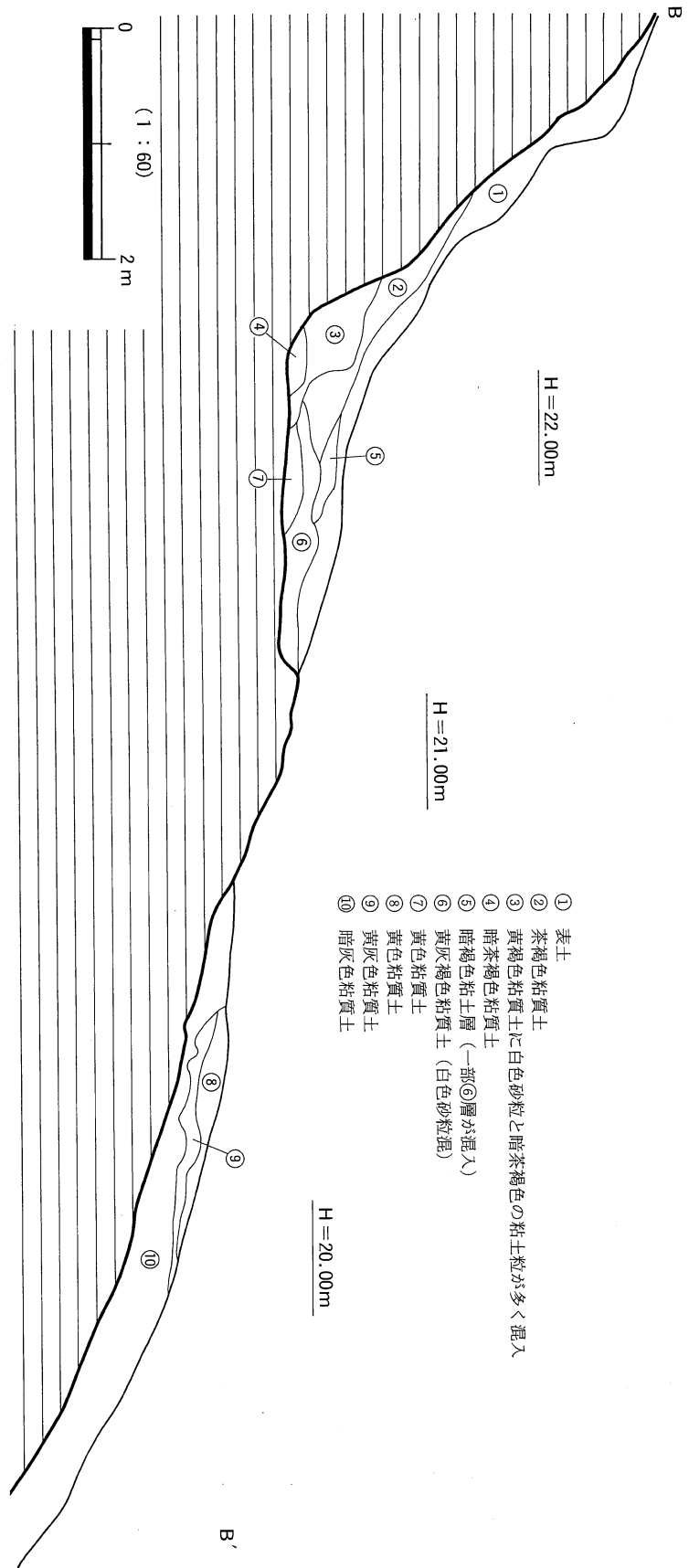
挿図155 陰田広畑遺跡 遺構分布図 (1~9テラス)



挿図156 陰田広畑遺跡 1・2テラス遺構分布図

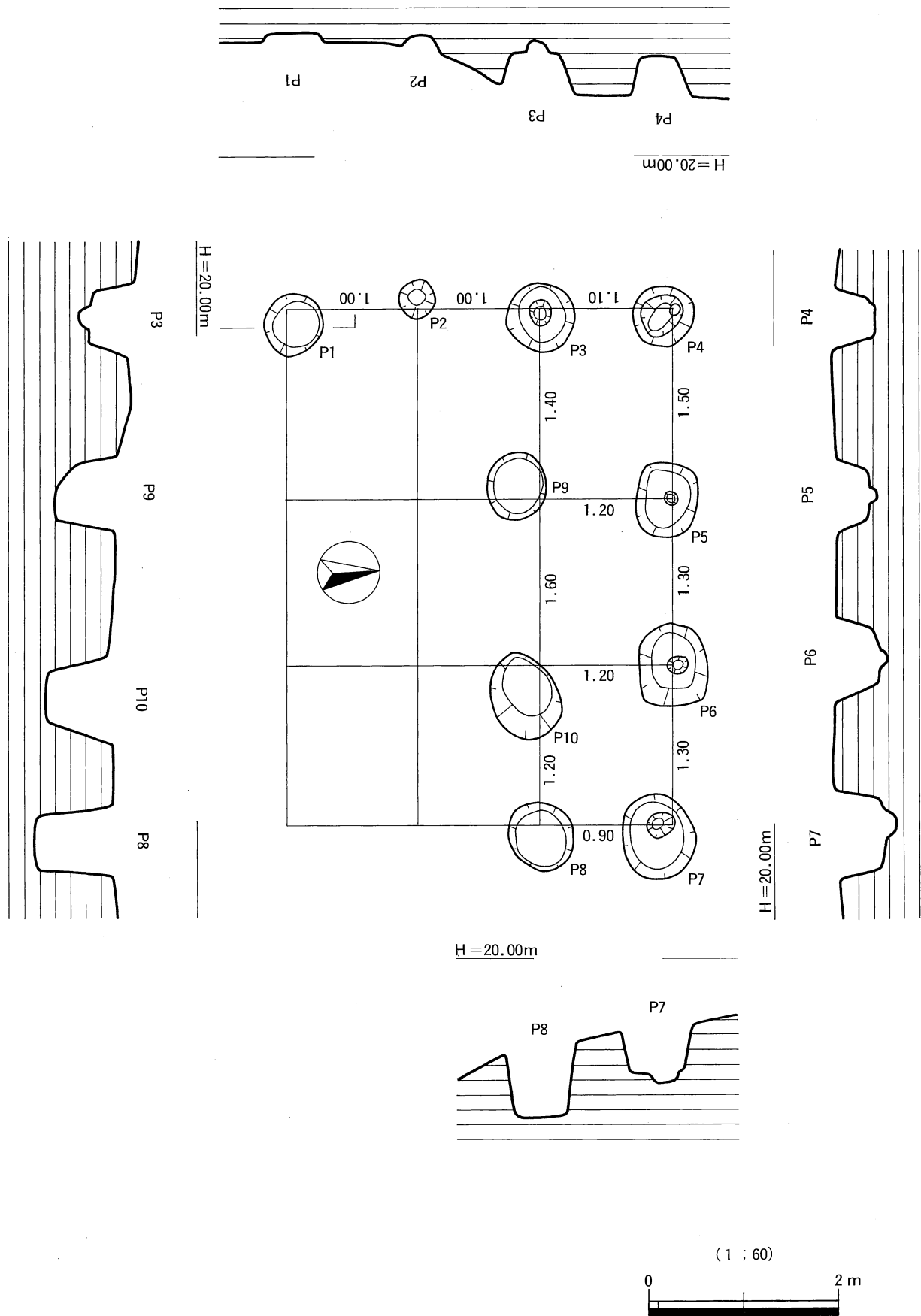


- ① 暗褐色土 (根の攪乱、焼土を含む)
- ② 赤色土 (焼土粒を含む、粒子細かい)
- ③ 赤茶褐色土 (小石を多く含む、黄色橙色のシルトを含む、焼土を少々含む)
- ④ 淡褐色土 (焼土、炭を含む、橙黄色のシルトを含む)
- ⑤ 褐色土 (焼土多く含む、砂質を含む)
- ⑥ 灰茶褐色土
- ⑦ 灰色土 (粘質、焼土、白色土を含む)
- ⑧ 灰褐色土 (黄色シルト、灰色粘土、焼土を含む、粘質)
- ⑨ 黄褐色土 (黄色の大粒の粘土の粒を多量に含む、焼土を含む)
- ⑩ 淡灰茶褐色土 (粒子は細かく砂質、焼土を含む、黄色シルトを含む)

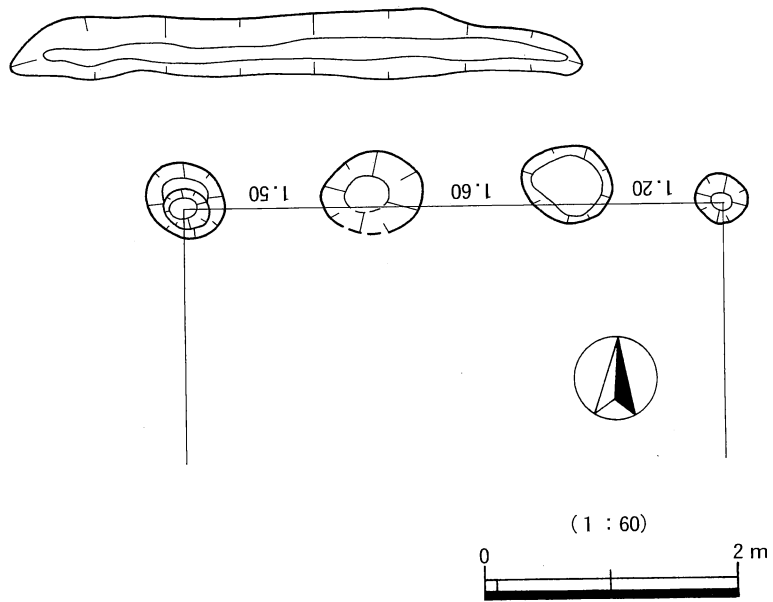


- ① 表土
- ② 茶褐色粘質土
- ③ 黄褐色粘質土に白色砂粒と暗茶褐色の粘土粒が多く混入
- ④ 暗茶褐色粘質土
- ⑤ 暗褐色粘土層 (一部⑥層が混入)
- ⑥ 黄灰褐色粘質土 (白色砂粒混)
- ⑦ 黄色粘質土
- ⑧ 黄色粘質土
- ⑨ 黄灰色粘質土
- ⑩ 暗灰色粘質土

挿図157 陰田広畑遺跡 2テラス土層図



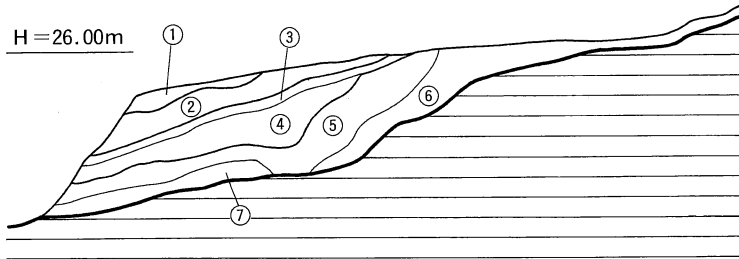
挿図158 陰田広畑遺跡 2テラスSB01遺構図



挿図159 陰田広畑遺跡 2テラスSB02遺構図



挿図160 陰田広畑遺跡 3テラス遺構分布図



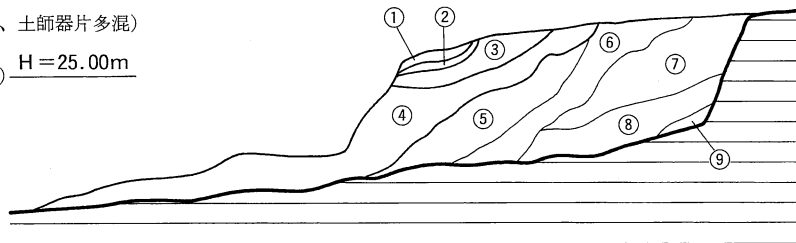
農道4ベルト

- ① 黄橙色粘質土 (盛土)
- ② 灰黄色粘質土
- ③ 黒色粘質土 (旧表土)
- ④ 茶褐色粘質土 (赤色岩ブロック混、炭混、土師器片多混)
- ⑤ 茶褐色粘質土
- ⑥ 黄橙色粘質土 (地山に比べ粘質性強)
- ⑦ 褐色粘質土

- ① 黄橙色粘質土 (盛土)
- ② 灰色粘質土
- ③ 灰茶褐色粘質土 (炭混、焼土混)
- ④ 茶褐色粘質土 (赤色岩ブロック混、炭混、土師器片多混)
- ⑤ 白茶褐色粘質土 (⑥に比べ遺物多混)
- ⑥ 白茶褐色粘質土 (炭混、地山ブロック混)
- ⑦ 茶褐色粘質土 (⑨が多混)
- ⑧ 茶褐色粘質土 (炭混)
- ⑨ 黄橙色粘質土

H = 26.00m

H = 25.00m

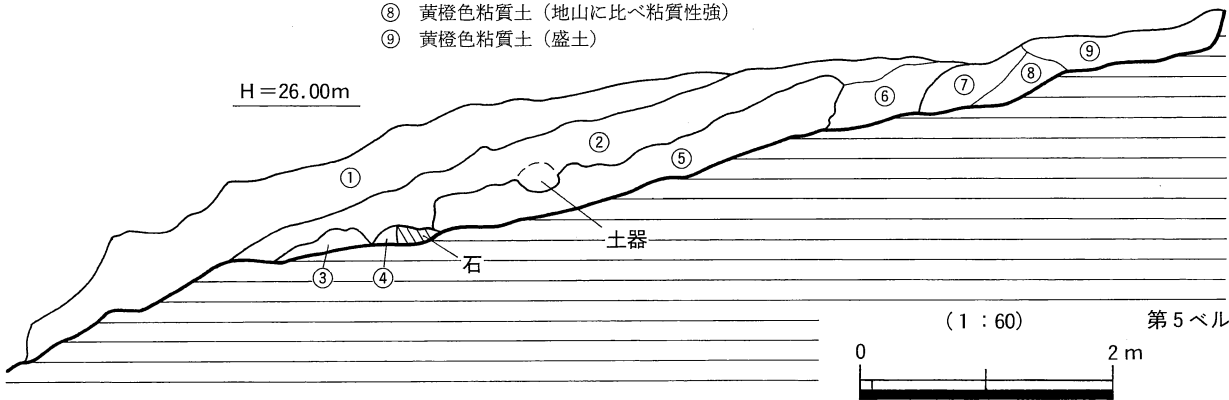


農道3ベルト

- ① 黄橙色粘質土 (盛土)
- ② 黒褐色粘質土 (炭、土師器片多混)
- ③ 茶褐色粘質土
- ④ 茶褐色粘質土
- ⑤ 茶褐色粘質土 (赤色岩ブロック混、炭混、土師器片多混)
- ⑥ 白茶褐色粘質土 (炭混、地山ブロック混)
- ⑦ 黄橙色粘質土 (盛土)
- ⑧ 黄橙色粘質土 (地山に比べ粘質性強)
- ⑨ 黄橙色粘質土 (盛土)

H = 27.00m

H = 26.00m



(1 : 60)

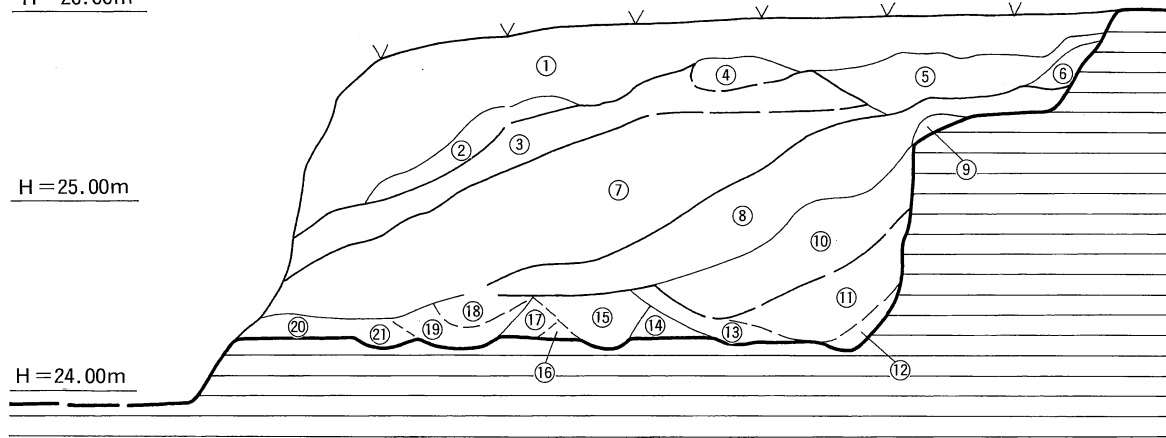
第5ベルト

挿図161 陰田広畑遺跡 3テラス土層図(1)

H = 26.00m

H = 25.00m

H = 24.00m

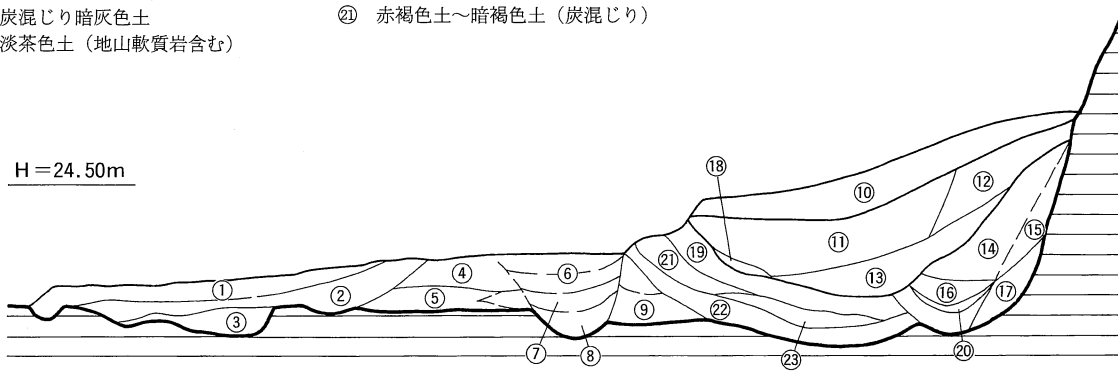


- | | |
|-----------------------|-----------------------|
| ① 灰黄褐色粘質土 (盛土) | ⑫ 暗黄褐色粘質土 |
| ② 黒褐色粘質土 | ⑬ 灰褐色土～淡茶褐色土 (炭混じり) |
| ③ 暗褐色土 (炭混じり、地山シルト含む) | ⑭ 暗褐色土 (上面炭含む、粘質) |
| ④ 赤褐色粘質土 (地山シルト含む) | ⑮ 暗褐色土 |
| ⑤ 赤褐色粘質土 (地山シルト含む) | ⑯ 地山混土 |
| ⑥ 赤色粘質岩 (地山) | ⑰ 赤褐色土 (軟岩含) |
| ⑦ 褐色粘質土 (地山ブロック、炭混じり) | ⑱ 灰黄褐色土 (やや砂質、炭含) |
| ⑧ 暗褐色粘質土 (炭多量に混じる) | ⑲ 灰褐色土～黒褐色土 (上部に炭混じる) |
| ⑨ 赤色粘質岩 (地山) | ⑳ 灰褐色土～暗褐色土 (炭混じり) |
| ⑩ 炭混じり暗灰色土 | ㉑ 赤褐色土～暗褐色土 (炭混じり) |
| ⑪ 淡茶色土 (地山軟質岩含む) | |

(1 : 40)



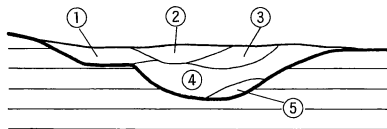
H = 24.50m



- | | | | |
|---------------------|----------------------|--------------------|-----------------------|
| ① 淡黄褐色土 (砂粒含) | ⑪ 灰色粘質シルト | ⑳ 暗褐色土 (地山ブロック混じり) | ① 暗褐色粘質土 (地山ブロックを含む) |
| ② 褐色粘質土 (小砂粒を若干含む) | ⑫ 灰色粘質シルト | ㉑ 暗褐色土 | ② 灰白褐色シルト |
| ③ 赤褐色粘質土 (小砂粒を若干含む) | ⑬ 灰黄色土 (下にうすく鉄分混じる) | ㉒ 白～肌色粘質土 (炭を若干含む) | ③ 灰白色シルト |
| ④ 灰褐色土 | ⑭ 淡褐色土 (鉄分混じる) | | ④ 灰茶色シルト |
| ⑤ 小粒含暗灰褐色土 | ⑮ 淡褐色土 | | ⑤ 黒灰褐色粘質土 (地山ブロックを含む) |
| ⑥ 灰褐色土 | ⑯ 灰白～淡黄褐色粘土 (下部に炭含む) | | ⑥ 暗灰褐色粘質土 |
| ⑦ 暗褐色土 | ⑰ 黄褐色土 | | ⑦ 暗褐色粘質土 (炭を若干含む) |
| ⑧ 灰褐色粘質土 | ⑱ 灰黄色土 | | ⑧ 淡茶色粘質土 |
| ⑨ 暗褐色土 (上部に炭含む) | ⑲ 暗灰色粘質土 (鉄分混じる) | | |
| ⑩ 黄灰色地山ブロック | ⑳ 暗灰色粘質土 (⑲より軟質) | | |

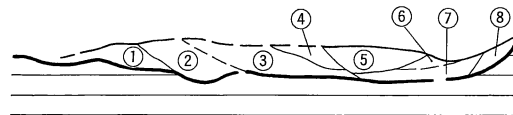
H = 24.50m

H = 24.50m



SD06(B)

- | |
|------------------|
| ① 淡褐色粘質土 |
| ② 暗灰褐色粘質土 (炭を含む) |
| ③ 淡白黄色粘質土 |
| ④ 暗灰褐色粘質土 |
| ⑤ 淡褐色粘質土 |

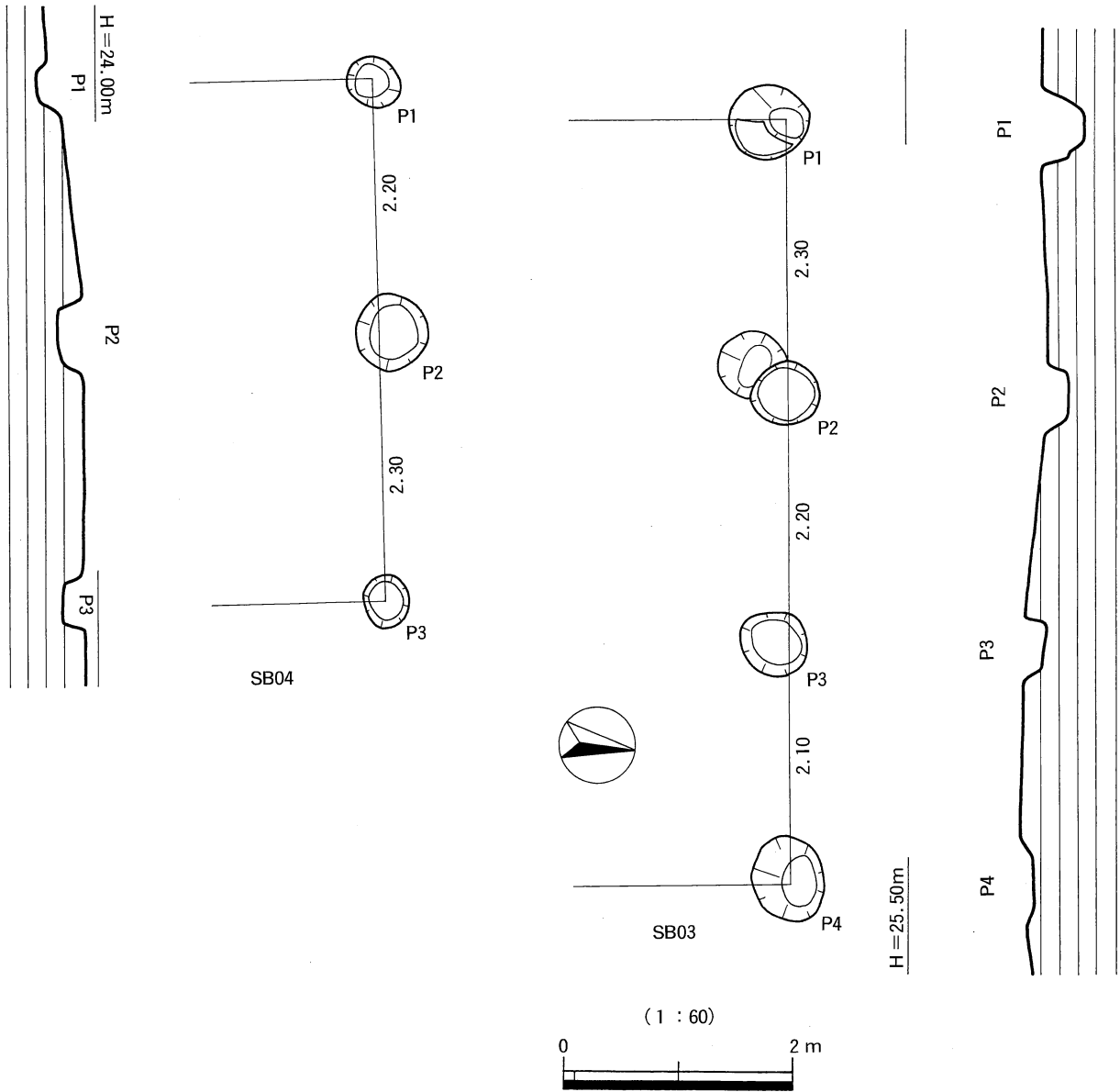


SD06(C)

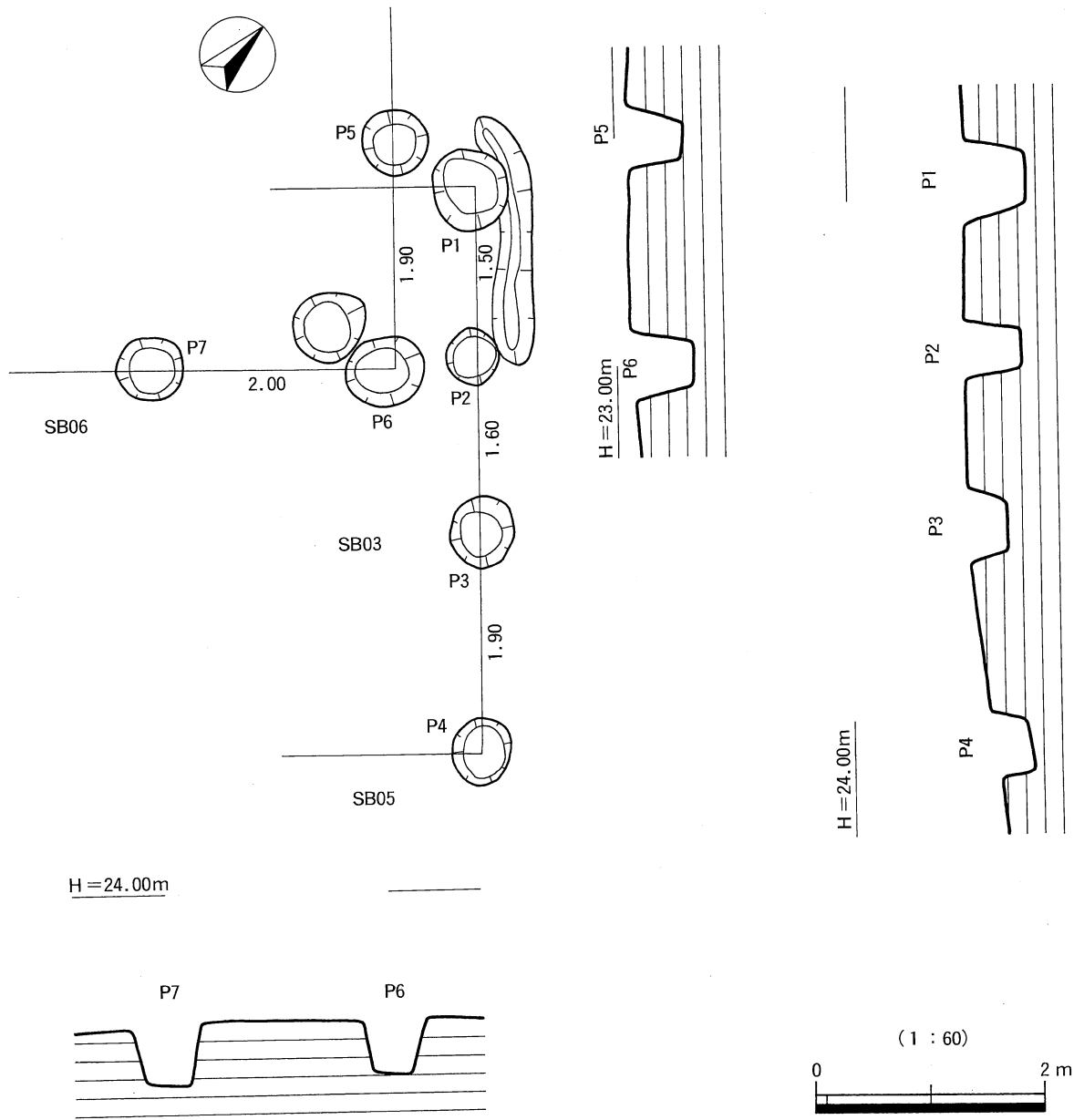
(1 : 20)



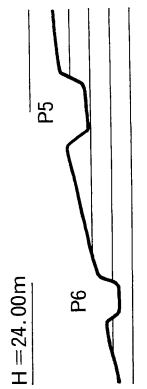
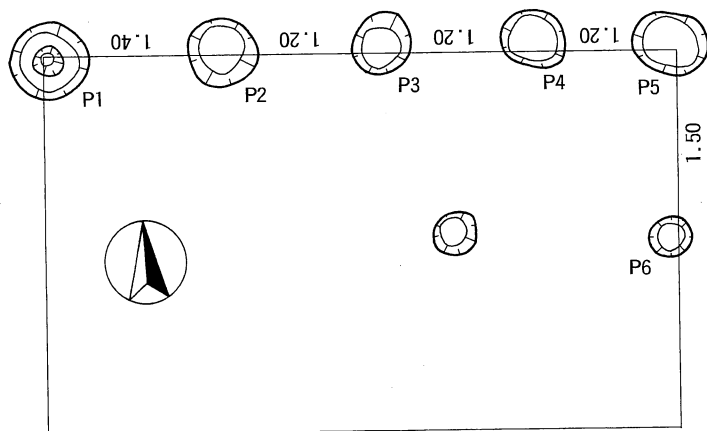
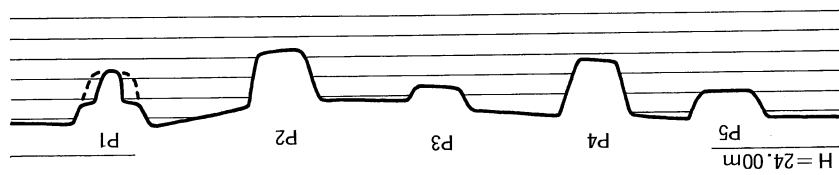
挿図162 陰田広畑遺跡 3テラス土層断面図 (2)



挿図163 陰田広畑遺跡 3テラスSB03・04遺構図



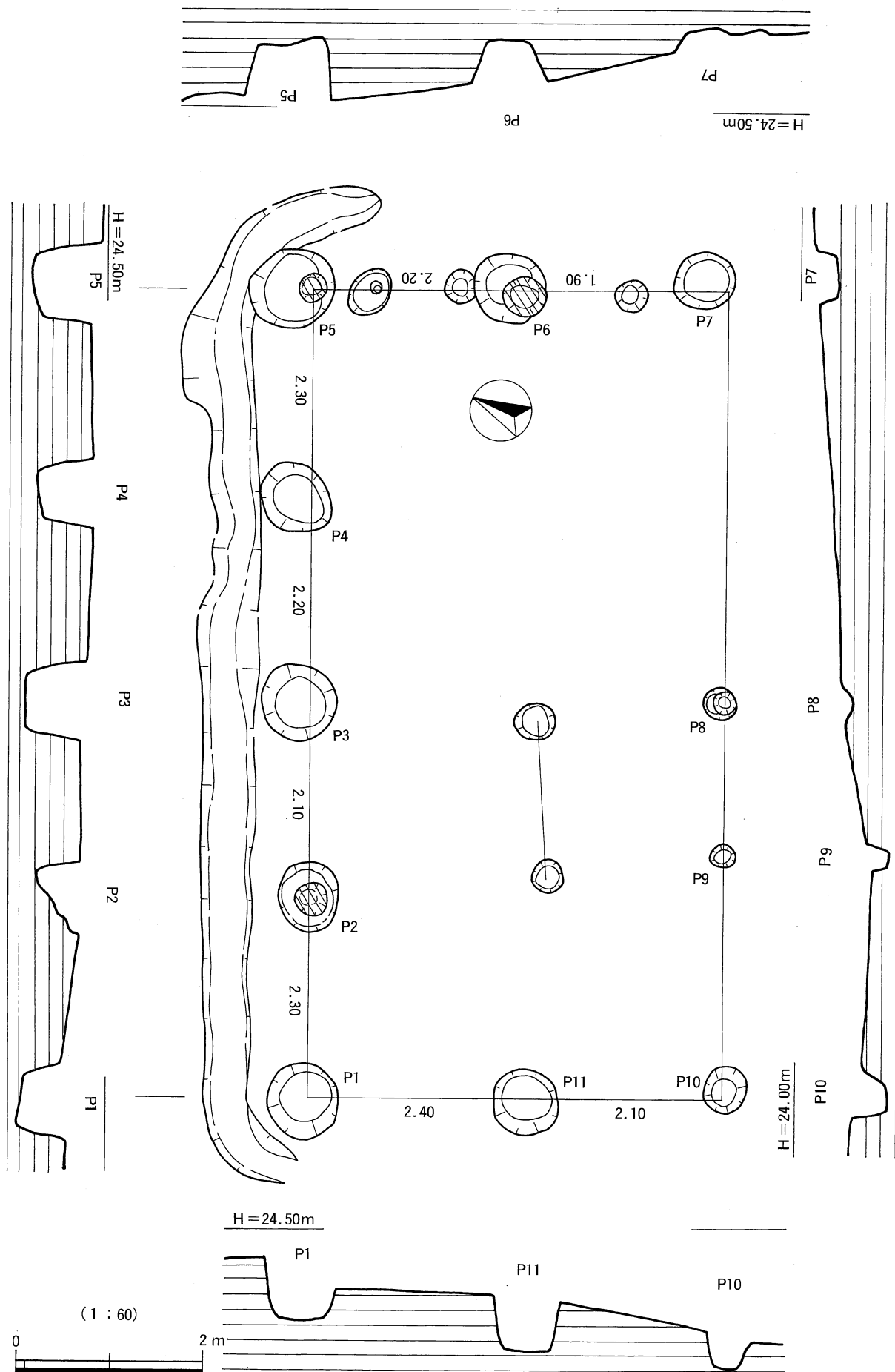
挿図164 陰田広畑遺跡 3テラスSB05・06遺構図



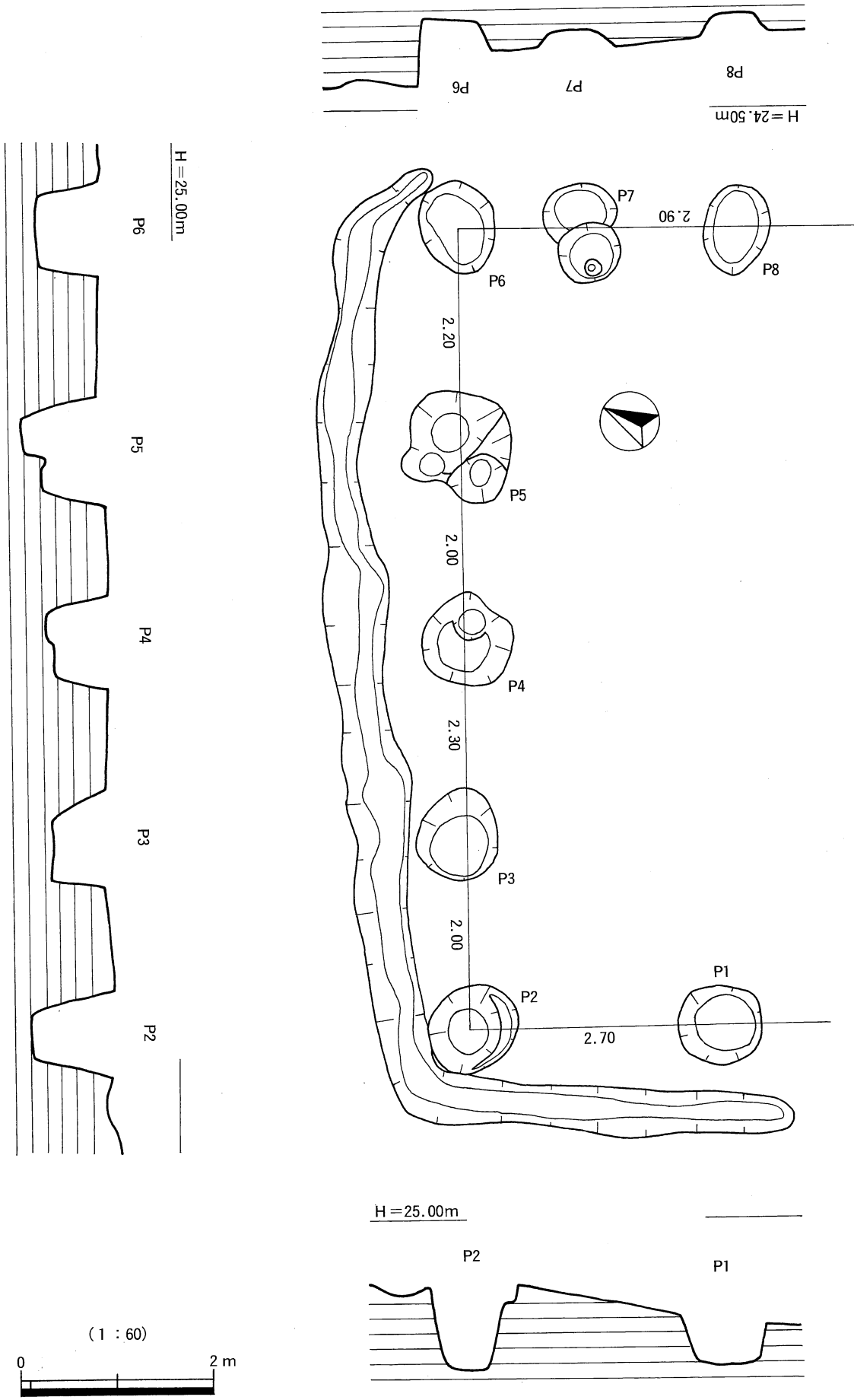
(1 : 60)



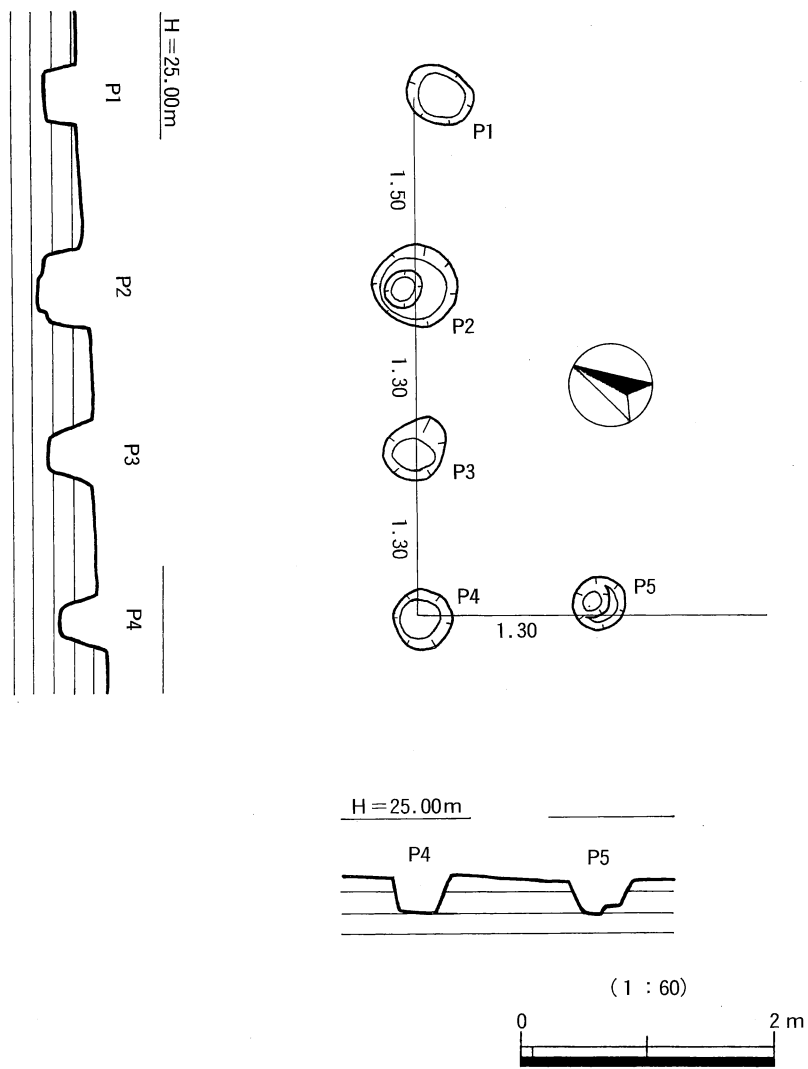
挿図165 陰田広畑遺跡 3テラスSB07遺構図



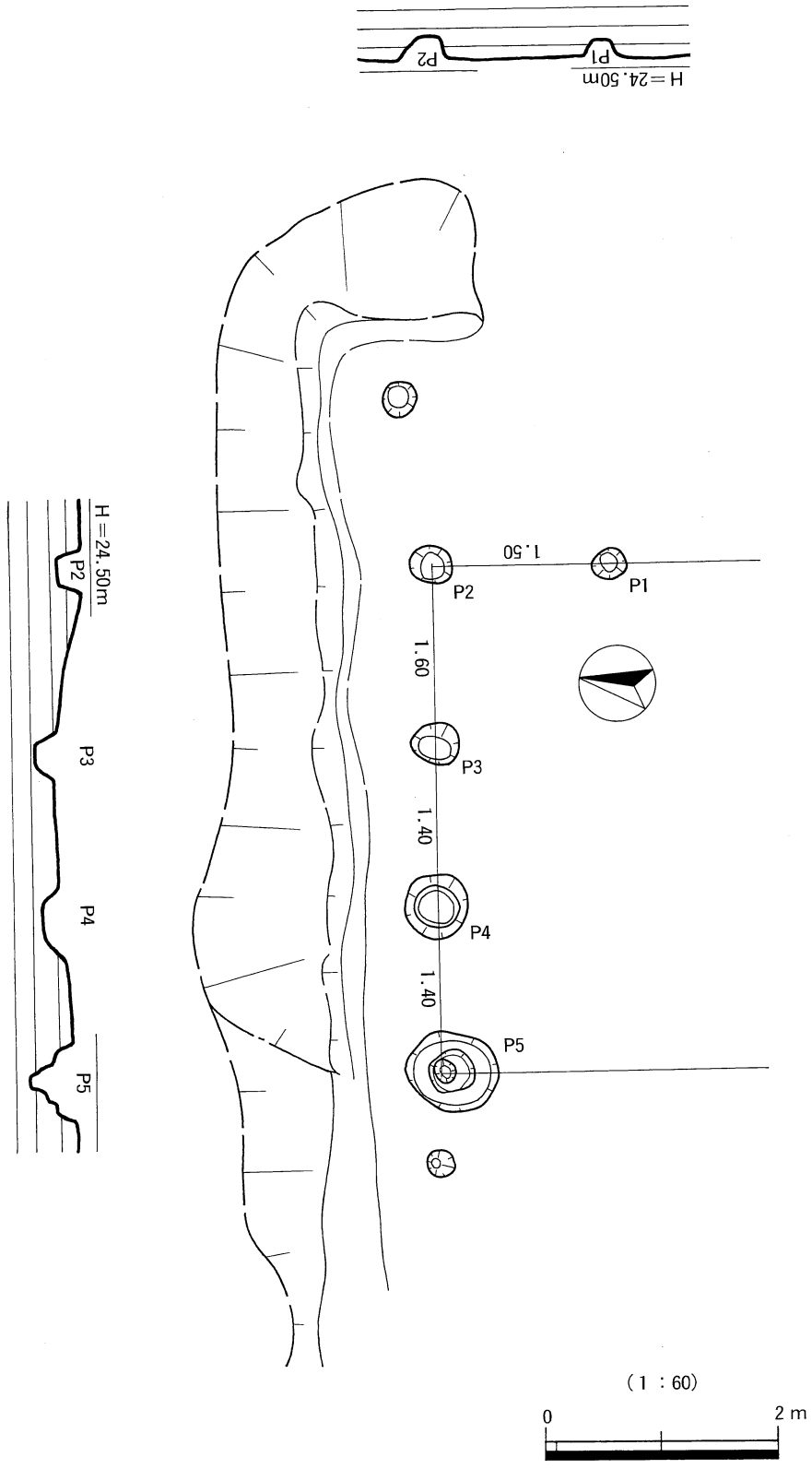
挿図166 陰田広畑遺跡 3テラスSB08遺構図



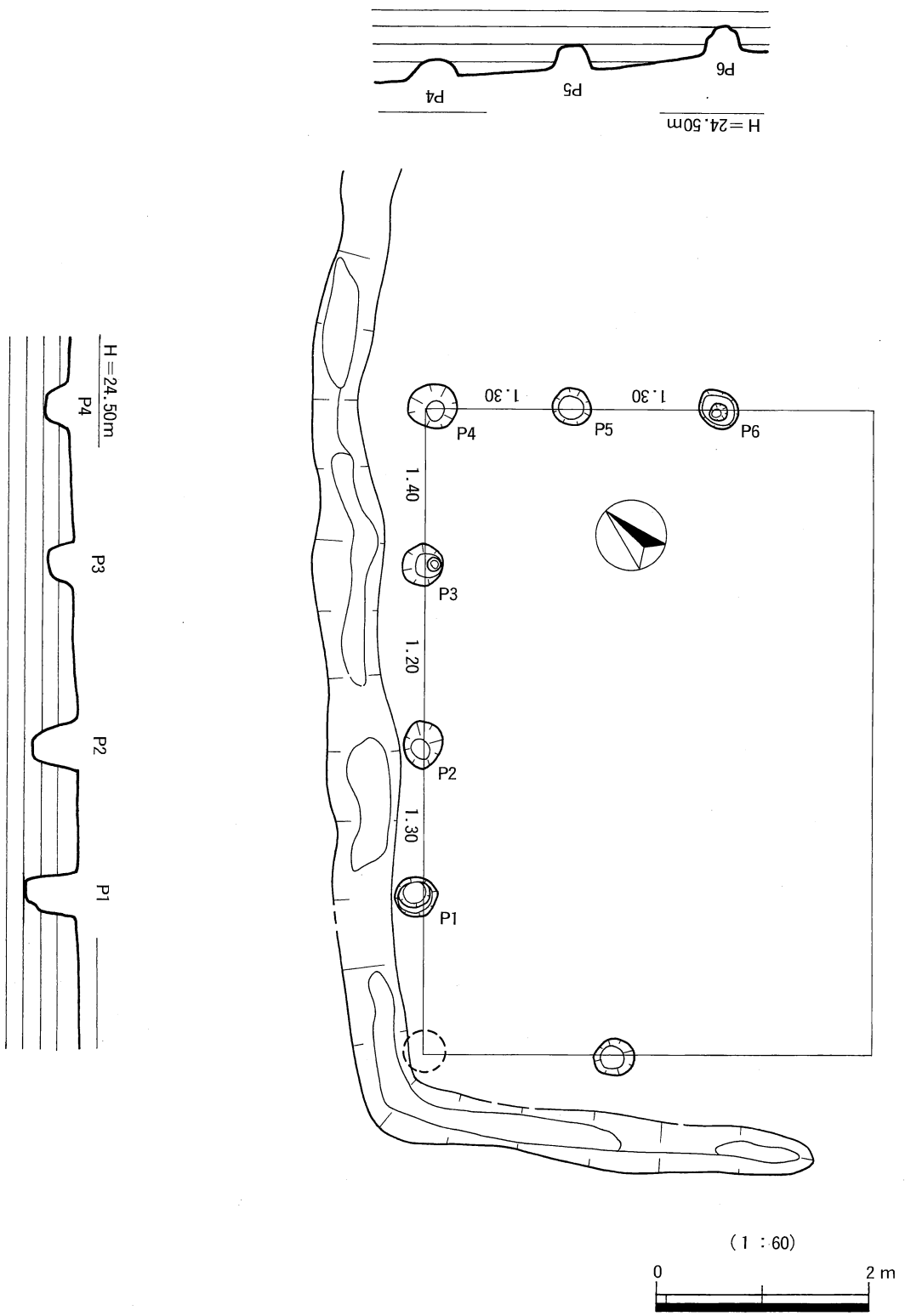
挿図167 陰田広畑遺跡 3テラスSB09遺構図



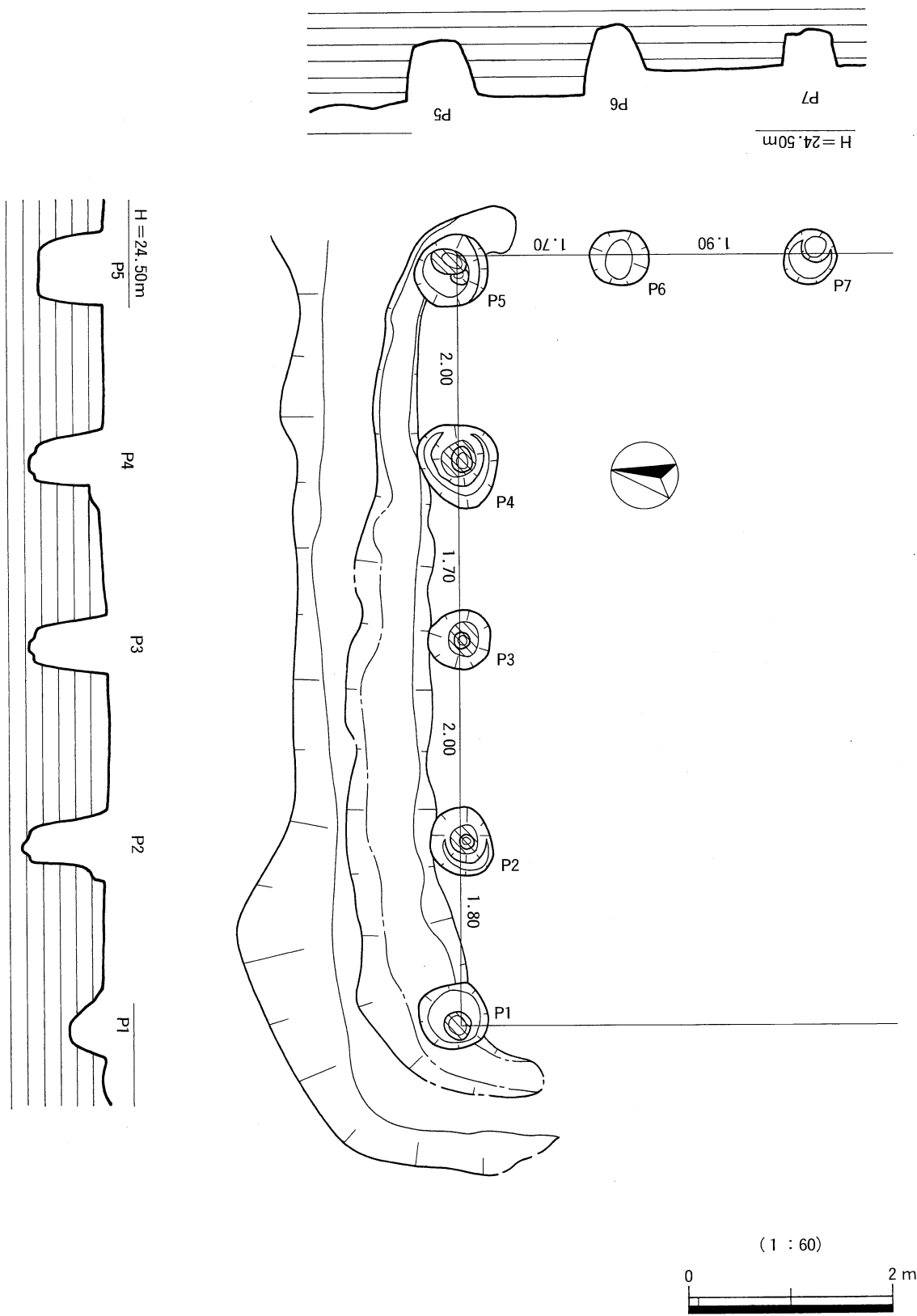
挿図168 陰田広畑遺跡 3テラスSB10遺構図



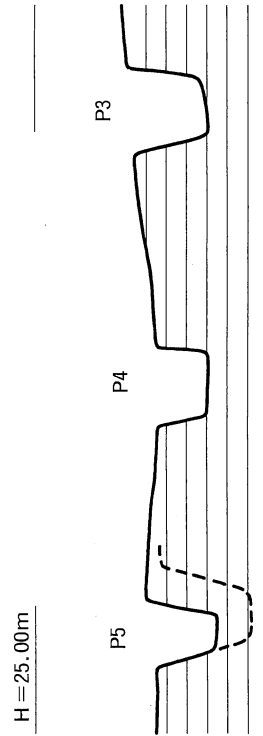
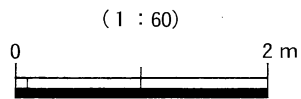
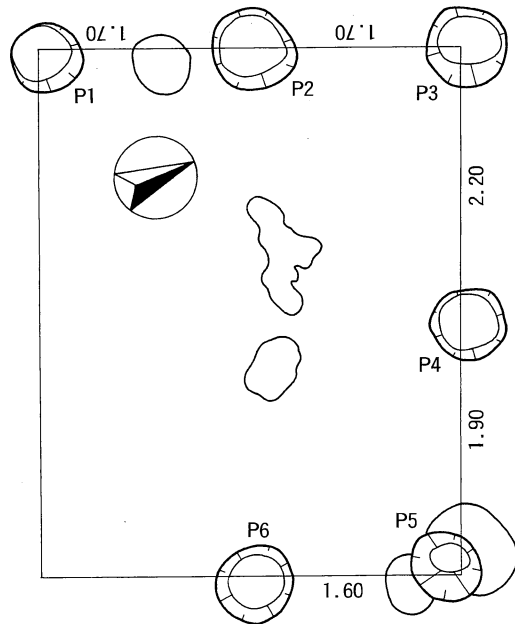
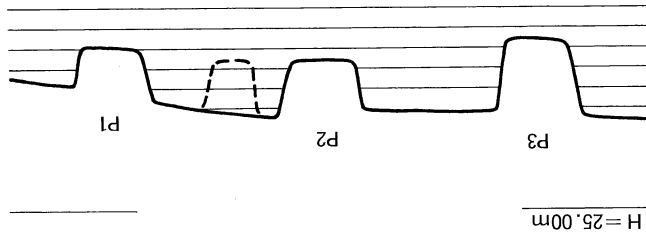
挿図169 陰田広畑遺跡 3テラスSB11遺構図



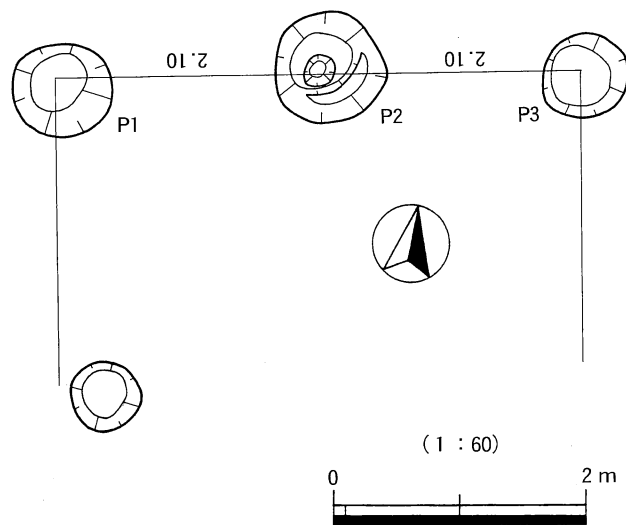
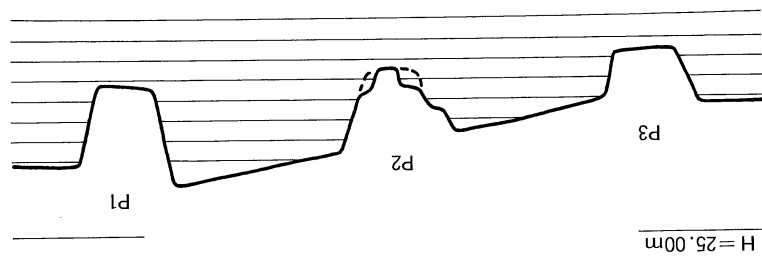
挿図170 陰田広畑遺跡 3テラスSB12遺構図



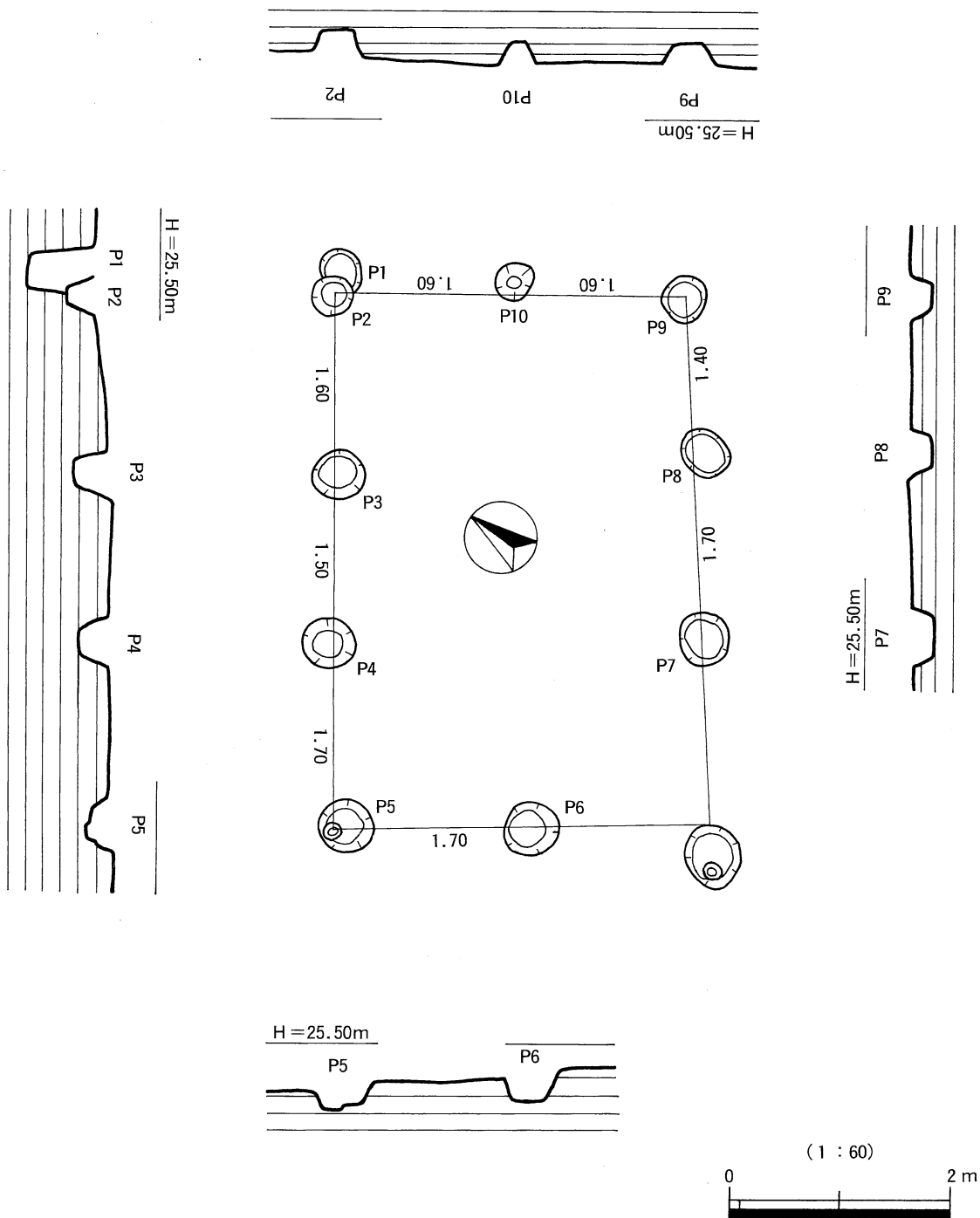
挿図171 陰田広畑遺跡 3テラスSB13遺構図



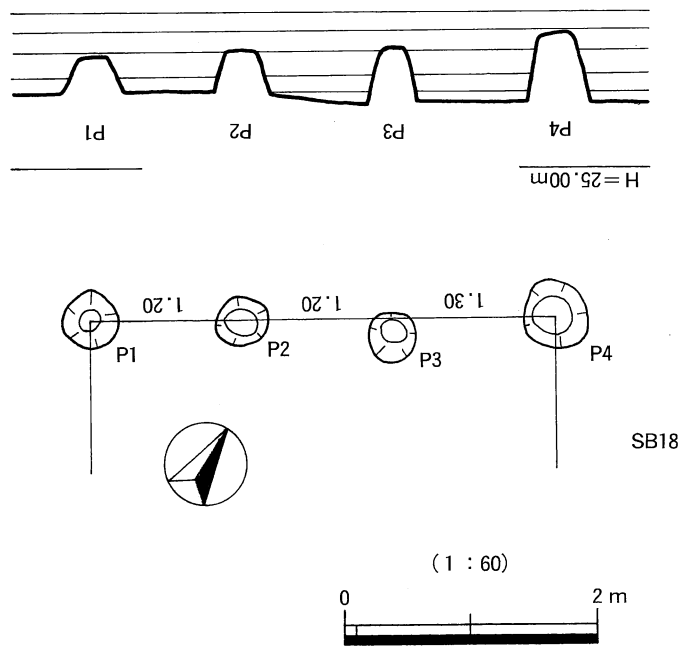
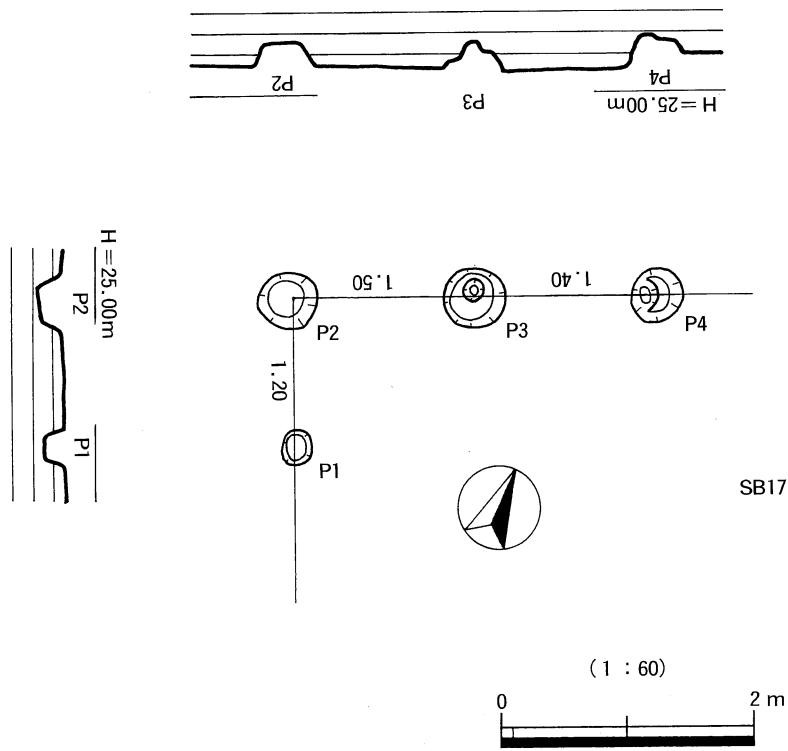
挿図172 陰田広畑遺跡 3テラスSB14遺構図



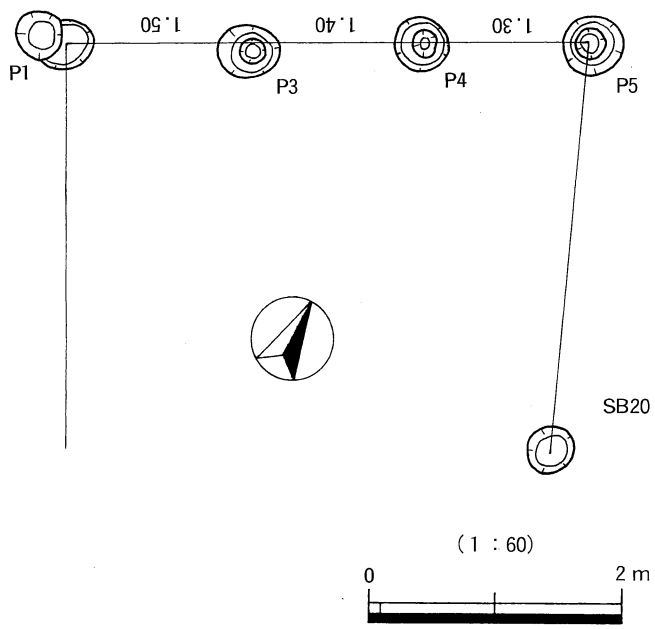
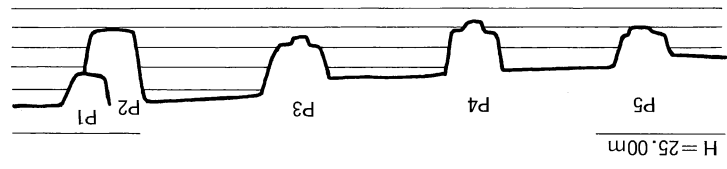
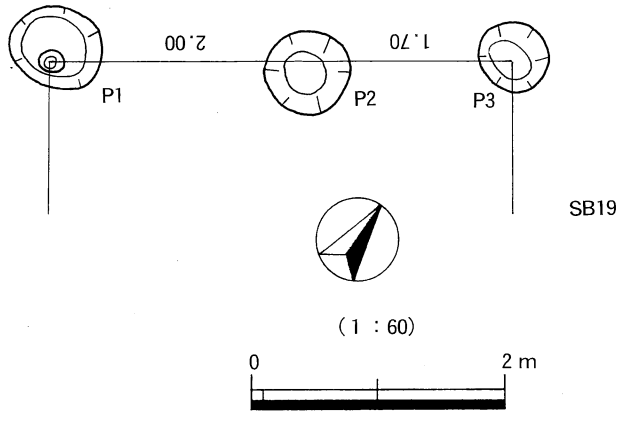
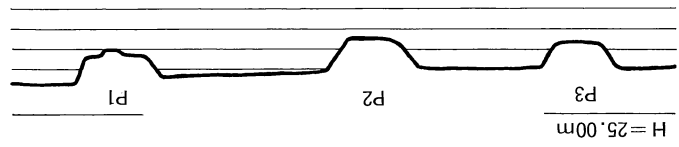
挿図173 陰田広畑遺跡 3テラスSB15遺構図



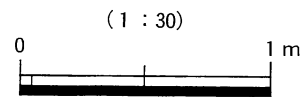
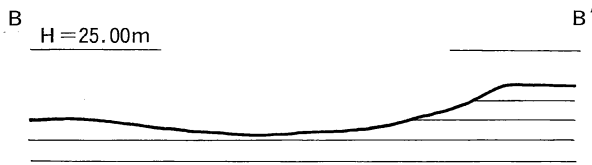
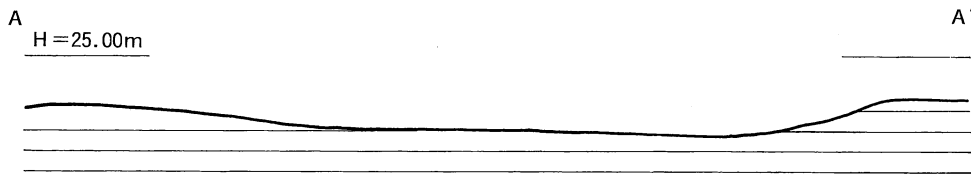
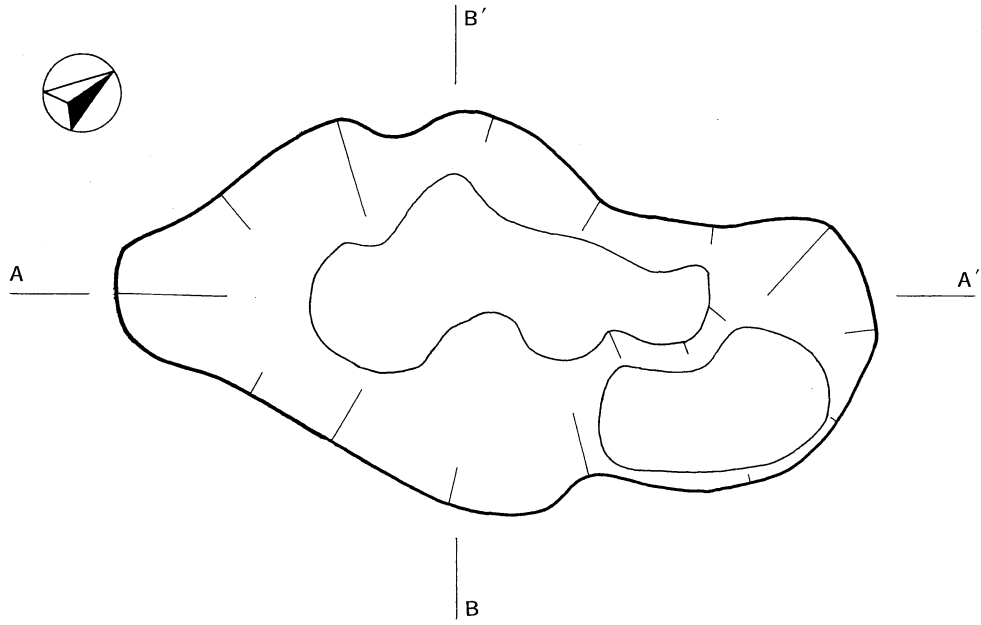
挿図174 陰田広畑遺跡 3テラスSB16遺構図



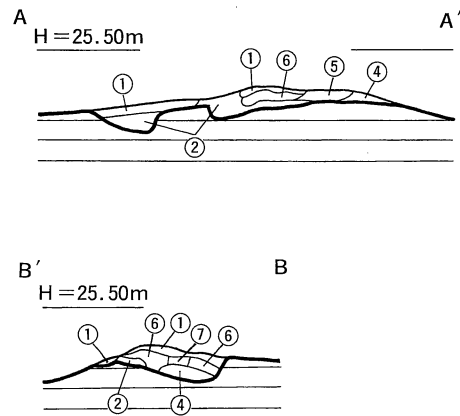
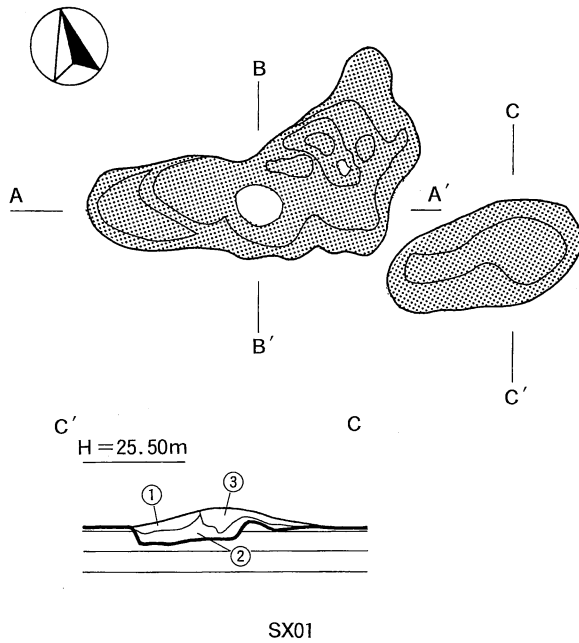
挿図175 陰田広畑遺跡 3テラスSB17・18遺構図



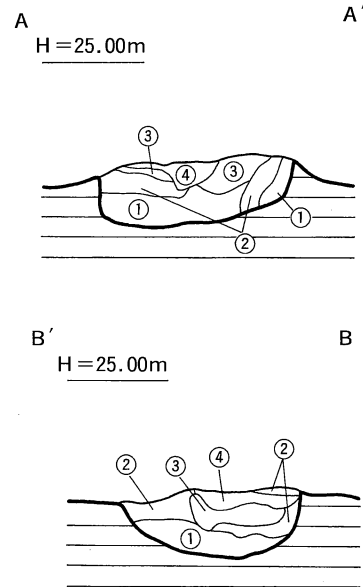
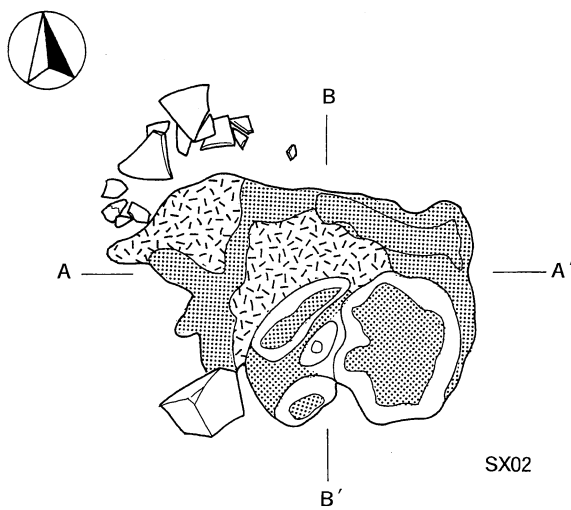
挿図176 陰田広畑遺跡 3テラスSB19・20遺構図



挿図177 陰田広畑遺跡 3テラスSK01遺構図



- ① 白黄茶色粘質土 (火を受け固くしまる)
- ② 暗黄茶褐色粘質土 (地山ブロックを含む)
- ③ 黄茶褐色粘質土
- ④ 赤黄褐色粘質土 (火を受ける)
- ⑤ 暗赤黄褐色粘質土 (火を受ける)
- ⑥ 暗黒茶褐色粘質土
- ⑦ 灰色粘質土 (炭混)



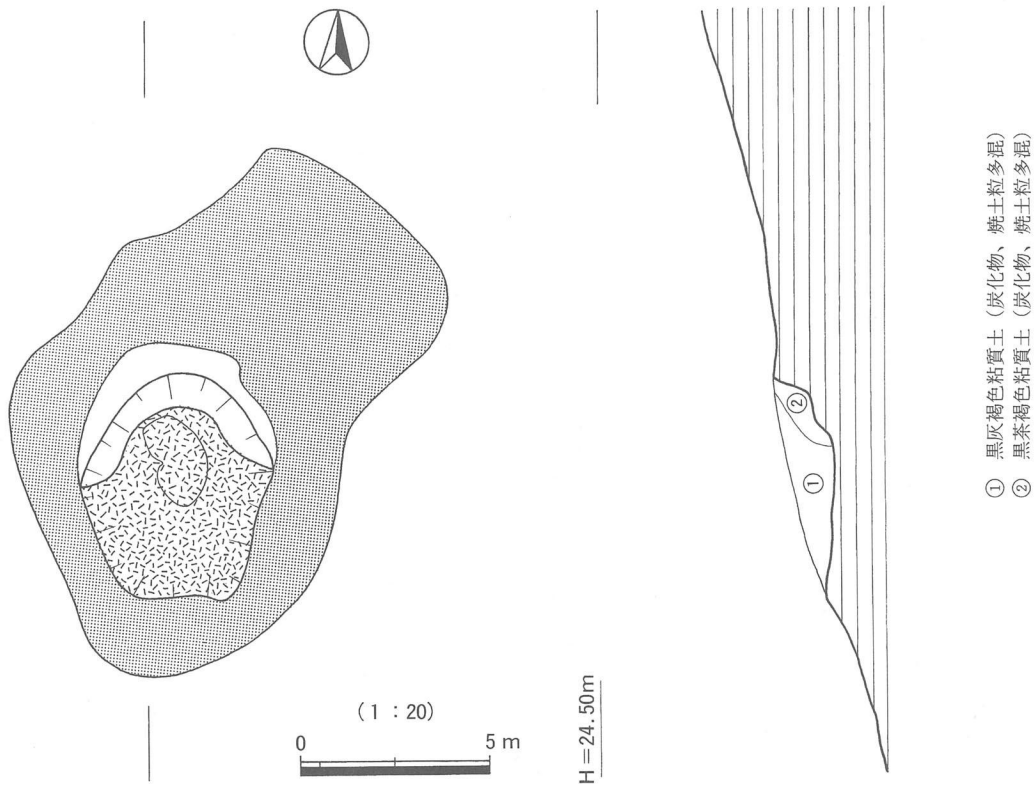
- 白く焼けたところ
- 赤く焼けたところ
- 黒く焼けたところ

- ① 暗黄茶褐色粘質土 (地山ブロックを含む)
- ② 黄茶褐色粘質土
- ③ 赤黄褐色粘質土 (火を受ける)
- ④ 白赤茶褐色粘質土

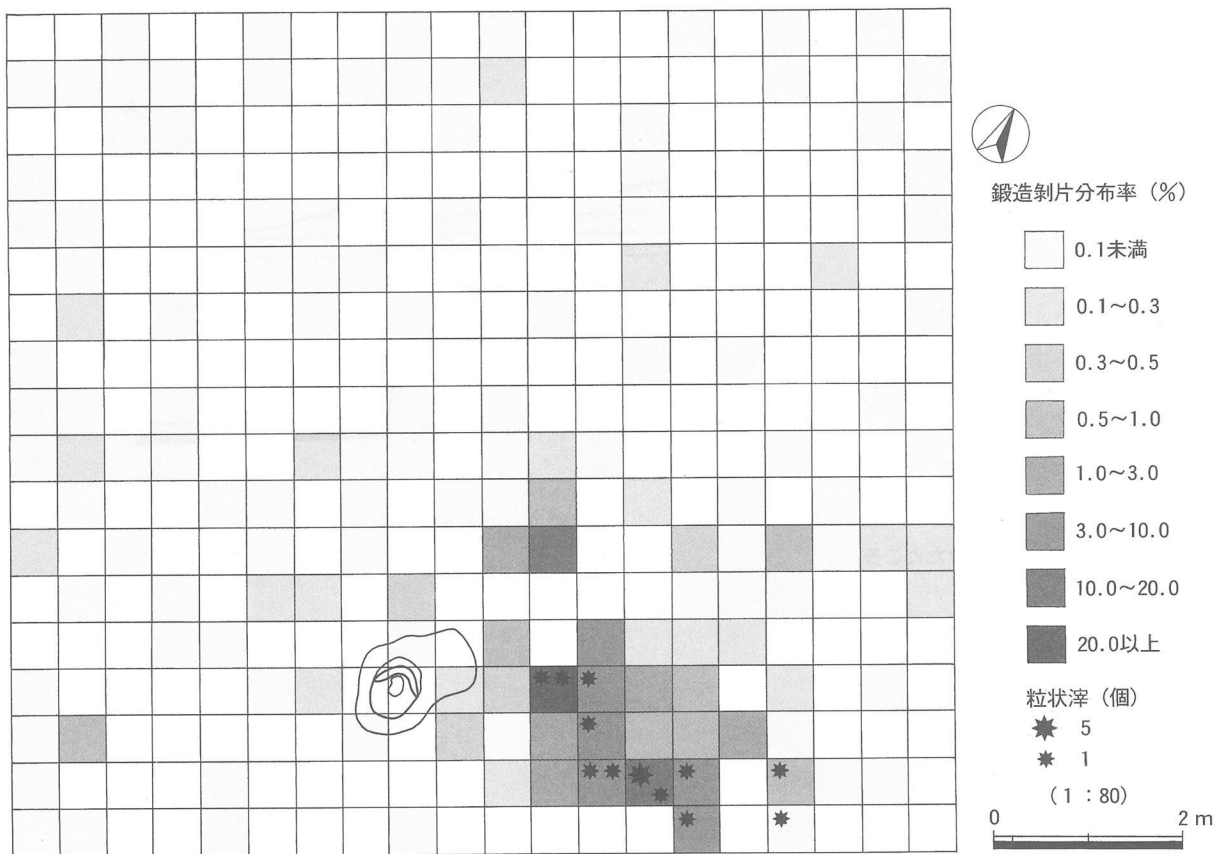
(1 : 30)



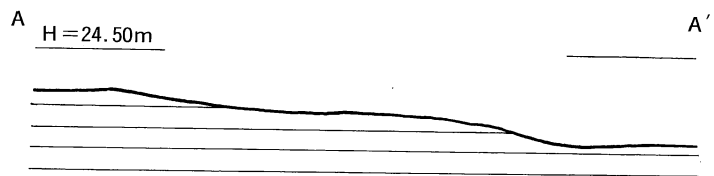
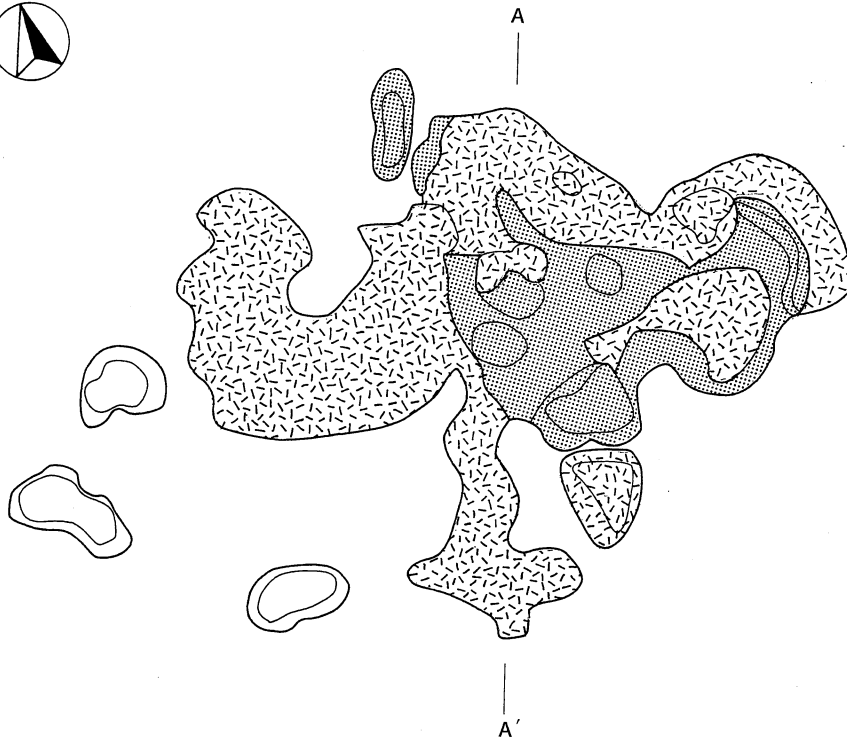
挿図178 陰田広畑遺跡 3テラスSX01・02遺構図



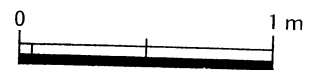
挿図179 陰田広畑遺跡 3テラスSX03遺構図





挿図180 陰田広畑遺跡 3テラスSX03周辺鍛造剥片・粒状率分布図



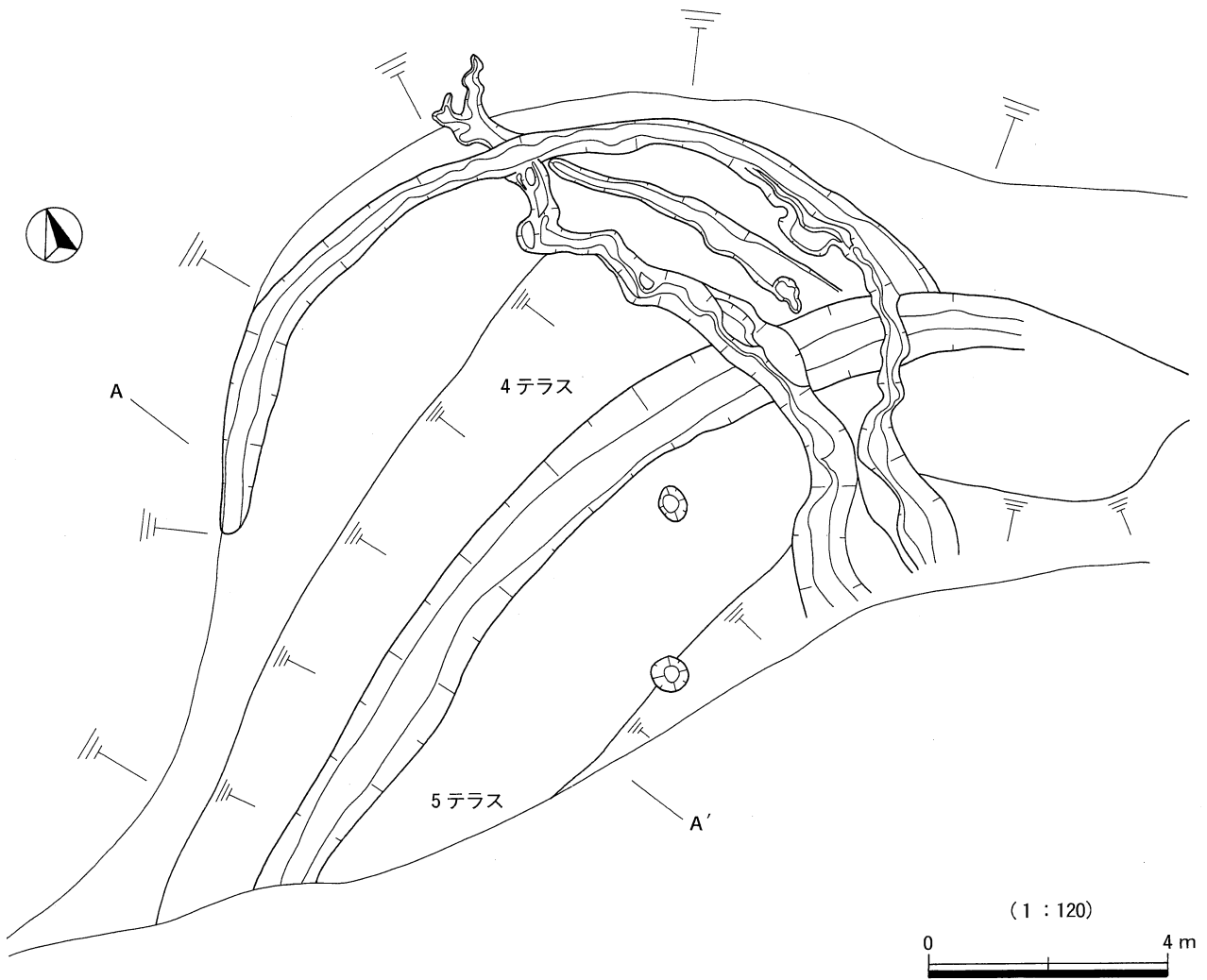
(1 : 30)



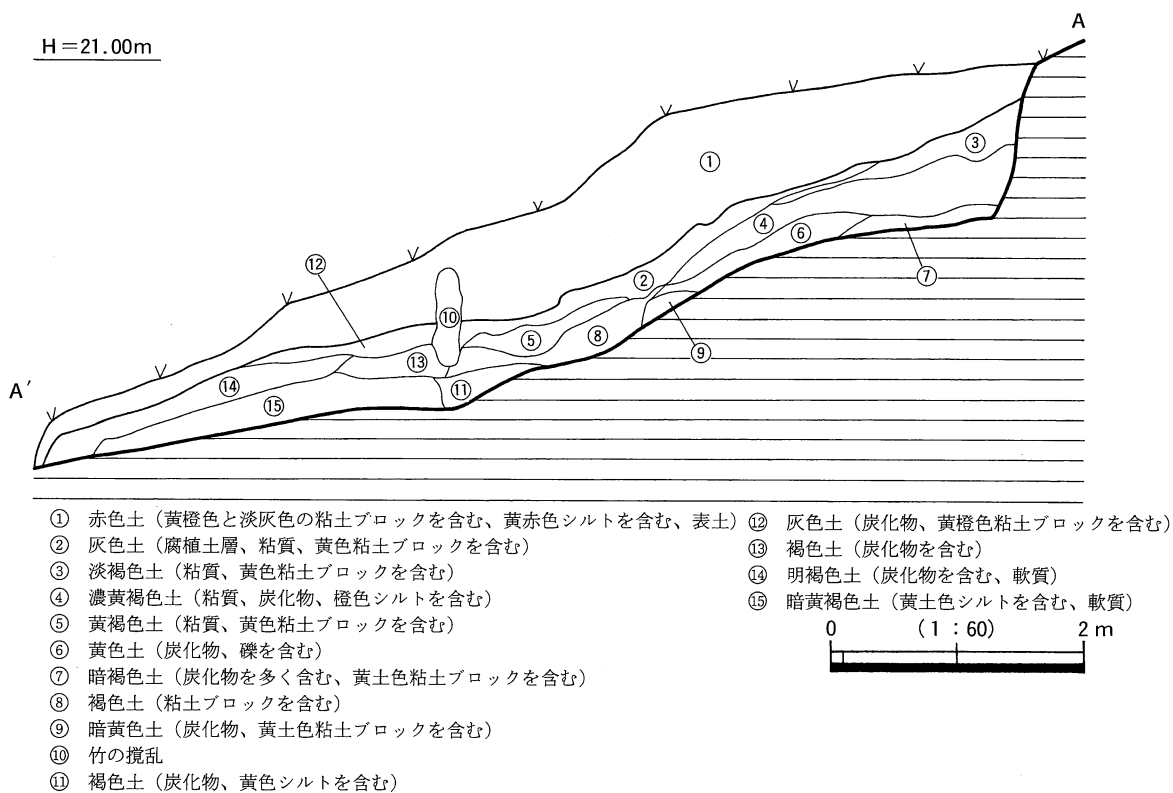
 赤く焼けたところ

 黒く焼けたところ

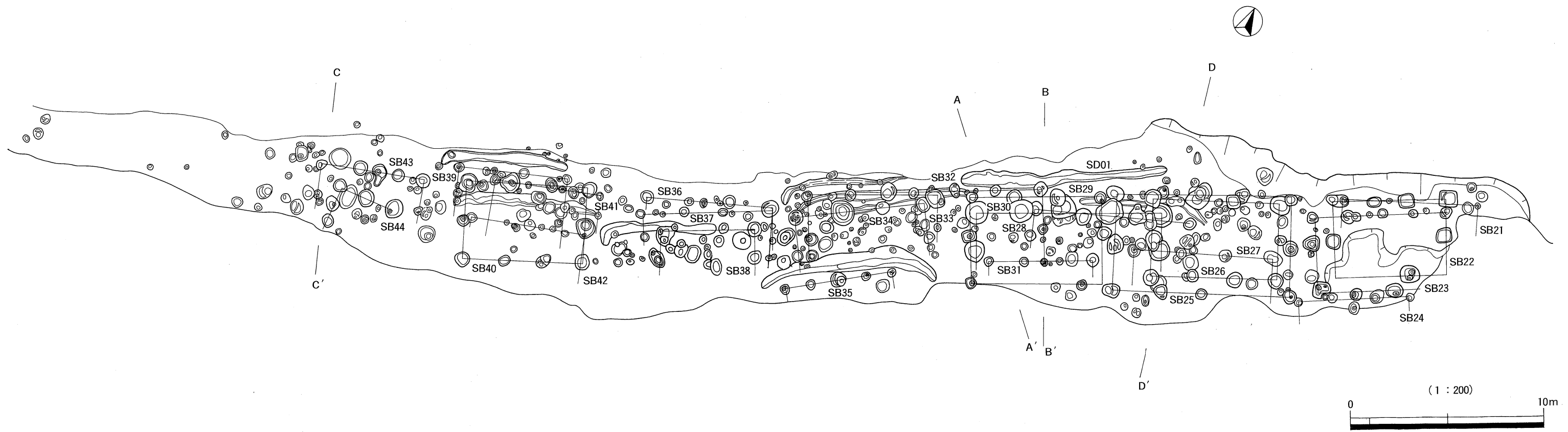
挿図181 陰田広畑遺跡 3テラスSX04遺構図



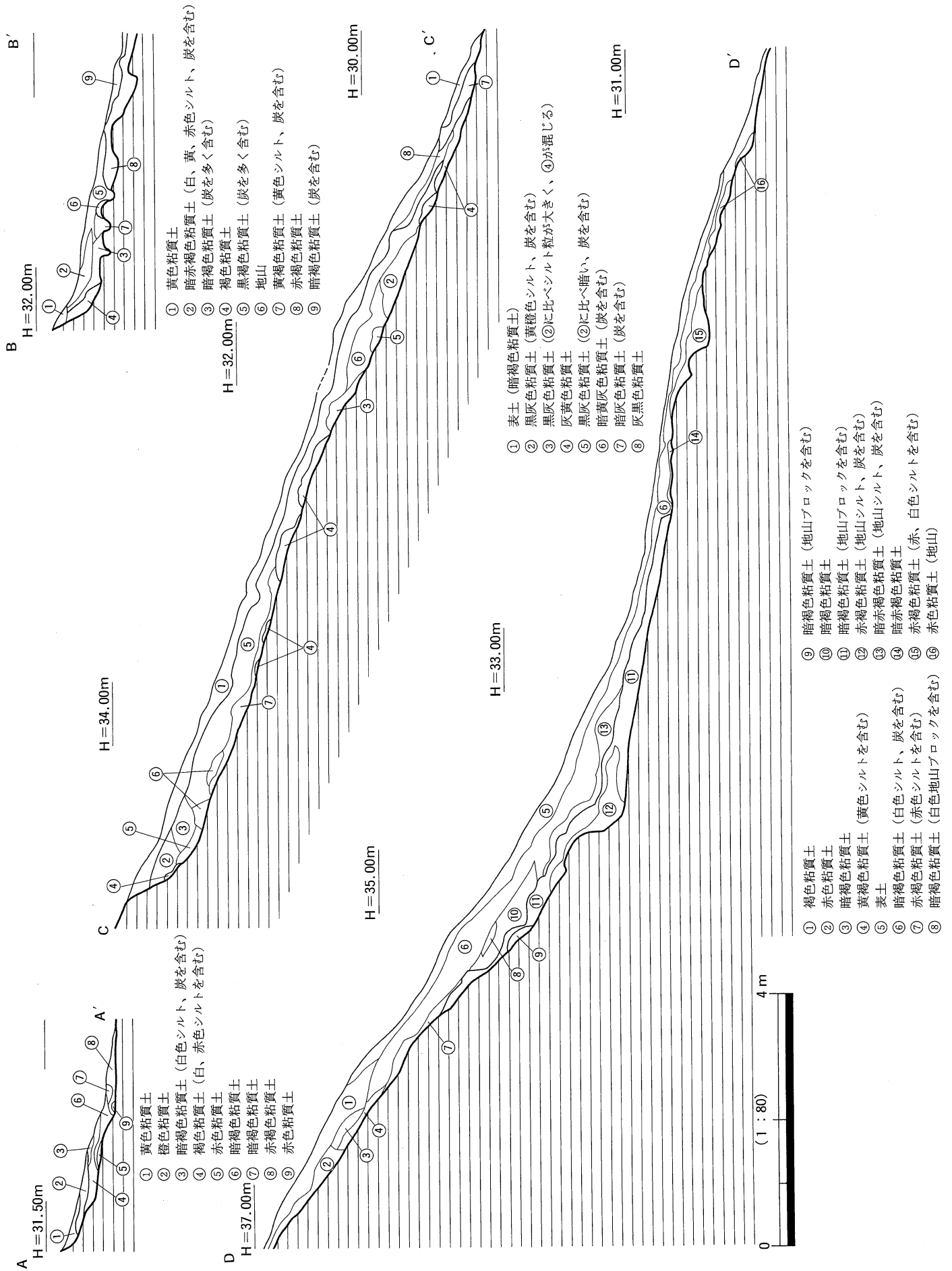
挿図182 陰田広畑遺跡 4・5テラス遺構分布図



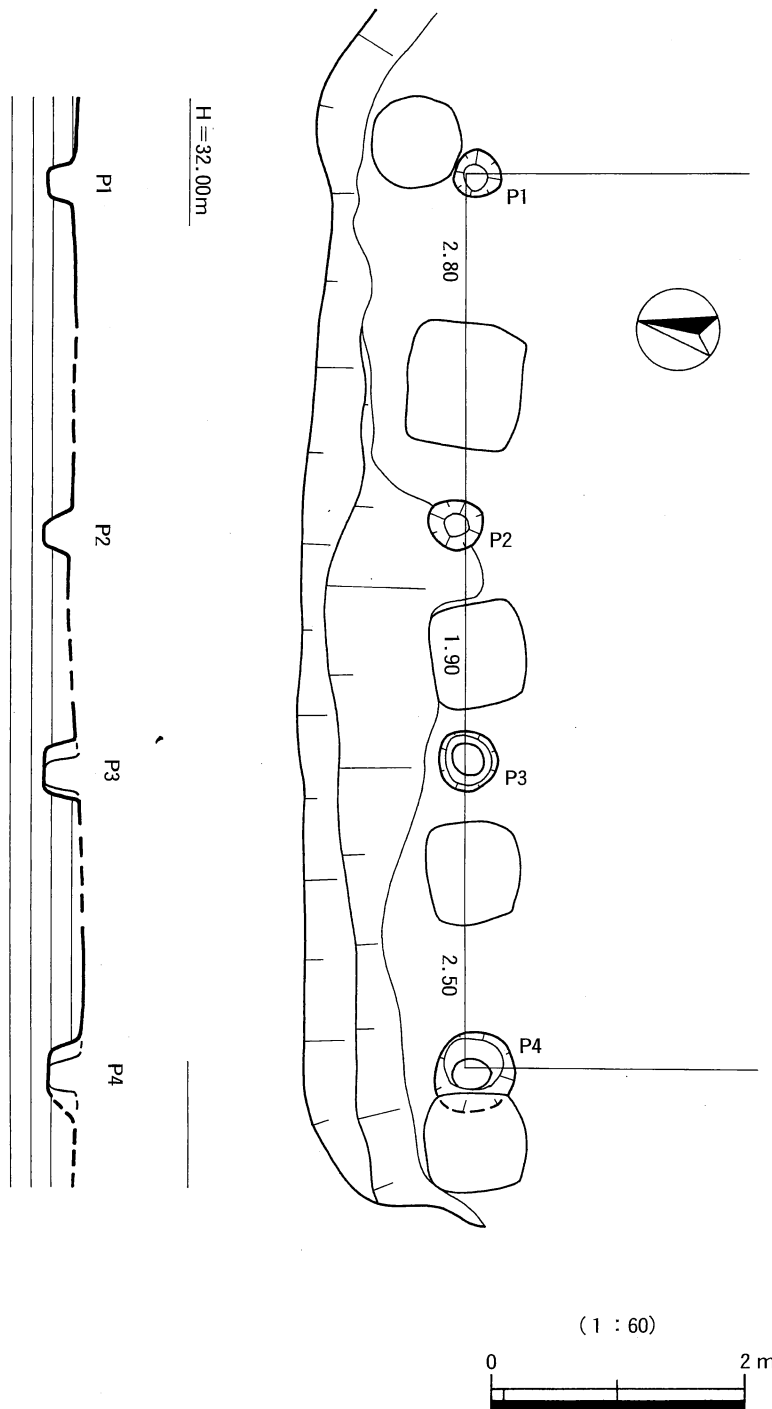
挿図183 陰田広畑遺跡 4・5テラス土層図



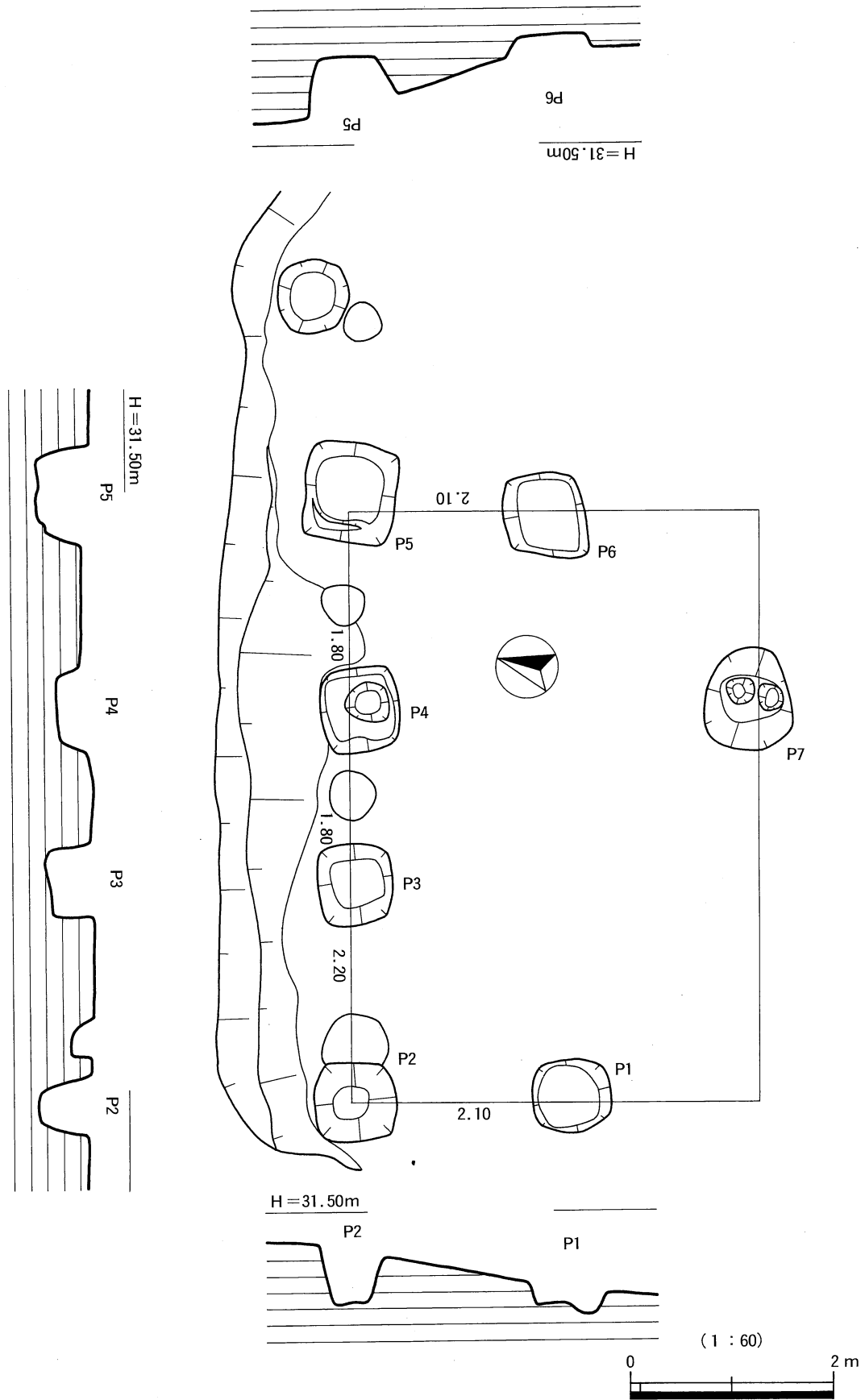
挿図184 陰田広畑遺跡 6テラス遺構分布図



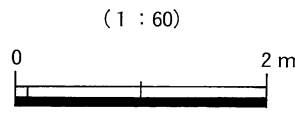
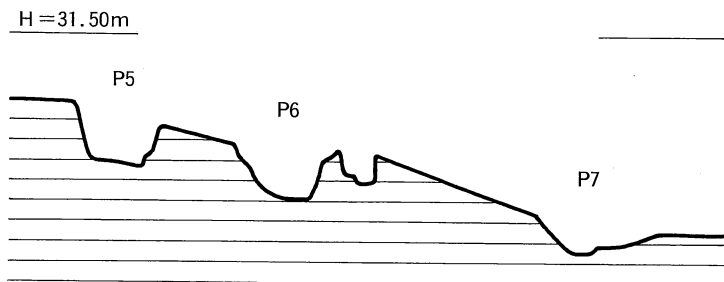
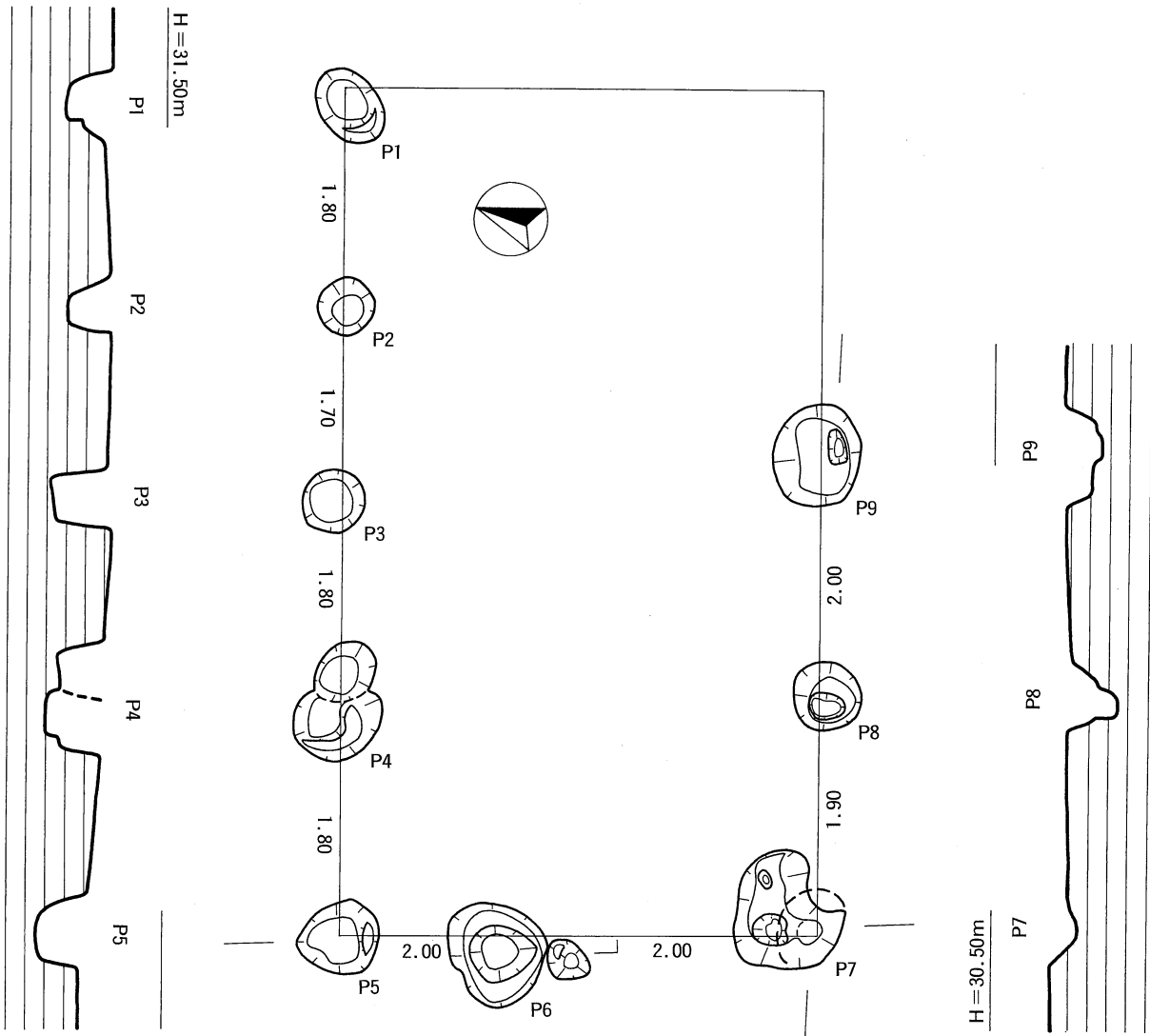
挿図185 陰田広畑遺跡 6テラス土層図



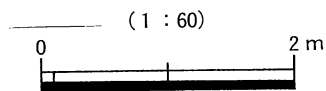
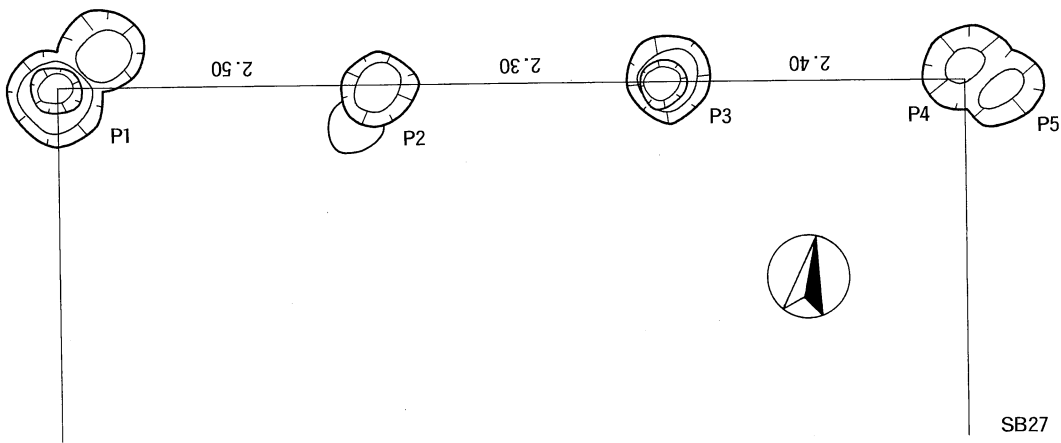
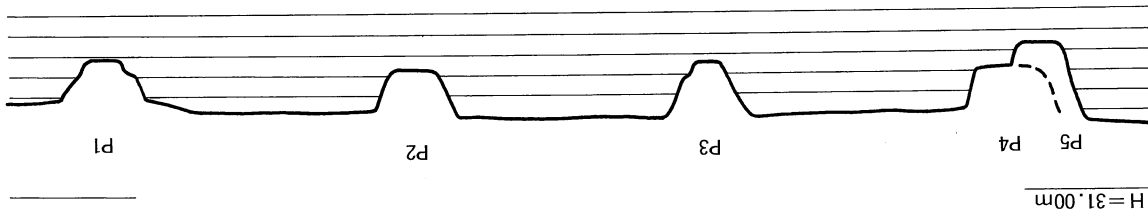
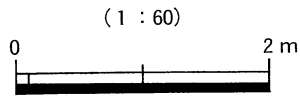
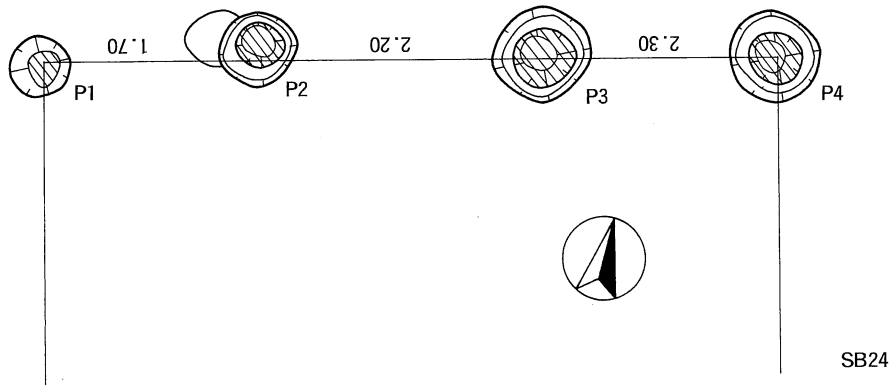
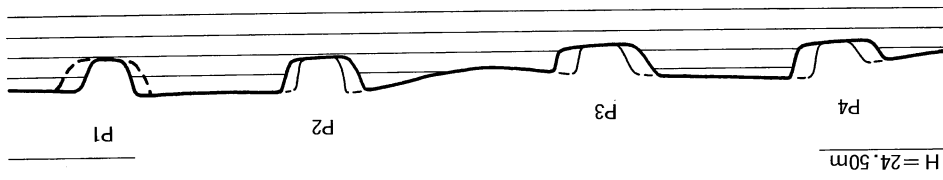
挿図186 陰田広畑遺跡 6テラスSB21遺構図



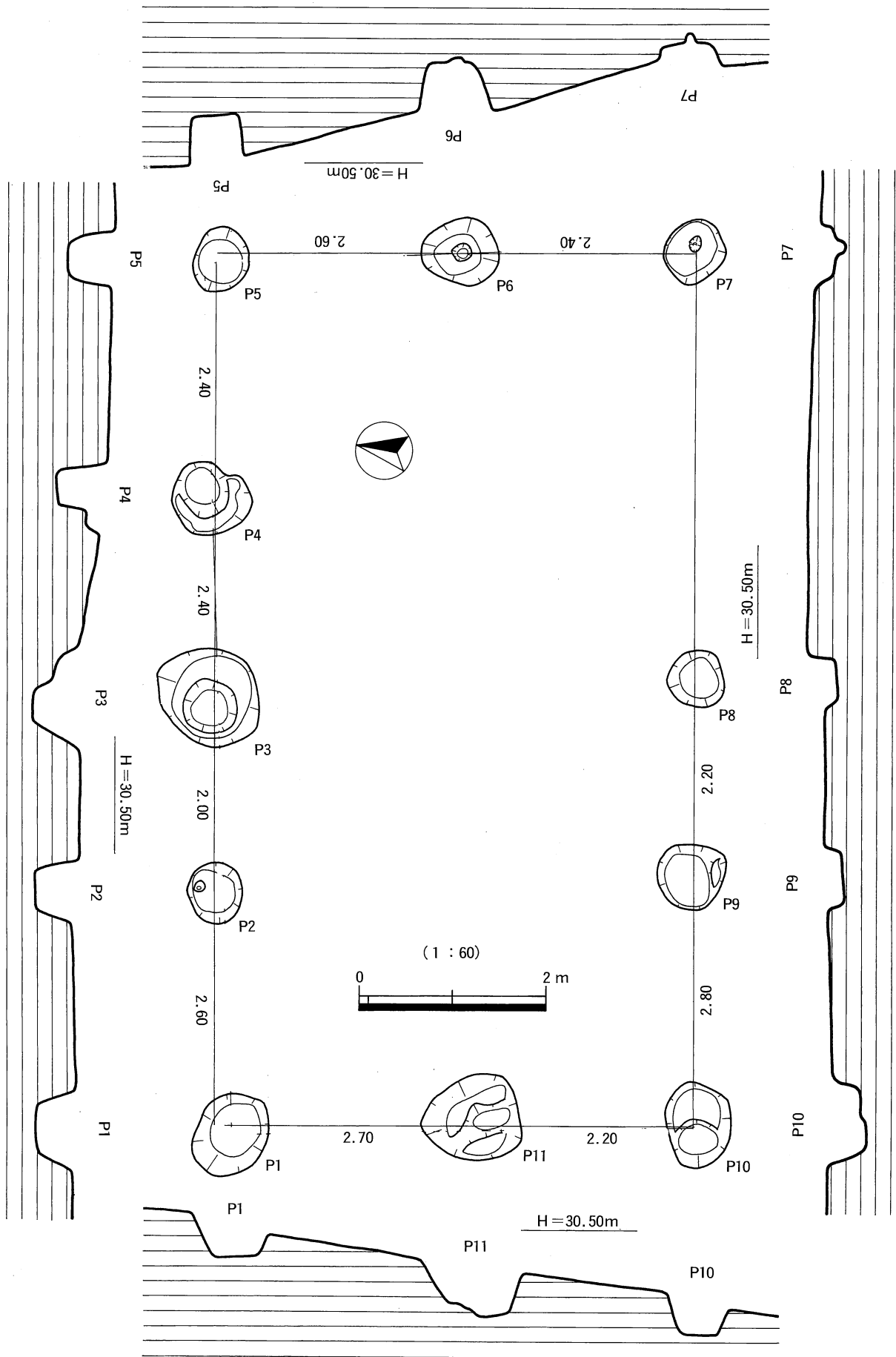
挿図187 陰田広畑遺跡 6テラスSB22遺構図



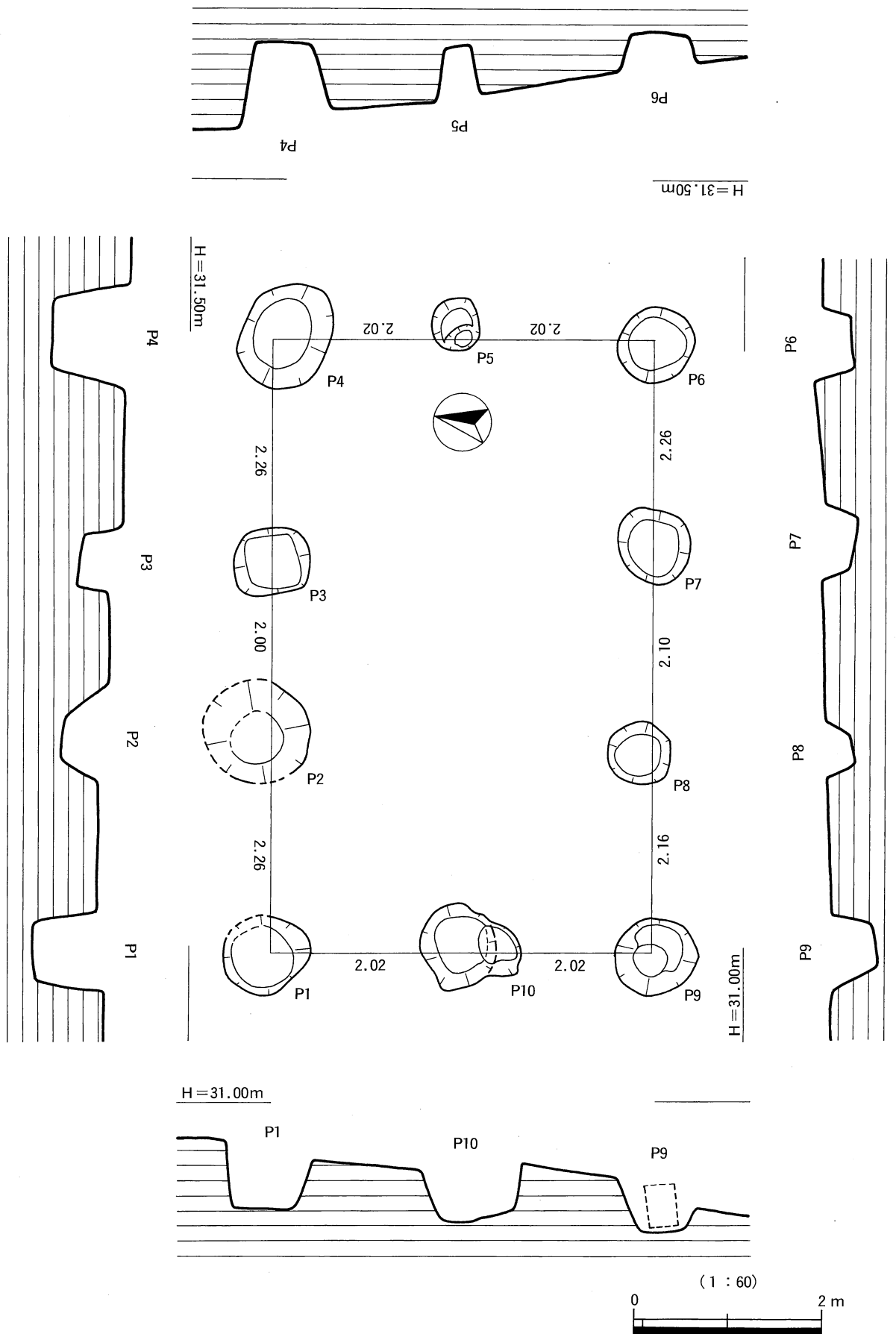
挿図188 陰田広畑遺跡 6テラスSB23遺構図



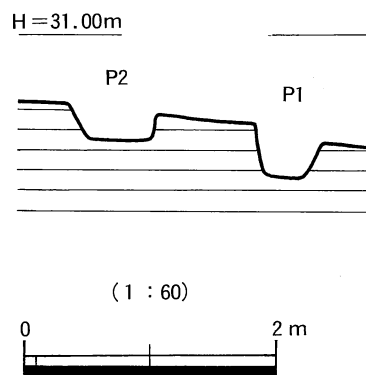
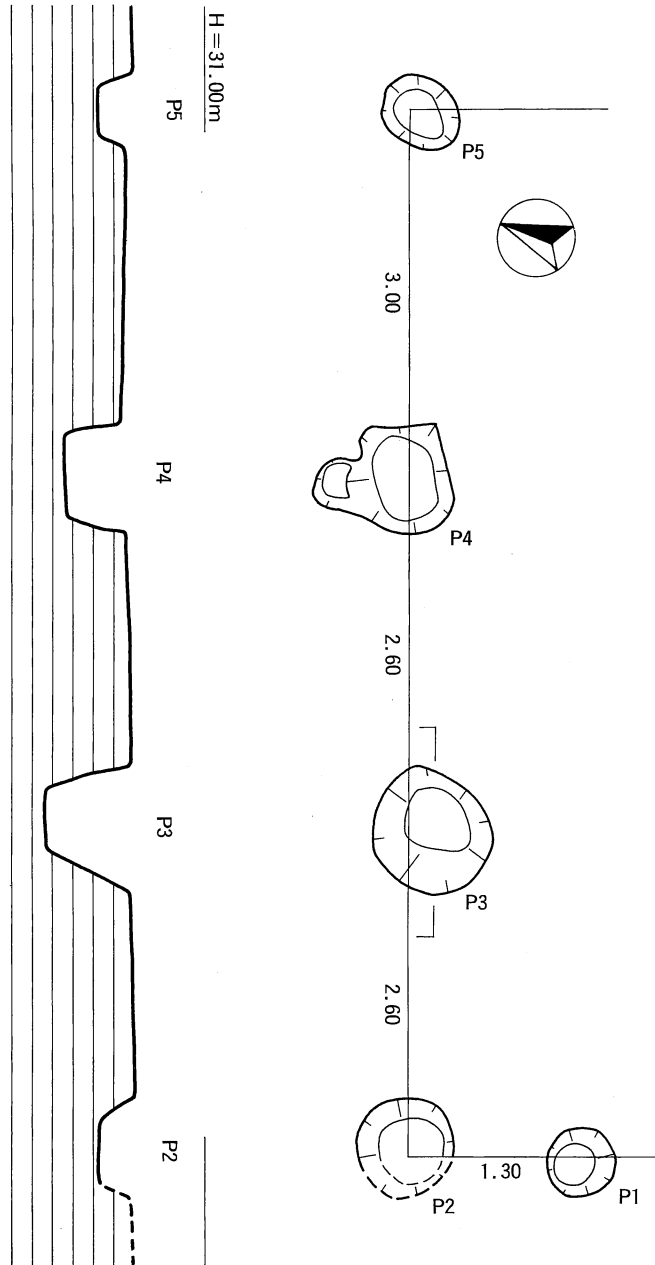
挿図189 陰田広畑遺跡 6テラスSB24・27遺構図



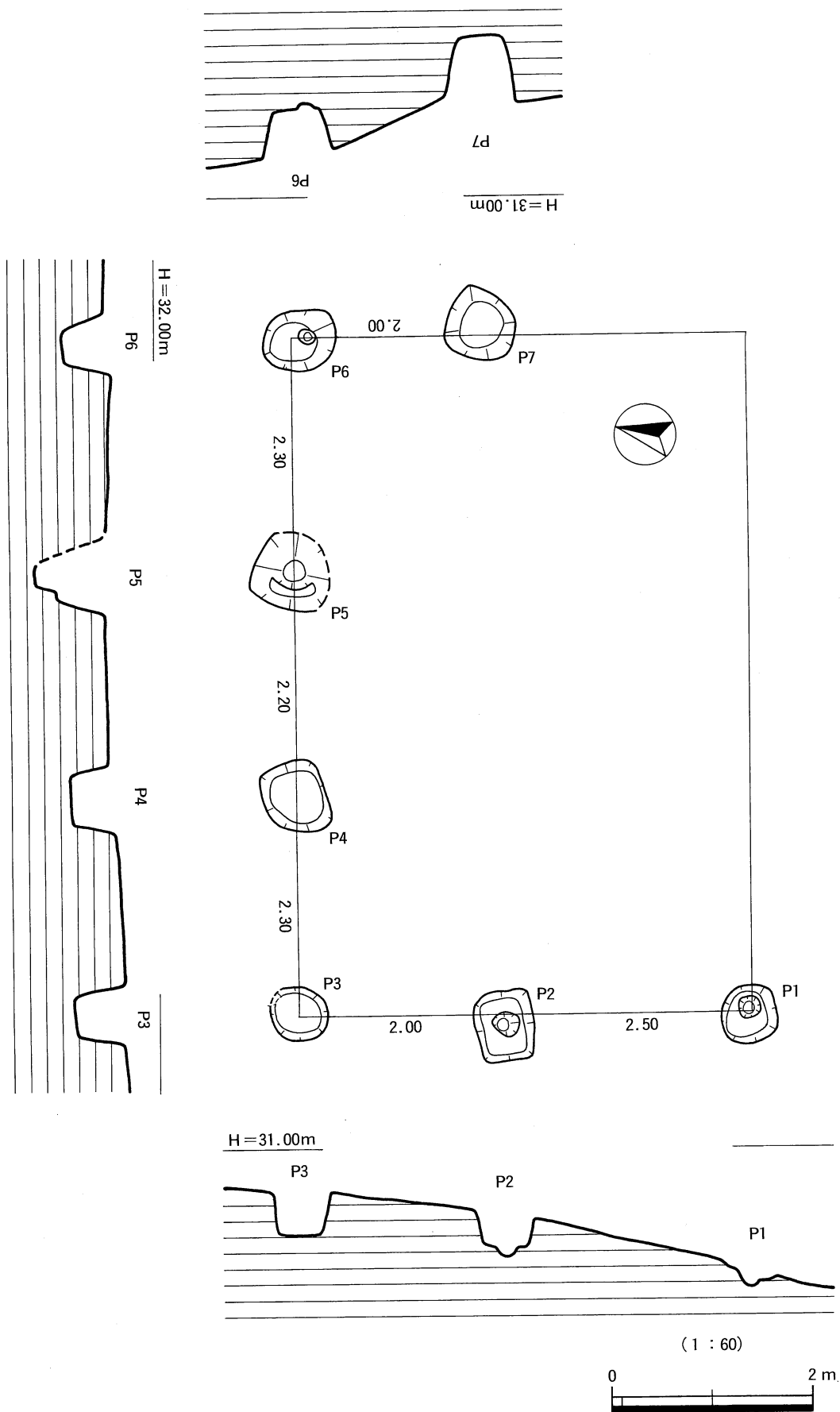
挿図190 陰田広畑遺跡 6テラスSB25遺構図



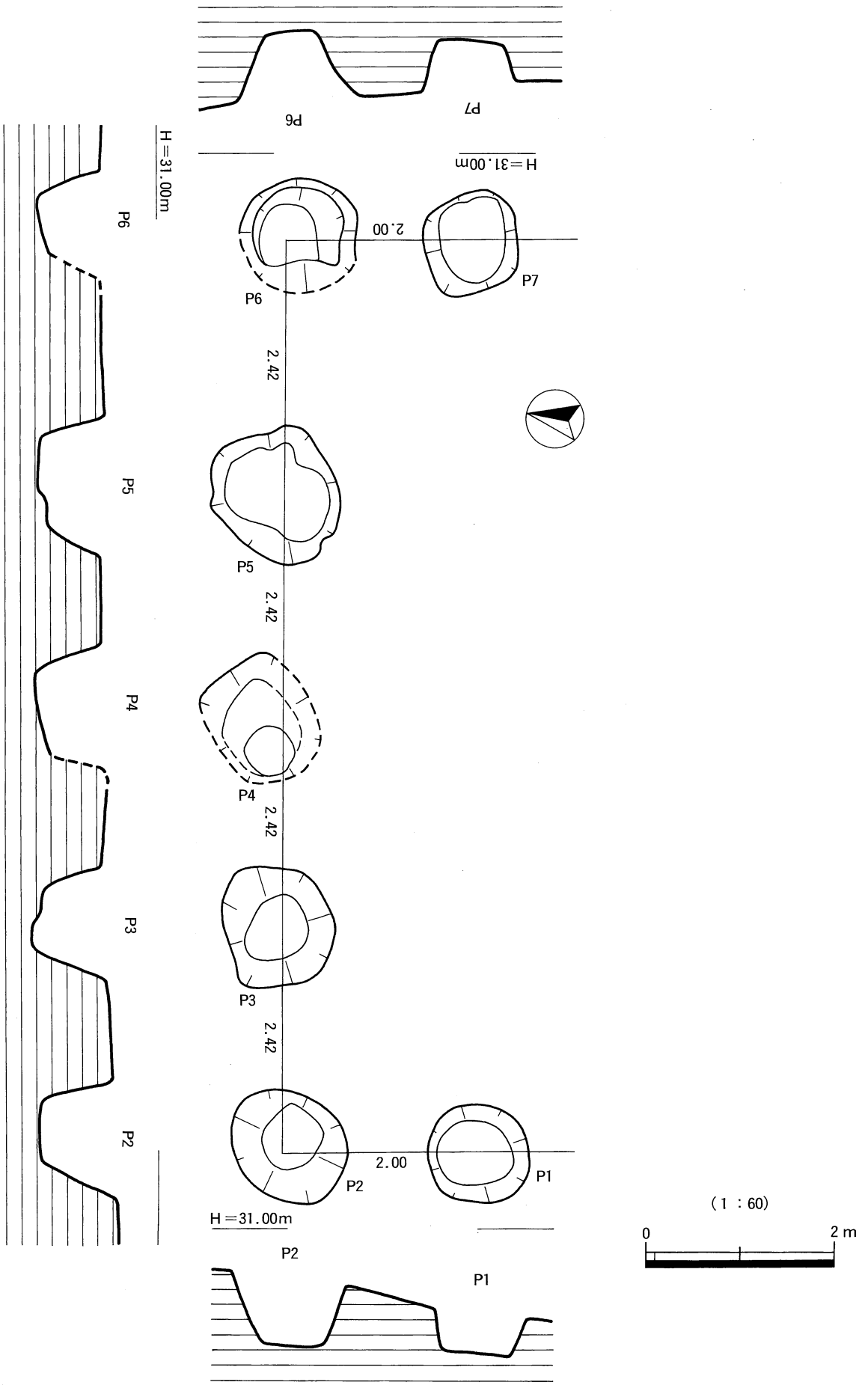
挿図191 陰田広畑遺跡 6テラスSB26遺構図



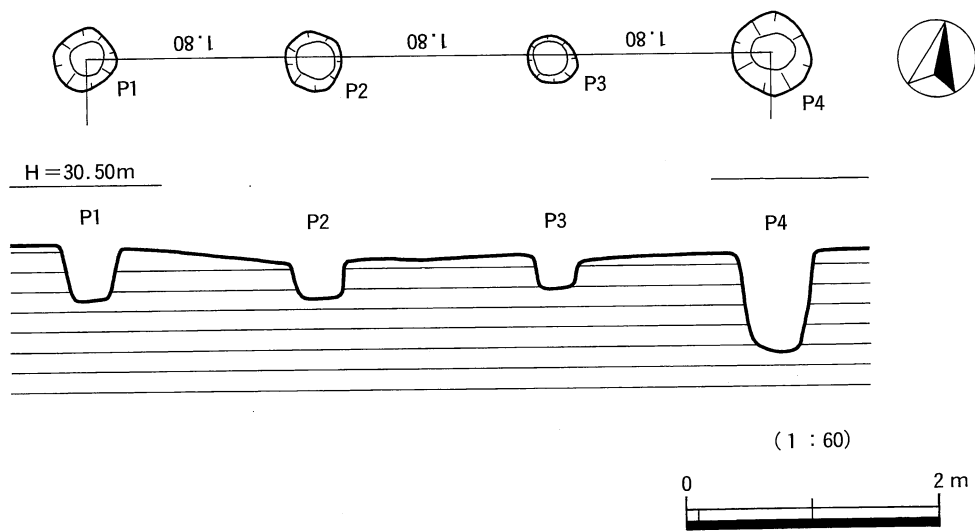
挿図192 陰田広畑遺跡 6テラスSB28遺構図



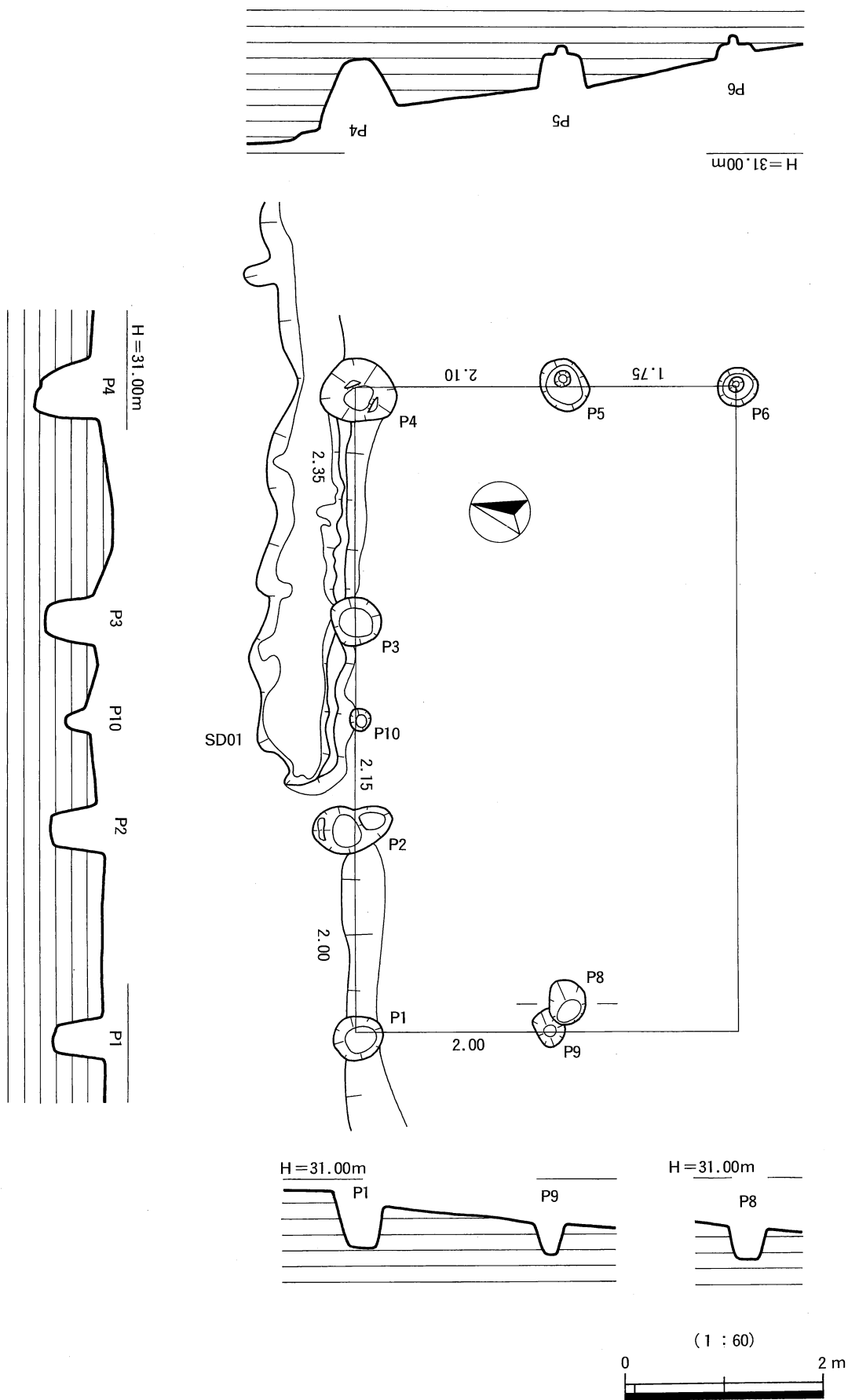
挿図193 陰田広畑遺跡 6テラスSB29遺構図



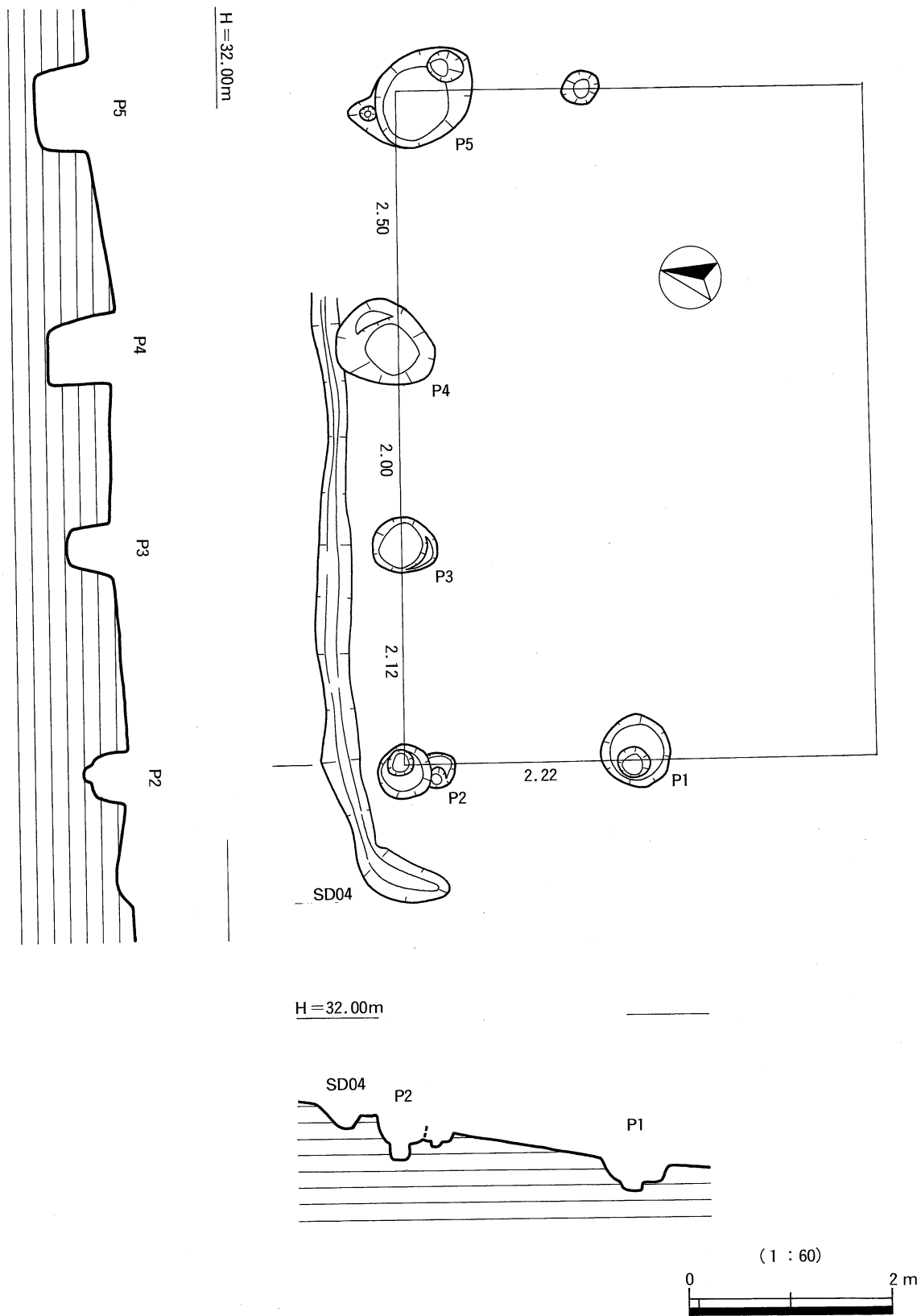
挿図194 陰田広畑遺跡 6テラスSB30遺構図



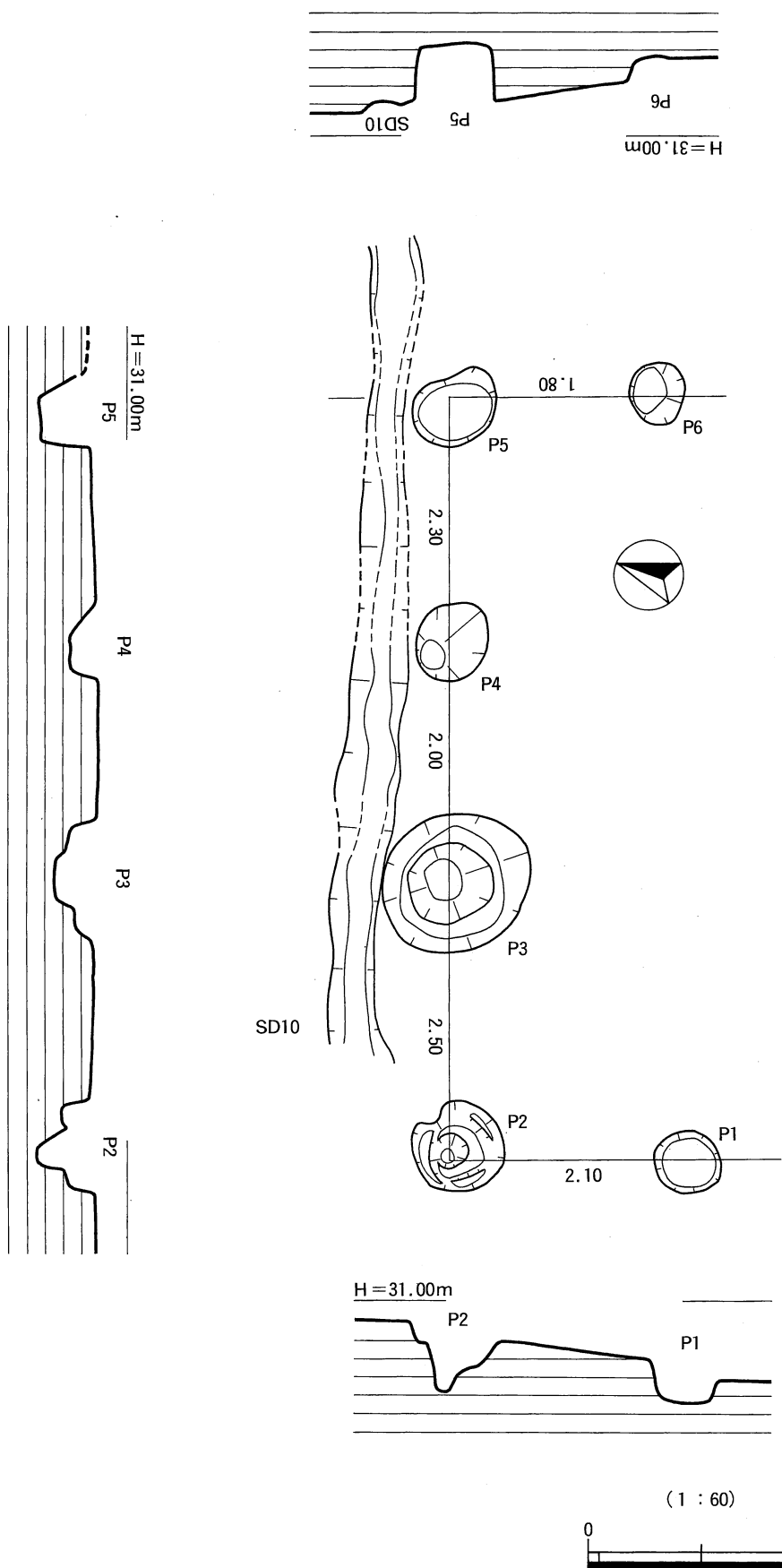
挿図195 陰田広畑遺跡 6テラスSB31遺構図



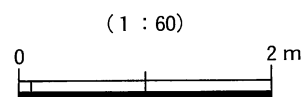
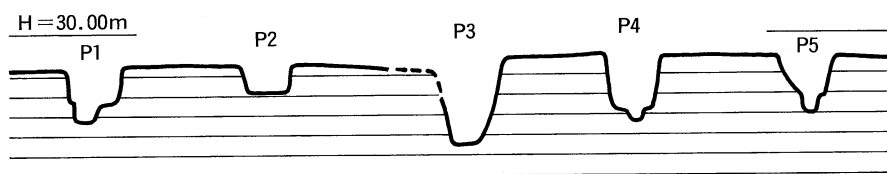
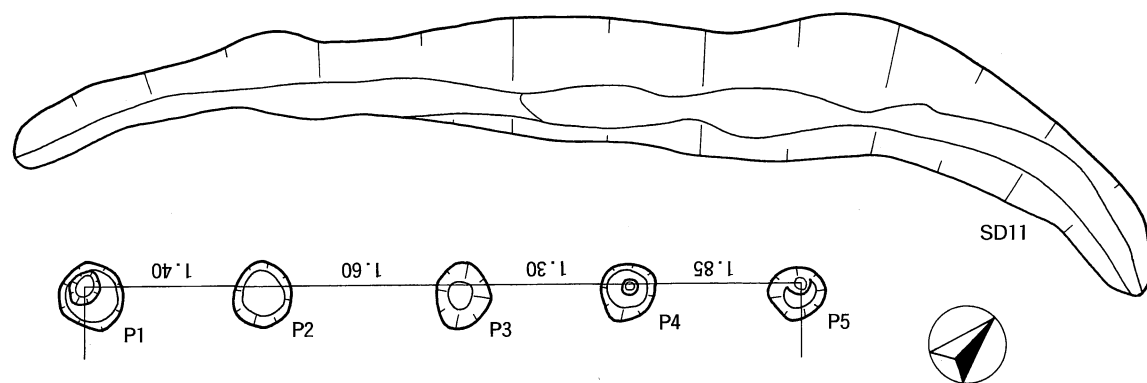
挿図196 陰田広畑遺跡 6テラスSB32遺構図



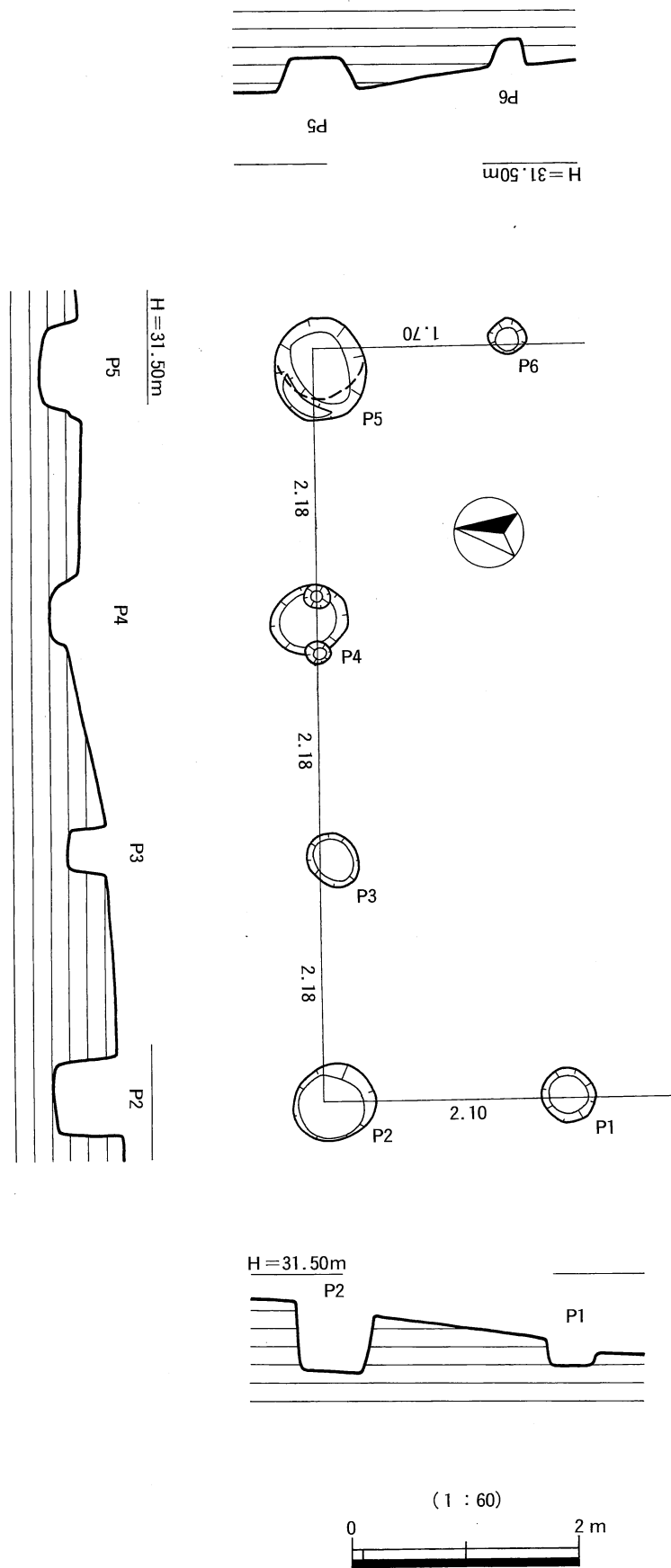
挿図197 陰田広畑遺跡 6テラスSB33遺構図



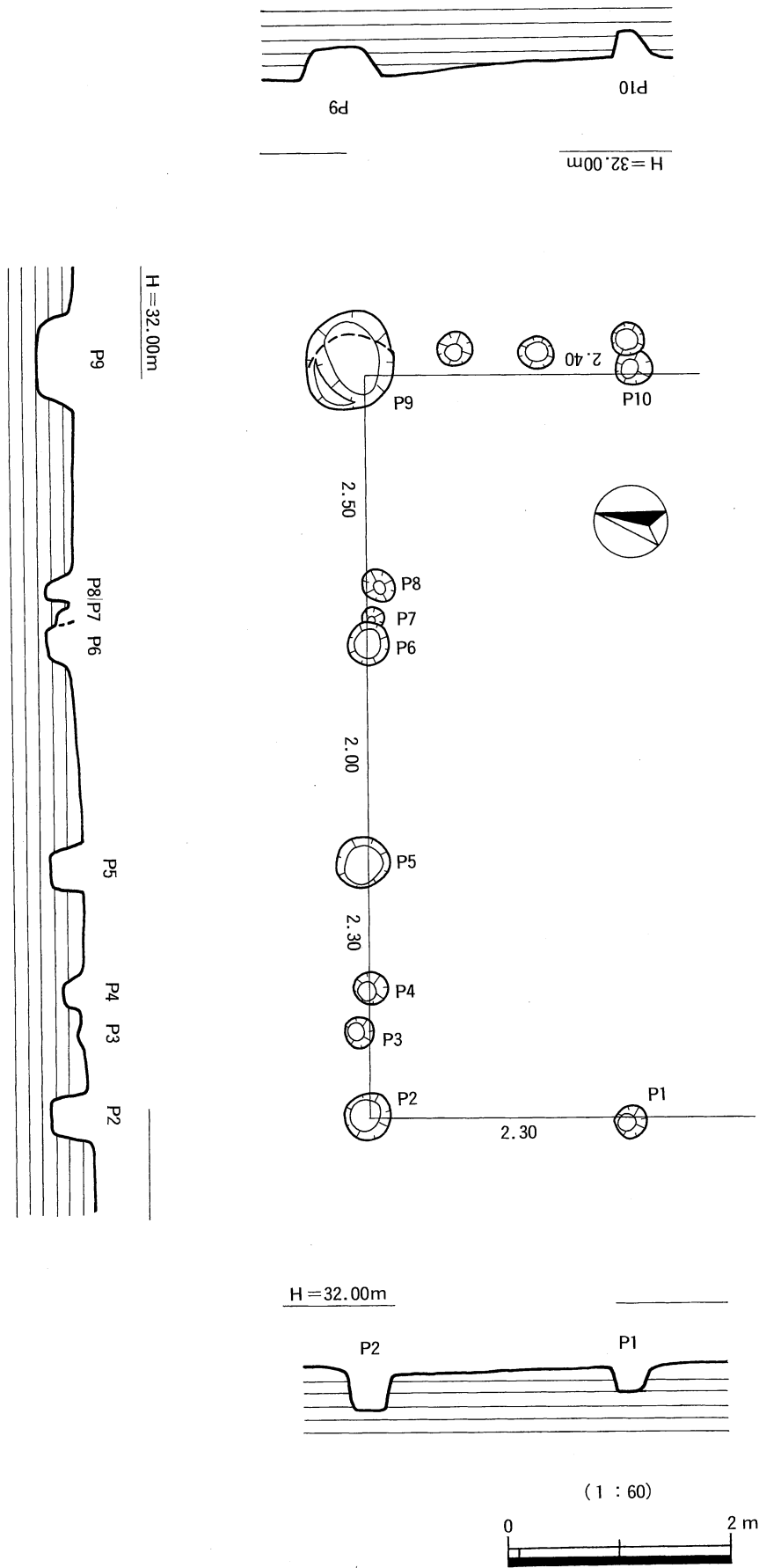
挿図198 陰田広畑遺跡 6テラスSB34遺構図



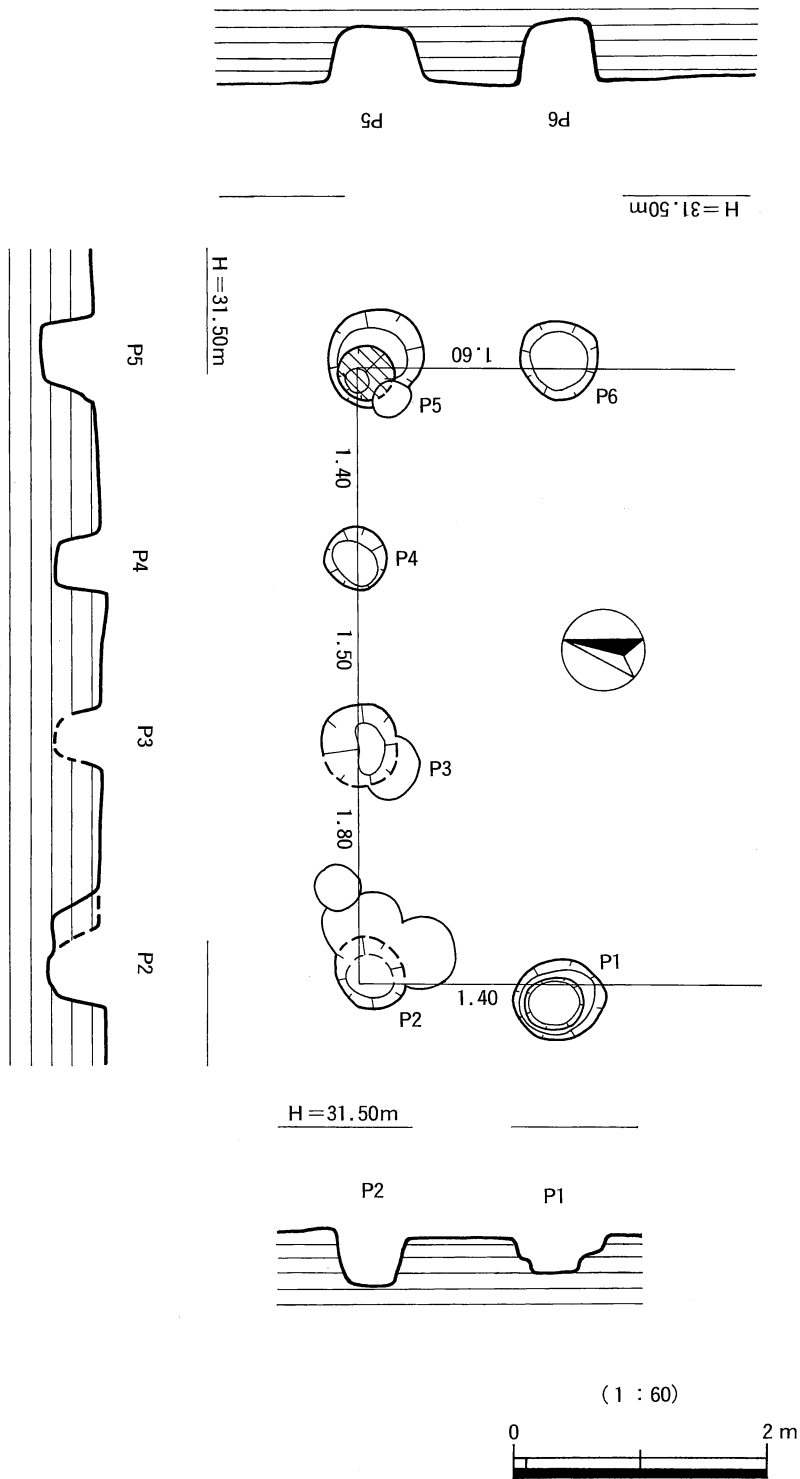
挿図199 陰田広畑遺跡 6テラスSB35遺構図



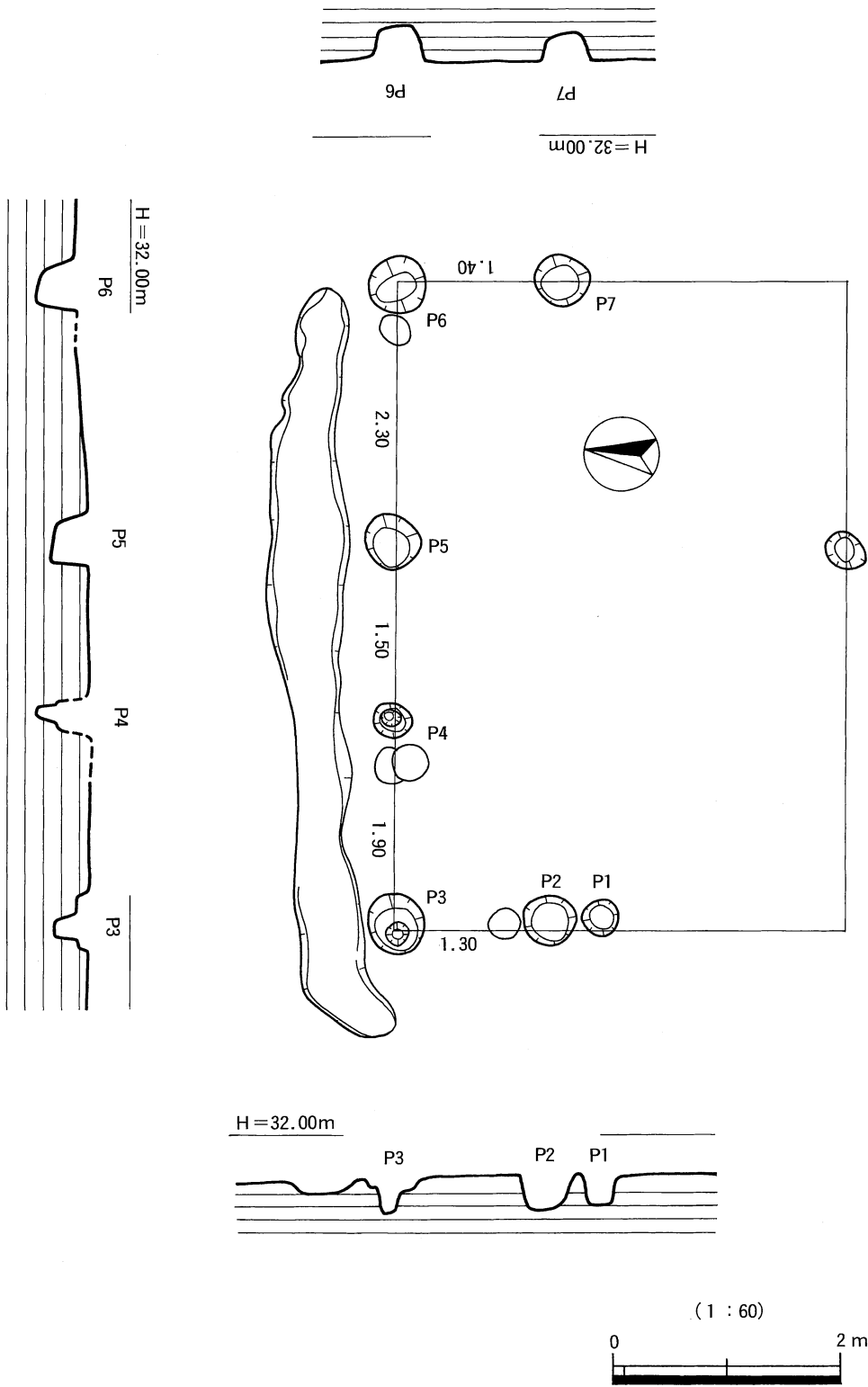
挿図200 陰田広畑遺跡 6テラスSB36遺構図



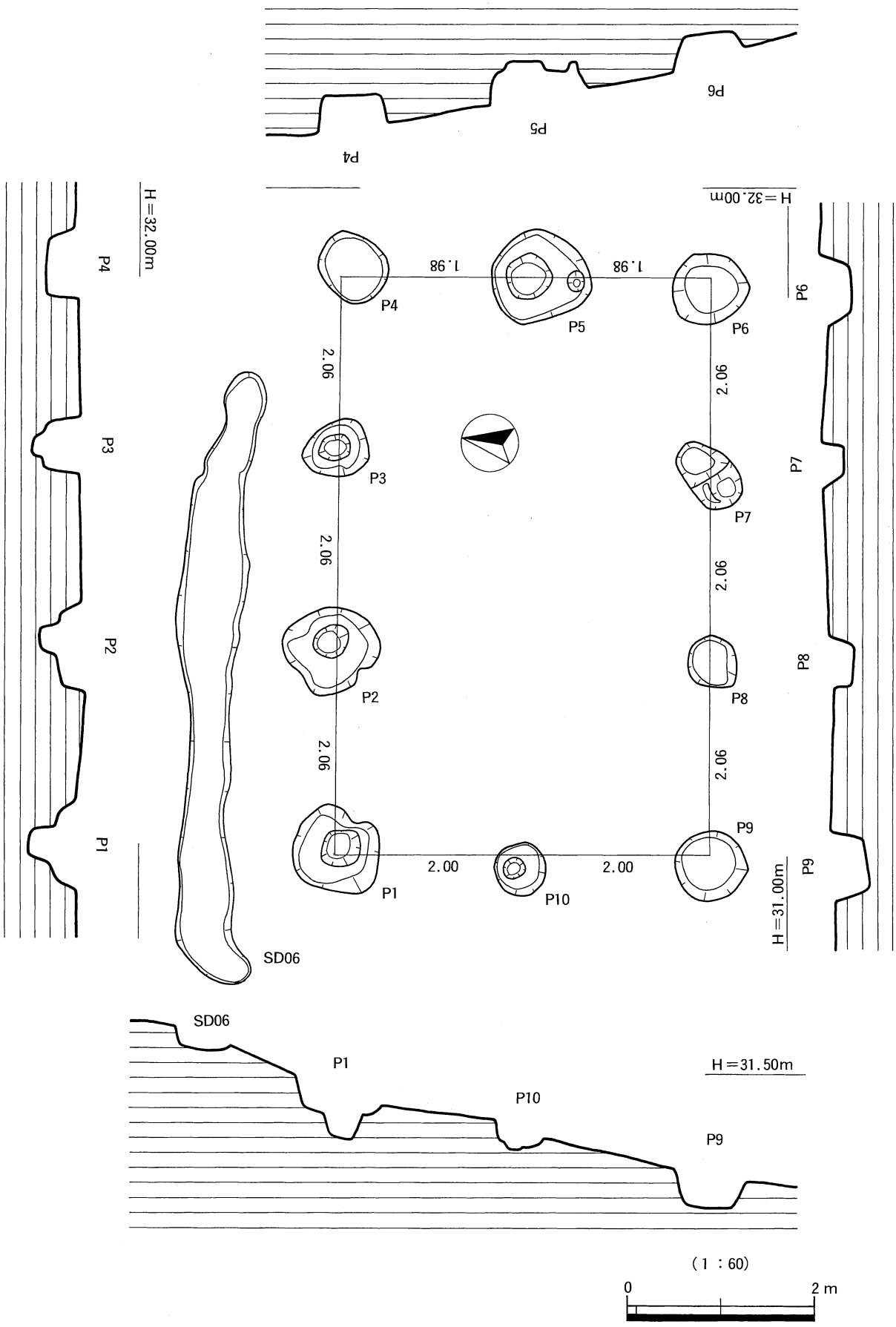
挿図201 陰田広畑遺跡 6テラスSB37遺構図



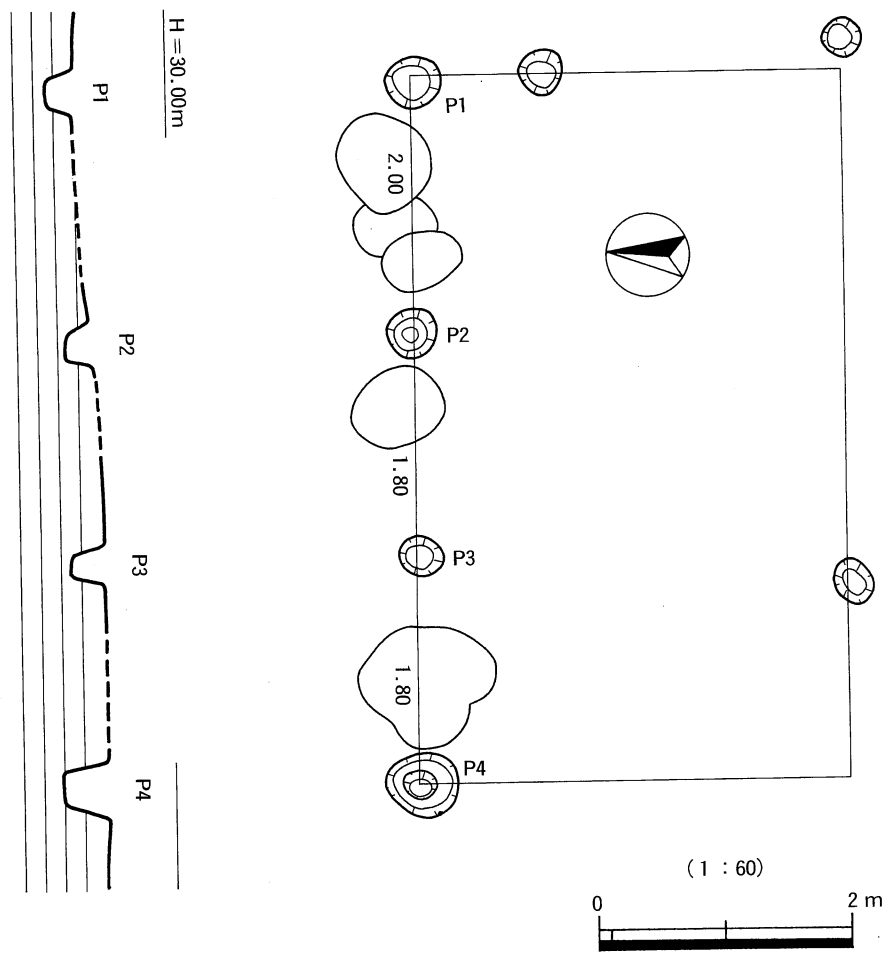
挿図202 陰田広畑遺跡 6テラスSB38遺構図



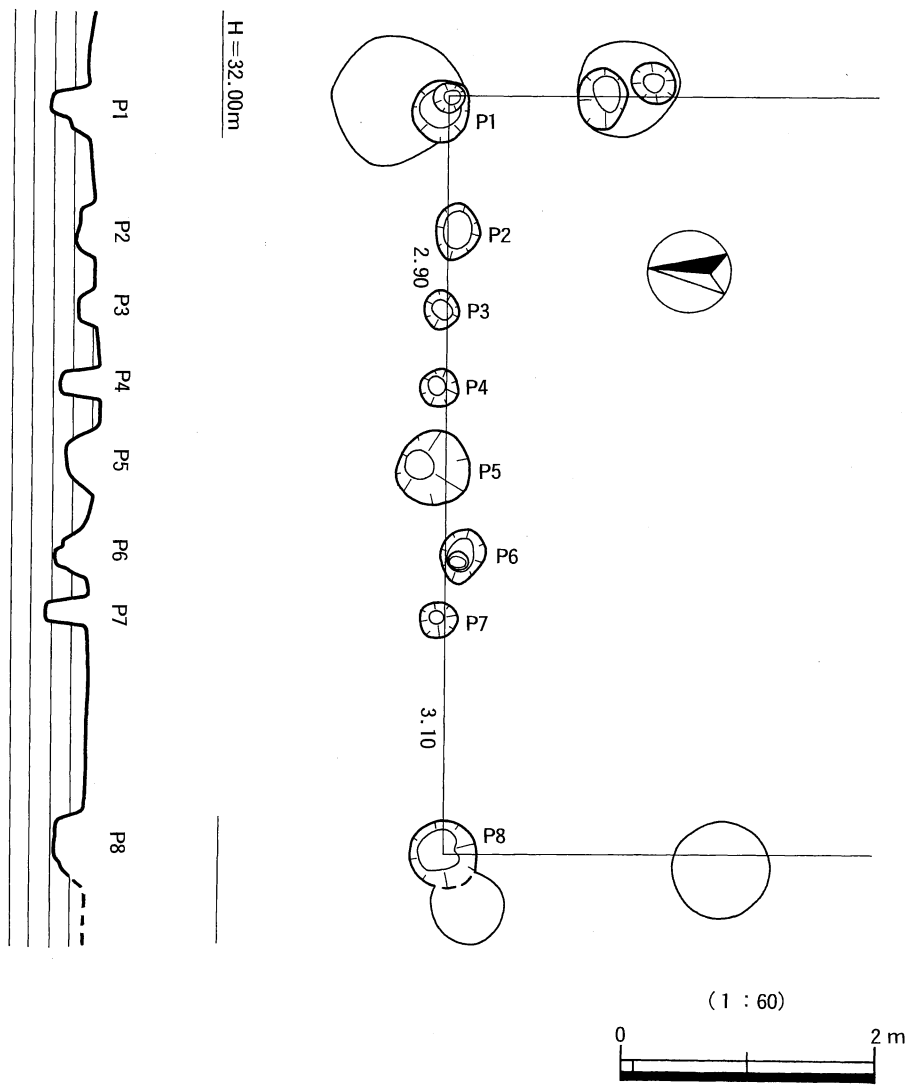
挿図203 陰田広畑遺跡 6テラスSB39遺構図



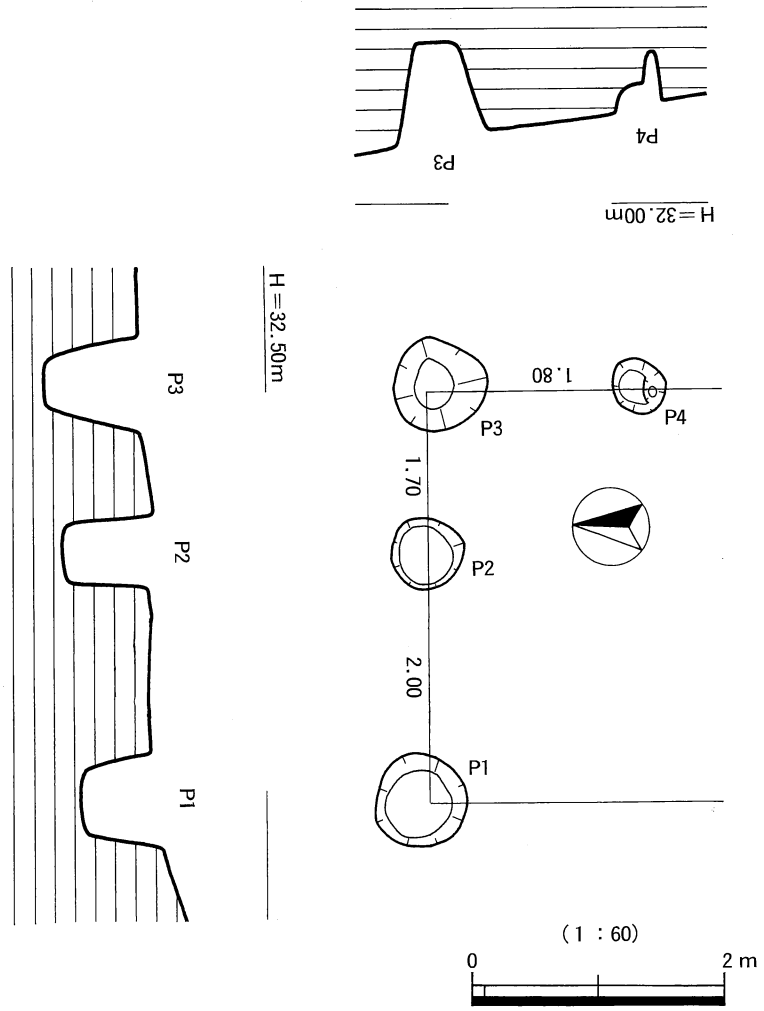
挿図204 陰田広畑遺跡 6テラスSB40遺構図



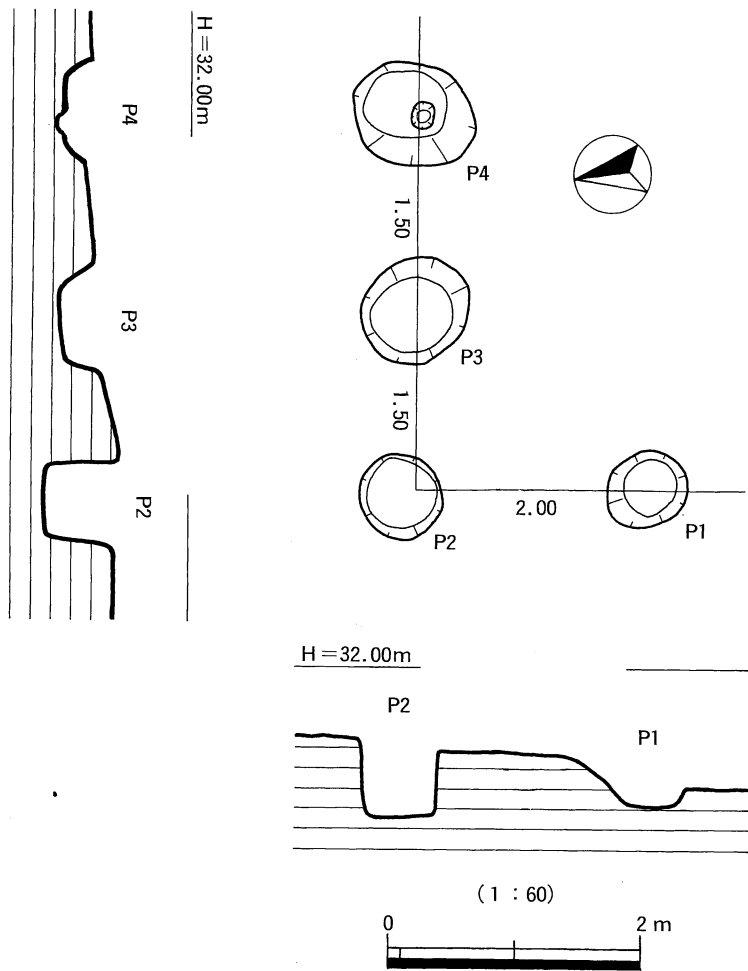
挿図205 陰田広畑遺跡 6テラスSB41遺構図



挿図206 陰田広畑遺跡 6テラスSB42遺構図

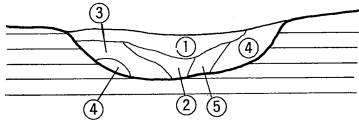


挿図207 陰田広畑遺跡 6テラスSB43遺構図



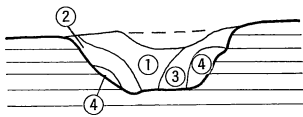
挿図208 陰田広畑遺跡 6テラスSB44遺構図

A A'
H=25.00m



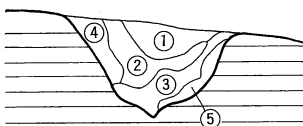
- ① 赤褐色粘質土 (白色シルト少々含む)
- ② 暗褐色粘質土
- ③ 褐色粘質土 (灰色シルトを含む)
- ④ 淡赤黄褐色粘質土
- ⑤ 赤褐色粘質土 (白色シルトを含む)

B B'
H=25.00m



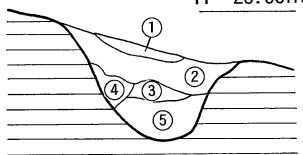
- ① 暗褐色粘質土 (赤、灰色シルトを含む)
- ② 赤褐色粘質土
- ③ 暗赤褐色粘質土 (赤、灰色シルトを含む)
- ④ 赤黄褐色粘質土

C C'
H=25.00m



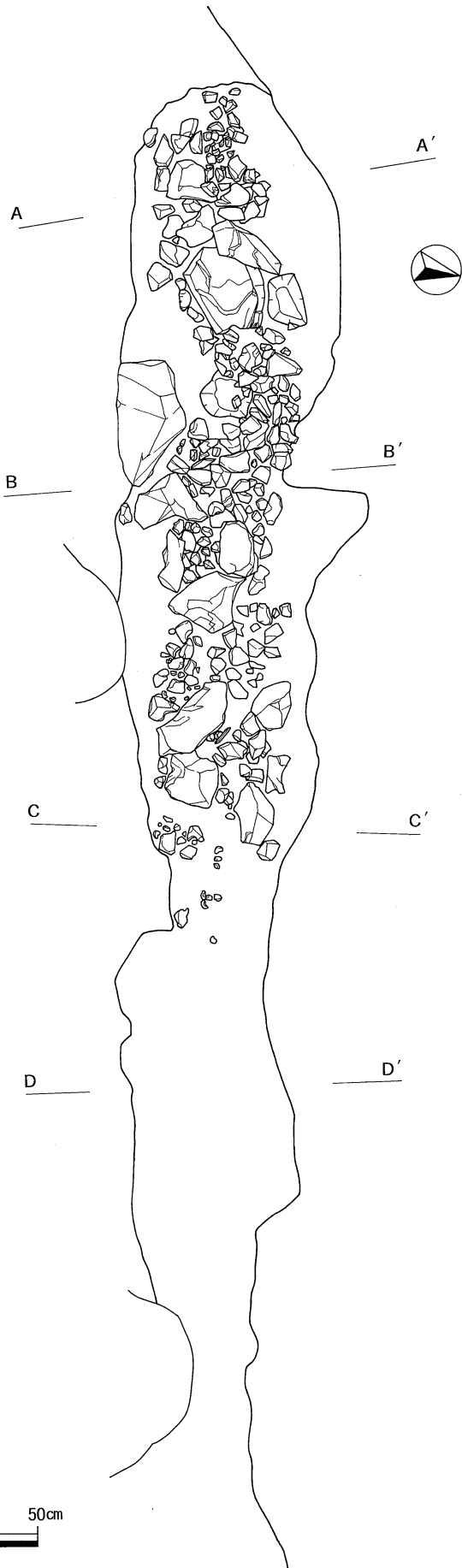
- ① 赤褐色粘質土 (黄、赤色シルトを含む)
- ② 暗赤褐色粘質土 (赤色シルトを含む)
- ③ 褐色粘質土 (赤色シルトを含む)
- ④ 赤黄褐色粘質土
- ⑤ 黄色粘質土 (白色シルトを含む)

D D'
H=25.00m

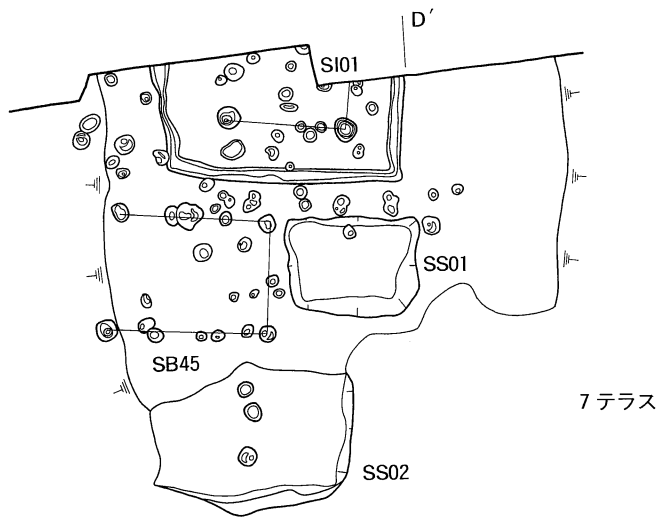


- ① 赤褐色粘質土 (黄灰色シルトを含む)
- ② 暗黄灰色粘質土 (地山ブロックを含む)
- ③ 暗褐色粘質土 (黄色ブロックを含む)
- ④ 赤褐色粘質土
- ⑤ 暗褐色粘質土 (赤、白色シルトを含む)

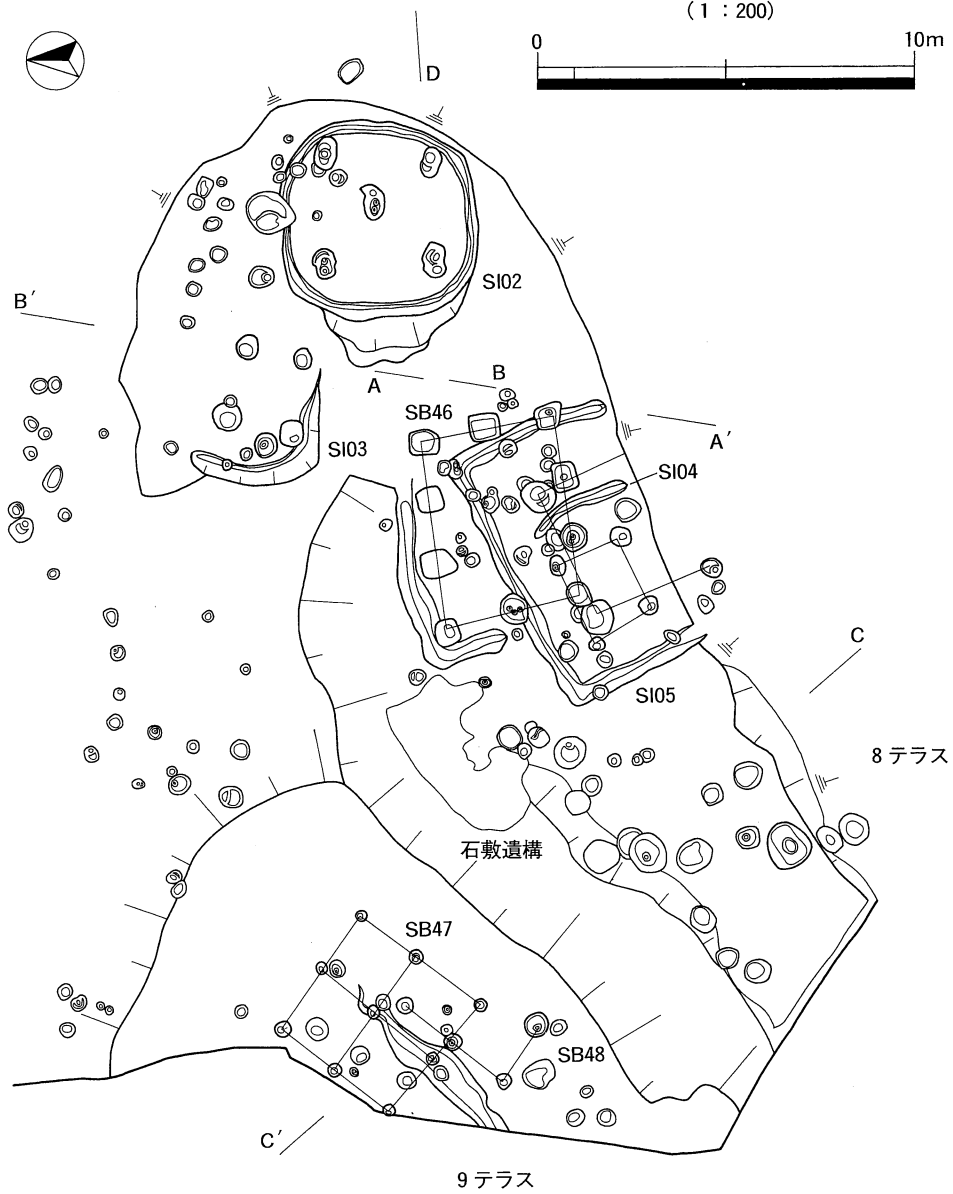
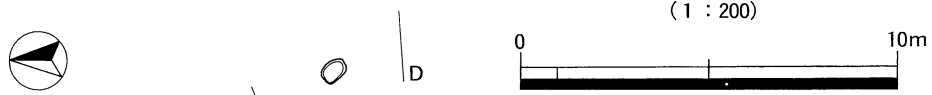
(1:20)
0 50cm



挿図209 陰田広畑遺跡 6テラスSD01遺構図



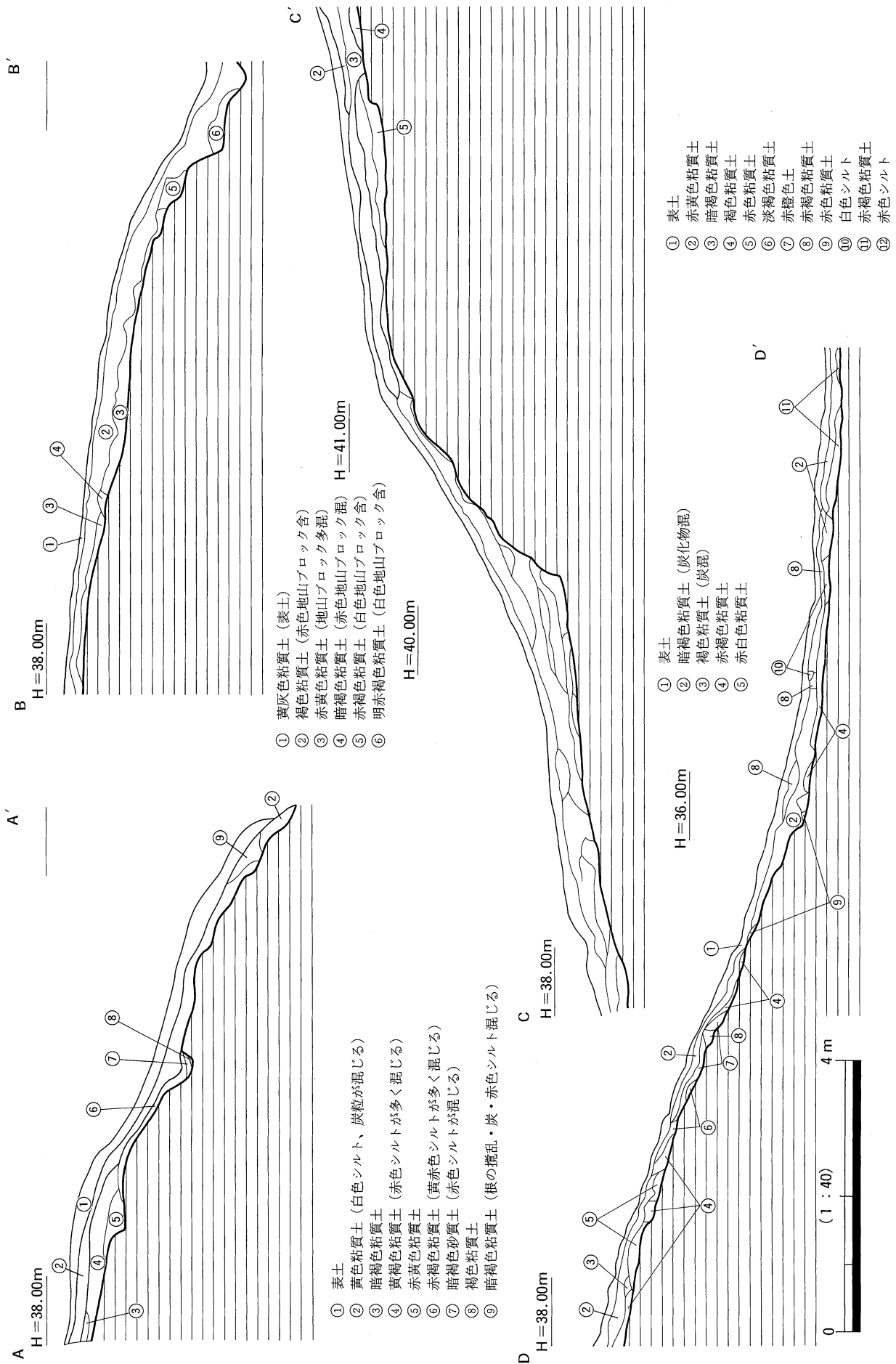
7テラス



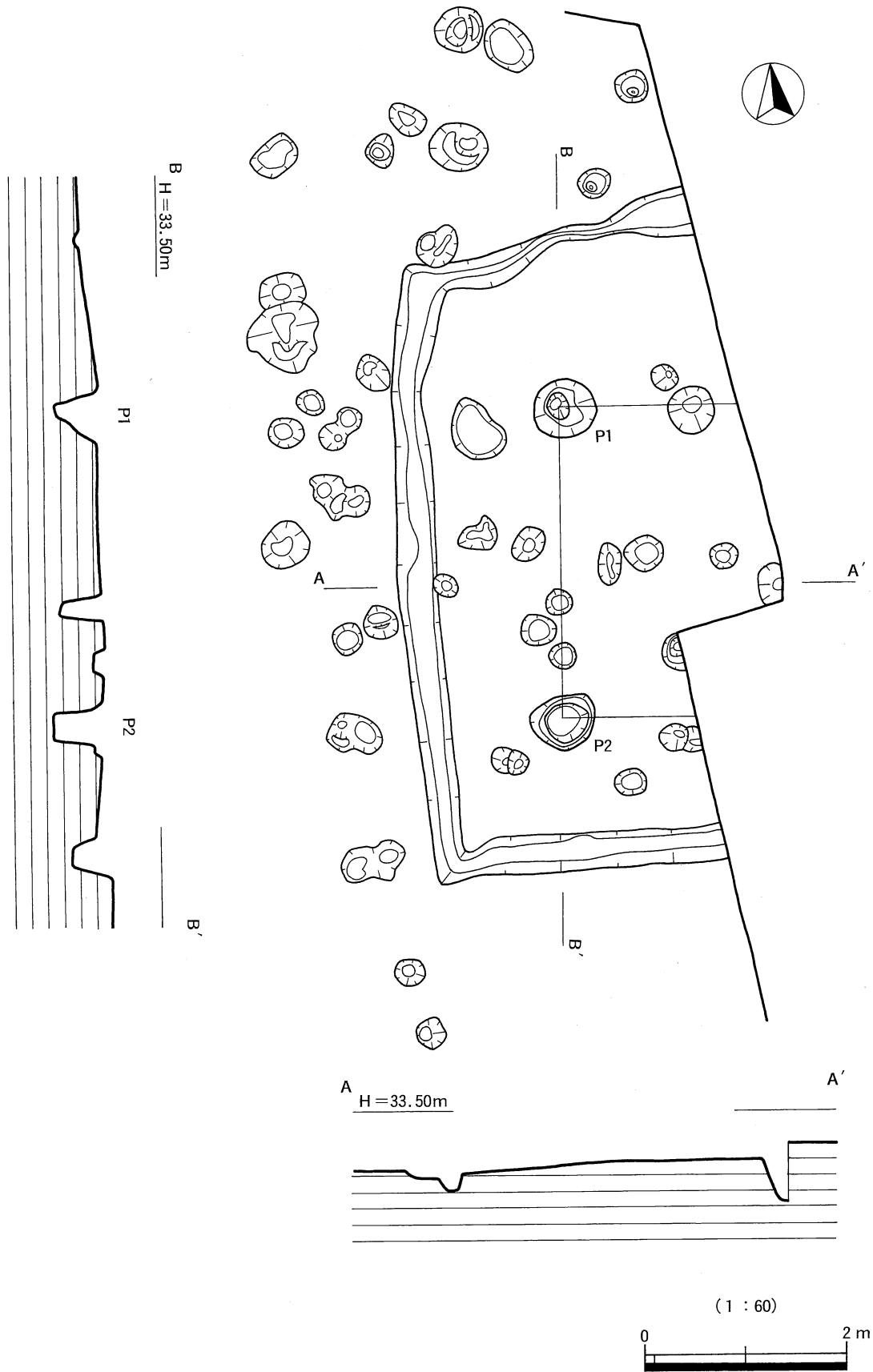
8テラス

9テラス

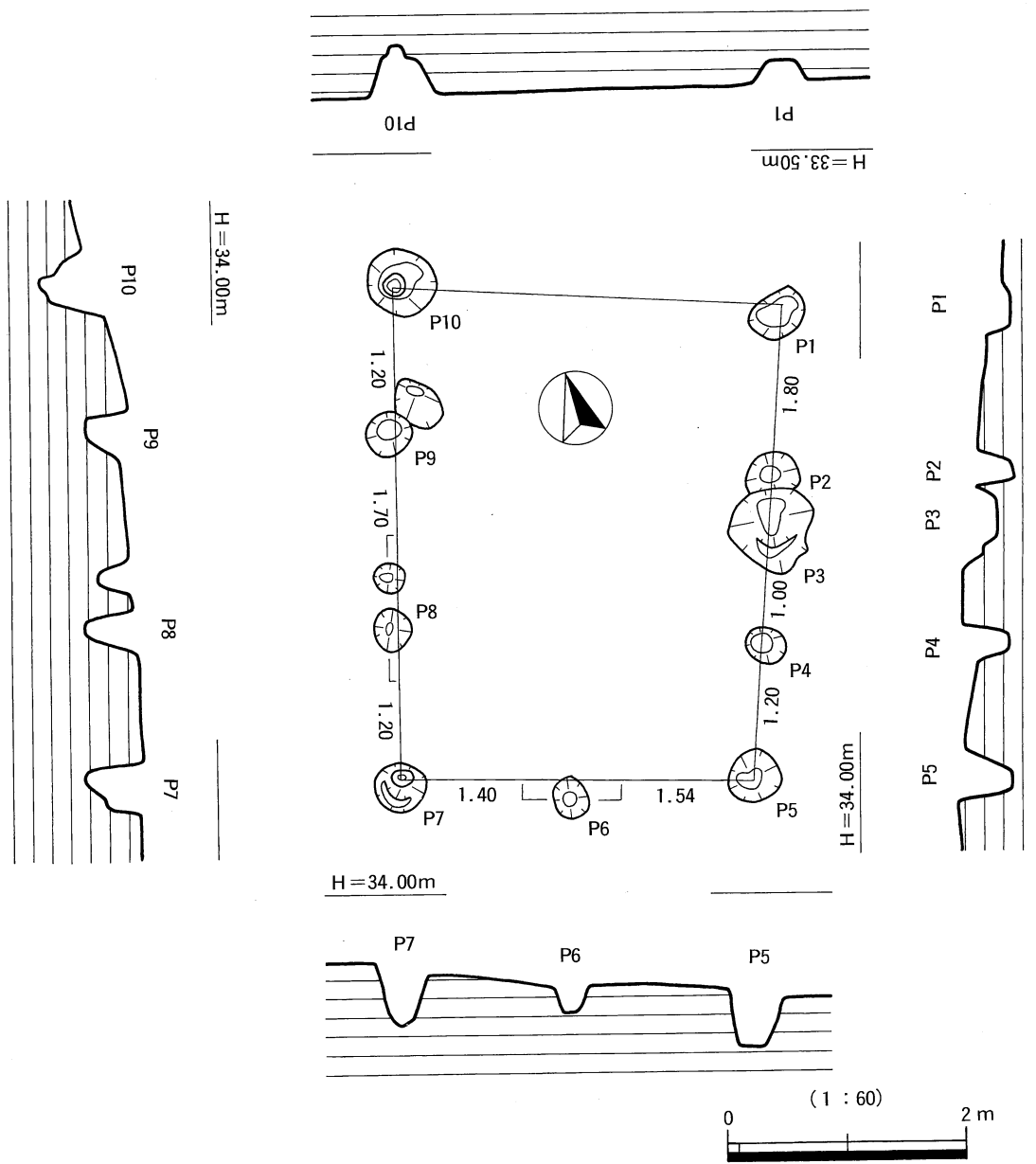
挿図210 陰田広畑遺跡 7・8・9テラス遺構分布図



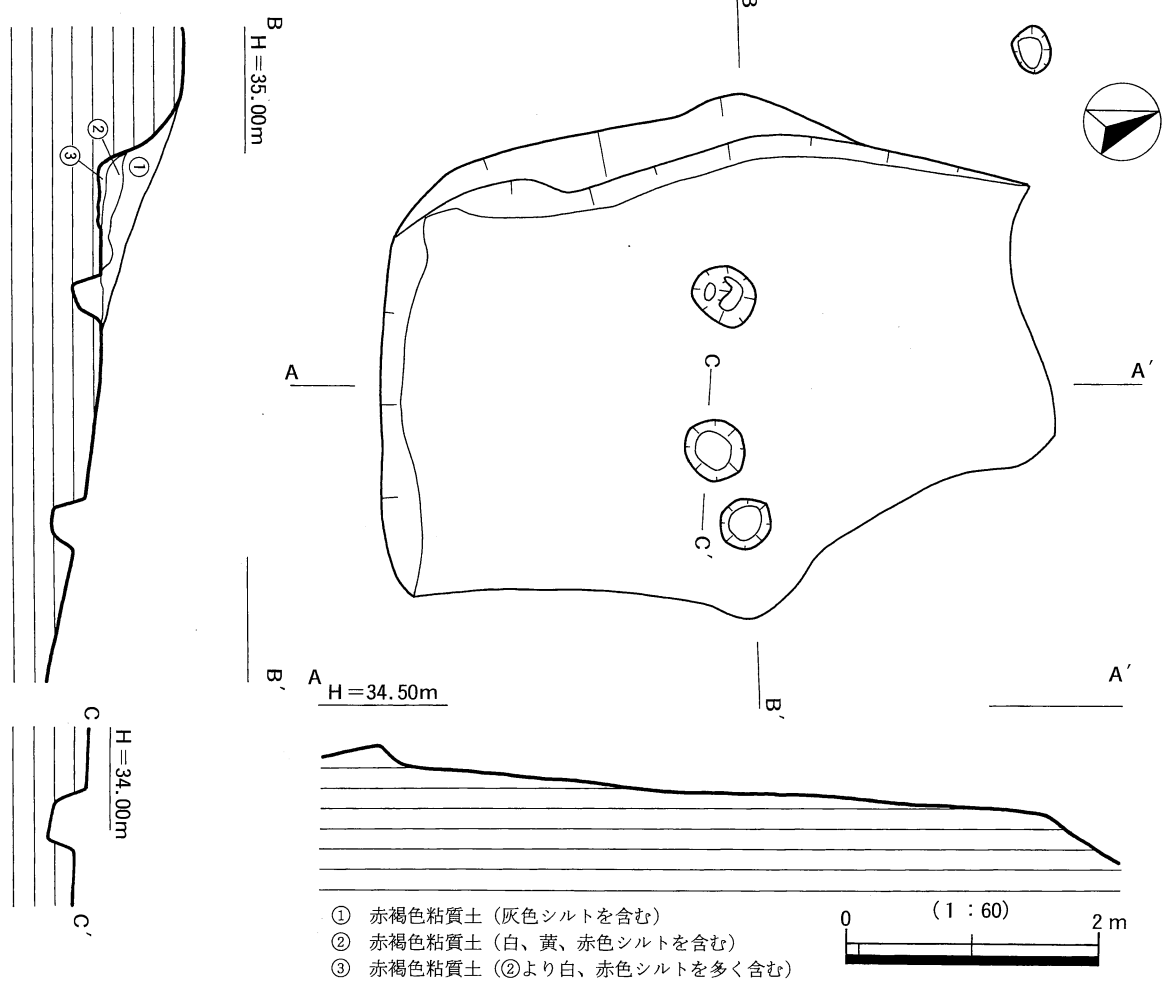
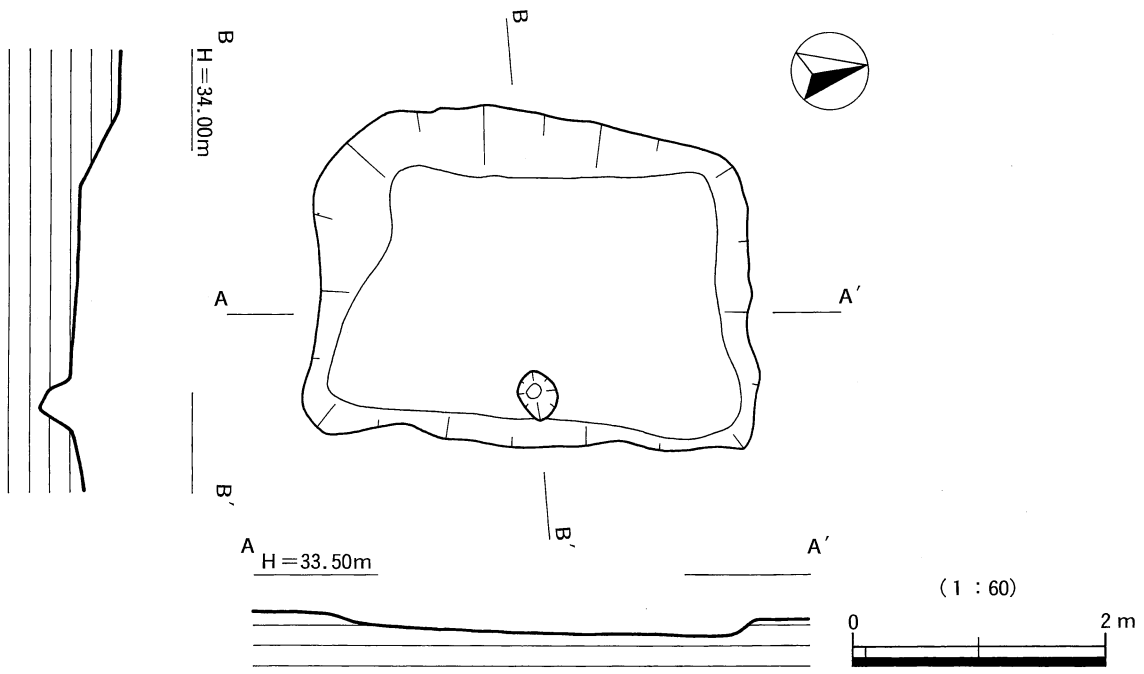
挿図211 験田広畑遺跡 8・9テラス土層図



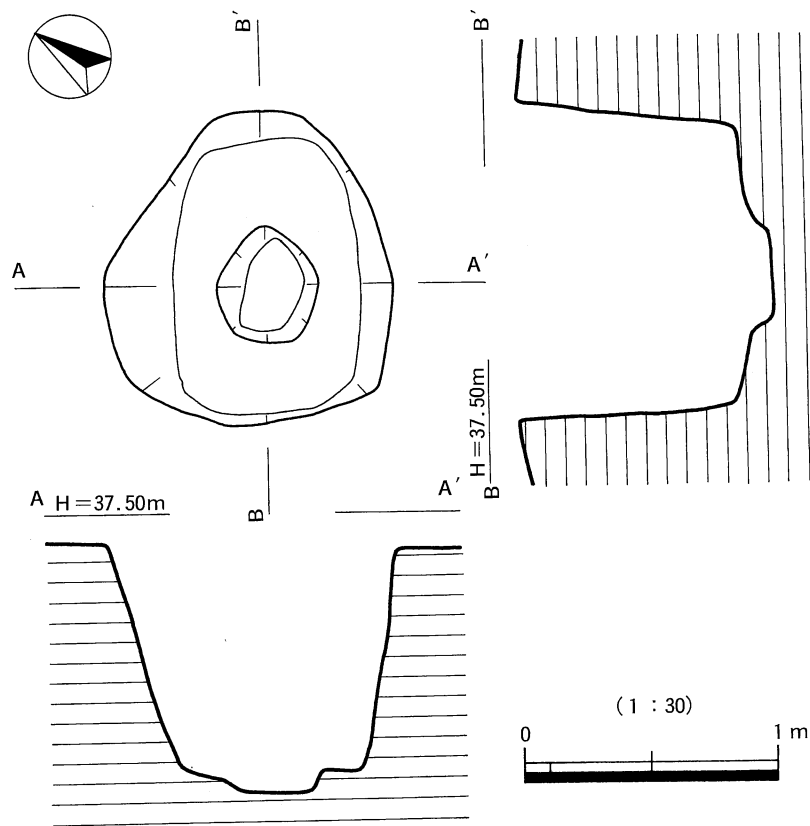
挿図212 陰田広畑遺跡 7テラスSI01遺構図



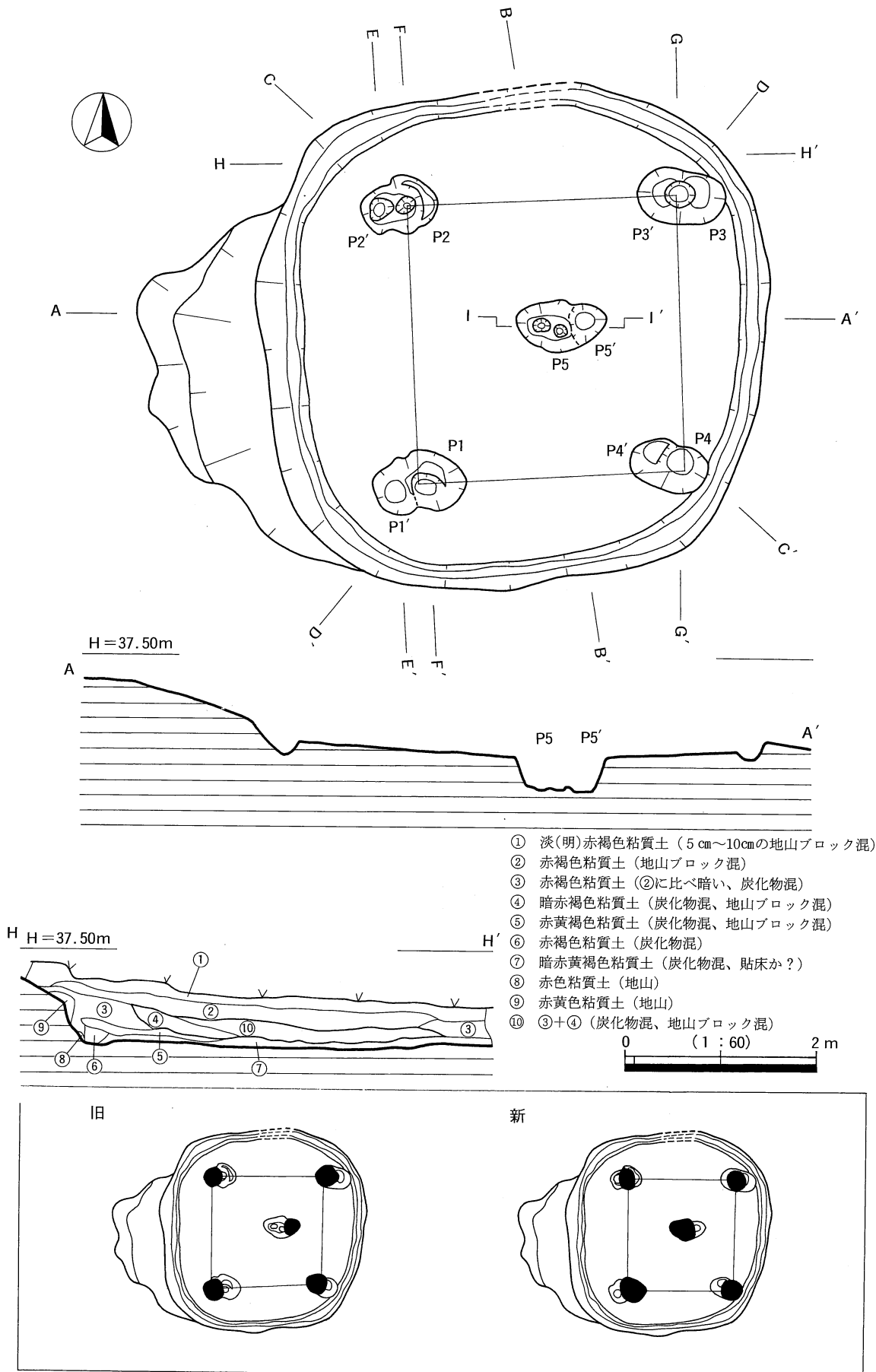
挿図213 陰田広畑遺跡 7テラスSB45遺構図



挿図214 陰田広畑遺跡 7テラスSS01・02遺構図

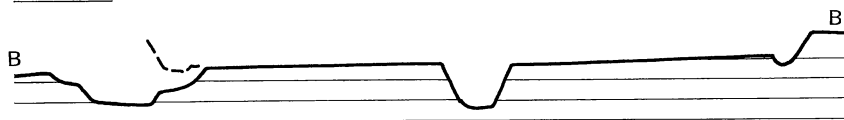


挿図215 陰田広畑遺跡 8テラスJSK01遺構図

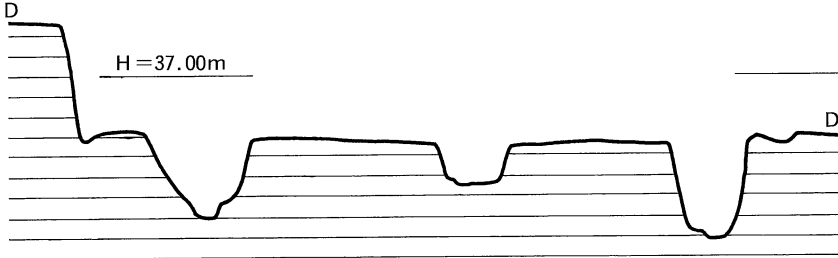
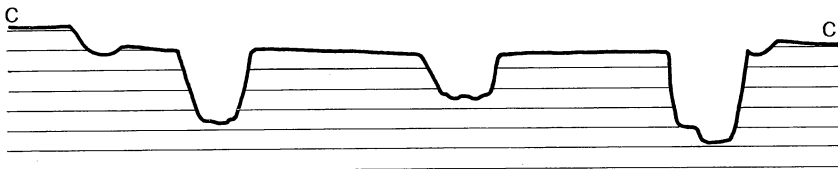


挿図216 陰田広畑遺跡 8テラスSI02遺構図

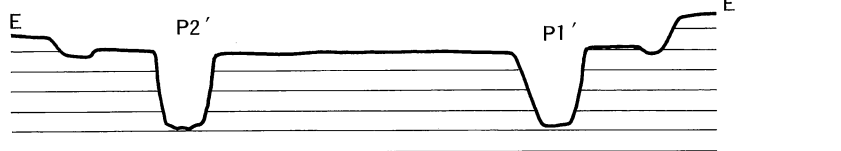
H = 37.00m



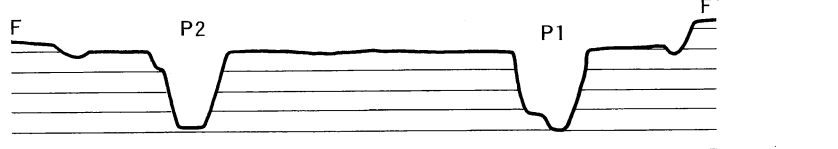
H = 37.00m



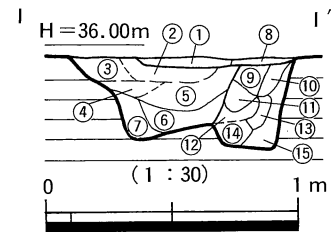
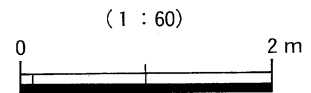
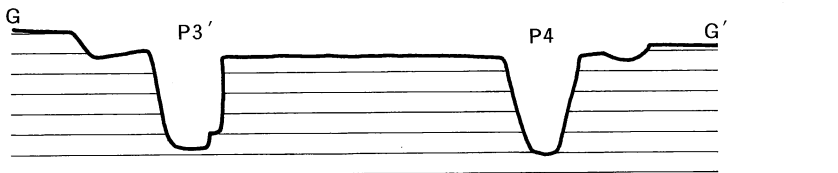
H = 37.00m



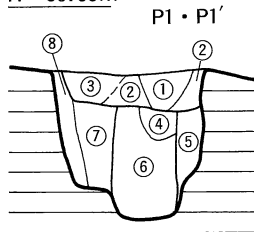
H = 37.00m



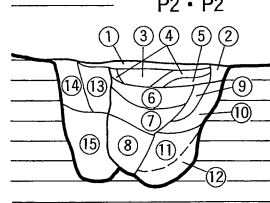
H = 37.00m



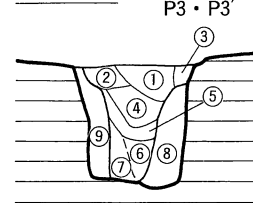
H = 36.50m



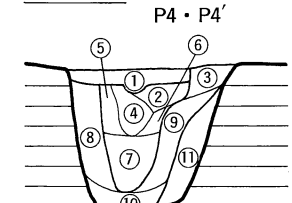
H = 36.50m



H = 36.50m



H = 36.50m



- ① 橙色粘質土
- ② 暗黄色粘質土
- ③ 暗灰褐色粘質土
- ④ 暗黄褐色粘質土
- ⑤ 黄褐色粘質土 (地山ブロックを含む)
- ⑥ 黄橙色粘質土 (地山ブロックを含む)
- ⑦ 黄色粘質土
- ⑧ 黄土色粘質土

- ① 灰色粘質土 (炭を含む)
- ② 黄橙色粘質土
- ③ 橙色粘質土
- ④ 黄橙色粘質土
- ⑤ 黄橙色粘質土
- ⑥ 黄土色粘質土
- ⑦ 淡赤褐色粘質土
- ⑧ 淡赤褐色粘質土
- ⑨ 黄褐色粘質土
- ⑩ 黄褐色粘質土
- ⑪ 淡灰褐色粘質土
- ⑫ 黄褐色土 (地山ブロックを含む)
- ⑬ 淡黄褐色粘質土 (炭を含む)
- ⑭ 淡黄褐色粘質土
- ⑮ 黄土色粘質土

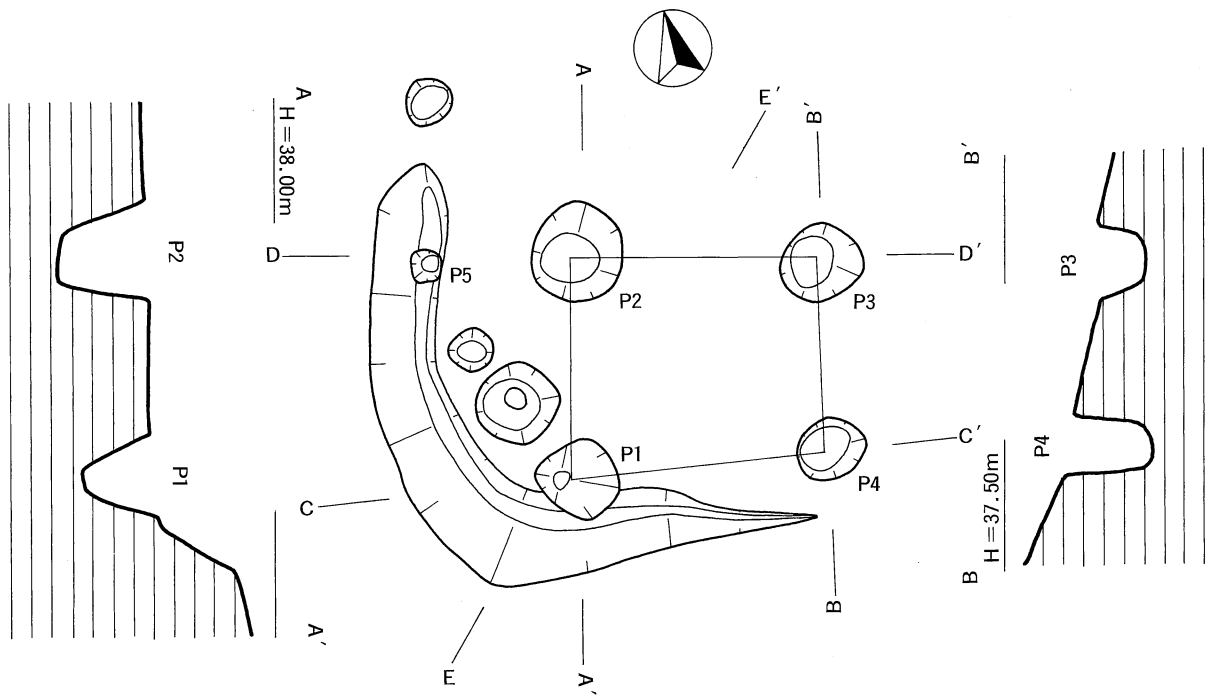
- ① 暗灰色粘質土
- ② 暗灰色粘質土
- ③ 黄色粘質土
- ④ 黄灰色粘質土
- ⑤ 灰色土
- ⑥ 黄白色土
- ⑦ 黄白色土
- ⑧ 黄白色土
- ⑨ 黄褐色粘質土

- ① 暗灰色粘質土 (炭を含む)
- ② 暗灰色粘質土 (炭を含む)
- ③ 黄褐色粘質土
- ④ 灰色粘質土
- ⑤ 黄灰色粘質土

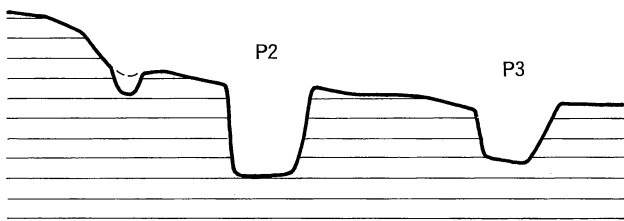
(1 : 40)



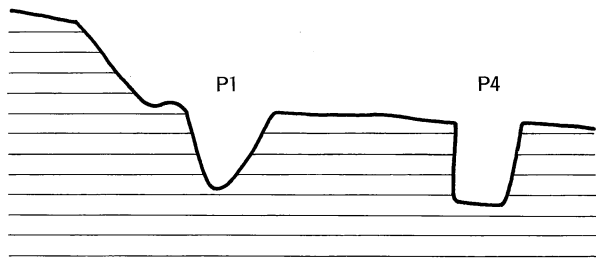
挿図217 陰田広畑遺跡 8テラスSI02土層図



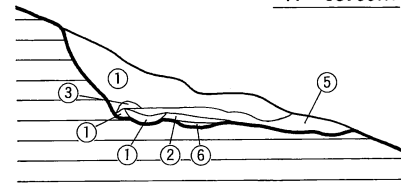
D H = 38.00m D'



C H = 38.00m C'



E H = 38.00m E'

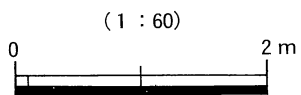
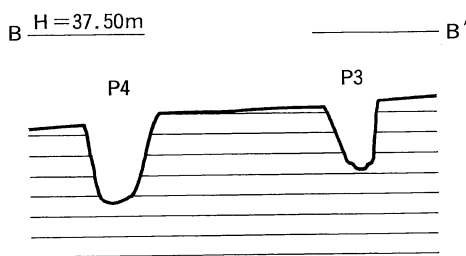
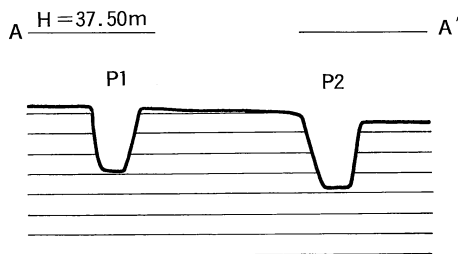
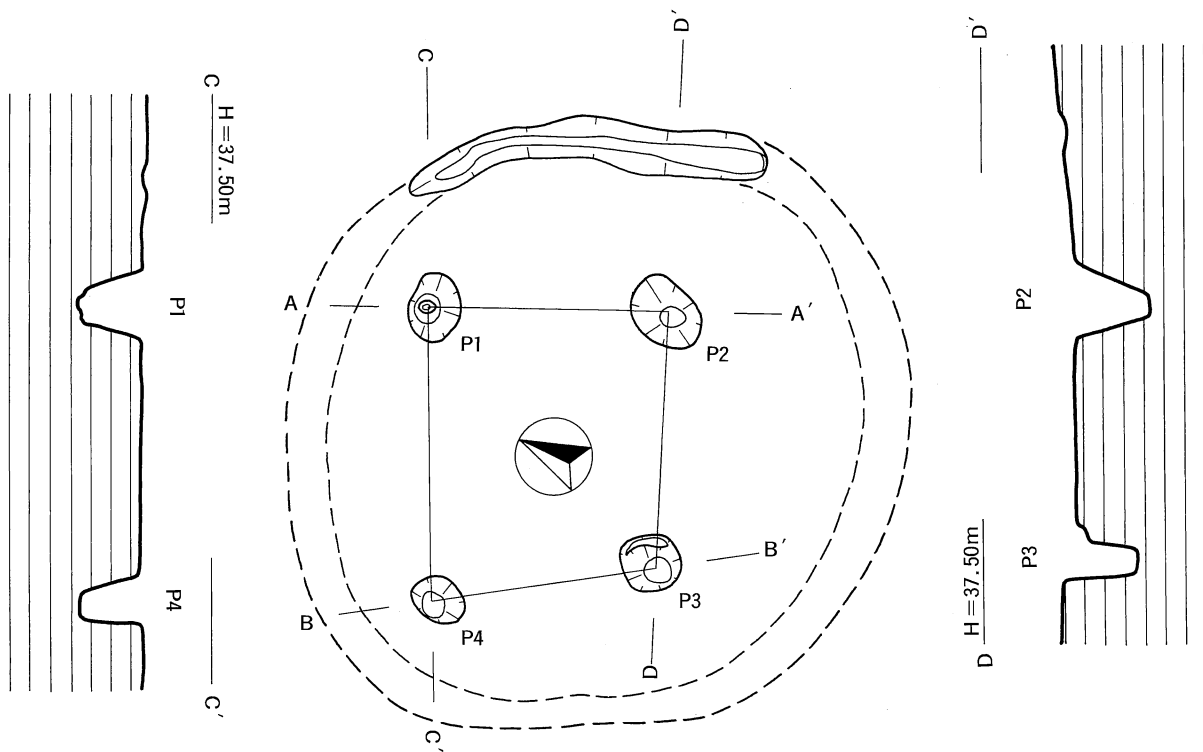


- ① 赤褐色粘質土 (炭化物混)
- ② 暗赤褐色粘質土 (炭化物、地山ブロック混)
- ③ 赤黄褐色粘質土 (炭化物、地山ブロック混)
- ④ 赤褐色粘質土 (炭化物混)
- ⑤ ①と②の混合層 (炭化物、地山ブロック混)
- ⑥ 暗赤褐色粘質土 (②より暗い)

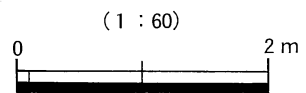
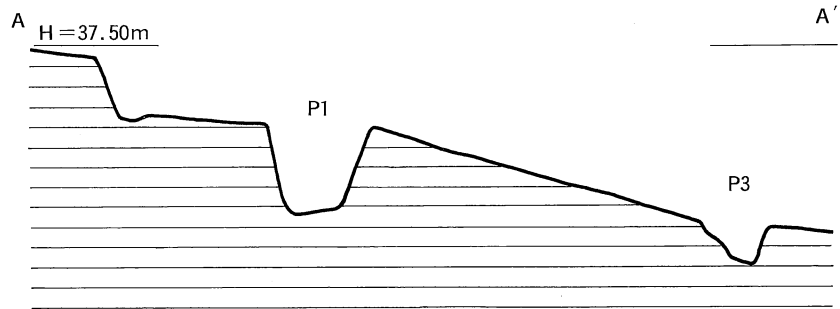
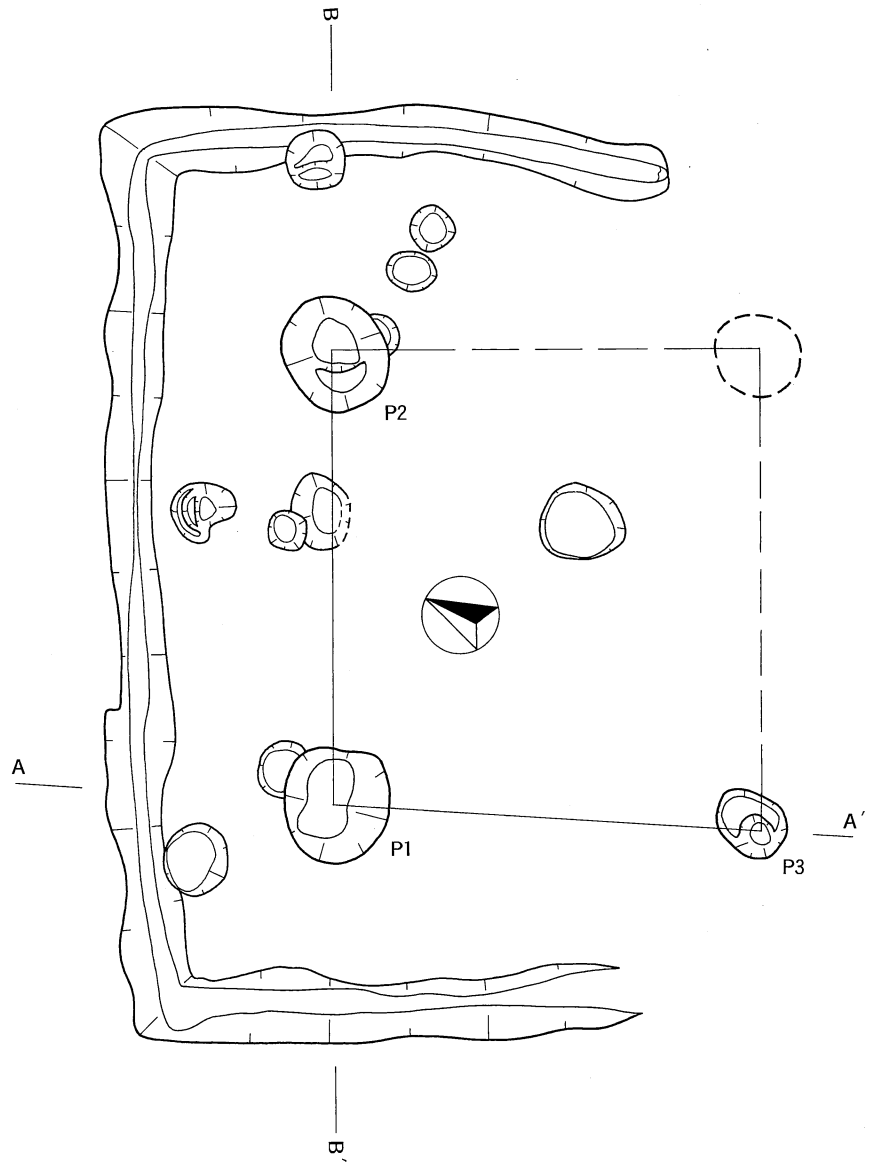
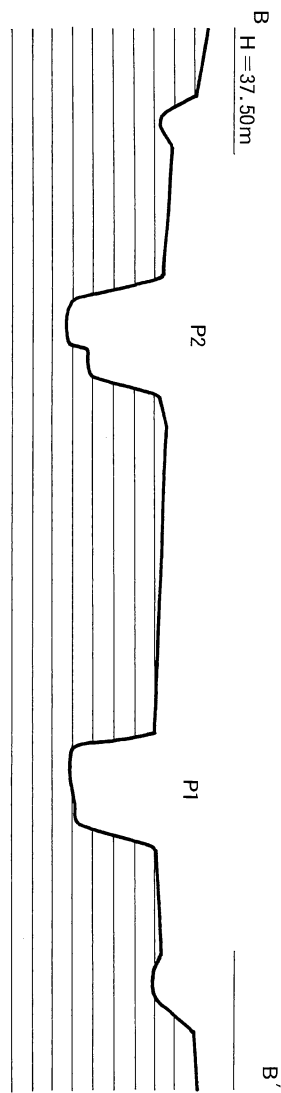
(1 : 60)



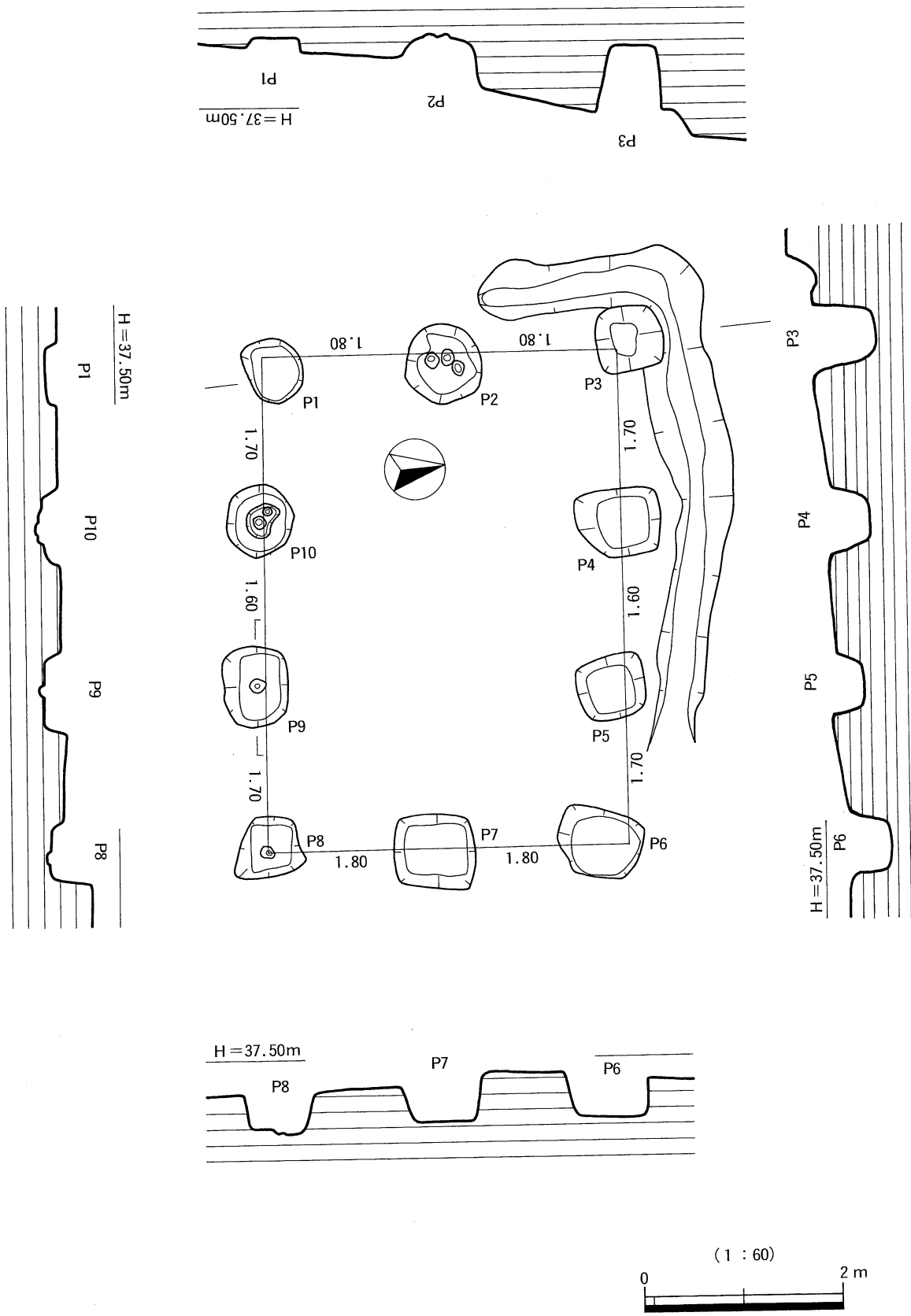
挿図218 陰田広畑遺跡 8テラスSI03遺構図



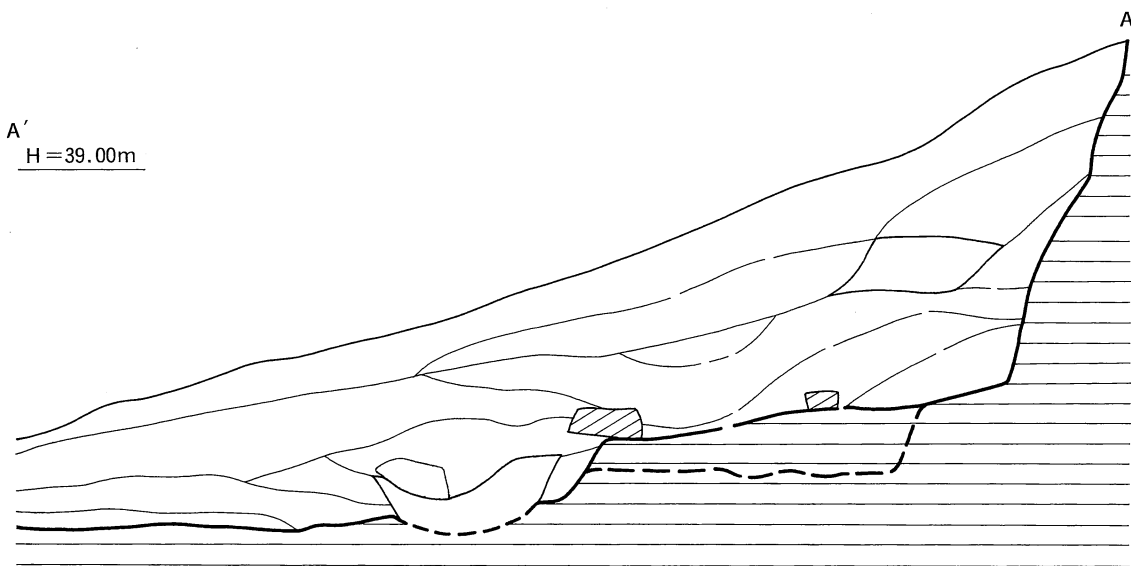
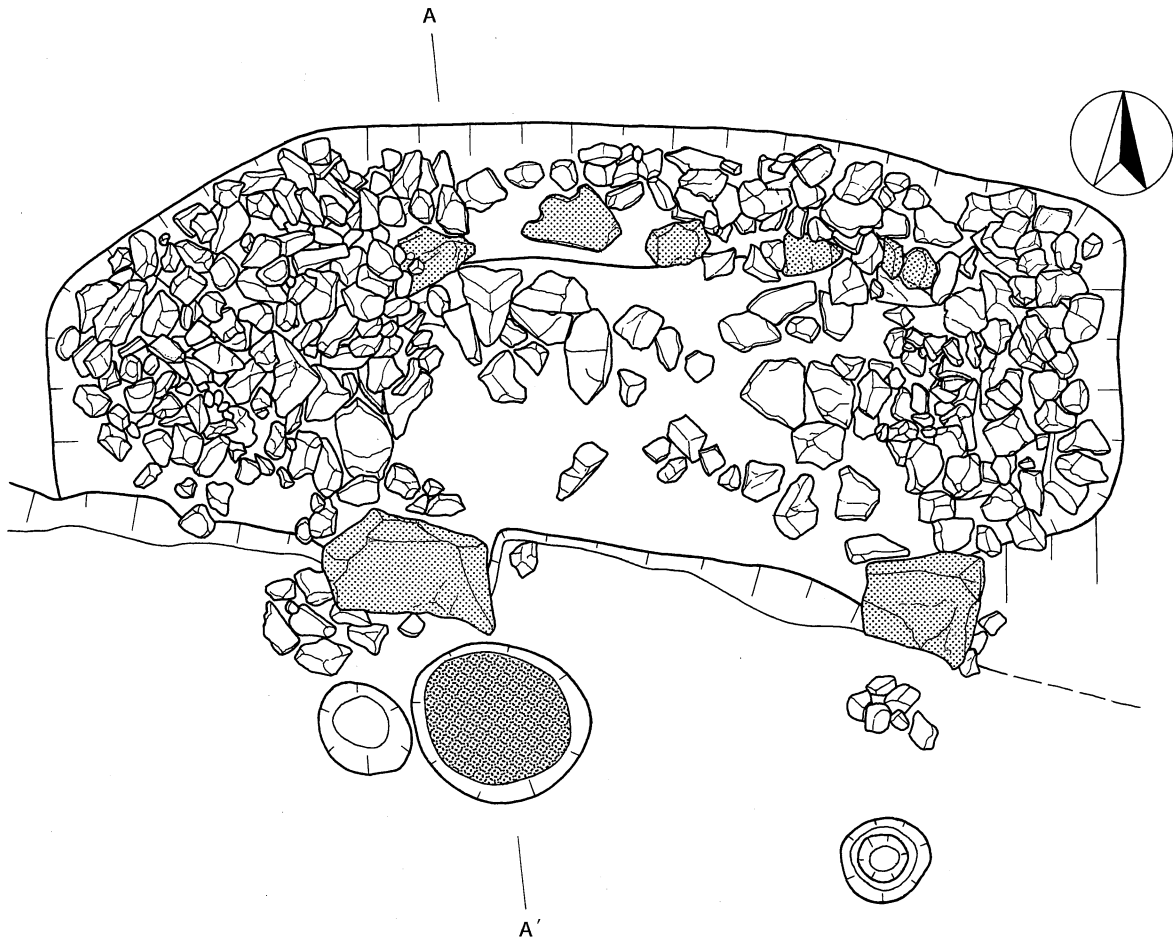
挿図219 陰田広畑遺跡 8テラスSI04遺構図



挿図220 陰田広畑遺跡 8テラスSI05遺構図



挿図221 陰田広畑遺跡 8テラスSB46遺構図

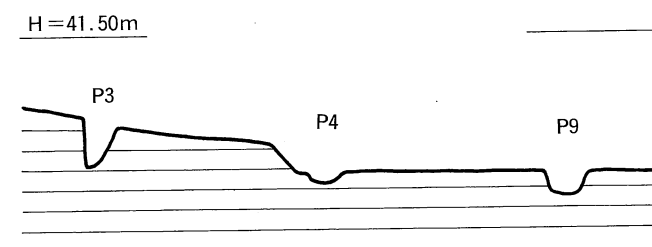
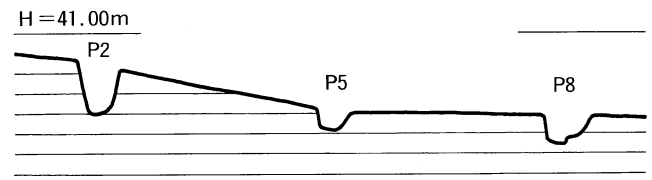
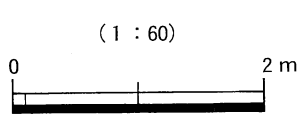
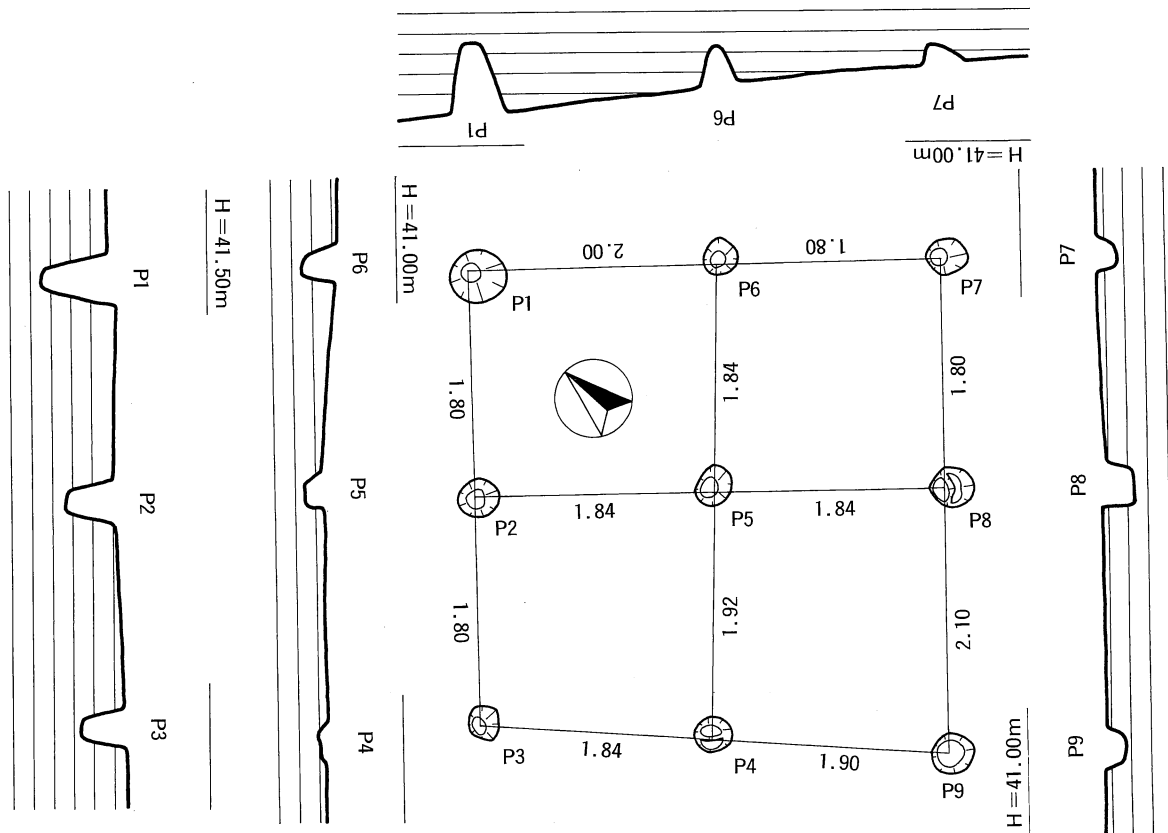


- | | |
|----------------------------|--------------------|
| ① 表土 | ⑦ 赤褐色粘質土 (赤色粘質岩混) |
| ② 褐色粘質土 (赤色粘質岩 (地山) ブロック混) | ⑧ 明赤褐色粘質土 (炭化物混) |
| ③ 黄褐色粘質土 | ⑨ 茶褐色粘質土 (②と炭化物混) |
| ④ 赤褐色粘質土 | ⑩ 暗褐色粘質土 (炭化物、焼土混) |
| ⑤ 赤黄褐色粘質土 (③と④混) | ⑪ 明赤褐色粘質土 (炭化物混) |
| ⑥ 黒褐色粘質土 (炭混多し、焼土混) | ⑫ 暗赤褐色粘質土 (炭化物混) |

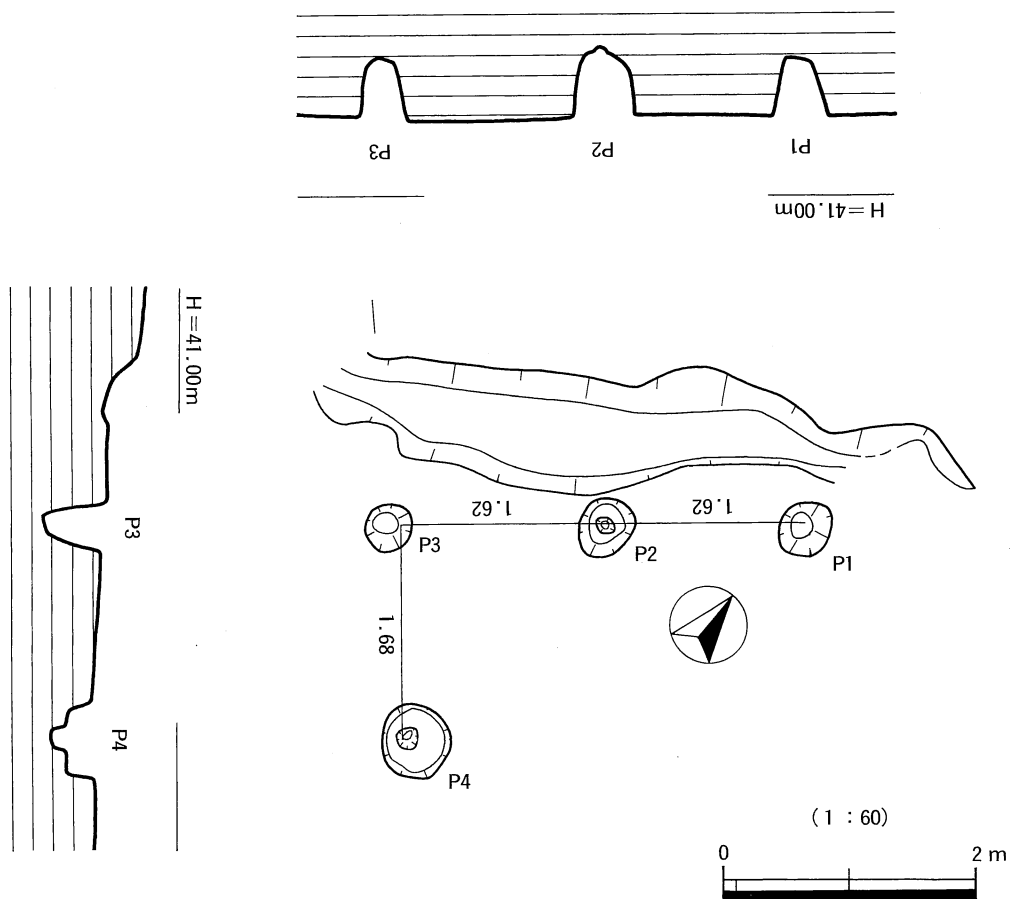
(1 : 30)



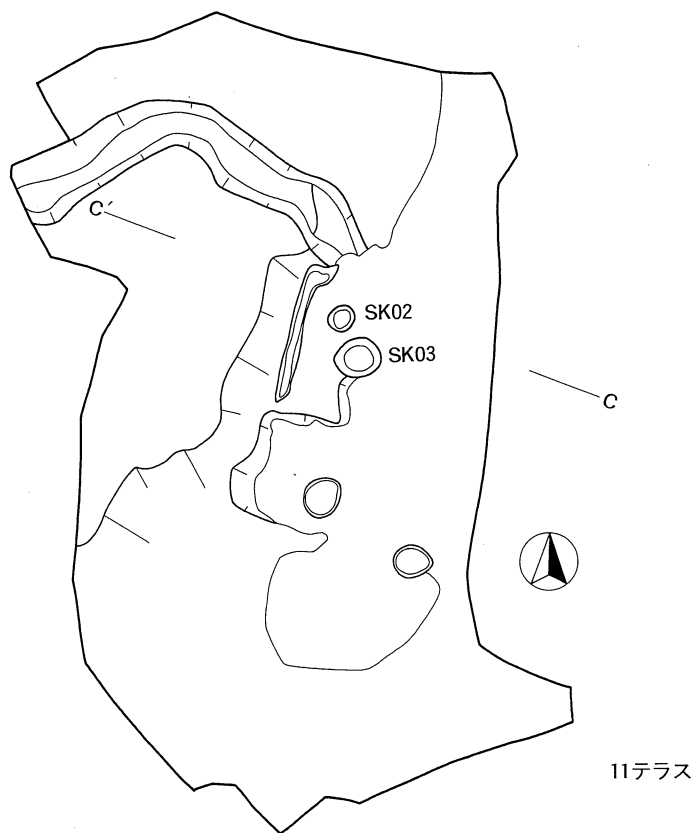
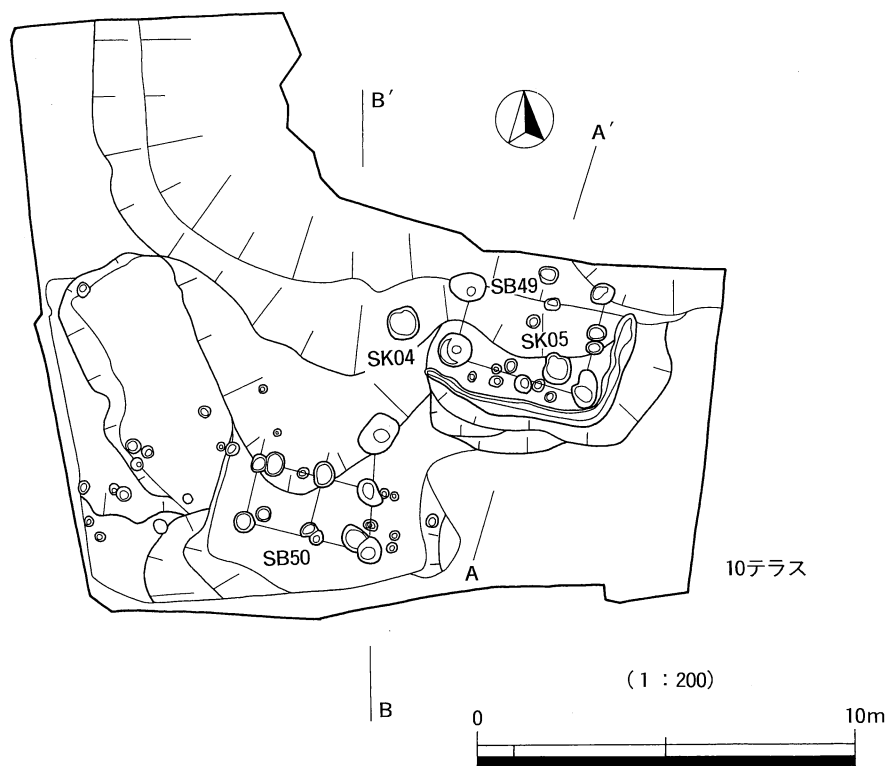
挿図222 陰田広畑遺跡 8テラス石敷遺構遺構図



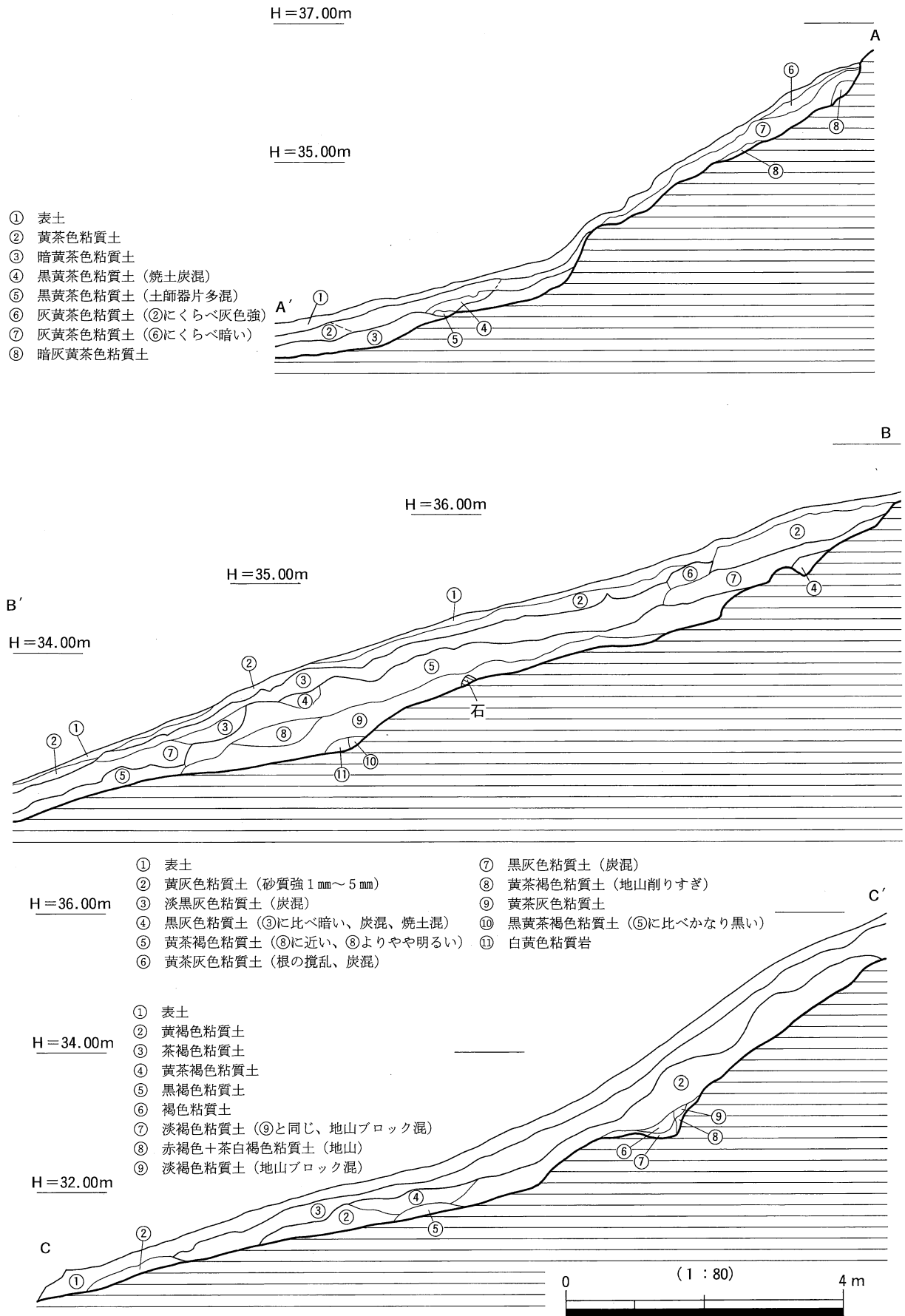
挿図223 陰田広畑遺跡 9テラスSB47遺構図



挿図224 陰田広畑遺跡 9テラスSB48遺構図



挿図225 陰田広畑遺跡 10・11テラス遺構分布図

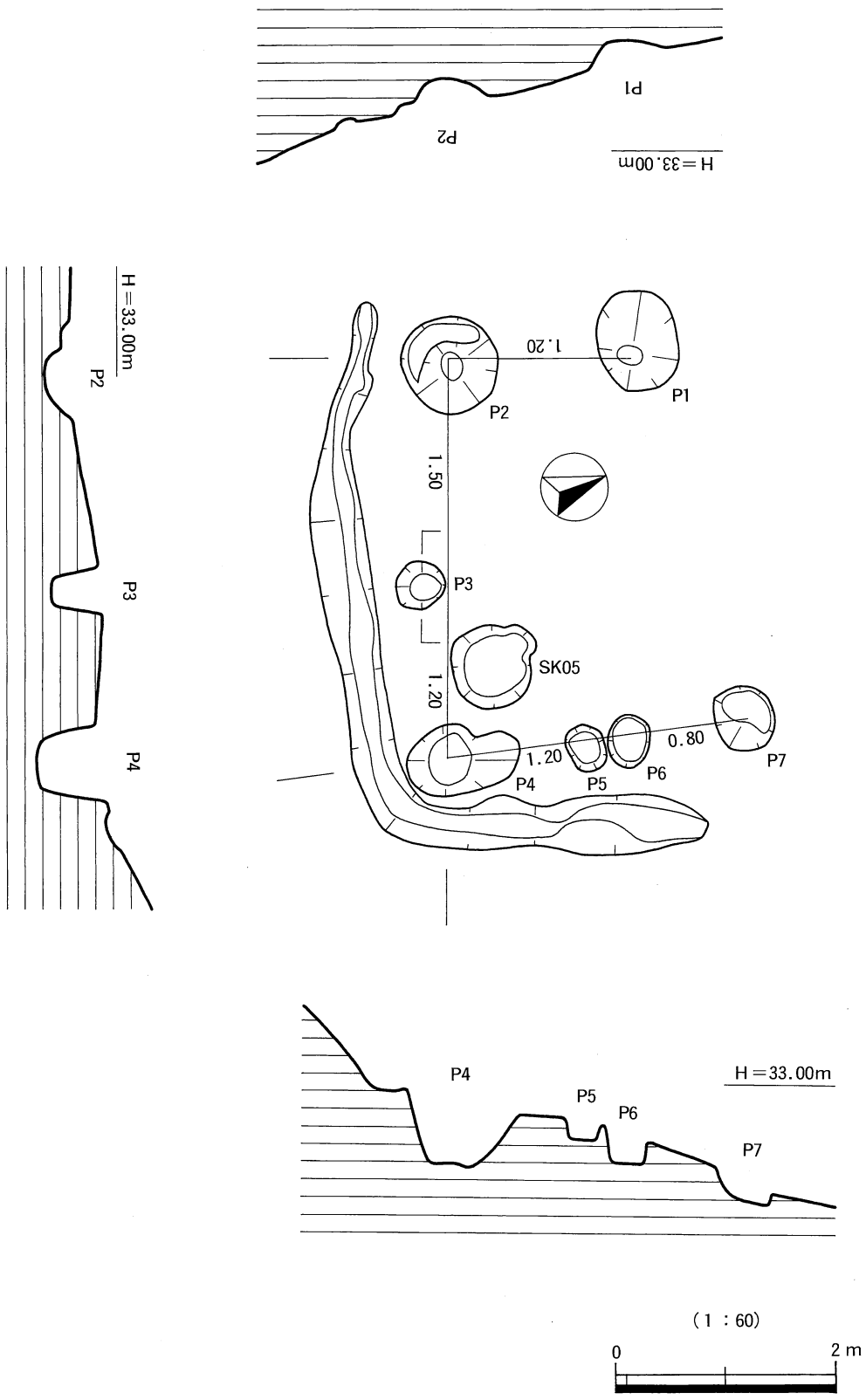


- ① 表土
- ② 黄茶色粘質土
- ③ 暗黄茶色粘質土
- ④ 黒黄茶色粘質土 (焼土炭混)
- ⑤ 黒黄茶色粘質土 (土師器片多混)
- ⑥ 灰黄茶色粘質土 (②にくらべ灰色強)
- ⑦ 灰黄茶色粘質土 (⑥にくらべ暗い)
- ⑧ 暗灰黄茶色粘質土

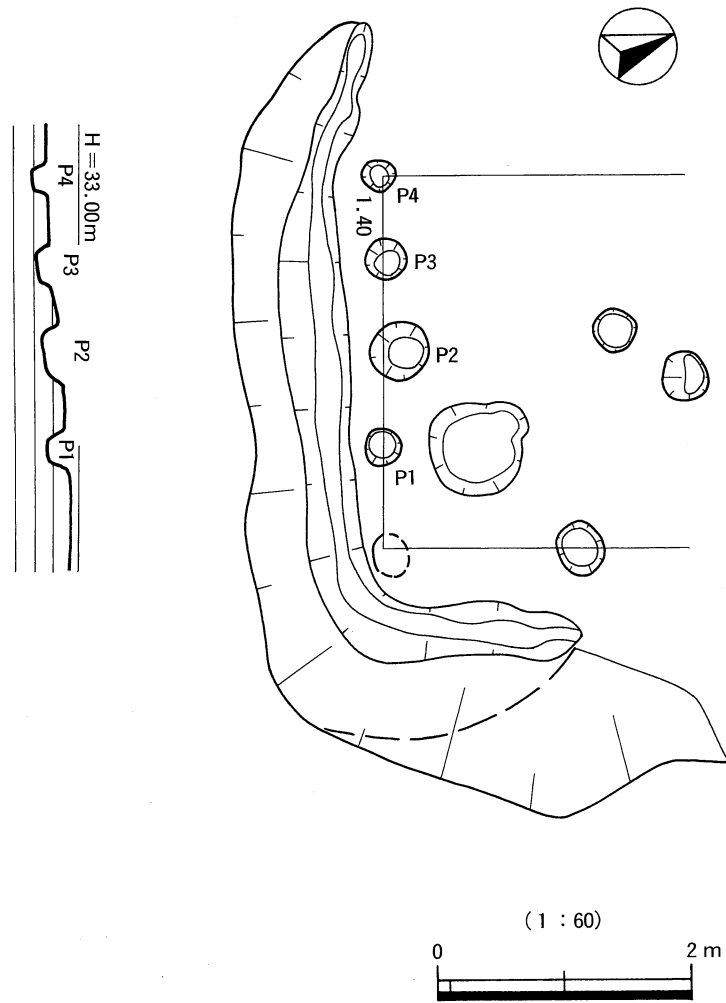
- ① 表土
- ② 黄灰色粘質土 (砂質強 1mm~5mm)
- ③ 淡黒灰色粘質土 (炭混)
- ④ 黒灰色粘質土 (③に比べ暗い、炭混、焼土混)
- ⑤ 黄茶褐色粘質土 (⑧に近い、⑥よりやや明るい)
- ⑥ 黄茶灰色粘質土 (根の攪乱、炭混)
- ⑦ 黒灰色粘質土 (炭混)
- ⑧ 黄茶褐色粘質土 (地山削りすぎ)
- ⑨ 黄茶灰色粘質土
- ⑩ 黒黄茶褐色粘質土 (⑤に比べかなり黒い)
- ⑪ 白黄色粘質岩

- ① 表土
- ② 黄褐色粘質土
- ③ 茶褐色粘質土
- ④ 黄茶褐色粘質土
- ⑤ 黒褐色粘質土
- ⑥ 褐色粘質土
- ⑦ 淡褐色粘質土 (⑨と同じ、地山ブロック混)
- ⑧ 赤褐色+茶白褐色粘質土 (地山)
- ⑨ 淡褐色粘質土 (地山ブロック混)

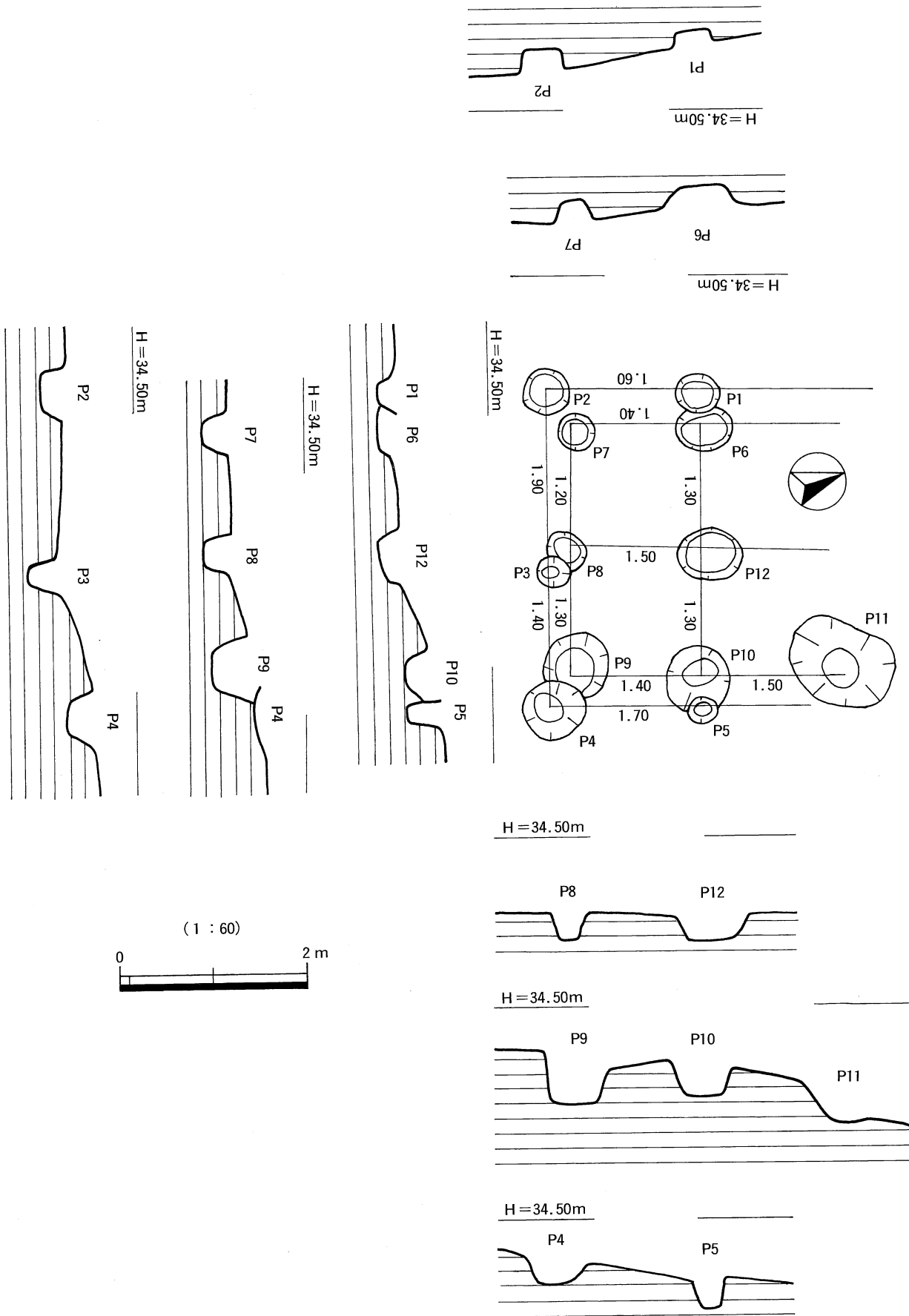
挿図226 陰田広畑遺跡 10テラス土層図



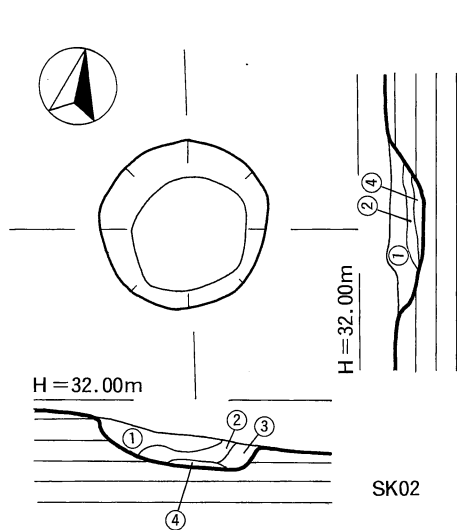
挿図227 陰田広畑遺跡 10テラスSB49A遺構図



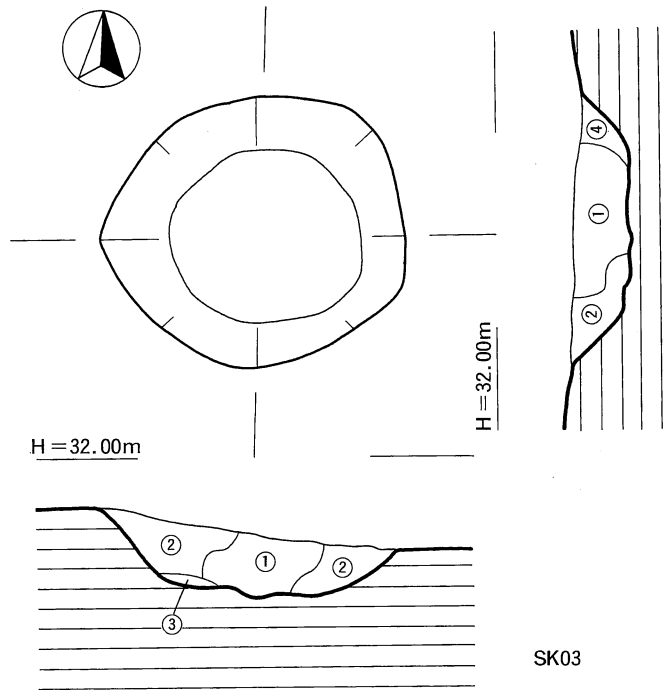
挿図228 陰田広畑遺跡 10テラスSB49B遺構図



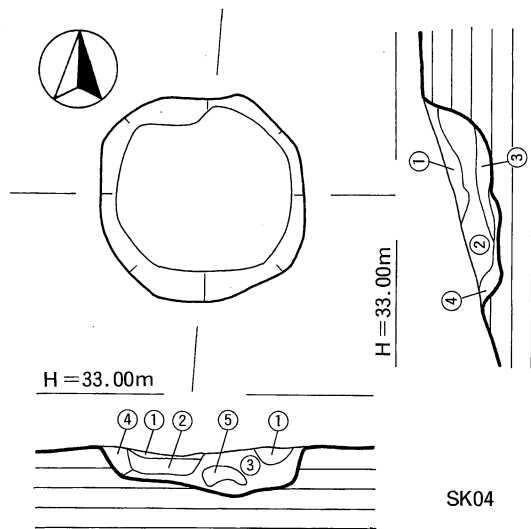
挿図229 陰田広畑遺跡 10テラスSB50遺構図



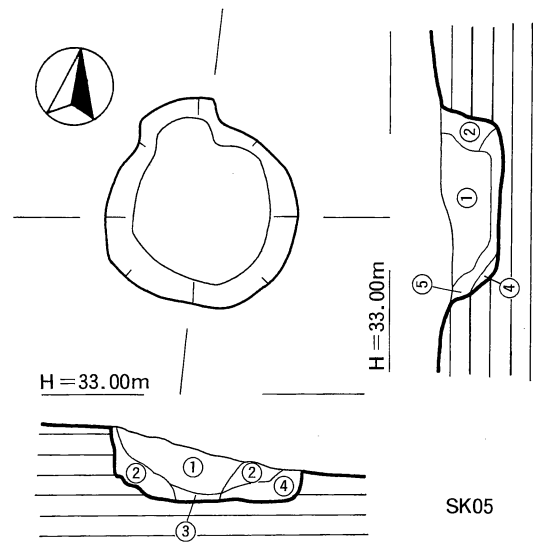
- ① 黒灰色粘質土 (炭混、焼土混)
- ② 赤茶褐色粘質土 (炭混、焼土混)
- ③ 黒灰色粘質土 (①よりも炭多い、焼土混)
- ④ 黒色粘質土 (炭化層)
- ⑤ 黒灰色粘質土 (①よりも炭が大きい)



- ① 黒灰色粘質土 (炭混、焼土混)
- ② 暗灰色粘質土 (炭混、焼土混、地山ブロック混)
- ③ 黒灰色粘質土 (①よりも炭多い)
- ④ 黄灰色粘質土 (炭混)



- ① 灰黒色粘質土 (炭混、焼土混)
- ② 茶褐色粘質土 (炭混、焼土混)
- ③ 黒茶褐色粘質土 (炭化層、焼土混)
- ④ 暗茶褐色粘質土 (炭混)
- ⑤ 橙色粘質土

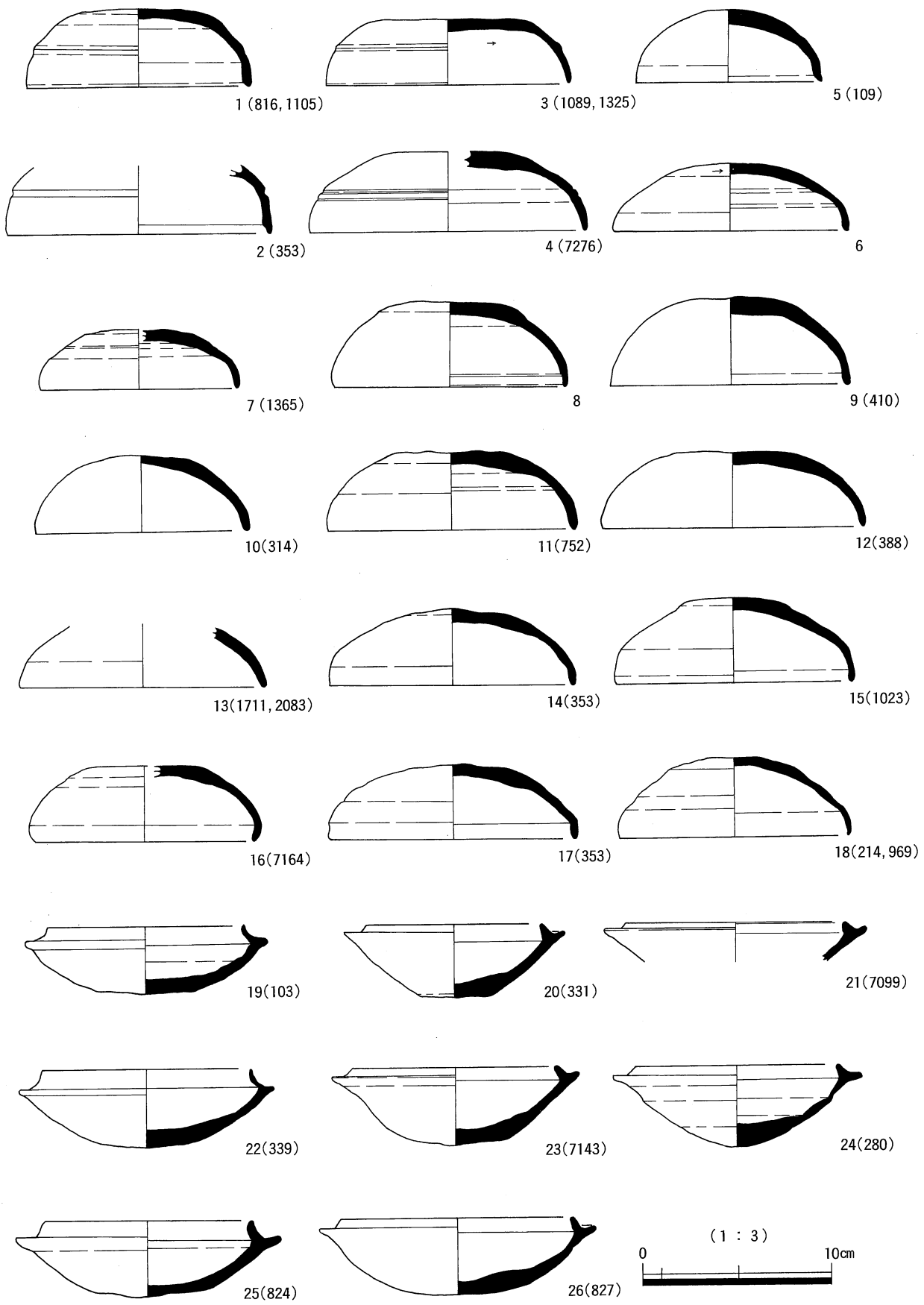


- ① 黒灰色粘質土 (炭混、焼土混)
- ② 灰褐色粘質土 (炭混、地山ブロック混)
- ③ 黒灰色粘質土 (炭混、焼土混)
- ④ 橙黄色粘質土 (地山)
- ⑤ 灰色粘質土 (炭混)

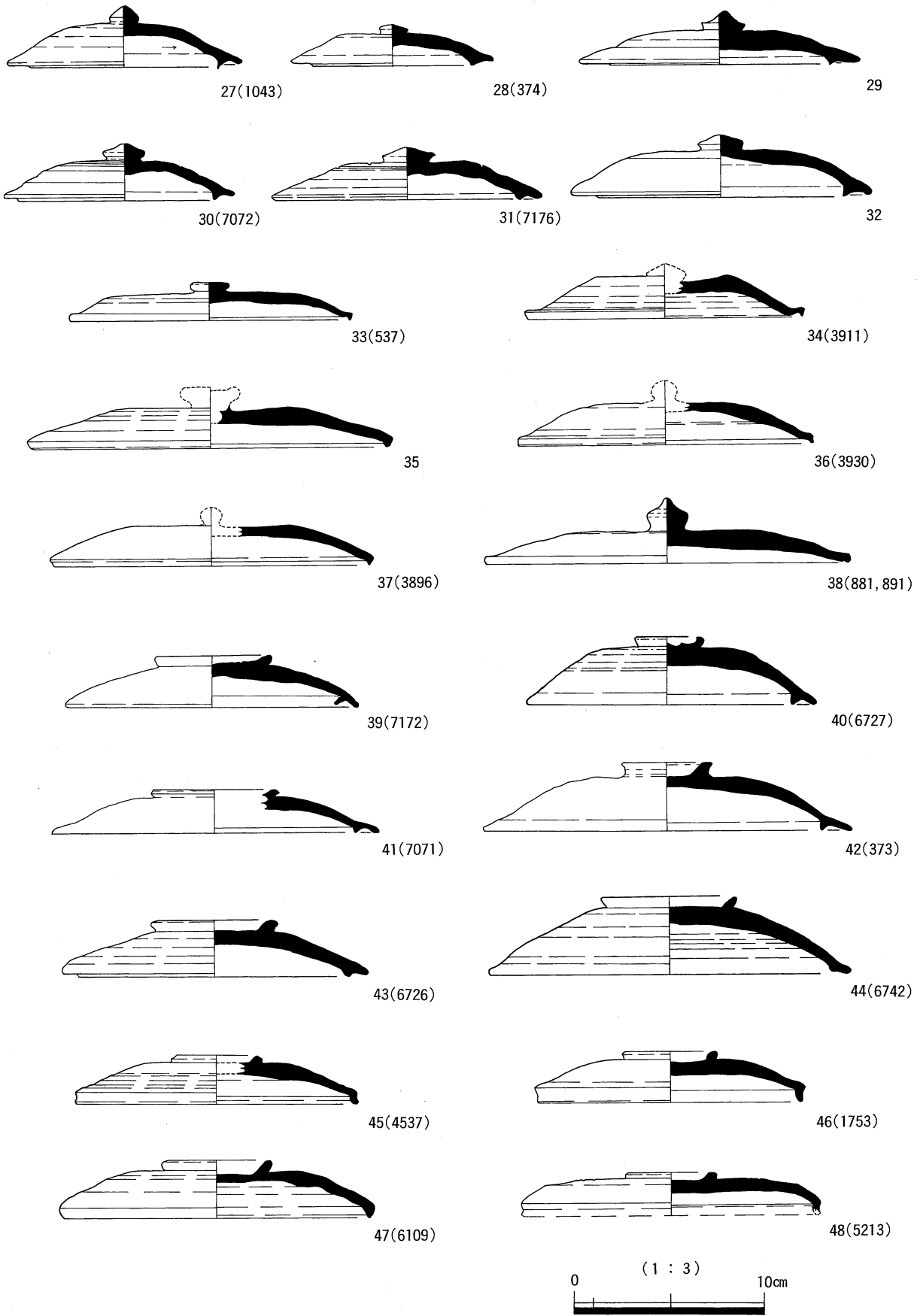
(1 : 30)



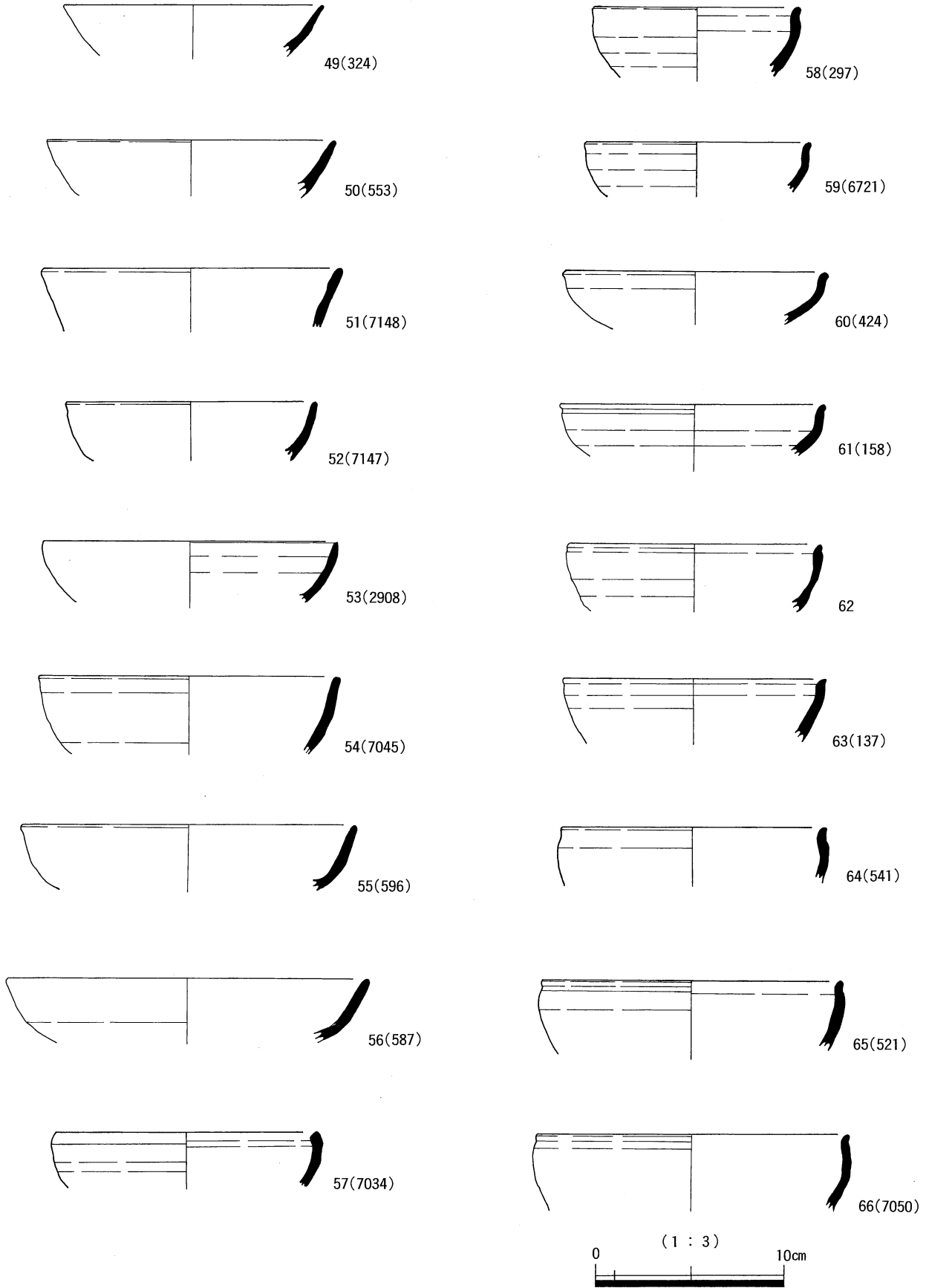
挿図230 陰田広畑遺跡 10・11テラス SK02~05遺構図



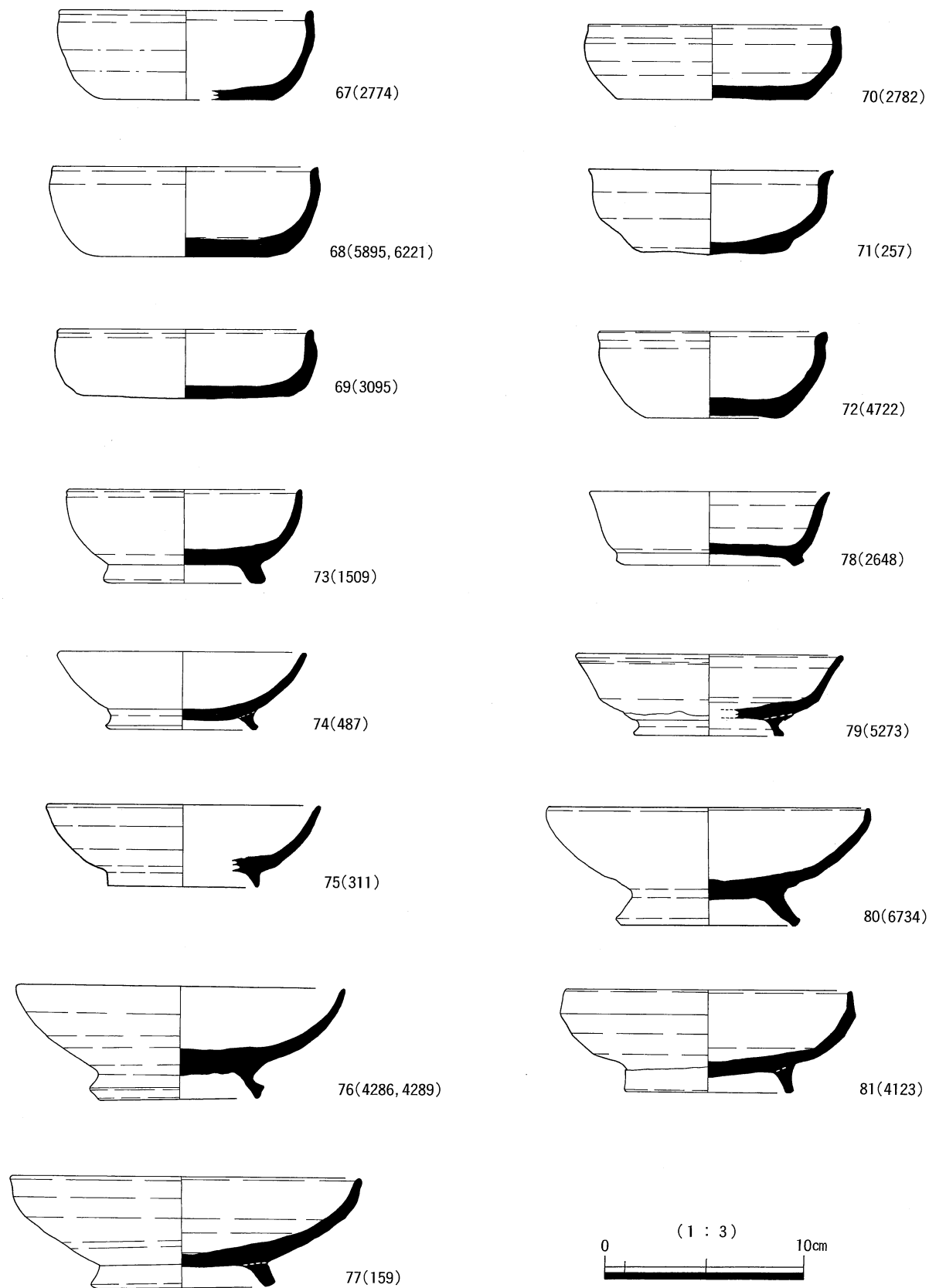
挿図231 陰田広畑遺跡 出土遺物 (1)



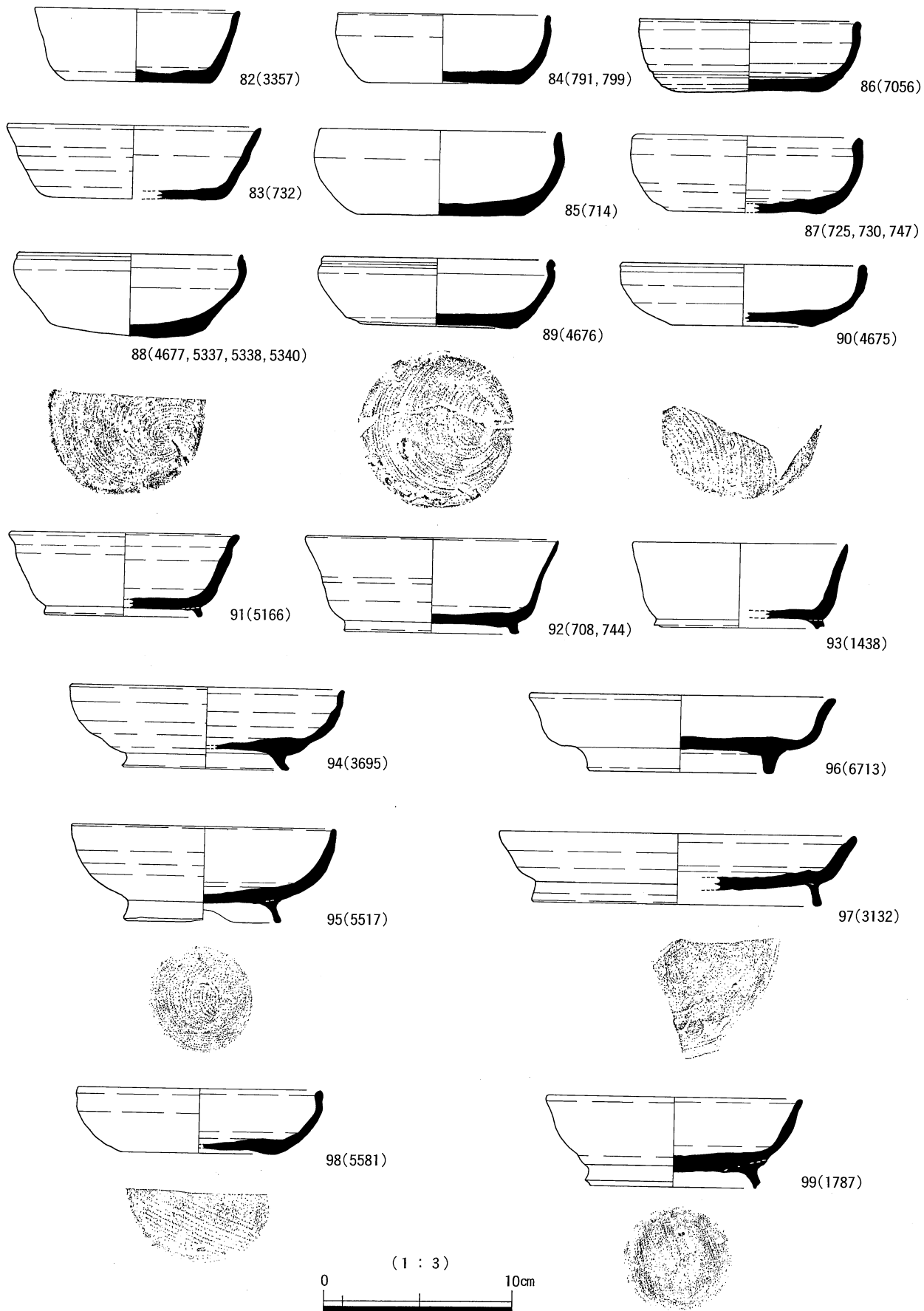
挿図232 陰田広畑遺跡 出土遺物 (2)



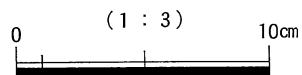
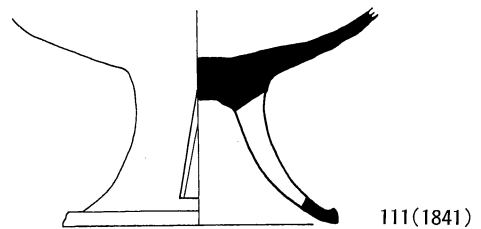
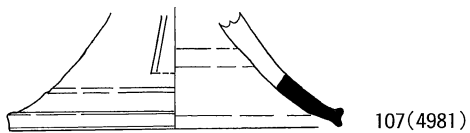
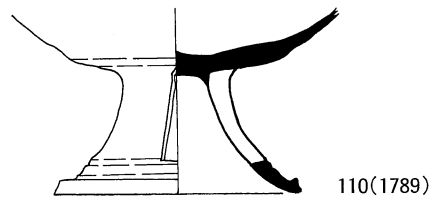
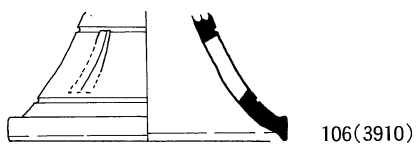
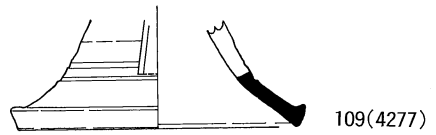
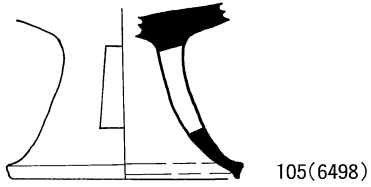
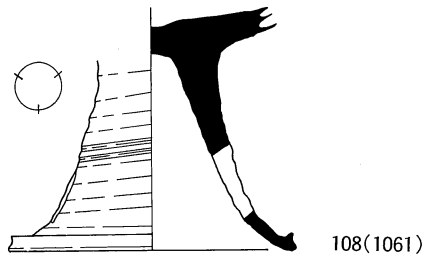
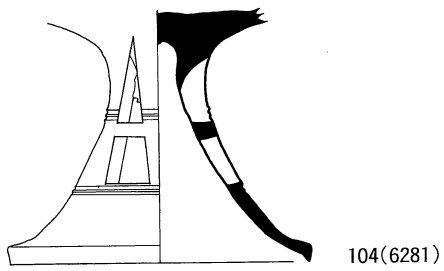
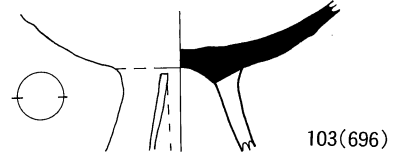
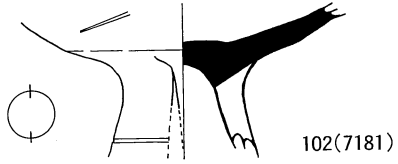
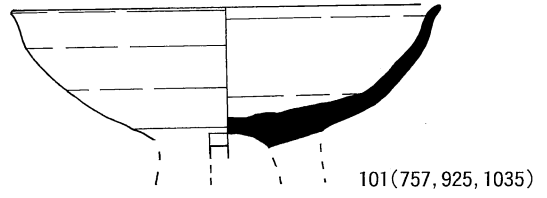
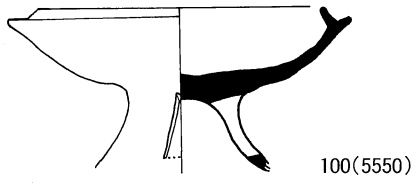
挿図233 陰田広畑遺跡 出土遺物 (3)



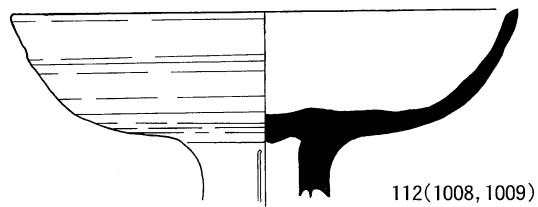
挿図234 陰田広畑遺跡 出土遺物 (4)



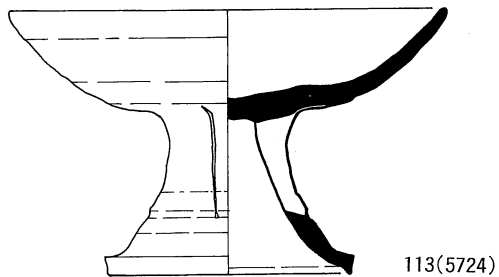
挿図235 陰田広畑遺跡 出土遺物 (5)



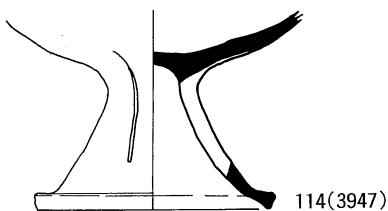
挿図236 陰田広畑遺跡 出土遺物 (6)



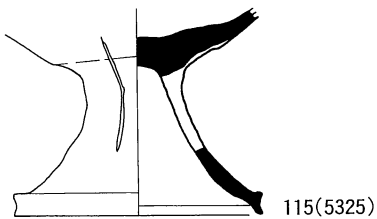
112(1008, 1009)



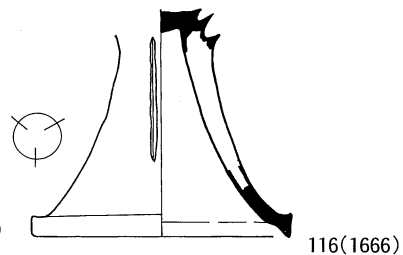
113(5724)



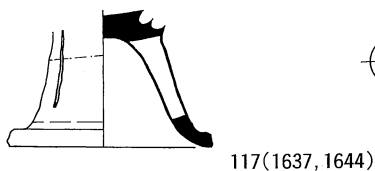
114(3947)



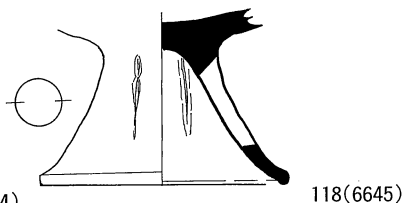
115(5325)



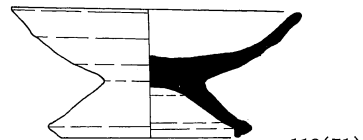
116(1666)



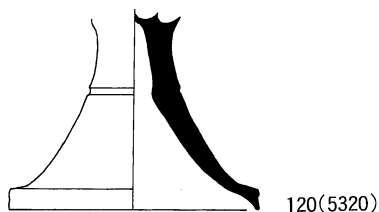
117(1637, 1644)



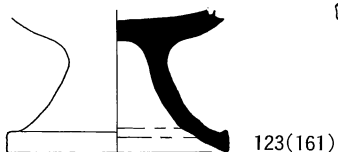
118(6645)



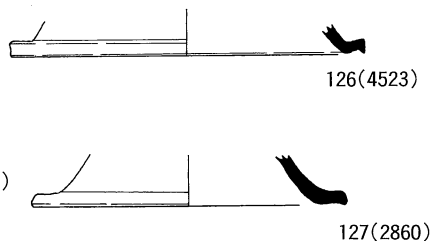
119(71)



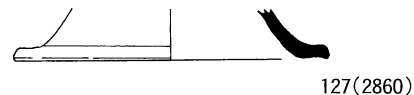
120(5320)



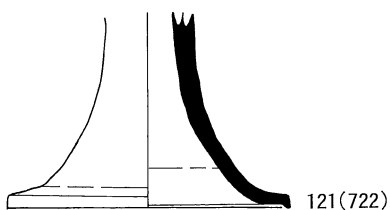
123(161)



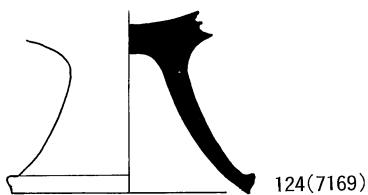
126(4523)



127(2860)



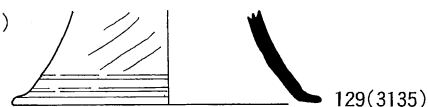
121(722)



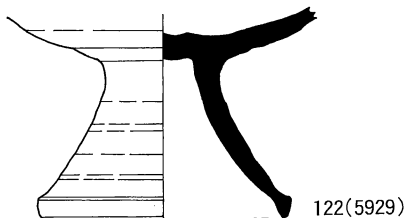
124(7169)



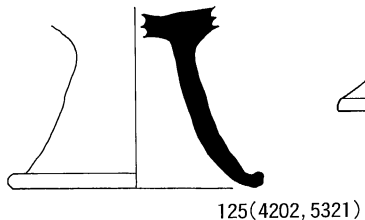
128(3448)



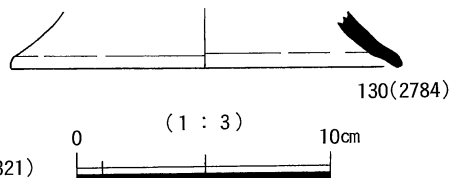
129(3135)



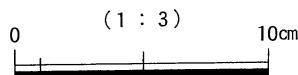
122(5929)



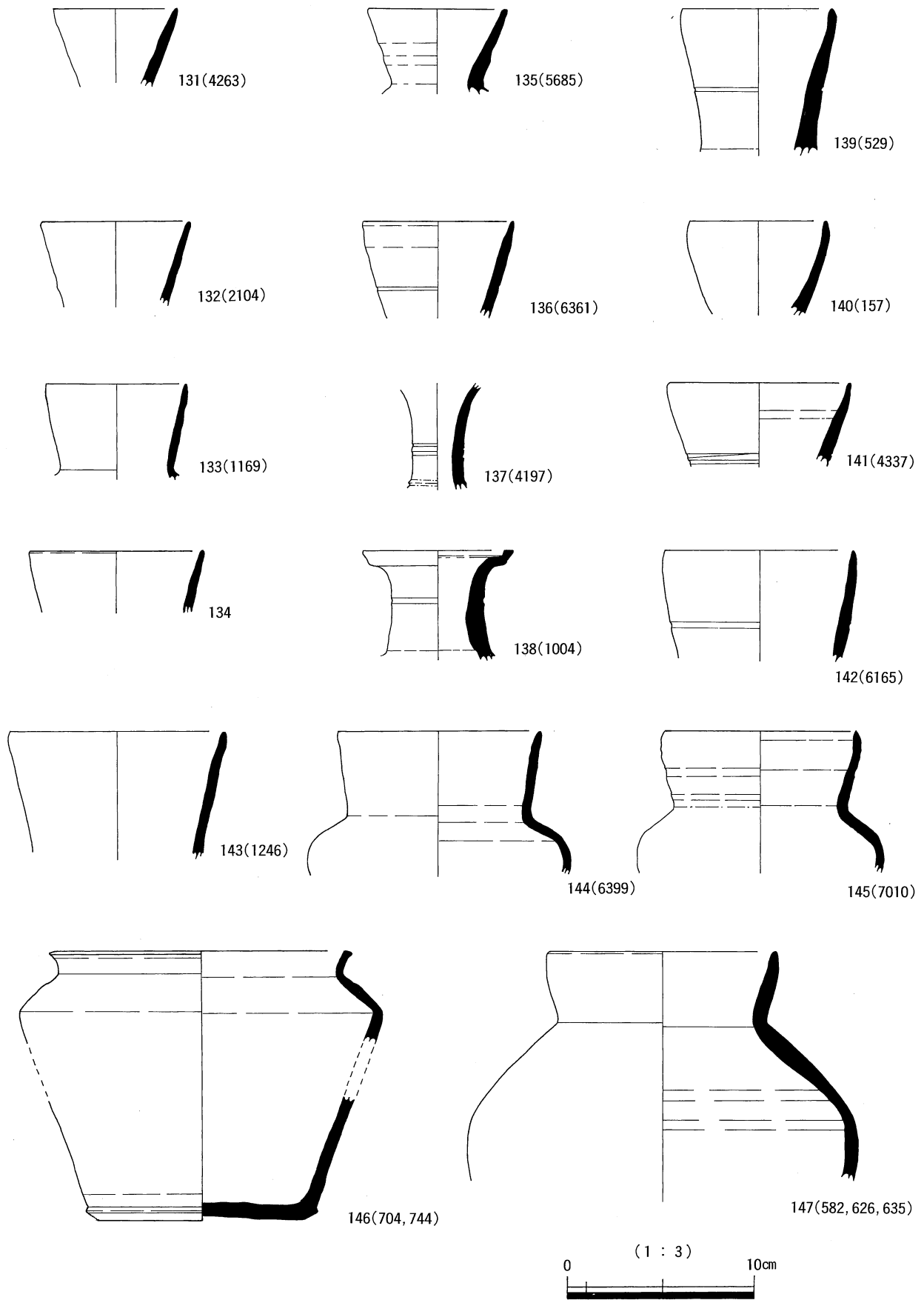
125(4202, 5321)



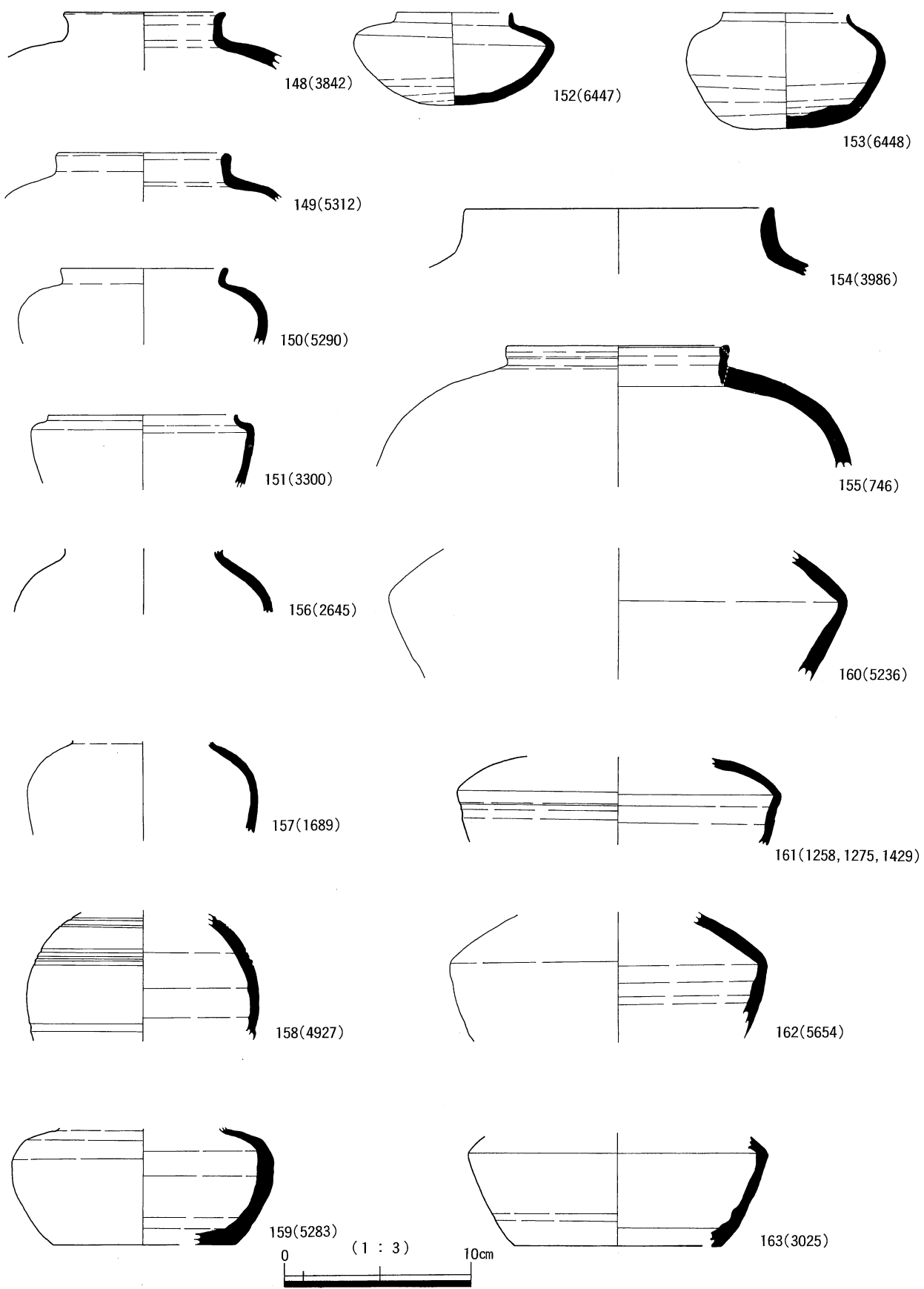
130(2784)



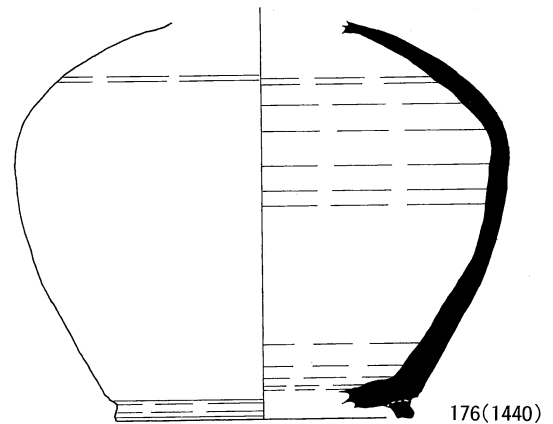
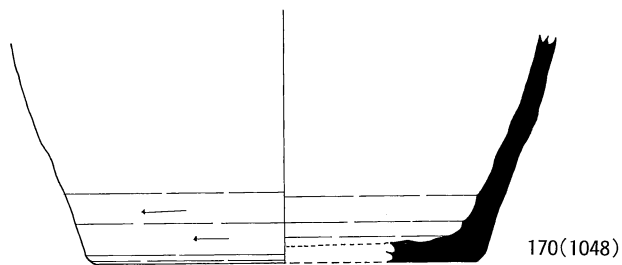
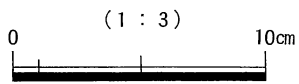
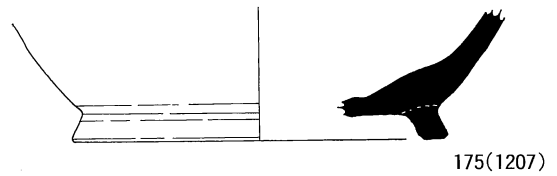
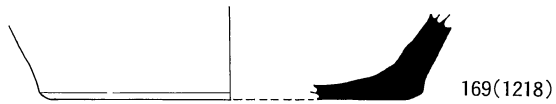
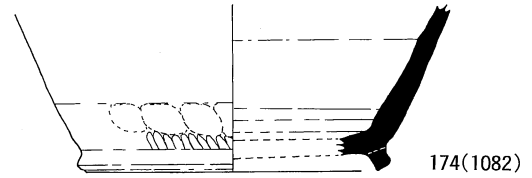
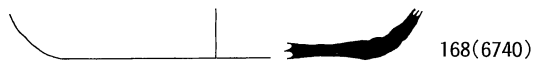
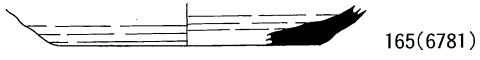
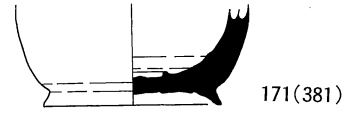
挿図237 陰田広畑遺跡 出土遺物 (7)



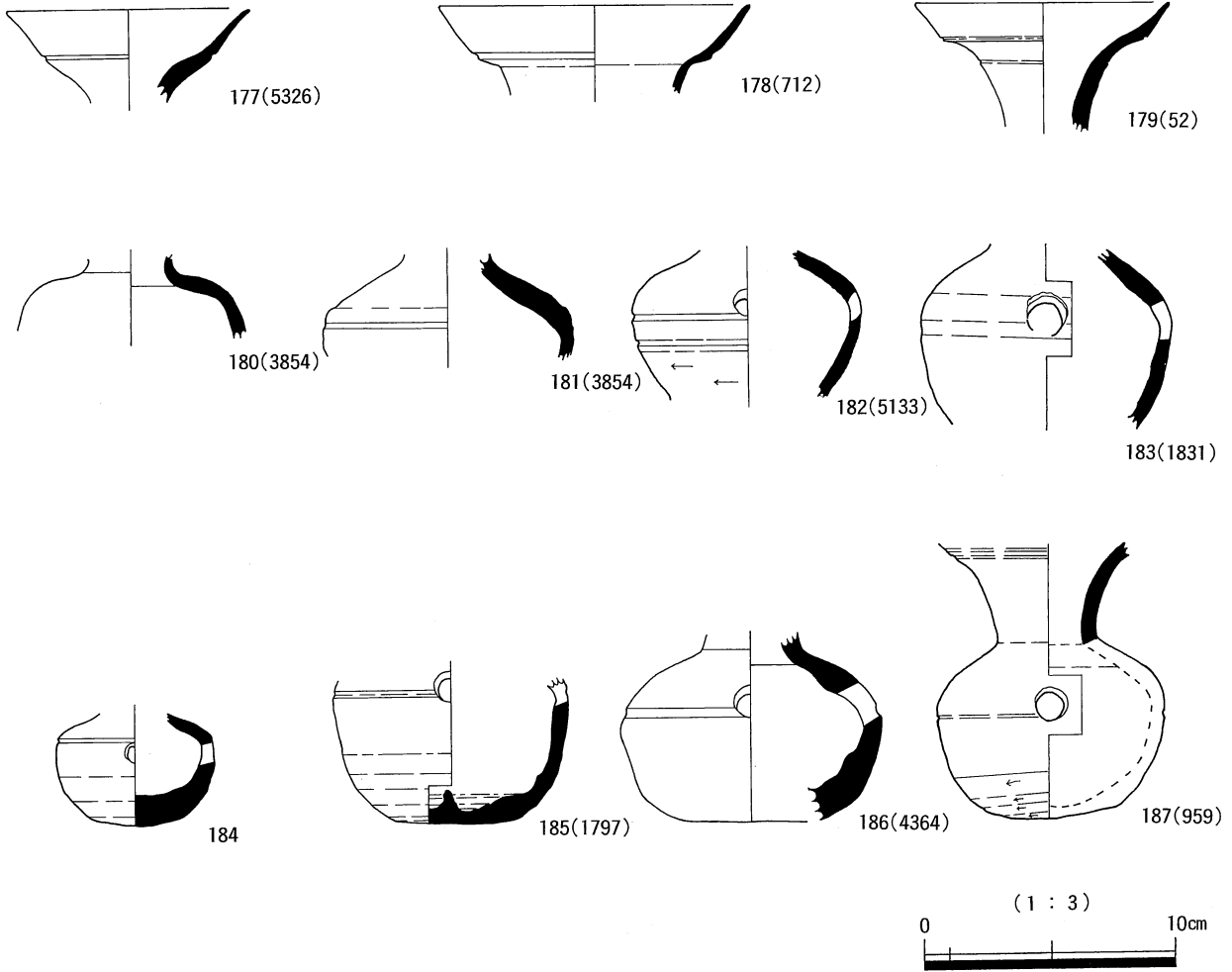
挿図238 陰田広畑遺跡 出土遺物 (8)



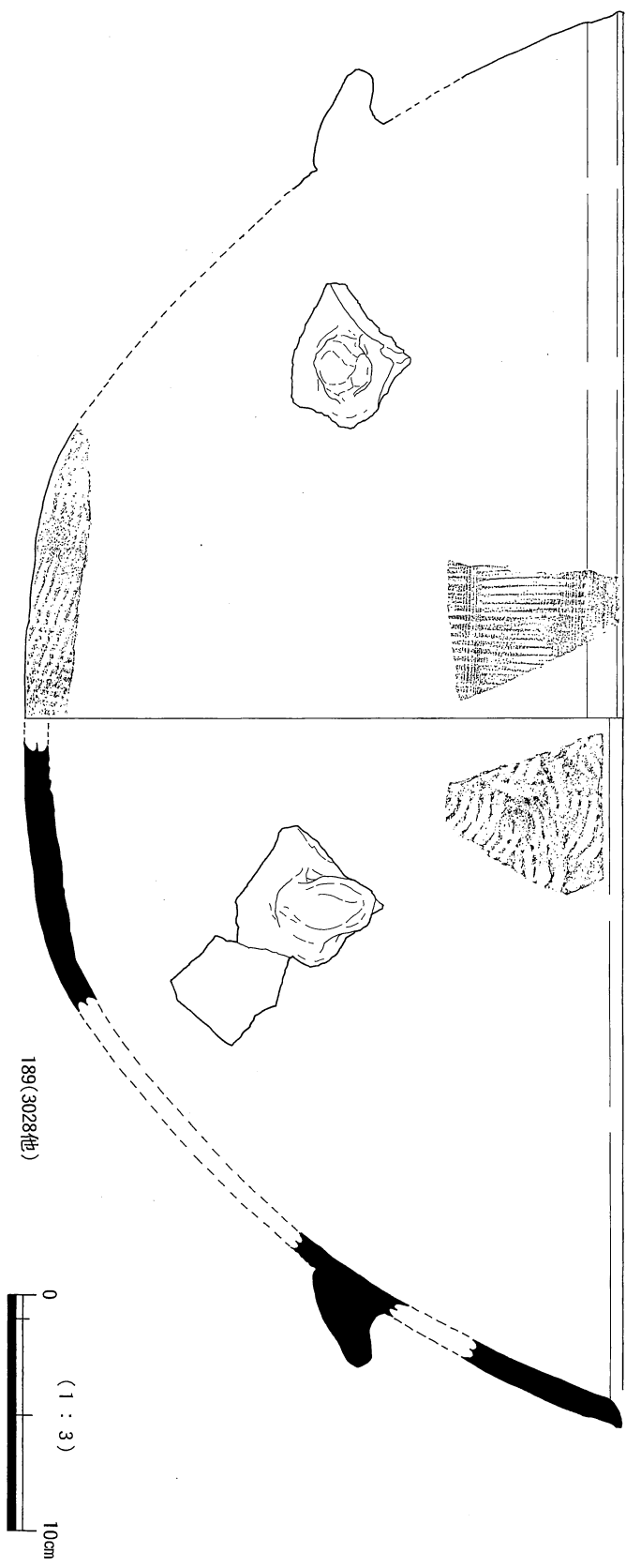
挿図239 陰田広畑遺跡 出土遺物 (9)



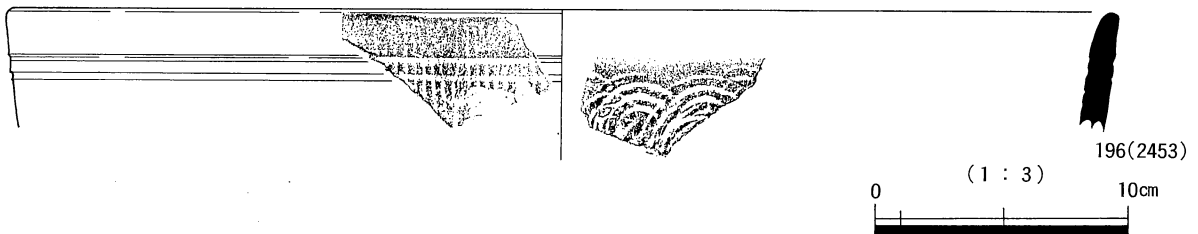
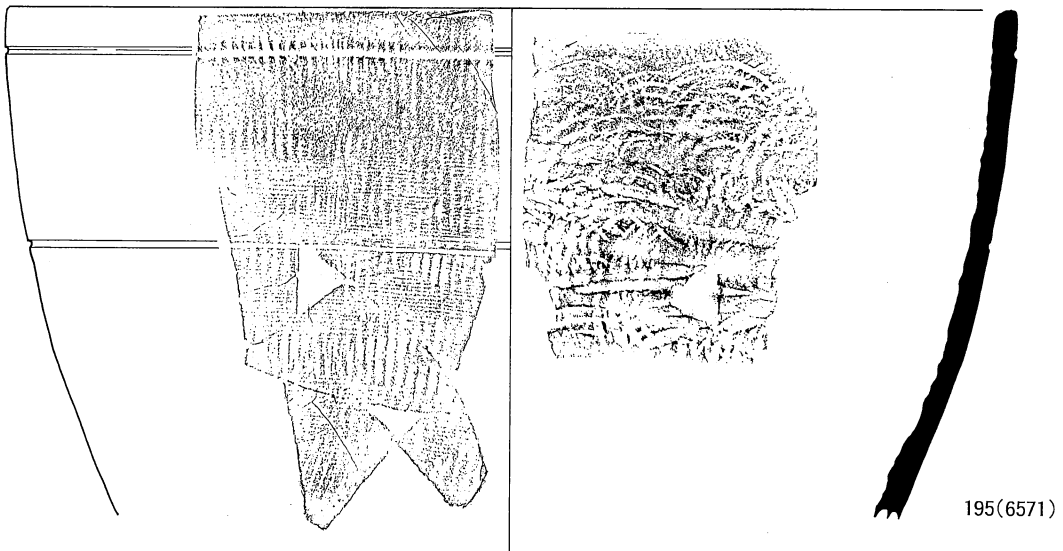
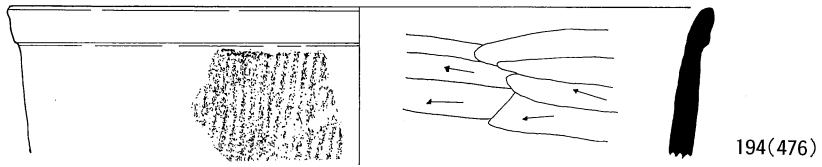
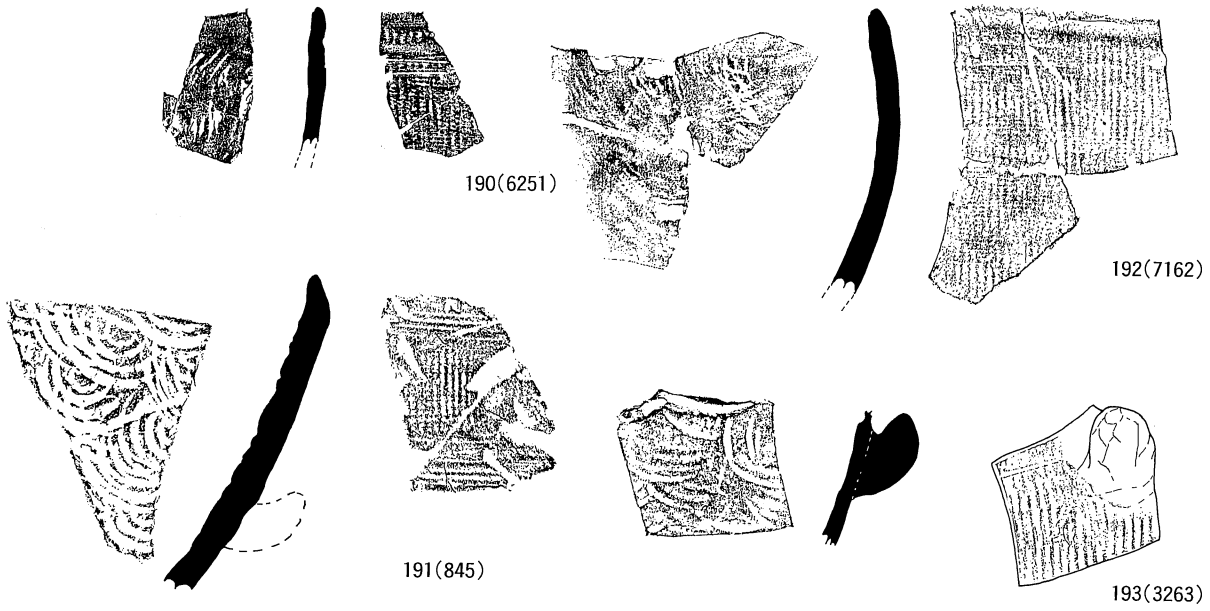
挿図240 陰田広畑遺跡 出土遺物 (10)



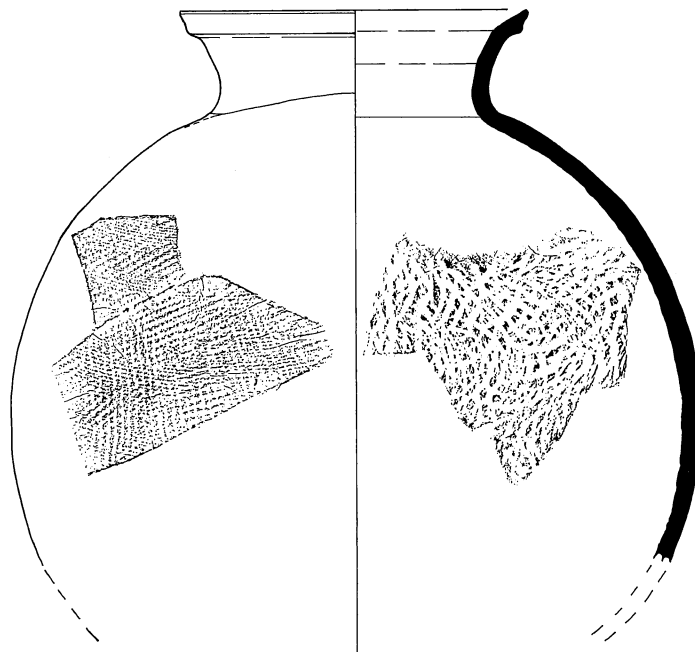
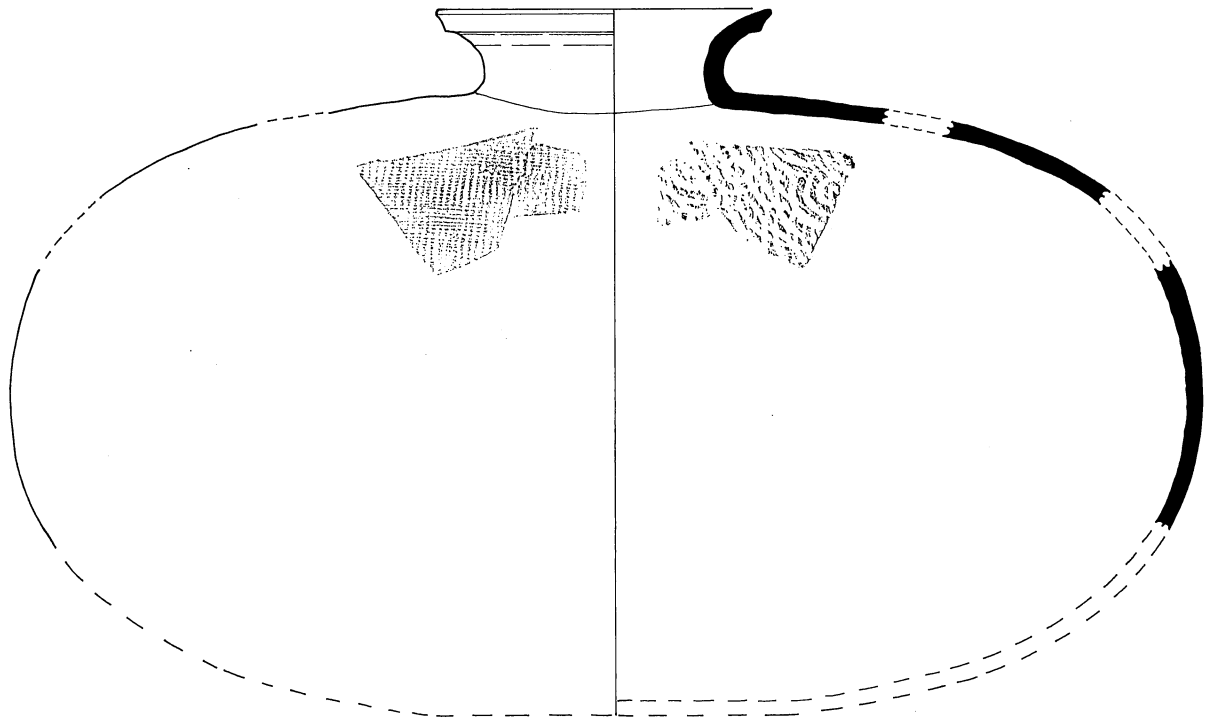
挿図241 陰田広畑遺跡 出土遺物 (11)



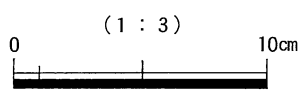
挿図242 陰田広畑遺跡 出土遺物 (12)



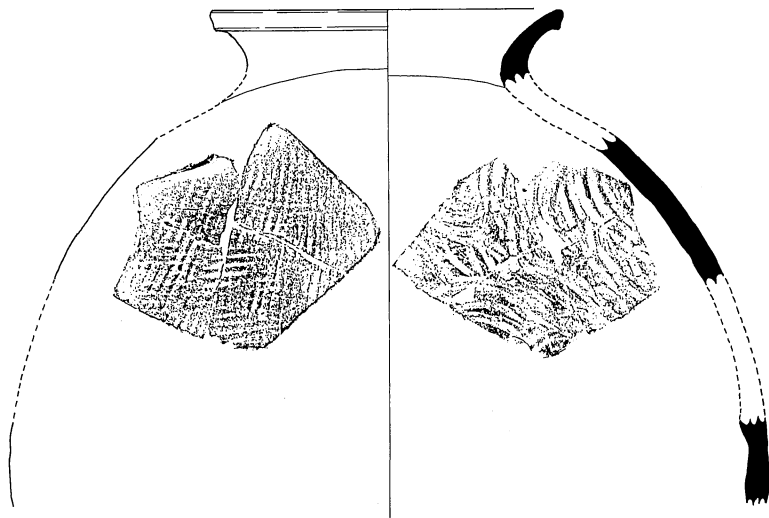
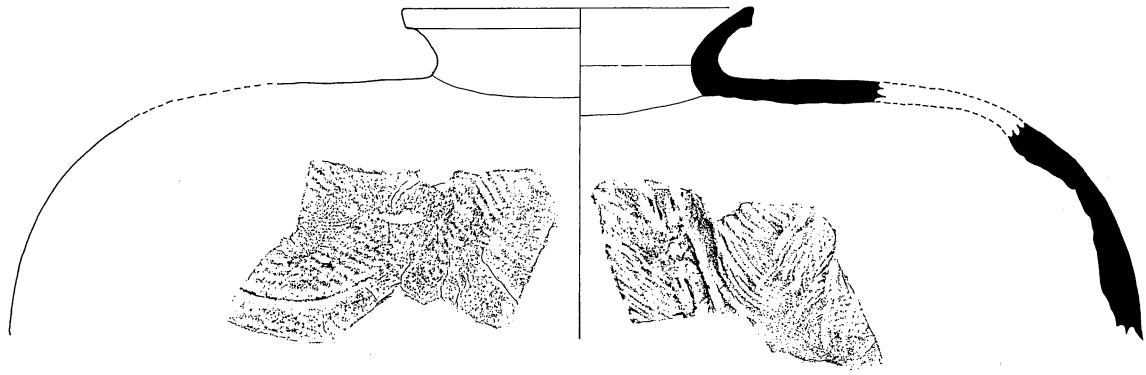
挿図243 陰田広畑遺跡 出土遺物 (13)



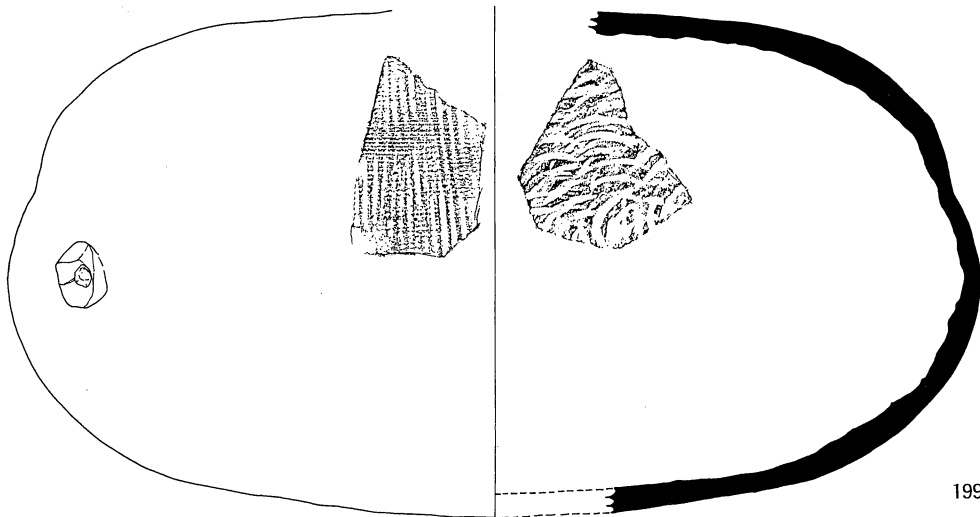
197(2364他)



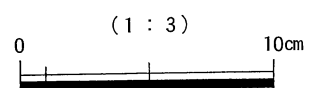
挿図244 陰田広畑遺跡 出土遺物 (14)



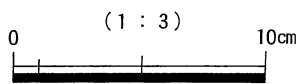
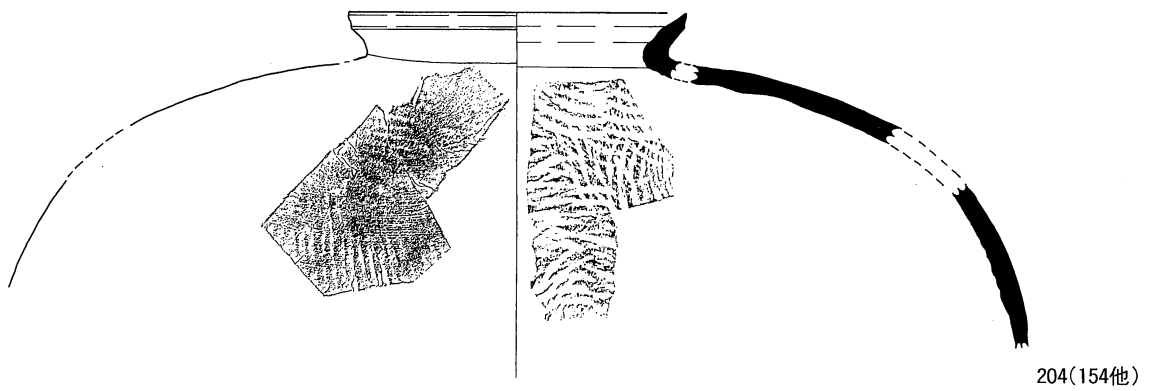
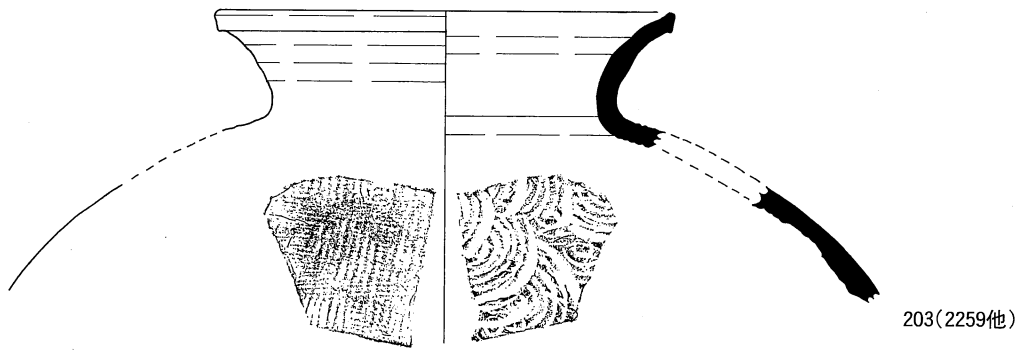
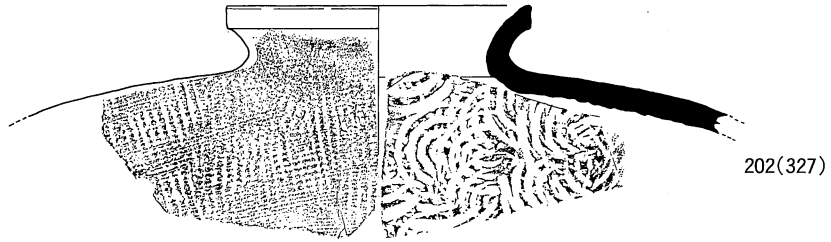
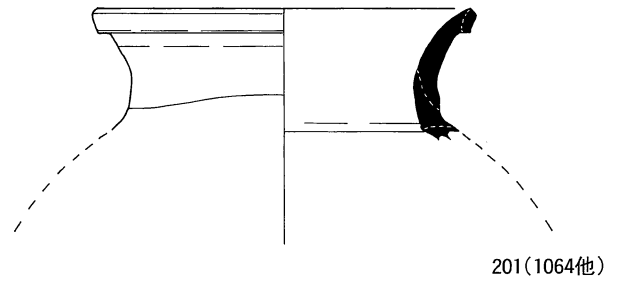
198(5773他)



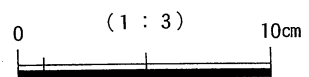
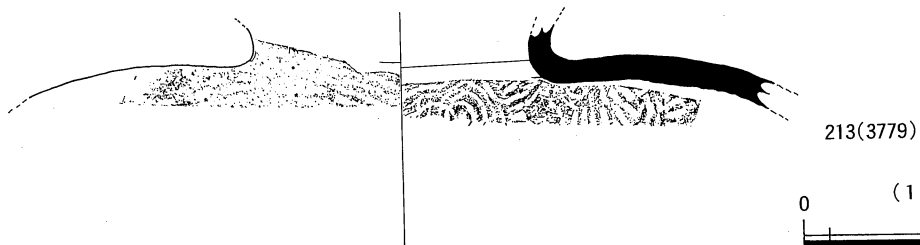
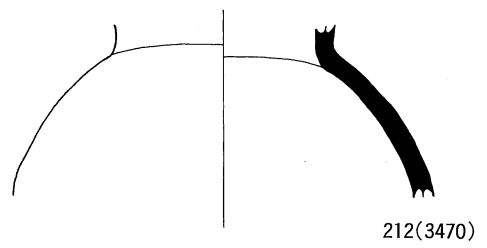
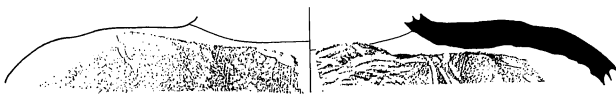
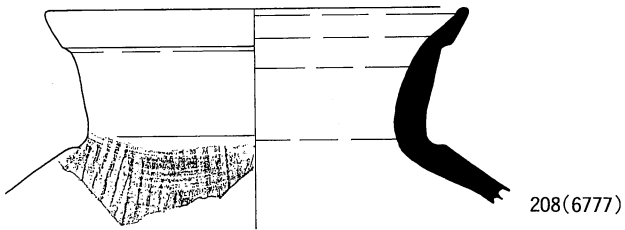
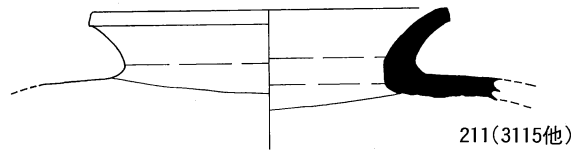
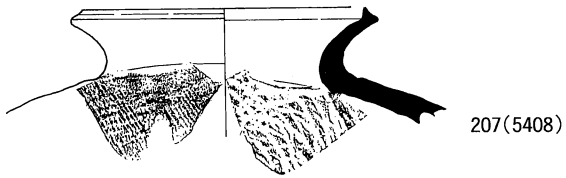
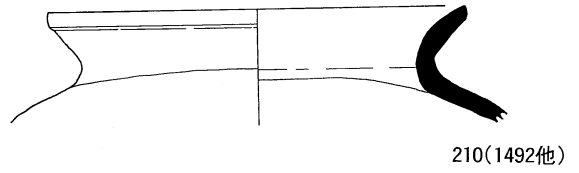
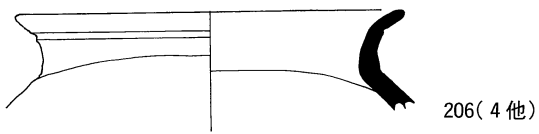
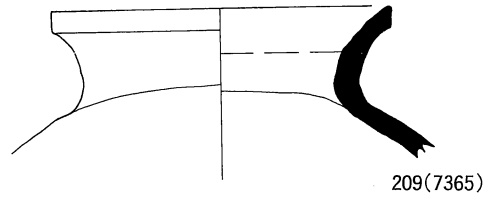
199(6959)



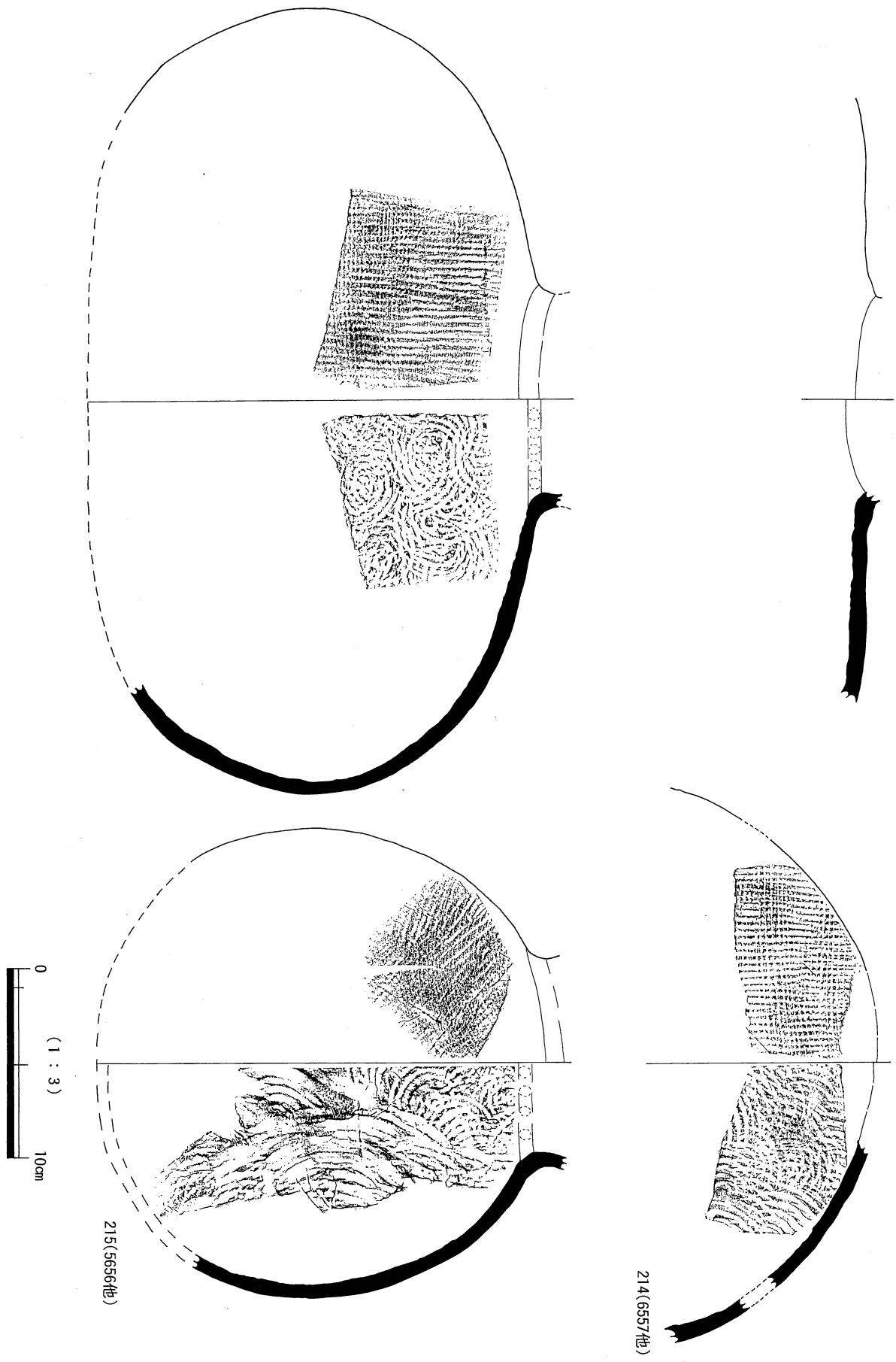
挿図245 陰田広畑遺跡 出土遺物 (15)



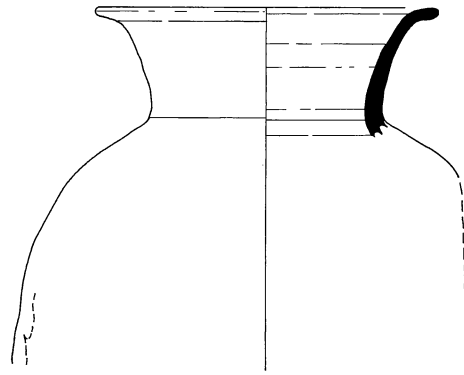
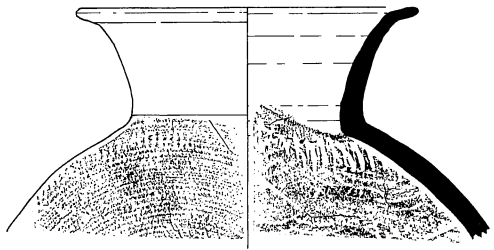
挿図246 陰田広畑遺跡 出土遺物 (16)



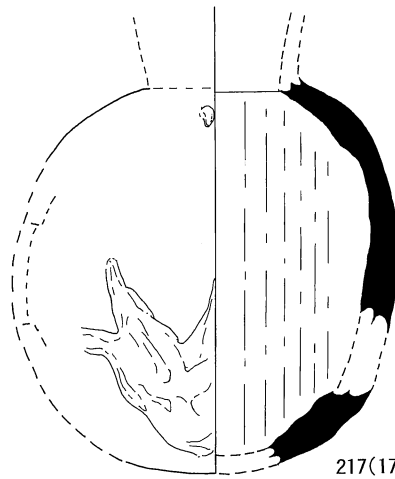
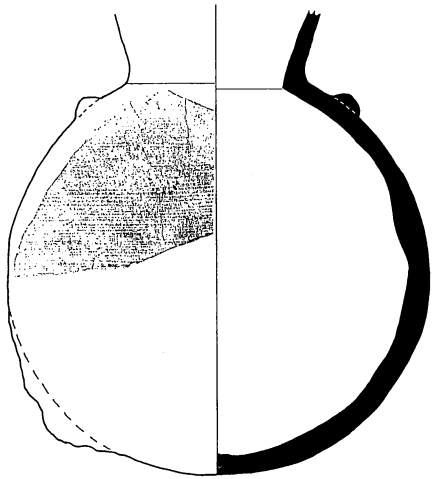
挿図247 陰田広畑遺跡 出土遺物 (17)



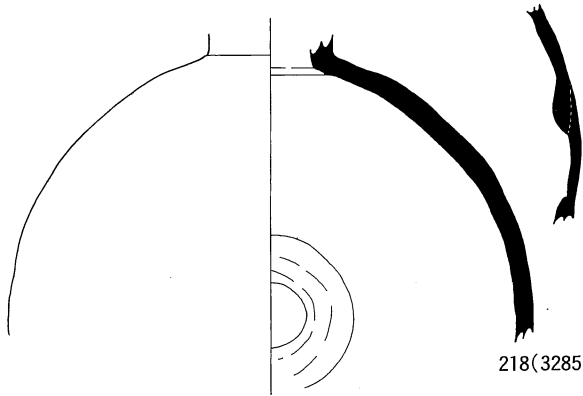
挿図248 陰田広畑遺跡 出土遺物 (18)



216(804他)

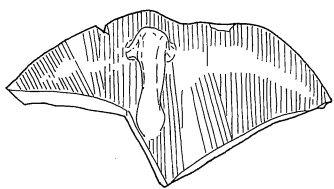
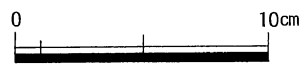


217(1756他)

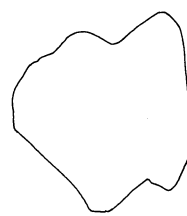


218(3285)

(1 : 3)

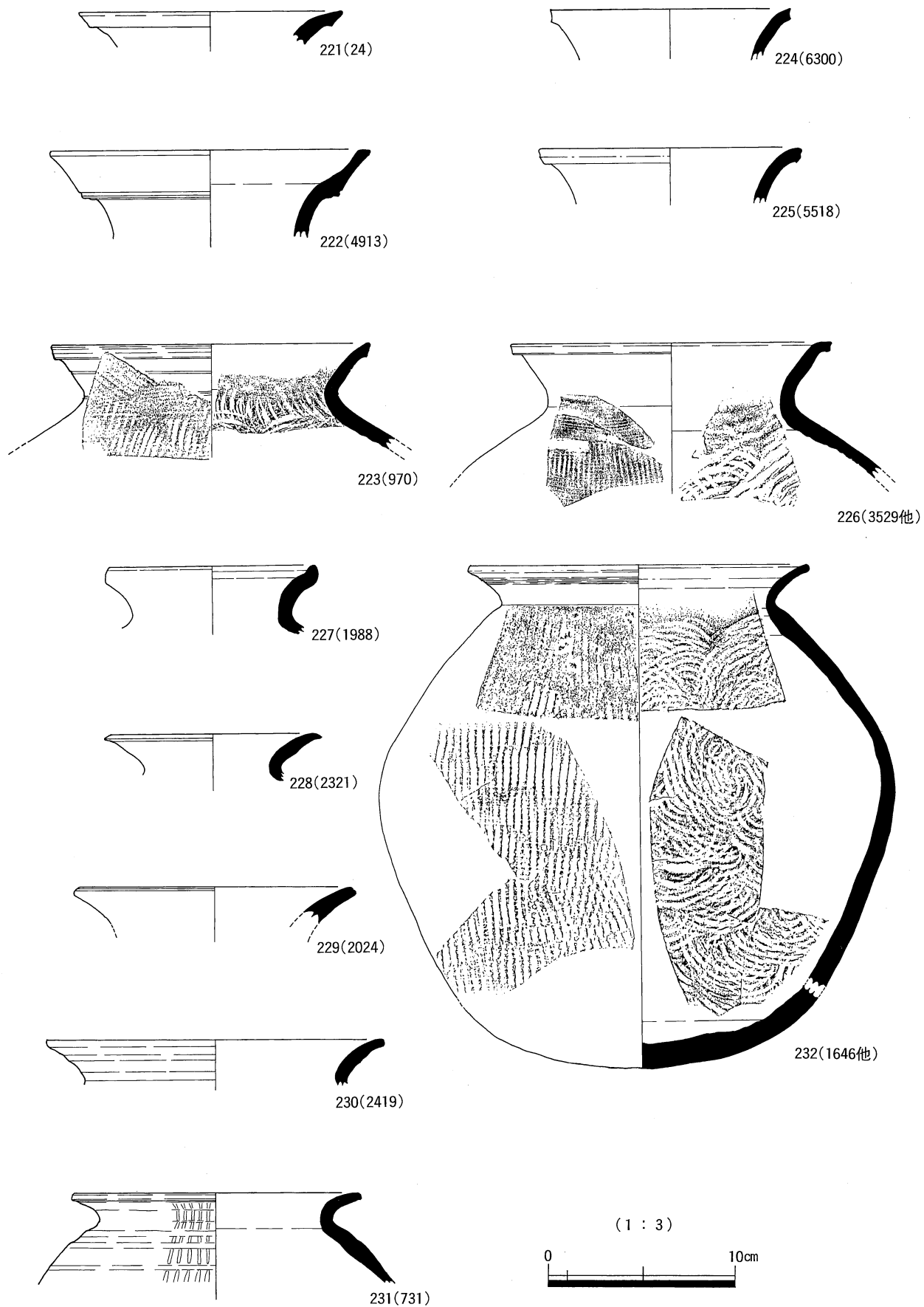


219(1618)

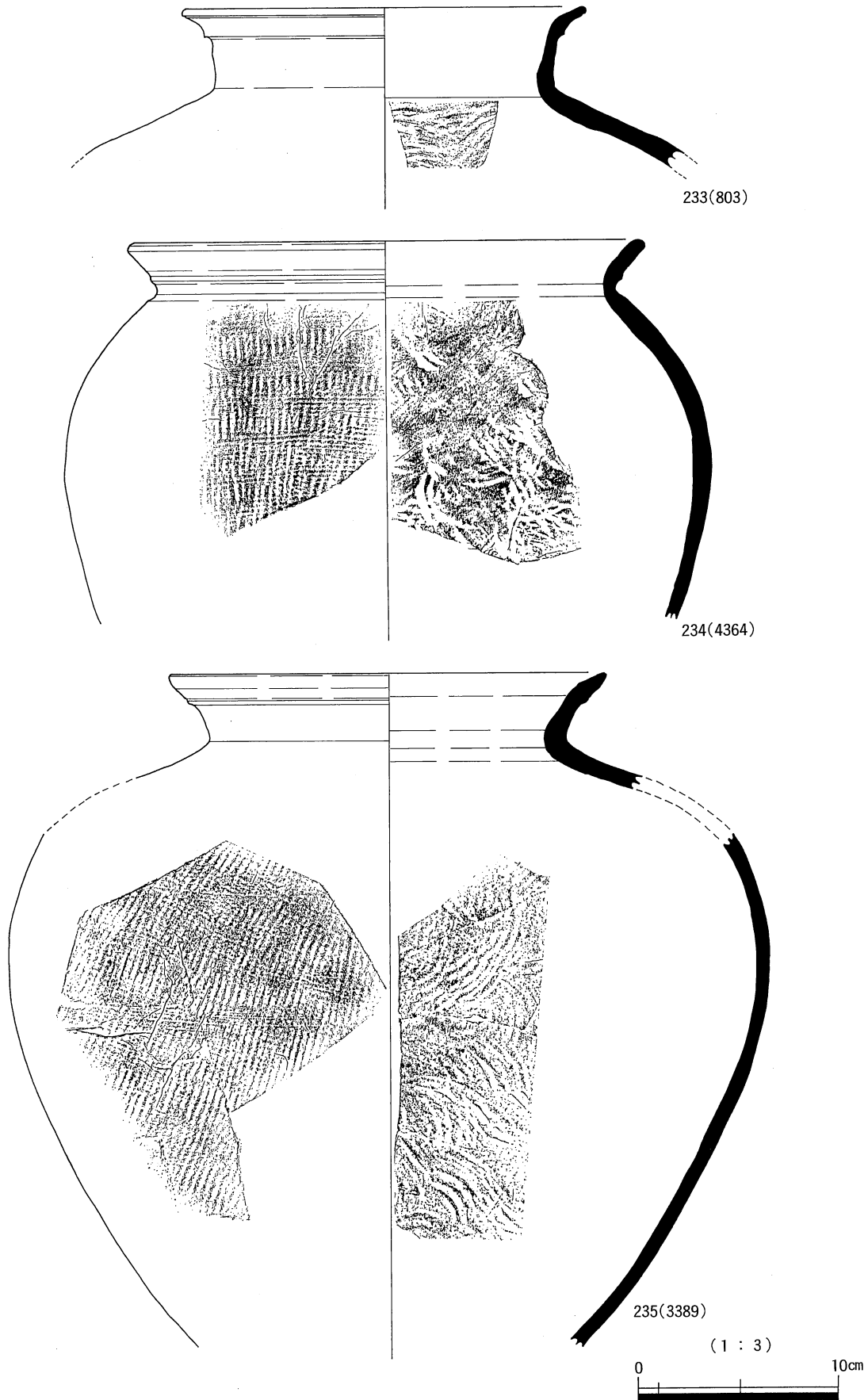


220(7249)

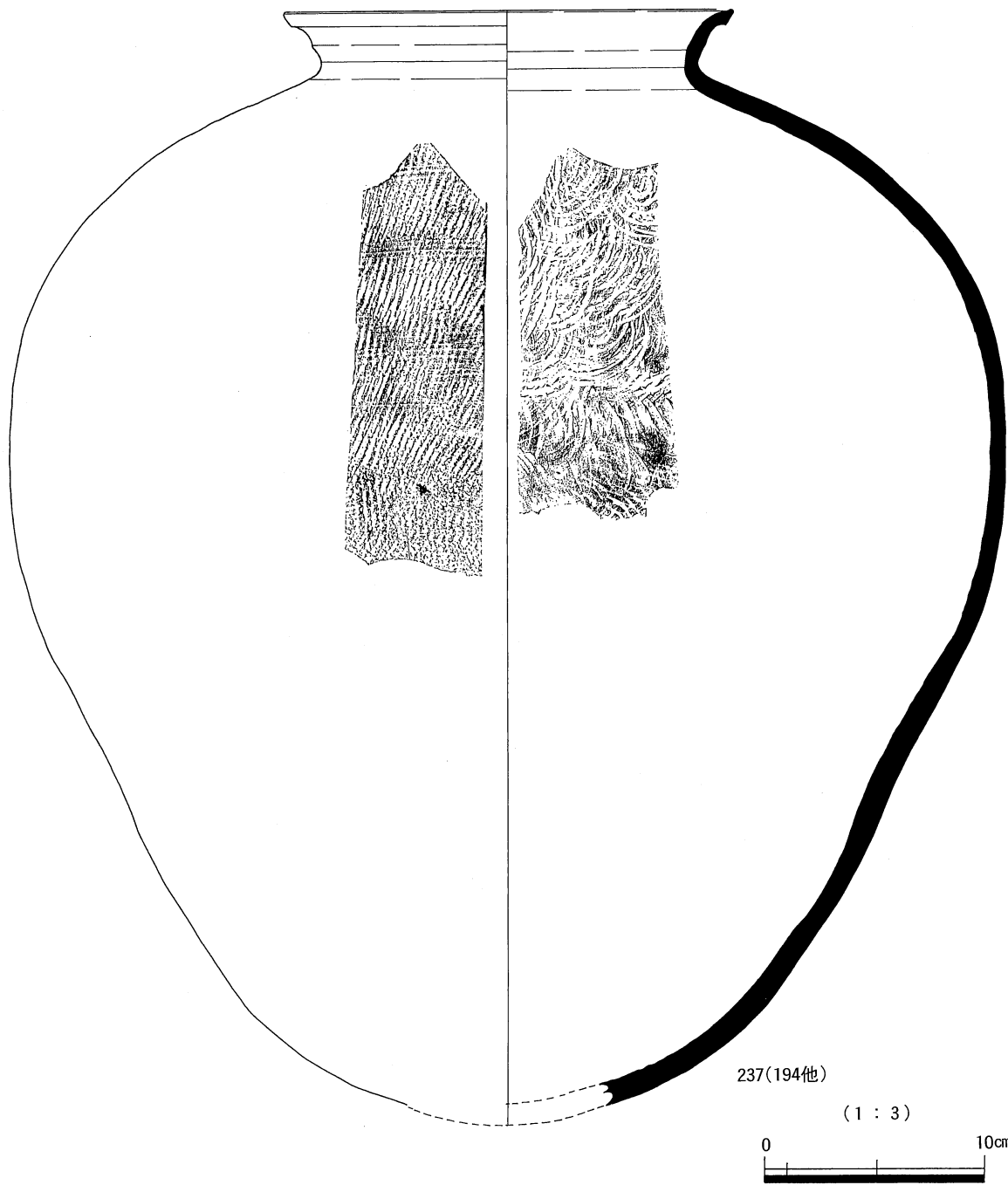
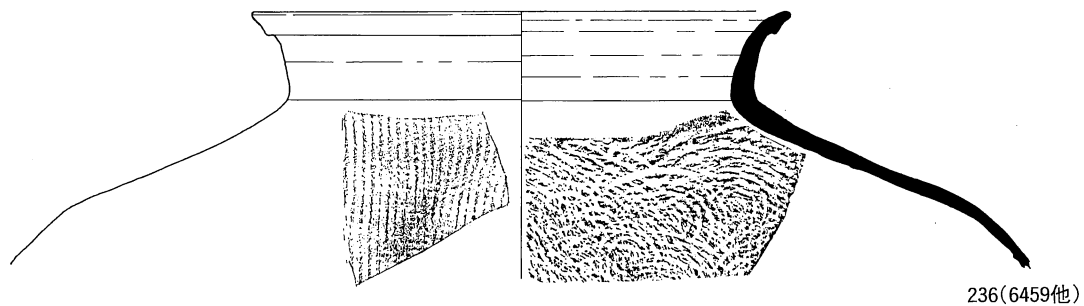
挿図249 陰田広畑遺跡 出土遺物 (19)



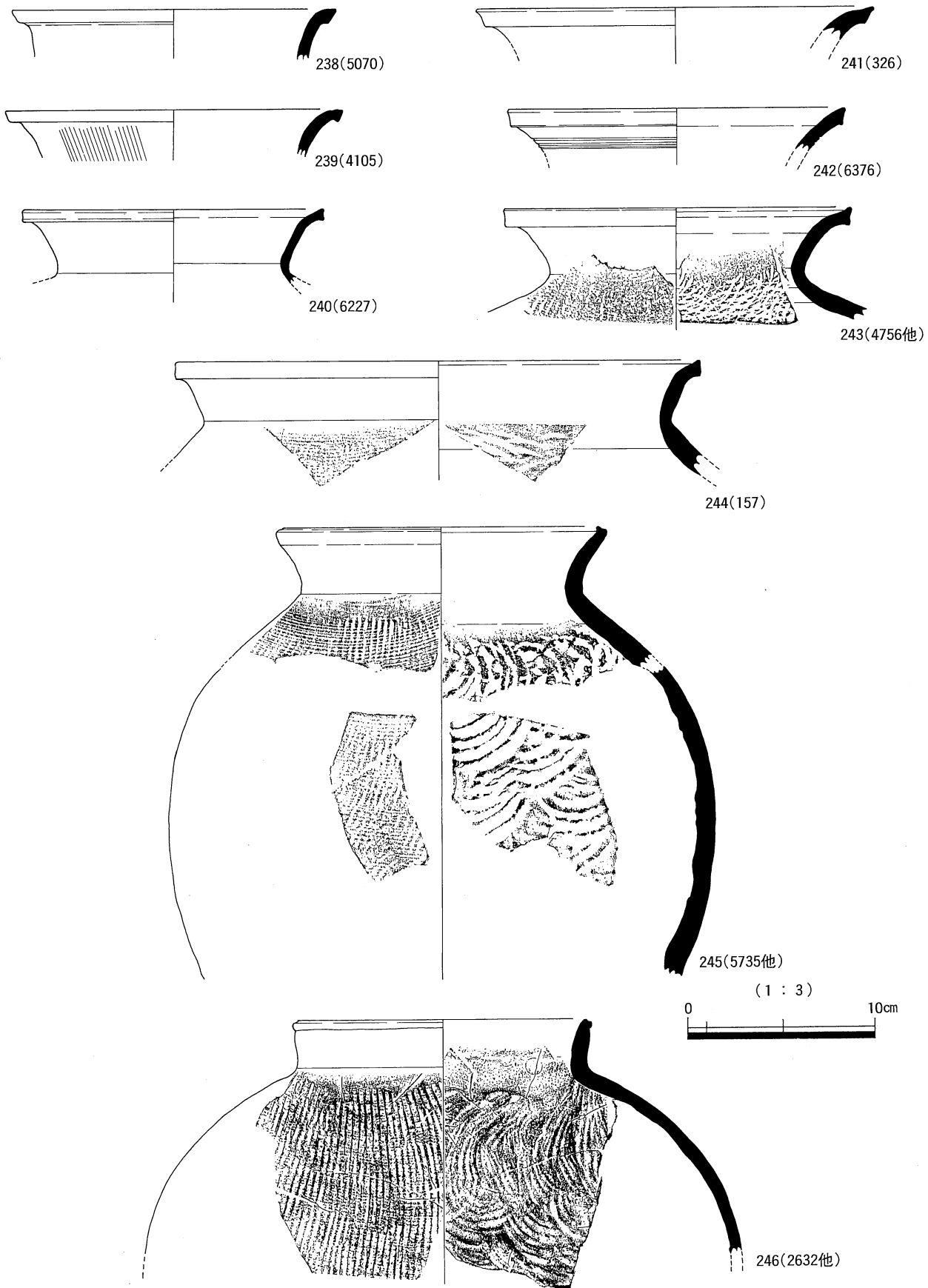
挿図250 陰田広畑遺跡 出土遺物 (20)



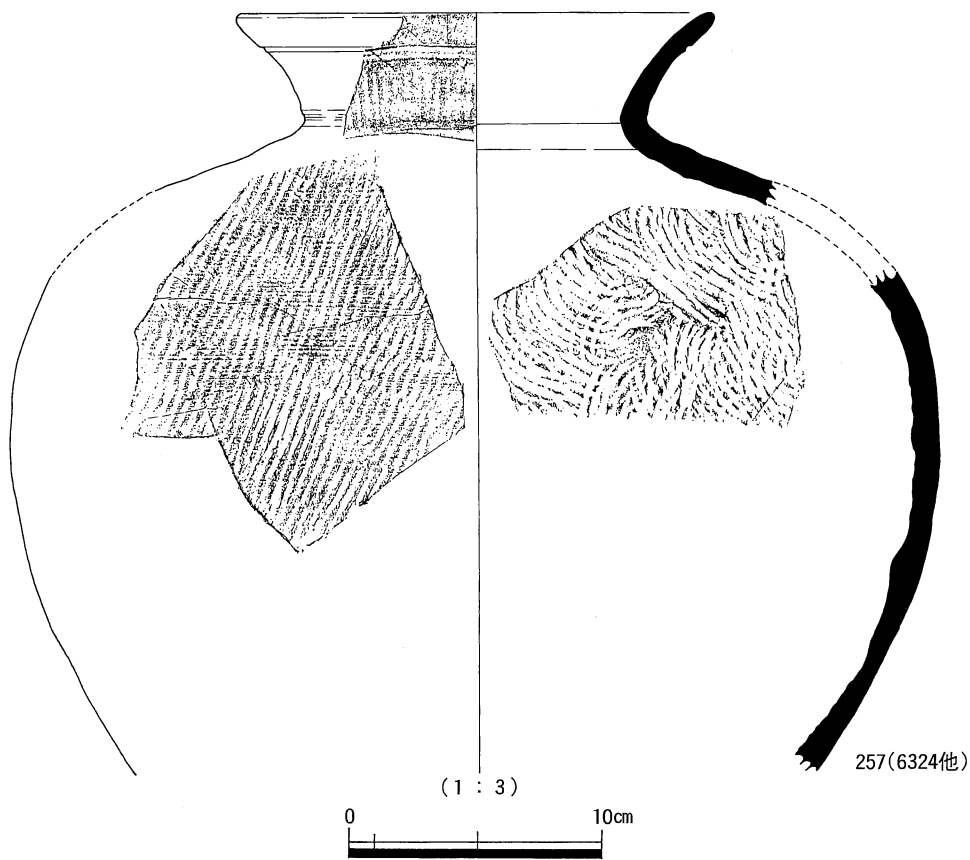
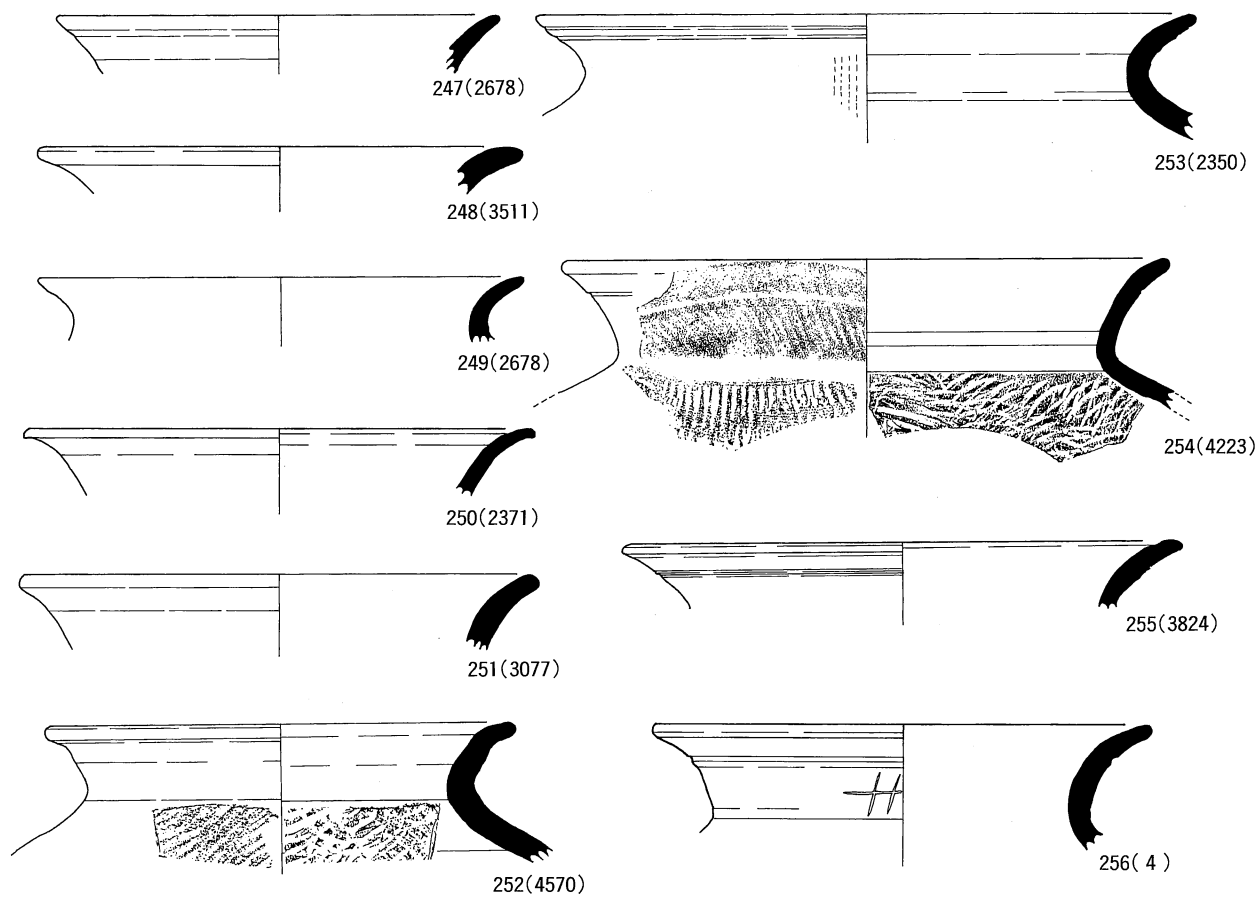
挿図251 陰田広畑遺跡 出土遺物 (21)



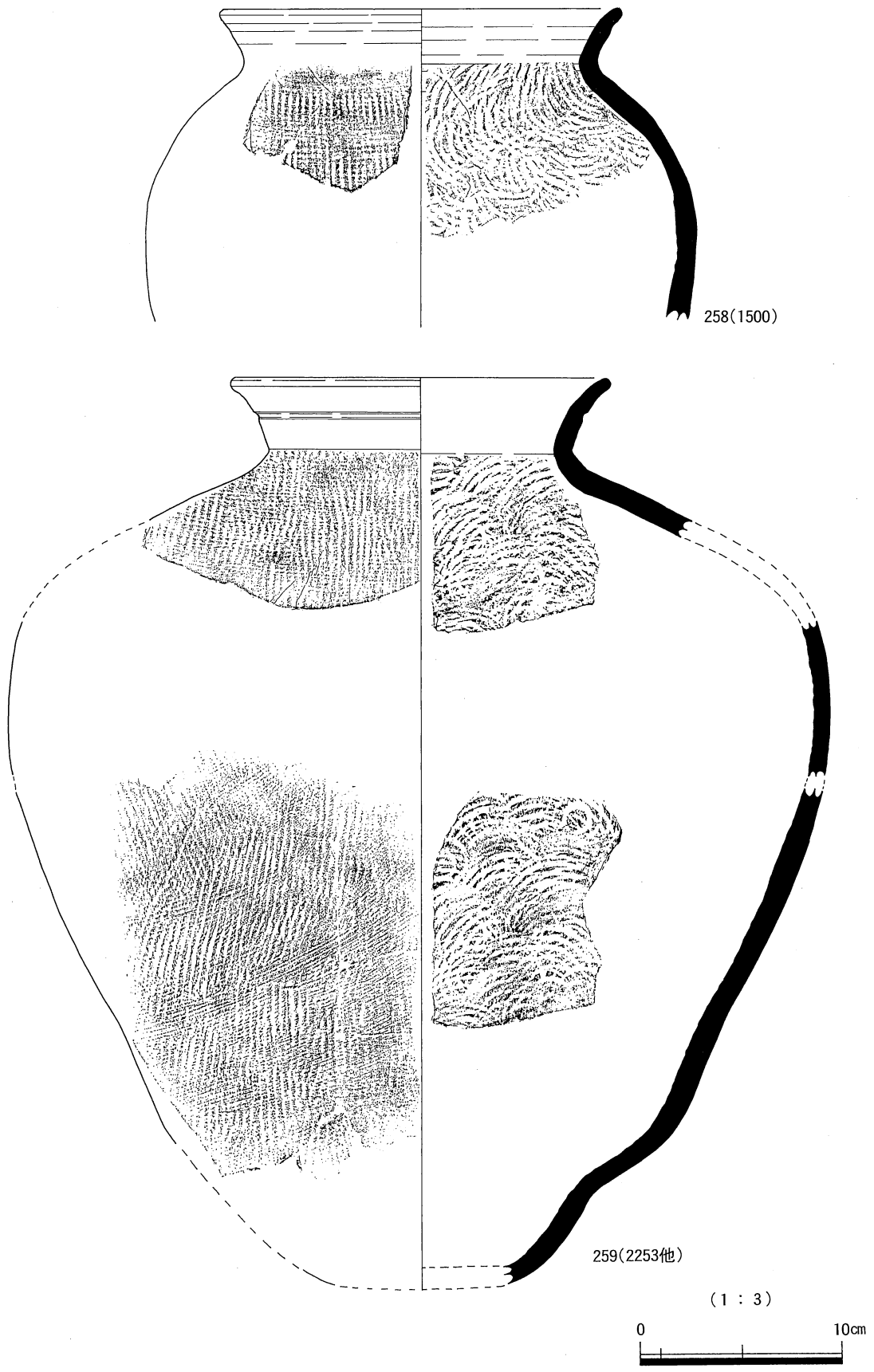
挿図252 陰田広畑遺跡 出土遺物 (22)



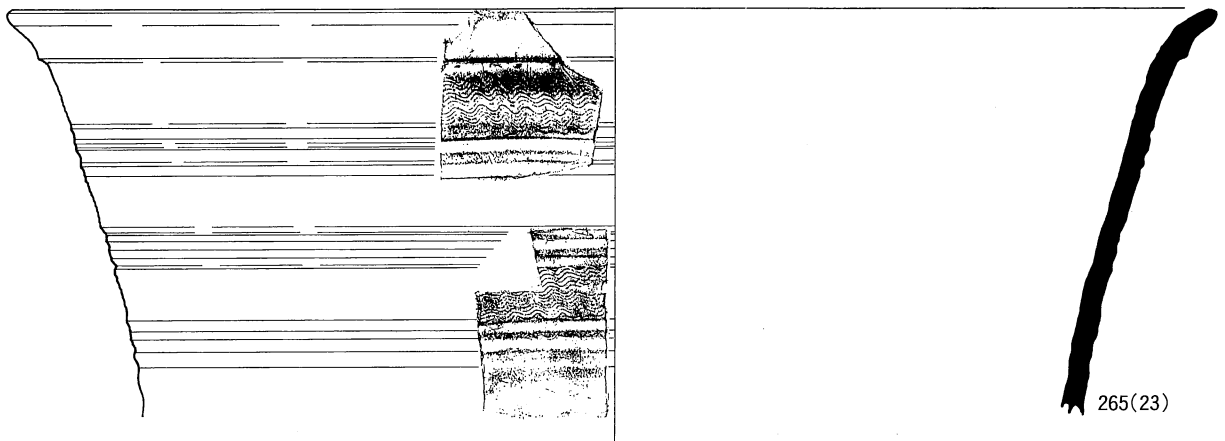
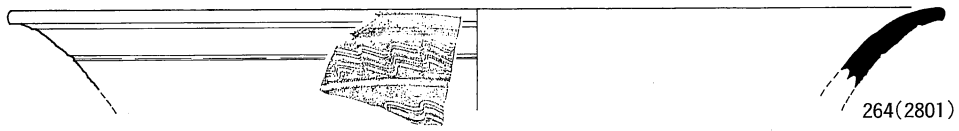
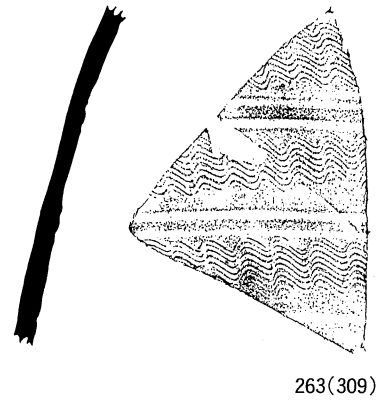
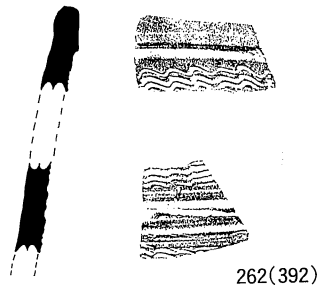
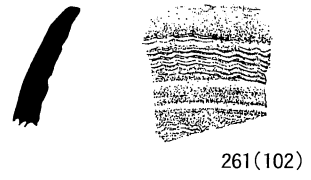
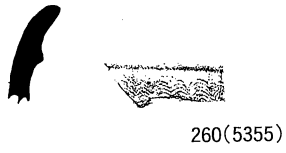
挿図253 陰田広畑遺跡 出土遺物 (23)



挿図254 陰田広畑遺跡 出土遺物 (24)



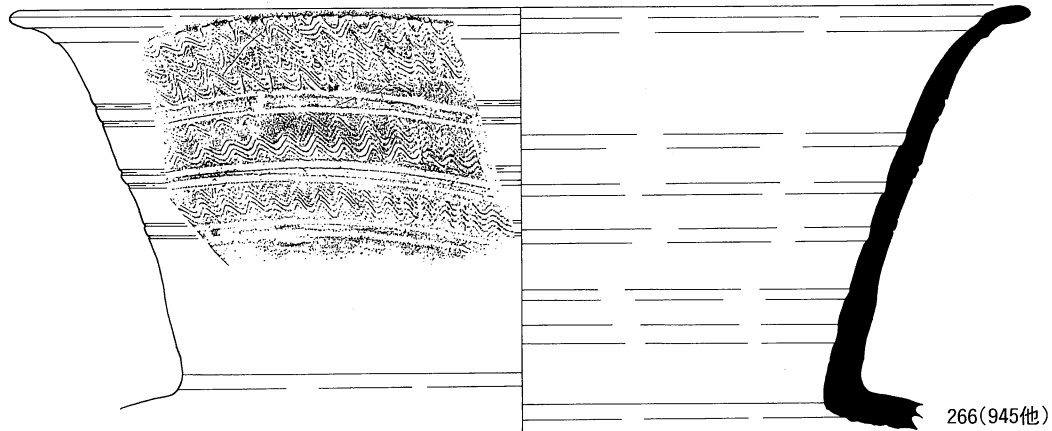
挿図255 陰田広畑遺跡 出土遺物 (25)



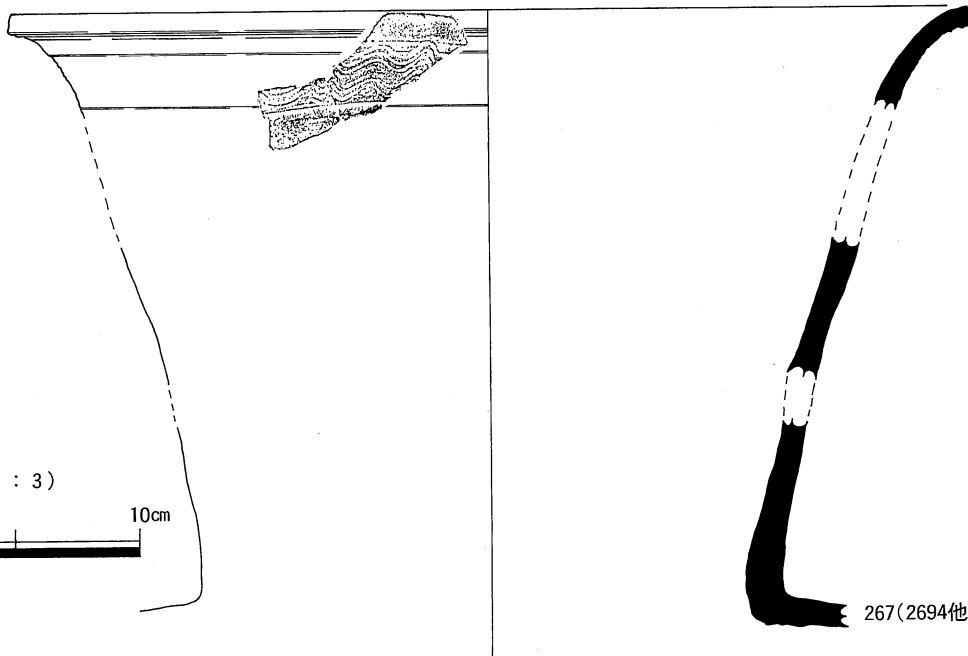
(1 : 3)



挿図256 陰田広畑遺跡 出土遺物 (26)

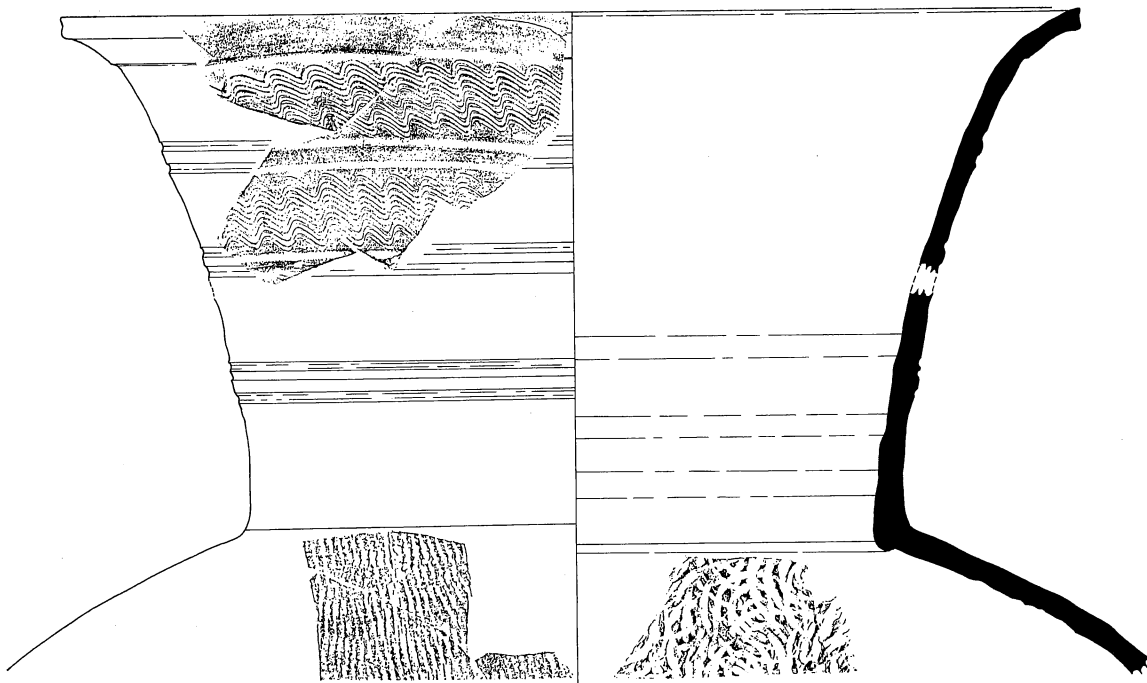


266(945他)



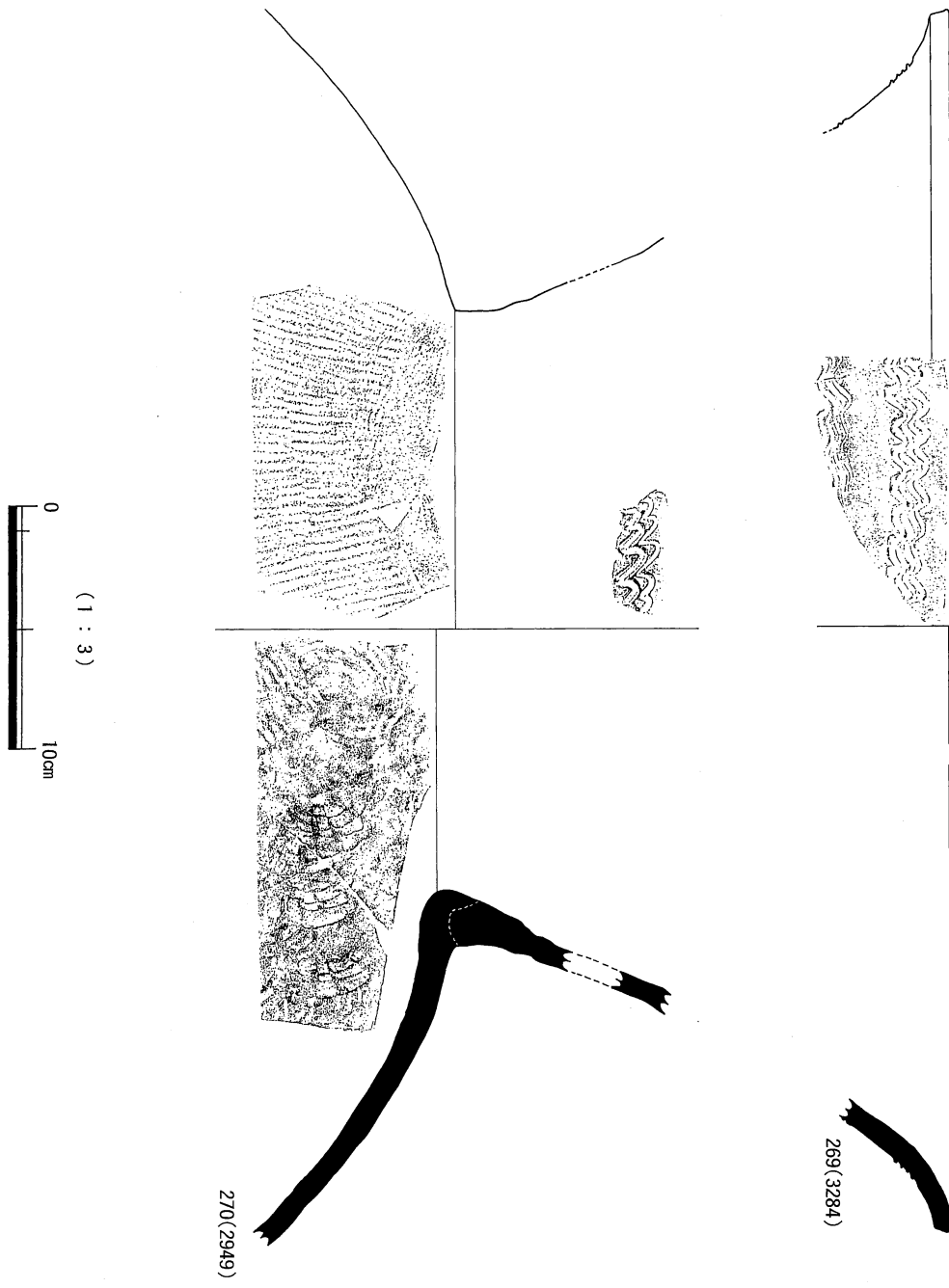
267(2694他)

(1 : 3)
0 10cm

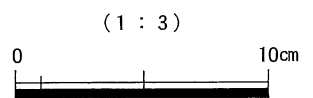
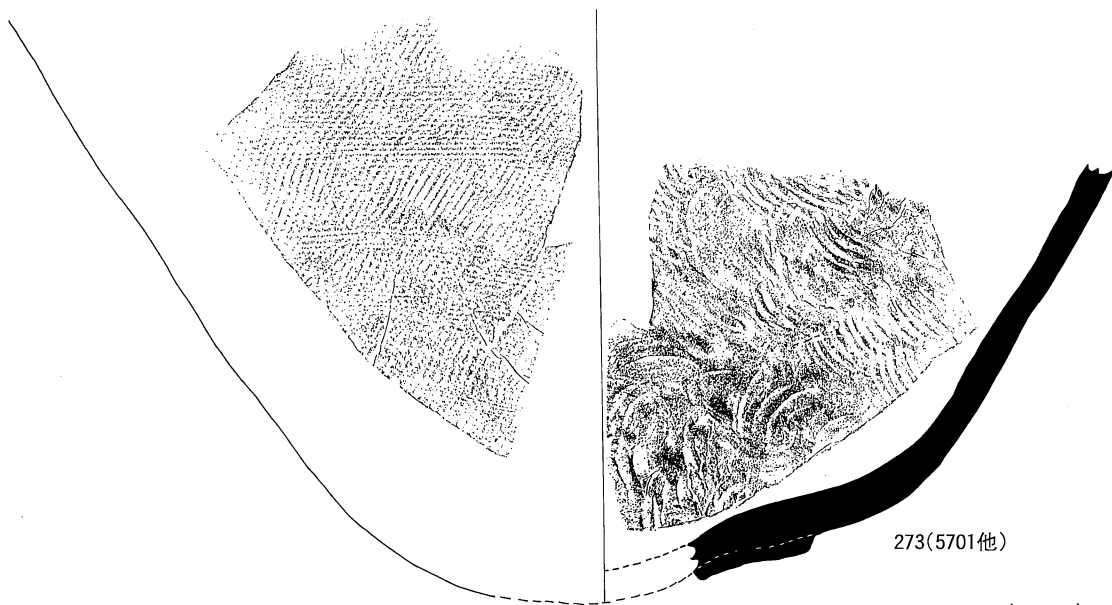
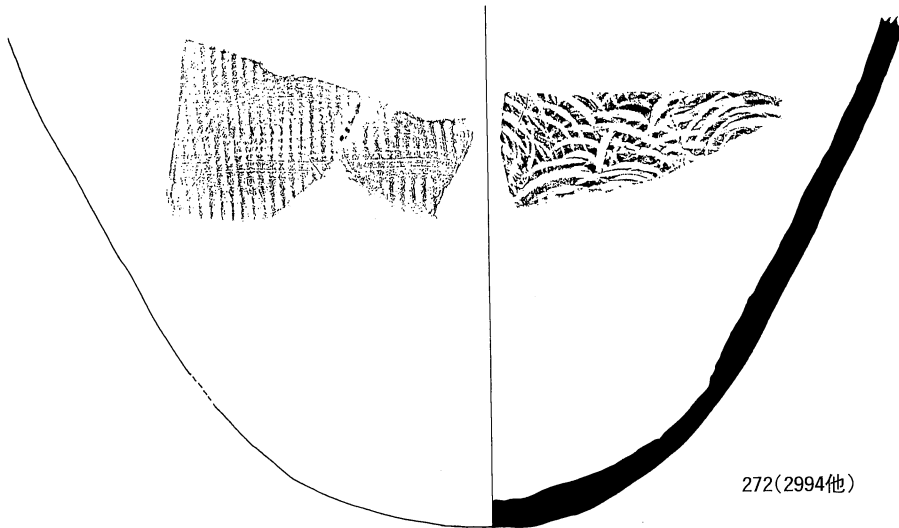
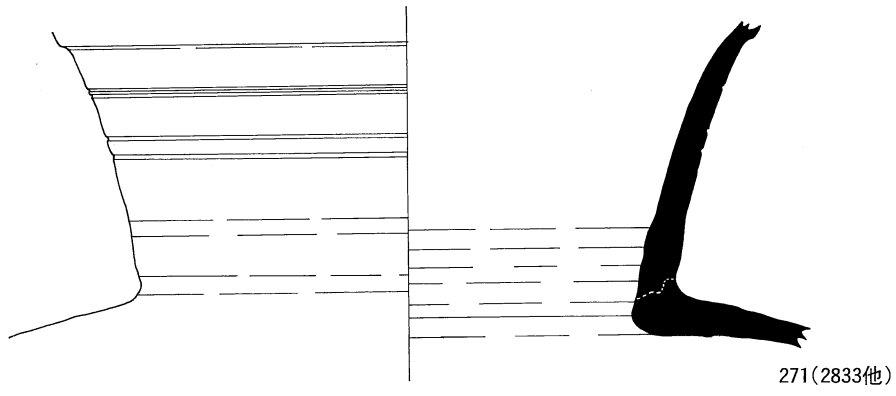


268(302他)

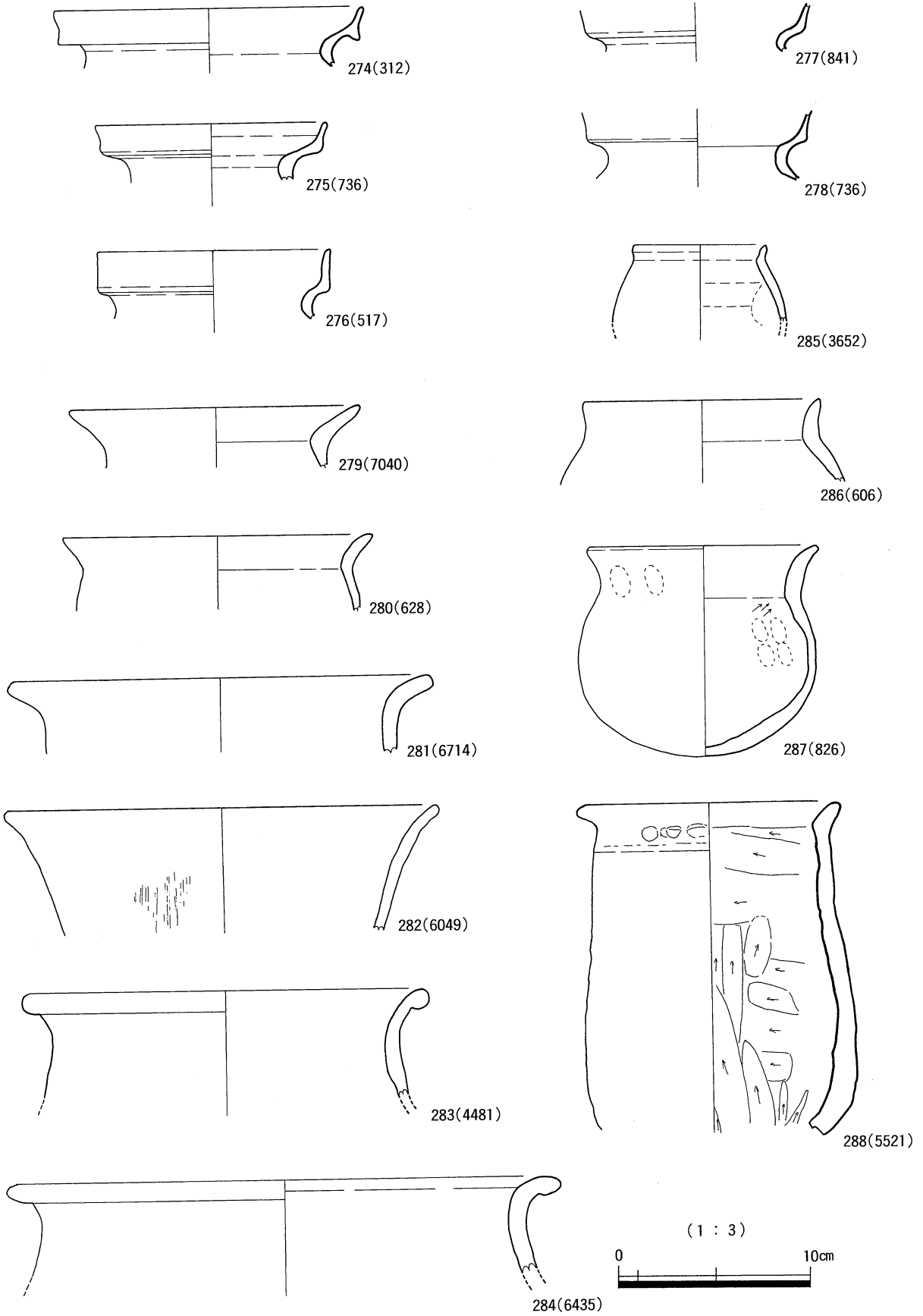
挿図257 陰田広畑遺跡 出土遺物 (27)



挿図258 陰田広畑遺跡 出土遺物 (28)



挿図259 陰田広畑遺跡 出土遺物 (29)



挿図260 陰田広畑遺跡 出土遺物 (30)

5 陰田宮の谷遺跡 1区・2区

1区は、谷内に突出する標高20mの小尾根突端部、2区は、犬田神社裏の丘陵の標高30mの南肩及び斜面に立地する。両地区は、谷を隔てて指呼の位置にあり、遺構・遺物のあり様からは同一の集落で機能を分担しあう、補完的な関係を持っていたものと考えられる。

遺構は、掘立柱建物跡、土坑（炭溜土坑、焼土坑）、炭溜り、段状遺構、溝状遺構を検出し、遺物は、須恵器（甕、蓋坏、高坏、鉢）、土師器（甕、甑、土製支脚）、鉄滓、土馬等が出土した。両地区合わせて取上げ点数は少なかったが、立地的な制約により、谷底部あるいは調査区域外へ転落、流出したものと思われる。陰田7～10期（7世紀中葉～8世紀後半）のものがある。遺物や周辺遺跡の状況から、鍛冶関係集落跡であった可能性が考えられる。

(1) 1区（挿図262～276 図版90、91、93、94、96）

東向きの尾根突端部と北側斜面部を加工して1～4のテラスが築かれる。尾根突端部の1、3、4テラスが基本であり、北側斜面部の2テラスは狭く、副次的なものである。第1テラスが先端部、4テラスが一番奥にある。掘立柱建物12棟、段状遺構（方形テラス）1基、炭溜り1基を検出し、遺物は、須恵器（甕、蓋坏、高坏）、土師器（甕、甑、土製支脚）、鉄滓、土馬等が出土した。

1テラス（挿図263～269 図版93、94）

1テラスは尾根先端部に位置する東西7m、南北15mのテラスであり、南側の1群と、北側の2群の2つの群によって構成される。テラスの壁面高は約1mを測り、谷奥側（西側）の掘削加工と南東側の彎曲部を埋立整地していたが、南東側の流失は著しい。遺構検出面の標高は19.7～20.5mを測り、重複を含め42個の柱穴を検出し、1群、2群合わせて7棟の掘立柱建物跡（SB01～SB07）を確認した。いずれも流失により、形態・規模はあまりはっきりはしないが、柱穴も小さく、小型の建物であったと推察される。

掘立柱建物跡1群（挿図263～267）

1群は、上方の西側（SB01、SB03、SB05）と、下方の東側（SB04、SB02）の立地単位があり、立地標高の差は0.5mである。位置的に下方東側建物群が古く、埋立てた後に上方の西側建物群が築かれたものと推定される。建物は梁行1間×桁行2間（4.4～5.5m×3.0m程度）の南北棟が想定されるが、今回の調査遺跡の建物跡の中では異質の形態であり、推定の域を出ない。1群のP16～P19の北（SB02北西隅外）で径35cmの広がりをもつ炭溜り遺構を検出した。

遺物は上下群の間の位置に集中して検出され、須恵器坏蓋（1）・高坏（11、12）、土製支脚（28）などがある。時期の主体は陰田7期（7世紀中葉）にあると考えられる。

S B 01 (挿図265)

1 テラス西奥に位置し、東側は流失のためはっきりしない。主軸をN-75°-Wにとる梁行1間×桁行2間(2.20×4.35m)の建物であると推定され、桁行間は2.2mで均一である。柱穴は径40cm、深さ30~40cm程度を測り、小規模建物である。1テラス建物群のうち、最も新しく築かれた建物であると推定される。

S B 02 (挿図266)

1 テラス南半の東側に位置し、東側は流失のためはっきりしない。S B 04と重複し、規模もほぼ同じである。主軸をN-69°-Wにとる梁行1間×桁行2間(1×5.00m)の建物であると推定され、柱穴は径40~70cm、深さ約40cmを測る小規模建物である。位置的に早い段階に建築されたものであると推定される。

S B 03 (挿図267)

1 テラス南半に位置する。東側は流失のためはっきりしない。主軸をN-26°-Eにとる梁行1間×桁行2間(2.40×5.50m)の建物であると推定され、桁行間は約2.55mと広い。柱穴は径30~40cm、深さ約40cmを測る、小規模建物である。北側壁周辺で土師器・須恵器・鉄滓等が出土した。位置的にS B 05にも重なり、時期は不明である。

S B 04 (挿図266)

1 テラス南半の東側に位置し、東側は流失のためはっきりしない。南西隅がS B 02と重複し、規模もほぼ同じである。主軸をN-58°-Wにとる梁行1間×桁行2間(1×5.20m)の建物であると推定され、桁間は2.9mと広い。柱穴は径30~60cm、深さ35~50cmを測る小規模建物である。

S B 05 (挿図267)

1 テラス南半に位置する。東側は流失のためはっきりしない。北西隅がS B 03と重複し、主軸をN-78°-Wにとる梁行2間×桁行2間(2.28×4.75m)の建物であると推定され、桁間は2.2~2.6mと広い。柱穴は径40~50cm、深さ25~60cmを測り、小規模建物である。

掘立柱建物跡2群 (挿図263、268、269)

2群は、梁行1間×桁行2間の東西棟(S B 07)と南北棟(S B 06)を想定した。S B 06南側の1群との重複も考えられたが、尾根筋の延び方を考慮して想定した。

S B 06 (挿図268)

1 テラス北半に位置し、主軸をN-20°-Eにとる梁行1間×桁行2間(2.65×3.80m)の建物であると推定され、柱穴は径45~75cm、深さ45~75cmを測る。

S B 07 (挿図269 図版93)

1 テラス北半に位置し、主軸をN-72°-Wにとる梁行1間×桁行2間(2.70×4.10m)の建物であると推定され、柱穴は径35~60cm、深さ10~50cmを測り、北東隅のP42は根石状の石を持つ。

2 テラス (挿図270、271)

2 テラスは丘陵の北側斜面の標高約21m付近を加工した東西10m、南北幅3mの小テラスである。地山掘削範囲は最大幅2mと狭く、谷側のテラスのほとんどが流失したものと考えられる。東側と西側の2群で構成され、テラスの壁面高は約1mである。壁面加工の重複関係から、東西2棟が併存していたものと思われるが、明確な形では西側にS B 08を確認したのみであり、東側はピット群として確認した。

遺物は、須恵器蓋坏・甕破片(2、3、5~8、15)、土師器甕(29)、土製支脚(26)、鉄滓等が出土した。西側に多くみられる。陰田8期と陰田10期相当(7世紀後半、8世紀後半)の古・新2時期分が混在する。

掘立柱建物跡

S B 08 (挿図271)

2 テラスの西に位置し、北側は流失のためはっきりしない。主軸をN-52°-Wにとる梁行1間×桁行3間(-×5.15m)の建物であると推定され、柱穴は径50~60cm、深さ60~75cmを測る。

東側ピット群 (挿図271)

2 テラスの東に位置し、6穴の柱穴と推定されるピットが検出されたが、建物跡と確認されなかった。柱穴は径30~60cm、深さ14~80cmを測る。

3 テラス (挿図272、276 図版93、96)

3 テラスは1 テラスと4 テラスの間に位置する。南北6.8m×東西5mの、東に開くコの字状の平坦面を検出した。覆土中より弥生土器が出土しており、弥生時代の竪穴住居跡の地形を再利用したものと思われる。谷奥側に幅20~30cm、深さ5cmの壁溝が巡る。壁面高0.6m、床面標高は21.6mである。溝以外に特別の施設はなく、わずかに床面中央に径約40cm、深さ30cmのピット1個を検出した。壁外ピットで構成される方形竪穴とも考えられる。直接関連する遺物はなかったが、南側壁外で須恵器蓋(10)が出土した。埋土状況より、4 テラス建物群(S B 10等)に先行する。

4 テラス (挿図272~275 図版93、96)

4 テラスは尾根に直交して標高22m付近に、掘削される最奥部のテラスである。南北12

m×東西4.2mを測り、地山の軟岩質土層を掘り込んで築かれる。谷奥側に幅20～30cm、深さ5cmほどの複数の区画溝が巡り、壁面高は1.5mを測る。南側と北側の2つの単位で構成され、南側にS B 09、S B 10（4テラス1群）、北側にS B 11、S B 12（4テラス2群）と、それぞれ2棟ずつ4棟分の南北棟を検出した。土層断面や位置関係等からS B 09→S B 10・S B 11（→S B 12）という2～3時期の変遷が考えられる。S B 10は3×2間の総柱建物、S B 12は径70～100cmの大型柱穴を持ち、土馬が出土した。陰田隠れが谷遺跡でも土馬と総柱建物との関連性を推察でき、また、谷奥部に土師質土馬が出土する点も陰田広畑遺跡10テラスと同じ様相である。

掘立柱建物跡1群（挿図273、274）

S B 09（挿図273）

4テラス南半に位置し、S B 10に重複し、切られる。南東辺、南西辺は確認できなかったが、主軸をN-50°-Eにとる梁行2間×桁行2間（1.50×3.60m）の建物であると推定される。桁間は1.8m、梁間は1.5m、柱穴は径30～60cm、深さ40～60cmをはかり、土層の堆積状況から3テラス後の造営である。

S B 10（挿図274）

S B 09に重複し、これを切る。東側の柱列は検出できなかったが、主軸をN-53°-Wにとる梁行2間×桁行3間（2.80×3.52m）の建物であると推定される。桁間は1.1～1.2m、梁間は約1.4mと、いずれも間隔がやや狭く、倉庫の可能性が高い。柱穴は径40～60cm、深さ35～75cmをはかり、後背の溝は雨垂れ状の窪みを持つ。後背部から須恵器蓋（4、13、14）が出土した。13、14は陰田7期、4は陰田10期並行で宝珠つまみを持ち、返りが消失する。土層の堆積状況から3テラス後の造営である。

掘立柱建物跡2群（挿図275、276）

S B 11（挿図275）

4テラス北半に位置し、大型の柱穴を持つ南北棟でS B 12に重複する。前後関係は確認できなかったが、S B 12に先行すると思われる。主軸をN-45°-Eにとる梁行2間×桁行3間（3.64×4.90m）の建物であると推定される。桁間約1.6m、梁間1.7～2mをはかり、柱穴は基本的には円形であるがP 2～P 4はやや方形気味である。中央奥壁側から東に向けて緩やかに下降傾斜する幅45cm、深さ15cmのU字溝が検出されたが、地山の傾斜のため長さ130cmしか確認できなかった。柱穴は北東隅を欠くが、奥側はしっかりと掘り込みよく残る。径70～100cm、深さ70～80cmをはかり、梁面の中柱がやや浅目である。中央奥の屋内溝横で土師器皿（31）・甕片、建物内南西隅と中程の後背溝内で土師質土馬（32、33）が出土した。

S B 12 (挿図276)

S B 11の西壁面に重複して浅い小ピットが確認され、S B 11より後に上方部から掘り込まれたものと理解した。S B 11そのものの補柱列とも考えられたが、掘立柱建物跡とした。主軸をN-40°-Eにとる梁行一間×桁行3間(一×3.60m)の建物であると推定される。柱穴は径30~40cm、深さ30~45cmをはかる。

炭溜り

S X 01

1 テラス南端に位置する炭・焼土溜りで、径0.7mの炭溜り3個の集合である。東西2.1m×南北幅0.7m、厚さ約5cmの中央がくぼむ溝状の堆積である。

(2) 2区 (挿図277 図版92、94~97)

標高約29mの丘陵南肩部に位置し、軟岩質の地山を掘削して形成された東西40m、幅3~5mの弧状のテラスである。テラスの広がり、東側が若干延びる可能性を残す。丘陵頂部は調査したが、最近の畑地の区画溝や肥料溝が確認されただけで遺構は検出できなかった。ただ少量の須恵器の蓋坏・高坏・鉢などの遺物が出土した。

遺構は、区画溝を持つ段状遺構とこれと一体となる掘立柱建物跡で構成される。掘立柱建物跡10棟、焼土坑1基を検出した。遺構の配置は大まかに西側(1群)、中央部(2群)、東側(3群)の3群に分かれるが、占地範囲や建物規模が広く大きい2群が中心をなすものと思われる。2群では焼土坑も検出した。

遺物は、須恵器(甕、蓋坏、高坏、鉢)、土師器(甕、甑、土製支脚)、鉄滓等が出土し、陰田8期~陰田10期(7世紀後半~8世紀後半)のものである。

大甕と鉢の接合状況を検討したところ、1群では甕20、21、22、2-1群では甕36、37、2-2群では甕51、52、鉢53、3群では甕64が、それぞれの小群に帰属することが判明した。いずれも建物の隅奥の位置にあったと推定され、鍛冶に関する貯水用として使用されたものと考えられる。

各遺構の時期の特定は難しいが、立地箇所や切合関係から1期(S B 03、S B 10)、2期(S B 05、S B 07、S S 01)、3期(S B 02、S B 04、S B 08)、4期(S B 06、S B 09)の時期が考えられる。築造は谷側手前からコの字区画と2間建物で始まり、順次奥に拡張され、建物規模も次第に大型化する傾向がうかがえる。時期は、おおむね1期-7世紀前半、2期-7世紀中葉、3期-7世紀後半~末、4期-8世紀後半と考えられる。

掘立柱建物跡1群 (挿図279~281 図版95)

S B 01~S B 03で構成され、主軸方向を南西-北東方向にとって重複する。切合い状況から、S B 03→S B 02→S B 01の順に築かれたものと思われる。

S B 01 (挿図282 図版95)

1群の最奥(北側)に位置する。南東隅は確認できなかったが、主軸をN-75°-Eにとる梁行1間×桁行3間(2.40×5.20m)の建物であると推定される。柱穴は円形で径44~60cm、深さ30~60cmを測る。S B 03の埋土やS B 02の後背区画溝(S D 01)を掘り込む。

S B 02 (挿図283 図版95)

S B 01とS B 03の間に位置し、全容は不明であるが、P 7・P 8・P 10が溝に並行し、主軸をN-77°-Eにとる梁行1間×桁行3間(1×2.84m)の建物であると推定される。柱穴は円形で径40~50cm、深さ50~60cmを測る。位置関係より、S B 03の後に築かれ、S B 01に先行するものと思われる。

S B 03 (挿図283 図版95)

1群のうち、谷側の一段低い位置にある。主軸をN-71°-Eにとる梁行1間×桁行2間(1×2.02m)の建物であると推定される。柱穴は径35~60cm、深さ30~60cmを測る。区画は奥側東西4.8mを測り、壁面に沿って幅30cm、深さ10cmの溝が巡る。

掘立柱建物跡2群(挿図279~281 図版95)

2群は中程でやや屈曲し2-1群と2-2群に分かれるが、切合い状況から2-1群ではS B 05→S B 04、2-2群ではS B 07→S B 06の築順が考えられる。それぞれにほぼ同規模の大型掘立柱建物が築かれ、前後2時期がある。また、2-2群が2-1群を切る形を示しており、東西で若干の前後差があったことをうかがわせた。

なお、北西隅の肩から流れ込むように2×4mの範囲に堆積する厚い炭の溜りを確認した。床面から浮いた位置であり、遺構を廃棄した後のものである。

S B 04 (挿図284 図版95)

中央西に位置し、S B 05と共に2-1群を構成する。南東、南西辺は確認されないが、主軸をN-68°-Wにとる梁行2間×桁行4間(4.05×5.45m)の建物であると推定される。P 7、P 8は補助柱であると考えられる。中央奥寄りに焼土坑S K 01がある。柱穴は円形で径40~96cm、深さ40~80cmを測る。西側の柱穴は残りがよく大振りである。

S B 05 (挿図285 図版95)

中央西に位置し、S B 04と重複する。南東、南西辺は確認されないが、主軸をN-70°-Wにとる梁行2間×桁行4間(1.10×6.92m)の建物であると推定される。P 17は浅く補助柱であると思われる。柱穴は円形で径40~48cm、深さ15~45cmをはかる。S B 04に先行するものと考えられる。

S B 06 (挿図286 図版95)

中央東に位置し、S B 07と共に2-2群を構成する。北側桁行列と梁行1間分(1.6m)を確認したのみであるが、主軸をN-50°-Wにとる梁行2間×桁行4間(1.60×6.72m)の建物であると推定される大型建物である。柱穴は円形で径60~70cm、深さ平均50~70cmを測り、しっかりと掘り込まれるものである。P 2、P 3はS B 07のP 9、P 10を切る。北壁面P 1-P 3間で鉄滓が出土した。後背の区画溝は北側桁行列中央のP 3と北東隅のP 5につながっていた。

S B 07 (挿図287 図版95)

中央東に位置し、S B 06と共に2-2群を構成する。北東辺のみで全容は不明であるが、主軸をN-52°-Wにとる梁行1間×桁行3間(1×3.20m)の建物であると推定される。P 9、P 10はS B 06のP 2、P 3に重複し切られる。柱穴はS B 06のP 4、P 5の位置にもあった可能性がある。柱穴は円形で径30~40cm、深さ25~55cmと小振りで浅い。S B 06の築造の際に削平されたものと思われる。

土 坑

S K 01 (挿図288)

2群に位置する焼土坑である。S B 04、S B 05に伴う施設と思われる。隅丸方形の鉢状を呈し、全体に丸みを持ち、底も丸い。1.35×1.3m、深さ0.3mを測る。壁面は焼成を受け赤変し、内部に炭・焼土が埋まっていた。蓋坏類(24~26、31)が出土した。

掘立柱建物跡3群 (挿図289、290 図版95)

下段にS B 08、S B 09を、上段に段状遺構を検出した。S B 10の後背部からS B 09の間には、これをつなぐ形の階段状の凹みを検出した。

S B 08 (挿図291 図版95)

東寄に位置し、S B 09、S B 10と共に3群を構成する。S B 09の西に隣接する。北東辺のみで全容ははっきりしないが、主軸をN-69°-Wにとる梁行2間×桁行2間(1.30×3.85m)の建物であると推定される。柱穴は円形で径50~65cm、深さ30~90cmを測る。

S B 09 (挿図292 図版95)

最東部に位置し、南西辺は確認されないが主軸をN-57°-Wにとる梁行2間×桁行3間(1.72×4.80m)の建物であると推定される。柱穴は径50~80cm、深さ35~80cmを測る。P 2、P 3、P 6にP 9、P 8、P 6が重複するが、P 8、P 9は浅く抜き取り穴と思われる。床面で高台付坏(61)、P 2から甑(65)、P 9から砥石が出土した。

S B 10 (挿図293 図版95)

3群のうち一番谷側の一段低い位置にある。北東辺のみしか確認されないが、主軸をN-65°-Wにとる梁行一間×桁行2間(一×4.72m)の建物であると推定され、S B 09と同じ長さである。柱穴は円形で径40~60cm、深さ60~70cmをはかる。位置的にS B 09に先行するものと思われる。

(3) 出土遺物

1区の遺物 (挿図294, 295)

遺物は、須恵器(甕、蓋坏、坏身、高坏)、土師器(坏皿類、甕、甌、土製支脚)、鉄滓、土馬等が出土した。

1テラス出土のものは、1、11、12の須恵器と16~25、27、28の土師器である。蓋坏1は天井部にヘラ記号がある。高坏12は、脚部に切れ込み状の2段透かしをもつ。20~23は坏皿類の底部で、回転糸切り痕をもつ。27、28は土製支脚の破片である。

2テラス出土のものは、須恵器蓋坏・甕破片(2、3、5~9、15)、土師器甕・坏皿類(29、30)、土製支脚片(26)、鉄滓等がある。陰田8期と陰田10期相当(7世紀後半、8世紀後半)の古・新2時期分が混在する。5は回転糸切痕をもつ椀形坏、7、8は高台付坏で、底部を軽くヘラ削りし平坦である。3は返りのある小型の坏蓋で乳頭状のつまみをもつものと思われる。

4テラス出土のものは、4、13、14の須恵器と31の土師器、32、33の土馬であり、31は赤彩土器、32、33は同一個体と思われる土師質の土馬である。4は陰田10期並行で宝珠つまみをもち、返りが消失する。

2区の遺物 (挿図296~301)

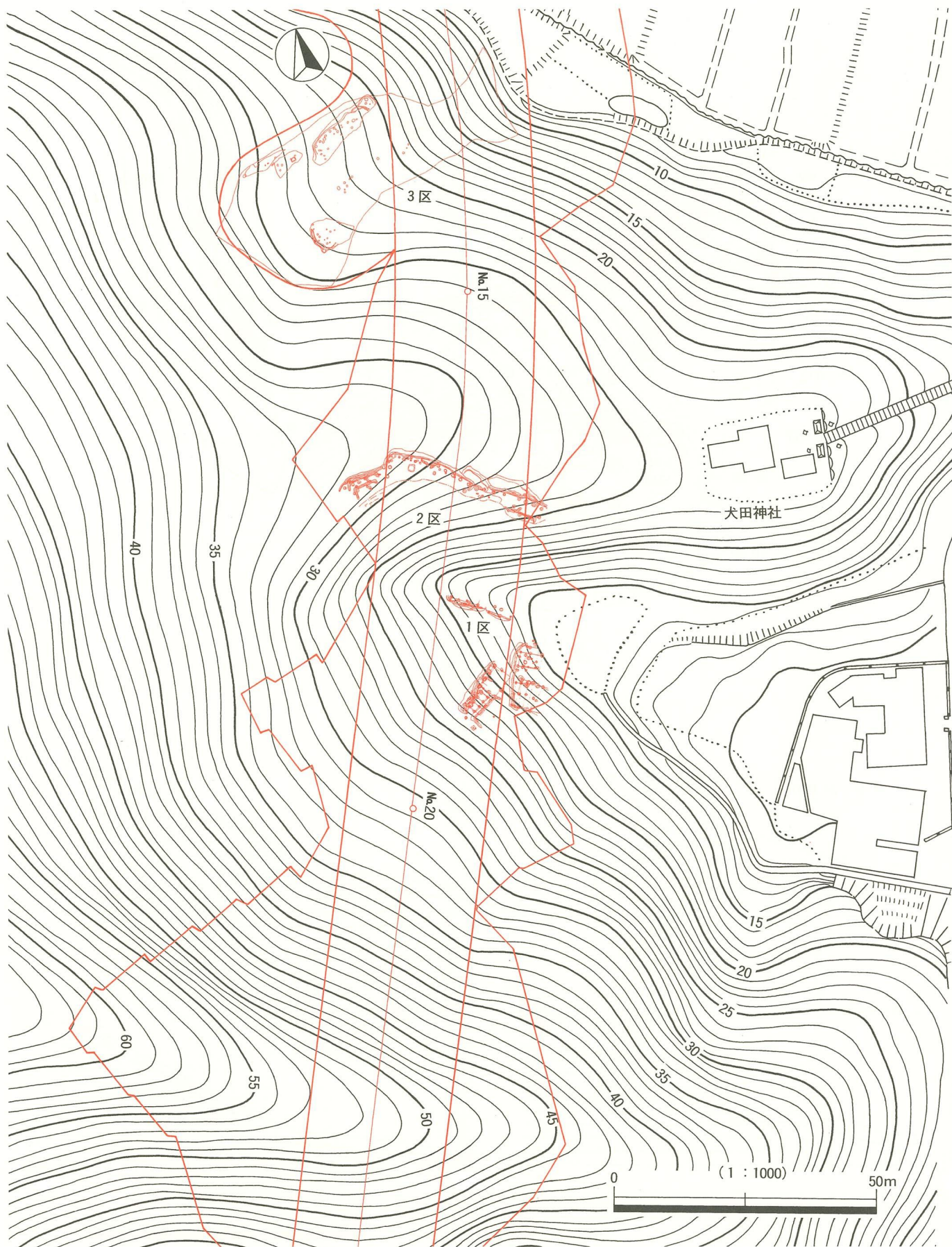
1群出土のものは、1~14、20~22の須恵器蓋坏、坏身、壺、甕、15~19の土師器甕、甌である。1~3は宝珠つまみをもち、返りのある須恵器蓋坏で陰田8期相当、13は高台が付くものと思われる長頸壺で陰田10期相当であると思われる。17~19は直行する口縁で甌である。20~22の甕は口縁の段が退化したものである。

2-1群出土のものは、23~34、36、37の須恵器蓋坏、坏身、壺、甕、35の土製支脚の破片である。23、24は環状つまみをもち、返りの消失した蓋坏で陰田9期に相当する。

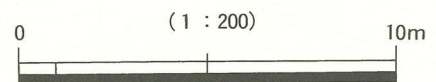
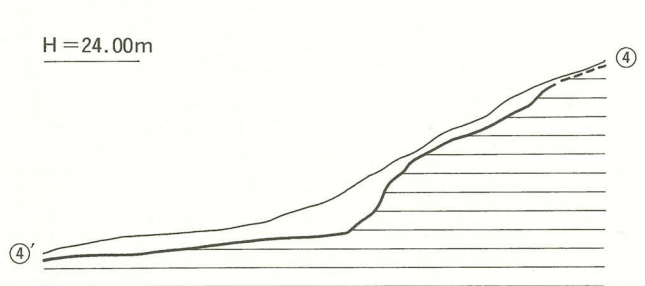
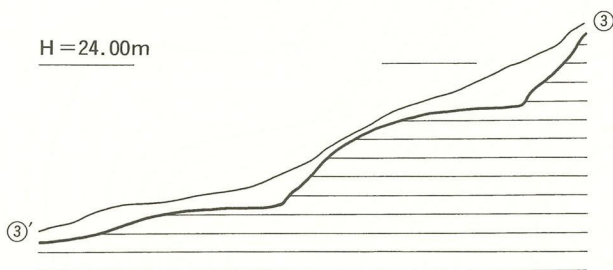
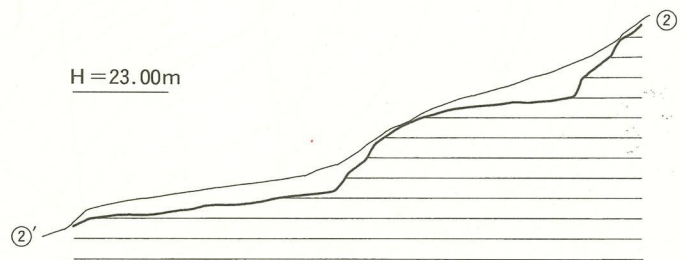
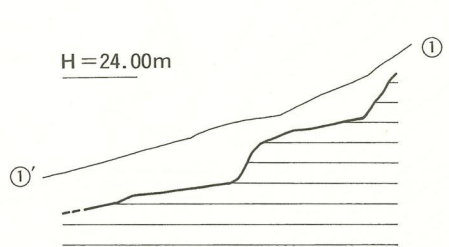
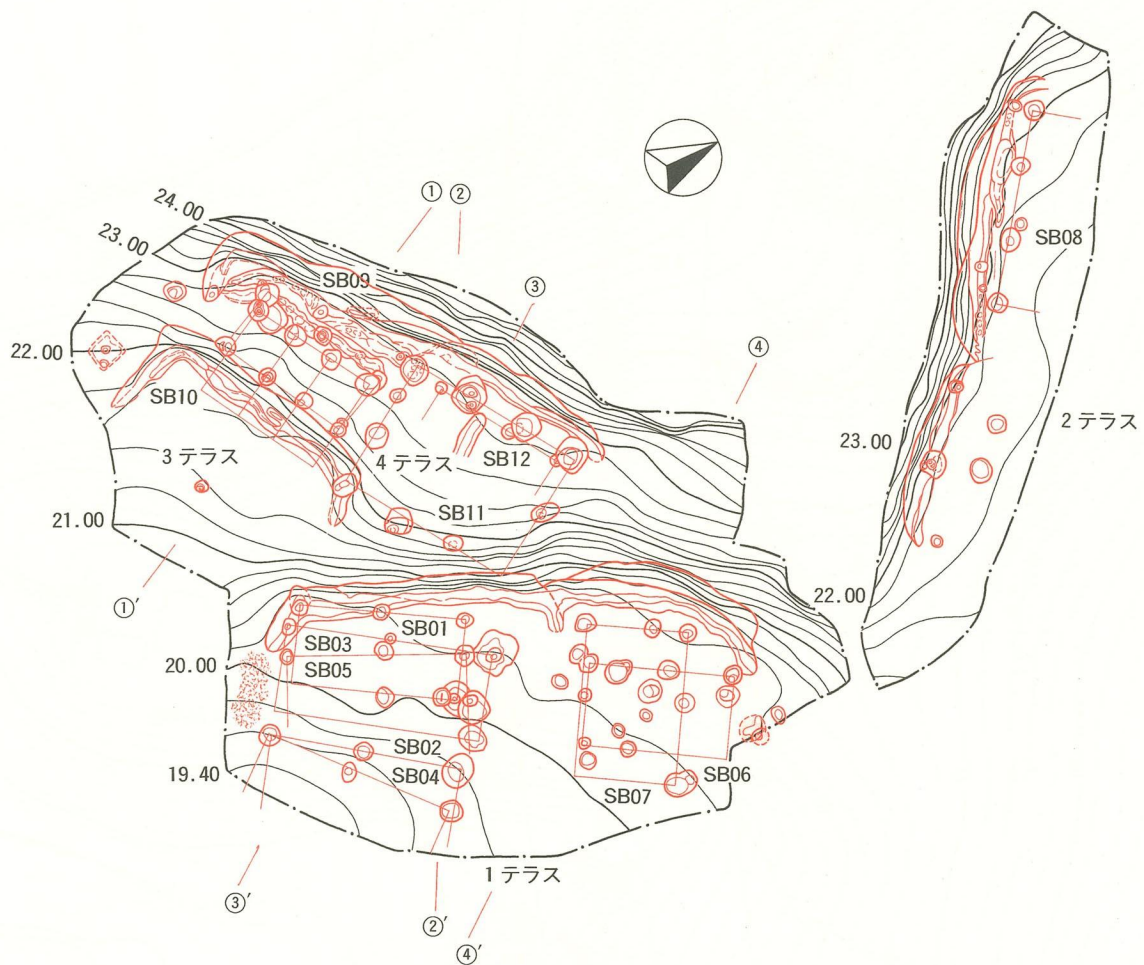
2-2群出土のものは、38~53の須恵器蓋坏、坏身、壺、甕、鉢、54~58の土師器甕、土製支脚、土錘である。38~40は宝珠つまみで、返りの残る蓋坏。44の坏は底部に糸切り痕をもち、高台付きの45は静止糸切り痕を残す。陰田8期~陰田10期相当の時期のものと考えられる。

3群出土のものは、59~64の須恵器蓋坏、坏身、鉢、65の甌の取っ手である。59の環状つまみの蓋坏から陰田8期相当であると考えられる。

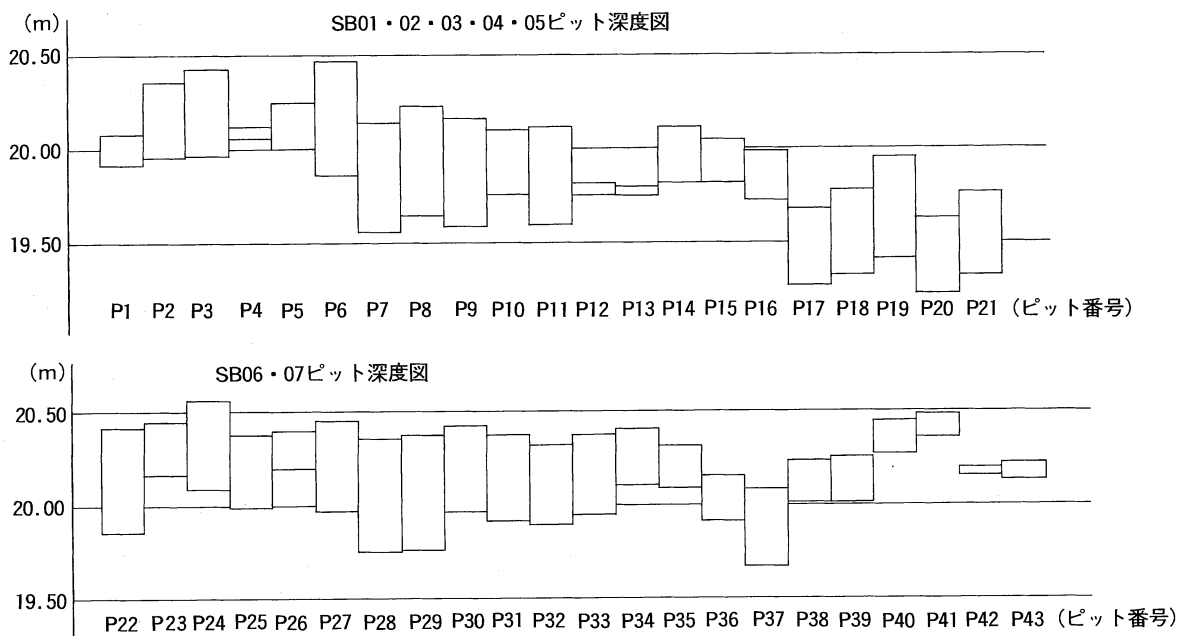
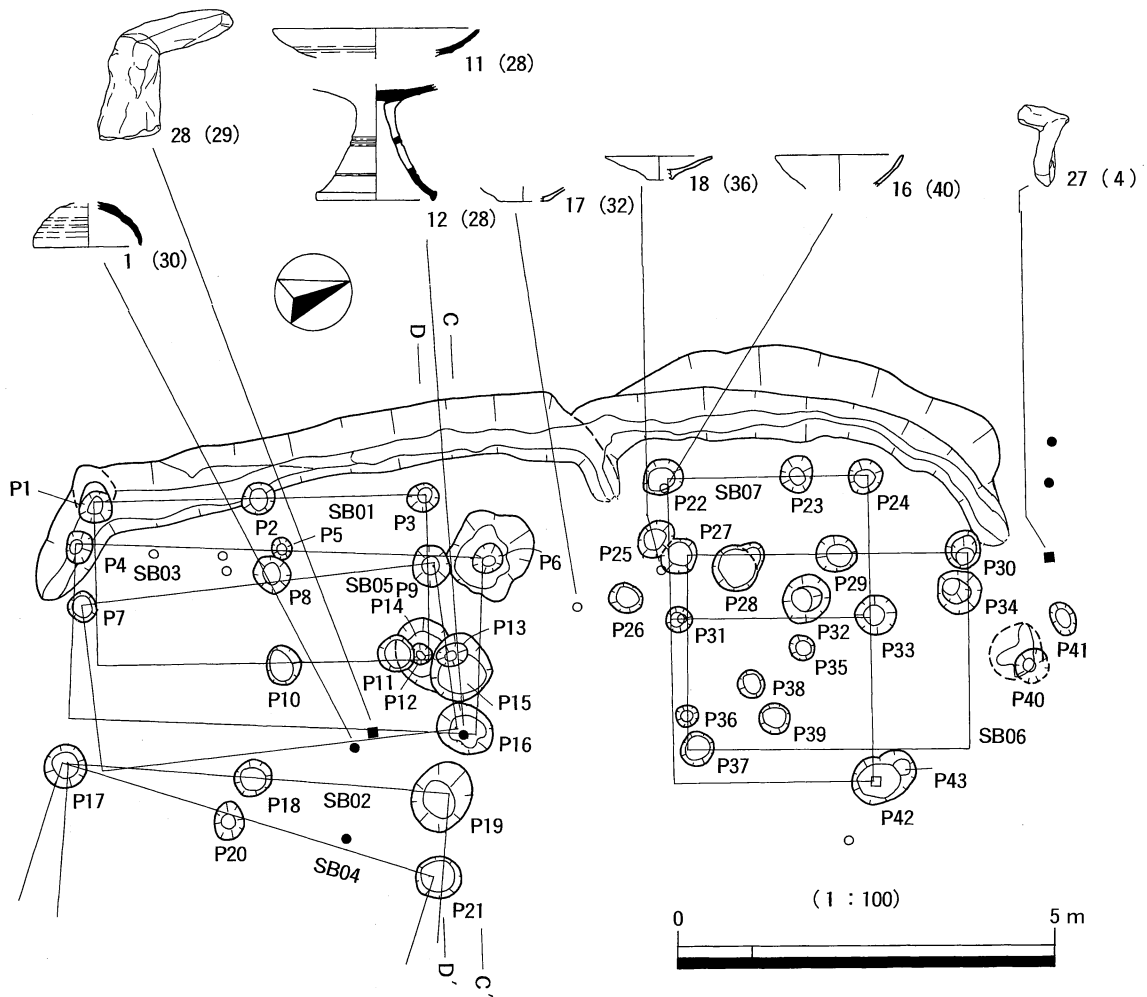
また、66~72はテラス上の頂部平坦面出土の須恵器類である。



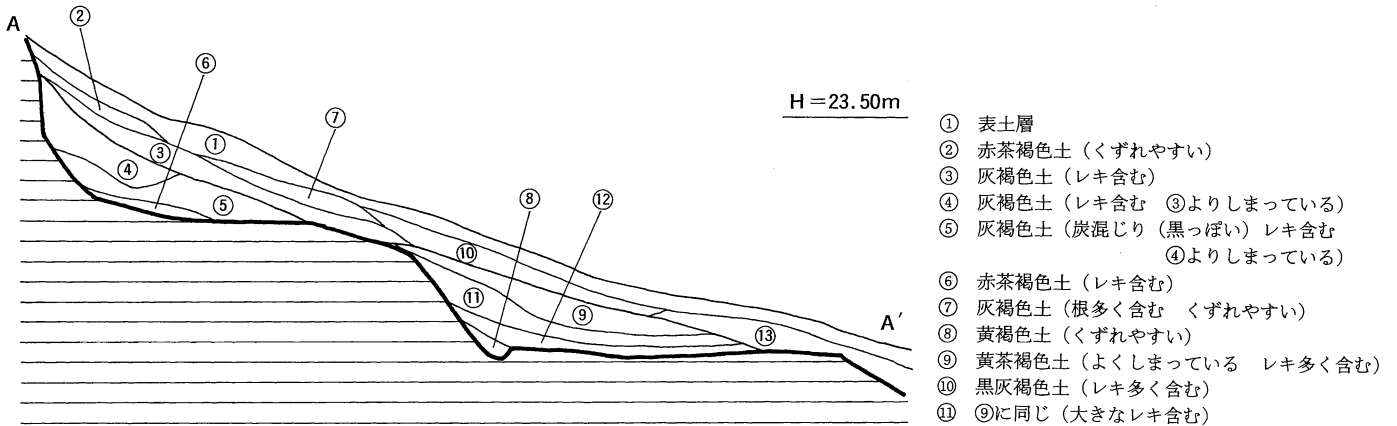
挿図261 陰田宮の谷遺跡 調査地全体図



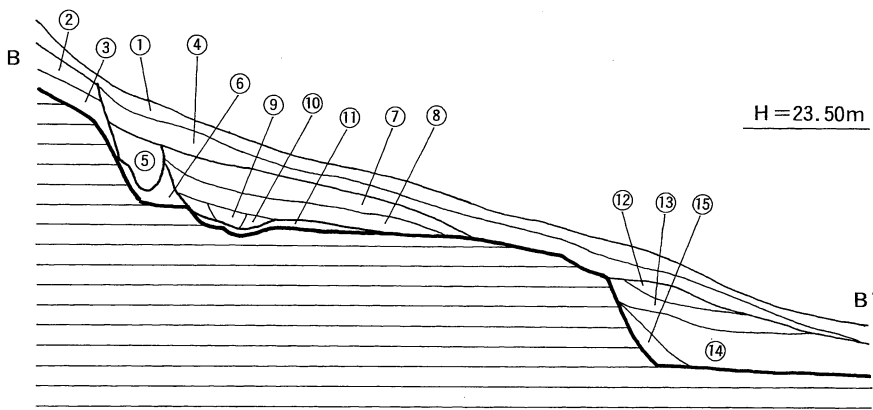
挿図262 陰田宮の谷遺跡 1区遺構分布図・立地断面図



挿図263 陰田宮の谷遺跡 1区1テラス ピット深度図・遺物分布図

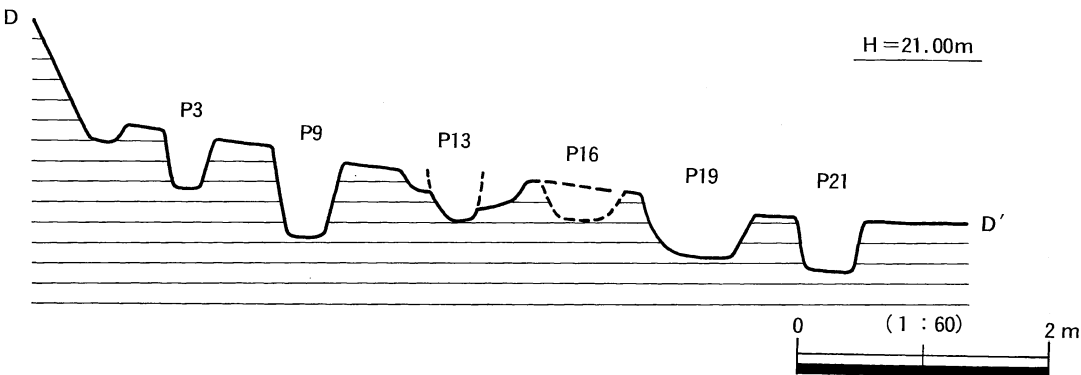
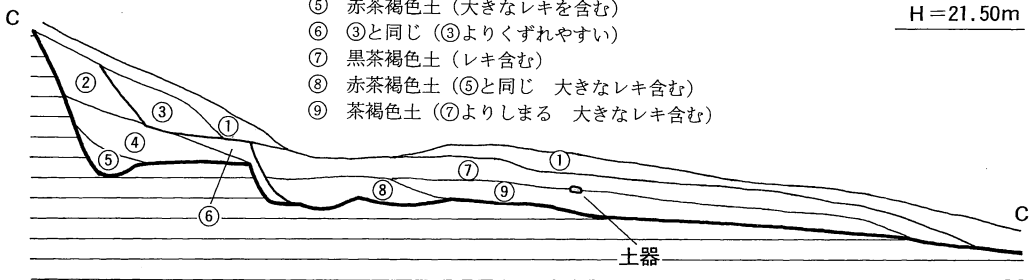


- ① 表土層
- ② 赤茶褐色土 (くずれやすい)
- ③ 灰褐色土 (レキ含む)
- ④ 灰褐色土 (レキ含む ③よりしまっている)
- ⑤ 灰褐色土 (炭混じり (黒っぽい) レキ含む ④よりしまっている)
- ⑥ 赤茶褐色土 (レキ含む)
- ⑦ 灰褐色土 (根多く含む くずれやすい)
- ⑧ 黄褐色土 (くずれやすい)
- ⑨ 黄茶褐色土 (よくしまっている レキ多く含む)
- ⑩ 黒灰褐色土 (レキ多く含む)
- ⑪ ⑨と同じ (大きなレキ含む)
- ⑫ レキだけ (すき間に赤茶色土 よくしまる)
- ⑬ 黄褐色土 (根含む くずれやすい)

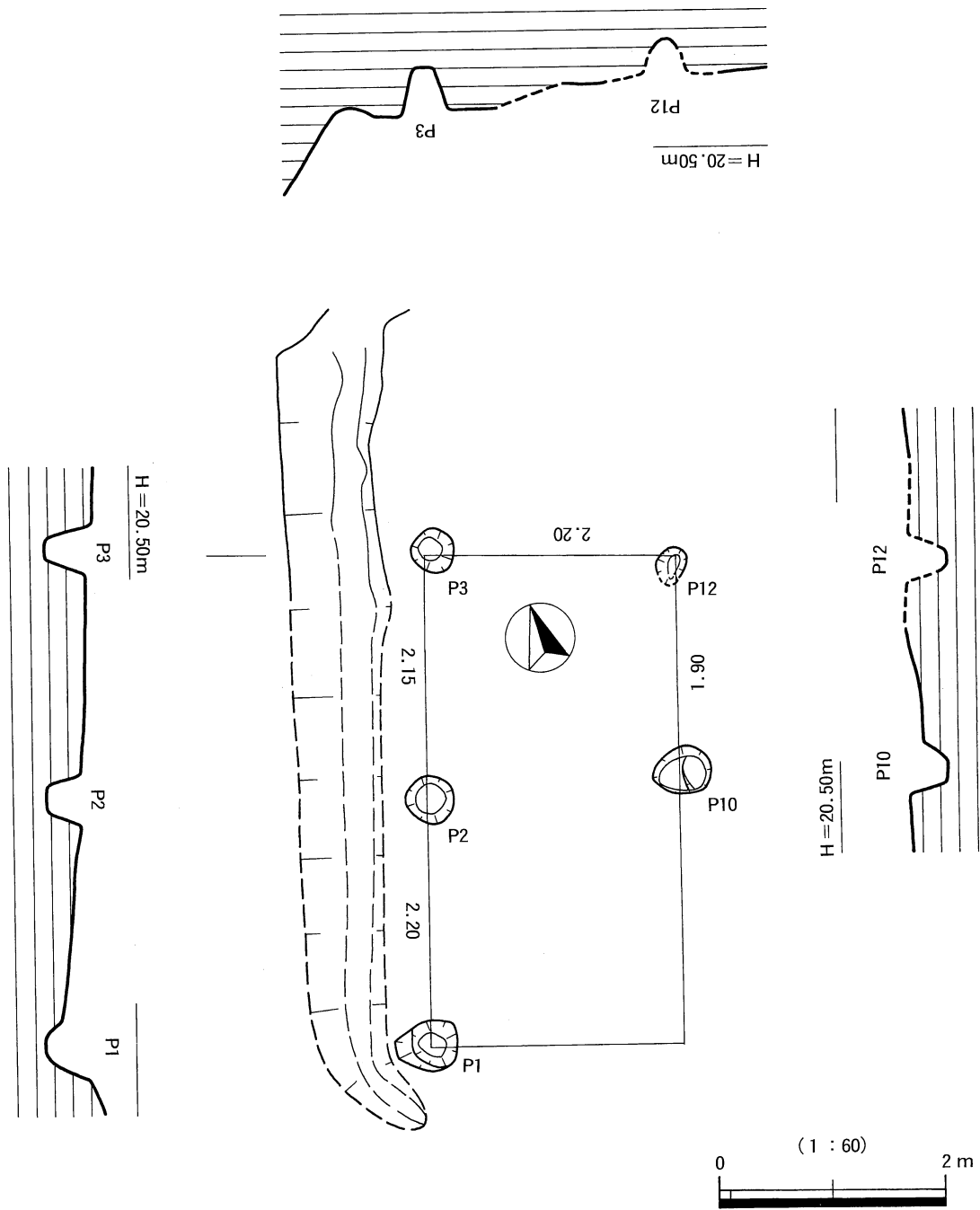


- ① 表土層
- ② 赤茶褐色土 (くずれやすい 根含む)
- ③ ②より褐色濃い しまっている
- ④ 茶灰褐色土 (くずれやすい 根含む)
- ⑤ ③と同色で灰混り
- ⑥ ②と同色 (しまっている)
- ⑦ ④より褐色度濃い (くずれやすい)
- ⑧ ⑦より褐色度濃い (しまっている)
- ⑨ ⑤と同色 (黒っぽい)
- ⑩ ⑤と同色 (レキ含む)
- ⑪ 赤褐色土 (粘質)
- ⑫ ④と同色 (④よりしまっている レキ含む)
- ⑬ ⑫より暗い (しまっている レキ含む)
- ⑭ 黒褐色土 (レキ含む 一番よくしまる)
- ⑮ 岩盤か? (レキだらけ)

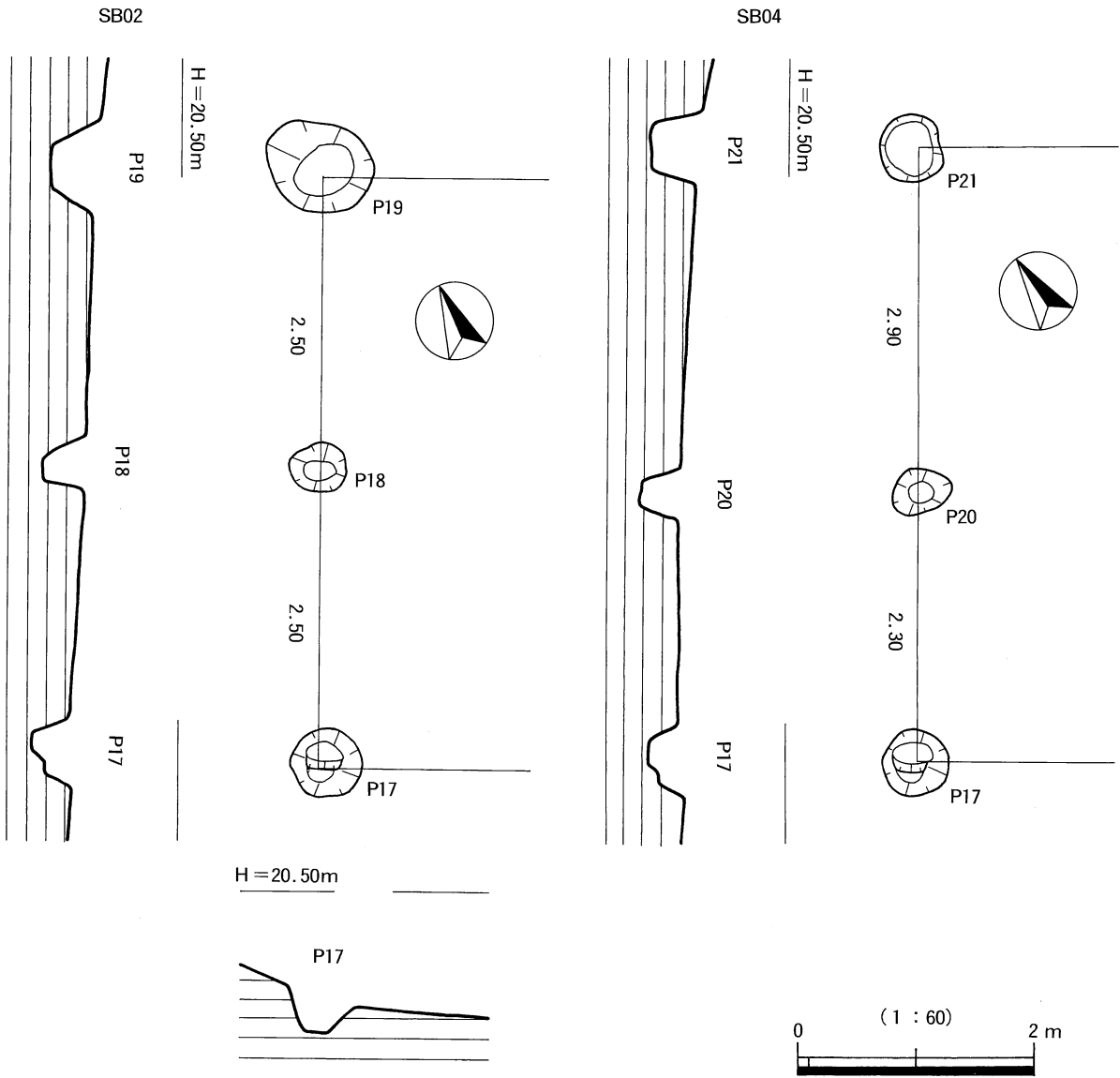
- ① 表土層 (灰褐色土 くずれやすい)
- ② 茶褐色土 (レキを多く含む よくしまっている)
- ③ 茶褐色土 (②より黒い 根を多く含むくずれやすい)
- ④ 黒灰褐色土 (炭多く含む レキを多く含む)
- ⑤ 赤茶褐色土 (大きなレキを含む)
- ⑥ ③と同じ (③よりくずれやすい)
- ⑦ 黒茶褐色土 (レキ含む)
- ⑧ 赤茶褐色土 (⑤と同じ 大きなレキ含む)
- ⑨ 茶褐色土 (⑦よりしまる 大きなレキ含む)



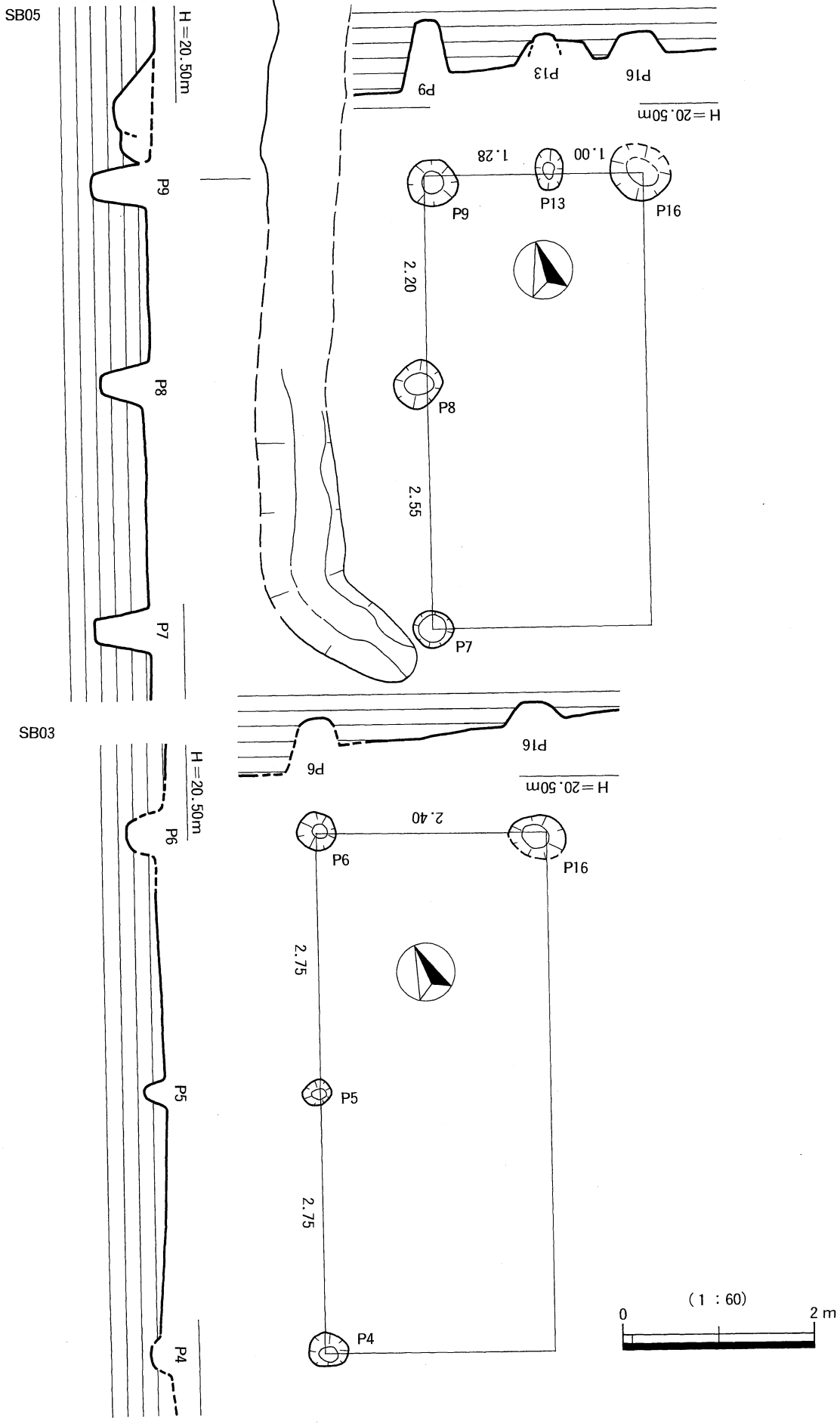
挿図264 陰田宮の谷遺跡 1区土層図



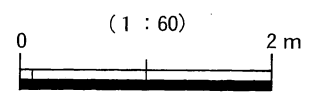
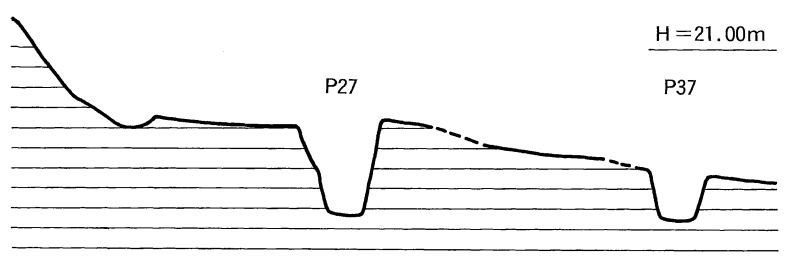
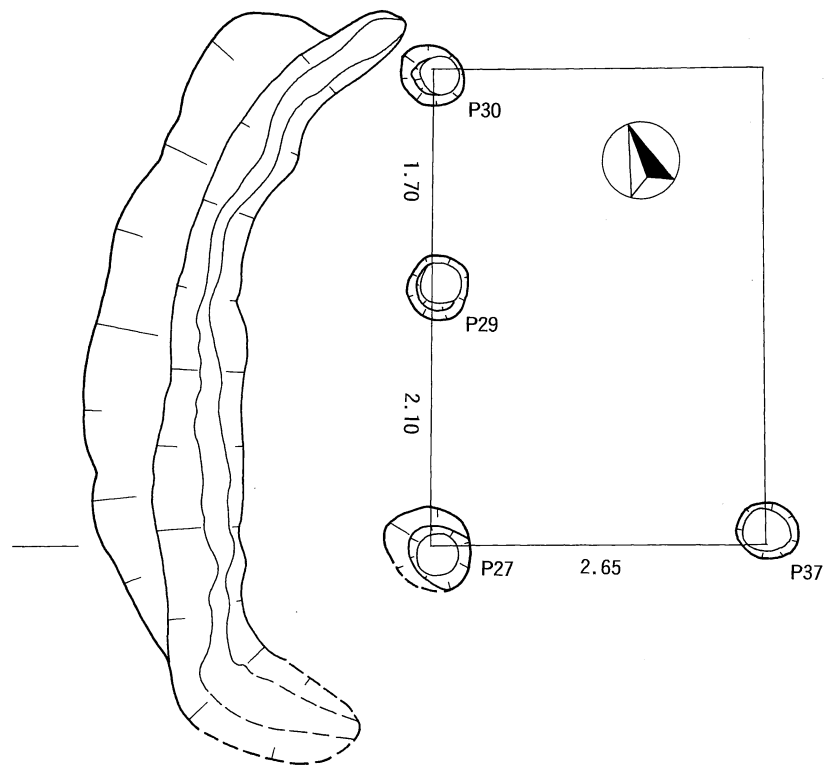
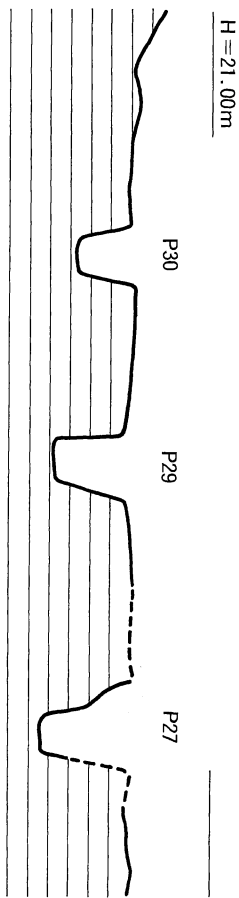
挿図265 陰田宮の谷遺跡 1区1テラスSB01遺構図



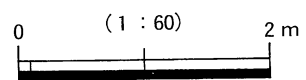
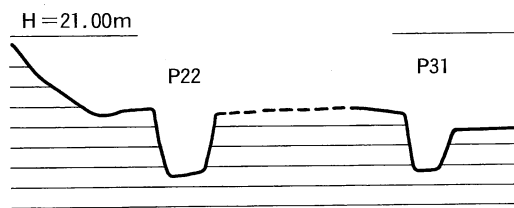
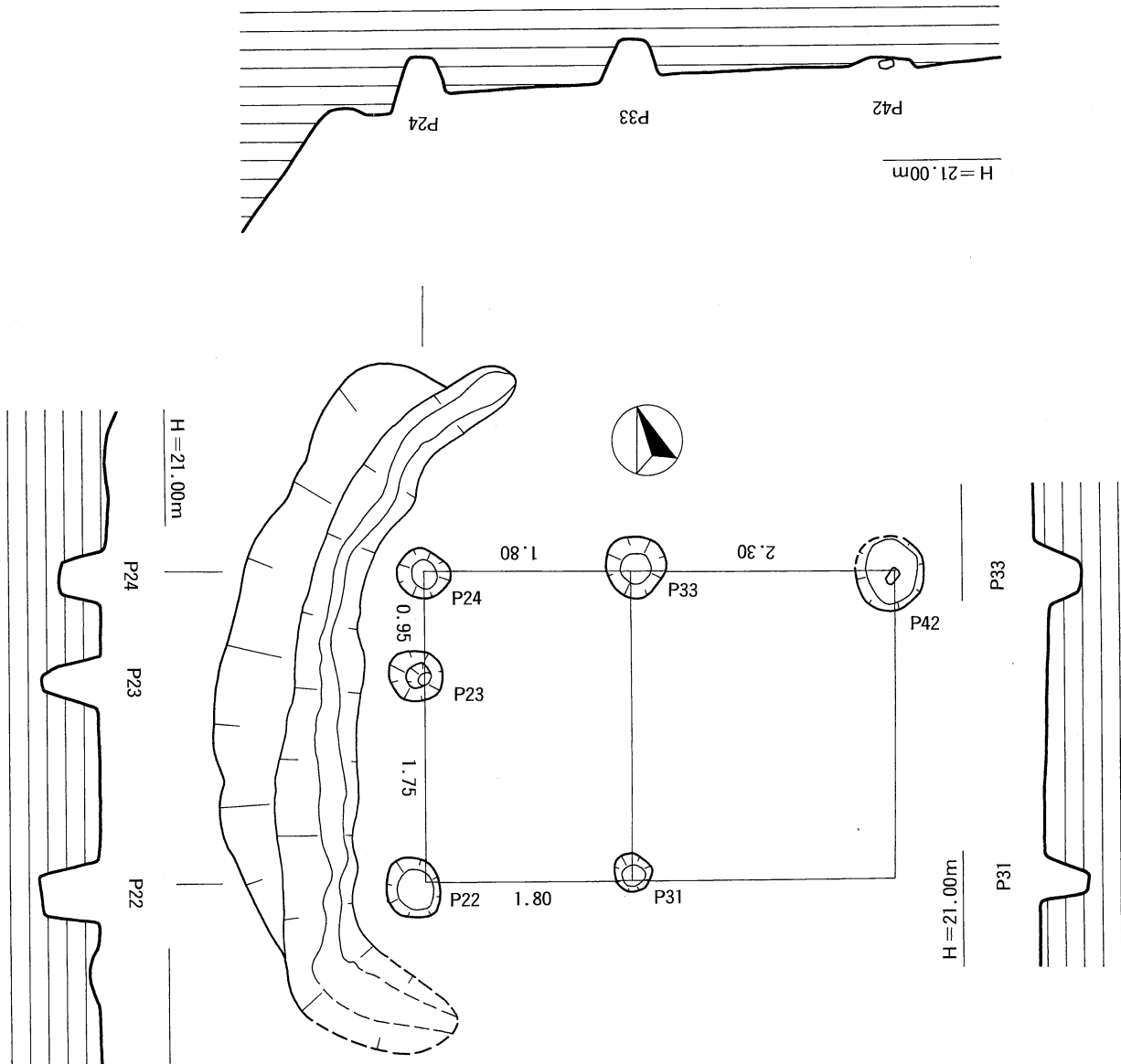
挿図266 陰田宮の谷遺跡 1区1テラスSB02・04遺構図



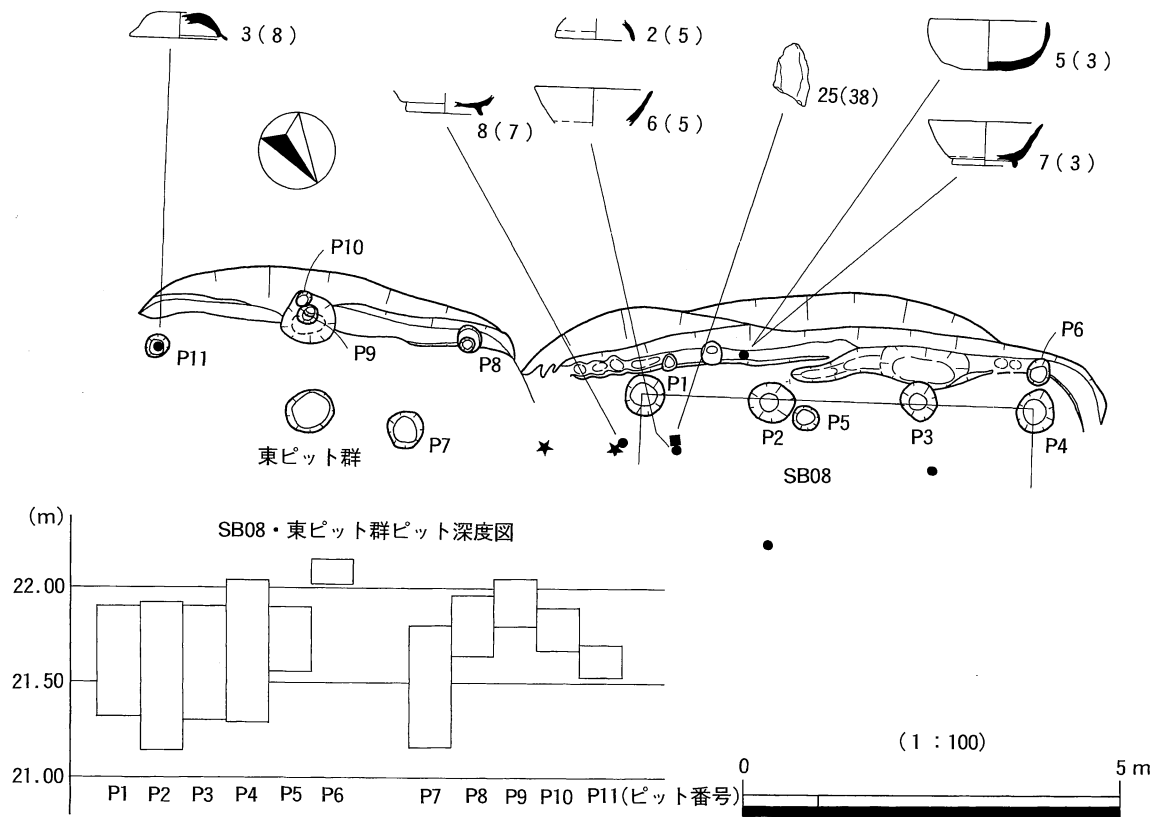
挿図267 陰田宮の谷遺跡 1区1テラスSB03・05遺構図



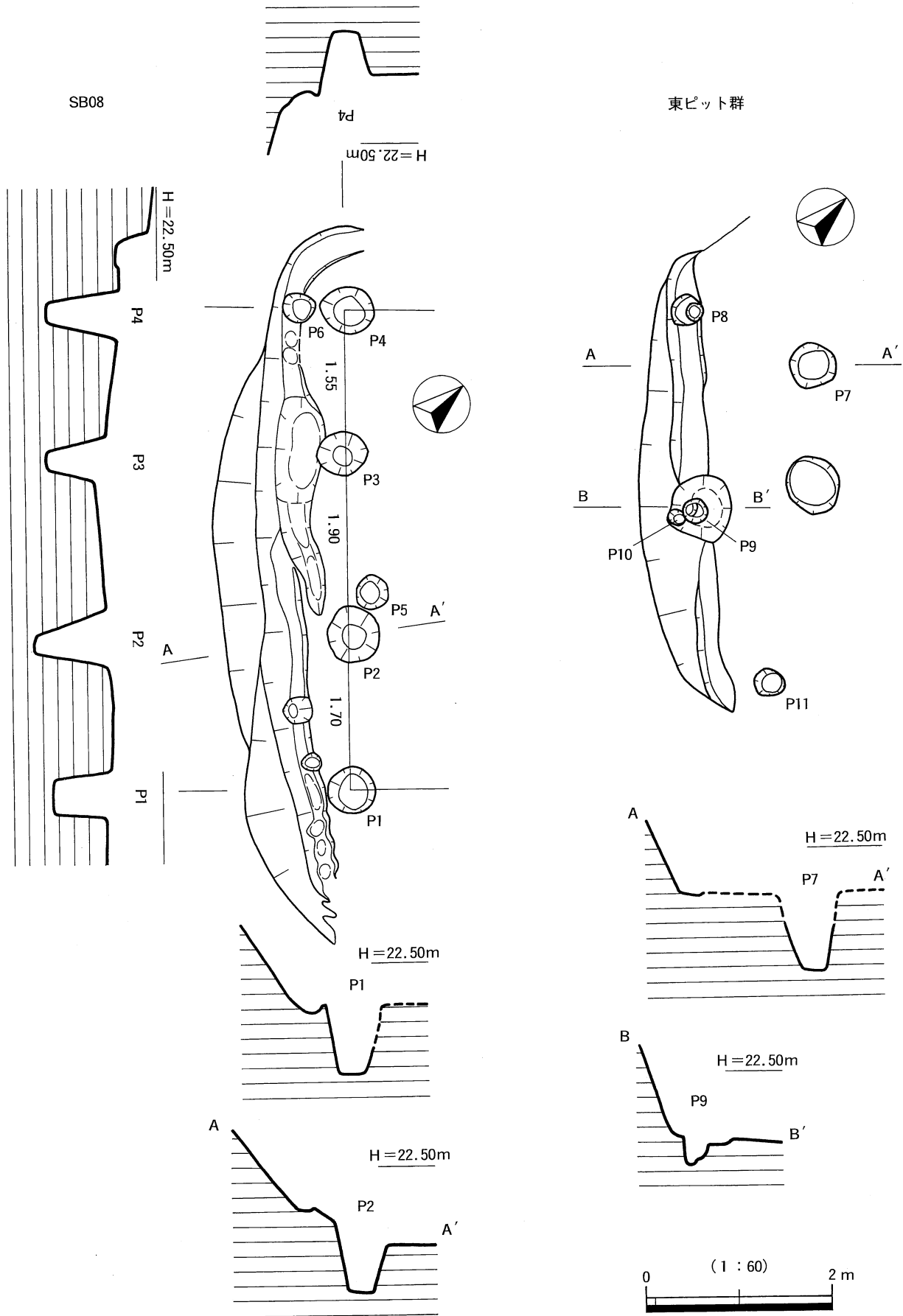
挿図268 陰田宮の谷遺跡 1区1テラスSB06遺構図



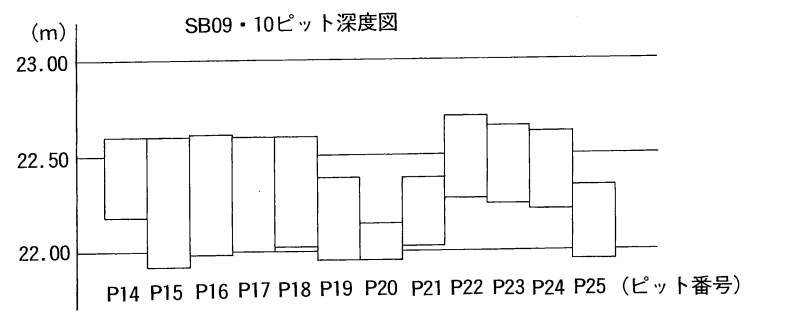
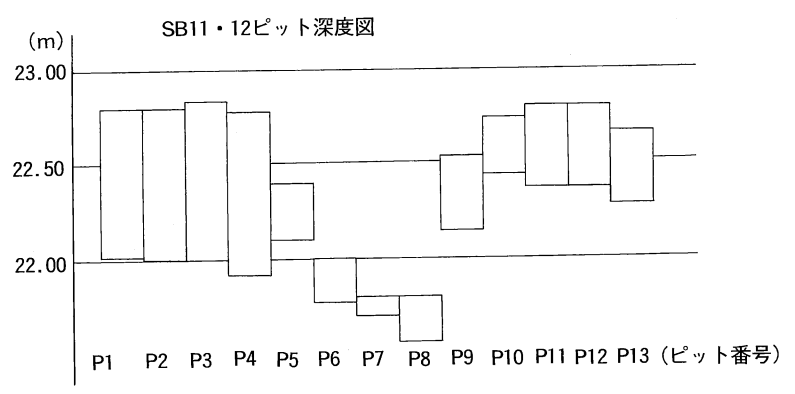
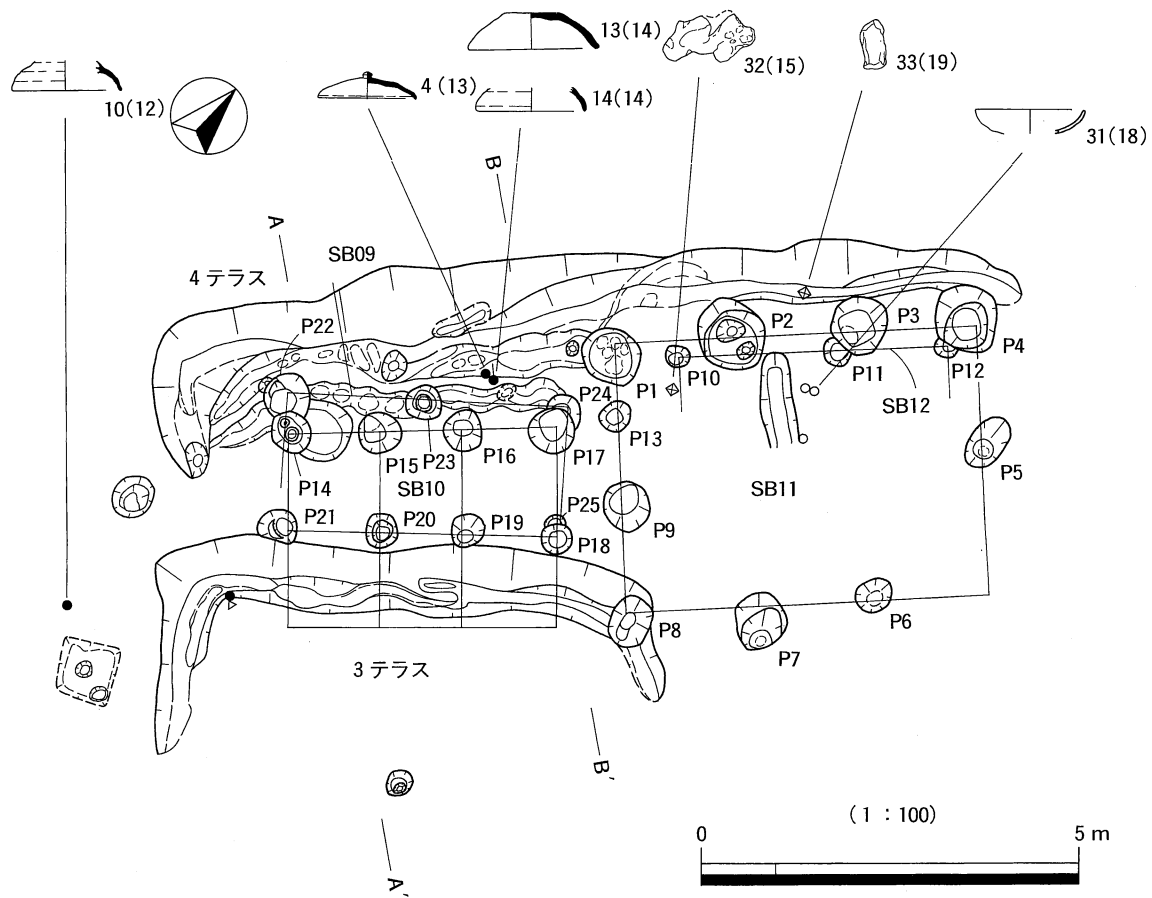
挿図269 陰田宮の谷遺跡 1区1テラスSB07遺構図



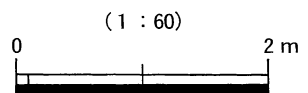
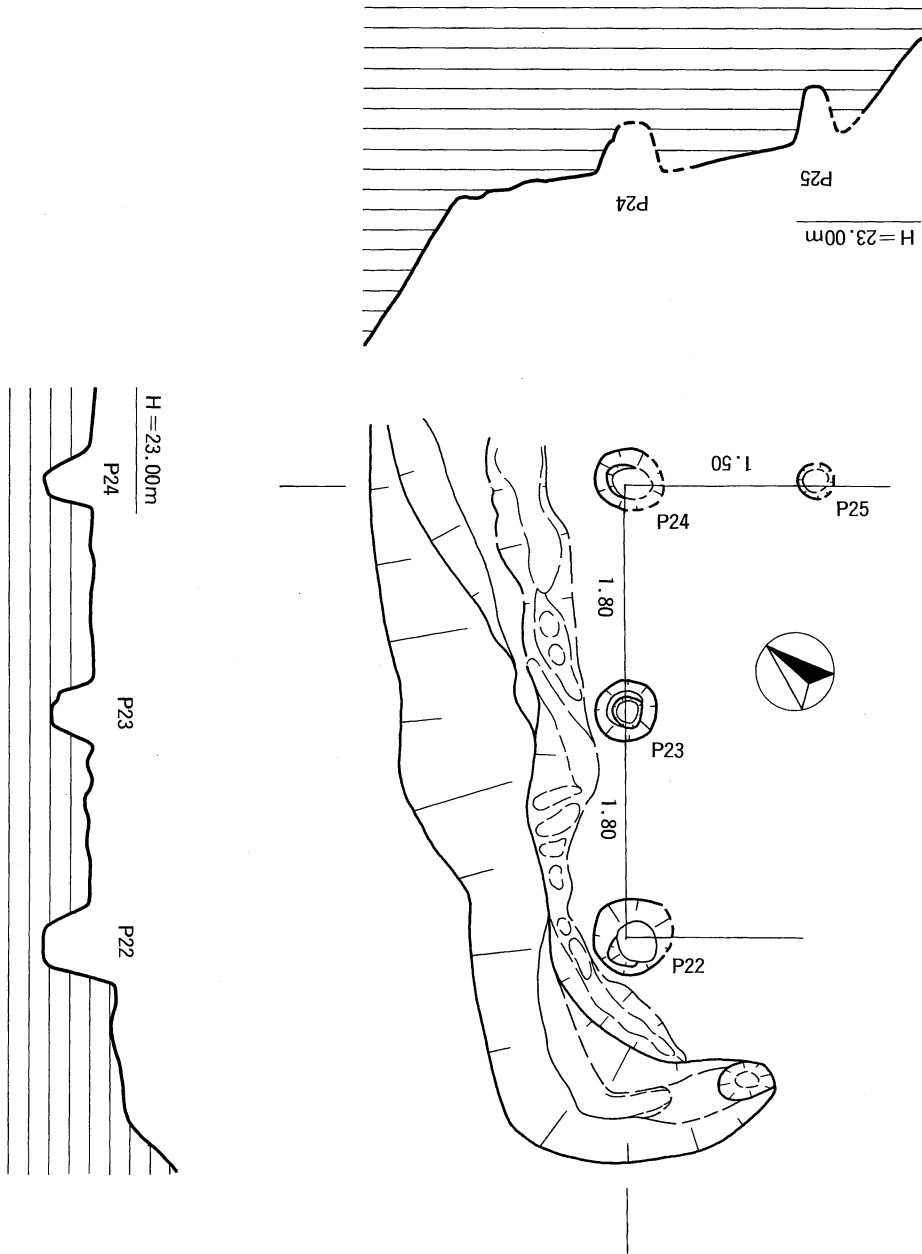
挿図270 陰田宮の谷遺跡 1区2テラス ピット深度図、遺物分布図



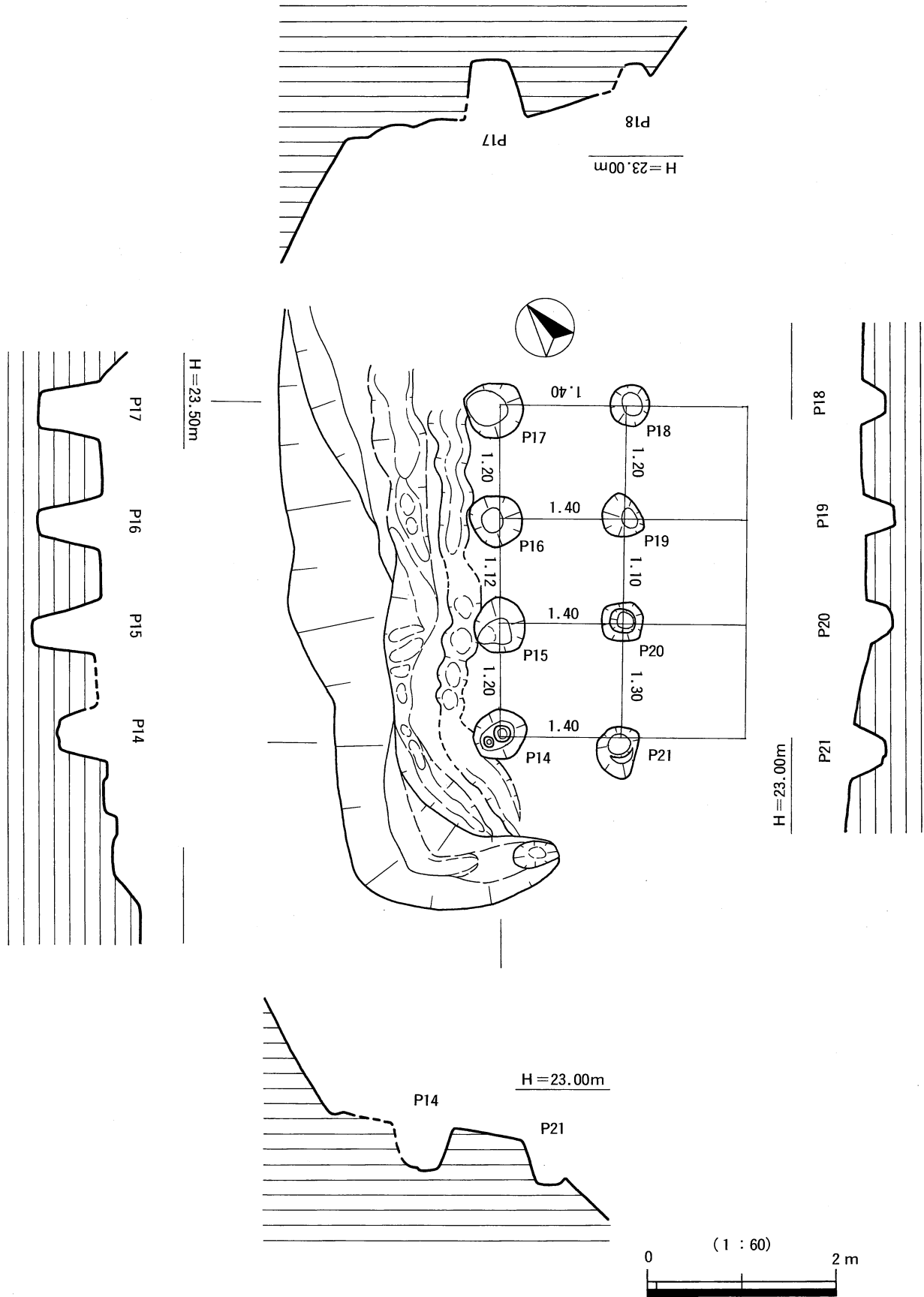
挿図271 陰田宮の谷遺跡 1区2テラスSB08東ピット群遺構図



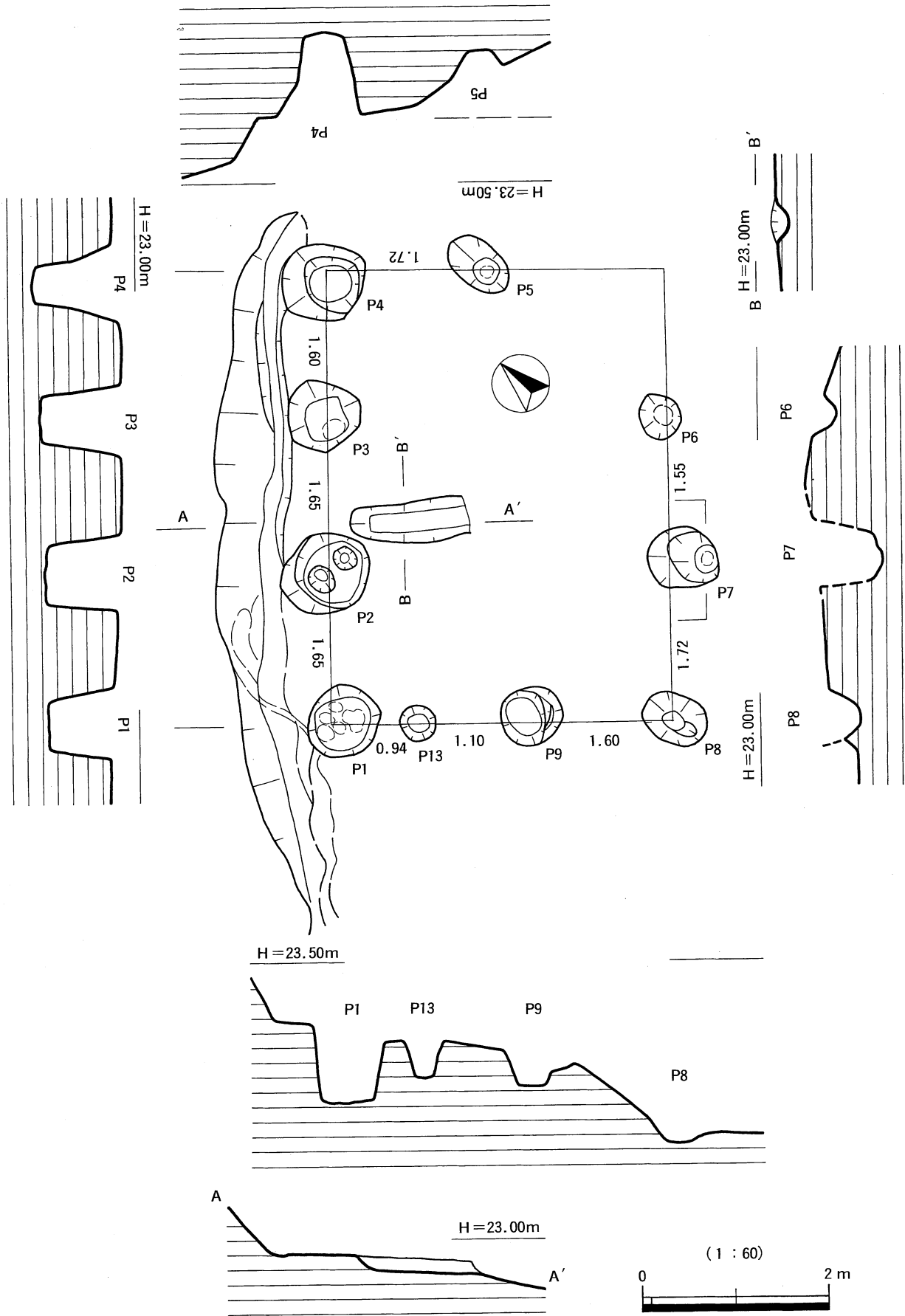
挿図272 陰田宮の谷遺跡 1区3・4テラス ピット深度図、遺物分布図



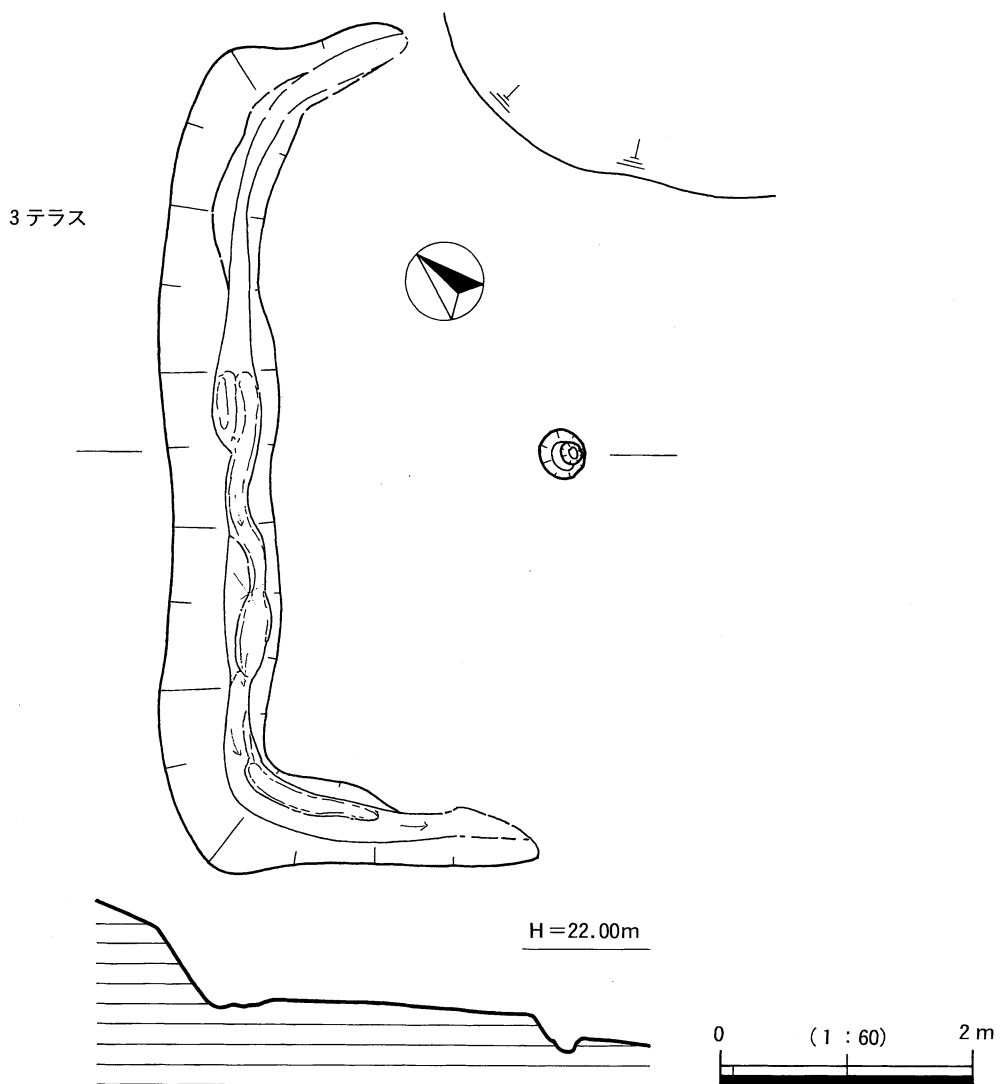
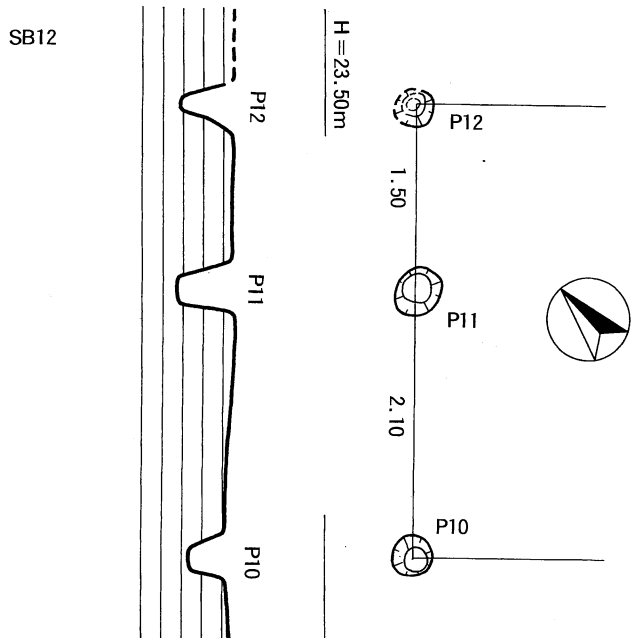
挿図273 陰田宮の谷遺跡 1区4テラスSB09遺構図



挿図274 陰田宮の谷遺跡 1区4テラスSB10遺構図



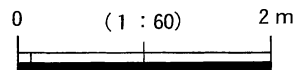
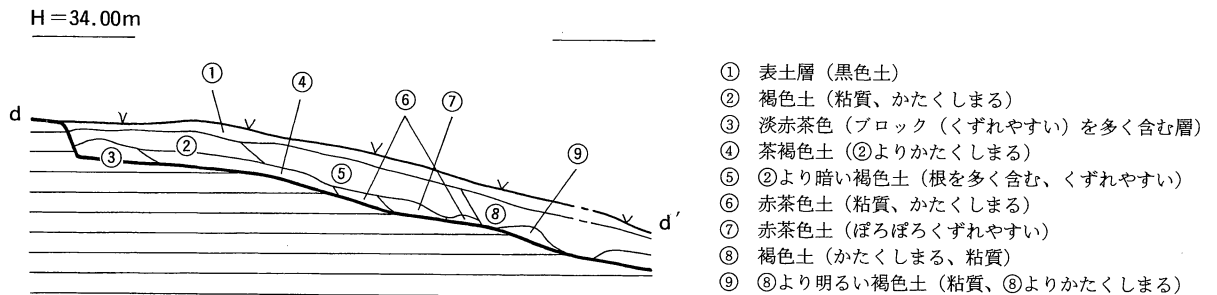
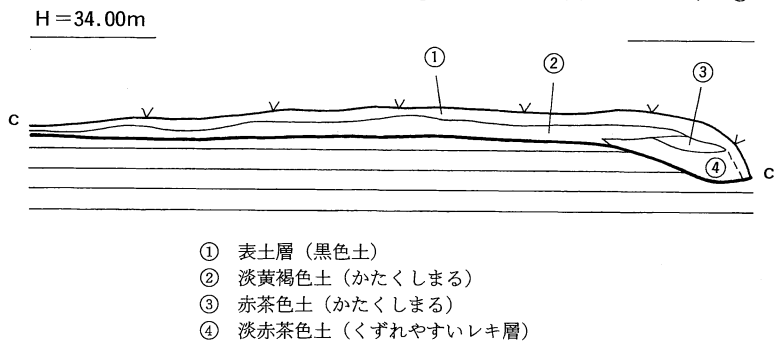
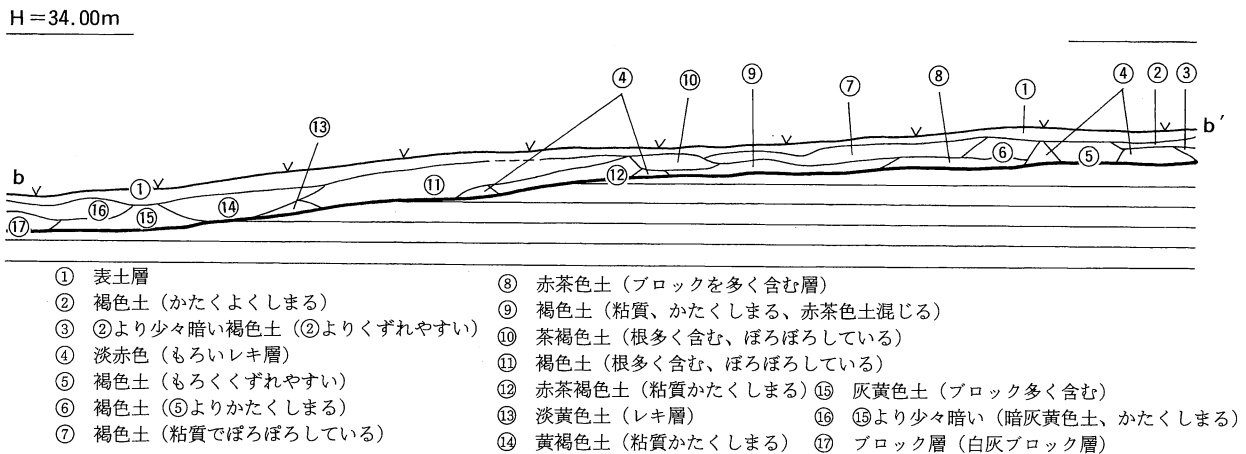
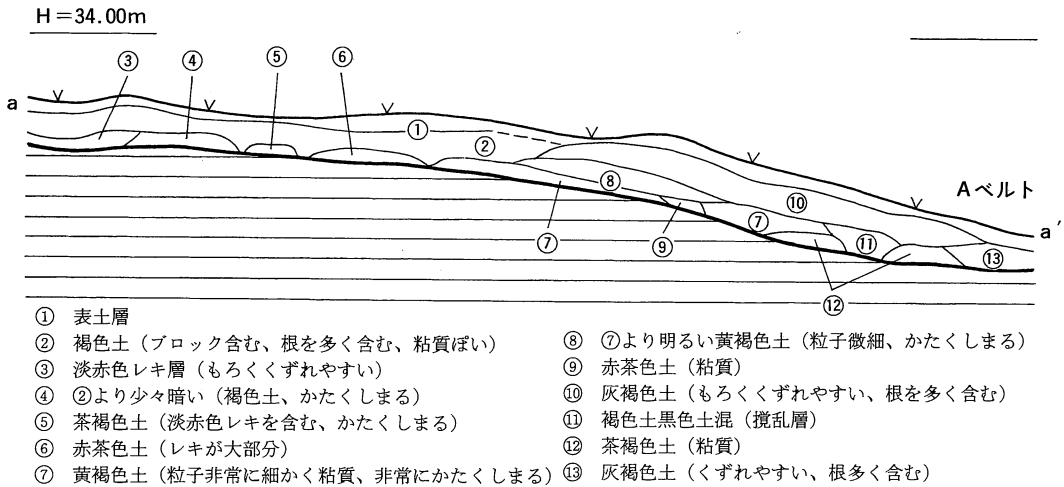
挿図275 陰田宮の谷遺跡 1区4テラスSB11遺構図



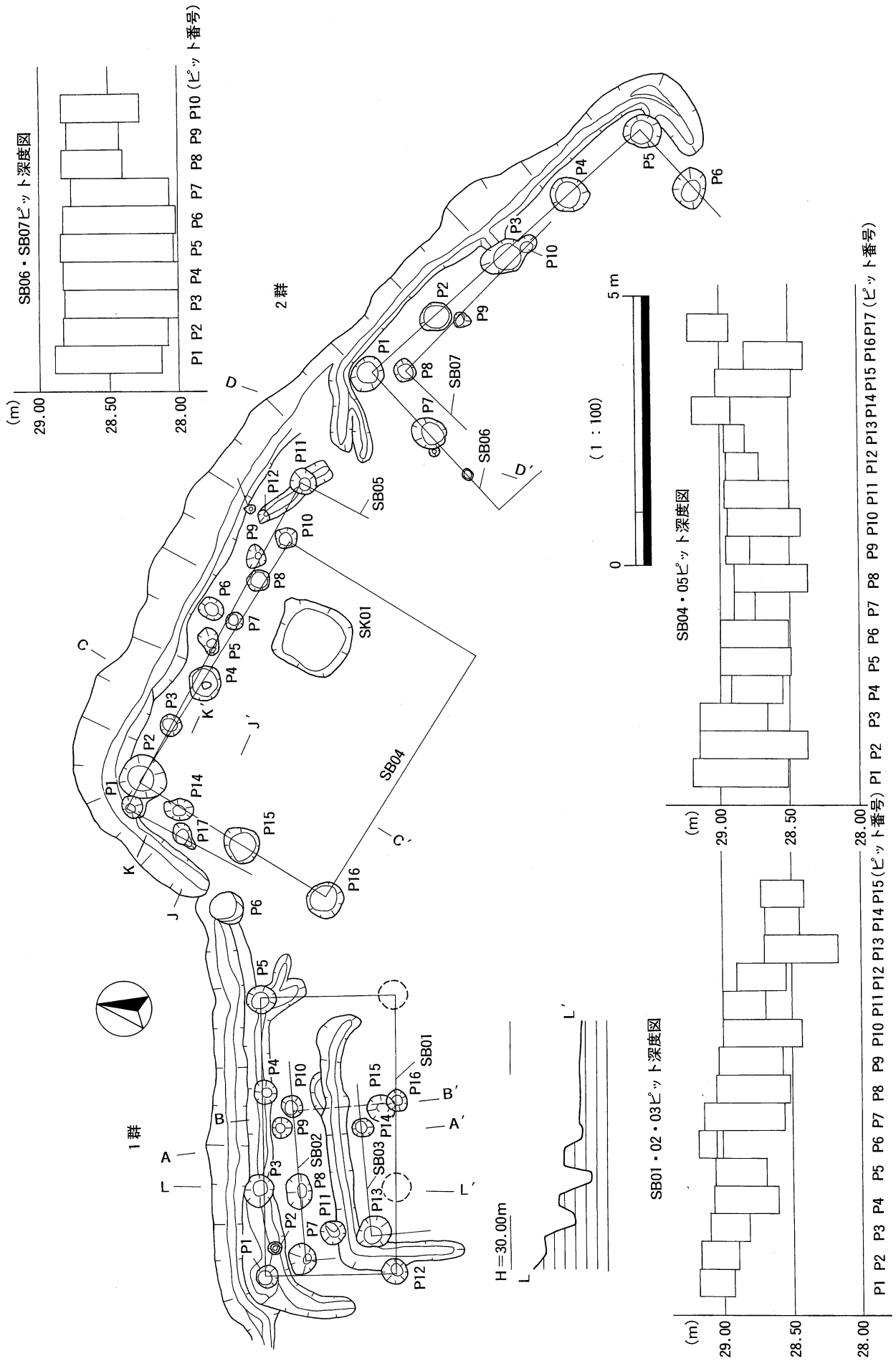
挿図276 陰田宮の谷遺跡 1区4テラスSB12・3テラス遺構図



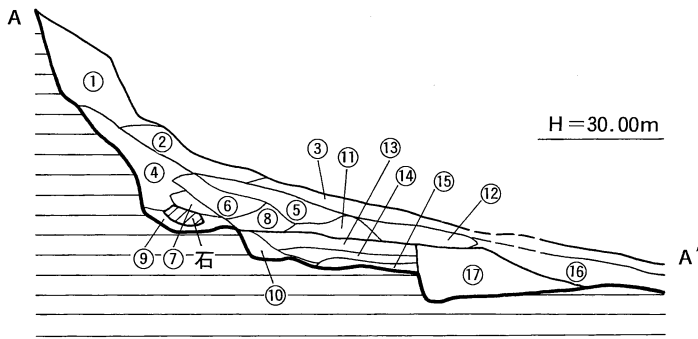
挿図277 陰田宮の谷遺跡 2区遺構分布図



挿図278 陰田宮の谷遺跡 2区土層図 (1)

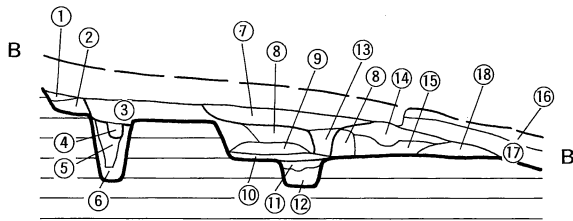


挿図279 陰田宮の谷遺跡 2区1・2群 ピット深度図

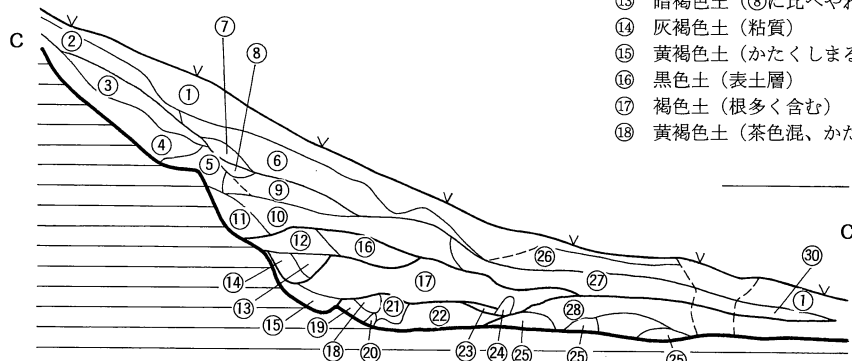


- ① 褐色土 (非常に多く根を含む)
- ② 茶褐色土 (5mm程度の礫を多量に含み、しまっている)
- ③ 褐色土 (表土層、根多く含む、くずれやすい)
- ④ 赤茶褐色土
- ⑤ 茶褐色土
- ⑥ 赤茶褐色土 (くずれやすい)
- ⑦ 赤茶色土 (⑥よりやわらかい)
- ⑧ 茶褐色土 (0.3cm程度の礫を含みかたくしまる)
- ⑨ 赤茶色土 (非常にやわらかい)
- ⑩ 淡赤茶色土 (かたくしまる)
- ⑪ 褐色土
- ⑫ 褐色土 (赤色土混じり、⑪より粒子細かい)
- ⑬ 茶褐色土 (炭所々点在、⑪よりはかたくしまる)
- ⑭ 赤茶褐色土 (⑬より少し赤みを帯びる、やわらかい、炭が所々点在)
- ⑮ 赤色土 (赤礫層、粘質)
- ⑯ 黒褐色土 (根多く含む)
- ⑰ 茶褐色土 (礫含む、よくしまり粘質)

H = 30.00m

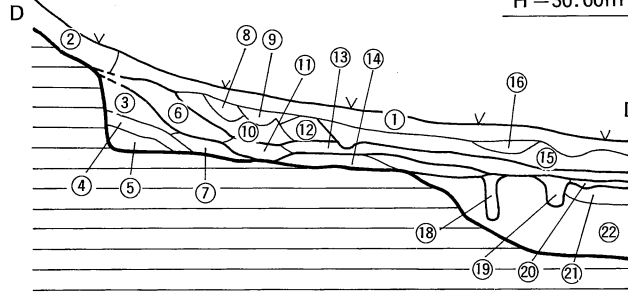


- ① 赤茶色土 (かたい)
- ② 赤茶色土 (①よりかたくしまり岩質を多く含む)
- ③ 茶褐色土 (くずれやすい、少々粘質)
- ④ 赤茶色土 (砂礫を多く含む)
- ⑤ 茶褐色土 (④⑥に比べて非常にやわらかい)
- ⑥ 淡赤色土 (岩質を含む、さほどかたくしない)
- ⑦ 褐色土 (炭混じり)
- ⑧ 赤茶褐色土 (礫を多く含む、かたい)
- ⑨ 茶褐色土
- ⑩ 赤茶色土 (粒子微細、岩質、粘質、かたくしまる)
- ⑪ 赤茶色土 (粒子あらい、サクサクと削れる)
- ⑫ 茶褐色土 (赤色土混、⑪より暗い、⑪と同質)
- ⑬ 暗褐色土 (⑧に比べやわらかい)
- ⑭ 灰褐色土 (粘質)
- ⑮ 黄褐色土 (かたくしまる)
- ⑯ 黒色土 (表土層)
- ⑰ 褐色土 (根多く含む)
- ⑱ 黄褐色土 (茶色混、かたくしまる)

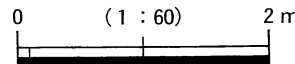


- ① 暗褐色土 (表土層、粘質)
- ② 褐色土 (赤粘質土混)
- ③ 褐色土 (粘質、よくしまる)
- ④ 赤褐色土混粘質土 (かたく粘質)
- ⑤ 赤茶色土 (粘質、かたくしまる)
- ⑥ 茶褐色土 (やわらかくくずれやすい)
- ⑦ 褐色土 (粘質、かたくしまる)
- ⑧ 褐色土 (粘質、かたくしまる、⑦より暗い、⑦よりやわらかい)
- ⑨ 茶褐色土 (粘質、よくしまる)
- ⑩ 褐色土 (黒色土混、粘質、所々炭検出、⑨より砂混じり)
- ⑪ 淡茶褐色土 (くずれやすい)
- ⑫ 茶褐色土 (くずれやすい)
- ⑬ 褐色土 (⑫より暗い、粘質)
- ⑭ 褐色土 (⑫より暗い、粘質、⑬よりかたくしまる)
- ⑮ 暗褐色土 (砂質を含みかたくしまる)
- ⑯ 褐色土 (⑯よりかたくしまる)
- ⑰ 褐色土 (⑯より少々暗い、しまる、所々炭検出2mm以下の小礫含む)
- ⑱ 赤茶色土 (ガリガリとかたくしまる)
- ⑲ 暗褐色土 (砂質を含みかたくしまる)
- ⑳ 淡灰褐色土 (非常にかたくしまる)
- ㉑ 褐色土
- ㉒ 茶色土 (非常にかたい)
- ㉓ 褐色土 (⑰と同色 ⑰より粘質)
- ㉔ 黒褐色土 (くずれやすい)
- ㉕ 淡(白)茶褐色土 (非常にかたい)
- ㉖ 褐色土 (小礫含む)
- ㉗ 黒色土 (炭多量検出)
- ㉘ 褐色土 (⑰と同質だがややかたくしまる)
- ㉙ 灰色土 (赤色土混、粘質)
- ㉚ 褐色土 (小礫含む)

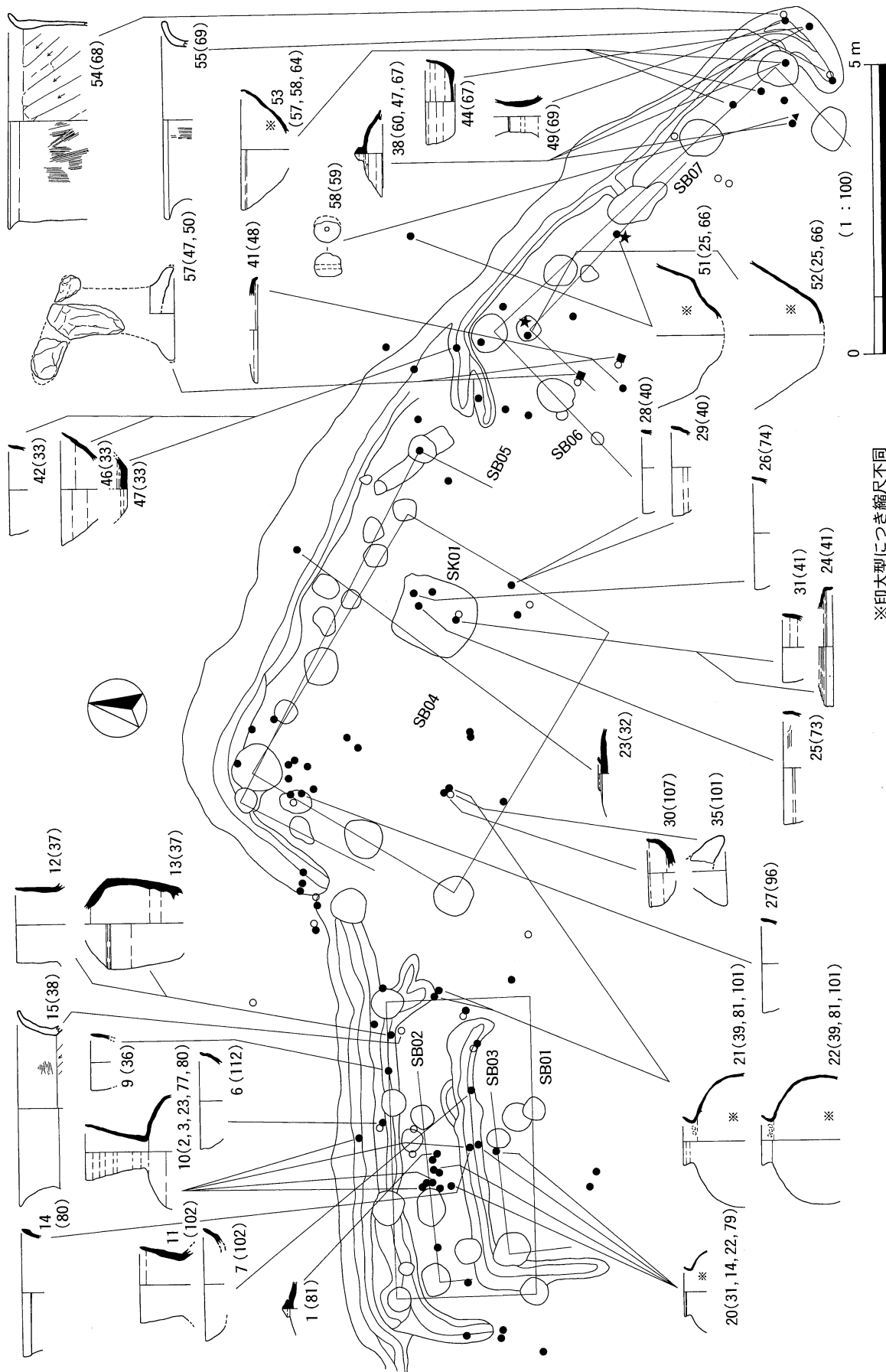
H = 30.00m



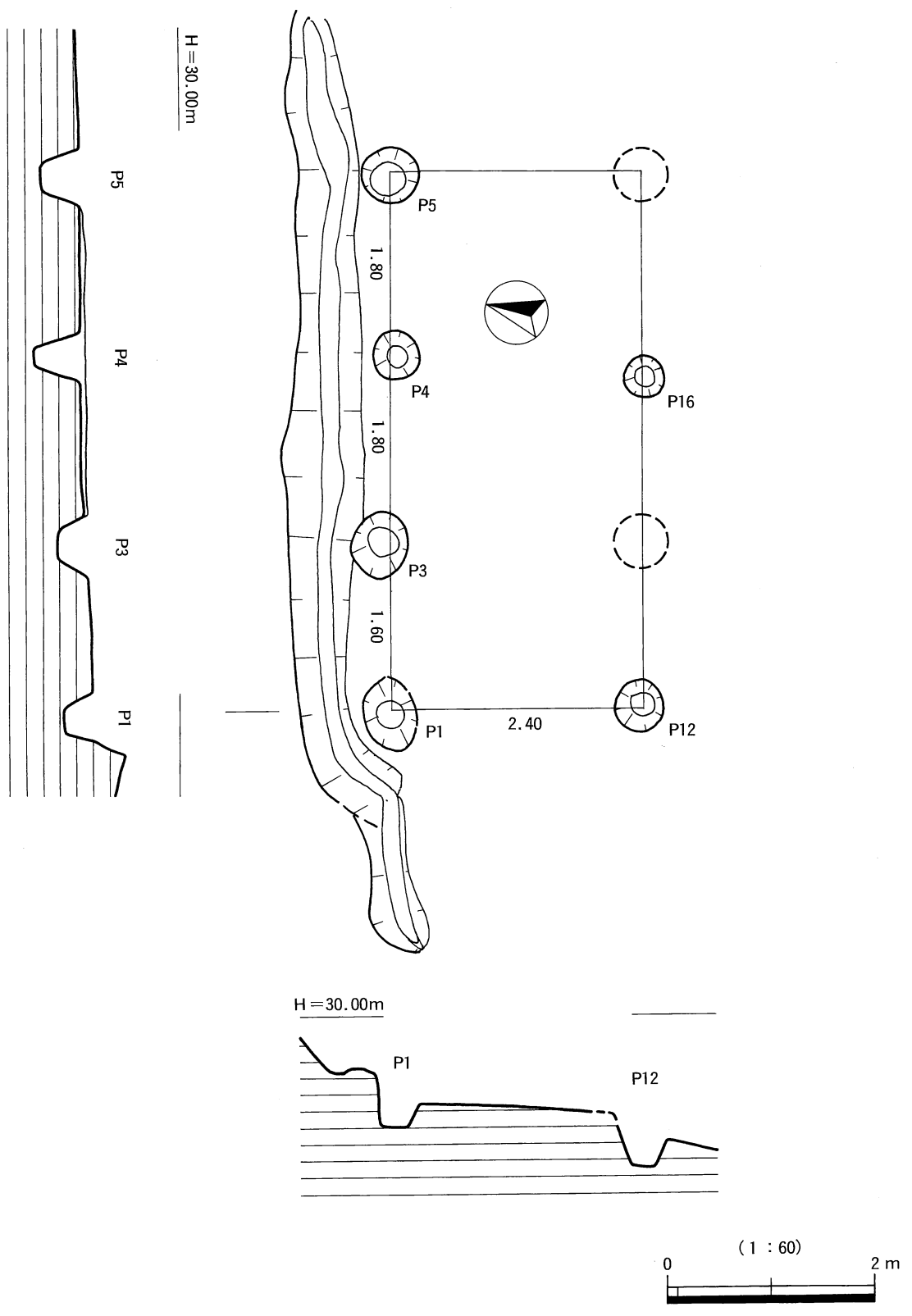
- ① 表土層 (褐色土)
- ② 表土層 (茶褐色土粒子大)
- ③ 灰褐色土 (小礫混じり)
- ④ 茶褐色土 (⑤ほどしまっていない)
- ⑤ 茶褐色土 (かたくしまる、粘質)
- ⑥ 褐色土 (炭所々散在)
- ⑦ 薄茶褐色土
- ⑧ 攪乱層
- ⑨ 暗褐色土 (粒子大きく炭混じる)
- ⑩ 褐色土
- ⑪ 暗褐色土 (炭所々混じる、やわらかい)
- ⑫ 褐色土 (炭混じる、土器発見)
- ⑬ 灰暗褐色土 (炭所々点在)
- ⑭ 灰白茶褐色土 (⑰より少し茶系含む)
- ⑮ 褐色土 (粒子大を含む)
- ⑯ ⑮より少々茶系 (⑮よりやわらかい)
- ⑰ 灰白褐色土 (粒子大きいツブ石も含む)
- ⑱ 灰白褐色土 (赤茶色土混)
- ⑲ 灰白褐色土 (くずれやすい、粘質だが砂質)
- ⑳ 灰白褐色土 (もろい)
- ㉑ 黄褐色土 (かたくしまる)
- ㉒ 黄灰色土 (非常にかたくしまる、粘質)



挿図280 陰田宮の谷遺跡 2区土層図(2)

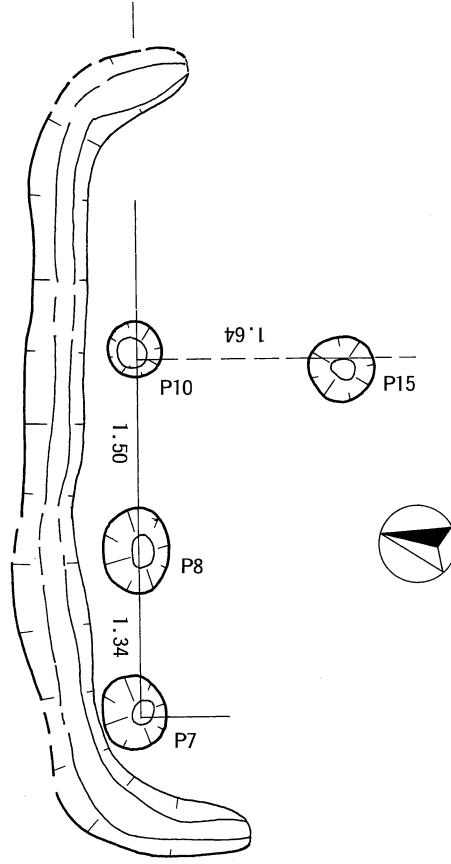
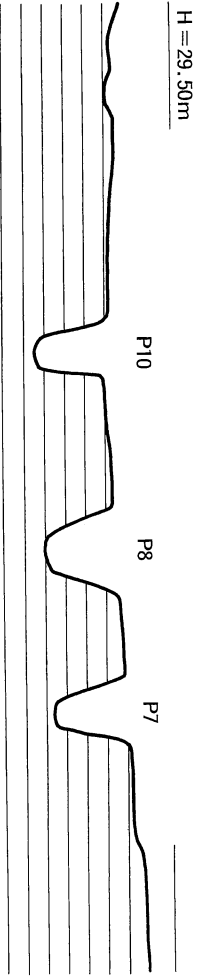


挿図281 陰田宮の谷遺跡 2区1・2群遺物分布図

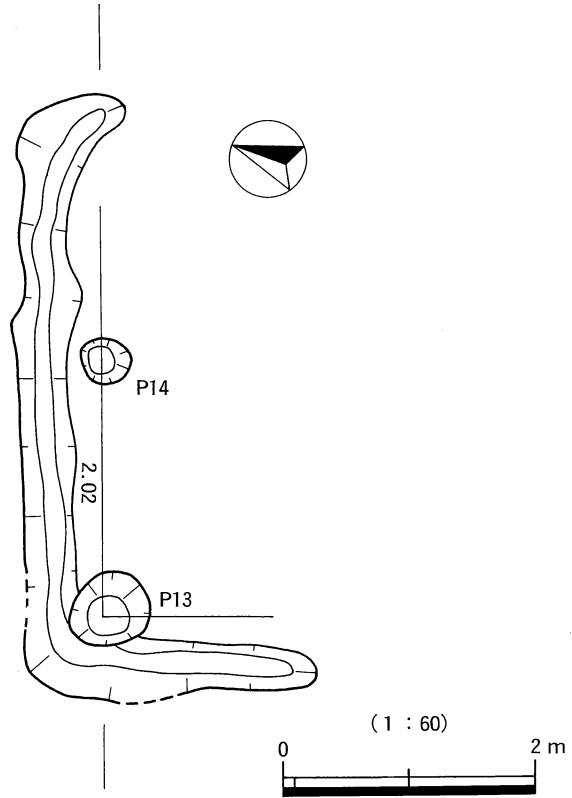
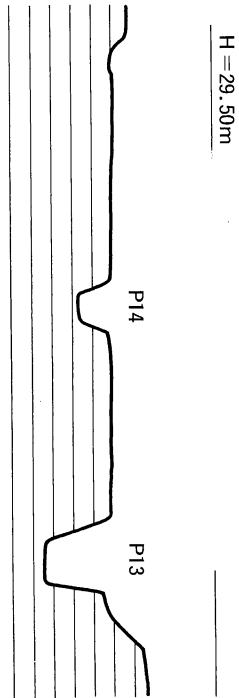


挿図282 陰田宮の谷遺跡 2区SB01遺構図

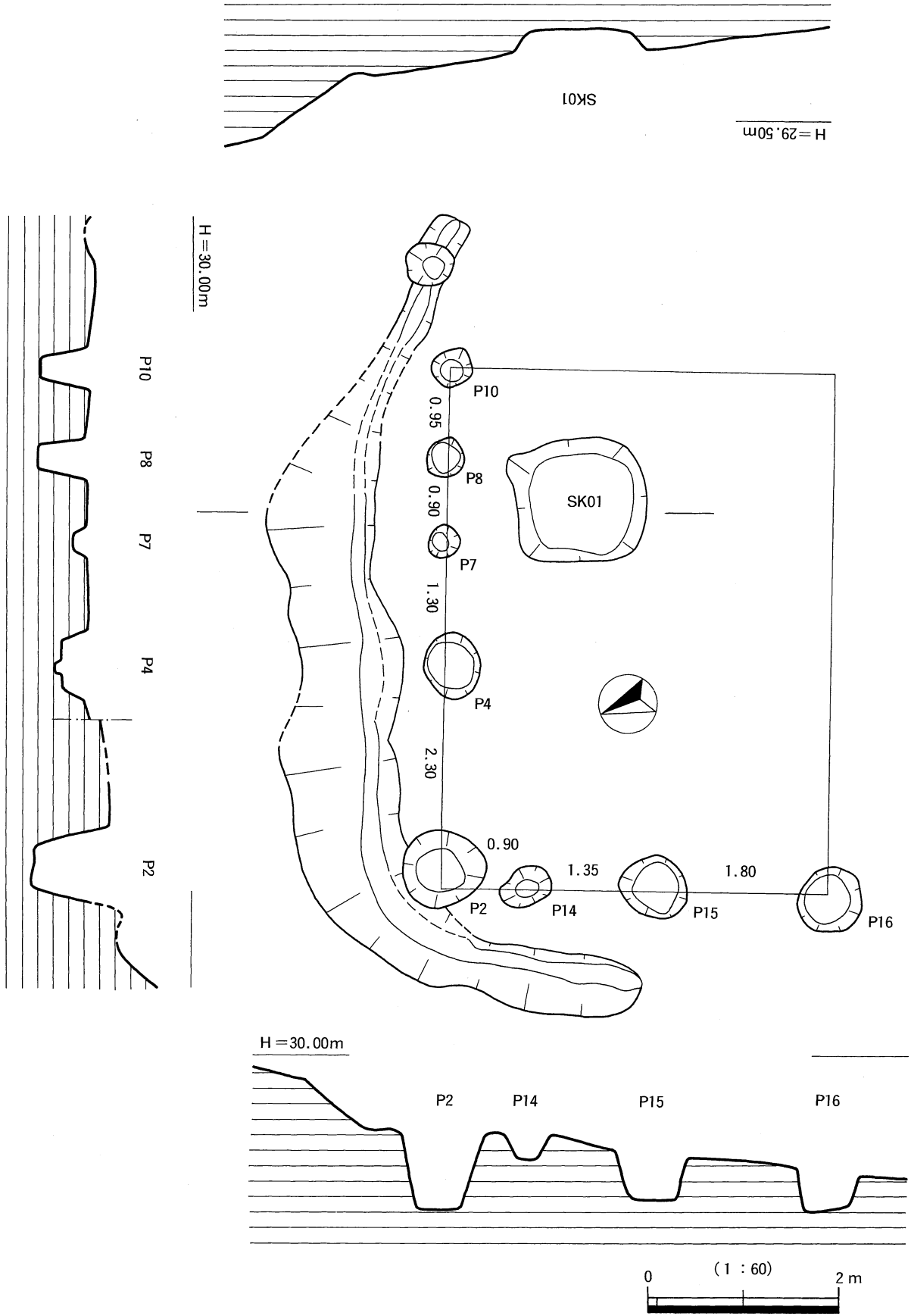
SB02



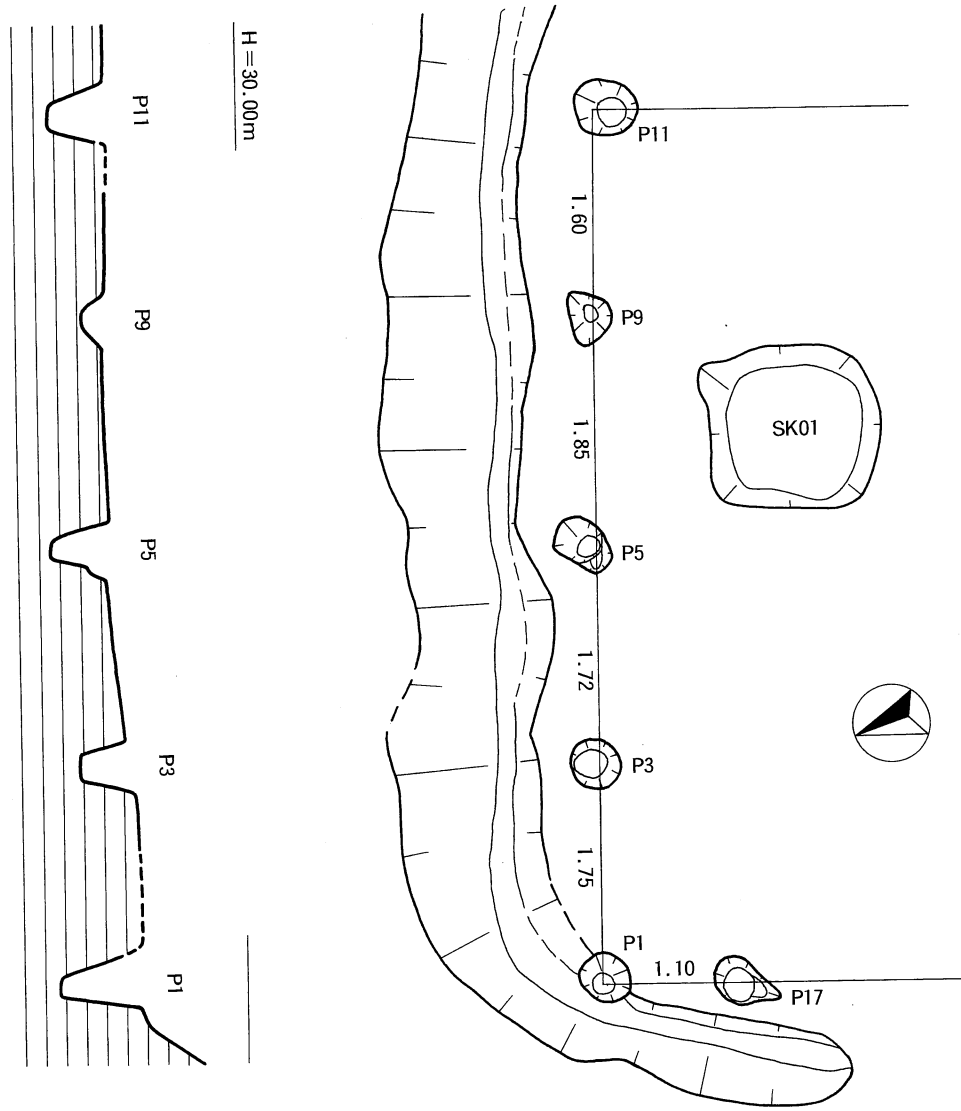
SB03



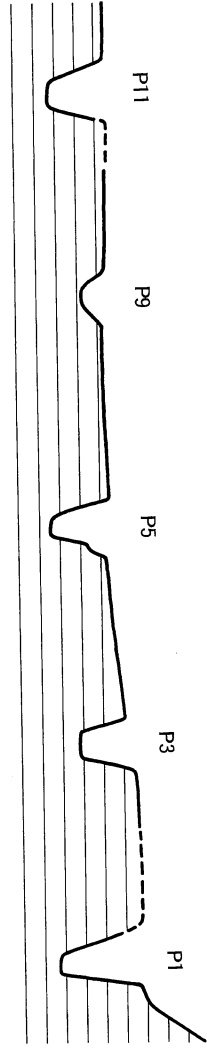
挿図283 陰田宮の谷遺跡 2区SB02・03遺構図



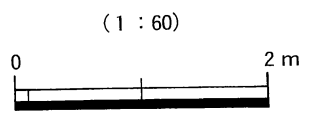
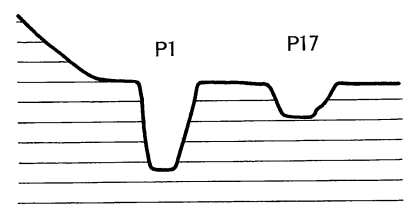
挿図284 陰田宮の谷遺跡 2区SB04遺構図



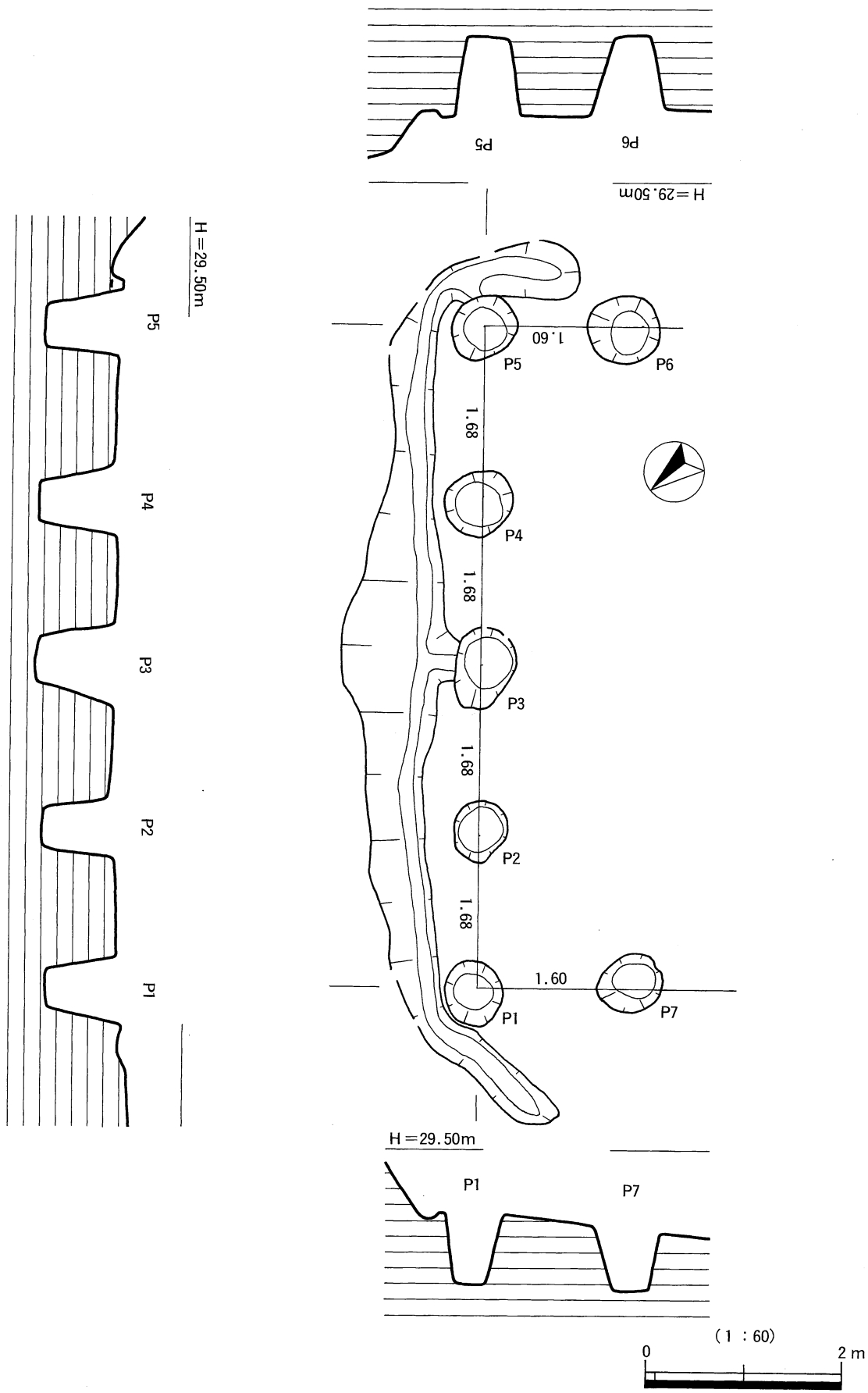
H = 30.00m



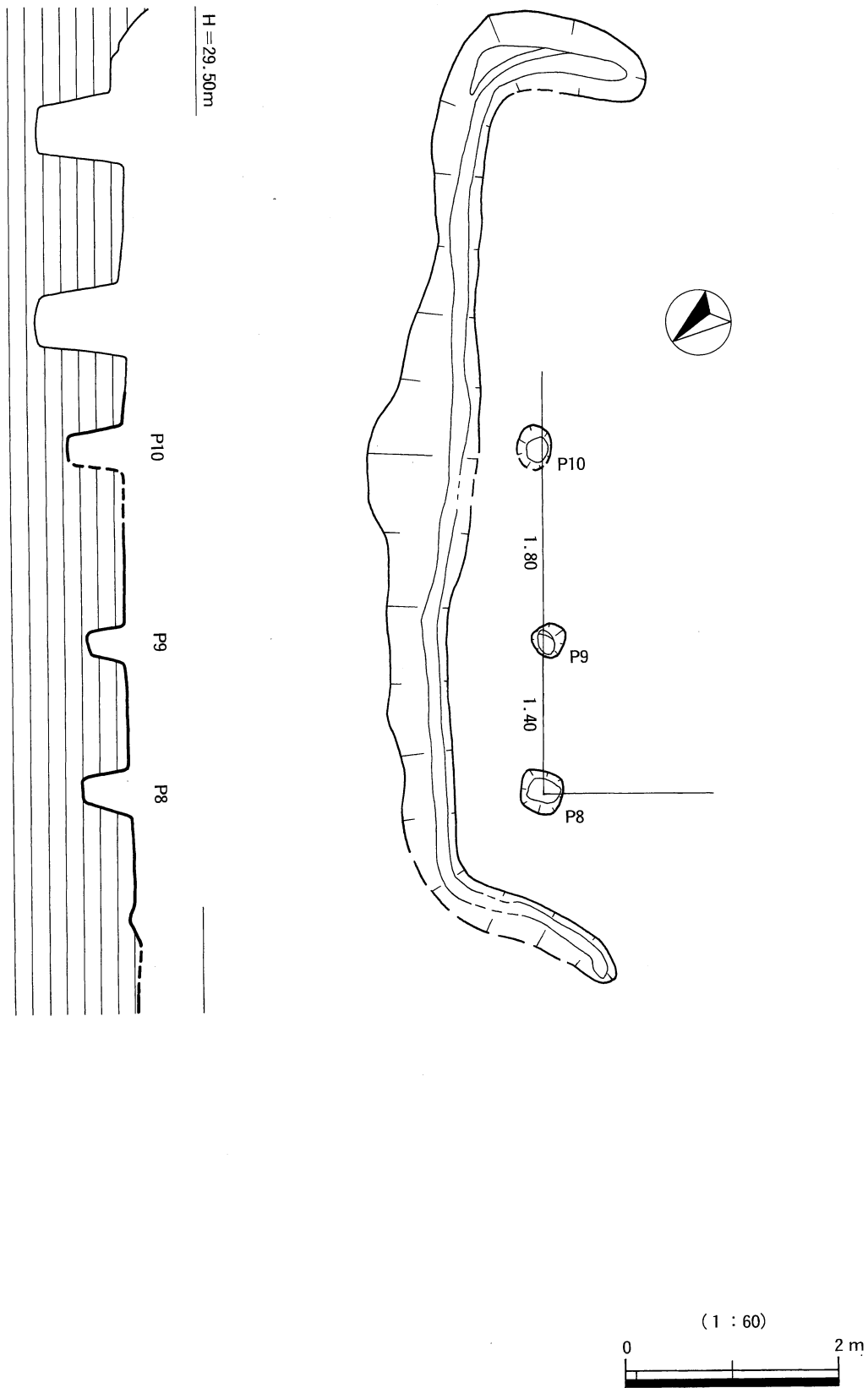
H = 30.00m



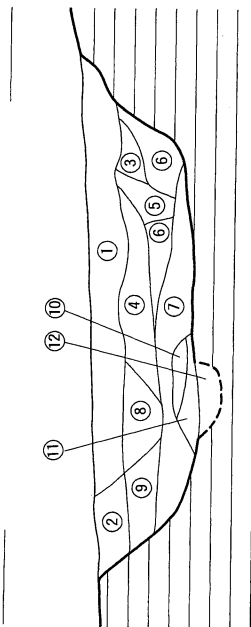
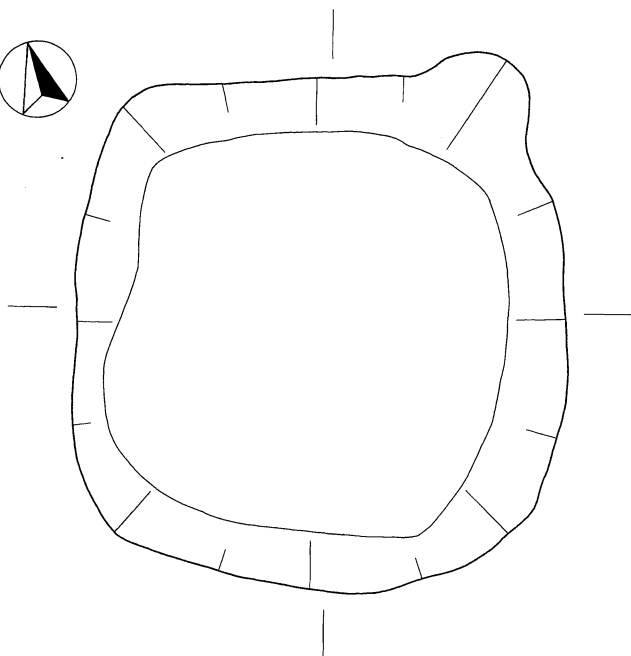
挿図285 陰田宮の谷遺跡 2区SB05遺構図



挿図286 陰田宮の谷遺跡 2区SB06遺構図

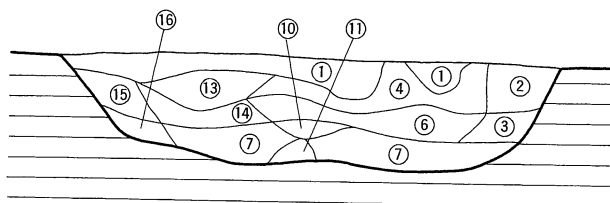


挿図287 陰田宮の谷遺跡 2区SB07遺構図



H = 29.00m

H = 29.00m

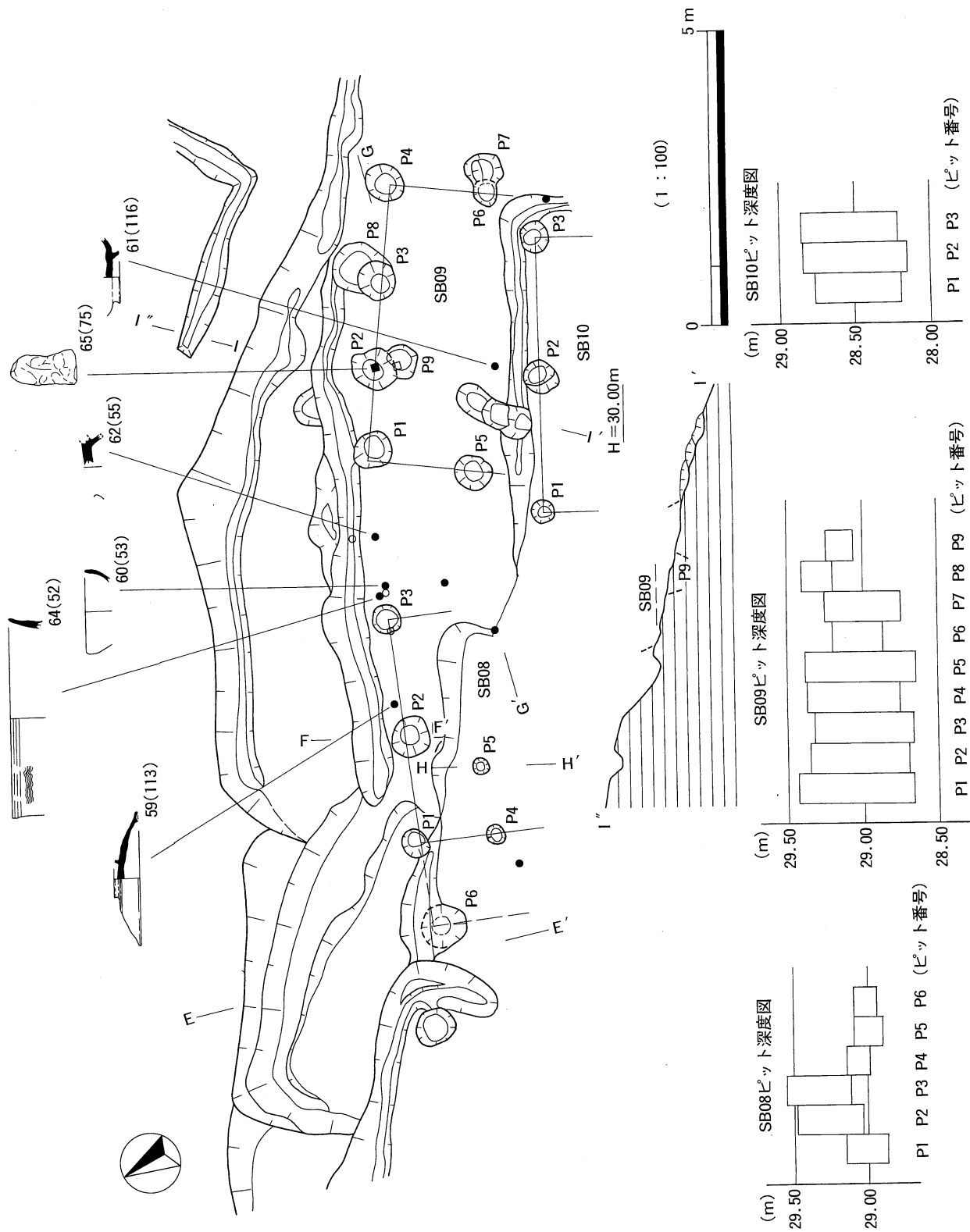


- ① 赤灰褐色土 (炭混じり)
- ② 灰色土 (粘質、炭混じり)
- ③ 暗灰色土 (粘質、炭、焼土混じり)
- ④ 灰色土 (炭多量混、粘質)
- ⑤ 明灰色土 (粘質、炭がわずかに混じる)
- ⑥ 黄灰色土 (粘質)
- ⑦ 灰色土 (炭少量混じる)
- ⑧ 明黄灰色土 (粘質、少量の炭混じる)
- ⑨ 黄灰色土 (炭多量混、粘質)
- ⑩ 灰色土 (粘質)
- ⑪ 明灰色土 (黄色混)
- ⑫ 炭層
- ⑬ 暗灰色土 (炭、焼土混、ややしまっている)
- ⑭ 暗灰色土 (炭、焼土混、⑬より黒い)
- ⑮ 淡赤白色土 (ややしまっている)
- ⑯ 灰色土 (黄色土混じり、炭少量混じり)

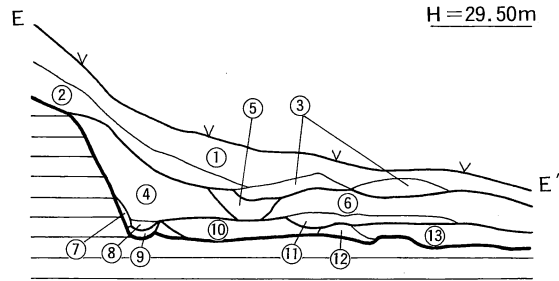
(1 : 20)



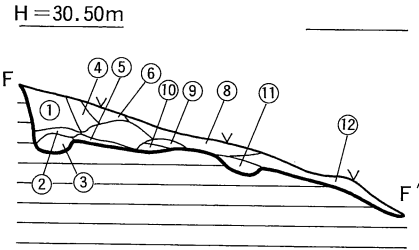
挿図288 陰田宮の谷遺跡 2区SK01遺構図



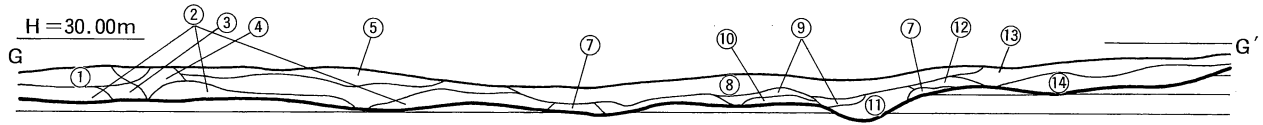
挿図289 陰田宮の谷遺跡 2区3群 ピット深度図、遺物分布図



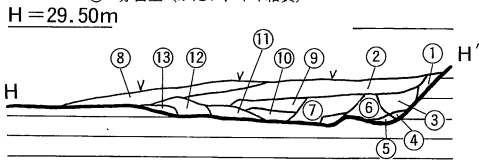
- ① 表土層 (黒色土)
- ② 暗褐色土 (くずれやすい、粒子粗い)
- ③ 淡赤色土 (黒色土まじり粒子粗い)
- ④ 茶褐色土 (2~3mmレキ、粒子粗くかたくなる、根も多く含む)
- ⑤ 褐色土 (やわらかくくずれやすい、根を多く含む)
- ⑥ 赤茶褐色土 (所々5cm~の赤石を含む、1~2cmレキも多く含む、かたくなる)
- ⑦ 赤茶褐色土 (粒子細かくかたくなる、粘質)
- ⑧ 茶褐色土 (⑦より暗い、かたくなる)
- ⑨ 淡茶褐色土 (レキを含む、粒子大)
- ⑩ 褐色土 (粒子細かく粘質、所々炭検出)
- ⑪ 褐色土 (黒褐色土混1~2mm小レキを多く含む)
- ⑫ 黄褐色土 (⑩よりかたくなる)
- ⑬ 暗褐色土 (土層中一番暗い、炭所々検出、2mm~の小レキ多く含む)



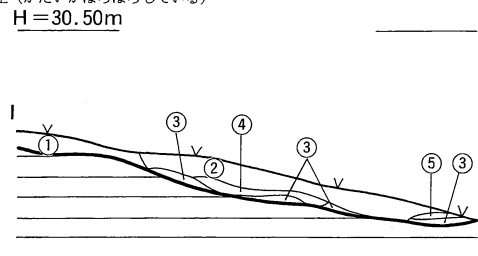
- ① 茶褐色土 (かたくなる、小さいレキ含む)
- ② ①より少々赤っぽい赤褐色土 (①より粘質)
- ③ 淡赤色土 (レキ多数含む、かたくなる)
- ④ 褐色土 (①と同質)
- ⑤ 赤茶色土 (粘質)
- ⑥ 褐色土 (④より粒子細かい、粘質、かたくなる)
- ⑦ 暗褐色土 (粒子細かく所々炭検出)
- ⑧ 茶褐色土 (小レキ含む、かたくなる)
- ⑨ 褐色土 (炭所々検出)
- ⑩ 灰黄褐色土 (かたくなる、レキ含む)
- ⑪ 褐色土 (赤粘質土混じり)
- ⑫ 褐色土 (表土、くずれやすく根多い)



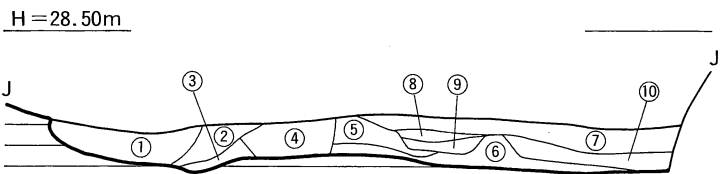
- ① 淡褐色土 (かたくなる、少量の炭が混じる)
- ② 茶褐色土 (やや粘質少量の炭が混じる、しまっている)
- ③ 暗茶褐色土 (かたくなる)
- ④ 淡赤茶褐色土 (かたくなる)
- ⑤ 淡赤茶褐色土 (④より赤い、少量の炭が混じる、ややしまっている)
- ⑥ 暗茶褐色土粘質少量の炭混 (やや、やわらかい)
- ⑦ 赤白土 (かたい、やや粘質)
- ⑧ 褐色土 (やや赤色土が混じる、やわらかい、粘質、炭が混じっている)
- ⑨ 赤褐色土 (粘質、ややしまっている)
- ⑩ 赤色土 (褐色土が混じる、やわらかい、粘質)
- ⑪ 茶褐色土 (根が入りぼろぼろしている)
- ⑫ 淡赤褐色土 (かたくなる)
- ⑬ 暗茶褐色土 (ややしまっている)
- ⑭ 赤褐色土 (かたいがぼろぼろしている)



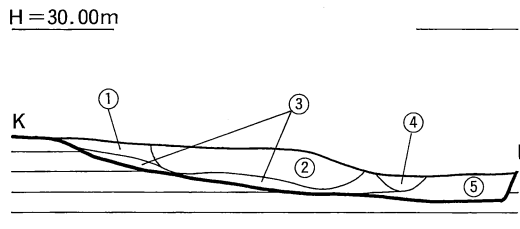
- ① 黒色土 (大量に炭が含まれる、焼土が混じる)
- ② 黒褐色土 (炭が混じる)
- ③ 肌色土 (ややしまっている、⑥より明るく赤っぽい)
- ④ 淡褐色土 (やややわらかい、炭が混じる)
- ⑤ 淡赤茶褐色土 (ややしまっている、炭、焼土が少し混じる)
- ⑥ 明黄茶褐色土 (炭が混じる)
- ⑦ 黒褐色土 (②より黒い、炭、焼土が多く含まれる、やわらかい)
- ⑧ 橙色土 (焼土層)
- ⑨ 黒褐色土 (ややぼろぼろしている、炭が混じる)
- ⑩ 淡黒褐色土 (淡黒褐色土 (やわらかい))



- ① 明茶肌色土 (やや粘質)
- ② 淡茶褐色土 (炭、焼土、赤色ブロック混じり)
- ③ 肌色土 (ややしまっている、炭が少量混じる)
- ④ 淡黒褐色土 (やわらかい)
- ⑤ 明黄茶褐色土 (炭が混じる)

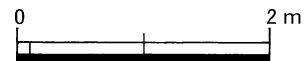


- ① 淡赤色土 (礫層)
- ② 褐色土
- ③ 茶褐色土 (粒子大きい、小礫を含む、②よりくずれやすい)
- ④ 赤茶色土 (灰黄色混、③よりかたい)
- ⑤ 茶褐色土 (かたくなる)
- ⑥ 茶褐色土 (③よりくずれやすい)
- ⑦ 茶褐色土 (②より粒子が大きい)
- ⑧ 褐色土 (②より少々暗い)
- ⑨ 茶褐色土 (⑦より少々暗い)
- ⑩ 茶褐色土 (粒子大きい、⑨よりかたくなる)
- ⑪ 褐色土 (くずれやすい)
- ⑫ 暗褐色土 (炭検出、やわらかい)
- ⑬ 赤茶色土 (かたくなる)

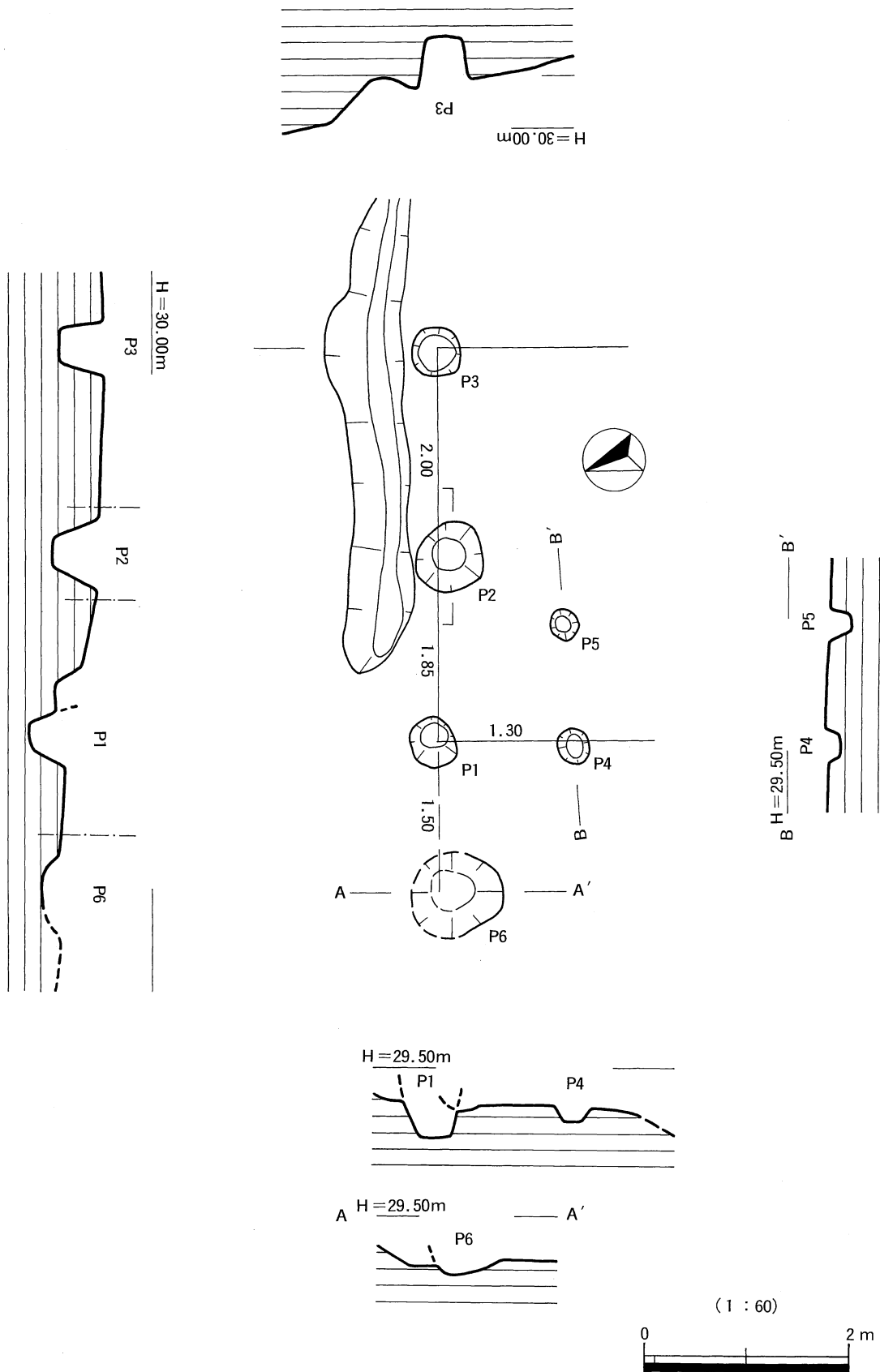


- ① 赤茶色土 (小礫含む)
- ② 褐色土 (小礫含む、かたくなる)
- ③ 淡赤色土
- ④ 褐色土 (②より少々暗い、②よりやわらかい)
- ⑤ 赤茶色土 (かたくなる)

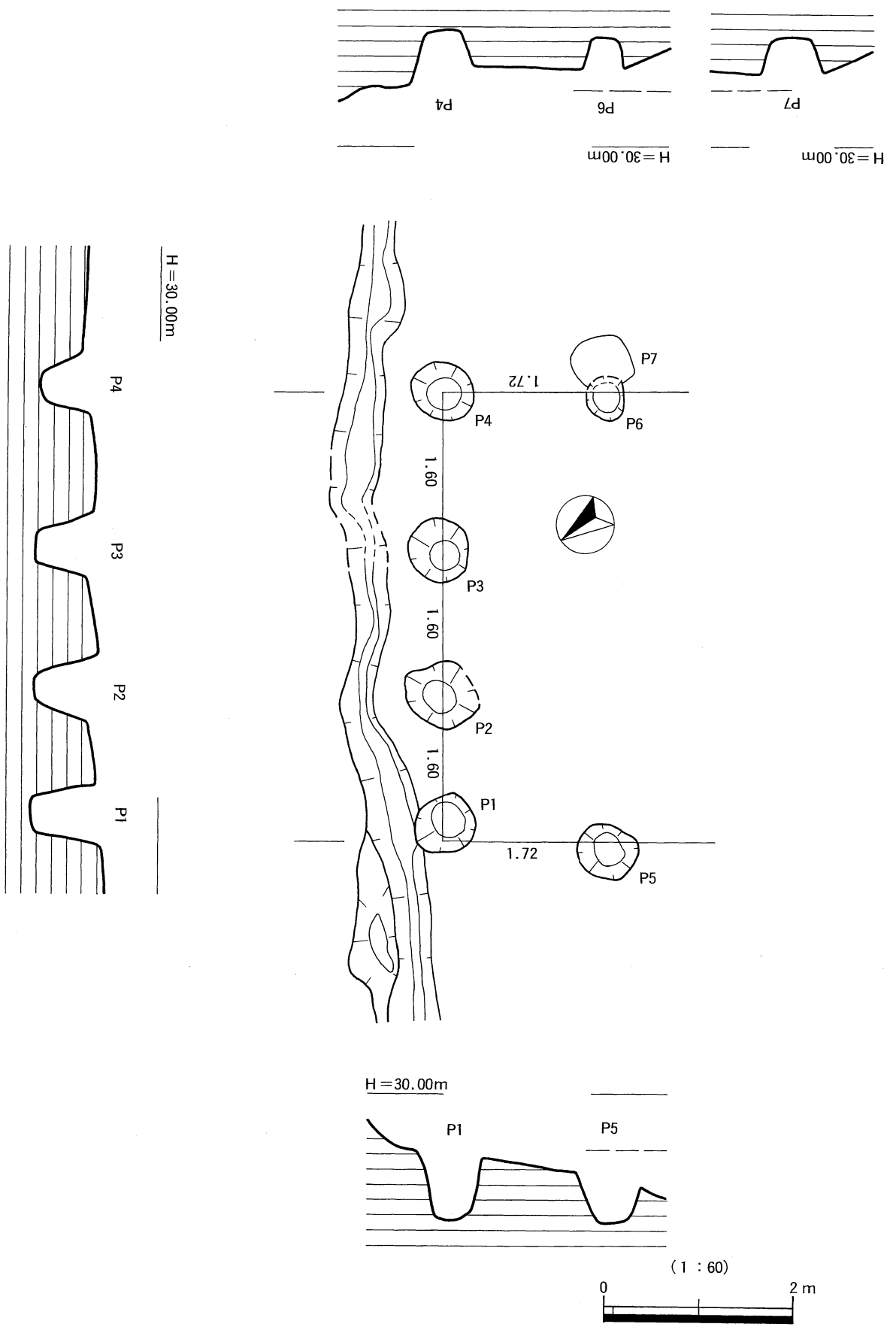
(1 : 60)



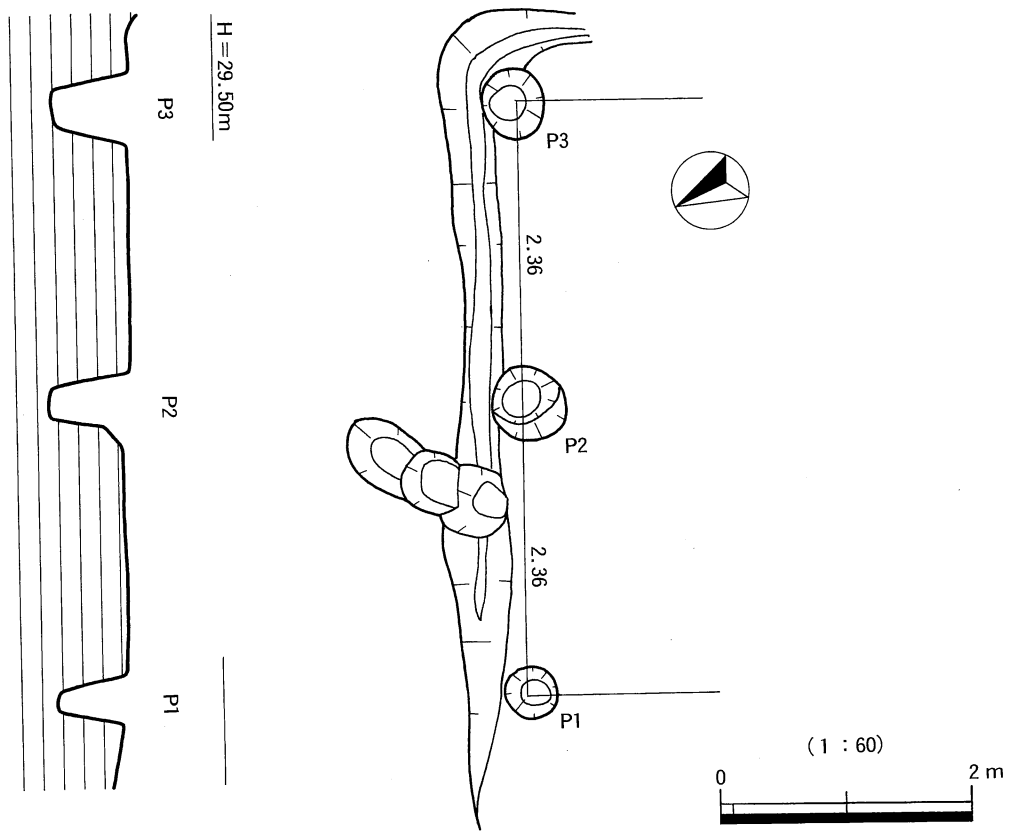
挿図290 陰田宮の谷遺跡 2区土層図 (3)



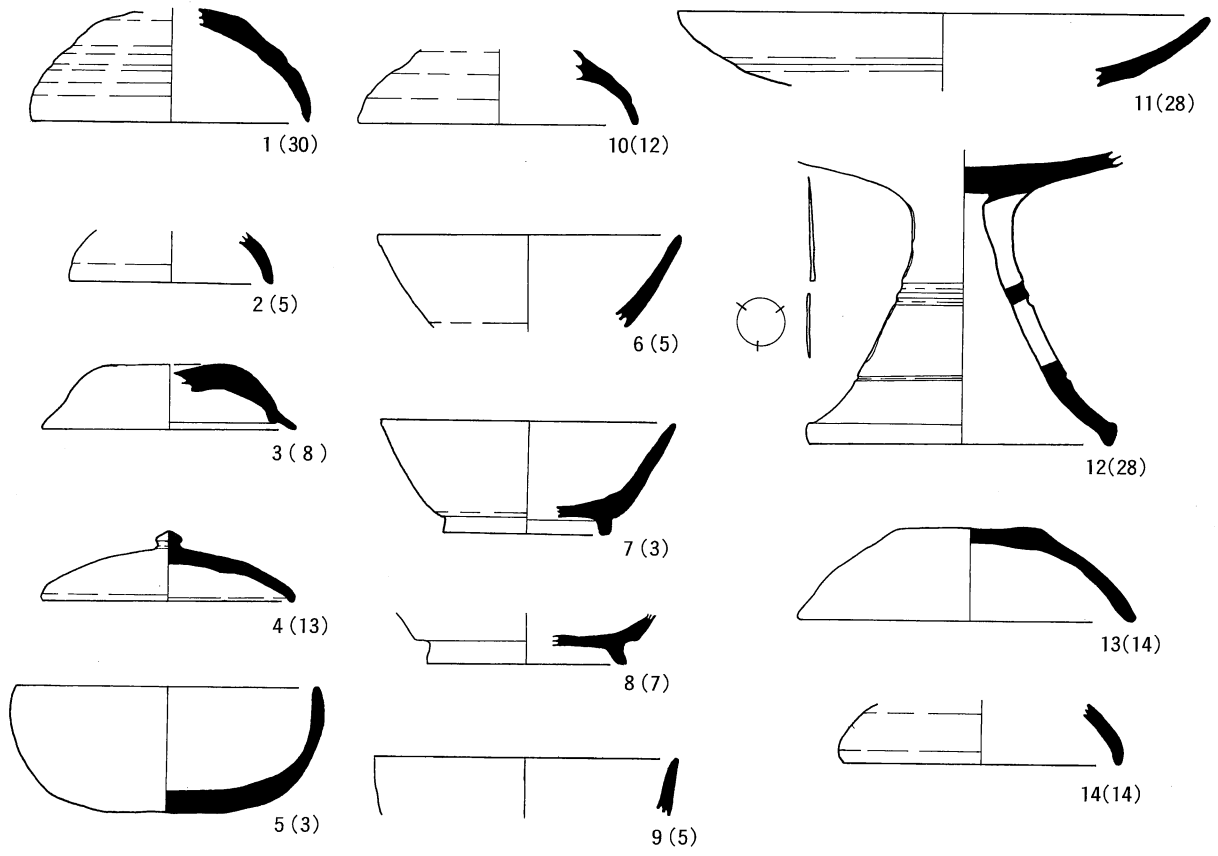
挿図291 陰田宮の谷遺跡 2区SB08遺構図



挿図292 陰田宮の谷遺跡 2区SB09遺構図



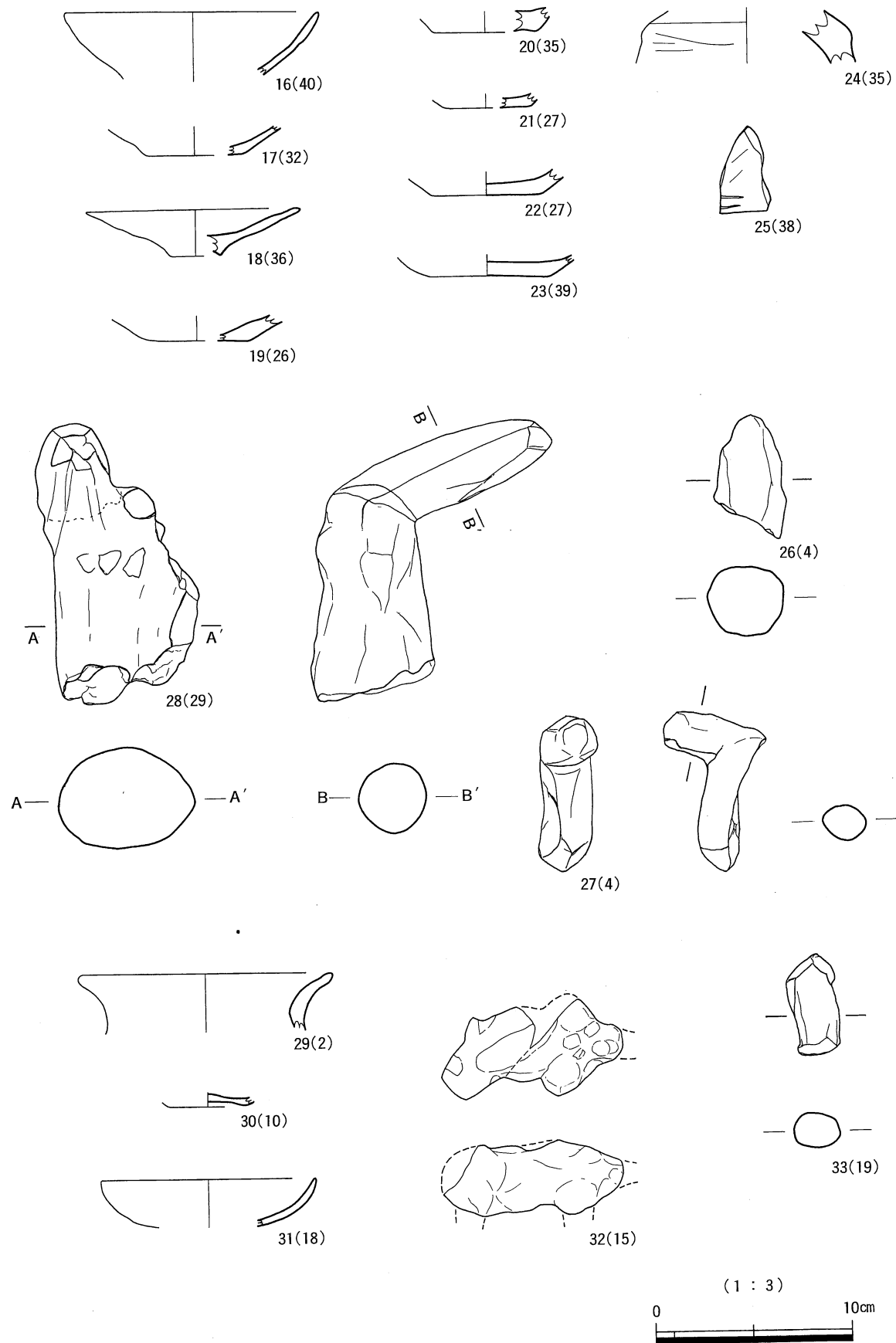
挿図293 陰田宮の谷遺跡 2区SB10遺構図



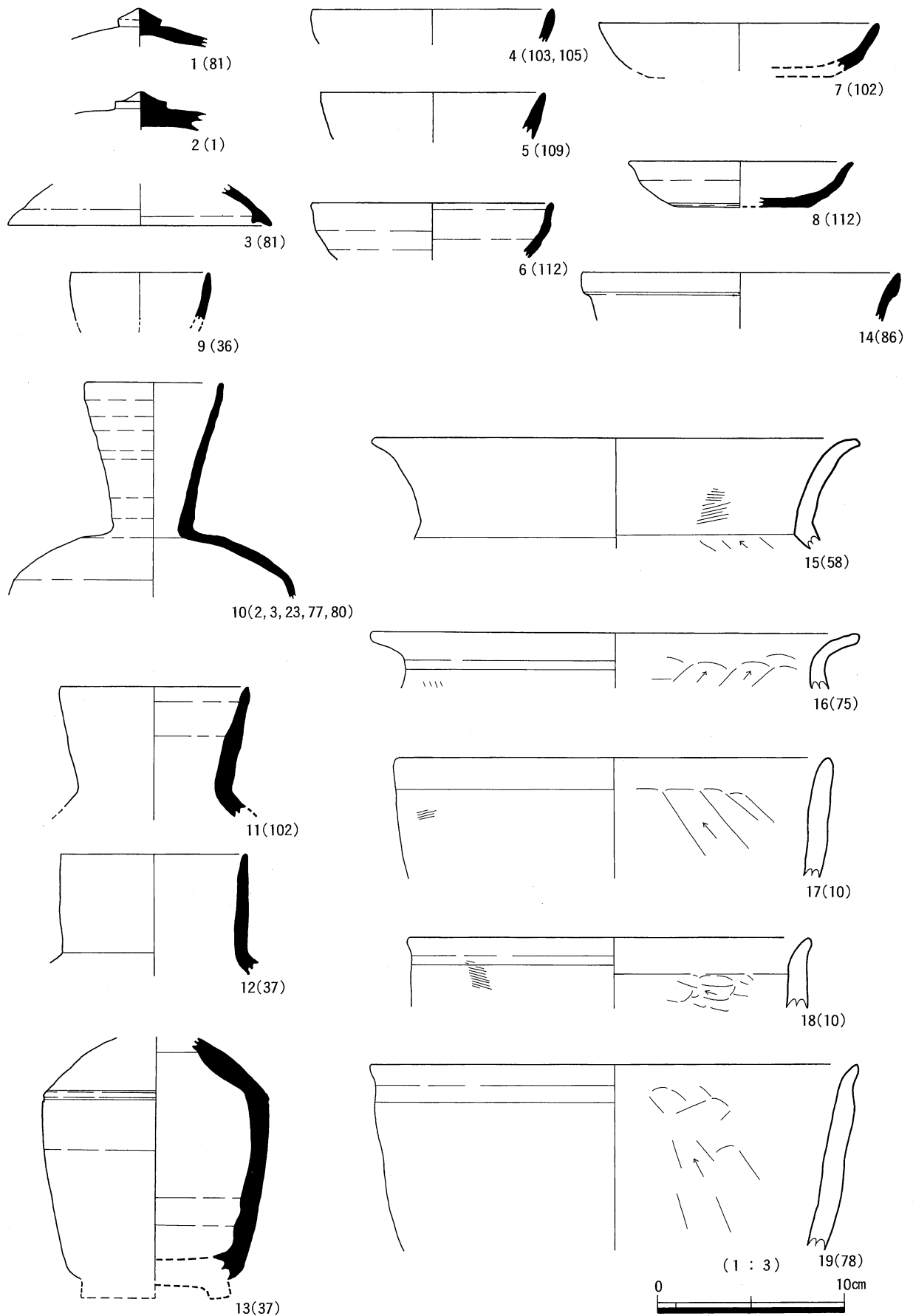
(1 : 3)



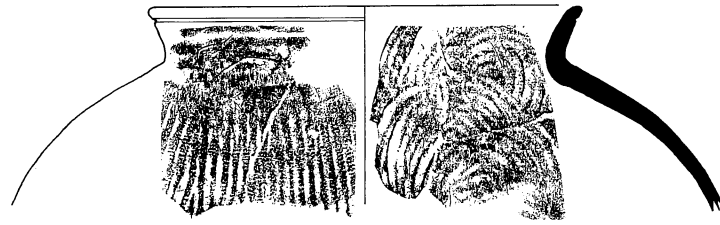
挿図294 陰田宮の谷遺跡 1区出土遺物 (1)



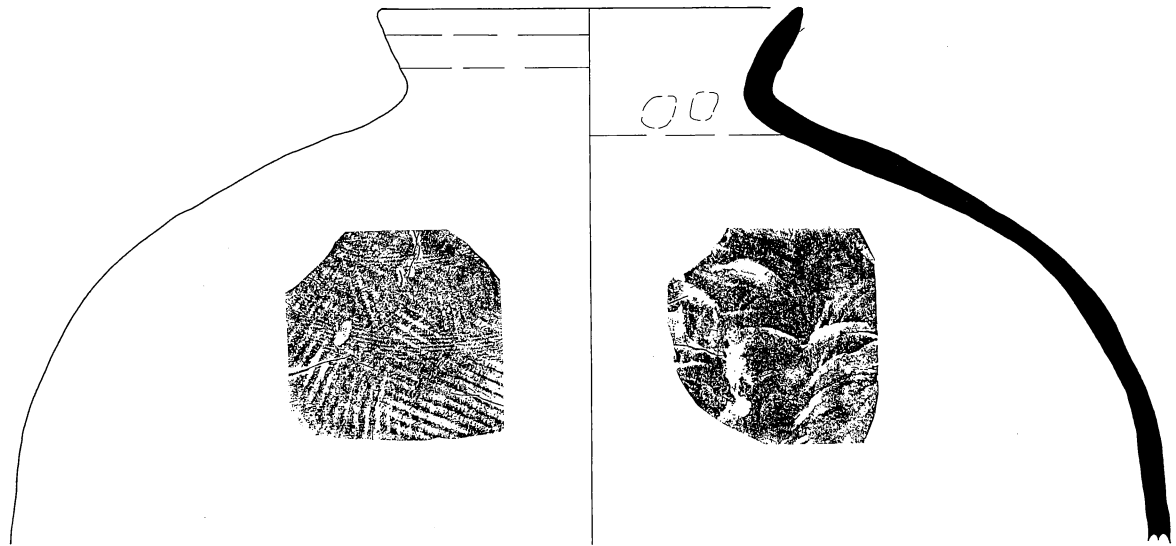
挿図295 陰田宮の谷遺跡 1区出土遺物 (2)



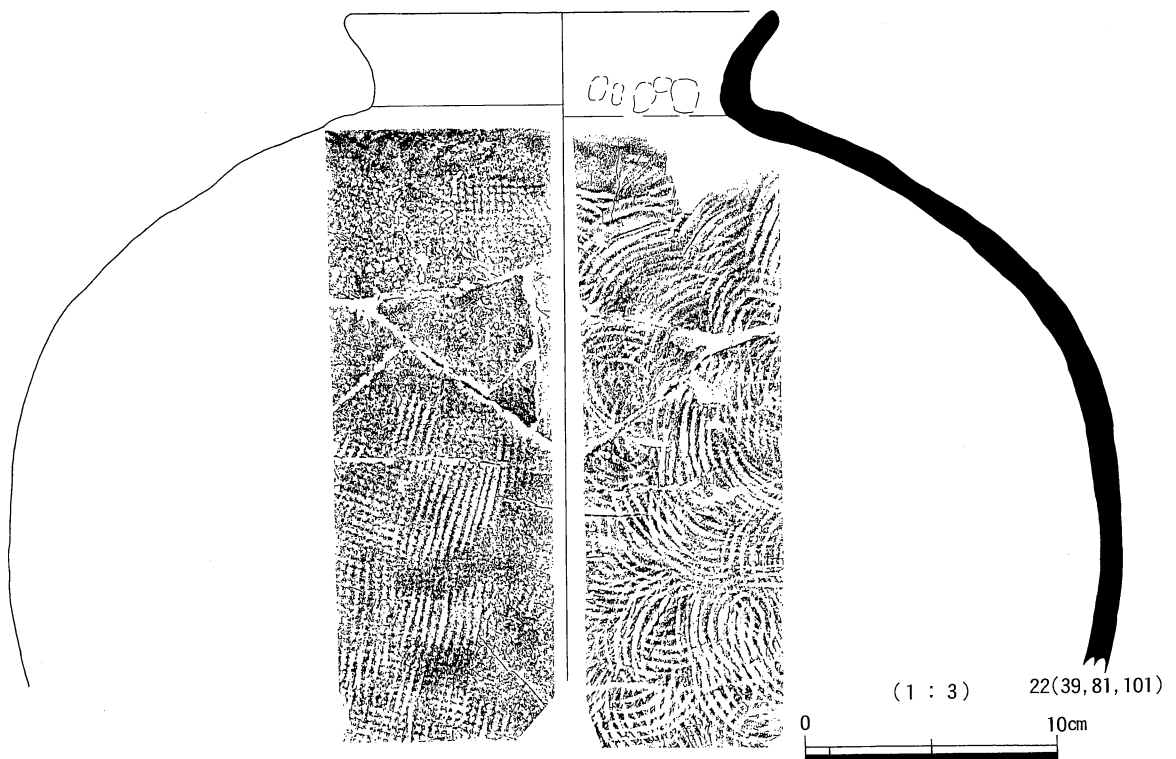
挿図296 陰田宮の谷遺跡 2区1群出土遺物 (1)



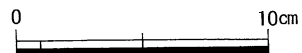
20(14, 22, 31, 48, 79)



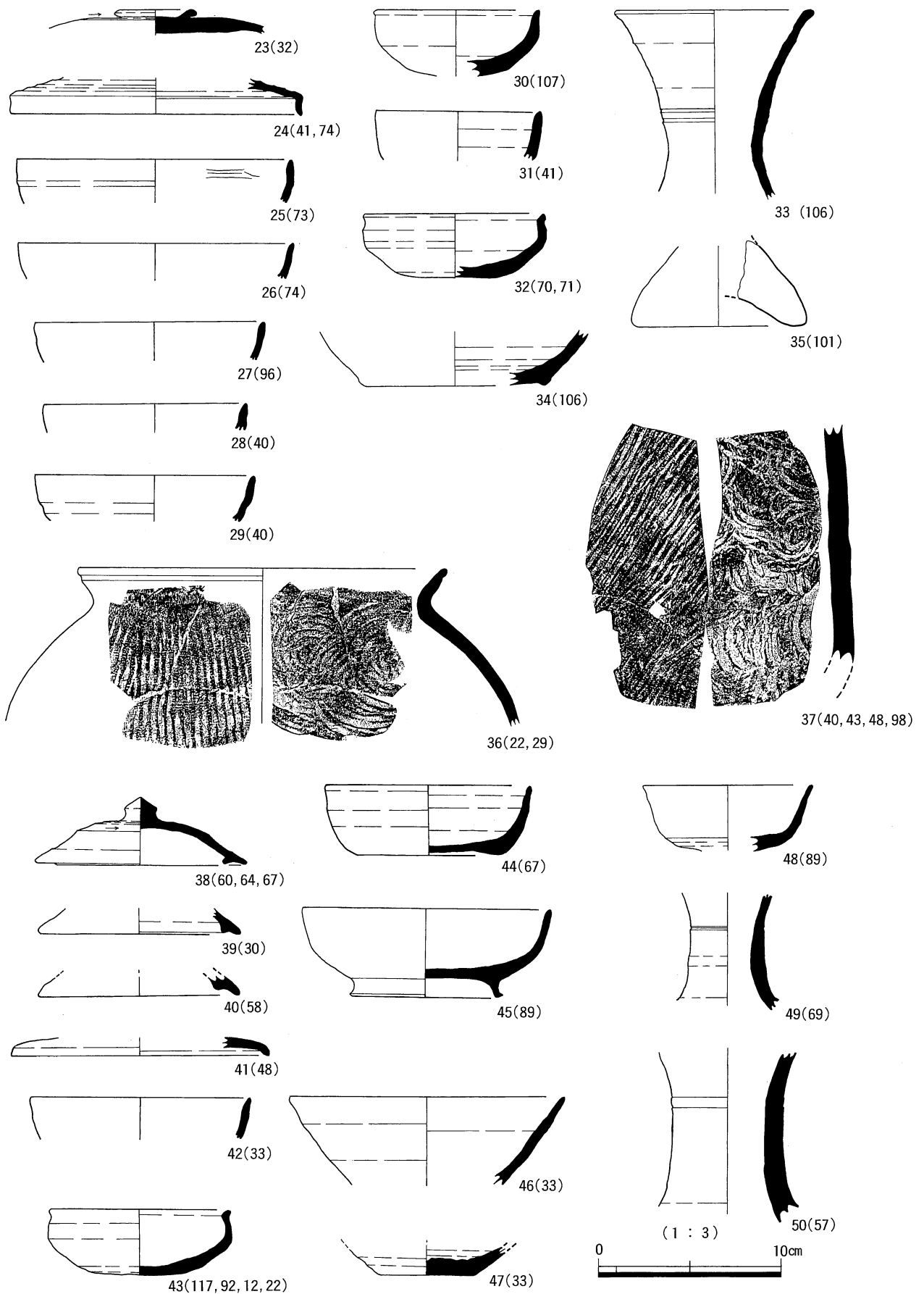
21(39, 81, 101)



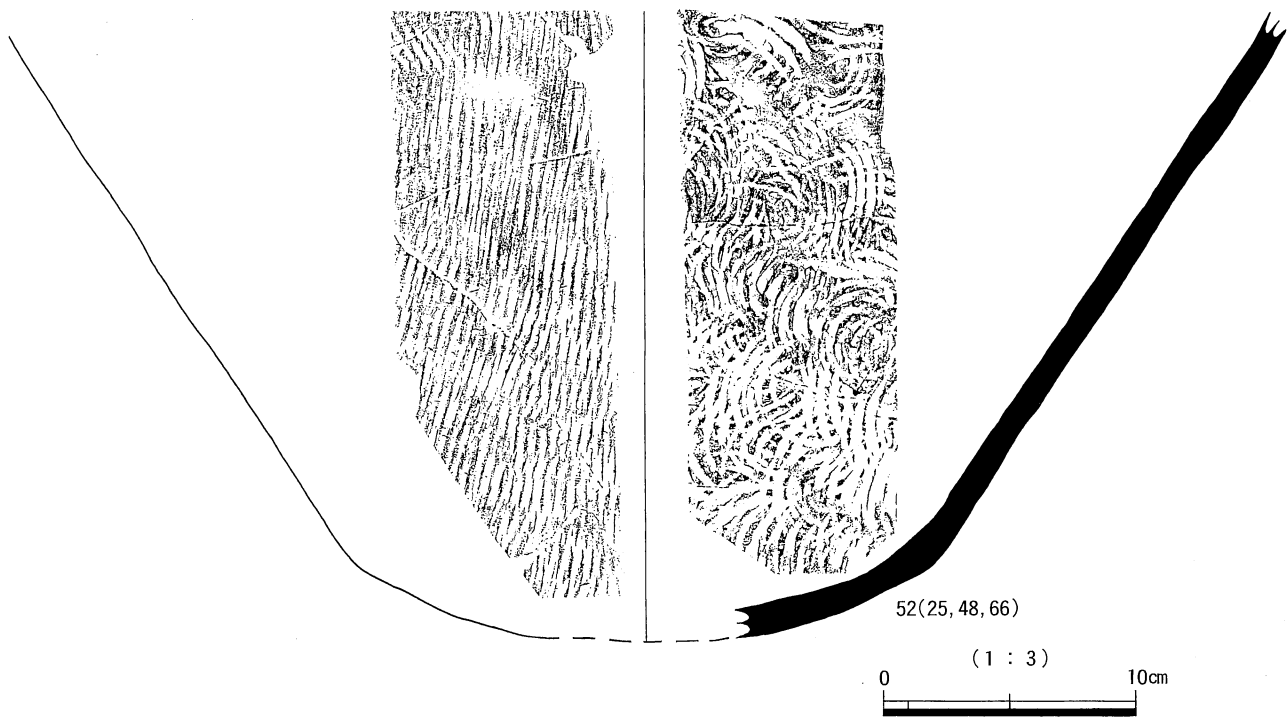
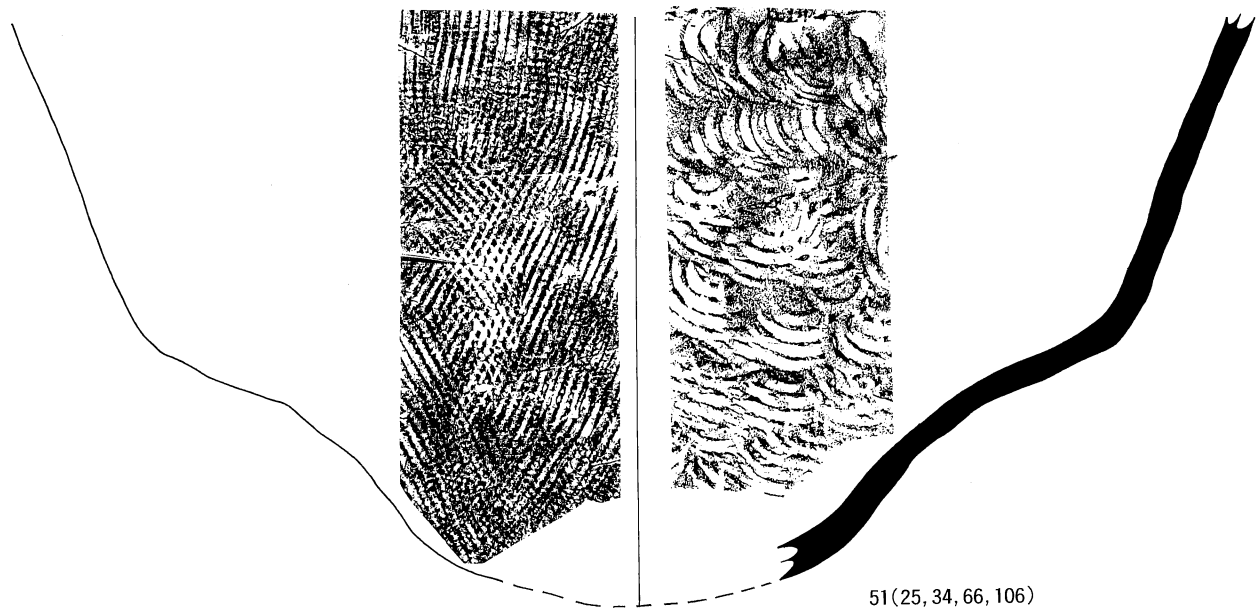
(1 : 3) 22(39, 81, 101)



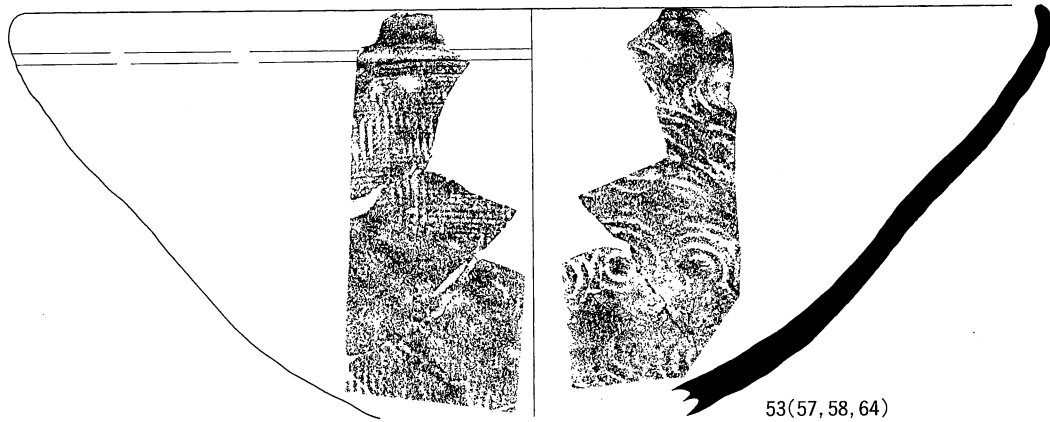
挿図297 陰田宮の谷遺跡 2区1群出土遺物(2)



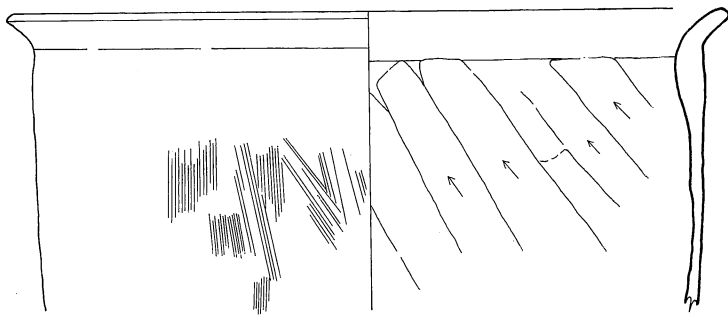
挿図298 陰田宮の谷遺跡 2区2群出土遺物 (1)



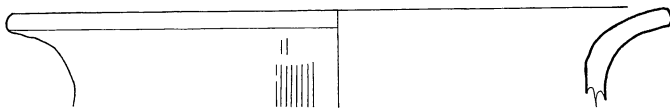
挿図299 陰田宮の谷遺跡 2区2群出土遺物(2)



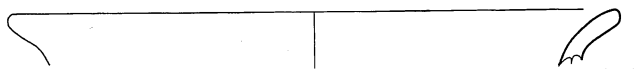
53(57, 58, 64)



54(68)



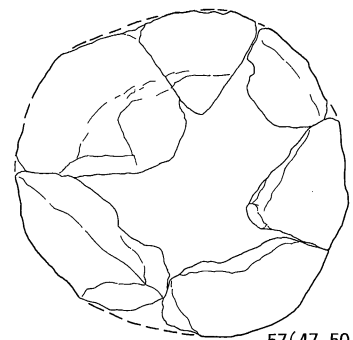
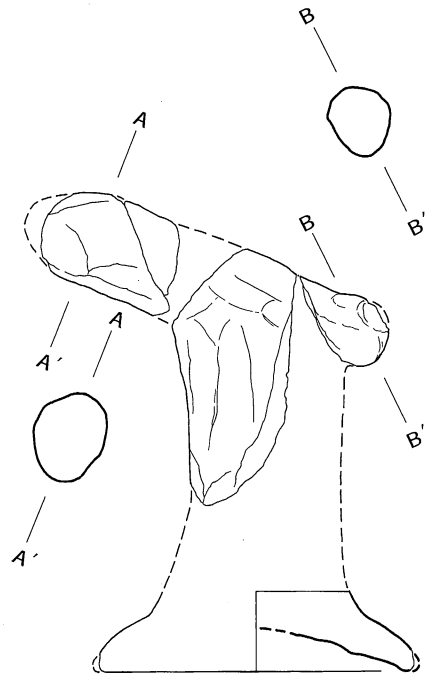
55(69)



56(51)



58(59)

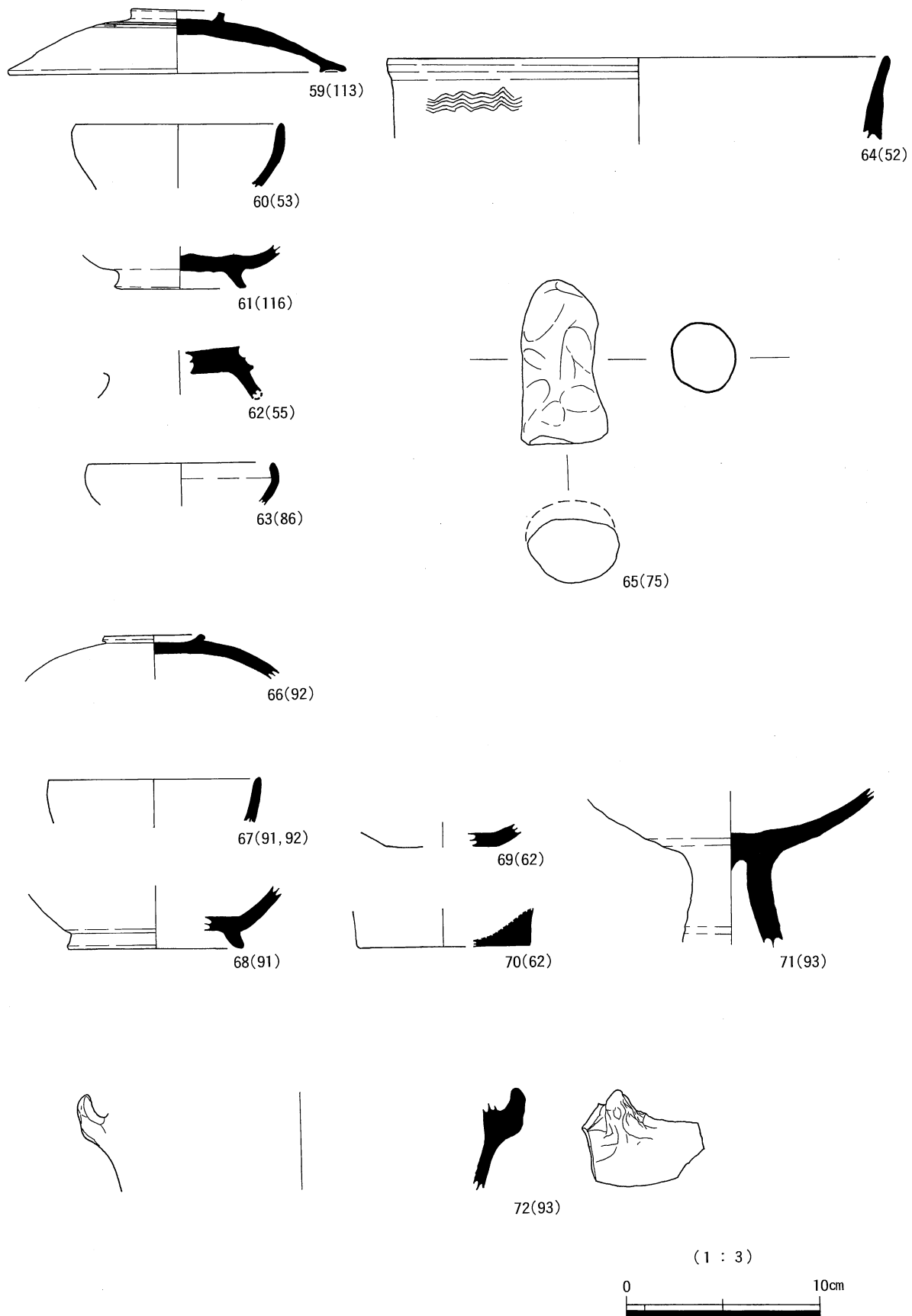


57(47, 50, 75)

(1 : 3)



挿図300 陰田宮の谷遺跡 2区2群出土遺物 (3)



挿図301 陰田宮の谷遺跡 2区3群出土遺物

6 陰田宮の谷遺跡 3区

(1) 調査の経過と方法

発掘調査は、平成8年10月に着手し、平成9年2月に現場作業を終了した。調査面積は1460㎡である。調査区は、東方に張り出す2つの尾根に挟まれた谷部とそれを取り囲む斜面部である。現地形で、調査区西側の谷奥には約3×4mの溜め池が造られており、そこから東に谷の入り口付近までは、小規模な水田が近年まで営まれていた。しかし、谷部の堆積が厚いことから、溜め池を除いては、斜面部も含め旧地形をある程度留めているものと思われた。また、谷奥からは現在でも水が湧いており、水田を造成する以前は、谷部に水が流れていたと思われる。

発掘調査は、調査区が主要道路から離れた場所にあり、伐木の処理が遅れ、当初は重機が使用できなかったため、人力による掘り下げでおこなった。また、排土処理の関係から斜面部を調査した後、谷部の調査をおこなった。

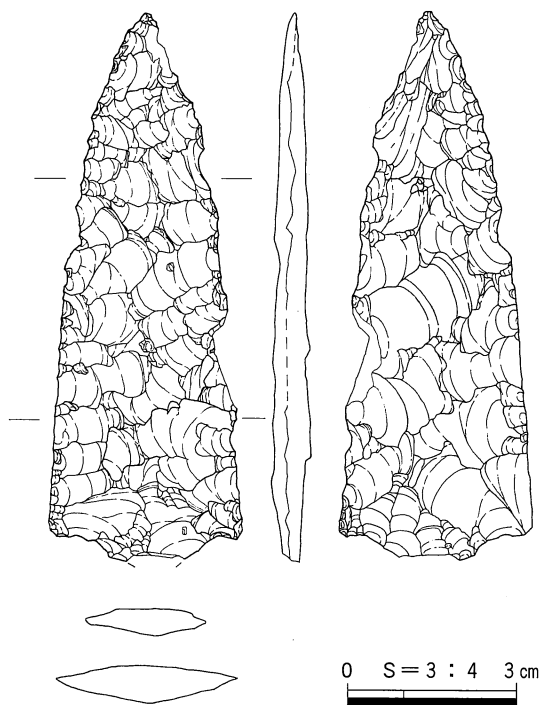
斜面部の調査は、調査区北側斜面部に2本、調査区西側の谷奥斜面部に5本のサブトレンチを設定して遺構の有無を確認した。調査区北側斜面部からは、古墳時代後期の須恵器等が黒色土中から出土し、土層断面に段状の落ち込みを検出した。調査区西側の谷奥斜面部は、地山面まで掘り下げたが、地山面直上から有舌尖頭器(挿図302)が1点出土したにとどまり、他に遺構、遺物は存在しなかった。

谷部の調査は、数カ所にサブトレンチを設定し、堆積状況を土層断面で確認しながら掘り下げをおこなった。また、遺物を包含する黒色土層を確認し、その上面まで重機を使用

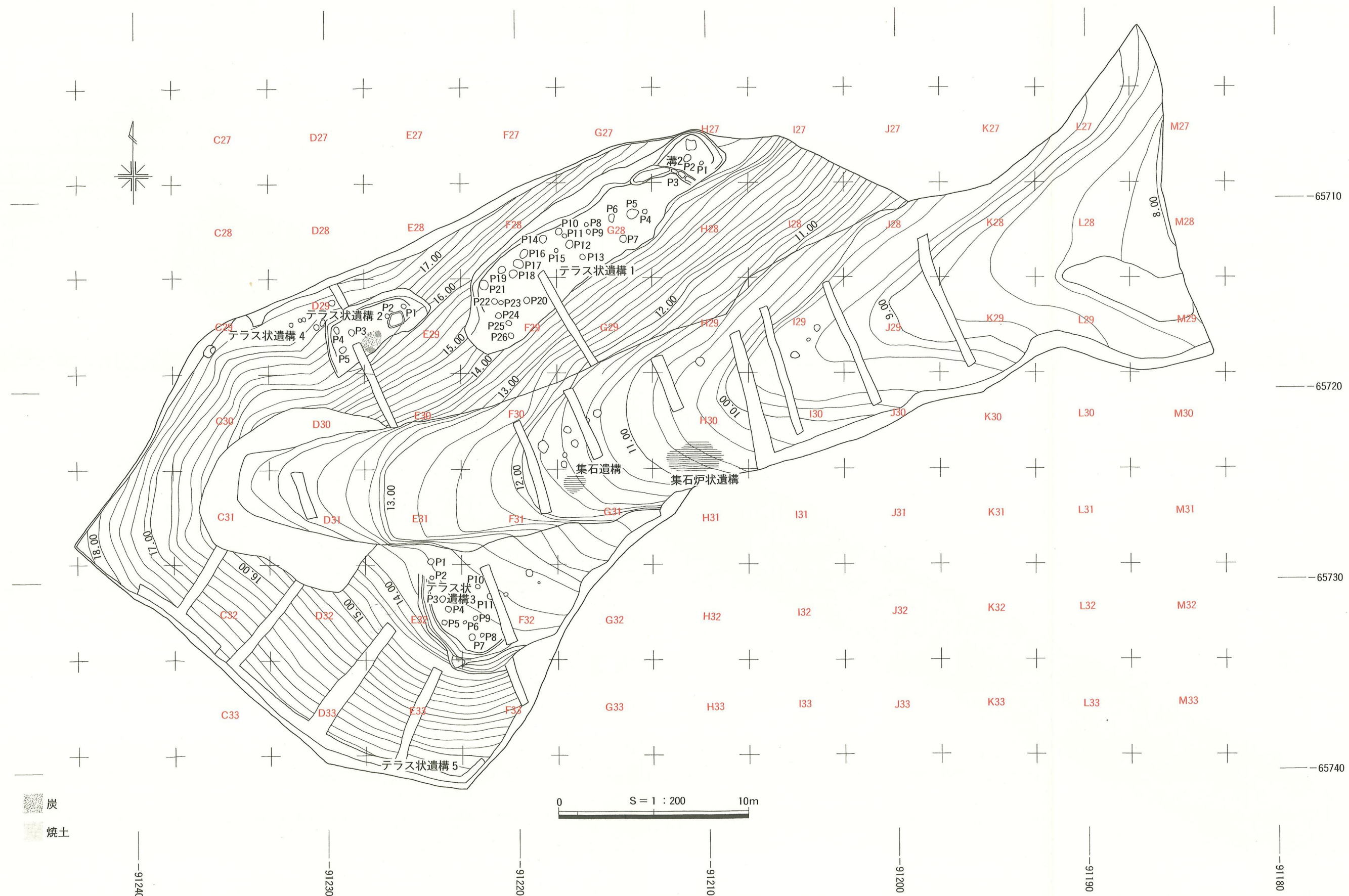
して掘り下げた。黒色土を素掘りで徐々に掘り下げたところ、遺構を確認した。また、黒色土層下層の青灰色粘土層も多量の遺物を包含しており、掘り下げながら遺物を取り上げた。青灰色粘土層下では、遺構を確認することはできなかった。

遺構、遺物の実測、調査区の地形測量には、平成7年度まで使用されていた測量用基準杭を基準に、南北軸にあわせて5m画のグリッドを調査区内に設定し、それを使用した。

調査後の地形測量は平板を使用して調査員がおこなった。



挿図302 陰田宮の谷遺跡 3区C32グリッド出土有舌尖頭器



挿図303 陰田宮の谷遺跡 3区遺構分布図

(2) 遺構と遺物

本調査区で確認できた遺構は、テラス状遺構5基、掘立柱建物2棟以上、土坑3基、ピット群、土器溜まり、集石遺構、集石炉状遺構等である。テラス状遺構から出土する遺物はすべて7世紀中葉、陰田7期の範疇に収まるものである。また、谷部最下層の青灰色粘土層から出土する土器には、7世紀前葉のものも含まれているが、概ね主体を占めるのは陰田7期のものである。青灰色粘土層の上に位置する集石遺構は、礫と土製支脚が組み合わさった遺構である。須恵器が伴っておらず、明確な時期を捉えることは難しいが、テラス状遺構3の土器・土製品溜まりとの関係を考えて、下って7世紀後葉の可能性はあるが、7世紀中葉の範疇で捉えるのが妥当のように思われる。調査区内から出土した奈良時代の土器は数点を数える程度であることから、本調査区における遺跡の存続時期は、7世紀中葉という限られた期間と思われる。

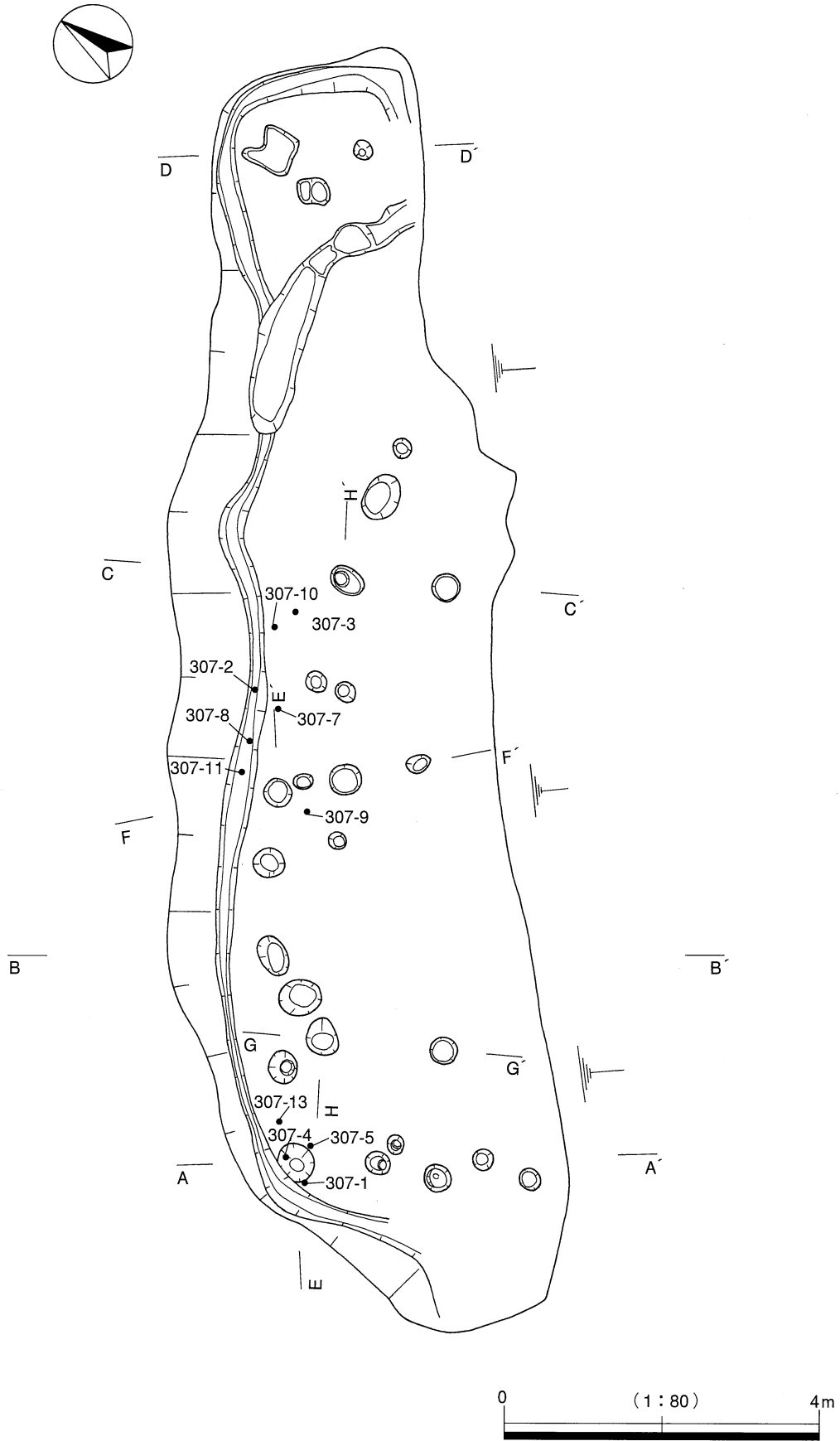
テラス状遺構1（挿図304～307）

調査区の北側斜面、標高約14.6m、F28・29、G28、H27グリッドに位置する。規模は約16.5m、奥行きは4m以上、残存壁高約1mを測る。壁際には幅約50cmの溝1、溝2がめぐる。この2つの溝の新旧関係を明確に捉えることはできなかったが、溝2はテラス状遺構の拡張を示すと思われる。

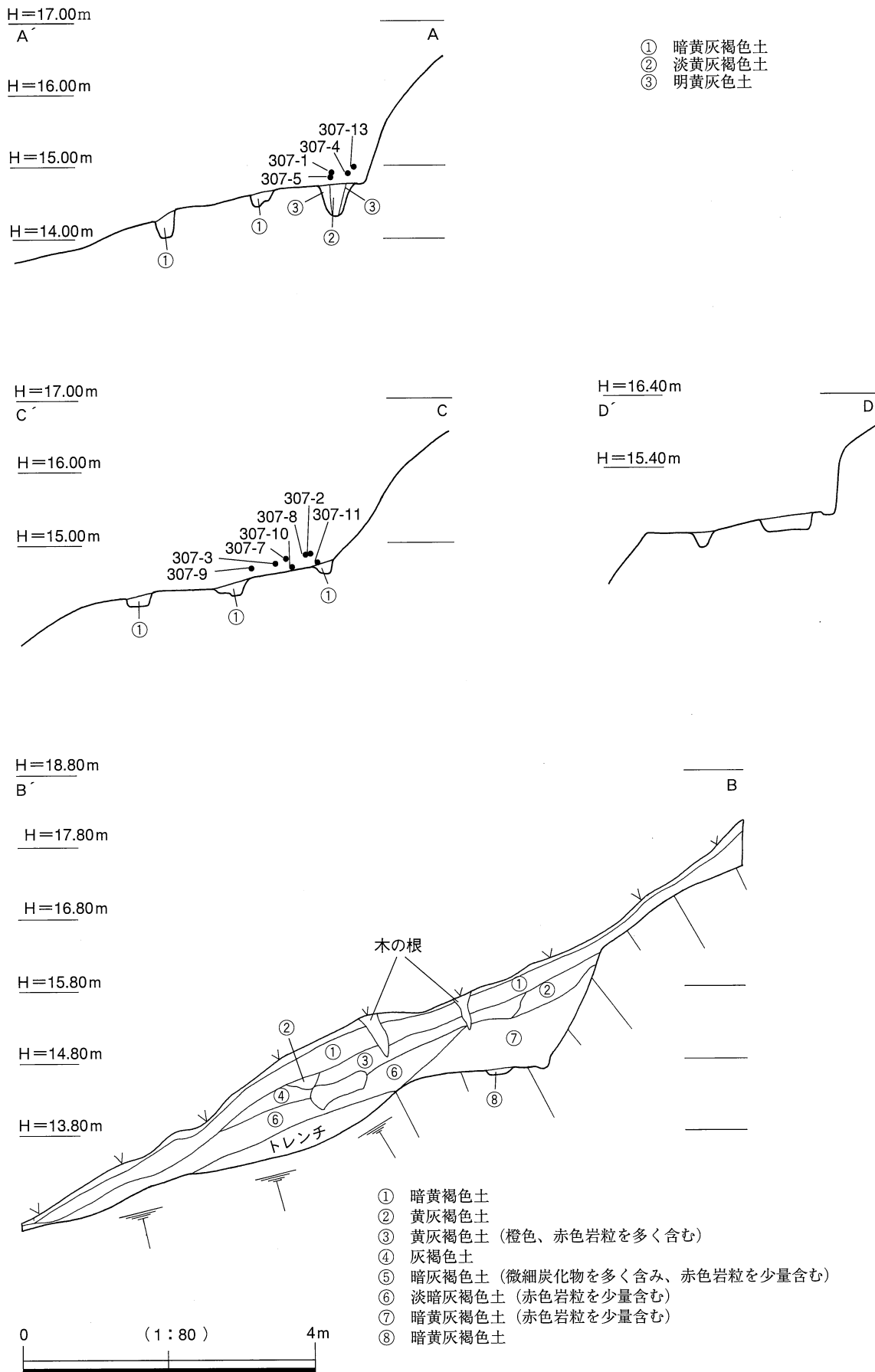
本遺構では、26基のピットを確認した。遺構の南東側が崩落しており、掘立柱建物の並びは明らかにしにくい。P13・12・10・14・16・19・21・22・25で一つの建物（SB-01）が構成されていたと考えられる。SB-01は桁行4間×梁行2間であり、桁行4.8m、梁行2.4mを測る。主軸方向はN-55°-Eであり、推定で床面積は約10.31m²である。また、ピットの並びから、P7・6・9・15・18・20も掘立柱建物（SB-02）を構成する可能性が考えられる。なお、P9・15は補助柱と思われる。SB-02は桁行1間×梁行1間であり、桁行6.0m、梁行1.5mを測る。主軸方向はN-60°-Eであり推定で床面積は約9.00m²である。

本遺構が拡張された可能性を考慮すると、掘立柱建物の建て替えがおこなわれたことが推定される。さらに、SB-01・02は遺構の南東側の桁行間の柱穴が確認されなかったことから、当初から、平面形が「コ」の字型の建物であったことも考えられる。

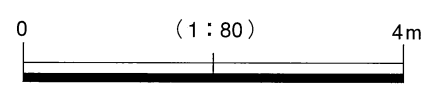
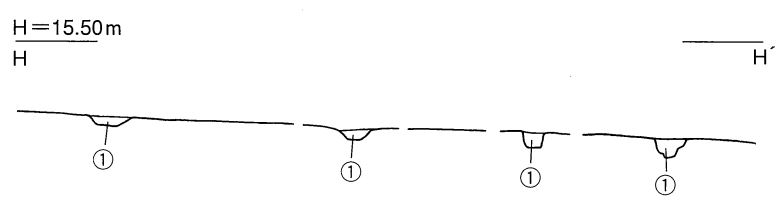
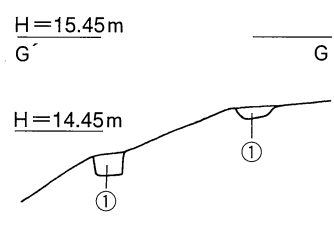
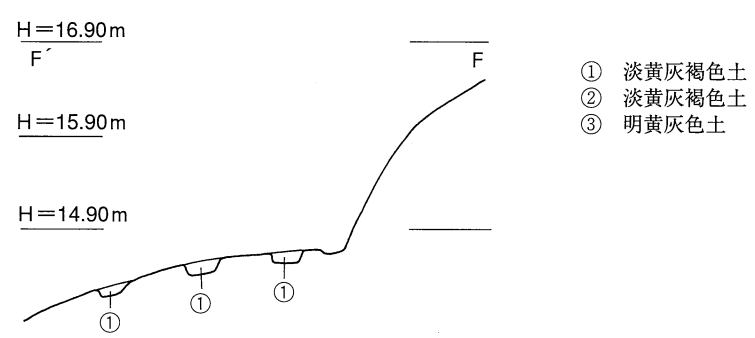
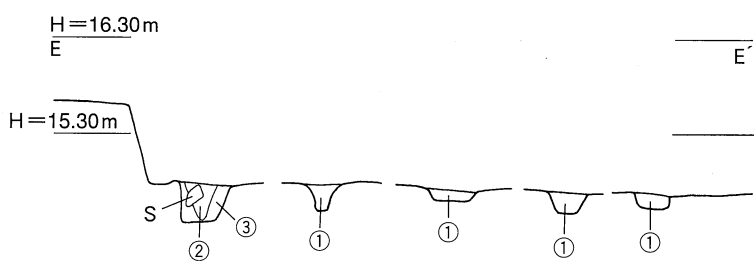
本遺構の床面およびその直上から出土した遺物は、挿図307である。本遺構からは、須恵器や土師器以外に、土製品が出土している。14はミニチュアの土製竈である。15は匙形土製品と思われる。16は土製支脚、17、18はミニチュアの手捏土器である。これらの遺物は須恵器の形態から陰田7期（7世紀中葉）に相当すると思われる。



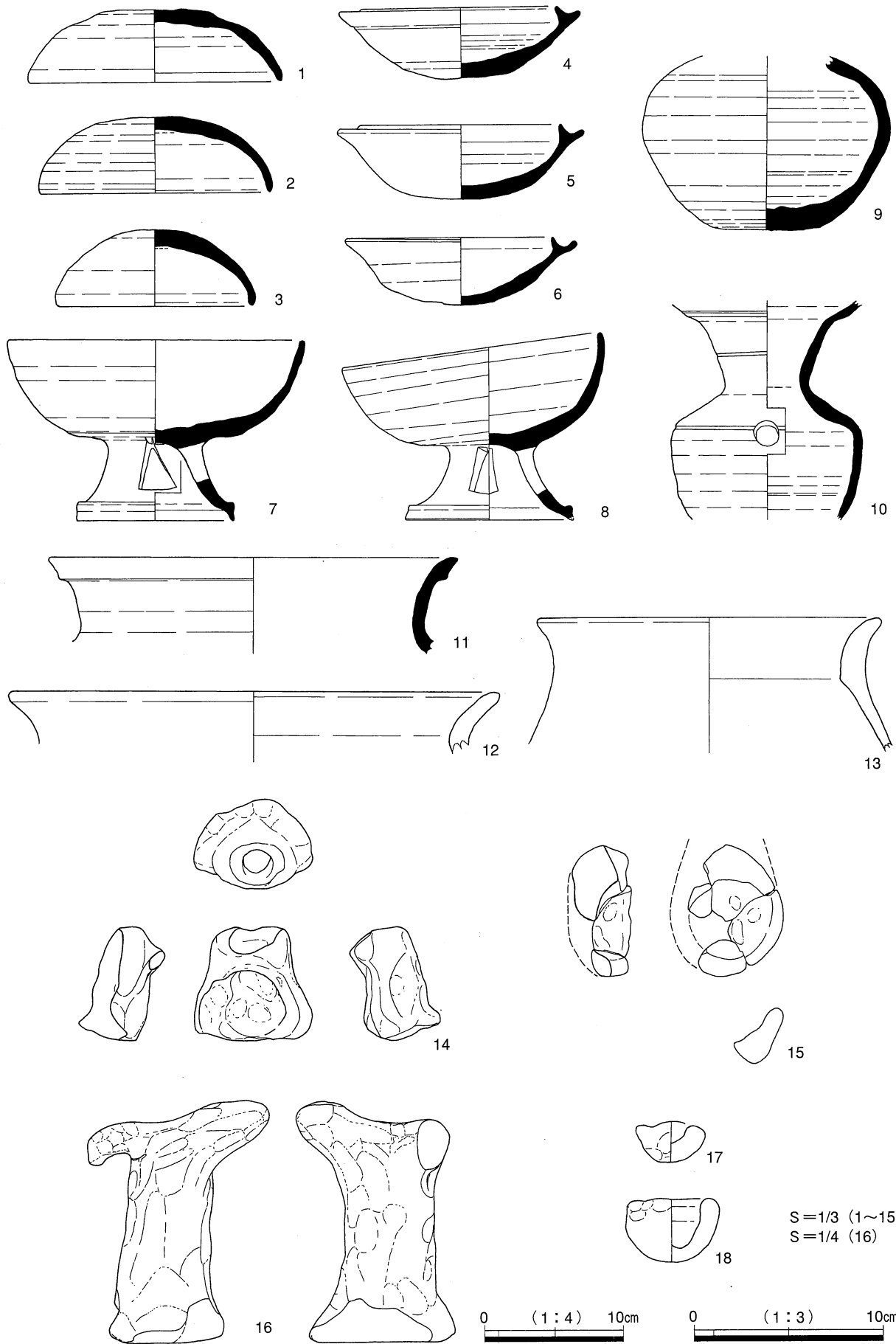
挿図304 陰田宮の谷遺跡 3区テラス状遺構1遺構図



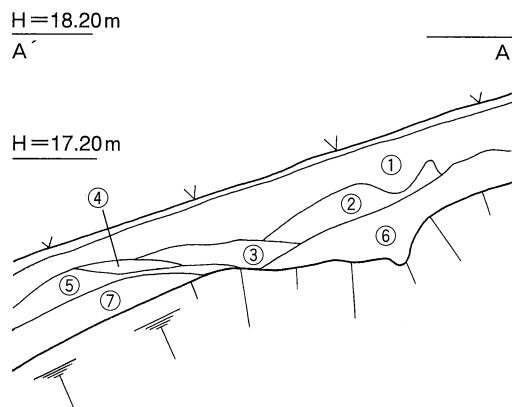
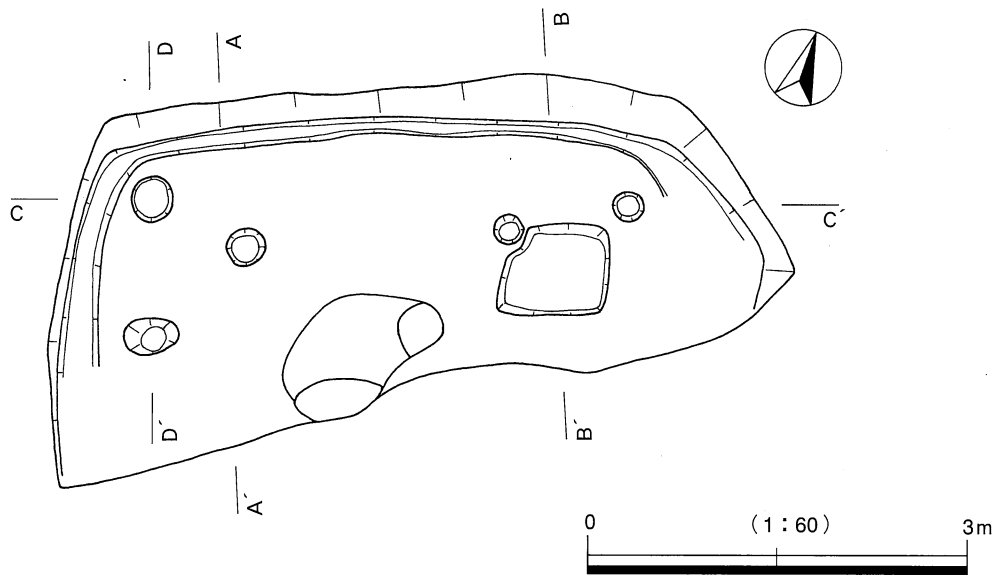
挿図305 陰田宮の谷遺跡 3区テラス状遺構1土層図(1)



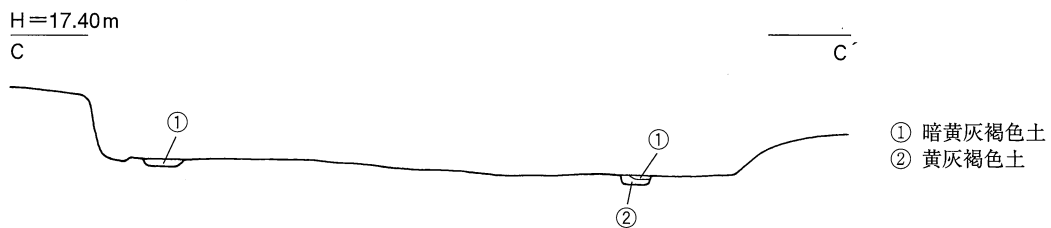
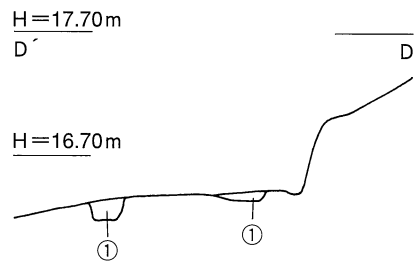
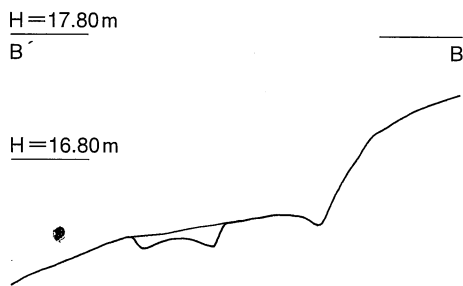
挿図306 陰田宮の谷遺跡 3区テラス状遺構1土層図(2)



挿図307 陰田宮の谷遺跡 3区テラス状遺構1出土遺物



- ① 黄灰褐色土
- ② 黄灰褐色土 (赤色岩粒を多く含む)
- ③ 淡黄灰褐色土
- ④ 淡黄灰褐色土 (微細炭化物を少量含む)
- ⑤ 黄褐色土
- ⑥ 暗黄灰褐色土 (明黄灰褐色ブロックを多く含む)
- ⑦ 暗黄褐色土



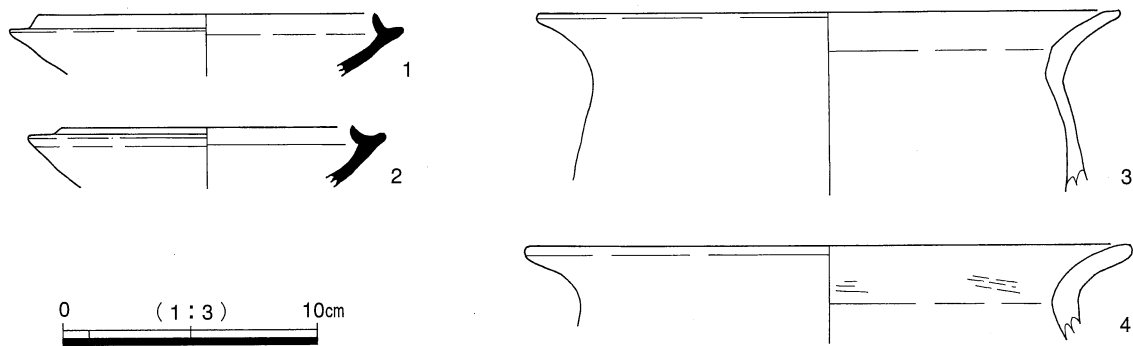
挿図308 陰田宮の谷遺跡 3区テラス状遺構2遺構図

テラス状遺構 2 (挿図308、309)

調査区の北側斜面、標高約16.0m、D29、E29グリッドに位置する。規模は約6.0m、奥行きは3.0m以上、残存壁高約0.6mを測る。壁際には幅約30cmの溝がめぐる。

本遺構では、5基のピットを確認した。テラス状遺構1と同様、遺構の南東側が崩落しており、掘立柱建物の並びを明らかにしにくい。P1・4・5で一つの建物(SB-03)が構成されていたと考えられる。SB-03は桁行1間×梁行1間であり、桁行3.8m、梁行1.1mを測る。主軸方向はN-72°-Eであり、推定で床面積は約4.20m²である掘立柱建物内には、建物に並行する2基のピット(P1・2)と方形を呈す土坑がある。また、床面には焼けた場所が2ヵ所とそれを取りまく形で炭化物の広がりが認められた。

遺物は床面およびその直上から挿図309等が出土した。テラス状遺構1と同様、陰田7期に相当する。

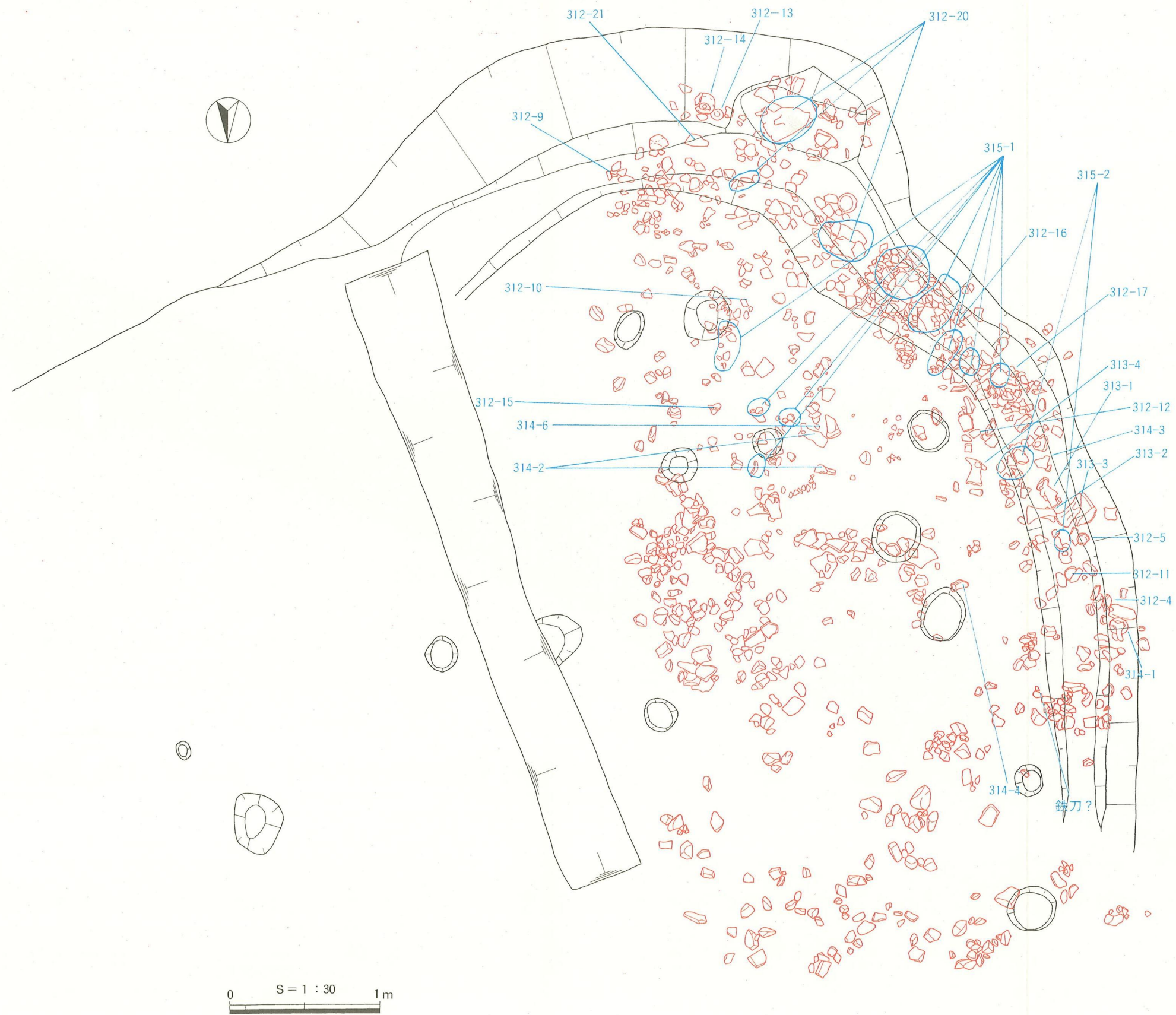


挿図309 陰田宮の谷遺跡 3区テラス状遺構2出土遺物

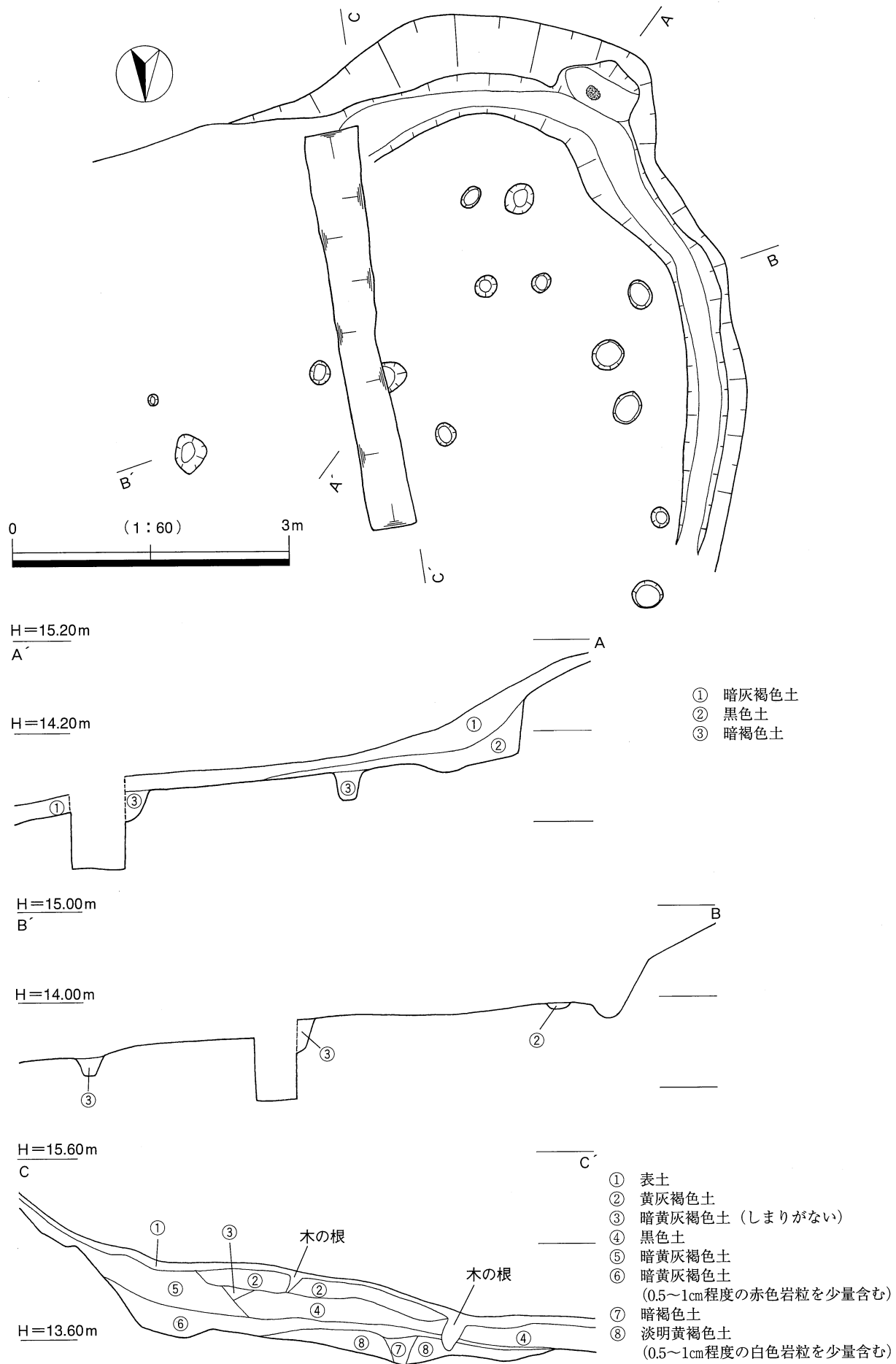
テラス状遺構 3 (挿図310~315)

調査区の南側、斜面裾部から谷部にかけての平坦部、標高約13.4m、E32、F32グリッドに位置する。規模は南北約5.0m、東西約6.0m以上、残存壁高約0.6mを測る。壁際には幅約60cmの溝が半円形にめぐる。床面から14基のピットを検出したが、規則的な並びは確認できなかった。また、本遺構の南側壁面には壁面を掘り込んだ炉状の遺構があり、この底面は、約20cmの範囲で赤く焼けていた。

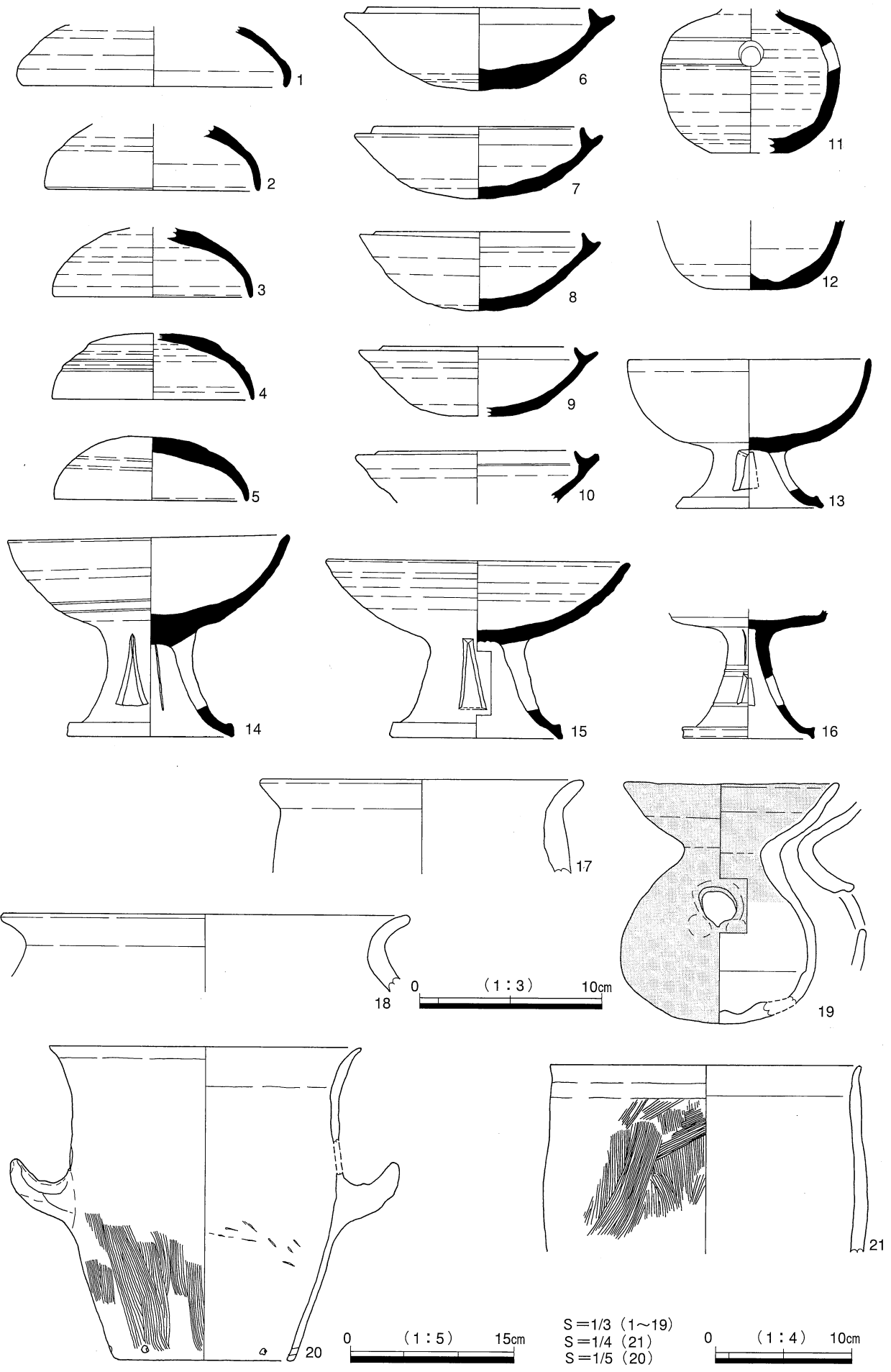
本遺構の床面上には、多量の礫が散在し、多量の土器、土製品等の遺物が出土した。壁際に遺物が集中する傾向があり、壁溝内には、折り重なるように遺物が堆積していた。土器には、須恵器の坏蓋(挿図312-1~5)、坏身(挿図312-6~10)、甗・壺(挿図312-11~12)、高坏(挿図312-13~16)等や土師器の甕(挿図312-17~18)、甗(挿図312-19)、甗(挿図312-20、21)等がある。須恵器では甕はほとんど出土しなかった。甗のうち、挿図312-20は壁溝から出土したが、半裁された大きな破片が2ヵ所にあり、それに小片が重なりあうような状態であった。接合後はほぼ完形を呈したが、完全に一周せず、意図的に割られたものと考えられる。挿図312-19の甗は雑な作りではあるが、赤色顔料が塗布されている。



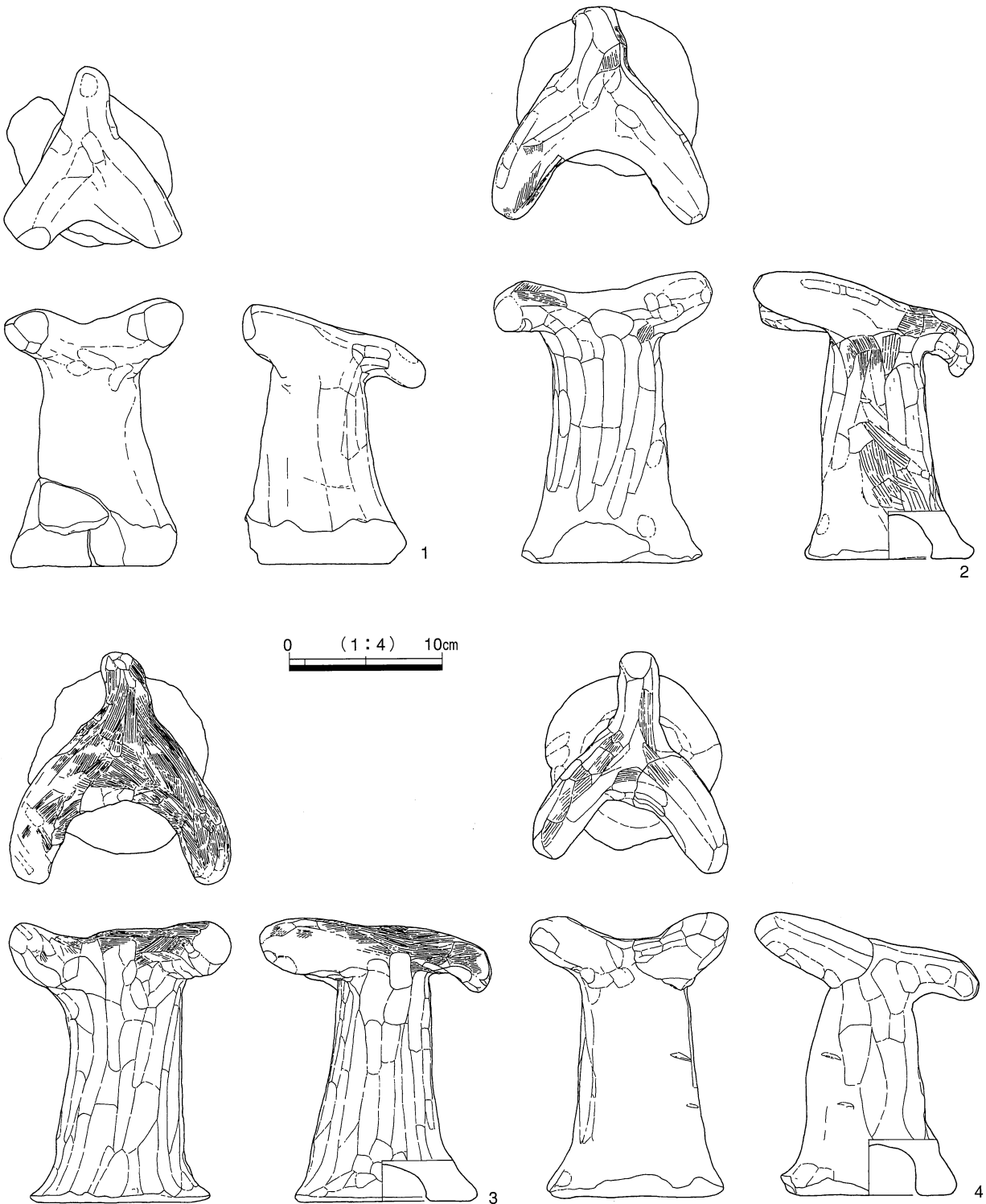
挿図310 陰田宮の谷遺跡 3区テラス状遺構 3遺物出土状況図



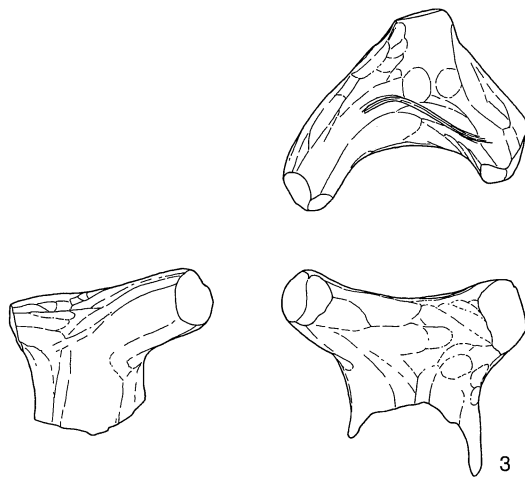
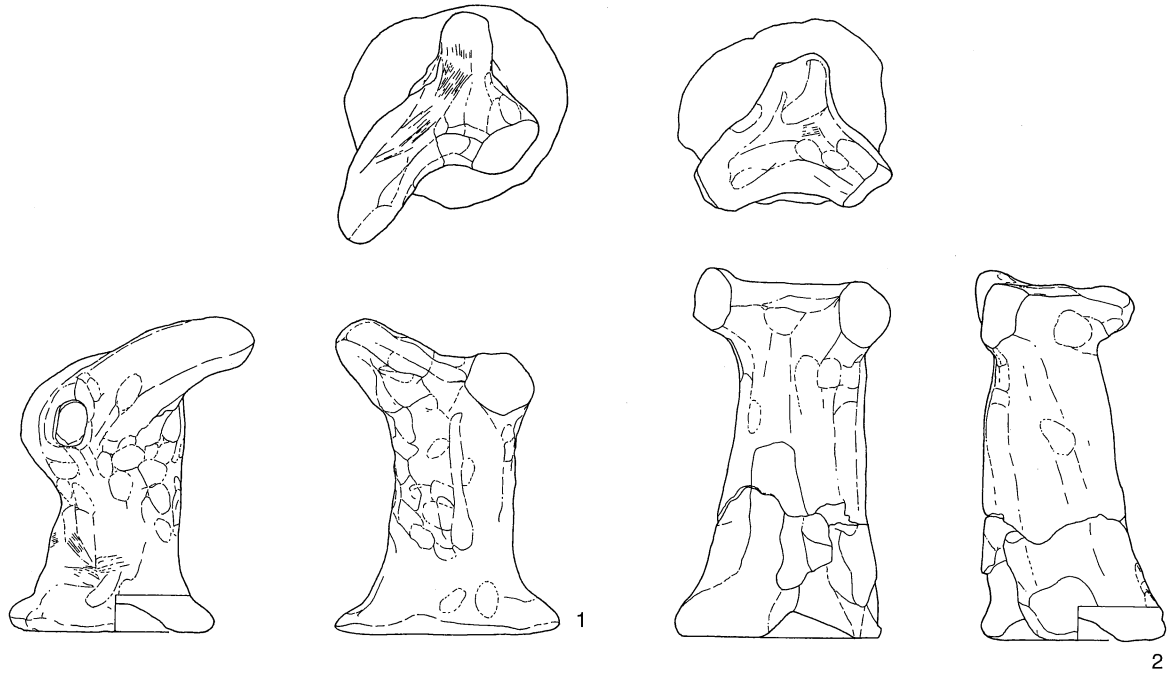
挿図311 陰田宮の谷遺跡 3区テラス状遺構3遺構図



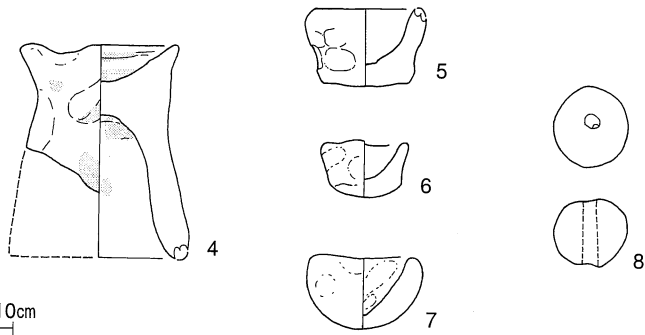
挿図312 陰田宮の谷遺跡 3区テラス状遺構3出土遺物(1)



挿図313 陰田宮の谷遺跡 3区テラス状遺構3出土遺物(2)



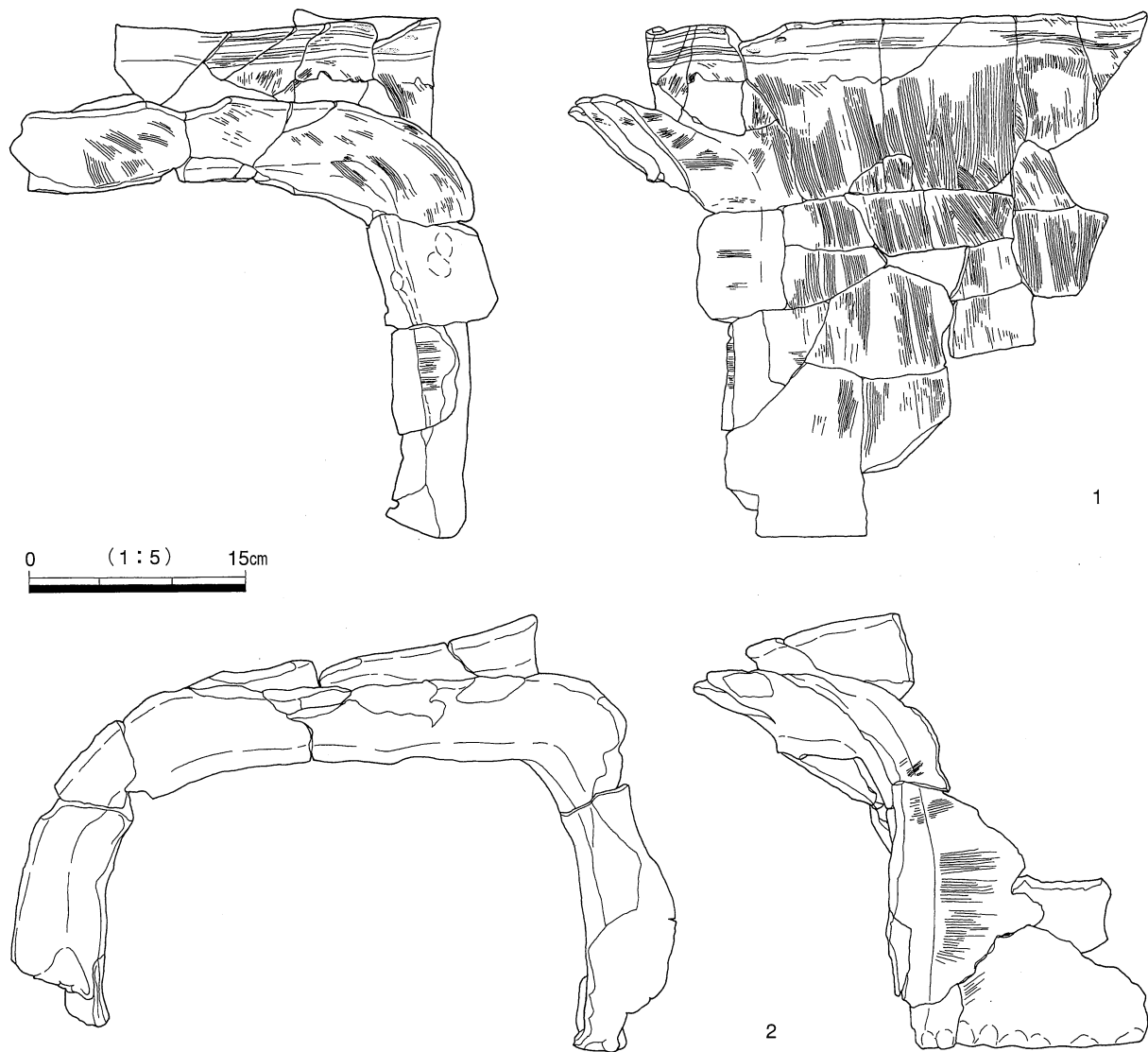
0 (1:4) 10cm



0 (1:3) 10cm

S=1/3 (4~8)
S=1/4 (1~3)

挿図314 陰田宮の谷遺跡 3区テラス状遺構3出土遺物(3)



挿図315 陰田宮の谷遺跡 3区テラス状遺構3出土遺物(4)

土製品には、移動式竈、土製支脚、器台形土製品、手捏土器、土錘等がある。移動式竈は2点出土したが、いずれも完形には復元できず、前方部がようやく復元できる程度である。これも甌と同様、意図的に割られ、前方部のみが本遺構に投棄された可能性がある。出土状況は、ほとんどの破片が側溝内にみられるが、小片が数ヶ所に散らばる程度であった。

土製支脚は、まとまりをもって出土した。これらの出土状況についても、意図的なまとまりの可能性があろう。

挿図314-4は器台形土製品と思われる。雑な作りではあるが赤色顔料が塗布されている。挿図314-5~7はミニチュアの手捏土器、8は土錘である。また、その他に、不明鉄器が3点出土している。

本遺構の時期は、須恵器の形態から陰田7期の範疇に収まるものと考えられる。また、多量の土製品が出土していることから、祭祀に関連した遺構であると予想される。

テラス状遺構 4

調査区の北側斜面部の西側、C29・D29グリッド、標高約17.2mに位置し、テラス状遺構2の北西にあたる。テラス状遺構の北側半分以上が調査区外であるため、ピット6基を検出したにとどまった。

テラス状遺構 5

調査区の南側斜面部、テラス状遺構3の上方にある。E34グリッド、標高約17.2mに位置すると思われるが、ほとんど調査区外であり、テラス状遺構の北側の平坦面をわずかに検出したにとどまった。

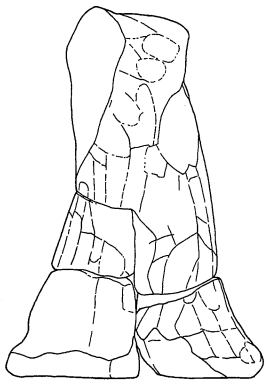
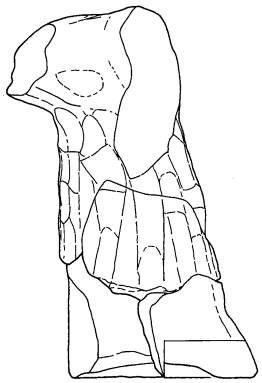
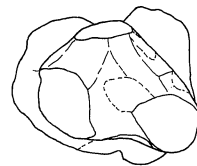
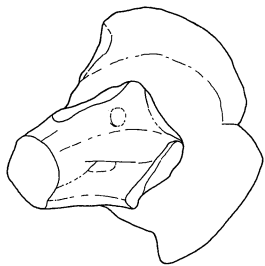
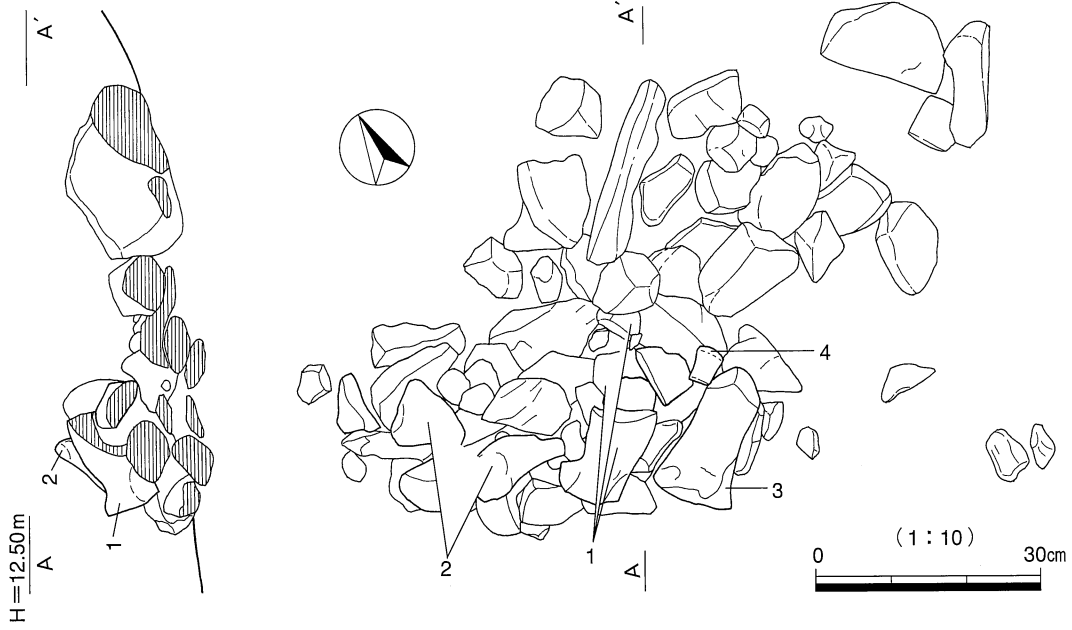
集石遺構（挿図316）

谷部の第3層黒色土掘り下げ過程で、G31グリッドで検出した遺構である。標高約11.6mに位置する。約1.0×0.7mの範囲に10～15cm程度の礫が集積されていた。集石の北側中央部には、板状の礫を立てた状態で配置してある。また、南側には、礫の上に、打ち割られた土製支脚が並べられていた。土製支脚の配置は、北側にある板状の礫に直行するものであるが、個々の支脚の長軸は板状の礫と方向を同じくしている。

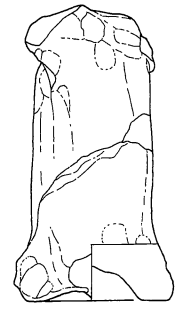
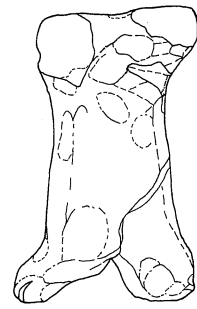
接合すると3個体の土製支脚であることが判明した。いずれも両角部と把手部は欠損している。おそらく、両角部と把手部を打ち欠いた後、胴部を縦に打ち割ったものと考えられる。また、挿図316-4はミニチュアの器台形土製品である。本遺構は、時期を特定できる資料が伴っていないことから、時期決定が困難である。本遺構の下層から出土している須恵器に陰田7期のものが多いこと、これらの遺物がテラス状遺構1、2から転落してきた可能性があること、テラス状遺構3との関係、調査区全体でみても陰田7期以外の遺物は非常に少なく、陰田8期以降の須恵器は表土掘り下げ中に僅かに出土したにすぎないことから、他の遺構よりも若干新しいものと考えるのが妥当であろう。

集石炉状遺構（挿図317）

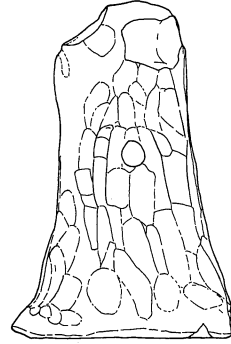
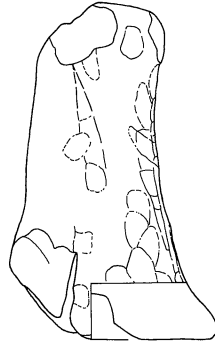
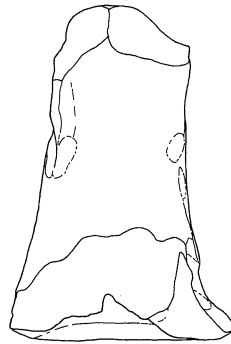
本遺構は谷部の第3層黒色土掘り下げの過程で検出した。H30グリッド、標高約11.7mに位置する。約1.0×1.0mの範囲に10～20cm程度の礫が集積されている。遺構の中央から南東にかけて礫が配置されておらず、平面形はU字状を呈す。南東側が焚き口と思われる。この焚き口からは、北西に向かって約3.0m程度、流れたような炭化物の広がりが認められた。本遺構は遺物を伴っていないことから用途の判断材料を欠いおり、また、焼成を受けた痕跡を確認するに至らなかったが、多量の炭化物があったことから、集石炉のようなものではないかと思われる。



1



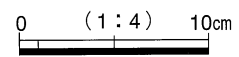
2



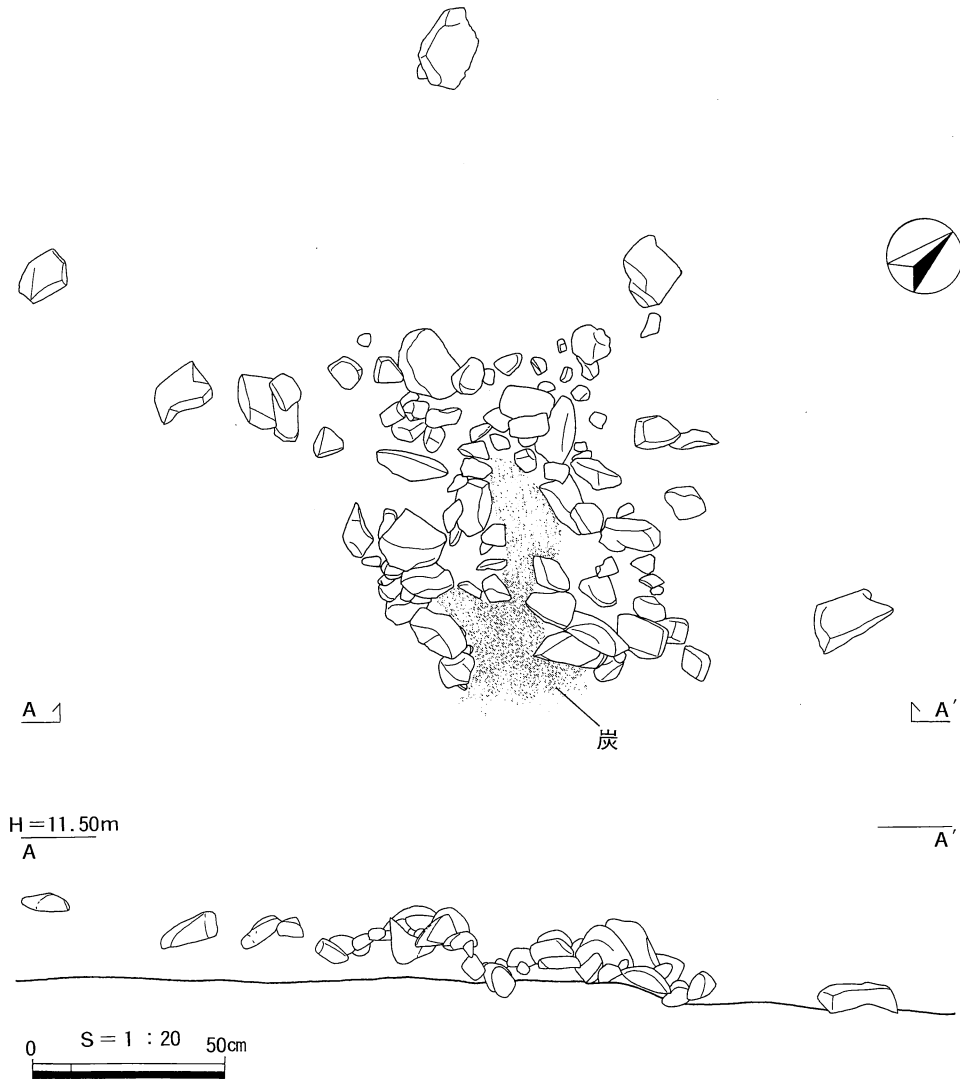
3



4



挿図316 陰田宮の谷遺跡 3区集石遺構および出土遺物



挿図317 陰田宮の谷遺跡 3区集石炉状遺構遺構図

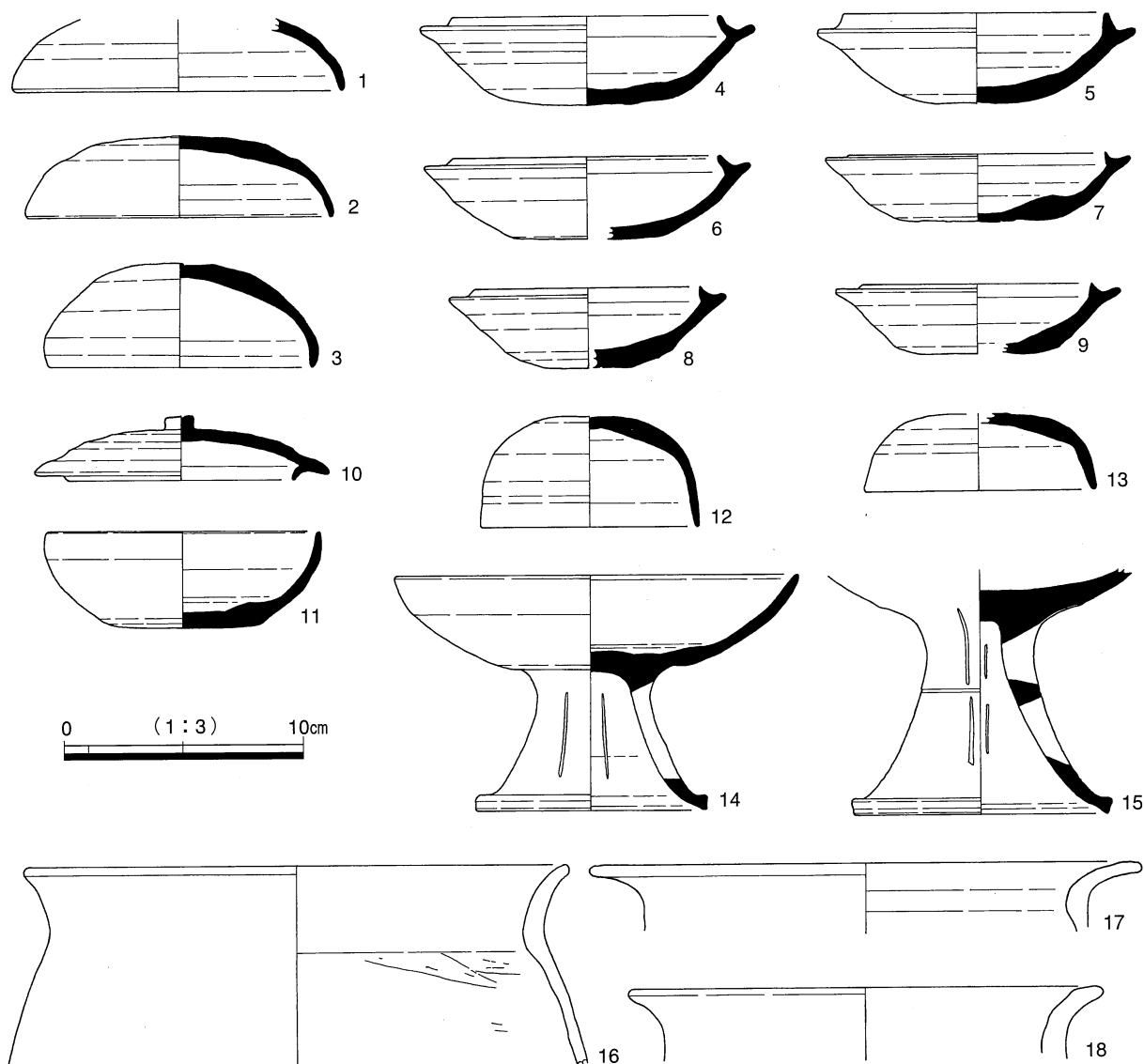
土器溜まり (挿図318)

調査区の北側斜面部、テラス状遺構の西側、C30グリッドの周辺で土器溜まりを検出した。表土下の第1層暗黄灰褐色土掘り下げ中に、須恵器、土師器、土製品が出土した。須恵器は坏身、坏蓋、高坏等、土師器は甕、甑、土製品は土製支脚等がある。上方に、調査区外に広がるテラス状遺構4が位置しており、これらの遺物は、二次的な堆積の可能性も考えられる。

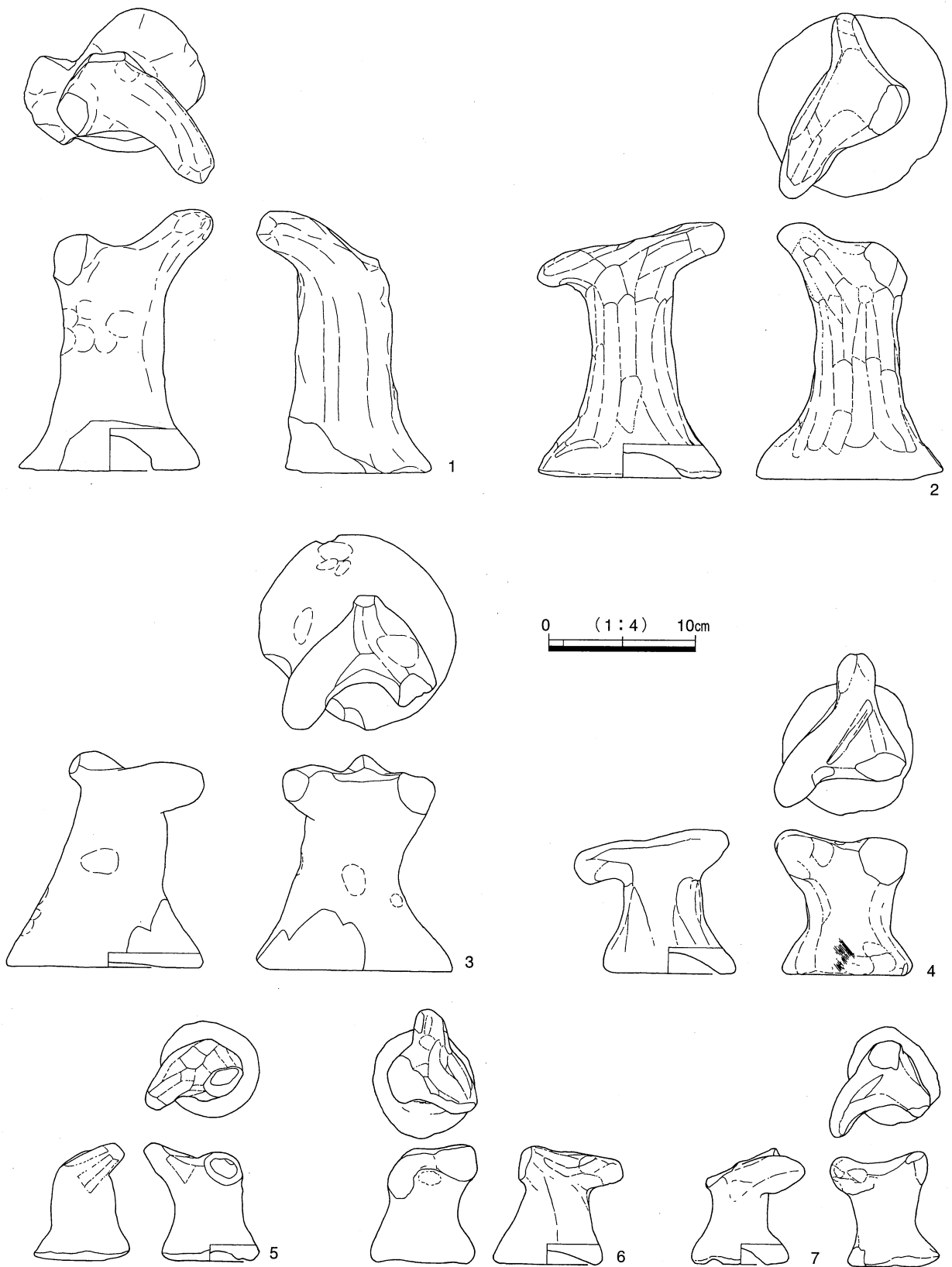
谷部 (挿図319、320)

谷部からは、青灰色粘土を切り込んだ11基のピットを検出した。谷部掘り下げ中には、包含層中より多量の遺物が出土し、特に周辺の遺構(テラス状遺構)から流れ込んだと思われる土製品が注目される。挿図319-1~7は土製支脚である。4~7は小型の支脚である挿図320-1はミニチュアの移動式竈である。2はミニチュアの土製支脚である。欠損し

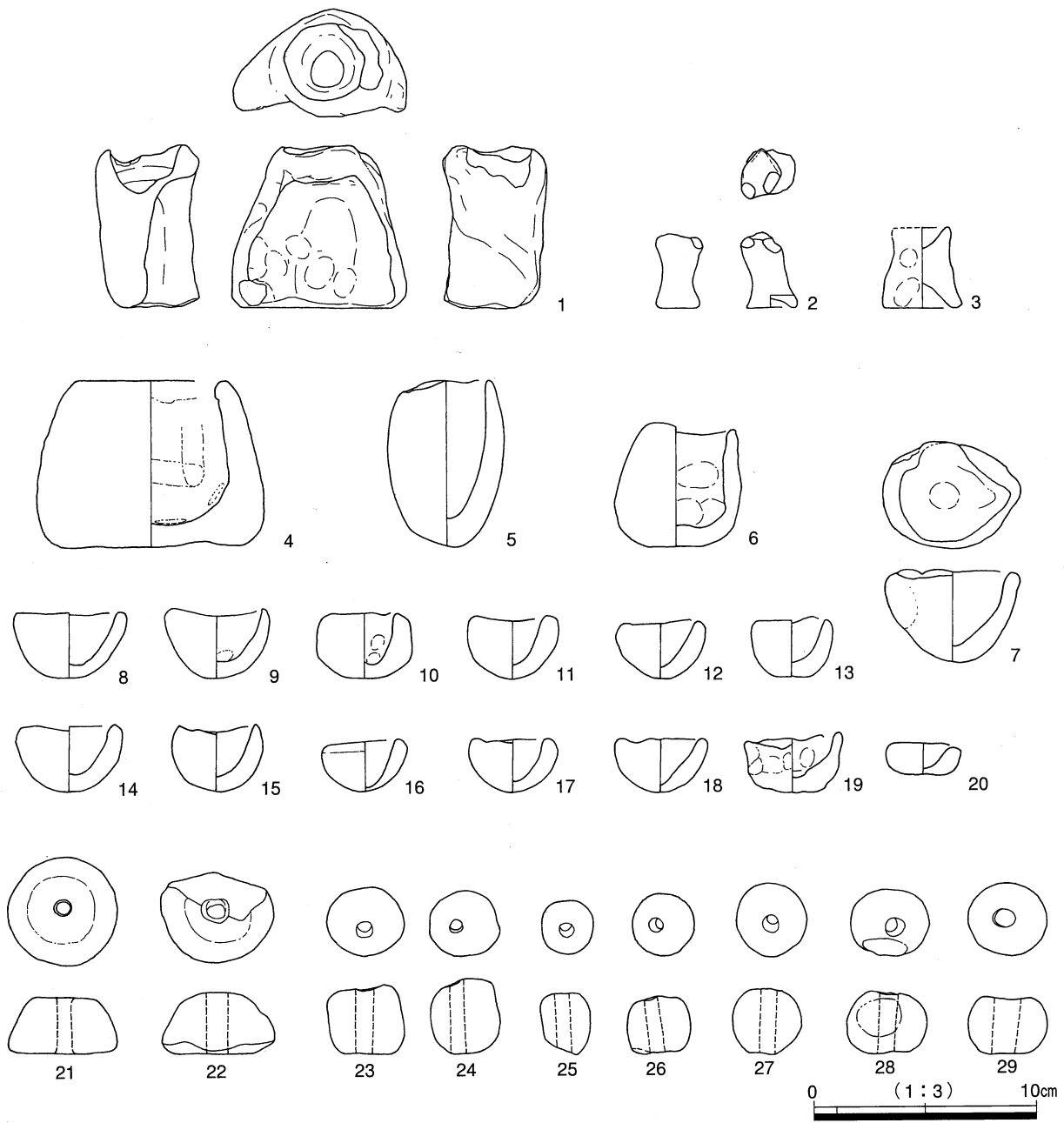
ているが、正面部に角部のあった痕跡が認められる。また、背面には把手部を模したと思われる張出がみられる。底面部には、凹底を呈す。ミニチュアではあるが、調査区内から出土した土製支脚と同様の形態をとる。3はミニチュアの器台形土製品である。4~20は手捏のミニチュア土器である。手捏土器には幾つかの形態が認められる。4~7のような5cmをこえるものには、様々な器形がみられる。8~20はミニチュアの手捏土器である。これらには、8~18のような椀形を呈す類と、19のような底部から直線的に立ち上がる類、20のように皿形を呈す類が認められる。21、22は土製紡錘車である。23~29は土錘である。土錘は約30点出土した。土錘には、23~25のような縦長、25、26のような正円形、28、29のような扁平な球形を呈すものがある。本調査区が、祭祀的色彩をもつことを考慮するとこれらの土錘は、丸玉形の土製品とすべきものを含むかもしれない。これらと混在していた須恵器は、陰田6期の須恵器を少量含むが、主体を占めるのは陰田7期のものである。



挿図318 陰田宮の谷遺跡 3区土器溜まり出土遺物



挿図319 陰田宮の谷遺跡 3区谷部出土遺物 (1)



挿図320 陰田宮の谷遺跡 3区谷部出土遺物 (2)

(3) まとめ

陰田宮の谷遺跡3区からは7世紀中葉の限られた期間に営まれた遺構が検出された。特に、北側斜面部に位置するテラス状遺構1・2では、斜面部を地山面から断面「L」字状に加工して平坦面をつくり、その上に平面形が「コ」の字型の掘立柱建物が存在していたことが想定される。また、谷部を挟んだ調査区南側のテラス状遺構3では建物の存在をうかがわせるピットの並びは確認できなかったが、本遺構の南側の壁面を掘り込んだ炉状の遺構が検出された。

この調査区からは、一般的な日常生活で使われたと思われる土器の他に、ミニチュア土製品といった多くの祭祀関連遺物が出土した。この遺跡の立地は、2つ尾根に挟まれた谷部と斜面部であり、日常の生活に決して適している場所とはいええないだけに、ここで出土した多くの祭祀関連遺物は、この遺跡の性格を特徴付けているといえる。

具体的にはテラス状遺構1からは、ミニチュアの土製竈、ミニチュアの手捏土器が出土しており、テラス状遺構3でも赤色顔料が塗布された器台形土製品の他に、ミニチュアの手捏土器が出土している。

谷部では礫が集積されており、その上には3個体の打ち割られた土製支脚が並べられていた。また、礫の上からミニチュアの器台形土製品が出土している。このように、本調査区全体は祭祀が取りおこなわれていたり、また、祭祀遺物が一括廃棄された場所であったと推察される。

(テラス状遺構3)

遺物の出土状況は、挿図310に示したとおりである。主に、壁際の溝から遺物が出土した。また、遺構の床面には、多量の礫が散在していた。この礫より外では、ほとんど遺物が出土していないことから、この礫群は遺構(祭祀空間)を外部と区画する意味合いを含んでいる可能性もある。また、遺物の出土地点にも、特徴がみいだせる。

須恵器は一見、遺構内にまんべんなく広がっているようであるが、器種ごとに若干の偏りがある。蓋坏、高坏は一様に分布しているのであるが、甕は中程より北側で2点出土している。また、甕は胴部片が1個体出土したにとどまり、蓋坏、高坏が器種構成の主体を占める。須恵器に関しては供膳具が主体をなすといえるだろう。

土師器は甕、甑が出土しており、甕については、口縁部片、胴部片が溝内を主体にまんべんなく分布している。また、ほぼ1個体分に復元できる球胴形の甕が溝の北寄り出土した。甑は遺構の南側で出土した。ほぼ1個体に復元できる挿図312-20は、溝内で2地点に分かれていた。

土製品には、移動式竈、土製支脚、器台形土製品、ミニチュアの手捏土器等がある。移動式竈は2個体分が認められる。これらは遺構の中程に破片が散在していた。大型の破片は、やはり溝内に集中している。土製支脚は、7個体以上認められる。これらは、移動式

竈よりやや北寄り、遺構の中程でまとまって出土した。

以上をまとめると、まんべんなく分布する須恵器（供膳具）と、南から甑の一群、移動式竈の一群、土製支脚の一群がある。このことから、甑、竈、支脚等の給食具がそれぞれ群を形成していると考えられる。また、出土量から考えると、竈等の接合可能な大型破片が2個体分であることから、給食具に2つのセット関係が窺える。

また、本遺構では実用品が主で、いわゆる、形代は少量であることが重要であろう。特に、人形や動物形の土製品が全く出土していないことから、食、調理に深く関係する実用品を中心とした祭祀関連遺構と考えられる。

さらに、完形に復元できる遺物が少ないこと、竈や甑のように破片が散在していることから、遺物を別の場所で破損後、テラス状遺構3に投棄した可能性が考えられる。本調査区の集石遺構でも、3個体分の土製支脚を打ち割って並べるといった状況が認められている給食具を破損するという行為が、祭祀と密接に関わっている可能性も考えられよう。

以上がすでに概報で指摘されている⁽¹⁾。

現地点では、陰田宮の谷遺跡3区の具体的な祭祀的性格は明らかにしえない。今後の資料の増加が望まれる。

陰田遺跡群の近年の調査成果⁽²⁾では、7世紀後葉から出土遺物相にも変化が見受けられ、官衙的性格を帯びてくることが指摘されている。また、陰田第6遺跡の調査⁽³⁾では8世紀の石敷道路が検出されており、これは「律令体制による交通体系の整備の結果が陰田第6遺跡にみられる石敷道路の設置を促したのではないか」⁽⁴⁾と考えられている。

このような陰田遺跡群の性格を考慮するならば、陰田宮の谷遺跡3区が営まれた7世紀中葉という時期は、律令体制が陰田遺跡群に影響を及ぼす直前の時期である。

陰田宮の谷遺跡3区からは、竈のミニチュア土製模造品2点、土製支脚のミニチュア土製模造品1点、手捏土器22点、土製丸玉⁽⁵⁾が出土している。鳥取県内で、ミニチュアの竈形土製品が出土した遺跡は4遺跡⁽⁶⁾知られている。鳥取県中部地域では、倉吉市上神字谷畑の谷畑遺跡⁽⁷⁾と倉吉市上神字クズマのクズマ遺跡⁽⁸⁾であり、西部地域では、米子市陰田の陰田隠れが谷遺跡⁽⁹⁾と米子市石州府の石州府第4遺跡⁽¹⁰⁾である。また、陰田隠れが谷遺跡と石州府第4遺跡では、ミニチュアの土製支脚形土製品も出土している。ミニチュアの土製支脚形土製品においては、県内では、この2例しか知られておらず、陰田宮の谷遺跡3区の祭祀は、西部地域の中でも極めて強い地域色が窺われるのである。

陰田宮の谷遺跡3区は、古墳時代終末にみられる祭祀の一形態を示す遺跡であり、当地域の古代の精神生活の一端を示す貴重な資料といえる。

- (1) 濱田竜彦「第5章 まとめ 第2節 陰田宮の谷遺跡3区の祭祀関連遺構、遺物について」『陰田第6遺跡 陰田宮の谷遺跡3区・4区 ―一般国道180号道路改良工事に伴う発掘調査概報―』財団法人 米子市教育文化事業団 1997年
- (2) 北浦弘人「第9章 第4節 陰田遺跡群の性格」『陰田遺跡群』鳥取県教育文化財団 1996年
- (3) 財団法人 米子市教育文化事業団『陰田第6遺跡 陰田宮の谷遺跡3区・4区 ―一般国道180号道路改良工事に伴う発掘調査概報―』1997年
- (4) 濱田竜彦 上島玲子「第5章 まとめ 第1節 陰田第6遺跡の石敷道路について」『陰田第6遺跡 陰田宮の谷遺跡3区・4区 ―一般国道180号道路改良工事に伴う発掘調査概報―』財団法人 米子市教育文化事業団 1997年
- (5) 土錘と土製丸玉の判別が困難であるため、はっきりとした数量は出せないが、土錘とも土製丸玉とも思われる遺物が約30点出土している。
- (6) 倉吉博物館 『特別展「まつりの造形」―古代形代の世界―』「鳥取県の祭祀遺物出土地名表」1997年 を参照。
- (7) 土井珠美「谷畑遺跡」『倉吉市内遺跡群分布調査報告書Ⅱ』1984年
- (8) (6)と同じ。
- (9) (6)と同じ。遺物について、米子市教育委員会 下高瑞哉氏より教示。
- (10) (6)と同じ。遺物について、米子市教育委員会 下高瑞哉氏より教示。

7 陰田宮の谷遺跡 4 区

(1) 調査の経過と方法

調査は、平成8年7月に着手し、平成9年1月に現場作業を終了した。調査面積は平成7年度に一部調査された範囲を除く1,340㎡であった。調査地は、北部と南部で尾根が張り出し、中央東側の谷部へ斜面が急に下がっていく傾斜地である。

周辺遺跡の調査結果や、調査前の測量時に、現地形で段状の地形が確認できたため、テラス状遺構の存在を考慮しながら調査を進めることにした。現地形を勘案しながら土層観察用のベルトを設定し、表土を除去した。急な斜面が多く、且つ遺構面が浅いことが予想されたため、一部を除き人力による掘り下げを行った。

中央斜面部のテラス状遺構は、平面的な掘り下げによる遺構面の検出が困難であったため、サブレンチを設定し、土層断面を観察しながら掘り下げることにした。検出した遺構や遺物は必要に応じて写真撮影、実測等を行った。遺構の実測は、平成7年度に使用されていた測量用基準杭を基準に調査区内に設定した5m画のグリッドを使用した。

(2) 遺跡の概要

本調査区で確認できた遺構は8世紀代を主体とし、テラス状遺構6基、掘立柱建物3棟、土坑4基、溝状遺構10条、道路状遺構1条、ピット他を検出した。また、奈良時代以降の遺構は、テラス状遺構2基、掘立柱建物1棟、近世墓と思われる炭溜まり1基である。また、調査区東側の谷部より自然流路を検出した。自然流路から谷部にかけては、特に谷部の埋土中から上方に位置するテラス状遺構から流入してきたと考えられる奈良時代の土器が多量に出土した。この自然流路をはじめ調査区内から石鏃、石匙等、若干の石器が出土している。全て縄文時代の所産と思われるが、縄文時代の土器片は全く出土していない。

(3) 遺構と遺物

ここでは、斜面地を断面L字状に段状加工した平坦面に側溝やピットを配した遺構をテラス状遺構とした。

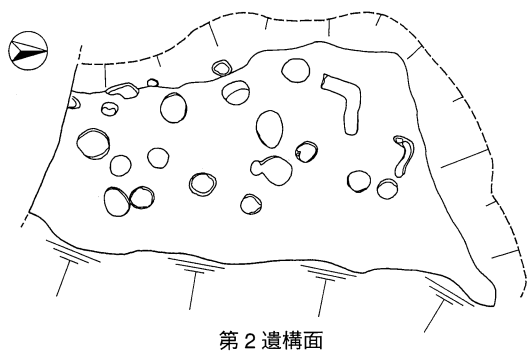
テラス状遺構1 (挿図330)

調査区の北側、H・I-13~15グリッドに位置する。明瞭な段状加工の痕跡は認められない。傾斜の緩やかな地点にピットなどが形成されているにすぎず、テラス状遺構とは言い難い。また、テラス状遺構5、6がテラス状遺構1とした範囲内に造成されていることも、テラス状遺構1とした範囲が単なる緩斜面であったことを示しているかもしれない。

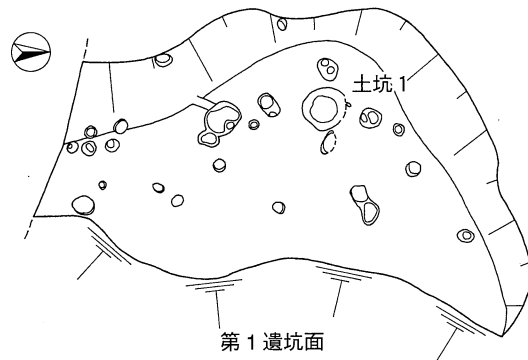
挿図330-1~4の須恵器が出土した。



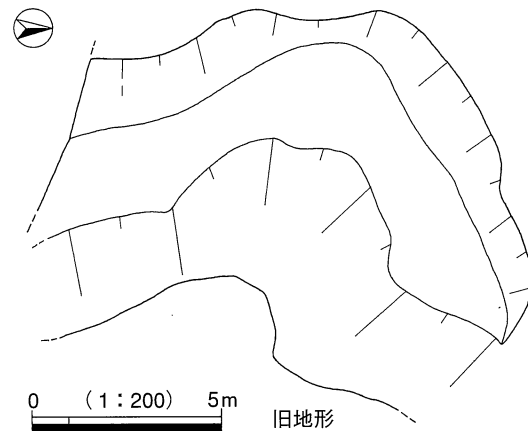
挿図321 陰田宮の谷遺跡 4区遺構分布図



第2遺構面

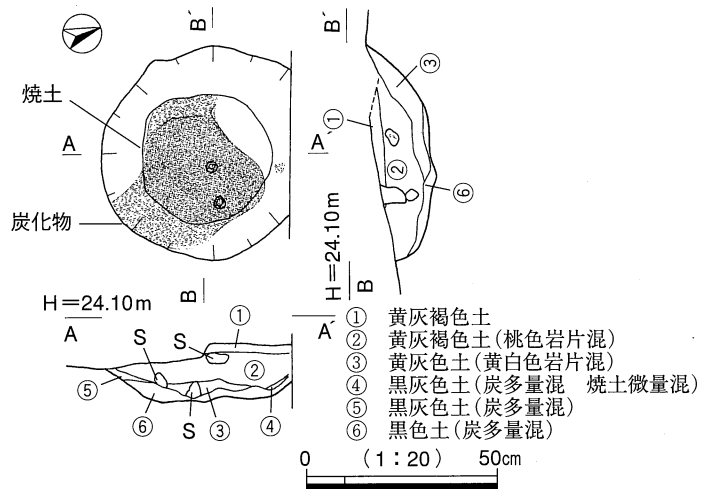


第1遺構面

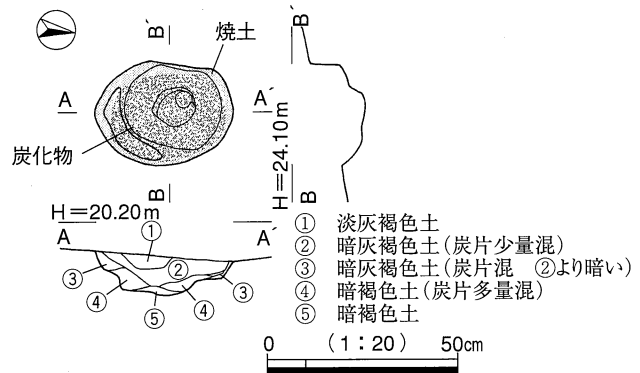


旧地形

挿図322 陰田宮の谷遺跡 4区テラス状遺構2変遷図



挿図323 陰田宮の谷遺跡 4区土坑1遺構図



挿図324 陰田宮の谷遺跡 4区土坑3遺構図

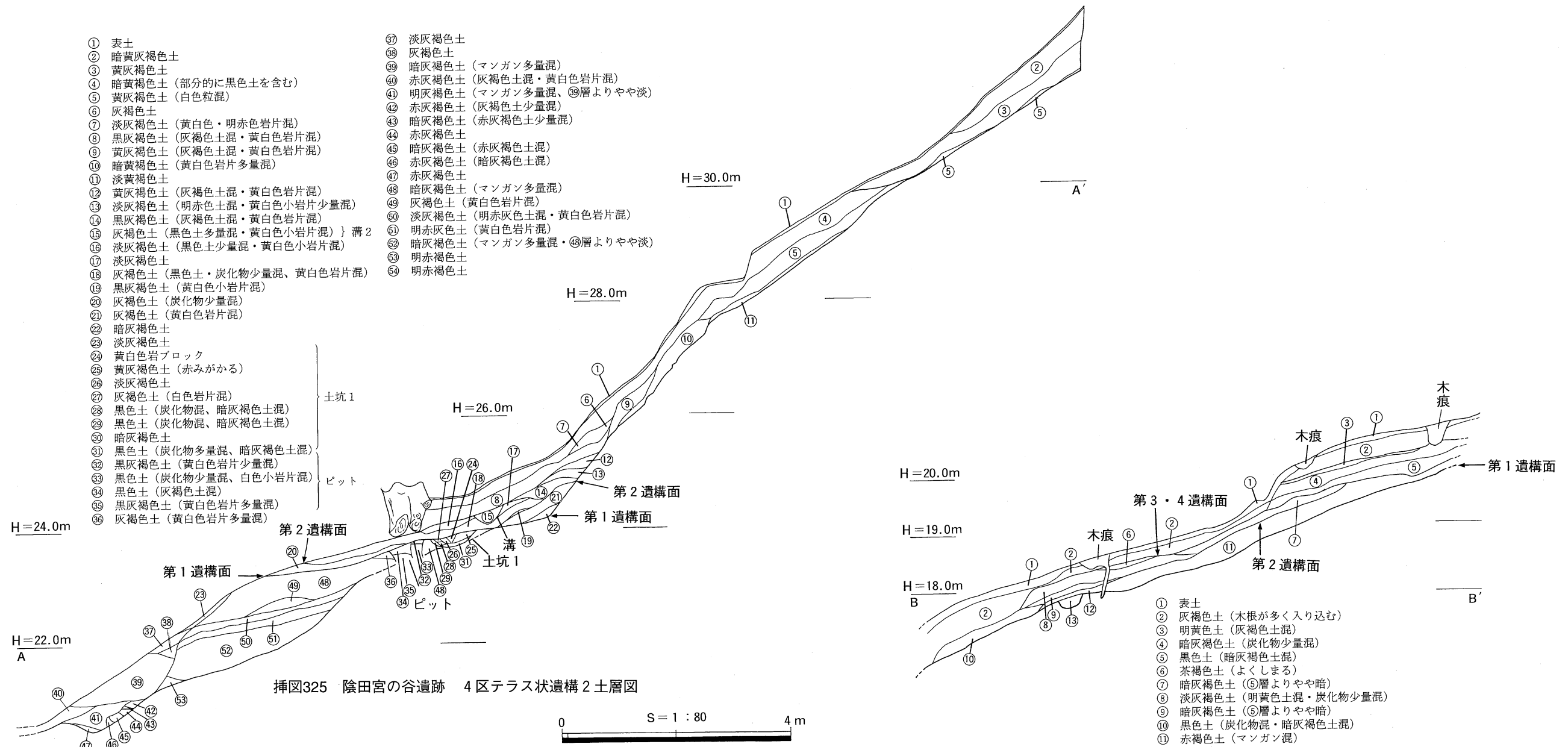
テラス状遺構2 (挿図322、323、325、330)

調査区内で最も高い位置にあるテラス状遺構で、D6・7グリッドに位置する。西から東に傾斜する斜面地に造成されており、2段階の変遷が認められた(挿図322、325)。旧地形の斜面地の岩盤を断面L字状に削平し、流

路状の落ち込み部に盛土を施し平坦面を造成し、第1遺構面を形成している。

第1遺構面では、土坑1や柱穴と思われるピットを検出した。土坑1(挿図323)の断面形は浅い皿状を呈す。壁面がかなり焼成を受けており、炭化物が溜まっていた。第1遺構面では、柱穴の並びが把握できなかったため、土坑1は屋外の地床炉ではないかと考えられる。第2遺構面は第1遺構面にさらに盛土することで遺構面を形成している(挿図322、325)。ここでは掘立柱建物の存在を一棟分予想している。

第1、第2遺構面、およびピット等からは須恵器、土師器等が出土した。出土した須恵器は陰田10期に相当するもので、いずれの遺構面も8世紀後半に比定できる(挿図330-5~18)。



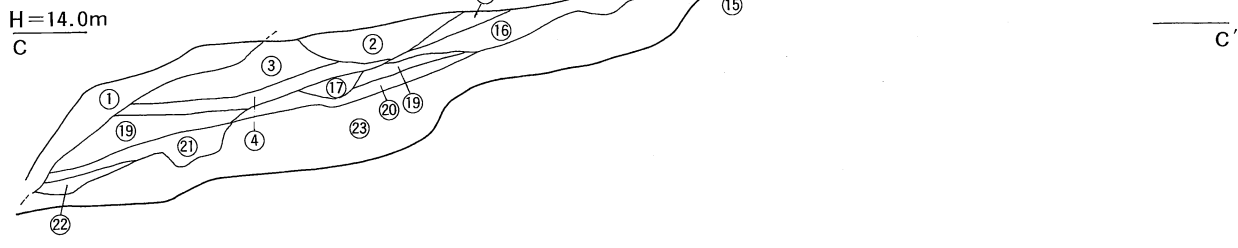
- ① 表土
- ② 暗黄灰褐色土
- ③ 黄灰褐色土
- ④ 暗黄褐色土 (部分的に黒色土を含む)
- ⑤ 黄灰褐色土 (白色粒混)
- ⑥ 灰褐色土
- ⑦ 淡灰褐色土 (黄白色・明赤色岩片混)
- ⑧ 黒灰褐色土 (灰褐色土混・黄白色岩片混)
- ⑨ 黄灰褐色土 (灰褐色土混・黄白色岩片混)
- ⑩ 暗黄褐色土 (黄白色岩片多量混)
- ⑪ 淡黄褐色土
- ⑫ 黄灰褐色土 (灰褐色土混・黄白色岩片混)
- ⑬ 淡灰褐色土 (明赤色土混・黄白色小岩片少量混)
- ⑭ 黒灰褐色土 (灰褐色土混・黄白色岩片混)
- ⑮ 灰褐色土 (黒色土多量混・黄白色小岩片混) } 溝 2
- ⑯ 淡灰褐色土 (黒色土少量混・黄白色小岩片混)
- ⑰ 淡灰褐色土
- ⑱ 灰褐色土 (黒色土・炭化物少量混・黄白色岩片混)
- ⑲ 黒灰褐色土 (黄白色小岩片混)
- ⑳ 灰褐色土 (炭化物少量混)
- ㉑ 灰褐色土 (黄白色岩片混)
- ㉒ 暗灰褐色土
- ㉓ 淡灰褐色土
- ㉔ 黄白色岩ブロック
- ㉕ 黄灰褐色土 (赤みがかかる)
- ㉖ 淡灰褐色土
- ㉗ 灰褐色土 (白色岩片混)
- ㉘ 黒色土 (炭化物混・暗灰褐色土混)
- ㉙ 黒色土 (炭化物混・暗灰褐色土混)
- ㉚ 暗灰褐色土
- ㉛ 黒色土 (炭化物多量混・暗灰褐色土混)
- ㉜ 黒灰褐色土 (黄白色岩片少量混)
- ㉝ 黒色土 (炭化物少量混・白色小岩片混)
- ㉞ 黒色土 (灰褐色土混)
- ㉟ 黒灰褐色土 (黄白色岩片多量混)
- ㊱ 灰褐色土 (黄白色岩片多量混)
- ㊲ 淡灰褐色土
- ㊳ 灰褐色土 (黒色土・炭化物少量混・黄白色岩片混)
- ㊴ 暗灰褐色土 (赤灰褐色土混)
- ㊵ 赤灰褐色土
- ㊶ 暗灰褐色土 (赤灰褐色土混)
- ㊷ 赤灰褐色土 (暗灰褐色土混)
- ㊸ 赤灰褐色土
- ㊹ 暗灰褐色土 (マンガン多量混)
- ㊺ 灰褐色土 (黄白色岩片混)
- ㊻ 淡灰褐色土 (明赤色土混・黄白色岩片混)
- ㊼ 明赤褐色土 (黄白色岩片混)
- ㊽ 暗灰褐色土 (マンガン多量混・㊹層よりやや淡)
- ㊾ 明赤褐色土
- ㊿ 明赤褐色土

挿図325 陰田宮の谷遺跡 4区テラス状遺構 2土層図

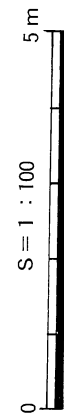
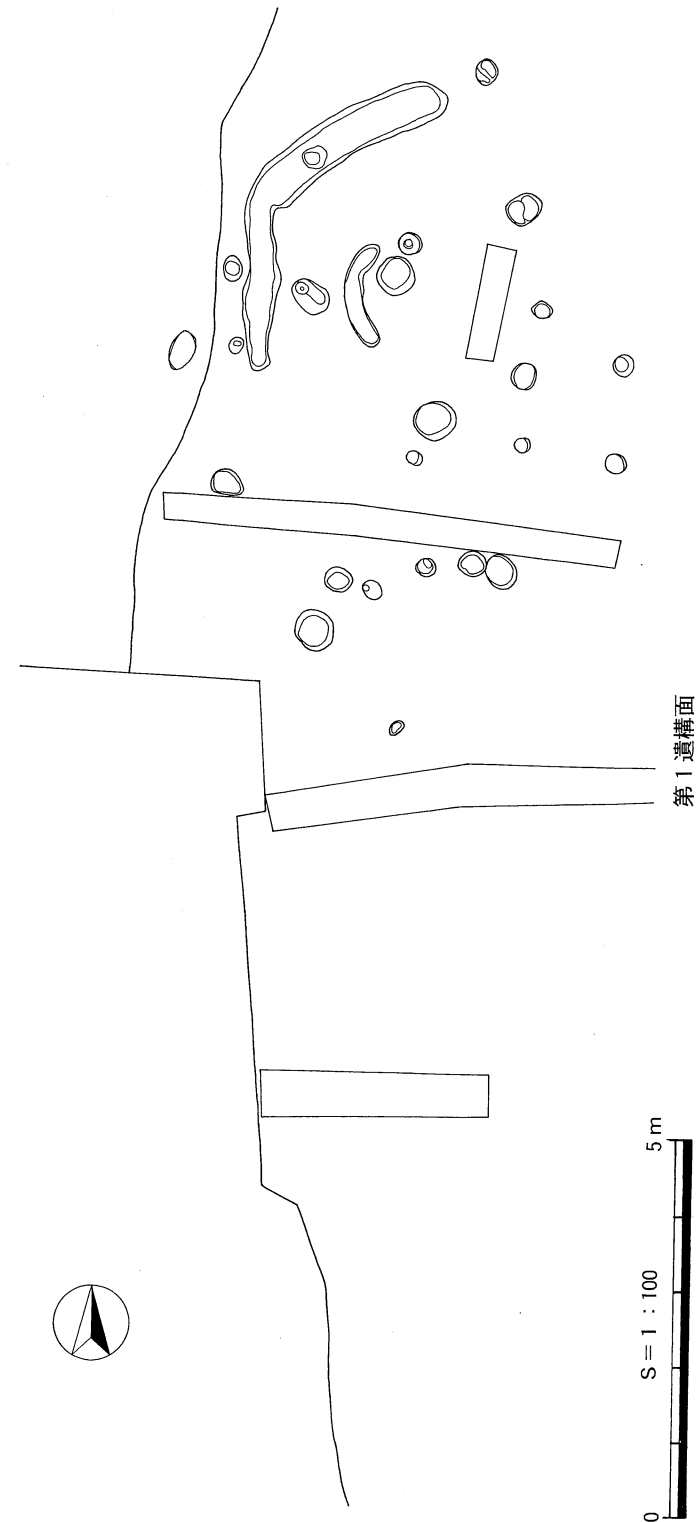
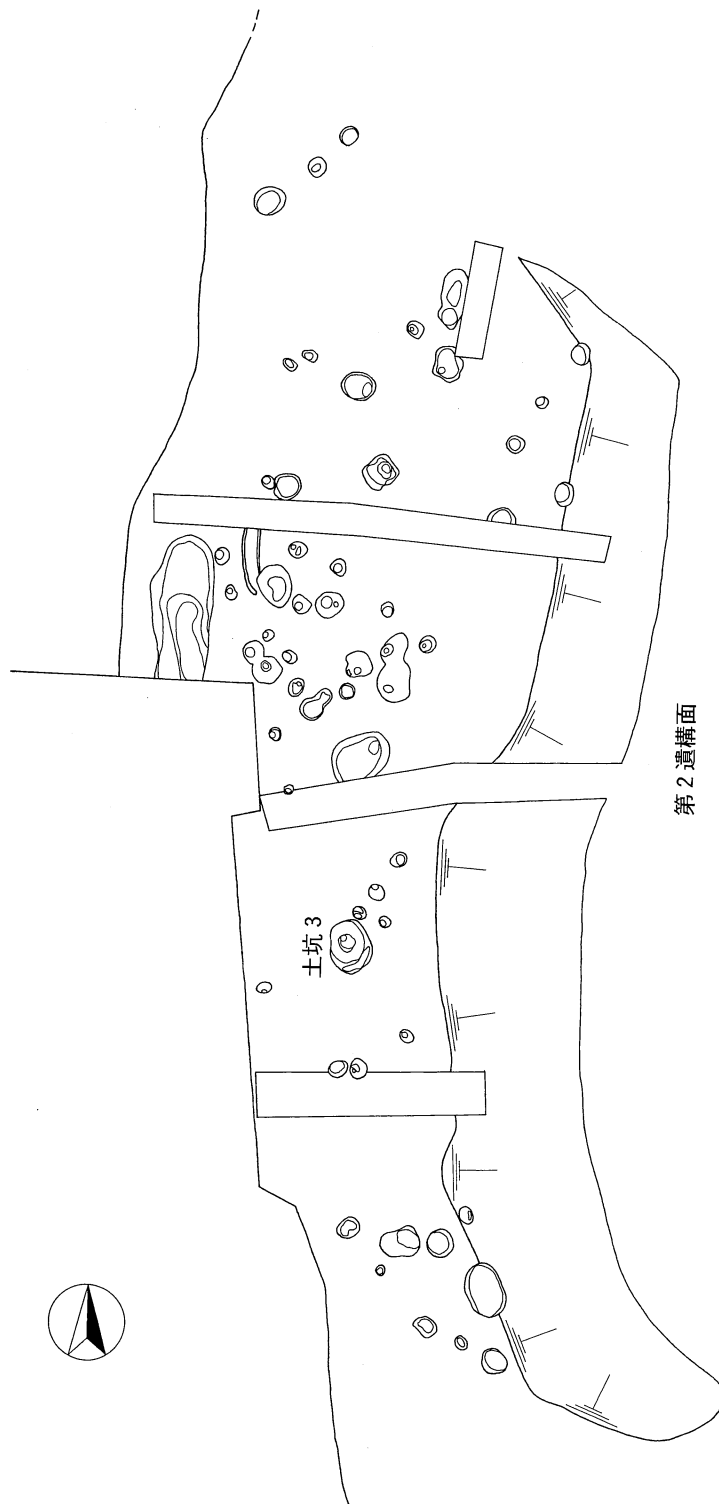
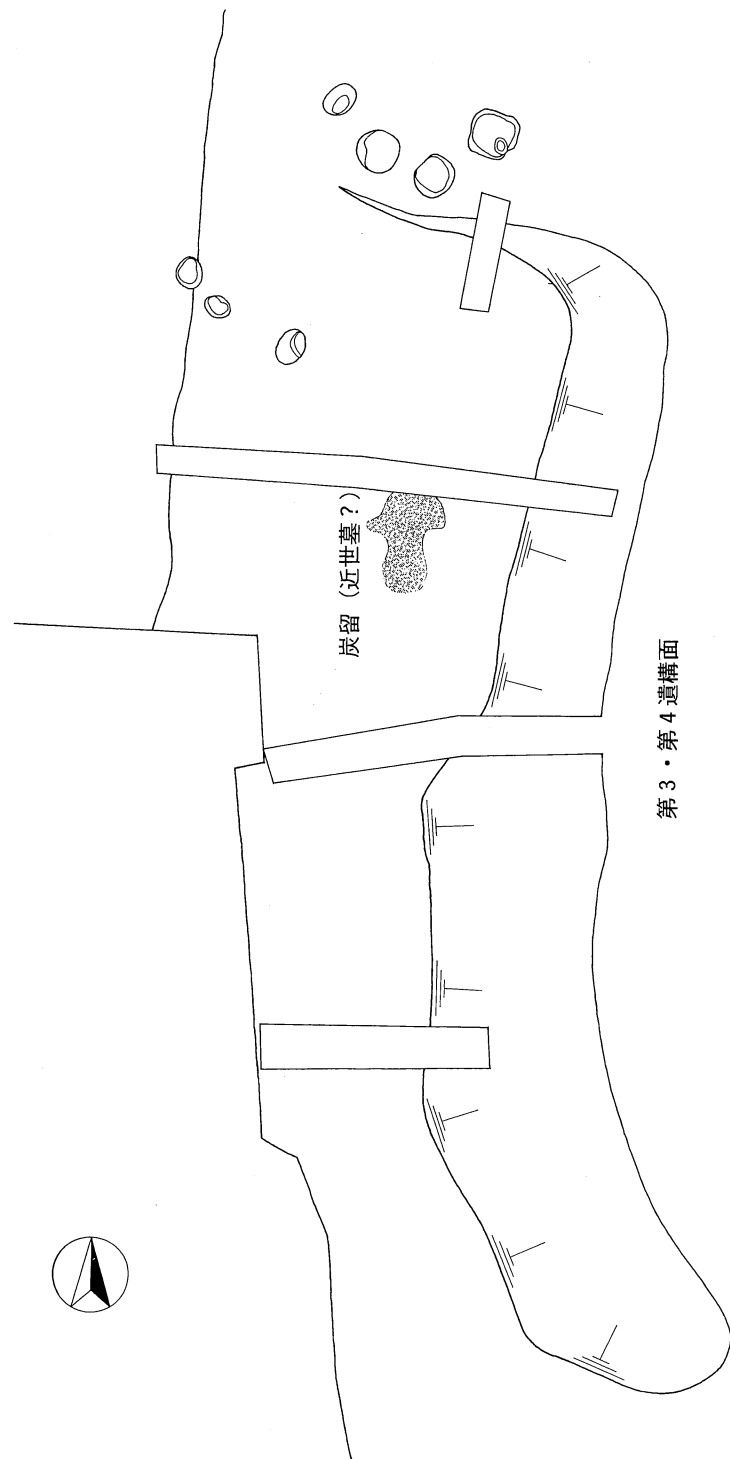
- ① 表土
- ② 灰褐色土 (木根が多く入り込む)
- ③ 明黄色土 (灰褐色土混)
- ④ 暗灰褐色土 (炭化物少量混)
- ⑤ 黒色土 (暗灰褐色土混)
- ⑥ 茶褐色土 (よくしまる)
- ⑦ 暗灰褐色土 (㉕層よりやや暗)
- ⑧ 淡灰褐色土 (明黄色土混・炭化物少量混)
- ⑨ 暗灰褐色土 (㉕層よりやや暗)
- ⑩ 黒色土 (炭化物混・暗灰褐色土混)
- ⑪ 赤褐色土 (マンガン混)
- ⑫ 暗赤褐色土
- ⑬ 赤褐色土

挿図326 陰田宮の谷遺跡 4区テラス状遺構 3土層図

- ① 茶褐色土 (表土)
- ② 攪乱 (陶磁器類が投棄してある)
- ③ 茶褐色土 (灰褐色土多量混)
- ④ 黄灰色粘土
- ⑤ 黒褐色土
- ⑥ 黒灰色粘土 (灰色土混・マンガン混)
- ⑦ 黄茶褐色土
- ⑧ 明黄色土 (岩質で硬い)
- ⑨ 明黄灰色土
- ⑩ 黒灰色粘土 (黄灰色粘土・灰色粘土多量混)
- ⑪ 灰色粘土
- ⑫ 灰色粘土 (マンガン混)
- ⑬ 明黄灰色土
- ⑭ 黒色粘土
- ⑮ 黒灰色粘土 (明黄色土混)
- ⑯ 淡黒灰色粘土 (灰色粘土混・マンガン混)
- ⑰ 淡黒灰色粘土 (マンガン少量混)
- ⑱ 灰色粘土 (マンガン少量混)
- ⑲ 黒色粘土
- ⑳ 淡灰色粘土 (マンガン混)
- ㉑ 黒色粘土 (炭化物少量混・マンガン混)
- ㉒ 黒色粘土
- ㉓ 灰色粘土 (炭化物混・マンガン混)



挿図327 陰田宮の谷遺跡 4区自然流路土層断面図



挿図328 陰田宮の谷遺跡 4区テラス状遺構3変遷図

テラス状遺構 3 (挿図324、326、328、331)

テラス状遺構 2 の東側に位置する。テラス状遺構 3 では、4 段階の変遷がたどれる (挿図326、328)。傾斜地を削平し平坦面を造成しテラス状遺構を形成し、古い遺構面に盛土をすることで、テラス状遺構を造り変える点でテラス状遺構 2 と工法的に共通している。

第 1 遺構面、第 2 遺構面では、陰田10期に相当する須恵器が出土しており (挿図331-19~28)、短期間での作り替えが推察される。また、それぞれの遺構面の時期は、テラス状遺構 2 と対応するものと考えられる。いずれも掘立柱建物が一棟以上あったと思われる。また、第 2 遺構面では、土坑 3 を検出した (挿図324)。テラス状遺構 2 の土坑 1 と同様、断面は浅い皿状を呈し、壁面は焼成を受け、炭化物が溜まっていた。土坑 1 同様、屋外地床炉と思われる。

奈良時代以降は、しばらくの間、土地利用が行われていなかったようである。第 3 遺構面、第 4 遺構面からは陶磁器が出土しており、再び近世に土地利用が行われたと考えられる。第 3、4 遺構面は、土層断面では前後関係が確認できたが、平面的に把握することができなかった (挿図326、328)。ここでは、炭化物の広がりが認められ、その上面で鉄鎌が出土した。また、周辺部で寛永通宝が 3 枚出土しており、近世墓ではないかと考えられる。明治25年に作成された地図では、本調査地が墓地であったことが記されており、調査結果と矛盾しない。また、小規模な掘立柱建物があったのではないかとと思われる。

テラス状遺構 4 (挿図331)

テラス状遺構 3 の東側に位置する。テラス状遺構 2・3 と異なり、複数の遺構面は確認できなかった。緩やかに傾斜する平坦面に不規則に分布するピットや、溝を検出したにとどまる。須恵器、土師器が出土しており (挿図331-29~34)、8 世紀後半に比定される遺構である。

テラス状遺構 5 (挿図329、332)

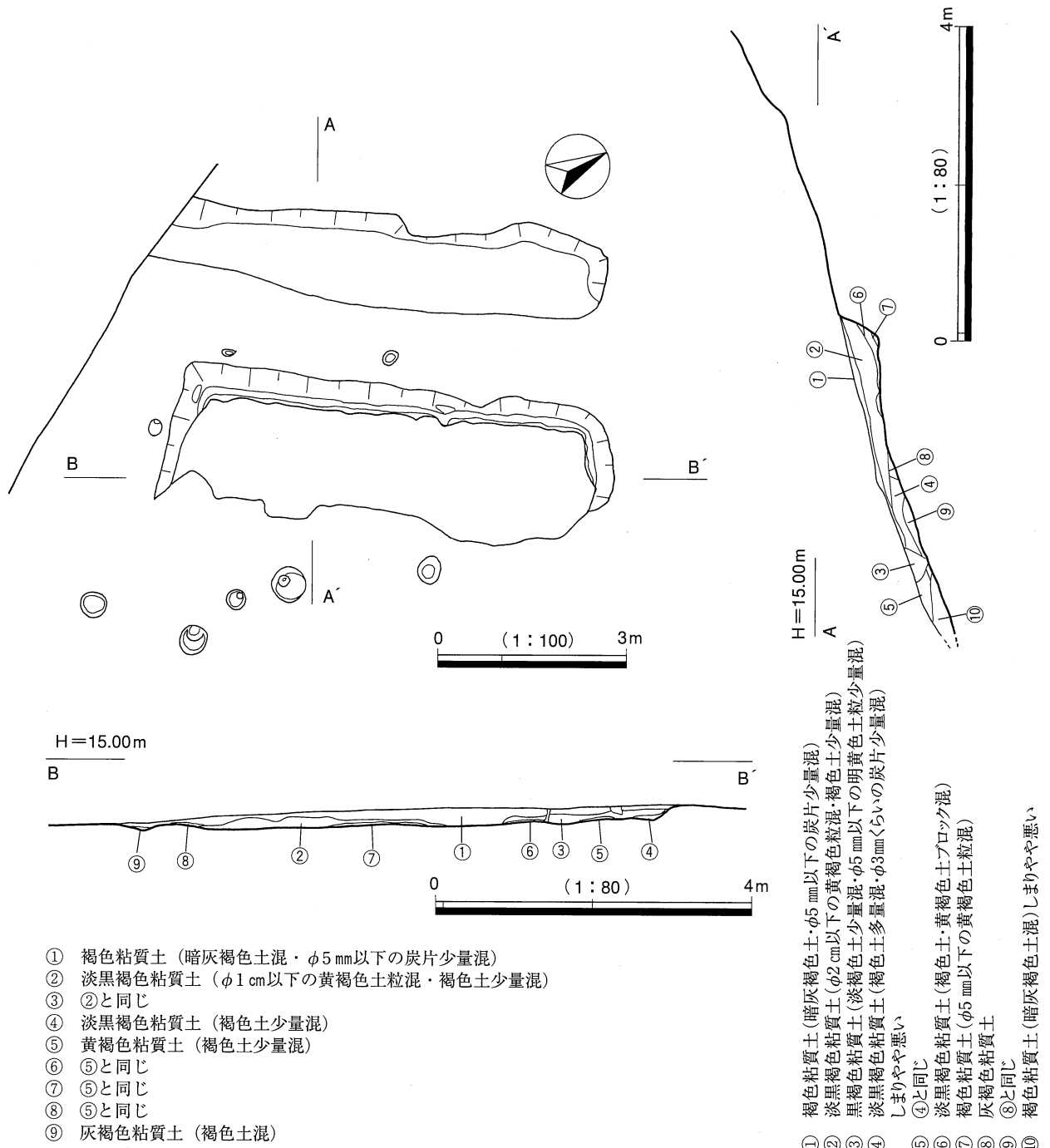
テラス状遺構 1 とした緩斜面に位置する遺構である。緩斜面を段状に加工した遺構で、壁際に溝があるが、ピットは認められない。遺物は挿図332-35~37が出土した。

テラス状遺構 6 (挿図329)

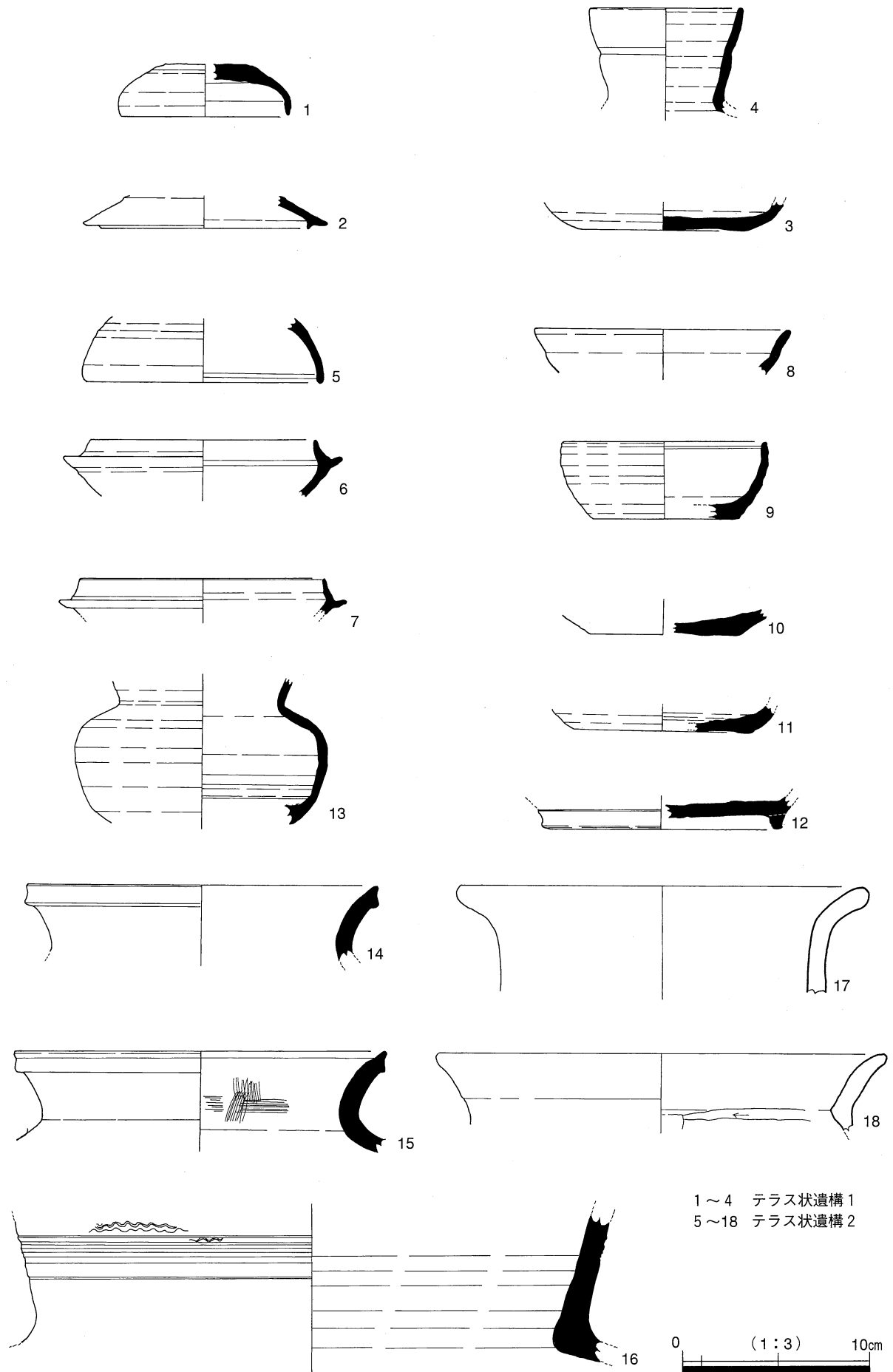
テラス状遺構 1 とした緩斜面に位置する遺構で、テラス状遺構 5 の西側にある。斜面地を段状に加工した平坦面で、ピット、溝等は認められない。また、遺物も出土していない。

道路状遺構

調査区の北側に位置する遺構で、斜面部を段状に加工し、平坦面をつくる。一部、側溝を検出した。遺物は出土していない。

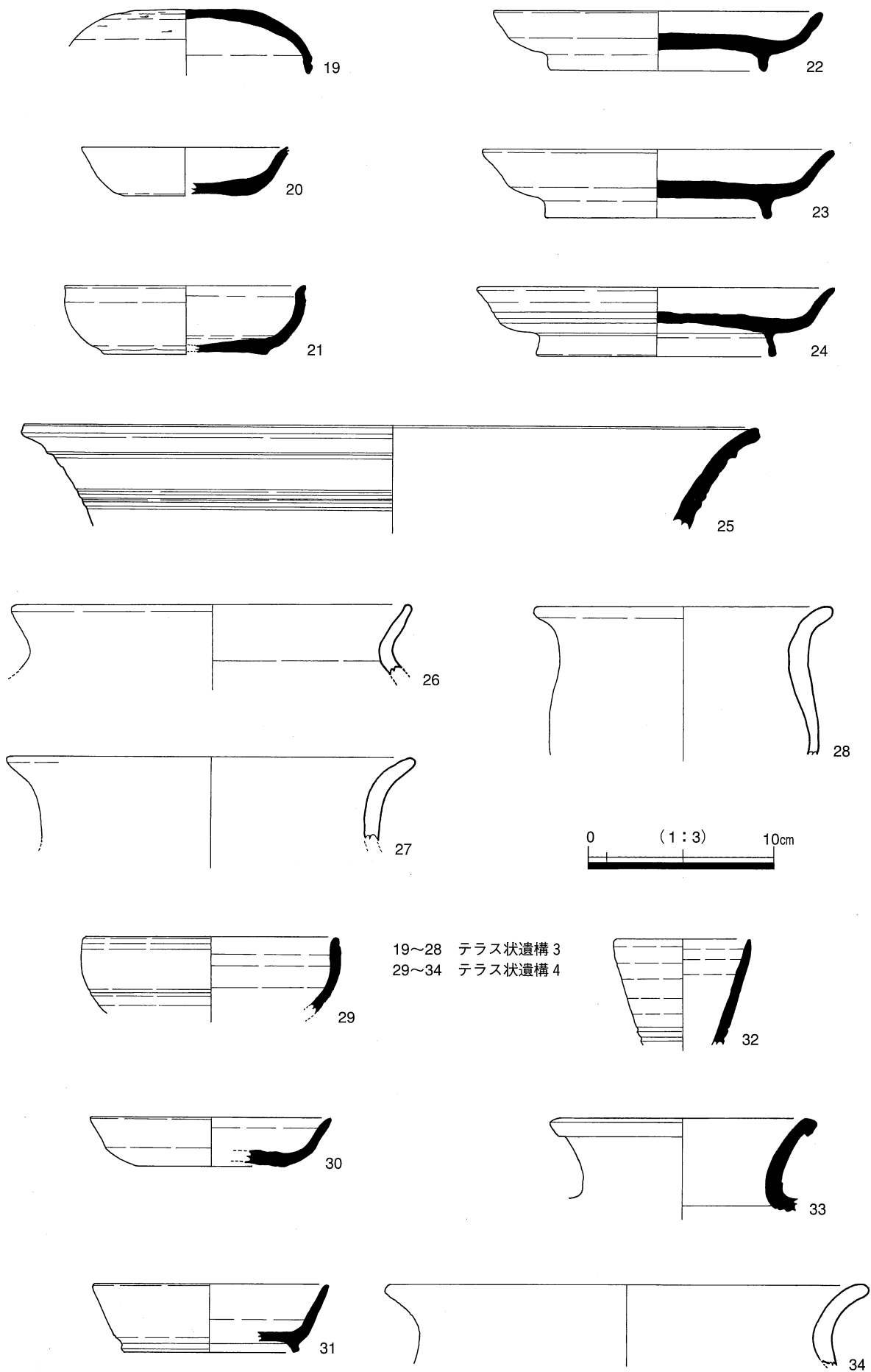


挿図329 陰田宮の谷遺跡 4区テラス状遺構5、6遺構図

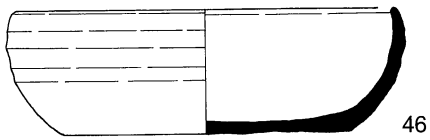
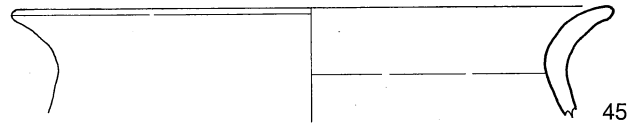
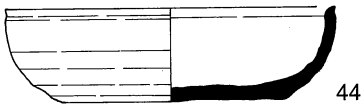
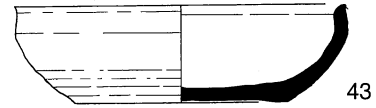
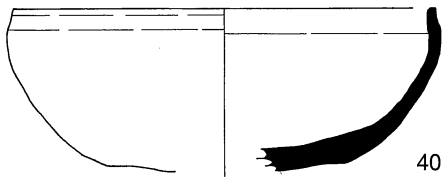
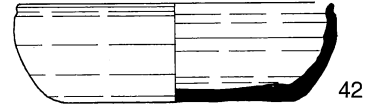
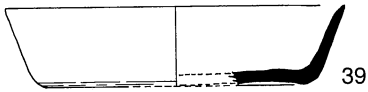
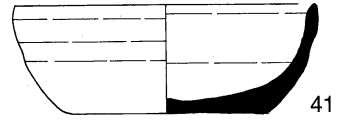
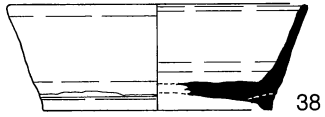
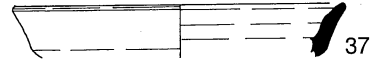
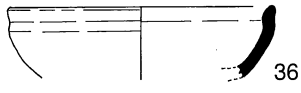


1~4 テラス状遺構 1
5~18 テラス状遺構 2

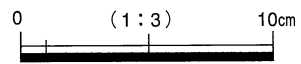
挿図330 陰田宮の谷遺跡 4区テラス状遺構1、2出土遺物



挿図331 陰田宮の谷遺跡 4区テラス状遺構 3・4 出土遺物



35~37 テラス状遺構 5

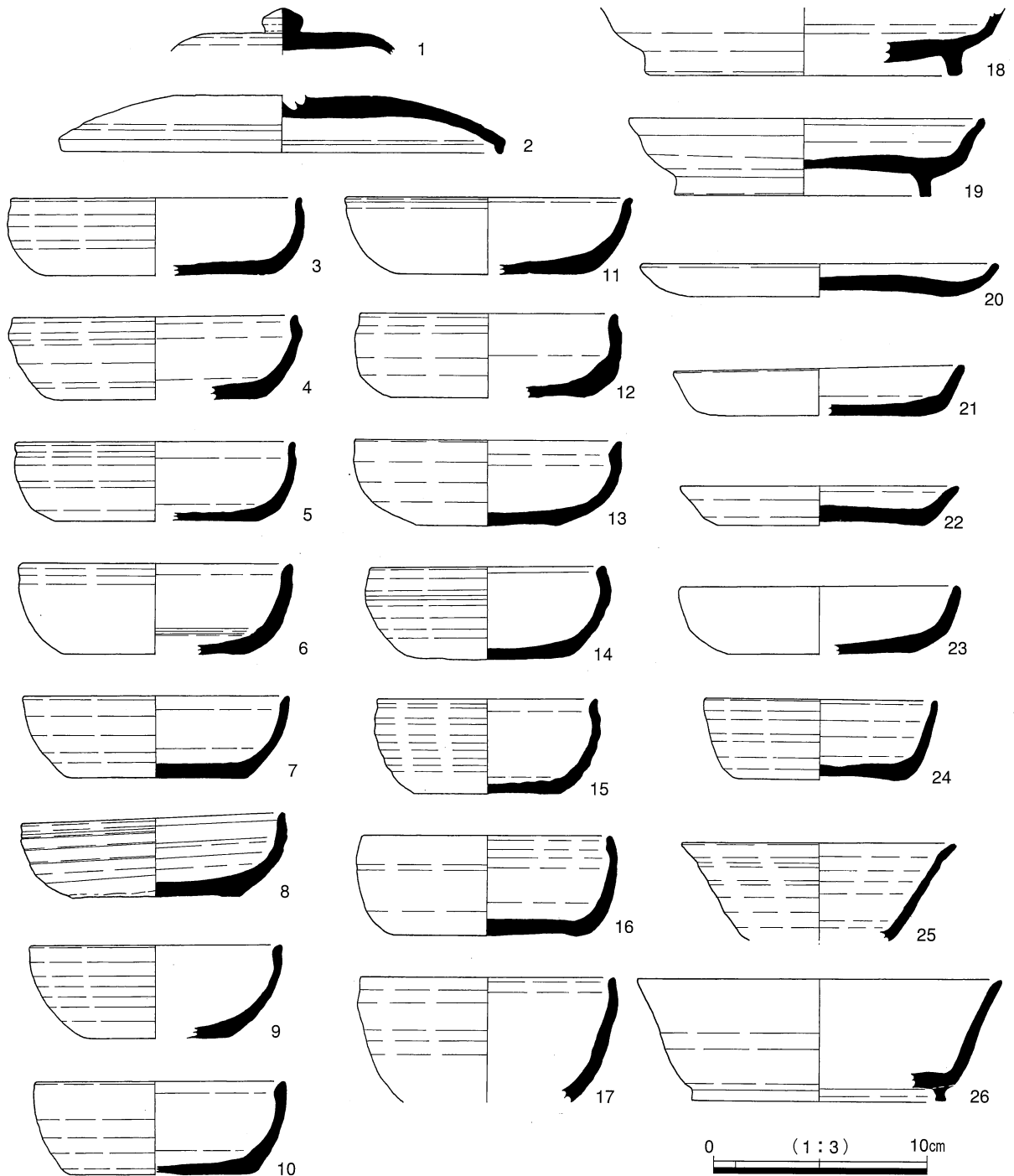


挿図332 陰田宮の谷遺跡 4区出土遺物

(4) 遺構外出土の遺物 (挿図333)

H 9、I 9、10で自然流路を検出した。この最下層には多量の土器が包含されていた。わずかに7世紀代の須恵器が含まれているが、主体を占めるのは陰田10期に相当する奈良時代の須恵器である。中でも、坏が主体を占める。これらの遺物は、テラス状遺構2、3、4から流出してきたものと思われる。

また、図化できなかつたが、製塩土器が少量出土している。当調査区内が、8世紀後半の遺構を主体とするテラス状遺構でしめられていることと考え合わせると、当調査区が官的な作業場であった可能性も考慮する必要があるだろう。



挿図333 陰田宮の谷遺跡 4区自然流路最下層出土遺物

8 陰田第6遺跡

(1) 調査の経過と方法

調査は、平成8年5月に着手し、平成9年2月に現場作業を終了した。平成7年度に一部調査が行われていた範囲を除き、3500m²の発掘調査を行った。調査地は、通称・船上山の西側斜面部と、マノカンヤマと船上山の間形成された南北にのびる谷部の船上山側に位置する。調査地の北側の山裾部は、果樹園造成に伴い、遺構面が削平されている可能性が予想された。発掘調査は、船上山の西側斜面部の伐木の処理と調査地内の排土処理の関係で、調査地をA～Cの3区に分けて行った。

A区は過去の調査地との連続性から、弥生時代後期から奈良時代の集落跡の存在を予測していた。数カ所にサブトレンチを設定したところ、古墳時代後期から奈良時代にかけての土器類が出土し、土坑を検出した。土層の堆積状況を観察した結果、表土直下は、近年の堆積であることを確認し、重機による掘り下げを行った。

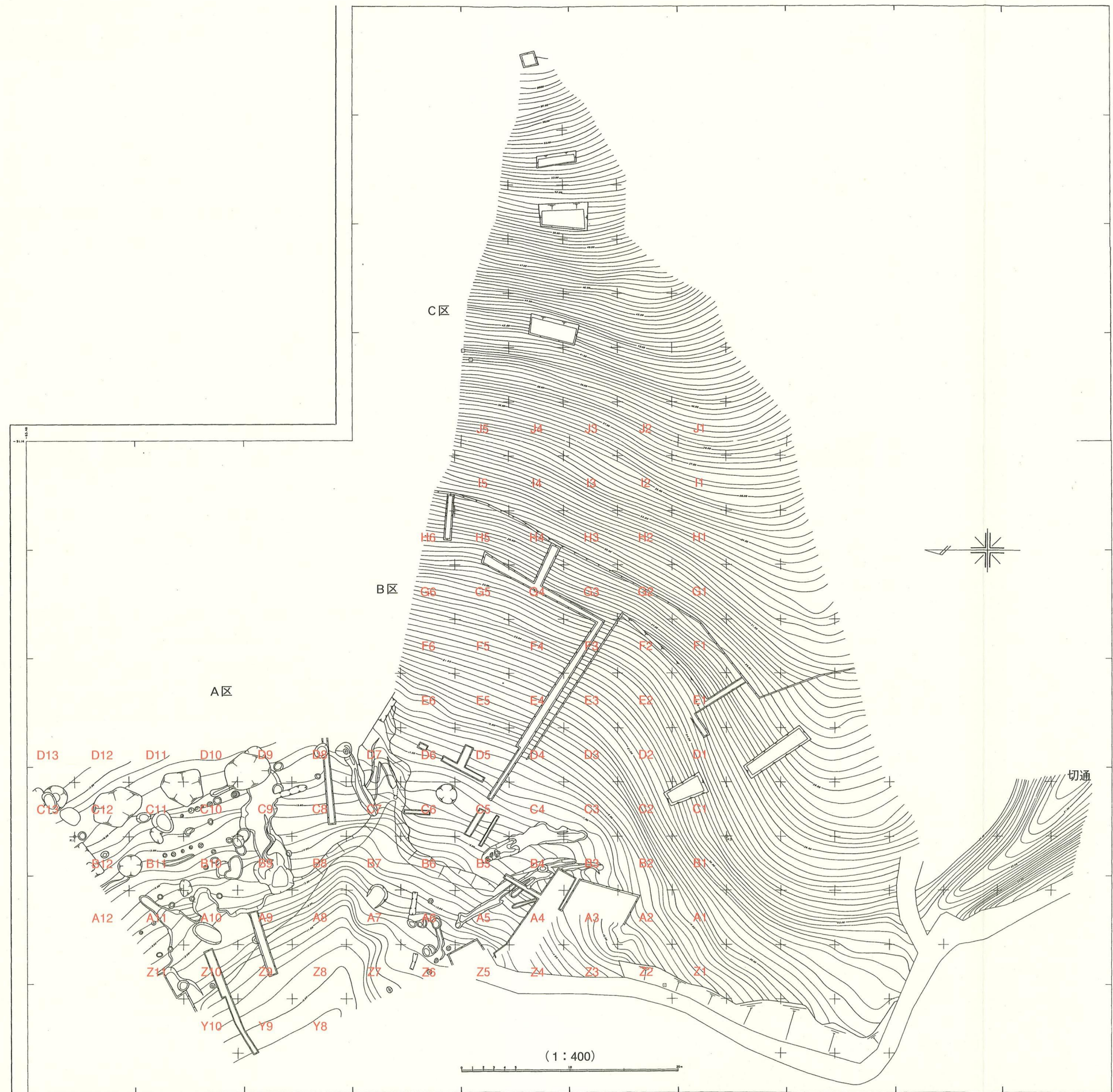
標高の高い東側は、果樹園造成時の削平により地山での遺構検出となったが、古墳時代前期の土坑をはじめ奈良時代、近世に至る土坑、溝状遺構を確認した。一方、谷に向かう西側は、大きく分けて4期の包含層が認められた(挿図335-1)。最下層に古墳時代前期、古墳時代後期、奈良時代、近世の堆積である。谷地形に堆積した包含層であり、遺構の検出は困難であったが、古墳時代後期包含層の上面で奈良時代の遺構面が確認でき、石敷道路状遺構を検出した。

伐木の処理が終了した後、A区に並行してB・C区の調査を行った。傾斜のきつい斜面地のため、遺構の存在は極めて低いと考えられた。重機による掘削が可能と思われたB区は、全面の表土を剥ぐことを想定し、斜面に対して縦向きのトレンチを設定した。また、C区については、傾斜変換の認められる箇所に横方向のトレンチを設定した。C区では、各トレンチ共に、表土下0.3m程で岩盤が現れ、遺物の出土もなかったため、遺構は形成されていないと判断した。また、頂上部には、かつて神社があったとのことであった。調査区に含まれている頂上部を掘り下げ、検出を試みたが、その有無を確認することはできなかった。

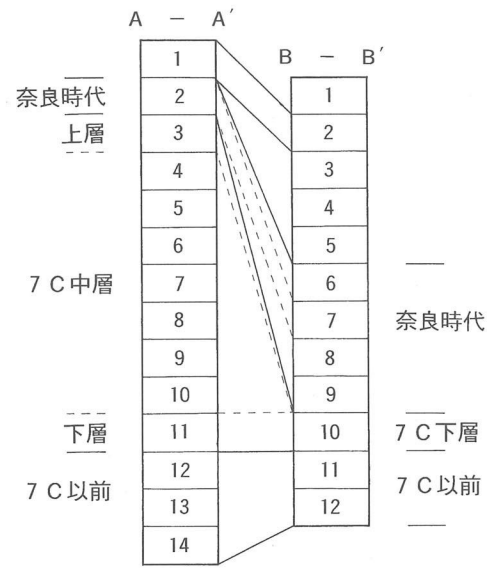
B区斜面部、D2、E2グリッド周辺では、表土中および表土下から須恵器の甕(挿図336-1・2)、甕底部(挿図336-3)が出土した。このことから、横穴墓が存在する可能性を想定し、B区斜面部全面の表土を剥いだ後、斜面に対し横方向にもトレンチを設定したが横穴墓を確認するには至らなかった。これらの遺物は、調査区外の尾根部からの転落が考えられる。

(2) 調査の概要

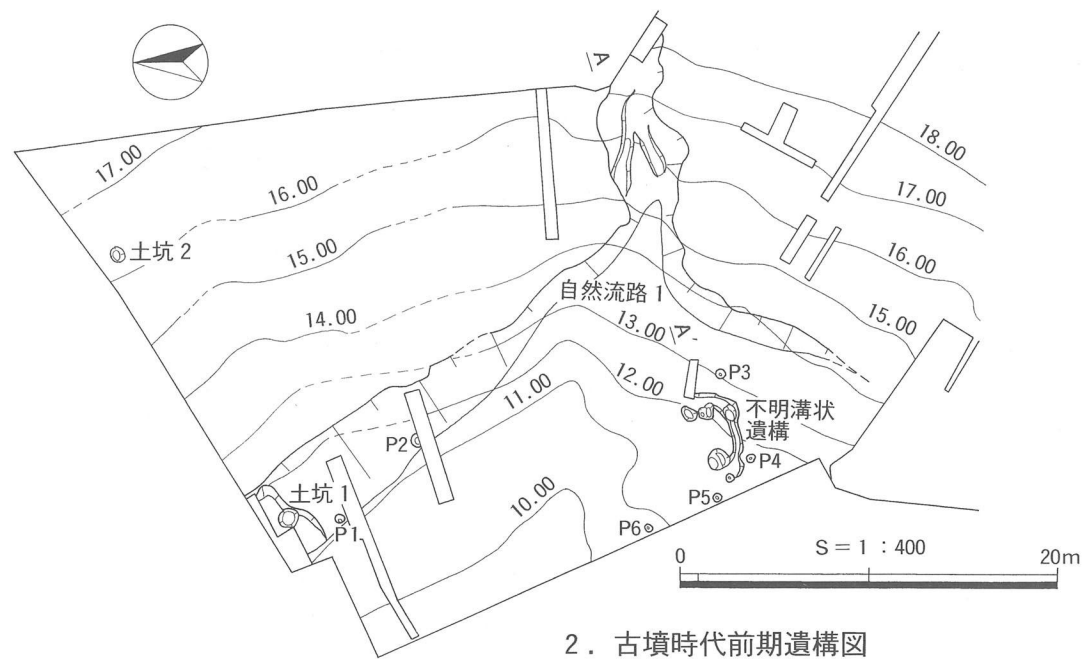
本調査区では、古墳時代前期の遺構として、土坑2基、不明溝状遺構1基、古墳時代後



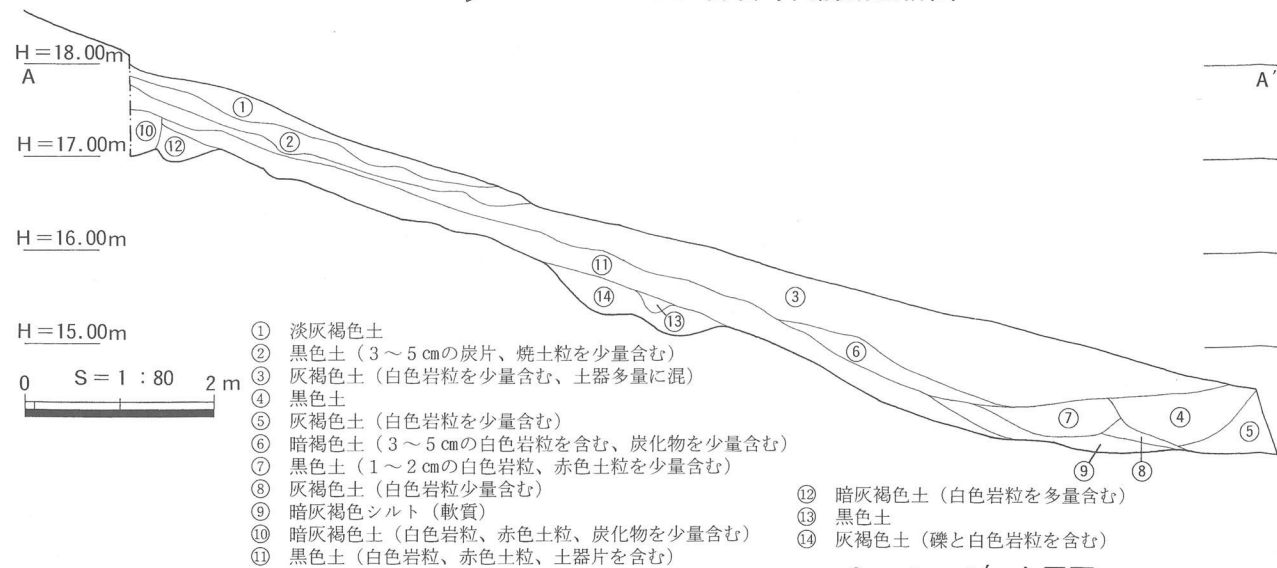
挿図334 陰田第6遺跡 遺構分布図



1. A-A'、B-B' 土層断面对应图

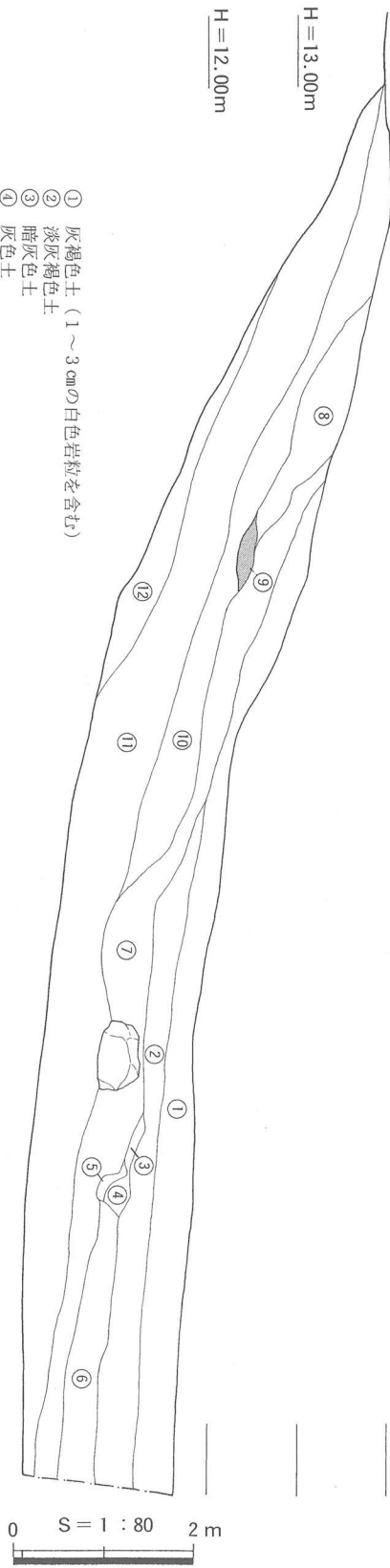


2. 古墳時代前期遺構図

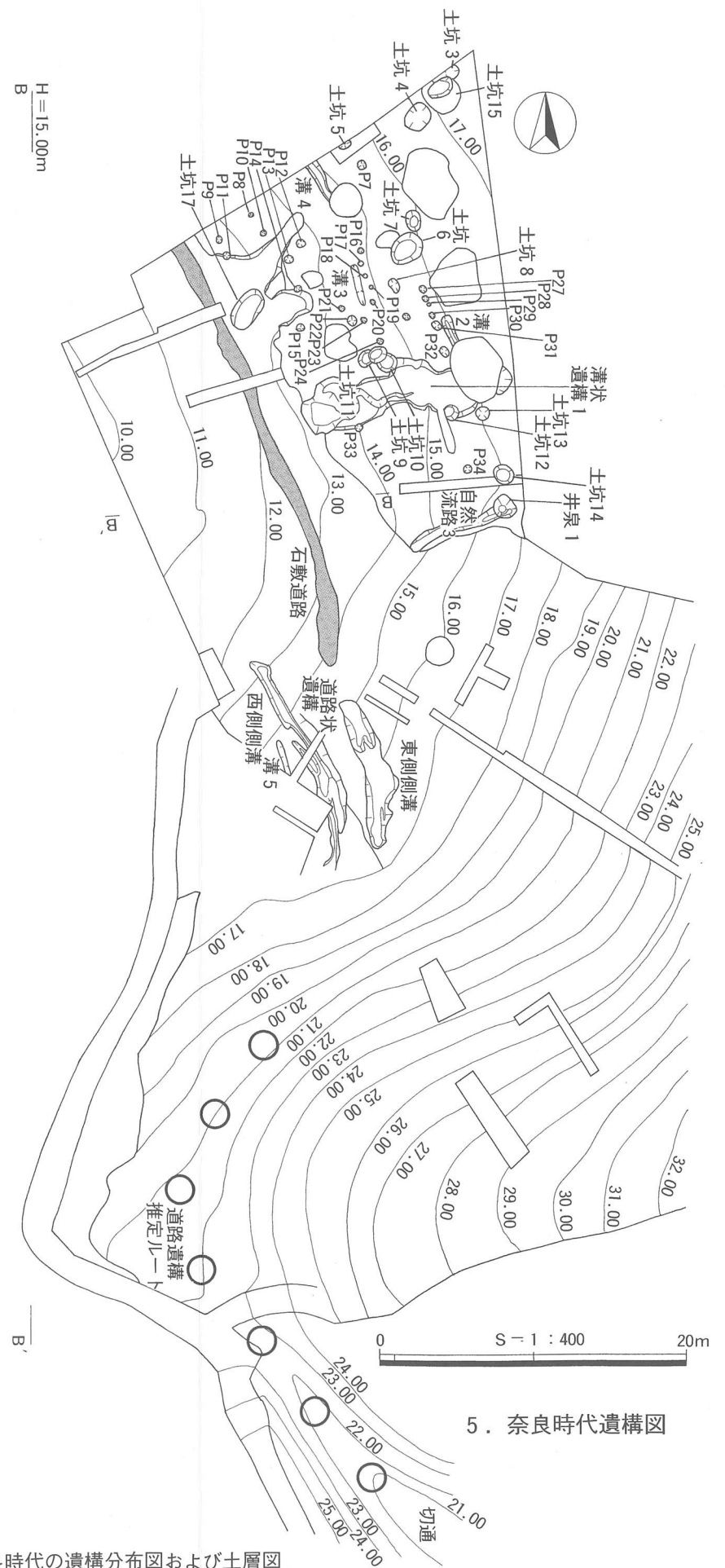


3. A-A' 土層図

- ① 灰褐色土 (1~3cmの白色岩粒を含む)
- ② 淡灰褐色土
- ③ 暗灰色土
- ④ 灰色土
- ⑤ 黒色土
- ⑥ 黄褐色土 (灰色土ヲロツク混)
- ⑦ 灰褐色土
- ⑧ 石敷道路
- ⑨ 灰褐色土 (白色岩粒を少量、土器を多量に含む)
- ⑩ 黒色土 (白色岩粒を多量に含む)
- ⑪ 灰褐色土 (礫と白色岩粒を含む)
- ⑫ 暗灰褐色土 (白色岩粒を多量含む)
- ⑬ 黒色土
- ⑭ 灰褐色土 (礫と白色岩粒を含む)



4. B-B' 土層図



5. 奈良時代遺構図

挿図335 陰田第6遺跡 古墳時代前期、奈良時代の遺構分布図および土層図

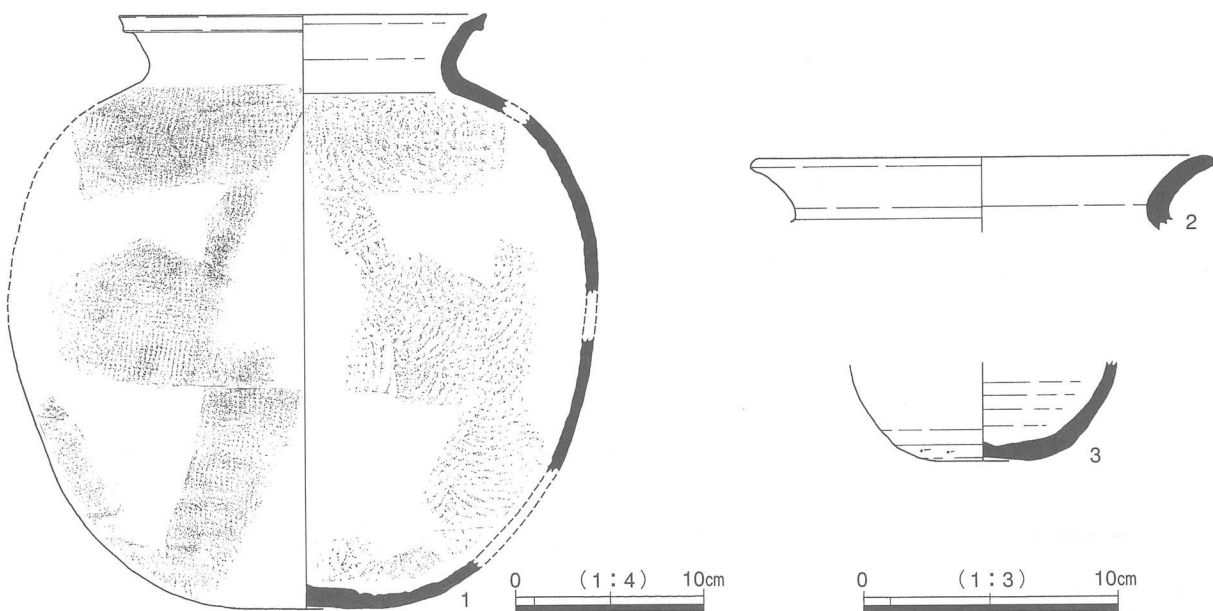
期～奈良時代の遺構として、土坑12基、溝状遺構5基、道路遺構2条、また、自然流路3条を検出した。

自然流路1（挿図335-2）は、調査区を東西に分断するように流れ、北西方向に広がっている。自然流路1の最下層第11～14層は、古墳時代前期の土器を主体に、少量の弥生時代後期の土器が混在する状況であった。第10層からは、7世紀前半を主体とする遺物が出土した。出土した遺物は、須恵器、土師器、支脚や竈等の土製品である。第10層の堆積により自然流路1はほぼ埋没しており、この第10層上面に、奈良時代の生活面が形成され、石敷道路が敷設されていた（挿図335-4）。

自然流路2（挿図335-5）は、調査区北側A10、A11グリッドに位置しており、北東から南西方向に向かっている。北東部では、さらに上方に向かってトンネル状に遺構が続いており、地下流路であったと思われる。埋土中から、7世紀前半～奈良時代にかけての須恵器片、土師器片に加え、陶磁器片が出土しており、近世に至るまで水の流れがあったものと推察される。また、南西端に位置する土坑26は、自然流路2と連続しており、基盤層を深く掘り込んでいる。しかし、人工的のものではなく、自然流路2の水の流れによって形成されたものと思われる。埋土は砂まじりの黒色粘土で、7世紀前半～奈良時代にかけての須恵器片、土師器片等が出土した。

自然流路3（挿図335-5）は、井泉1から南西方向に延びる。これらは、表土掘削中に検出した。自然流路3埋土中から、本遺構南側の包含層中から転落したと思われる須恵器片が数点出土した。井泉1は、現在でも僅かに湧水しており、調査区が果樹園として土地利用されていた当時にも、現状を保っていたと思われる。

調査区内における遺跡の変遷は、先述した自然流路1の変化に伴うものである。調査区



挿図336 陰田第6遺跡 D2、E2グリッド出土遺物

内の土地利用は、古墳時代前期に始まり、空白期間をおき、自然流路1埋没後、奈良時代には道路遺構等が造られる。奈良時代以降、遺跡埋没後は、道としてのルートだけが存続したものと思われる。調査区南側の調査区外には、切り通しが認められ、往来が最近まで続く。陰田地内では、この切り通し周辺を久幸峠、奥陰田地内から口陰田に抜けるこのルートを久幸越えと呼んでいた。

また、調査区からは、7世紀前葉の遺物が多く出土しているが、明らかにこの時期に比定できる遺構はない。また、7世紀後葉の須恵器が出土した遺構もあるが、これらが明らかに遺構の形成時期、埋没時期を示すとは思われない。調査区東側の調査区外に、テラス状遺構と思われる平坦な地形があり、7世紀代の遺物については、本来、そこに伴う可能性もあろう。

(3) 古墳時代前期の遺構と遺物

調査区内は自然流路1により谷地形を呈している。当期の遺構として、調査区の北東部で、土坑1、2、ピット1、2、南西部で不明溝状遺構1とそれに伴うと思われるピット3、4、5、6を検出した(挿図335-2)。本調査区内で検出したピットからは、いずれも遺物は出土していないが、検出面から古墳時代前期のものと判断した。

このほかに、自然流路1最下層から、弥生時代後期から古墳時代前期にかけての土器が出土している。挿図339-1~4は弥生時代後期の土器。1~3は口縁部に擬凹線文が施される甕、4は口縁部が無文化している。挿図339-5~7は古墳時代前期の土器で、5~7は甕、8、9は壺、10、11は器台、また、挿図340-1~7は古墳時代前期の高坏である。

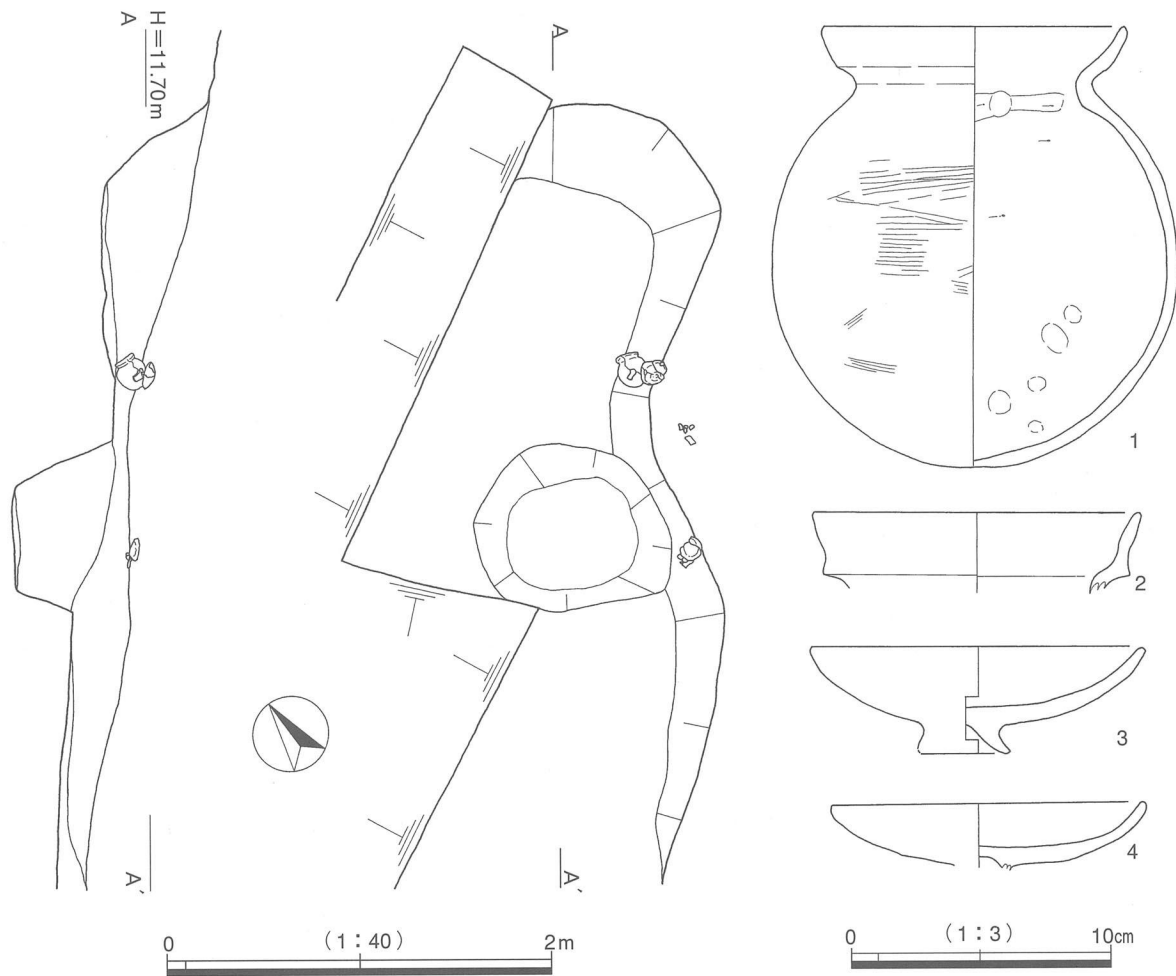
土坑1 (挿図335、337)

Z10、Z11グリッドに位置する。調査区の北西端に位置することと、奈良時代には本遺構を攪乱する形で石敷道路とそれに伴う集石が敷設されていることから、詳細は不明である。平面形は不定形を呈すると思われ、長軸約3.6m以上、短軸約2m以上、深さ約0.5m以上を計る。遺構の南東部、底面に長軸約1m、短軸約0.9m、深さ約0.6mのピットを伴う。

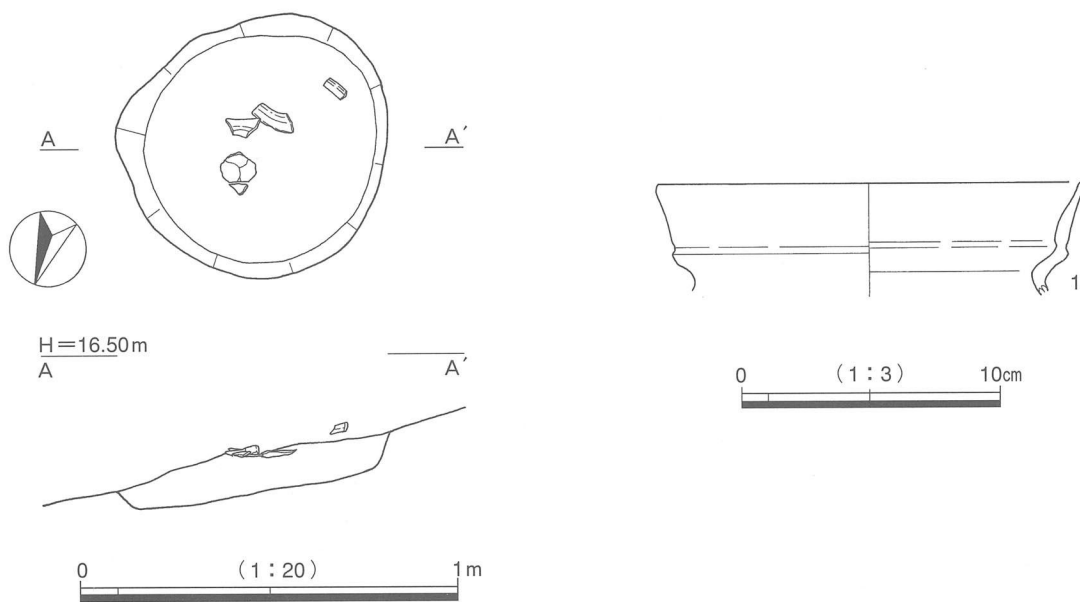
埋土は一層で、黒色土が堆積していた。埋土中には、土師器片が多量に含まれており、南西壁面では、ほぼ完形の甕(挿図337-1)、低脚坏2点(挿図337-3・4)が出土した。低脚坏(挿図337-3)は、甕(挿図337-1)に重なった状態で出土した。この他に、埋土中には挿図337-2などがある。

土坑2 (挿図335、338)

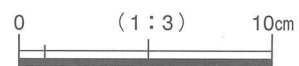
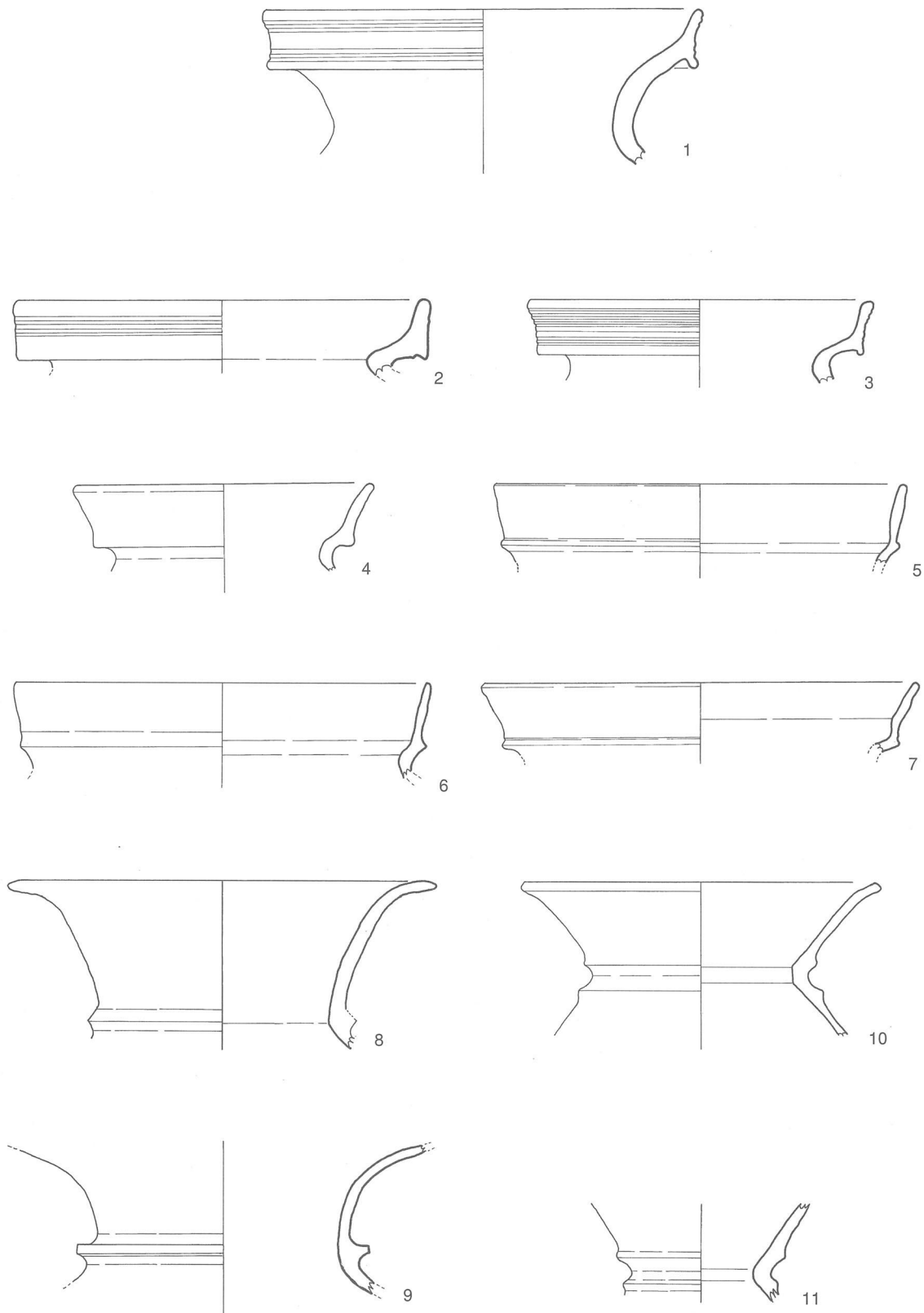
B12、C12グリッドに位置する。平面形は直径約0.7mを計る円形、深さ約0.1mで、断面はU字形を呈する。埋土は1層で、暗灰褐色土が堆積していた。遺構検出面、埋土中で、甕の口縁部(挿図338-1)が出土した。



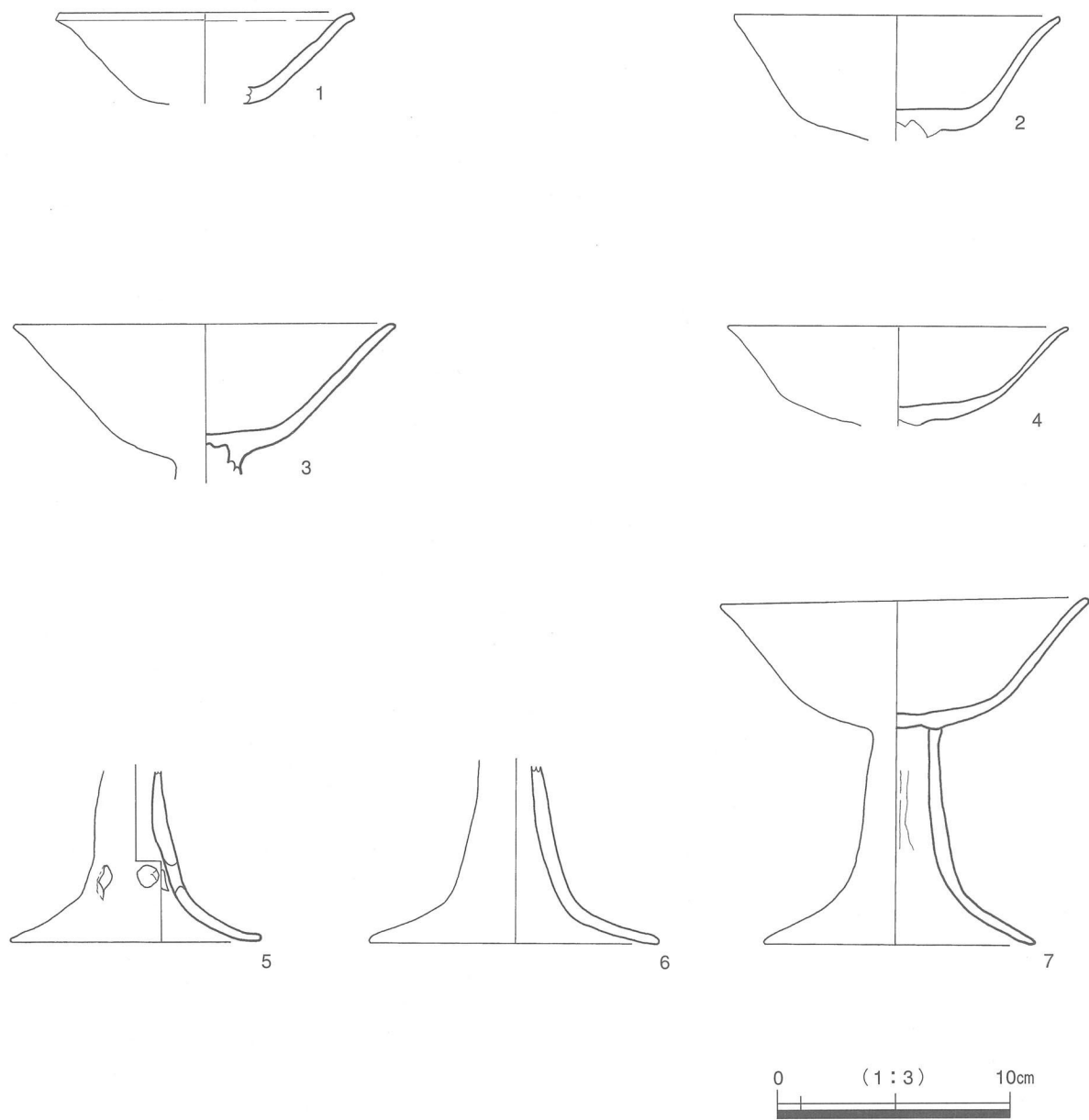
挿図337 陰田第6遺跡 土坑1および出土遺物



挿図338 陰田第6遺跡 土坑2および出土遺物



挿図339 陰田第6遺跡 自然流路1最下層出土遺物(1)



挿図340 陰田第6遺跡 自然流路1最下層出土遺物(2)

不明溝状遺構 1 (挿図335-2)

A 6、Z 6 グリッドで、半円形に巡る幅約0.50m、深さ約0.3mの溝状の遺構を検出した。溝上、溝の内側に接してピットが掘りこまれている。ピット 3～6 も、本遺構に付随する可能性もある。住居跡状を呈するが、自然流路 1 の際にある立地の悪さから住居跡とは考えにくい。また、遺物は出土しなかった。

(4) 古墳時代後期～奈良時代の遺構と遺物

古墳時代後期までに、自然流路 1 の堆積は急速に進む。本調査区内では、古墳時代後期の遺構は検出できなかったが、自然流路 1 を埋める 7 世紀代の堆積 (挿図335-1 の 7 世紀下層～上層) から多量の礫とともに土器・土製品が出土した。検出時には、人為的な土器溜まりの可能性を考慮しながら遺物を取り上げた。しかし、包含層中下方から陰田 6 期に相当する須恵器が多く出土する傾向は認められたが、続く陰田 7 期の須恵器と混在する状況であったため流入したものと考えた。また、極めて少量ではあるが、陰田 8 期の須恵器が出土しており、7 世紀末までには、自然流路 1 がほぼ埋没していたことが伺われる。

挿図341、342は B 7 グリッド、7 世紀下層 (挿図335-1) 出土の遺物である。須恵器は、1、2 が坏蓋、3～7 が坏身、8～11 が高坏、12、13 が横瓶である。坏蓋は肩部に段をもち、蓋、身いずれの天井部や底部の調整はヘラ削りとナデによるものである。9 は脚部に上下 2 段に三角形の透かしが千鳥状に施される。14、15 は土師器の甕である。当包含層の遺物は陰田 6 期 (7 世紀前葉) の遺物が主体を占めている。挿図342-1～4 は土製支脚である。3、4 は背面から正面に穿穴が施されている。5、6 は土錘である。これらの土製品は挿図341の遺物とまとまって出土した。

挿図343は C 6、C 7、D 7 グリッド、7 世紀中層 (挿図335-1) 出土の遺物である。1～13 は須恵器である。1～4 は坏蓋で、いずれも肩部に段をもつ。5～9 は坏身で、9 は口径が小さくなり、口縁のかえりが低い。10～12 は高坏である。13 は甕の胴部片で、焼成時に坏が張り付いている。14 は土師器の甕、15～17 は移動式竈である。当包含層の遺物は、陰田 6 期の遺物を主体として、陰田 7 期以降の遺物が混在する。

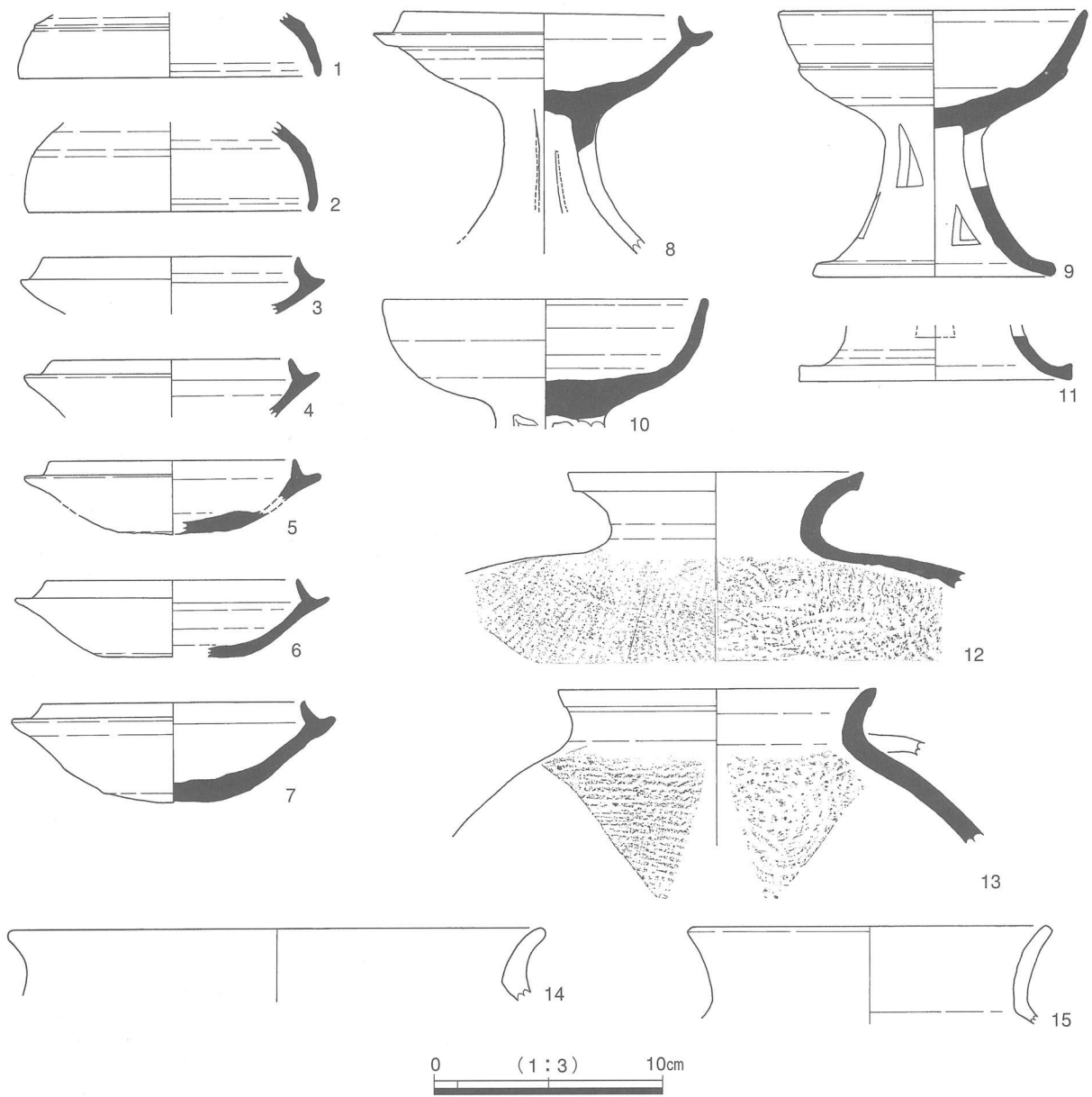
挿図344は C 6、C 7、D 7 グリッド、7 世紀上層 (挿図335-1) 出土の遺物である。1～11 は須恵器である。1～4 は坏蓋、5、6 は坏身、7～9 は高坏、10 は直行壺である。11 は甗であろうか。12、13 は土師器の甕、14 は移動式竈である。14 は、他の竈が造形的なものであるのに対して、厚みのある壺形を呈す。正面部に庇の剥離痕があることから竈と判断される。当包含層の遺物は、陰田 6、7 期の遺物が混在する状況である。

挿図345-1～11は C 6、C 7、D 7 グリッド、奈良時代の堆積 (挿図335-1) 出土の遺物である。1～10 は須恵器で、1～3 が坏蓋、4～6 が坏身である。7、8 は高台の付く皿、9 は底部に糸切り痕を残すものである。10 はやや軟質で淡灰色を呈す。甗であろうか。12 は移動式竈である。当包含層の遺物は陰田 6～10 期の遺物が混在する状況であった。

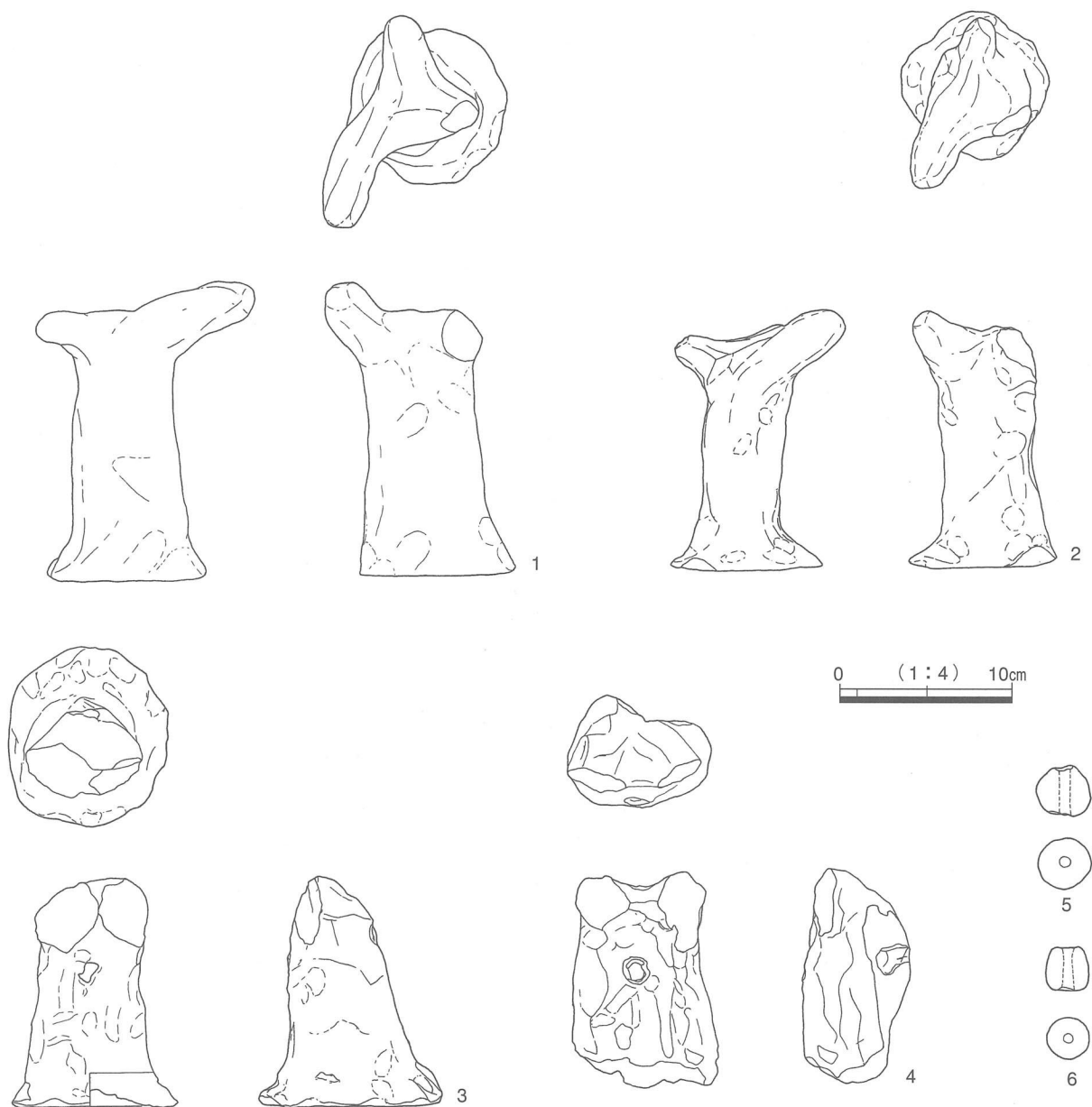
自然流路1埋没後、奈良時代には、第10層上面（挿図335-4）に、石敷状道路が敷設される。この他の遺構に、道路状遺構、溝状遺構、土坑、ピット等がある。以下、奈良時代の遺構について概要を述べる。

石敷道路（挿図335-4、5、挿図346、347）

B7グリッドにおいて、第7・8層掘り下げ中、自然流路1を埋める第10層上面で集石遺構があることが判明した（挿図335-4）。その広がりを確認した結果、調査区北端から南に向かって延びる幅約1～1.2mの石敷道路を約30mにわたって検出した。北端部からA9グリッドにかけては、標高約12.0m付近を並行しているが、それより南に向かって等高



挿図341 陰田第6遺跡 B7グリッド7世紀下層出土遺物（1）

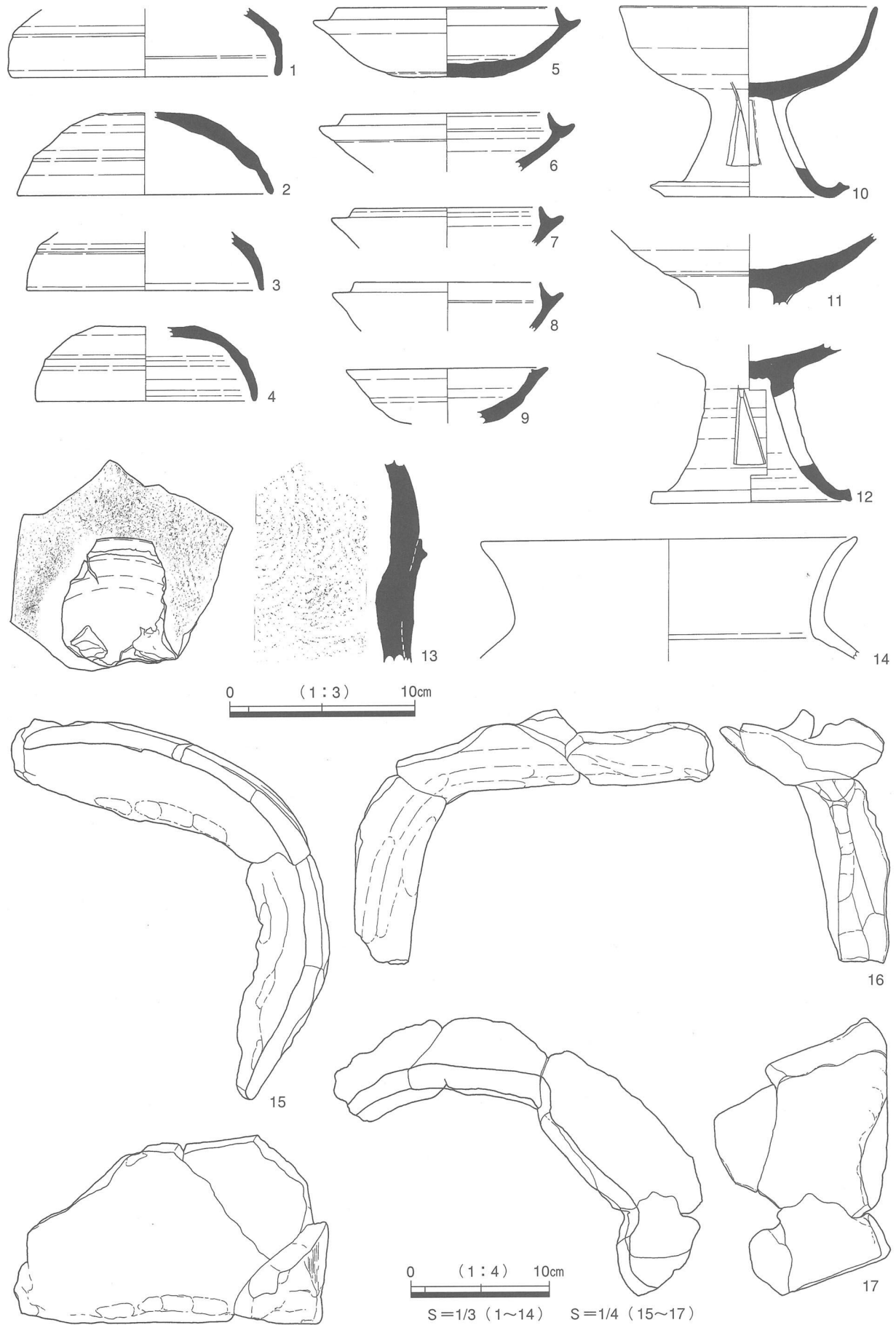


挿図342 陰田第6遺跡 B7グリッド7世紀下層出土遺物(2)

線を横切るように延び、ゆるやかな傾斜をもつ。石敷道路のさらに南側で検出した道路状遺構の東側側溝南端部の底面に幅約0.4mの石敷状の集石が約1.5m程残存していることから、本来、標高17.0m付近まで、本遺構が延びていたと思われる(挿図346)。

この石敷道路は、第10層(挿図335-4)の堆積により谷部が埋没した後に設置されている。しかし、谷部は完全に埋没はしておらず、石敷道路の西側で、ゆるやかに落ち込む地形が認められる。本遺構が谷のきわに位置していたことが推察される。

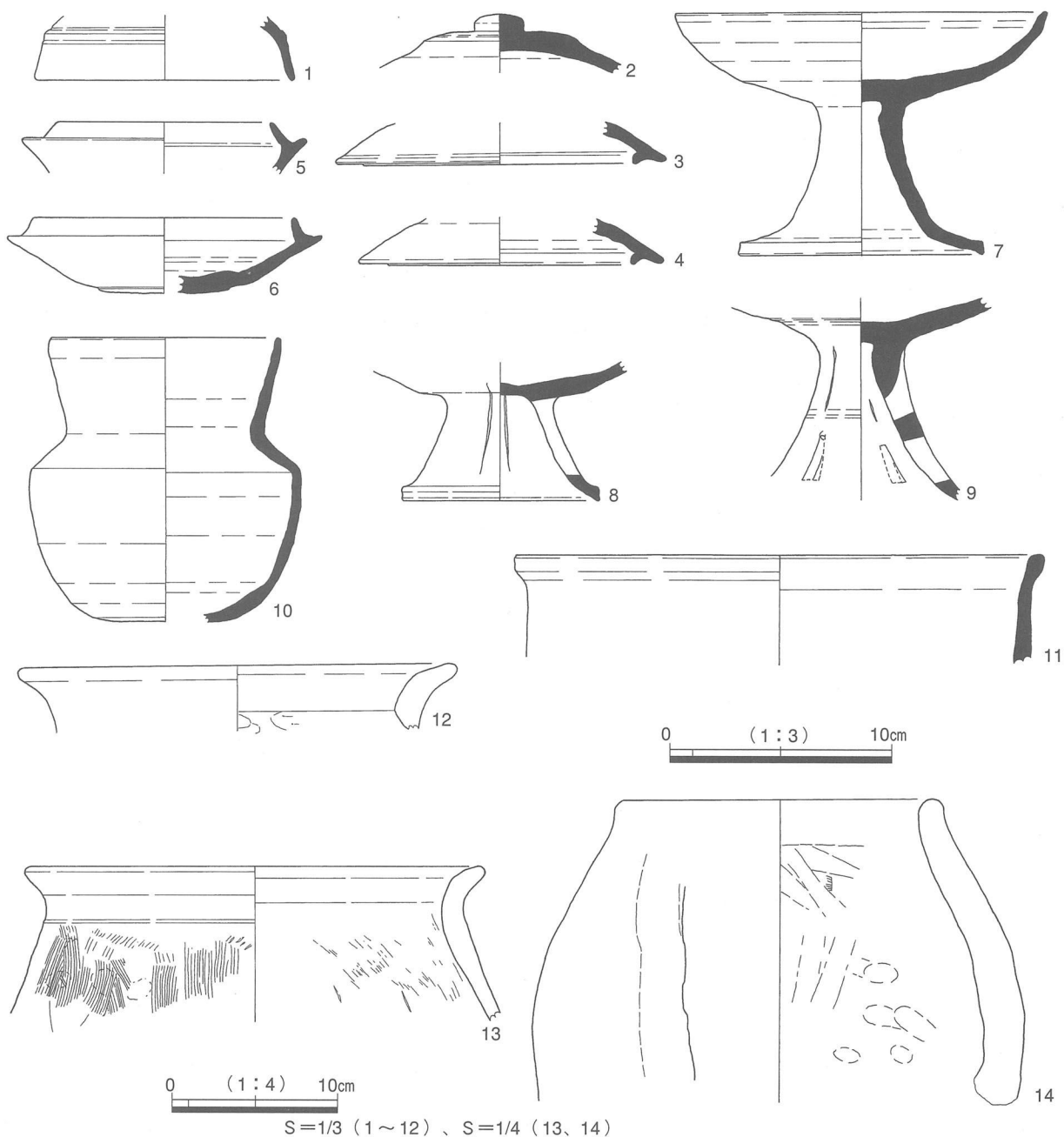
また、石敷道路の東側には、遺構に沿って急な傾斜変換が認められる。石敷道路を敷設する際、斜面地を断面L字状に段状加工することで、平坦面を造成したものと考えられる。さらに、道路面を形成する礫は、浅い掘りこみの中に叩き込まれた状態であった。下方に



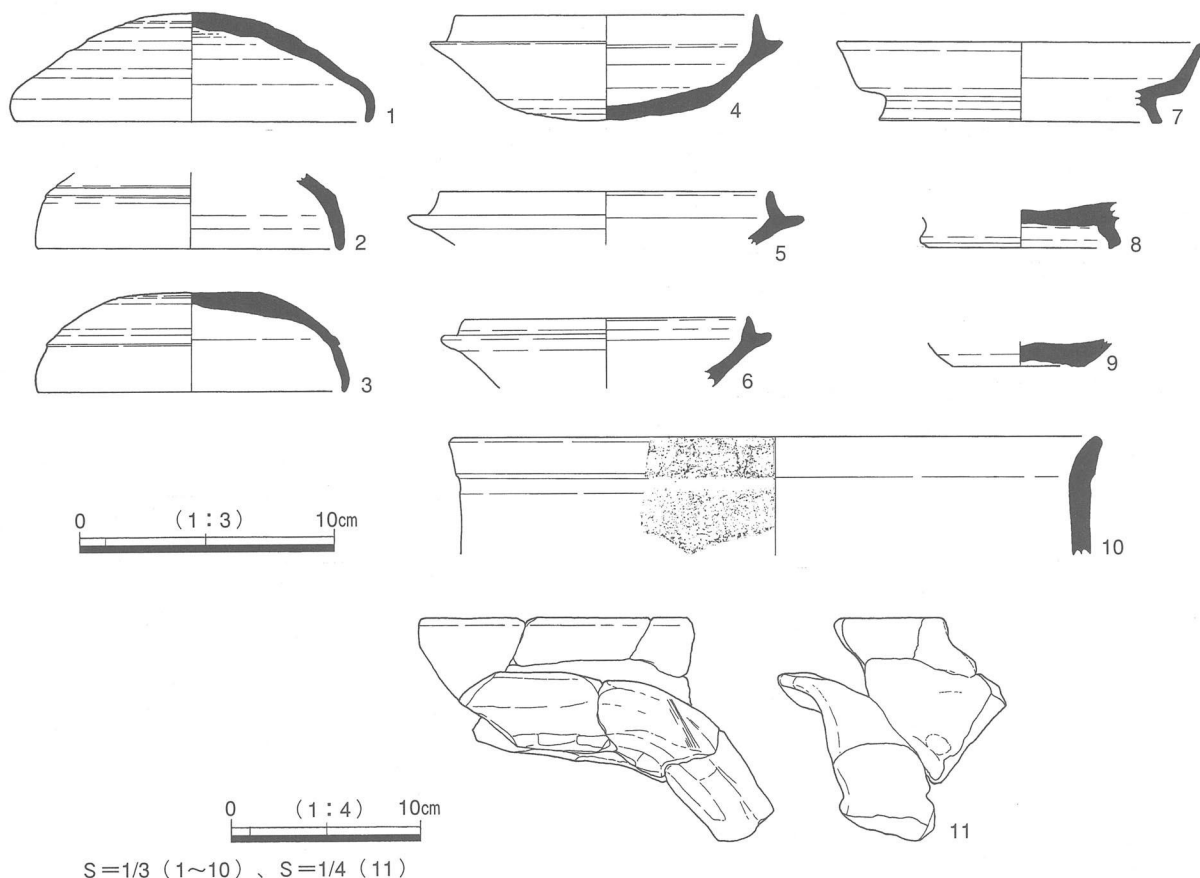
挿図343 陰田第6遺跡 C7、D7グリッド7世紀中層出土遺物

は、1～3 cm程の小礫が多く、上方の石は拳大の礫を主体として人頭大の礫もみられ、礫と礫の間は小礫で埋められていた。礫は遺跡周辺で一般的に認められるもので、石英安山岩、石英斑岩が主体を占める。

この礫は、ある程度の加工が施された上で使用されていたようで、面取りされ丸味を帯びているものが多い。かなり上面部が磨滅したのも認められ、道路がかなり頻繁に利用されていたことを窺わせる。また、道路面に位置しない礫の中にも、上面部が磨滅しているものがある。このことは、道路面の補修を意味すると思われる。また、A 8グリッドにおいて、轍状の段が認められる。轍かどうかは不明であるが、使用によって生じたものと思われ、興味深い。



挿図344 陰田第6遺跡 C7、D7グリッド7世紀上層出土遺物



挿図345 陰田第6遺跡 C7、D7グリッド奈良時代包含層出土遺物

石敷道路からは、7世紀代～奈良時代にかけての須恵器や土師器、土製支脚等の破片が出土した（挿図347）。これらは、道路面上に位置するものや、石敷中にあったもの等、出土状況はさまざまである。石敷道路の上面に位置していた土器が、石敷中出土の土器片と接合する例もあった（挿図347-7）。石敷中の遺物の多くは、道路敷設時に混入したものと思われる。かなり磨滅した土製支脚の胴部などが石敷に組み込まれている例もみられた。

また、道路の北側、Z10グリッドでは、約0.7mの範囲に小礫が広がっており、その上面から、磨滅した銅銭1枚と、細かな加工痕のみられる水晶1点が出土した。銅銭は著しく磨滅しており、詳細不明である。皇朝十二銭であろうか。

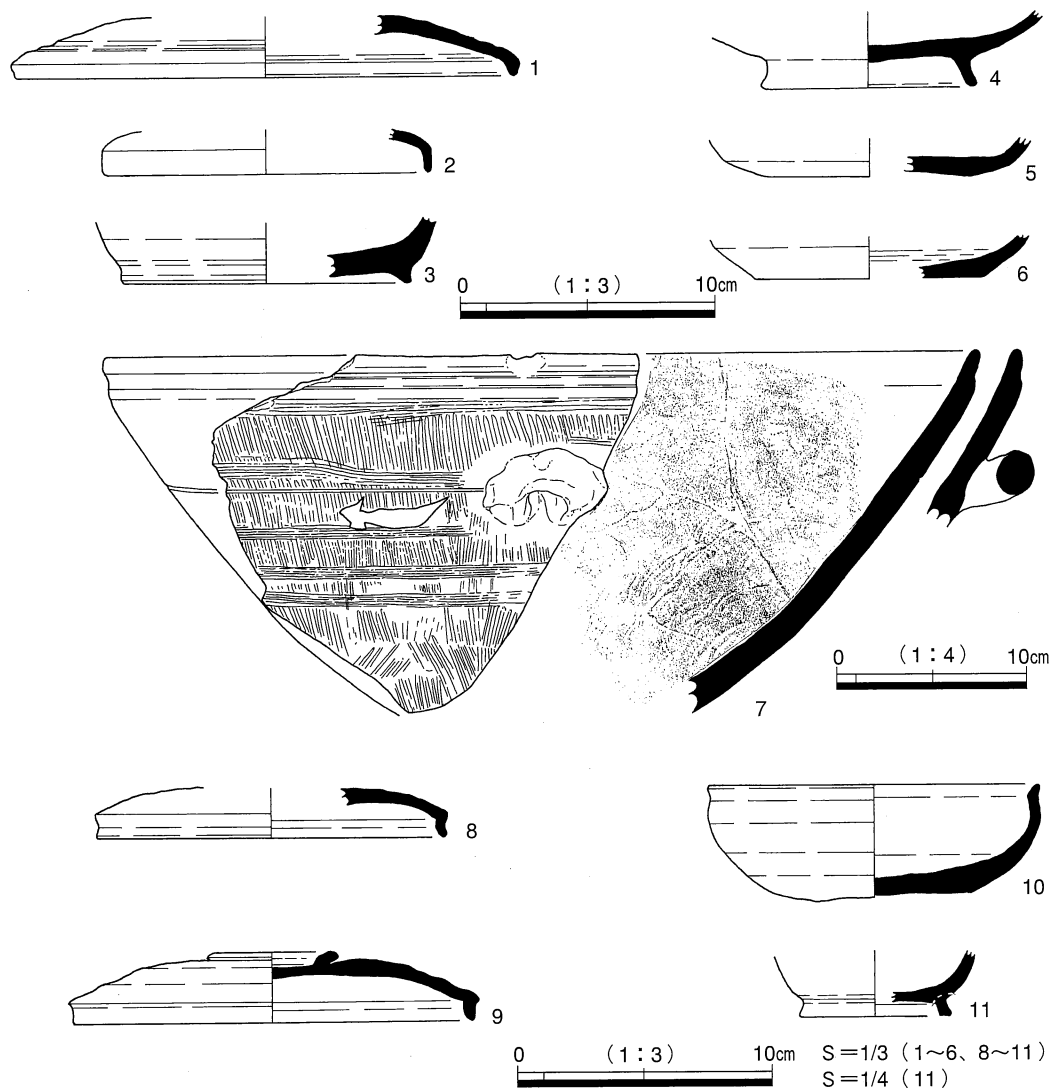
北端のZ10グリッドには、南に約1m程の長方形の張出があるが、その性格は不明である。

挿図347-1～7は石敷道路直上および石敷中から出土した奈良時代の遺物である。7は、大型の鉢と思われる須恵器で、胴部外面は叩き目の上に数条の刷毛目を施している。内面は最終的に丁寧に静止ナデを施すが、胴部下半にはわずかに当て具痕が残る。また、環状の把手が横位に施されている。8～11は石敷道路を埋める堆積から出土した遺物である。

本遺構の時期は、石敷道路下層の第10層が8世紀代の遺物を含まない層であること、石敷中、道路上面、第7・8層で8世紀代の遺物が出土することから、奈良時代に敷設されたものと考えられる。



挿図346 陰田第6遺跡 石敷道路全体図



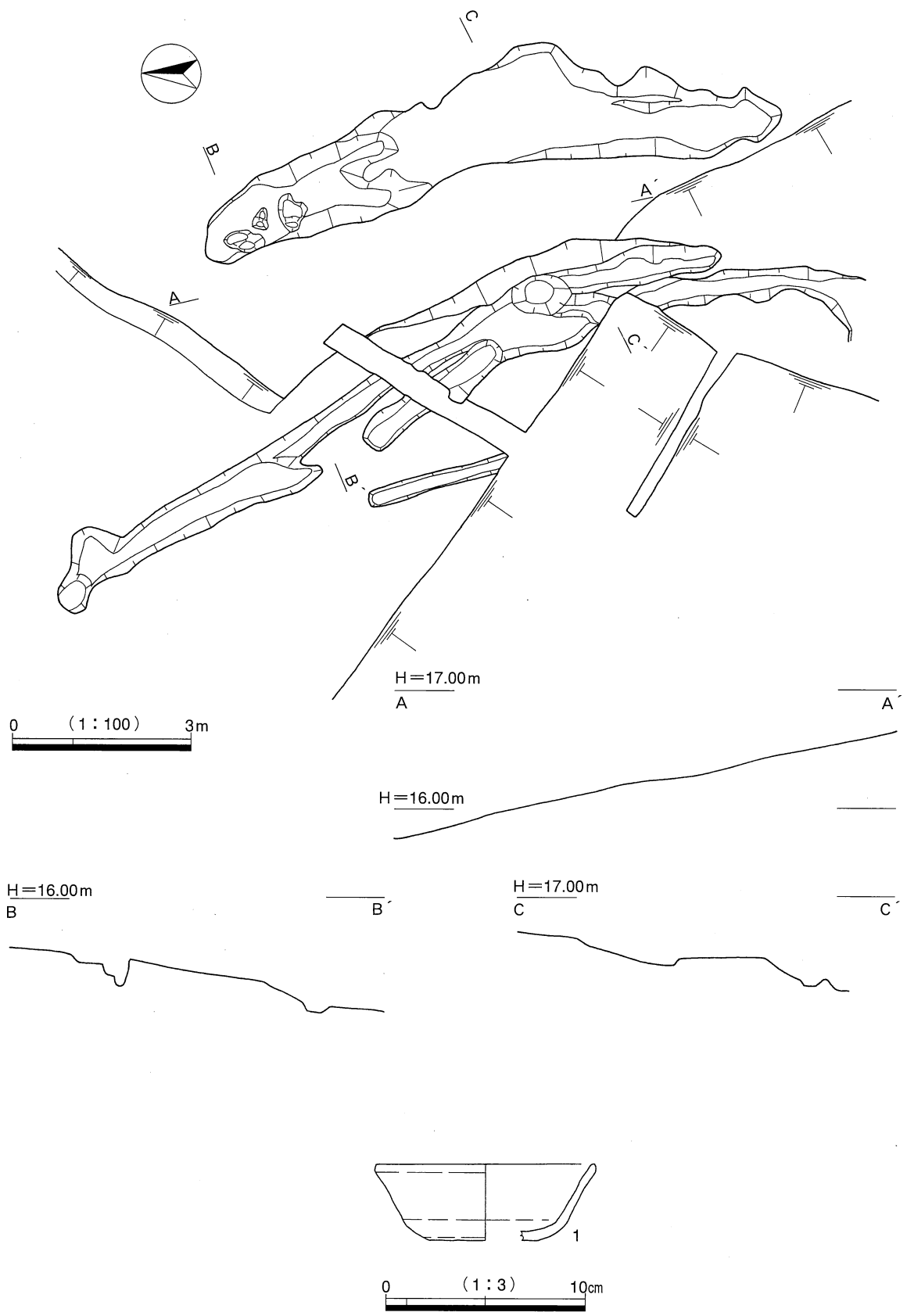
挿図347 陰田第6遺跡 石敷道路出土遺物

一方、廃絶した時期については推測の域をでない。後述する道路状遺構との関係などを考慮すると、何度か補修を繰り返し使用された本遺構は、平安時代初頭には廃絶していたものと思われる。

道路状遺構（挿図348）

調査区の北側で、南北に延びる二本の側溝を検出した。東側の側溝は、石敷道路の延長線に位置している。遺構の上面には、多量の礫が散在しており、礫を除去後に本遺構を確認した（挿図348）。当初、この散在する礫を、石敷道路の礫が流出したものと考えていた。しかし、本遺構の東側側溝の南端部底面で、石敷道路の一部が残存していたことから、上面に散在する礫は、石敷道路とは直接的には関係しない、自然の堆積と判断した。

問題となるのは、本遺構の時期、そして、石敷道路との前後関係である。先に述べたように、道路状遺構の上面に広がる礫を石敷道路が流出したものと考えていたため、調査中



挿図348 陰田第6遺跡 道路状遺構および出土遺物

には、散在する礫除去後に検出した道路状遺構と石敷道路との前後関係を何度も見直すという状況であった。調査時に、前後関係を把握することができなかったのは、調査担当者としての力不足であるが、以下のことから、一応の結論を述べておく。

道路状遺構の東側側溝は、石敷道路の延長線上にあるが、西側側溝を考慮に入れると、道路状遺構の方向は、石敷道路の西側を通ると予想される。本調査区は古墳時代前期から徐々に谷部の堆積が始まる。そして、奈良時代の遺構である石敷道路は、西に向かって傾斜する谷のきわを通過していたと思われ、それ以前には、谷部は完全に埋没していない。つまり、石敷道路の西側を通ると思われる道路状遺構が、石敷道路に先行するものであれば、谷部の傾斜面を通過しなければならないことになる。

また、東側側溝の南端部底面にみられる石敷道路の一部は、その北側では、東側側溝底面に全く残存していなかった（挿図346）。このことを考慮に入れると、石敷道路は、東側側溝が掘り込まれたことで、消失していると考えられることができる。

以上のことから、道路状遺構は石敷道路より新しいと思われる。本遺構の時期であるが、9世紀代と思われる土師器の椀（挿図348-1）が東側側溝で出土しており、石敷道路の次の段階の道路として位置づけたい。しかし、これ以降の遺物、遺構が調査区内で認められない。このことは隣接する調査区でも同様であることから、本道路状遺構の存続時間は極めて短期間であったと考えられる。

溝状遺構（挿図335-5、挿図349、350）

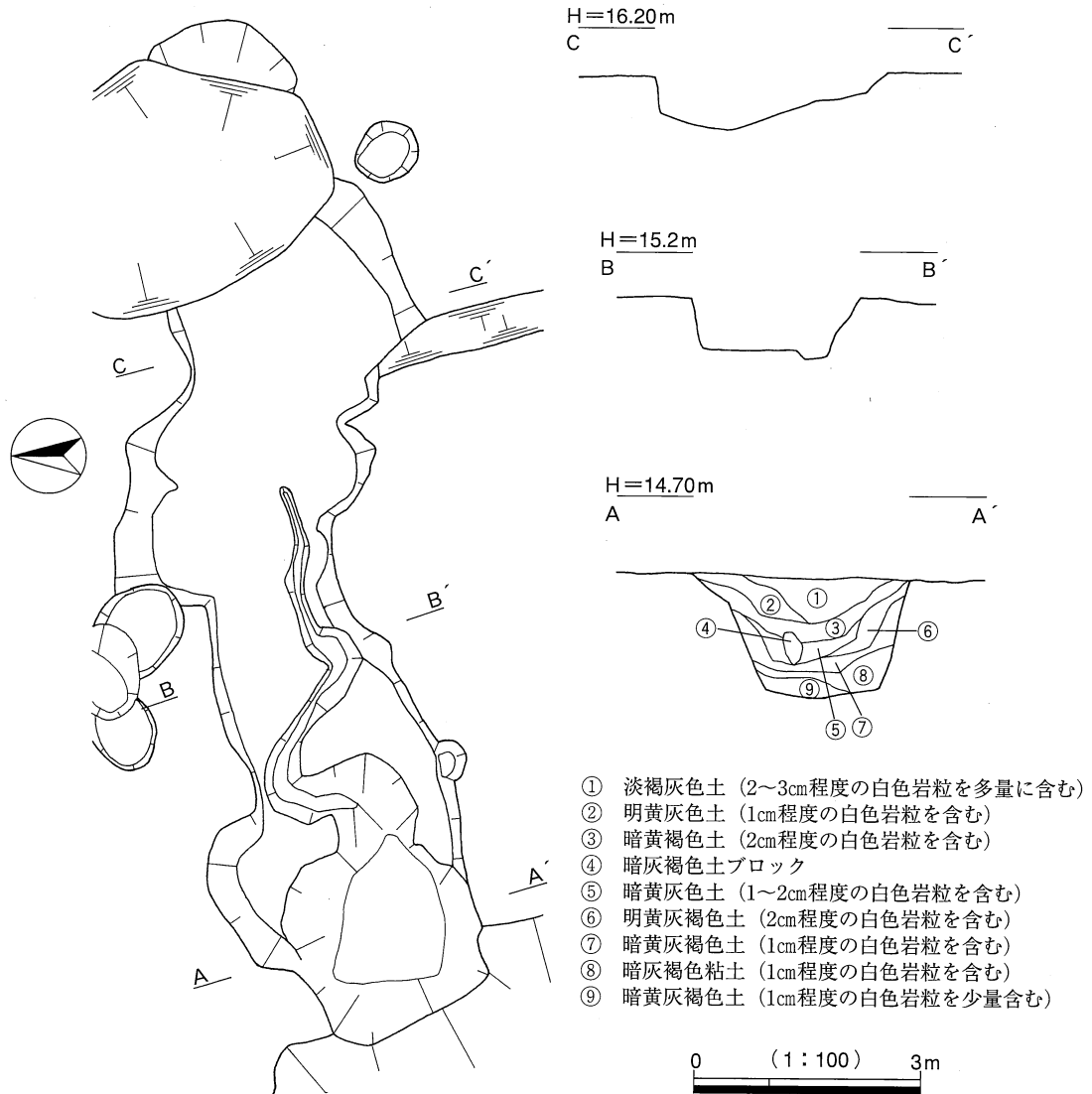
5条の溝状遺構を確認した。

溝状遺構1（挿図349）は調査区の中央、B9、C9、D9グリッドに位置する。幅約3m、深さ0.5～1mで、東から西に緩やかに蛇行しながら延びる溝状の遺構である。底面には、さらに細かい溝が蛇行しながら延びており、それに付随する形で南端部に径約3m、深さ約1.6mの土坑状の落ち込みがある。

蛇行し、不定型なことから自然流路の可能性も考えられる。一方で、溝の流れが南端部の土坑状の落ち込みで終わることから、自然流路を利用した溜井状の遺構であるとも考えられる。また、本遺構の西側には南北に延びる石敷道路があり、東側から流れてくる水を防ぐためのものかもしれない。

時期は埋土中から出土した土器から8世紀代のものと考えられる。ほぼ同時期と思われる土坑9、12を切ることから、水の流れによって徐々に溝の幅が広がっていったものと考えられる。また、埋土中には岩盤と同質の白色を呈する軟質岩の粒が含まれており、堆積状況と合わせて考えると、水の流れによって運ばれてきた土により本遺構が埋没したものと推察される。本遺構は近世に至るまで完全に埋没していなかったと思われ、遺構内埋土最上層の1・2層中からは少量ではあるが陶磁器小片が出土している。

遺物の出土状況は、西端の落ち込み8・9層に古墳時代後期の須恵器が多く出土する傾向が認められたが、糸切り底をもつ須恵器が同一層に含まれており、本遺構の埋没時期は

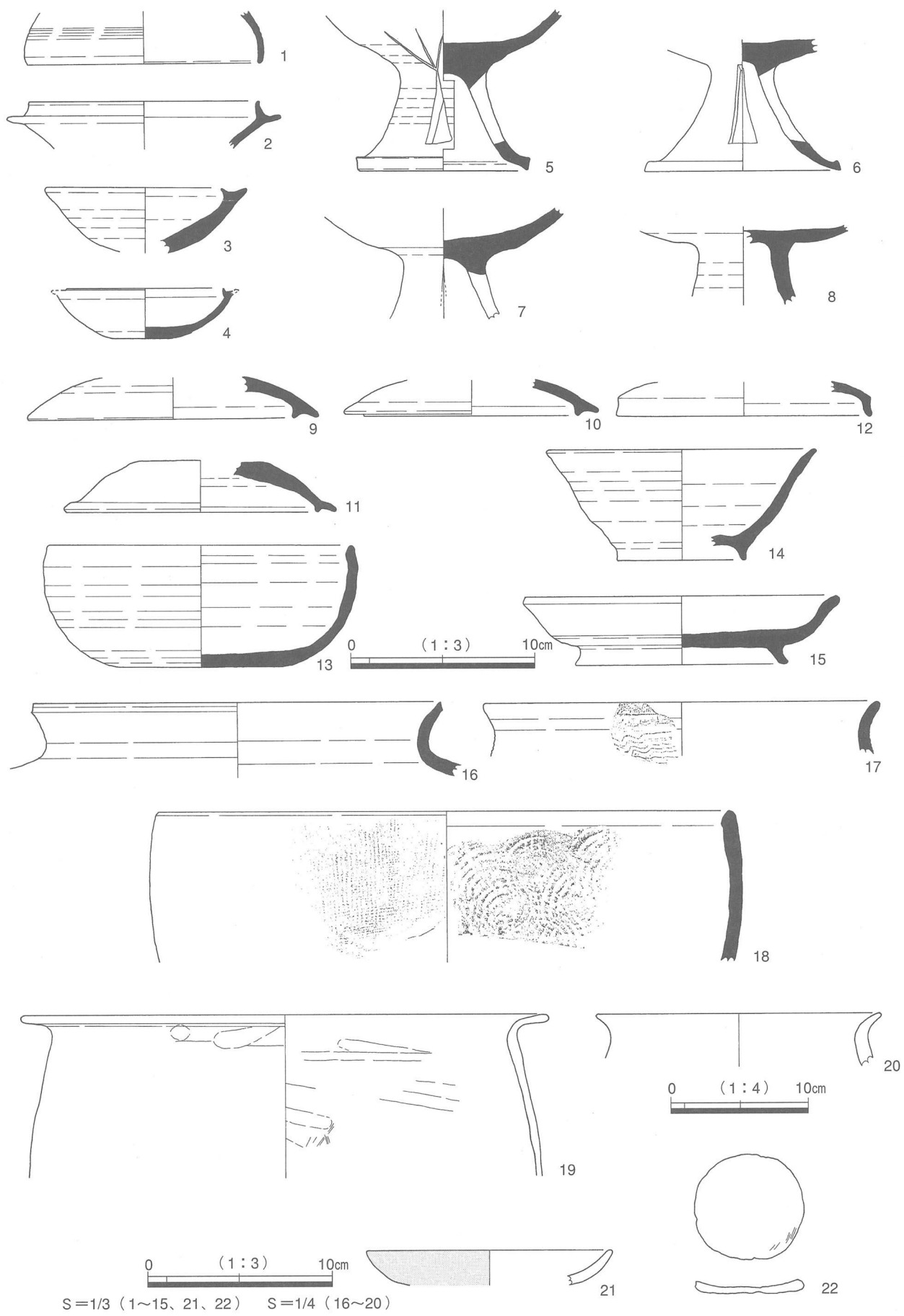


挿図349 陰田第6遺跡 溝状遺構1遺構図

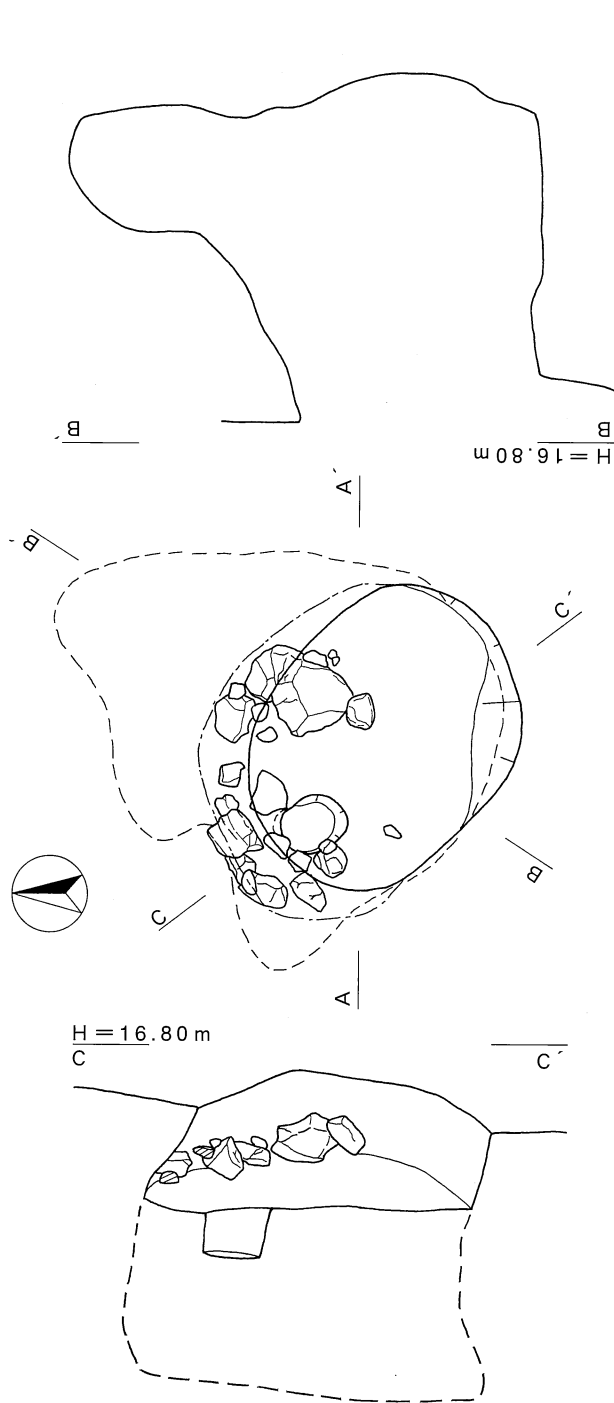
8世紀を遡ることはなかろう。

挿図350は本遺構出土遺物である。1~18は須恵器である。1、9~12は坏蓋、2~4は坏身である。5~8は高坏で、5は透かしの頂部から放射線状に3本の線刻が施される。13は内湾気味に立ち上がり、口縁部直下で軽くくびれる坏である。14は高台のつく坏、15は皿である。16は甕の口縁部片、17は甑の口縁部と思われる。18は大型の鉢であろうか。19、20は土師器の甕である。21は皿で、赤色顔料が塗布されている。22は土師器片を円形に加工した円盤状の土製品である。

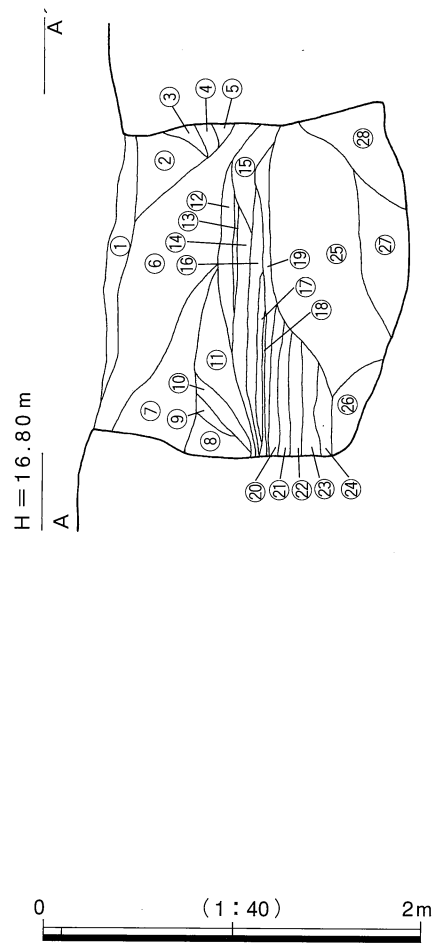
溝状遺構2~5はいずれの遺構からも遺物は出土していないが、周辺の遺構との関係から8世紀代のものと考えておきたい。また、溝状遺構2はピット26~32、溝状遺構3はピット16~20に並行している。しかし、溝とピットとの関係については不明である。



挿図350 陰田第6遺跡 溝状遺構1出土遺物



- ① 灰褐色粘質土
- ② 暗褐色粘質土 (黄褐色土少量混)
- ③ 黄褐色粘質土 (暗褐色土少量混)
- ④ 暗褐色粘質土 (暗褐色土少量混)
- ⑤ 黄褐色粘質土 (暗褐色土少量混)
- ⑥ 暗褐色粘質土 (暗褐色土混)
- ⑦ 黄褐色粘質土 (黄褐色土混)
- ⑧ 暗褐色粘質土 (黄褐色土ブロック混)
- ⑨ 黄褐色粘質土
- ⑩ 暗褐色粘質土
- ⑪ 暗褐色粘質土
- ⑫ 暗褐色粘質土
- ⑬ 暗褐色粘質土
- ⑭ 暗褐色粘質土
- ⑮ 暗褐色粘質土
- ⑯ 暗褐色粘質土
- ⑰ 暗褐色粘質土
- ⑱ 暗褐色粘質土
- ⑲ 暗褐色粘質土
- ⑳ 暗褐色粘質土
- ㉑ 暗褐色粘質土
- ㉒ 暗褐色粘質土
- ㉓ 暗褐色粘質土
- ㉔ 暗褐色粘質土
- ㉕ 暗褐色粘質土
- ㉖ 暗褐色粘質土
- ㉗ 暗褐色粘質土
- ㉘ 暗褐色粘質土



挿図351 陰田第6遺跡 土坑4遺構図

土坑（挿図335-5、挿図351）

12基の土坑を検出した。規模などについては、遺構一覧表を参照していただきたい。遺物を伴うものは土坑3、4、5、6、8、9、12、13である。いずれの土坑も、7世紀から8世紀代の須恵器が混在する状況であった。

このうち特異な土坑に土坑4（挿図351）がある。平面径は、長軸1.5m、短軸1.2mを測る楕円形の土坑であるが、底面が袋状に広がる。また、埋土掘り下げ中、6、7層除去後、礫の集積と柱痕状のピットを検出した。ピット内には砂が堆積していた。しかし、この土坑の用途については不明である。

ピット

本調査区では、建物跡を構成するような並びを示す柱穴群は確認できなかった。ここで、ピットとした遺構は、その規模から便宜上の名称である。

このうち、遺物が出土したのは、ピット24、27、28である。いずれも小片で、遺構の埋没した時期を特定できるものではなかった。溝状遺構のところでも記したが、ピット26～32は溝状遺構2と、ピット16～20は溝状遺構3と並行している。

第5章 遺物について

奥陰田遺跡群からは縄文土器、弥生土器、土師器、須恵器、土製品、石器、鉄器、木製品などコンテナ約550箱分の遺物が出土した。本章では各遺物の特徴について簡潔にまとめたい。

なお、縄文土器、弥生土器、土師器、須恵器については第4章にて詳述しているので、ここでは省略する。

文字関係遺物（図録10）

1～5は陰田広畑遺跡から出土した。1～4は円面硯で、4の外面には5弁のヘラ描きがある。円面硯は周辺では陰田荒神谷遺跡、陰田マノカンヤマ遺跡、陰田小犬田遺跡から出土している。

5は宝珠つまみをもち、返りのない坏蓋で、天井部に「里宅」とも読める墨書がある。里宅とは律令体制下、組織された国一郡一里のうち、里の里長が居住した施設であろう。陰田10期（8世紀後半）に相当し、墨書土器は周辺では陰田荒神谷遺跡、陰田小犬田遺跡からも同時期のものが出土している。

赤色塗彩土器（図録11、12）

赤色塗彩土器は赤色顔料を塗布した土器で、陰田広畑遺跡から大量に出土しており、陰田宮の谷遺跡3区、陰田第6遺跡からもわずかであるが出土している。さらに、周辺では陰田荒神谷遺跡、陰田ヒチリザコ遺跡、陰田小犬田遺跡からも出土している。

陰田広畑遺跡出土の赤色塗彩土器は坏皿類に多く見られ、椀、鉢、高坏等にも見られる。陰田宮の谷遺跡3区では臚に見られた。胎土は緻密で乳白色～乳褐色を呈し、焼成は甘く、軟質である。

1～18は坏身で、1～16は高台をもたないが、17は高々台、18は高台をもつ。19は壺の底部か。20～24は椀で、口縁端部が外反するもの（20）、内湾しながら立上るもの（21～23）、口縁端部が内湾するもの（24）がある。25～43は皿で、25～36は高台をもたないが、37～43は高台をもつ。44、45は高坏、46は鉢である。

製塩土器（図録13、14）

製塩土器は陰田広畑遺跡から大量に出土しており、そのなかでも3テラスから多く出土している。製塩土器はいずれも粗製で、手づくね成形を行っており、内外面に指頭圧痕が見られ、内面に布目痕が見られるものもある。口縁端部が丸くおさまるもの、肥厚するもの、内傾または外傾する面をもつもの等がある。

甑 (図録15、16)

甑は陰田隠れが谷遺跡、陰田広畑遺跡、陰田宮の谷遺跡3区、陰田宮の谷遺跡4区等から出土している。

1～4は把手で、上に反り返るもの(1、2)とほぼ水平方向にのびるもの(3、4)がある。5、6は陰田広畑遺跡から出土したもので、口縁は大きく外反する。5は外面にハケ調整を行う。6は外面に煤が付着し、基部には穿孔がある。7～10は陰田宮の谷遺跡3区から出土したもので、7は口縁が大きく外反する。8は口縁が直立し、外面ハケ調整、内面ヘラケズリ調整を行う。9は口縁がわずかに外反し、ほぼ水平方向にのびる把手をもつ。外面ハケ調整、内面ヘラケズリ調整を行う。10は口縁が大きく外反し、外面ハケ調整、内面ヘラケズリ調整を行う。また、基部には穿孔がある。

移動式竈 (図録17～27)

移動式竈は破片での出土が多く復元できたものは4個体しかない。これらは口縁と庇上部の形態、庇の付く位置等によって大きく2つに分けられる。

A類(2、4) A類は口縁がわずかに外反し、庇の幅が広く、底部に対して庇が大きく開く感じのもので、庇上部は焚口上端から約3～4cm上の位置からほぼ水平にのびる。

B類(1、3) B類は口縁が外反し、A類に比べて庇の幅が狭く、庇上部は焚口上端から上向きにのびる。両者とも外面ハケ調整、内面ヘラケズリ調整を行う。

5、6は陰田広畑遺跡から出土したもので、5は内面に粘土紐巻上げ痕が見られる。7、8は陰田宮の谷遺跡3区から出土したもので、庇上部は焚口上端から上向きにのびる。両者とも外面ハケ調整、内面ヘラケズリ調整を行う。7は口縁がほぼ直立し、8はわずかに外反する。9～13は口縁部、14～27は庇、28～42は底部である。

土製支脚 (図録28～47)

土製支脚は陰田隠れが谷遺跡、陰田広畑遺跡、陰田宮の谷遺跡3区、陰田宮の谷遺跡4区、陰田第6遺跡等から出土している。

1～14は陰田隠れが谷遺跡から出土したもので、底部が平底のもの(5)、わずかにくぼむもの(6～10)、大きくくぼむもの(11～14)がある。また、把手がやや上向きのもの(2、3)とやや下向きのもの(7、10、13)がある。

15～27は陰田広畑遺跡から出土したもので、底部が平底のもの(16、17)、わずかにくぼむもの(18～20)、大きくくぼむもの(21～27)がある。また、小型の支脚(21、23)がある。15、22、25には穿孔があり、15、22は貫通するが、25は貫通しない。把手は下端が垂下するもの(16、19)、やや上向きのもの(20)、ほぼ水平なもの(23)、環状のもの(24)がある。

28～48は陰田宮の谷遺跡3区から出土したもので、底部が平底のもの(31、32)、わずかにくぼむもの(33～38)、大きくくぼむもの(39～42)、さらに大きくくぼむもの(43～48)

がある。また、小型の支脚（35～38）がある。把手は下端が垂下するもの（31、32、41、45、47、48）、やや上向きのもの（33）、ほぼ水平なもの（37）、やや下向きのもの（28、38）、環状のもの（42）がある。44は背面に穿孔がある（貫通していない）。土製支脚のほとんどがヘラケズリ調整と指頭圧調整であるが、38、42、45、47、48はこれにハケ調整が加えられている。

49～51は陰田宮の谷遺跡4区から出土したものである。

52～64は陰田第6遺跡から出土したもので、底部が平底のもの（56～59）、わずかにくぼむもの（60～64）がある。53、62には穿孔があり、貫通している。54、58、64にはハケ調整が行われている。

土馬（図録48～57）

土馬は陰田隠れが谷遺跡、陰田広畑遺跡、陰田宮の谷遺跡1区、陰田第6遺跡から合計30点出土しており、このうち陰田隠れが谷遺跡からは20点が出土した。

土馬には須恵質のもの（1～14、27、28）と土師質のもの（15～26）があり、陰田隠れが谷遺跡出土の14点と陰田第6遺跡出土の土馬以外はすべて土師質のもので、遺跡によって偏りがみられる。

また、馬具を装着した飾馬（1、2、7、8、11、19）と馬具を装着しない裸馬（3～5、8、10、12、15～17、20～25、27、28）があり、飾馬は19が土師質である以外はすべて須恵質である。さらに、性器を表現したものもあり、2、5、9、28は雄、1、6、8、19、21、25、27は雌で、雄はすべて須恵質であるが、雌は須恵質4点、土師質3点でほとんど半々である。

1と2はほぼ完形で、2（雄）の上に1（雌）が重なるようにして出土しており、祭祀の在り方を考えるうえでは大変興味深い。1は粘土を貼付け、その上を刺突して目を表現し、2は刺突によって目と鼻孔を表現している。3はヘラ描きによって切長の目と耳孔を表現し、5、27は刺突によって尻穴を表現している。10、11は刺突によって目を表現している。さらに、10は刺突によって口を表現し、11は刺突によって鼻孔を、ヘラ描きによって口を表現している。15は胴部が中空で、芯棒に巻きつけて成形したものと思われる。20、22は竹管状の刺突によって目を、刺突によって耳孔を、ヘラ描きによって口を表現している。なお、15、16、18、19、20、21には赤色顔料が塗布されている。

ミニチュア土製品（図録58～61）

ミニチュア土製品は陰田隠れが谷遺跡、陰田広畑遺跡、陰田宮の谷遺跡3区から出土した。

1～26は陰田隠れが谷遺跡から出土したもので、1は甌、2はかまど、3～9は器台、10～14は支脚を模造したものである。17～26は手づくね土器で、陰田広畑遺跡、陰田宮の谷遺跡3区のもの比べると小型である。

27～29は陰田広畑遺跡から出土した。30～62は陰田宮の谷遺跡3区から出土したもので、30～33はかまど、34は匙、35は支脚、36～38は器台を模造したもので、38は36、37と比べると大きめで、赤色顔料が塗布されている。39～62は手づくね土器で、器高が低く、皿形を呈するもの(39)、口縁が外反するもの(40～42)、口縁が内湾して碗形を呈するもの(43～56)があり、これに比べて大きいもの(57～62)もあるが、形態は様々である。

紡錘車(図録62)

1～3は陰田宮の谷遺跡3区から出土したもので、いずれも断面台形を呈する。

土錘・土玉(図録62～66)

土錘は陰田広畑遺跡、陰田宮の谷遺跡3区、陰田第6遺跡から出土した。

土錘には球形のものと管状のものがあり、いずれも芯棒に粘土を巻きつけて成形した後、芯棒を抜き取ったものと思われる。球形のものの中には芯棒を抜き取った際にできる芯棒を抜き取った側の孔の縁の粘土のはみ出しが残るものと、これを整形するものがある。また、球形のものは側面の形態によって正円形もしくはこれに近い球形を呈するもの、筒状のもの、偏平な球形を呈するものの3つに大きく分けられ、さらに、法量、重量によって細分が可能であろう。なお、これらの球形の土錘は祭祀遺物、遺構と共伴していることから、丸玉形の土製品と成り得るべきものではないだろうか。

1～61は陰田広畑遺跡から出土したもので、2、3テラスからの出土が多く、1、5テラスからも数点出土している。しかし、1、2、5テラス出土のものは3テラスから転落したものであると思われる。1、2は土玉で、1は孔がない。2は孔を穿つが貫通していない。3～34は正円形もしくはこれに近い球形を呈するもの、35～49は筒状のもの、50～60は偏平な球形を呈するものである。61は管状土錘である。

62～91は陰田宮の谷遺跡3区から出土したもので、62～74は正円形もしくはこれに近い球形を呈するもの、75～84は筒状のもの、85～91は偏平な球形を呈するものである。

92～97は陰田第6遺跡から出土したものである。95～97は管状土錘で、陰田広畑遺跡出土のものよりも小さい。

石 器(図録67～82)

1～22は石鏃である。1～5は陰田夜坂谷遺跡から出土したもので、1は黒曜石製、2～5はサヌカイト製である。6～12は陰田隠れが谷遺跡から出土したもので、6、7は黒曜石製、8～12はサヌカイト製である。13～16は陰田広畑遺跡から出土したもので、15、16は黒曜石製、13、14はサヌカイト製である。17～20は陰田宮の谷遺跡4区から出土したもので、18、19は黒曜石製、17、20はサヌカイト製である。21、22は陰田第6遺跡から出土したもので、いずれもサヌカイト製である。

23、24は石匙で、いずれもサヌカイト製である。23は陰田隠れが谷遺跡、24は陰田宮の

谷遺跡4区から出土した

25は陰田隠れが谷遺跡から出土した尖頭器で、黒曜石製である。26は陰田第6遺跡から出土した抉入石器で、黒曜石製である。27は陰田隠れが谷遺跡から出土した石錐で、黒曜石製である。28は陰田宮の谷遺跡3区から出土した有舌尖頭器で、サヌカイト製である。

30～32は石核で、30、31は黒曜石、32はメノウである。33～35は陰田隠れが谷遺跡から出土した剥片で、33、35は黒曜石、34は水晶である。36～40は陰田広畑遺跡から出土した剥片で、36～38は黒曜石、39は水晶、40は玉髓である。41～44は陰田第6遺跡から出土した剥片で、41はメノウ、42は碧玉、43、44は黒曜石である。

45は陰田隠れが谷遺跡から出土した勾玉で、碧玉製、46は陰田広畑遺跡から出土した紡錘車で、47は新山山田遺跡から出土した石錘である。

48～54は石斧で、48～51は新山研石山遺跡、52～54は陰田第6遺跡から出土した。

55、56は石包丁で、55は新山山田遺跡から出土した。56は陰田広畑遺跡から出土したもので、欠損してはいるものの現存長21.7cmをはかる。刃は鋭く、未使用のものと思われる。57～90は砥石で、57～59、62は新山山田遺跡、60、61は新山山田古墳群、63～69は新山研石山遺跡、70～77は陰田隠れが谷遺跡、78～87は陰田広畑遺跡、88、89は陰田宮の谷遺跡1区、90は陰田宮の谷遺跡4区から出土した。

91～95は敲石で、91は新山山田古墳群、92は新山研石山遺跡、93、94は陰田広畑遺跡、95は陰田第6遺跡から出土した。96は陰田広畑遺跡から出土した磨石である。

97～99は台石で、97は新山研石山遺跡、98、99は陰田広畑遺跡から出土した。

木製品 (図録83～91)

木製品は新山研石山遺跡5区の北谷流路からまとめて出土したもので、古式須恵器に先行する堆積層から出土した。木製品のなかには火を受けた痕跡を残すものがあり、図録ではその部分をスクリーントーンで表示した。

1～4は杭であるが、立った状態で検出された。5～11は杭で、5は頭頂部が隅丸方形を呈し、側面には楔を打ち込んでいる。12、13は建築材、14は有孔材であると思われる。15、16は竖杵で、15は搗部を握りに比べて細くつくっている。17、18は槌状製品で、2方向から加工している。19は三ツ又鋤、20は平鋤で、20は2か所に穿孔がある。21、22は木錘で、芯持材を用い、両先端は中心に向けて削っている。さらに、21は中央部に向かって両方から円錐状に削り込んでいる。23、24は火鑽臼で、23は2孔あり、長側辺の2か所にV字の切り込みがある。24は5孔あり、長側辺の5か所にV字の切り込みがある。25～28、30～32は有孔板で、25～28は一直線上に孔が並ぶ。25、26、30は円形、27、28、31、32は方形の孔がある。34は鳥形か。35、36は巻き皮で、35はL字状に巻いている。35、36とも径0.5cmのものを巻いていたものと思われる。37～45、47、48、54、56は棒で、33、46、49～53、55、57は板状製品である。

鉄 器 (図録92～94)

1～3は鋤先で、1は新山下山遺跡、2、3は新山山田古墳群から出土した。4～7は鉄斧で、4は陰田広畑遺跡、5は新山山田遺跡、6は陰田ハタケ谷遺跡、7は新山研石山遺跡から出土した。8～15は鉄鎌で、8、12は陰田広畑遺跡、9は陰田隠れが谷遺跡、10は新山山田遺跡、11、14は陰田宮の谷遺跡3区、13は新山山田古墳群、15は陰田宮の谷遺跡4区から出土した。16は新山研石山遺跡から出土した紡錘車、17は陰田第6遺跡から出土した釣針状製品、18は新山研石山遺跡から出土した鉄鏟である。19～23は刀子で、19は新山下山遺跡、20、22、23は新山研石山遺跡、21は陰田広畑遺跡から出土した。

鍛冶・製鉄関係遺物 (図録96～109)

鍛冶・製鉄関係遺物には鉄滓、炉壁、フイゴ羽口がある。

鉄滓は新山山田古墳群、新山山田遺跡、新山研石山遺跡、新山下山遺跡、陰田夜坂谷遺跡、陰田隠れが谷遺跡、陰田広畑遺跡、陰田宮の谷遺跡1・3・4区、陰田第6遺跡から出土した。そのなかでも陰田広畑遺跡からの出土が多く、砂鉄焼結塊、砂鉄製錬滓、含鉄炉底塊、含鉄鉄滓、鉄塊系遺物、精錬鍛冶滓、鍛錬鍛冶滓、精錬鉄塊、粒状滓、鍛造剥片等が出土している。陰田隠れが谷遺跡からは含鉄鉄滓、椀形鍛冶滓等が、陰田宮の谷遺跡1区からは鍛冶滓、椀形鍛冶滓等が、陰田宮の谷遺跡3区からは製錬滓、椀形鍛冶滓等が、陰田宮の谷遺跡4区からは製錬滓、再結合滓、椀形鍛冶滓等が、陰田第6遺跡からは椀形鍛冶滓等が出土している。

新山地区では新山山田古墳群からは含鉄鉄滓、椀形鍛冶滓等が、新山山田遺跡からは製錬滓、椀形鍛冶滓等が、新山研石山遺跡からは鍛冶滓等が、新山下山遺跡からは含鉄鉄滓、鉄塊系遺物等が出土している。

炉壁は陰田広畑遺跡と新山山田遺跡から出土している。

フイゴ羽口は陰田広畑遺跡、新山山田遺跡、新山研石山遺跡から出土している。

(財)米子市教育文化事業団文化財発掘調査報告書 24

萱原・奥陰田Ⅱ (本文編)

1998年3月

編集・発行 財団法人 米子市教育文化事業団

〒683-0822 鳥取県米子市中町20

印刷 (有)米子プリント社